

寄 瀧浪貞子氏	贈 平成 年 月 日
------------	------------------------

DB
819
1992
①

日本古代宮廷社会の研究

瀧浪貞子

95004087

日本古代宮廷社会の研究*目次

序 論

I 皇位と皇統

一章 光明子の立后とその破綻……………一一

はじめに(一)

一 光明子の「即位」(一三)

二 立后の機能(一五)

三 光明立后の「破綻」(一七)

二章 聖武天皇「彷徨五年」の軌跡——大仏造立をめぐる政治情勢……………三三

はじめに(三三)

一 聖武天皇の「関東行幸」(三五)

二 恭仁京の造営(三七)

三 難波での「定京」(四〇)

四 紫香樂造仏の放棄(五四)

三章 孝謙女帝の皇統意識……………五九

はじめに(五九)

一 もう一人の皇太子(六一)

二 聖武上皇の遺詔(七〇)

三 皇位と皇統(七五)

四 法王道鏡との「共治」(八〇)
むすび(九一)

四章 藤原永手と藤原百川——称徳女帝の「遺宣」をめぐって……………九五

はじめに(九三)

一 称徳女帝と「遺宣」(九七)

二 白壁王の擁立と永手(一〇六)

三 百川の役割(一一五)

五章 桓武天皇の皇統意識……………一二七

はじめに(一二七)

一 井上内親王の立后(一二九)

二 百川の「奇計」(一三四)

三 天智への回帰(一四一)

山陵奉告——むすびにかえて(一四五)

II 場の政治学

一章 参議論の再検討——貴族合議制の成立過程……………一五五

はじめに(一五五)

一 初期参議の性格(一五六)

二 武智麻呂と参議の変質(一六六)

三 觀察使と意見封進(一七〇)

四 公卿の成立(一八四)

むす び(一八六)

二章 武智麻呂政権の成立——「内臣」房前論の再検討——……………一九八

はじめに(一九八)

一 武智麻呂と房前(二〇七)

二 有官的と無官的(二一〇)

三 「内臣」房前(二二〇)

四 「右大臣」武智麻呂(二三〇)

むす び(二三二)

三章 議所と陣座——仗議の成立過程——……………二二五

はじめに(二三五)

一 宜陽殿西廂と陣座(二三〇)

二 議所と摂政直廬(二三四)

三 仗議の成立(二四〇)

むす び(二四二)

四章 薬子の変と上皇別宮の出現——後院の系譜(その一)——……………二五四

はじめに(二五四)

一 上皇の位置(二五五)

二 いわゆる「二所朝廷」について(二五五)

三 孝謙天皇と法華寺宮(二五六)

四 平城上皇と平城宮(二五六)

むすび(二五九)

五章 奈良時代の上皇と「後院」——後院の系譜(その二)——……………二七四

はじめに(二七四)

一 初期太上天皇の条件(二七五)

二 上皇の別宮(二八〇)

三 上皇の近臣(二八二)

四 上皇料・領について(二九四)

付論 薬子の变(三〇五)

Ⅲ 宮都の構造

一章 初期平安京の構造——第一次平安京と第二次平安京——……………三三二

『山槐記』の賑給記事——序にかえて(三三二)

一 一条大路の北上(三三三)

二 大蔵倉庫群の整備(三三四)

三 宮城十四門(三三六)

四 一条一坊の戸主(三三六)

五 桃園と世尊寺(三三七)

六 北辺坊の終焉(三三七)

二章 歴代遷宮論——藤原京以後における——……………三八八

遷宮の「故実」——緒言にかえて(三六〇)

一 藤原京をめぐる諸問題(三六〇)

二 平城京造宮について(四〇九)

三 「動かざる遷宮」のこと(四二二)

四 遷宮の終焉(四二三)

三章 「山背」遷都と和氣清麻呂……………四二八

清麻呂の薨伝——はしがきにかえて(四二八)

一 難波京の解体(四三〇)

二 二十年という歲月(四三三)

三 平安造宮使の顔ぶれ(四三五)

四 清麻呂と真道(四三七)

四章 造宮官と造宮役夫……………四四七

はじめに(四四七)

一 造宮機関——将作監・造宮官(使・職・省)(四四八)

二 造宮役夫(四五〇)

五章 高野新笠と大枝賜姓……………	四六七
-------------------	-----

はじめに(四六五)

一 土師氏の大枝賜姓(四六五)

二 和氏譜の撰上(四六五)

三 高野天皇と高野新笠(四六七)

四 大枝山陵(四六七)

五 陵戸と土師郷(四六七)

六章 東朱雀大路と朱雀河……………	四八四
-------------------	-----

はじめに(四八四)

一 西の朱雀(四八五)

二 東朱雀大路の登場(四八五)

三 「朱雀」の条件(四八五)

四 朱雀河(四八五)

結 論

参考文献一覽

序

論

本稿は、古代史研究の一環として、とくに奈良時代から平安時代（前期）にかけての政治・社会・経済の実態と構造を、できるだけ多角的に説明することを試みたものである。そのためにわたくしが心がけた視点が二つある。

一つは、奈良期から平安前期までを連続して考察し、その間の、いわば連続性と非連続性を明らかにすることであり、いま一つは、政治や社会の構造を、単なる制度史の次元ではなく、人間関係の集積の場として考察することである。前者を通時的な観点とすれば、後者は共時的な視点といってもよいであろう。いわば歴史のタテ糸とヨコ糸である。

このうち前者の通時的考察という点については、歴史研究である以上当然のことであり、ことさら言挙げするまでもないのであるが、それをあえていうのは、古代史研究の伝統ともいうべきものによつて、奈良時代と平安時代との間に、ある種の断絶があるとみられるからである。『続日本紀』に比して、それ以後の国史が魅力に欠けるきらいがあり、それが時代のもつ活力の違いといったものと無関係ではないことも、わからないではない。しかし古代史研究が、しばしば『続日本紀』の時代で考察を終えるために、そのあとを継続して考えれば容易に理解できるはずのものが理解できなかったり、大事な問題が見逃されてしまうといったケースが少なくない。最近はそのあたりについての反省がなされ、両者の間隙を埋める研究も次第に増えてはいるが、必ずしも十分とはいえないように思う。

たとえば「参議論の再検討」は、参議制についての従来の研究が、考察の範囲を奈良末までで終える

か、さもなくば平安時代に限られていたことへの反省から、奈良く平安中期を一貫して考察したもので、それによつて最後までついてまわつた参議制のもつ制度的な不安定さといったものも明らかになつたと思う。あるいは、平城上皇と嵯峨天皇との間に起こつた薬子の変のあと、上皇御所として朱雀院や冷泉院といった「後院」が設けられたが、上皇御所ということであれば当然譲位の慣習のはじまつた持統天皇の時代、少なくとも奈良時代にまで遡つて考察することが必要とならう。「後院の系譜」と副題した二篇は、そうした考えが発想のもとになっている。

つぎに第二の視点、すなわち共時的な観点からする研究とは、さし当り構造的な理解のこととしておきたいが、それをわたくしは場に集積される人間関係に即して考えてみることを心がけた。「Ⅱ場の政治学」や「Ⅲ 宮都の構造」に収める諸論考は、いわば政治の空間的な考察を指摘したものである。参議制に結実する公卿合議制のごときは、当然国政の場の問題としても考えられる典型的なケースであろう。右にみた後院も、具体的な建物の存在とその機能の解明を通して上皇権と天皇権の關係といったことが理解できるに違いない。このようにみていると、第一の通時的考察と第二の共時的考察とが密接不可分な關係にあることも、おのずから明らかである。

さて本稿は、こうした基本的な視角から考察した諸論考を三つの部門に分けて構成した。「Ⅰ 皇位と皇統」は、主として日本の王権Ⅱ天皇（制）を皇位継承の面から考察したものである。皇位の継承をめぐる諸問題は、天皇論としてはもつともオーソドックスなものであるといえるが、これまでの研究は、わたくしたちの素朴な疑問に十分応えてはいないように思う。早い話、光明子の立后について、それまでの女帝が前皇后であつた事実から、光明子の場合も、その立后は将来女帝にするための布石であつたという理解が流通しているが、果してそうであらうか。それならばその後、即位すべき

機会あるいはその必要性がいくらもあつたにも拘わらず、即位の動きが全くなかつたのはなぜか。通説には抜本的な見直しが必要であるように思われる。

同じ意味においてわたくしは、いわゆる道鏡の皇位覬覦事件についても、従来とは別個の理解が可能と考える。たしかに称徳天皇は、宇佐八幡宮の託宣により一瞬ではあつたが道鏡の即位を考えたと思う。しかし称徳の本来意図するところは、法王道鏡と天皇称徳とによる聖俗にわたる共治体制の実現にあつたのではないか。そう思うのは、前後の政治過程を丹念にたどれば当時の貴族たち、藤原永手以下が、称徳の政治体制を認め、それを支えていたことが確認されるからである。ここでは何よりも先入主からの開放が求められている。

先入主といえど研究の上でもその最大の犠牲者となつたのが、この孝謙（称徳）女帝ではなかつたろうか。母光明子や藤原仲麻呂の傀儡とみなされたのはまだしも、道鏡との関係が障害となつて、ことさら学問的な対象とすることを避けてきたきらいがある。しかし一步退いて考えてみるに、「不失常典」の申し子である聖武天皇の皇女として生まれ、唯一立太子を経て即位したこの女帝にこそ、奈良時代における皇位・皇統をめぐる諸問題が集約具現されていたとみるべきであり、さらにいえば孝謙（称徳）天皇論を抜きにした女帝論も皇位継承論もありえないし、奈良時代を語つたことにならぬのではないかとさえ思う。「I 皇位と皇統」のうち、三章および四章・五章は、そういった疑問から出発した論考であり、いわばわたくしの孝謙女帝論である。またこの考察のなかで注目されたのは、奈良時代の皇統意識が「天武」皇統ではなく、「草壁」皇統ともいふべきものであつたことで、その草壁皇統がいかにして「天智」皇統へ切り換えられたのか、という皇統意識の変質も、さまざまな問題を提示しているように思う。

「Ⅰ 皇位と皇統」で抱いた、天皇の皇位継承を中心とする奈良・平安初期政治史に対する関心を、とくに貴族や上皇に向けて論じたのが「Ⅱ 場の政治学」であり、それをさらにかれらの活躍の場である平安京にひろげて考察したのが「Ⅲ 宮都の構造」に収める諸論考である。これらに関する基本的な姿勢については先に述べたので繰り返さないが、貴族という限られた社会でくりひろげられた政治の実態と構造を知る上で、かれらが相互に関わり合う様態を空間的なひろがりのなかでとらえる視角は、もつと考慮されてよいのではないかと思う。なお付論の「薬子の変」はこの事件に関する小考であるが、上皇権と天皇権の対立、上皇御所・後院の創設など、奈良から平安への切り換えを決定づけたという点でこの変のもつ歴史的意味を重視したい。

本稿のなかでわたくしがもつとも愛着をもつ論考の一つが「初期平安京の構造」である。天皇・貴族政治の舞台としての宮都の研究は、平城京・藤原京、あるいは飛鳥京などの旧跡の発掘調査が行なわれたことにより、その構造や規模が判明し、また出土した夥しい数の遺物により、生活の具体相も随分と明らかになった。宮都の研究は、進展著しい古代史研究のなかでも、急速に進んだ分野の一つといつてよいであろう。

ところで宮都の構造を知る上で重要な資料となったものに京中図や宮城図などの指図類があるが、今日までのところ平安京のものしか知られてない。そこで長岡京以前の発掘調査は、平安京図を参考にしながら行なわれていた。これは平安京の研究にとつては有利な条件といつてよいが、他方における発掘調査の面での限界から、十分解明されているとはいえないのが現状であろう。ことに平安京の平面構成については、宮城域の北端が一条大路に接する形（これを北闕型という）であったと受けとめて疑うことはなかった。しかし、なぜ平安京だけが宮城門は十四であったのか。このことに平安京

の平面構成を理解する重要な鍵が秘められていたことに思いを致すことはなかった。『山槐記』の京中賑給に関する一記事に触発され、そのことの解明に苦しんだ日々がいまは懐しく思い出される。「第一次平安京」と呼ぶことにした当初の形は、北に一定の余地をひかえる藤原京型であり、その後こんにち見る指図のような構造（「第二次平安京」）になったと考えている。

平安京はそれまでに蓄積された造都のノウハウを最大限に使って造られた宮都であると考えているが、長岡京を含めて、平城京から「山背」宮都への遷都Ⅱ造都に関わった和氣清麻呂の役割はもつと評価されてしかるべきものであり、また造都に徴発された役夫については、雇役の対象が膝下の都市民に切り換えられていく一方、虚役の遠国にも課役を拡大した「客作兎役」の出現は、その後の臨時雑役を考える上でも大事な点であろう。

以上、奈良から平安前期における通時的・共時的な研究のもつ意味にふれながら、本稿の構成およびそれぞれの部門における問題点について指摘した。しかし意図するところがどこまで実現できたかはなはだ心もとない。不十分なところや思わざる誤謬も少なくないであろう。今後とも考察を深めていきたいと思う。

I

皇位と皇統

一章 光明子の立后とその破綻

はじめに

聖武夫人であった安宿媛こと藤原光明子が皇后に立てられたのは、天平元年（七二九）八月十日のことであった。光明子は靈龜二年（七一六）頃、皇太子首皇子（のちの聖武）の妃として入内し、神龜元年（七二四）二月、聖武の即位とともに夫人になったと考えられるから、立后までに六年の期間があったことになる。この事實は、光明子の立后が、当初から予定されていたものでなかったことを推測させる。だいたい大宝令に、皇后・妃は皇族（内親王）であることが明確に規定されている以上、藤原氏の出である光明子には、皇后となる資格はなかった。事の内容は違うが、聖武天皇の即位直後、母である宮子（文武夫人）の尊号をめぐる長屋王の抗議を受けたことも、なお記憶に新たなものがあった。それ以上に法に合わない立后を企図すれば、再び王の反対にあうことは、火を見るよりも明らかであった。いわゆる長屋王の変が、藤原氏による陰謀であったと推測される理由もそこにある。光明子が立后されたのは、長屋王の変から半年後のことである。それにしても藤原氏は、どのような意図から光明子の立后を強行したのであろうか。

この光明子の立后は、奈良朝政治史を語る際、必ず取り上げられる事件であるが、正面から論じた研究となる

と、意外と少ないのではあるまいか。その中で岸俊男氏の「光明立后の史的意義」⁽¹⁾は、その後に及ぼした影響の大きさからも、代表的な論考といってよいであろう。すなわち岸氏によれば、光明子の立后は、「当時における皇后の地位が、六世紀以来の伝統として皇太子に比肩しうる執政権を保有しているとともに、また皇位継承の機会をも有するというきわめて重要なものであったからにはかならない」とし、その点に着目した藤原氏は、

光明子の生んだ皇太子が死に、^(眞大捷)広刀自に皇子が誕生したとなれば、当然要路の人びとにはやがて安積親王立

太子が重大な政治問題となることが十分に予想されたものと思う。こうなつては藤原氏の計画は画餅に帰する。そこであわてた藤原氏はそのような不利な事態が生ずることに先手を打つため、従来の皇子立太子策を急に光明立后という直接策に切り換えたのである。

とされ、以来、氏のこの見解は大方の支持を得てきたといつてよい。わたくしも光明子立后の直接の契機が皇太子基王の早死にあり、安積親王の立太子を阻止することを意図したものという点については、格別異論はない。

しかしその後の議論は、同じく岸氏が右の説を敷衍して述べられた、「藤原氏は」場合によつては聖武のつぎに光明女帝の即位さえも胸に画いたかも知れぬ」という部分ばかりが肥大し、別の方向に進んでしまった感がある。というのは、氏の説は、立后は将来の即位のための準備であり、光明皇后はいわば控え女帝であつた、というかたちで受けとめられるようになり、それが今日では半ば常識化しているとみられるからである。しかしわたくしには、この意味での「即位論」が主役となつたことにより、光明子「立后論」には救いがたい混乱が生じたように思われる。立后でさえ抵抗のあつた非皇族者の即位が、この論のなかでは、いとも簡単に容認されているのも不思議といわねばならないが、「立后」が「即位」問題（女帝論）に短絡された結果、当然検討されねばならない本来の立后問題が全くといつてよいほど看過されてしまった。光明子立后の当面の目的は、岸氏の言われるように、基皇子の夭逝に対処する手段であつたことは、まず間違いないところであるが、光明子を立后すれば、

それがなぜ安積の立太子を阻止する有効な対抗措置となりうるのか、という点の検討もなされていない。これは、立后が立太子と深く関わるという立後の機能があつてはじめて可能なことではなからうか。

本稿では、従来の理解⁽²⁾に対するこうした疑問から出発し、立后についての歴史的な考察を行なうことによって、光明子立后のもつ背景や意義といったものを再検討してみたいと思う。

一 光明子の「即位」

光明子立后についての従来の説は、「立后論」というよりも「即位論」（控え女帝説をかりにこう呼んでおく）に重点が置かれてきた。そこでまずこの即位論から検討を加えていきたい。果して立后は、それにより将来天皇となる可能性を握ること、つまり近い将来における皇位継承の資格を得ることにあつたのだろうか。

これに対する疑問の第一は、もしそうであるならば、光明子の立后は、近い将来における聖武の譲位もしくは崩御を予想しての措置ということにならう。当然のことながら皇后の即位は、夫である天皇の没後に限られていたから（後述するように、これが女帝の条件として理解されてきた）、光明皇后の即位が実現するためには、聖武の在位は否定されなければならないことになる。

当時、聖武は二十九歳（光明子も二十九歳）、即位して五年目のことで、元正太上天皇も健在であつた。立后が、皇太子の夭逝と安積親王の誕生に対処するための政治的手段であつたとしても、皇位継承という点では、聖武の崩御を想定するほど事態が切迫していたとは到底考えられない。百歩譲り、かりにそうした事態であつたとしても、元正上皇などが認めなかつたらう。元正への譲位に際して発せられた元明天皇の詔に、「此の神器を以て皇太子（聖武）に譲らんと欲すれども、年齒幼稚にして未だ深宮を離れず云々」（『続日本紀』靈龜元年九月二日条）とあるように、母元明の意を承けて聖武の即位の実現に邁進した元正が血統を無視した皇位の継承を坐視したとは

思えない⁽³⁾。この元正は、讓位後も甥聖武の後見的立場を維持していた。

疑問の第二は、そうしたことよりもまず、出自が皇族でない藤原光明子に、即位の可能性があったろうか、という点である。かつて男女を問わず皇族でない者の即位した事例を見ない。神護景雲三年（七六九）の宇佐八幡神託事件を引合いに出すまでもなく、結局、法王道鏡でさえ即位出来なかった。それは託宣（『続日本紀』同年九月二十五日条）にもあるように、「以_レ臣為_レ君、未_ニ有_ニ」ることであり、「天之日嗣必立_ニ皇緒_ニ」てるのが不文律であったからである。立后すれば、その制約から自由になれたのであろうか。皇族天皇という、ある意味ではもっとも明白な原則が、なぜ光明子に限って例外とされ、非皇族天皇の実現が可能であるかのような理解がなされたのか、わたくしには不思議でしかたがない。元来皇権を有する天皇と、天皇の配偶者である皇后とでは、各々のもつ政治的意味はまったく違う。立后の延長線上に即位があるのではない。これまでの光明立后論は、それを同一次元の問題として（無意識に）取り扱っているところに無理があったように思う。

こうした理解は、直接には、岸説の拡大解釈によるものであるが、さらにその源に遡っていえば、わたくしは、女帝についての通説に原因があるように思う。その通説とは、あとにもふれるように、女帝の多くは前（先）帝の皇后であったとし、それを女帝となるための要件とみなすものである。そのような理解に従えば、皇后の次は女帝と考えるのは自然の成行きであつたろう。

たしかに女帝には前皇后であつた者がいる。しかし古代の女帝（六人）のうち、元明天皇は皇太子草壁の妃であつて、皇后の地位についてはいない。また先にふれた元正も文武の姉として即位し、結婚はしなかった。聖武の娘孝謙（称徳）も同様に未婚であつた。こうした前（先）帝の皇后であるという「原則」にはずれる女帝—六人のうち元明・元正・孝謙（称徳）の三人—について、井上光貞氏は、奈良期以降、律令制の導入によって、本来の女帝の觀念が変質したもの、と結論づけられている。⁽⁴⁾

しかし元明が草壁皇子の妃であり、草壁がもし早死しなければ皇后たりえたと推測するのはまだしも、「原則」に合わないからといって元正や孝謙に至るまで、「本来の皇后という条件を消失してしまった」変質した女帝と片付けるのは、循環論法に陥っているといわねばならない。変わらない女帝の要件があったとみたい。

飛鳥・奈良期の女帝すべてに共通する要件は何か。文献の上で、確実に即位したことと知られる女帝としては、

- ① 推古—敏達皇后（崇峻天皇の異母姉妹）
- ② 皇極（斉明）—舒明皇后（舒明天皇の姪）
- ③ 持統—天武皇后（天武天皇の姪）
- ④ 元明—持統の異母妹（文武天皇の母）
- ⑤ 元正—文武の同母姉（元明天皇の娘）
- ⑥ 孝謙（称徳）—（聖武天皇の娘）

があげられる。そして①～⑥をみる限りではいずれも現天皇と血縁関係（カッコ内）のあることが指摘されよう。しかしこれ以外にも、春日山田皇女（安閑天皇の皇后。継体没後、欽明が幼少であるということから即位を請われた）や倭姫（天智天皇の皇后。天智没後、称制したとの説がある。後述）など、じっさいには女帝にならなかったが、即位を要請されたと伝えられる女性も存在するから、それをただちに女帝の特色と結論するには、なお検討が必要であろう。

それならば、候補にあげられた春日山田皇女や倭姫を含めて、共通する特色は何か。わたくしには、井上氏が「当然のことながら」として述べられた共通点、すなわち皇族出身であるということ以上の要件は見出せない。これは、むろん男帝についても同様である。ただ女帝の場合、皇位継承上の中継ぎという立場から、現天皇との血縁関係が重視されるということはあったように思う。皇后であったことも、その有利な条件の一つであったに

すぎない。

ともあれ七世紀の女帝(①)(③)がすべて皇后であったのは、結果においていえることであって、それが女帝となる上での必須要件であったわけではない。わたくしには、この女帝Ⅱ前皇后論が、従来の女帝理解を誤らせた最大の原因であったように思われてならない。したがって、その理解に沿う形でなされた光明子の「即位」論は、実現の可能性がないという点からだけでなく、立論の根拠そのものがないと見るべきである。

光明皇后はついに女帝にはならなかったし、なろうとした形跡もない。立後の真意は、別個に考察する必要がある。

二 立後の機能

(1) 立后と立太子

光明子の立后を取り上げた従来の研究のうち、「即位論」についてのわたくしの意見は以上の如くであるが、本来の「立后論」についても不満に思うことが少なくとも二つある。一つは、その考察が、立後の実現した段階で終わっているということであり、二つは、先に述べたように光明子の立后が安積親王の立太子阻止を目的としていたとしても、この場合、立后がなぜ立太子を阻止出来るのか、その理由が説明されていないことである。

まず前者についていえば、光明子の立后から数えて九年目、天平十年(七三八)一月に、阿倍内親王が皇太子に立てられている。聖武の唯一の皇子であった安積親王が十一歳となり、皇太子がいなければ、安積立太子の動きが当然出てくるであらう。藤原氏にとっては二度目の危機といってよい。阿倍(二十一歳)を立太子させたのは、まさしくその対策であった。

しかし通説に従うなら、この時こそ光明皇后の即位があつてしかるべきではなからうか。しかも通説によれば、

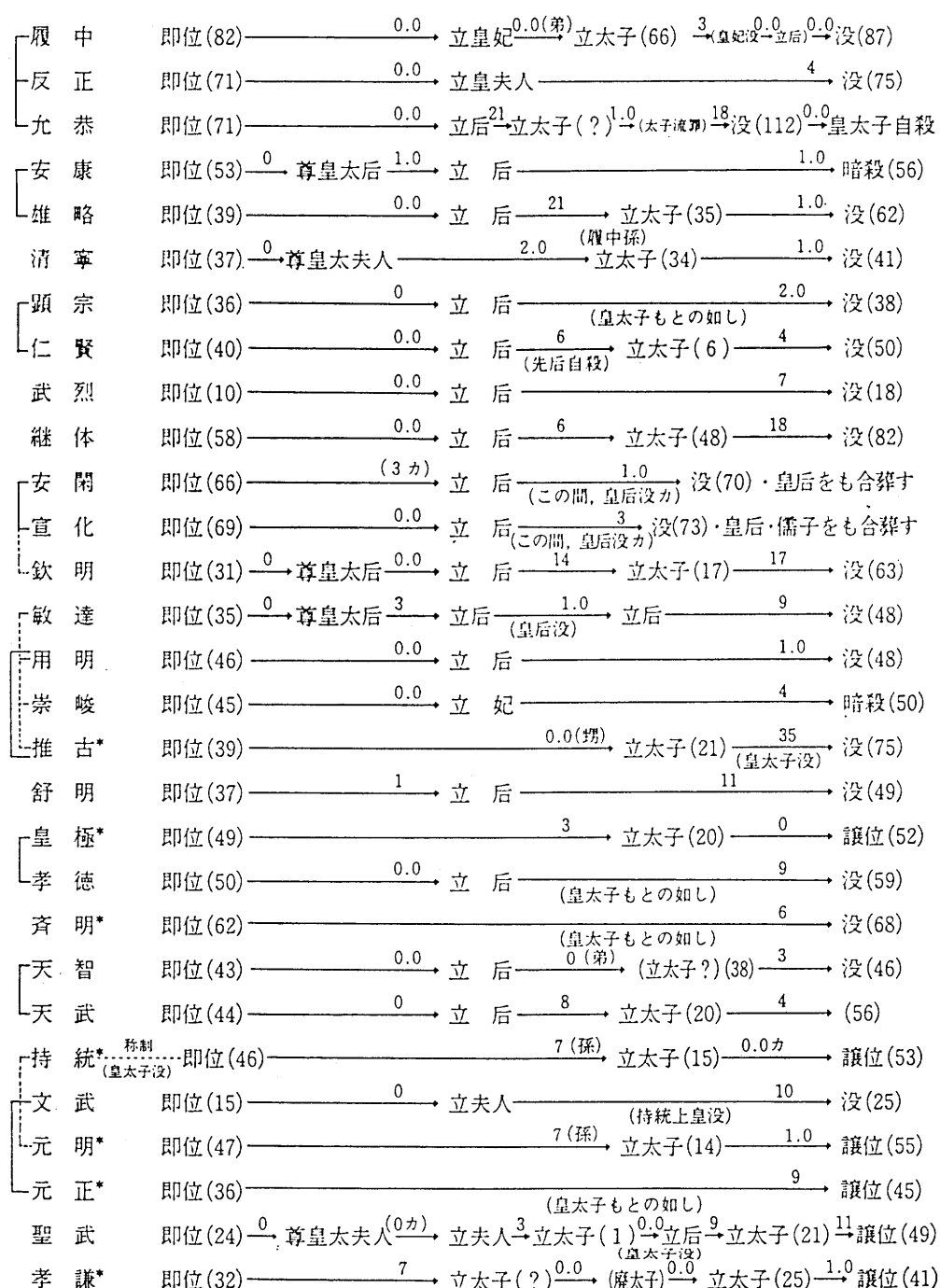
この阿倍の立太子は、かつて安積親王の誕生により、立太子策（基王）から立后策（光明皇后）に切り換えたはずのものが、ここでは再び立太子策（阿倍内親王）に戻ったことになる。何のための光明子立后であったのだろうか。

この時点では、光明子の即位よりも阿倍を立太子させる方が得策と考えられたのだろうか。しかしそういうことなら、阿倍がすでに十一歳に成長していた、基王夭逝の時点で行なう方がはるかに有効ではなかったろうか。それとも光明子の立后は、結局、安積が成長するまでの一時的な威嚇でしかなかったということなのであろうか、次々と疑問が生じてくる。いずれにしても、この時期までを視野に入れた上で検討しなければ、光明子立後の果たした役割や意味を十分とらえることは出来ないであろう。

後者の問題は、先にみたように、光明子に将来の即位が考えられない以上、そうした理解（通説）をはなれて立后と安積「立太子」の関係を考えねばならないが、そのことの考察が全く欠如していたと考える。光明子を立后しても、安積を立太子させるといふ動きが出ないとも限らないではないか。にもかかわらず、立后が安積の立太子を阻止させる有効な手段であったとすれば（わたくしはその意味合いがあったと考えているのだが）、これは光明子の場合を含めて、立后のもつ政治的な意味を、それ以前における皇后や皇太子のあり方を検討することから明らかにする以外にはないであろう。そこで皇后と皇太子を中心に、『日本書紀』から知られる関係記事を、歴代天皇について分類整理したのが表1である。以下、この表をもとに検討を加え、次節での考察と合わせて、光明立後の意義を明らかにしたい。

(イ) 表から知られることの第一は、応神（あるいは仁徳）以前と以後の天皇とで、記載内容に違いのある点である。すなわち〔I〕神武・応神・仁徳では、事情のある天皇（景行・成務・仲哀）を除いて、即位と同時に（もしくは翌年）に先帝の皇后（すなわち現天皇の実母）を皇太后と尊称する（尊皇太后）記載のあと、立后・立太子記事が記されるというように、ほとんどが同一パターンで統一されている。しかも尊皇太后（尊皇太后・曰皇太后）と立太子（立

〔Ⅱ〕



①矢印の上の数字は年数を表わす(但し0は同時期の場合を、また短期間に限って付した小数点以下の0は1年未満であることを意味する)。②カッコ内の数字は年令。③天皇相互に付した実線は同母兄弟(点線は異母兄弟)であることを表わす。*は女帝。

表1 皇后と皇太子〔Ⅰ〕神武～応神・仁徳〔Ⅱ〕履中以降

〔Ⅰ〕

神武 (15才で立太子)	即位(52)	→ ^{0.0}	立后	→ ⁴¹	立太子(15)	→ ³⁴	没(127)
綏靖	即位(52)	→ ⁰	尊皇太后	→ ^{1.0}	立后	→ ²³	立太子(21) → ⁸ 没(84)
安寧	即位(29)	→ ^{1.0}	尊皇太后	→ ^{2.0}	立后	→ ⁸	立太子(16) → ²⁷ 没(57)
懿徳	即位(44)	→ ^{0.0}	尊皇太后	→ ¹	立后	→ ²⁰	立太子(18) → ¹² 没(77)
孝昭	即位(32)	→ ^{0.0}	尊皇太后	→ ²⁸	立后	→ ³⁹	立太子(20) → ¹⁵ 没(113)
孝安	即位(36)	→ ^{0.0}	尊皇太后	→ ²⁵	立后	→ ⁵⁰	立太子(26) → ²⁶ 没(137)
孝靈	即位(53)	→ ⁰	尊皇太后	→ ^{1.0}	立后	→ ³⁴	立太子(19) → ⁴⁰ 没(128)
孝元	即位(60)	→ ⁰	尊皇太后	→ ⁶	立后	→ ¹⁵	立太子(16) → ³⁵ 没(116)
開化	即位(51)	→ ^{0.0}	尊皇太后	→ ⁵	立后	→ ²²	立太子(19) → ³² 没(111)
崇神	即位(52)	→ ⁰	尊皇太后	→ ^{0.0}	立后	→ ⁴⁷	立太子(20) → ²⁰ 没(119)
垂仁	即位(41)	→ ^{0.0}	尊皇太后	→ ^{0.0}	立后	→ ³ (皇后自害) → ¹⁰ (立后) → ¹⁷ (皇后没) → ⁵	立太子(21) → ⁶² 没(139)
景行	即位(84)	→ ^{0.0}	立后	→ ⁴⁹	立太子(38)	→ ^{0.0} (皇后没→立后)	→ ⁸ 没(143)
成務	即位(48)	→ ^{1.0}	尊皇太后	→ ⁴⁶ (甥)	立太子(70)	→ ¹²	没(107)
仲哀	即位(84)	→ ^{0.0}	尊皇太后	→ ^{0.0}	立后	→ ⁷	没(92)
(神功)	摂政(32)	→ ^{0.0}	尊皇太后	→ ^{2.0}	立太子(4)	→ ⁶⁶	没(100)
応神	即位(71)	→ ^{1.0}	立后	→ ³⁸	立太子(?)	→ ^{1.0}	没(111)
仁徳	即位(57)	→ ⁰	尊皇太后	→ ^{1.0}	立后	→ ²⁹	立太子(25) → ⁴ (皇后没→立后) → ⁴⁹ 没(142)

××尊二為三皇太子二の記載様式までが画一的である。

これに対して〔Ⅱ〕履中天皇以降では、記載の不統一が目立つだけでなく、女帝が登場し、相互の関係が複雑になっている。いうまでもなく〔Ⅰ〕(とくに応神以前)は実在性に疑問のあるところで、『日本書紀』の中でも信憑性のもっとも少ない箇所であるが、直木孝次郎氏は、この応神以前の記載の統一性を、天武朝以降、書紀編纂者の造作によるもので、却って不統一な記載の方が、当時の実情に近いと分析されている。⁽⁵⁾ もっとも氏の指摘は、立太子記事に限られているが、同様のことはこの表(尊皇太后や立后記事)についてもいえる。つまり画一化された〔Ⅰ〕において、編さん時代に考えられていた皇位継承の理想形が投影されているとみられる。

(口)次に表から知られることは、〔Ⅰ〕のほとんどが嫡系であったのに対して、〔Ⅱ〕では兄弟相承が多い点である。しかも〔Ⅰ〕にみられる画一的に行なわれた立太子に対して、〔Ⅱ〕では、多くの天皇が皇太子を決めずに没している。生存中、立太子しなかったから兄弟相承となったのか、逆に兄弟への相承が原則であったから立太子の必要がなかったのか、検討を要する問題であるが、一般に皇太子となって即位した天皇はスムーズに皇位を受け継いでいる。立太子の重要性が知られるが、当面、わたくしが注目したいのは、こうした慣習の中での立太子と立后——つまり皇后と皇太子の間に深い関わりがあったことである。

皇后と皇太子の不可分な関係は、〔Ⅰ〕の嫡系相承においてもっとも如実に示されている。〔Ⅰ〕に見られた記載の統一性、すなわち即位後にみられた「立后↓立太子」という母と子の関係がそれで、これはその皇太子が即位すること、で天皇と皇太后の関係、つまり「即位↓尊皇太后」という記載にかわる。しかも留意されるのは、皇太子となる皇子が皇后の所生であったことである。

この関係は事情のある天皇(統一的記載がされていない天皇)についてもいえる。たとえば景行天皇の場合、皇后でなく妃所生の皇子稚足彦尊(のちの成務天皇、母は八坂入媛)が立太子されたが、書紀によればその翌年、皇后(播磨太郎姫)が薨去し、二カ月後、皇太子稚足彦の生母を立后したとみえる。ここに皇后播磨太郎姫薨去の記事をことさらに載せたのは、皇太子の生母を皇后とする必要からであったという指摘⁽⁶⁾はおそらく正しいであろう。皇后にならなかった(にもかかわらず)仲哀天皇の生母(両道入姫命)を仲哀紀ではあえて皇后と記しているのも同様である。⁽⁷⁾これらのことから書紀では、皇太子の生母はすべて皇后であった、というより皇后であるとして扱われていることが知られ、原則として「皇太子の生母は皇后」とする観念があったものとみることが出来る。複数の后妃がいても、皇后の子が皇位継承者(皇太子)であるとみなされていたことを示す事例は他にも少なくない。⁽⁸⁾以上を要約すれば、立后とは、それによって次代の皇位継承者が決(予)定されることであり、立后が立太子

をひき出す重要な政治的行為であったことを示している。その点わたくしは、大化改新後に即位した孝徳天皇による立後に注目したいと思う。この孝徳と中大兄皇子の不和については、対外政策の対立とする見方や女性（間人皇后）をめぐる感情問題があったとする意見があるが、以上のような観点からすると、いわば中継ぎ的な役割を要請された孝徳（『日本書紀』孝徳即位前紀）が、（慣例通り）即位後ただちに（十八日後）皇后を立てたところに原因があったとみるべきではなからうか。なぜならこの立后は、皇后所生の皇子の立太子を導き出す意味合いがあったから、皇極天皇時代すでに皇太子とされていた中大兄の立場を否定する効力をもったからである。皇極や中大兄の反発を買ったのはむしろ当然であった。時期は遡るが、反正⁽⁹⁾や、四代後の清寧天皇（履中の孫を立太子した）に立后のことがなかったのも、同様の事情があったと考えられる。即位二年後に皇后を立てた安康天皇が、翌年に暗殺されているのは、右に述べたような配慮をしなかった事例である。兄弟相承のなかで立后が立太子（皇位継承）と密接なかかわりのあったことを暗示する。〔Ⅱ〕の兄弟相承の場合、立后と立太子の関係が複雑とならざるを得なかったゆえんも、そのあたりに原因があったわけである。

（ハ）ちなみにこうしたことから立太子についても、天皇在位中と没後とでは、おのずから差異のあったことが知られる。すなわち天皇在位中に大きな役割を果たしたのが生母の存在である。ただし立太子の要件としては、この生母がすでに立后していることであり、しかも立太子時になお健在であれば断然有利であった。⁽¹⁰⁾〔Ⅰ〕において、立太子を経たほとんどの天皇が、即位直後、生母（皇后）を皇太后と尊称しているのも生母皇后の存在の重みを示している。

これに対して天皇没後の場合、重要な役割を果たすのが〔Ⅱ〕期にあらわれる女帝である。男帝と比べた場合、とくにその即位が立太子と不可分の関係にあることが注目されるからである。その点で称制説のある天智皇后倭姫の場合、女帝の特色が集約されているといえそうである。

すなわち『日本書紀』天武即位前紀によれば、死を目前にした天智が皇太弟の大海人皇子を呼び、皇位を授けようとしたところ、天智の心を見抜いた大海人は、「願陛下¹¹下¹²拳¹³天下¹⁴一付¹⁵皇后¹⁶、仍¹⁷立¹⁸大友皇子¹⁹、宜²⁰為²¹儲君²²」と答えたという。「仍」に「なほ」とルビをふる註釈書もあるが、通常のよみの「よって」でよい。つまり大海人の意見は、大友皇子に皇嗣を譲りたいのなら、皇后（倭姫）を即位させ、その上で大友を立太子させるのがよい、というものであった。

この大海人の意見は、立太子を実現するためには女帝（この場合は皇后）の即位が必要であったことを指摘したものとして、看過できない。

こうした女帝の中継ぎ的性格、皇位継承における緩衝的役割は、皇極や持統・元明・元正の場合でも同様で、わが国では、当然皇太子になり得る立場の皇子が、何らかの理由で立太子出来なかった時、女帝を即位させることによってその立太子を実現させたと考えられる。⁽¹²⁾こうした女帝即位の問題は、前節で述べた理由によって光明子には直接関係のないことであるが、立太子論の一環としても考慮すべき点があり、あらためて別の機会に論じたい。

(2) 光明立後の宣命

以上、古代における立後の慣習を考察してきたが、そこで見られたあり方は、光明子の場合でも影を落していると思わなければならない。その意味でわたくしは、従来あまり関心が寄せられていなかった立後の宣命を重視したいと思う。

この宣命とは光明子立後の二週間後、八月二十四日に発せられたもので、当日は五位及び諸司の長官を内裏に換し入れ、知太政官事舎人親王に読ませている。

天皇が大命らまると、親王等又汝王臣等に語らひ賜へと勅りたまはく、皇朕高御座に坐し初めしゆり、今年に至るまで六年になりぬ。此の間に天つ位に嗣ぎ坐すべき次として、皇太子侍りつ。是に由りて其のははと在す藤原夫人を皇后と定め賜う。かく定め賜ふは、皇朕が御身も年月積りぬ。天下の君と坐して、年の緒長く皇后坐さざる事も、一つの善からぬ行にあり。又天下の政に置きて独知るべきものならず、必ずもしりへの政あるべし。此は事立つにあらず。天に日月在る如、地に山川有る如、並び坐して有るべしと言ふ事は、汝等王臣等明らけく見知れることなり。然るに此の位を遅く定めつらくは、刀比止麻爾母己が夜氣授くる人をば、一日二日と扱ひ、十日二十日と試み定むといはば、こきだしきおほき天下の事をや、たやすく行はむと念ほし坐して、此の六年の内を扱ひ賜ひ試み賜ひて、今日今時眼の当り衆を喚し賜ひて、細しき事の状語らひ賜ふと、詔りたまふ勅を聞しめさへと宣る。かく宣りたまふは、掛けまくも畏き、此の宮に坐して現つ神と大八洲国知しめしし倭根子天皇、我が王祖母天皇の、始め此の皇后を朕に賜へる日に勅りたまひつらく、女と云はば等しみや我がかく云ふ。其の父と侍る大臣の皇が朝をあななひ奉り輔け奉りて、頂き恐み供へ奉りつゝ、夜半暁時と休息ふこと無く、淨き明き心を持ちて波波刀比供へ奉るを見し賜へば、其の人のうむがしき事款しき事を送にえ忘れじ。我が児、我が主、過ち無く罪無くあらば、捨てますなと負せ賜ひ宣り賜ひし太命に依りて、かにかくに年の六年を試み賜ひ使ひ賜ひて、此の皇后の位を授け賜ふ。然るも朕が時のみにはあらず。難波の高津宮に御宇しめしし大鷦鷯天皇、葛城曾豆比古の女子、伊波乃比売命皇后と御相ひ坐して、食国天下の政、治め賜ひ行ひ賜ひけり。今めづらかに新しき政にはあらず、本より行ひ来し迹事ぞと詔りたまふ勅を聞しめさへと宣る。

(倉野憲司編『統日本紀宣命』による)

一読して明らかなように、光明子立後の正当性を表明することにのみ意を尽した宣命である。すなわち、掲げられた理由を順次あげてみると、

①藤原夫人（光明子）は、皇位継承者とされていた皇太子の母であること

②政治は天皇と皇后が並存して行なうのが望ましいこと

③慎重に立后の人選をしてきたから、即位後、六年もたってしまったこと

④光明子の父不比等の功績を忘れてはいけないこと

⑤臣下の娘を立后するのは前例があり、新儀ではないこと

以上の如くである。

従来この宣命に関心が払われなかったのは、これらのほとんどが、立后の理由として妥当性を欠くとみなされていたからである。たとえば②は皇后の必要性を説明するが、聖武の父文武も皇后を立ててはおらず、宮子が文武夫人として正妻的立場にあった。⁽¹³⁾したがってこれを光明子が立后する理由とはなしえない。また立后が遅れたことを繰り返して弁明している③が、却って当初、それが予定されていなかったことを物語り、この場合、説得的とは思えない。それは④についても同様で、父不比等が貢献したからといって、夫人光明子（臣下）を皇后（皇族）に転換出来る性格のものでもない。そこで仁徳朝の例をもち出した⑤のであろうが、数百年も前に遡ること、現実的とも思えない。

しかしこの宣命に述べるところは、すべてがこじつけであろうか。とくに①については、「皇太子の母は必ずしも皇后でなければならぬことはなく、またすでにその皇太子は死亡したのであるから、この理由は成立しない⁽¹⁴⁾」、⁽¹⁴⁾という切れるものであろうか。前節の考察からすれば、皇太子を失ったとしても、光明子にとってこの①が無意味であったとは思えない。

光明子が立后する上での難点は、いうまでもなく身分が非皇族＝臣下という法制上の問題であったから、皇太子基王の生母である（あった）という「事実」は、その法的枠を越えるための唯一の根拠であったとみられるか

らである。過去における皇后と皇太子の不可分な関係、つまり皇太子の生母＝皇后という古来の伝統と観念を這手にとって行なったのが光明立后であったと思う。そこでは皇太子の生死は問題外であった。①が宣命の冒頭に記されたゆえんである。

このように理解すると、光明子の立后は非法ではあるが、手続きそのものは過去の慣例や慣習を踏まえた上でのものであったことが知られると思う。そしてこれが、藤原氏のとった立後の論理であり、一般の理解をとりつける唯一の拠り所であったといえる。ただ民間人である点は決定的な弱点であったから、その弁明のためにも立後の宣命が必要とされたわけである。この宣命に続いて勅が下され、立后についてこのように詳細に聞かせるのは「尋常」ではないが、汝等を親しむからである、と述べられているところにも、そうした事情（建前と本音）がうかがえよう。

さて、光明子の立后に関連して、わたくしが興味深く思うことが二つある。

その一は、文武夫人宮子が、聖武天皇の母として「皇太夫人」と号すべきところを「大夫人」と称して、長屋王の反対にあったことである（『続日本紀』神龜元年三月二十二日条）。反対の理由は「大夫人」が令外の尊称であったことにあるが、以上述べたような立後の慣習に従えば宮子を「皇太后」と称することがあながち不可能であったとは思えない。のちに「太皇太后」（『続紀』天平勝宝六年七月十九日条には「太皇太后、宮子崩_ニ於中宮」とある）と呼ばれているのも、そのことを推測させる。したがって話の進め方によっては、長屋王の反撥を招くこともなかったであろう。その意味で、藤原氏はやり方を誤っていたといえるのかも知れない。「大夫人」についても、のちに光明子は淳和天皇の母を「大夫人」と呼ばせており（『続日本紀』天平宝字三年六月十六日条）、長屋王の批判も風化した感がある。ちなみに平安期、十世紀以後では、所生の皇子が即位すると必ずその母に「皇太后」の尊称が与えられており、皇太后はもっぱら「天皇の母」としての称号となった。

その二は、光明子に付属された皇后宮（職）のことである。これについては、本来、立后した光明子の中宮に入るべきであったが、これ以前、皇太夫人である宮子が中宮（建物）を使用していたため、令制のない皇后宮が新たに設けられたといわれている。⁽¹⁵⁾そして周知のように、不比等邸（光明子が不比等から譲りうけたもの。現在法華寺の所在地）が用いられたため、皇后宮は大内裏の東外に置かれた。もともと東外とはいえ、大内裏に接していた。不比等がいつそこに邸宅を構えたかは不詳であるが、不比等の権勢を示している。しかも臣下の邸宅が内裏（この場合は皇后の居所）として存在した前例はなく、また天皇の正妻である皇后の住居が大内裏外に定められたというのも全く例のないことであった。従来この点についても疑問をもたれることはなかったが、しかしそれがわたくしには、藤原氏のなした最大の譲歩であったように思える。立后がかりに合法的な行為であったとしても、光明子が藤原氏の出自であることに對する抵抗は強く存在していたからである。

光明子の立后がこうした状況の中で実現されたことを考えると、東外の皇后宮というのは、あえて私邸を提供することで、非皇族者の立后という異例さに対する違和感を緩和し、政治的な反発を切り抜けようとした方策であったように思われる。藤原氏のとった政界に對する一種の妥協であったと考える。

ともあれ、光明子の立后は実現した。この立后は、それによって光明子を、同じく夫人であった広刀自よりも優位に立たせるためばかりでなく、今後に出生の期待される皇子の立太子を可能にするための条件づくりであった。光明子はまだ二十九歳であった。広刀自に安積親王が誕生した以上、その安積を抑え、生まれてくる（と期待する）皇子を確実に立太子させるには、光明子を立后させておくことが絶対に必要な条件であった、というより立后以外に道はなかったのである。

三 光明立後の「破綻」

(1) 阿倍内親王の立太子

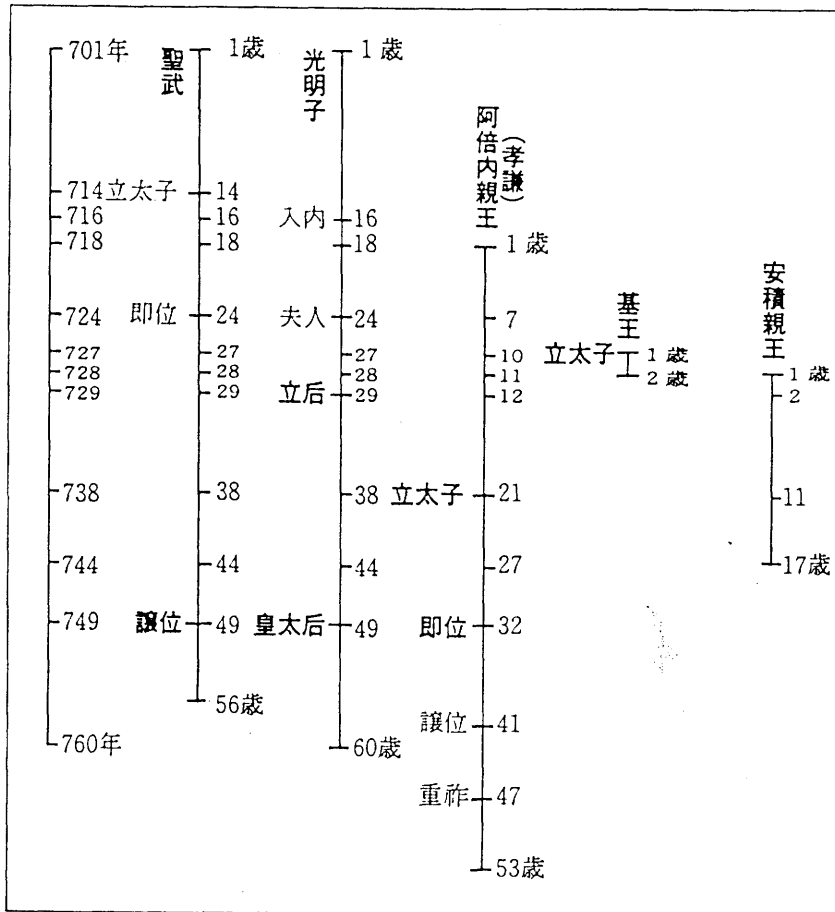
天平元年八月、光明子は立后し、そして皇子の誕生を待った。しかし皇子は生まれなかった。その間、天平九年（七三七）前後のことであろうか、藤原武智麻呂の女（南夫人と称された）と同房前の女（ともに名不詳）、および橘佐為の女広岡古那可智の三人が聖武夫人として入内したと考えられる。断定は出来ないが、二人の藤原氏の娘の入内は、光明子に皇子が生まれなかったことに対する焦りであったのかも知れない。そしてその直後、光明子にとって大事件が起こった。前年から猛威を振っていた天然痘により不比等の四子（光明子の異母兄弟）が、四カ月足らずの間に相次いで没してしまったのである。二十一歳の阿倍内親王が立太子したのは、翌天平十年正月であるが、この立太子は、時期からいって四兄弟の不慮死と無関係とは思えない。そこには、四兄弟の死による藤原氏一族の焦躁さえも感じられる。

阿倍立太子の理由はそれに留まるものではなかった。基王が亡くなってすでに十年、安積は十一歳となっていた。安積の成長に対処するためにも、阿倍の立太子は急がれていたのである。

しかし阿倍の立太子は、藤原氏が、光明子立后に描いていた政治路線に沿うものであったとは考えがたい。立后はあくまでも所生皇子を立太子（さらに即位）させるために打たれた布石であり、それ以外のものではなかったからである。阿倍の立太子は、それがかなわないばかりか、不比等亡きあと後見的立場にあった四兄弟の急死という不測の事態のなかで、成長する安積を抑えるために取った措置であったとみるべきである。それは、いつか安積の皇位継承を期待する聖武にとっても不都合ではなかったと思われる。

ところが思いがけないことがおこった。天平十六年（七四四）閏正月、聖武の難波行幸に供奉の途中、桜井順宮

表2 聖武天皇関係者の経歴



から「脚病」と称して恭仁宮に引返した安積が、二日後、急死したのである。十七歳であった。安積のこの急逝を不自然とみて、恭仁宮に残っていた仲麻呂らによる暗殺とするのが通説である⁽¹⁶⁾。わたくしも以前はそうように理解していたが、その後聖武天皇のいわゆる「彷徨五年」(二章)の軌跡をたどるなかで、暗殺説には疑問を抱くようになった。とくに安積急死の二十日後、仲麻呂だけが恭仁京の留守官の任を解かれていることについて、通説ではそれを仲麻呂暗殺説の理由とするが、別稿(二章)でも考察するうちに、むしろこの前後から本格化する聖武天皇による紫香楽宮での大仏造立事業に仲麻呂が起用されたことを物語るものであり、その後の活躍ぶりをみても、仲麻呂を暗殺者とする根拠はないように思われる。したがって安積親王の死は、予

期せざる事態ではあっても、暗殺といったことを想定しなければ説明できないほど不自然なものであったとは考えない。

聖武が譲位し、阿倍内親王が即位したのはそれから五年後、天平勝宝元年（七四九）七月二日のことであった。

(2) 聖武上皇の「遺詔」

安積親王の急死はともかく、阿倍の立太子は、藤原氏の敷いた光明立後の路線に従うものではなかった、というのがわたくしの意見であるが、阿倍の即位についてはどのような理解が可能であろうか。

立后路線からいえば、阿倍の立太子同様、あくまでも次善の策であり、所期の目的でなかったことは明白である。極端にいえば、むしろ立后政策の破綻であったと思う。なぜなら、元明や元正の例を引き合いに出すまでもなく、女帝阿倍⁽¹⁾孝謙の即位に、光明子の立后は必要でなかったし、また、阿倍自身、立太子する必要もなかった、からである。立太子を経ての阿倍の即位には、皇統意識の面から別個に考えるべき問題があるが、当面のことについていえば、藤原氏が光明子の立后に費やした努力を水泡に帰してしまうほどのものであったといっても過言ではない。

いっぽう聖武の譲位・孝謙即位後、皇太后となった光明子は、周知の通り仲麻呂の主導のもとに、紫微中台を拠点とする強権政治を行なった。皇太后光明子を皇太后「朝」と称されたことといい、その皇太后に皇権のシンボルである鈴璽が置かれたことといい、光明子が政治に参与したことを物語るが、こうしたことも、つまるところ立后に期待された成果が、一つとして実現しなかったことに対する焦躁のあらわれであったと考える。

その意味で、光明子を含むこのような藤原氏の動向に対する聖武の措置が注目される。

聖武は阿倍に譲位する二カ月前、出家している。天皇（あるいは上皇）の出家はこれがはじめてであるが、こ⁽¹⁹⁾

した出家―讓位の動機が、わたくしには前年の元正上皇の死と無関係であったとは思えない。「万機密く多くして、御身敢へ賜わずあれ」というのが詔の中に述べられた讓位の理由であるが、むしろ元正を失ったことで聖武は完全に政治的関心をなくしたとみられる。その上皇聖武が行なった最後の決断が、崩御に際しての「遺詔」ではなかったろうか。

『続日本紀』によれば、天平勝宝八年（七五六）五月二日、聖武は道祖王を皇太子にするよう言い残して、五十六歳で寝殿に没している。道祖王は新田部親王（天武の子）の子で、時に從四位上・中務卿であった。上皇が立太子の選定をするということはまさに異例の措置であった。これは前節で考察した立太子の慣習を無視したもののといわざるを得ないが、そこに聖武の意思がうかがわれる。

果せるかなこの道祖王は、翌年三月二十九日、突如として廃される。理由は、「身居_ニ（聖武）諒闇_ニ、志在_ニ淫縱_ニ、雖_レ加_ニ教勅_ニ、曾_レ无_ニ改悔_ニ」というもので、わずか一年たらずの皇太子であった。しかも同年に発覚した奈良麻呂の変に連坐し、拷問にかけられて没している。廃太子が、聖武の遺詔を反古にしようとする仲麻呂らによる計画であったことはいうまでもない。四月四日、かわりに立てられたのが大炊王、のちの淳仁天皇である。

孝謙（阿倍内親王）の役割は、この大炊王の立太子をもって事実上終わったとみてよい。

光明子は、阿倍の立太子後も、なお皇子の誕生を待ったに違いない。しかしついに皇子は生まれなかった。

光明立後の果した役割は、いったい何であったのだろうか。たしかに皇族出身でない者の立后への道を開き、これがのちに摂関政治への導入となったという点では、政治史上の意味は小さくはない。しかしそれは後になっていえる判断であって、実際には、すべてが思惑とは違った形で事が進み、結局、混乱の他は何も生み出すことはなかったというのが真相ではなからうか。あえて光明子立後の破綻と題したゆえんである。

- (1) 岸俊男『日本古代政治史研究』所収。
- (2) 最近、河内祥輔氏は、光明子の立后について、聖武天皇側に視点をおいて新しい解釈を出されているが、全体の論旨や意味づけには従えない（『奈良朝政治史における天皇制の論理』、佐伯有清編『日本古代政治史論考』所収）。
- (3) 元正女帝の立場や役割については本書第一部三章「孝謙女帝の皇統意識」参照。
- (4) 井上光貞「古代の女帝」（『日本古代国家の研究』所収）。
- (5) 直木孝次郎「厩戸皇子の立太子について」（『飛鳥奈良時代の研究』所収）。
- (6) 日本古典文学大系『日本書紀』など。
- (7) なお成務の場合、立太子したのは嫡子でなく異母兄の子（成務にとっては甥、のちの仲哀天皇）であり、立后記事がないことはおのずから納得されよう。
- (8) たとえば仲哀没後、新羅遠征から帰国の途次にあった皇后（神功）に、皇子（応神）誕生の知らせを聞いた膳坂王と忍熊王（ともに母は仲哀妃）が、「今皇后有_レ子、群臣皆從焉、必共議之立_二幼主_一、吾等何以_レ兄從_レ弟乎」（『日本書紀』神功皇后摂政元年二月条）と謀反を企てたのも、そのことを傍証する一例である。
- (9) 反正の場合、立太子の記事がないのは、即位して五年で没したからであらうが、前後の事情から、同母弟の允恭の立太子（即位）がすでに想定されていたとみられ、そのために立后がひかえられたと思われる。
- (10) ちなみに林幹弥氏は、「上宮王家」（『日本歴史』四一一号）の中で、天皇の即位時に必ず生母の健在することが原則であったと指摘されている。
- (11) 註(6)前掲書。
- (12) 女帝の役割は、推古天皇の場合でも明白である。その即位四カ月後に立太子した厩戸皇子は、本来なら用明天皇の第一皇子として崇峻天皇時代に立太子されるべき存在であった。しかし崇峻が即位五年にして暗殺され、厩戸の立太子にまで及ばなかったという事情から、厩戸の立太子を実現させるために立てられたのが推古女帝であったと理解できよう。
- (13) 文武夫人藤原宮子所生の首皇子（のちの聖武天皇）が立太子できたのは、文武には皇后が立てられず、夫人宮子が后妃のうち最高位にあったからである。ちなみに文武には嬪に紀朝臣竊娘と石川朝臣刀子娘があり、とくに刀子娘との間には広世・広成の二皇子がいたが、和銅六年（七一三）十一月五日、二娘は嬪号を廃止されている。その七カ月後、首皇子が立太子されていることを考えれば、角田文衛氏（『首皇子の立太子について』『律令国家の展開』所収）が仮説として述べ

られたように、首の皇位継承を確実にするため、二皇子の皇位継承資格を失わせ、そのために母の刀子娘の嬪号を貶黜したに違いない。つまり母の後妃である地位を剝奪することで立太子の資格を奪ったわけで、母と子の関係が示されている。さらにわたくしは、文武や聖武に皇后を立てなかったのも藤原氏の策謀であったと思う。立后しえない藤原氏の娘が、所生皇子を立てるための間接的な手段であろう。

(14) 岸俊男、註(1)前掲論文。

(15) 井上薫「光明皇后と皇后宮職」(『ヒストリア』20)。

(16) 横田健一「安積親王の死とその前後」(『南都仏教』六)。

(17) 瀧浪「光明子の立后とその破綻」(『史窓』41)。

(18) 孝謙天皇については註(3)前掲論文で詳述した。

(19) 本書第Ⅱ部五章「奈良時代の上皇と『後院』——後院の系譜(その二)——」参照。

二章 聖武天皇「彷徨五年」の軌跡

——大仏造立をめぐる政治情勢——

はじめに

天平十二年（七四〇）十月壬午の日、聖武天皇は鈴鹿王（知太政官事兼式部卿）と藤原豊成（兵部卿兼中衛大将）の二人を留守官として平城京を出立した。いわゆる「関東行幸」——東国行幸の始まりである。以後五年間、聖武は平城京に戻ることはない。「彷徨五年」などと呼ばれ、その行動が不可解とされている期間がこれである。

ことの始まりは出立の三日前、聖武天皇が大將軍大野東人らに対して発した次のような勅にある。

勅大將軍大野朝臣東人等曰、朕縁有所意、今月之末、暫往_二関東_一、雖非其時、事不能已、將軍知之、不須驚恠、

（『統日本紀』天平十二年十月二十六日条）

この時大野東人は、九州で反乱を起こした藤原広嗣征討のため大將軍として派遣され、現地にいた。聖武が「其の時ではないが——」と言ったのは、むろん事件がなお解決していなかったからである。

あらためて述べるまでもなく広嗣の乱は、七世紀末の壬申の乱以来の大事事件であり、人々に少なからざる衝撃を与えた。そこから「関東行幸」についても、平城京で内乱が誘発されることを警戒した聖武が、一時的に退避するために離京したもの、とか、逆に、平定を祈願するための伊勢神宮行幸であった、といった理解がなされて

いる。しかし後者はともかく、前者なら、離京はかえって内乱を誘発する条件を与えるだけで、理解の方向が逆であろう。それよりも事件に直接かかわっての行幸なら、これを知った東人が「驚恠」するはずがない。それどころか理由を明示し、東人を激励する言葉があつてしかるべきである。その時ではないが、都を離れることに驚くな、という聖武の言葉には、明らかに弁明の意が込められている。この東国行幸をわたくしは、直接乱にかかわるものではなかったと考える。

しかし、にもかかわらず出立した聖武の意図は奈辺にあつたのか。東人たちが現地で奮闘中であることは百も承知で、「その時ではないが」としながらも、「事不^レ能^レ已」とて出立しているのは、別の見方をすれば、聖武にとつて出立の機会は今しかない、という切迫した状況にあつたともいえよう。乱に直接かわることではないが、しかし乱の最中に出かけてこそ意義がある——聖武の東国行幸は、そんな感じで行なわれている。

それにしても、なぜこんな時期に出発したのか。聖武の「意^{おも}ふ所」とは何であつたのか。ことさら「暫^{しばらく}往^む關^{かん}東^{とう}」かんという聖武の言葉が、単なる思いつきとか衝動的なものであつたとは思えない。

東国行幸に始まる「彷徨五年」については、その間に国分寺建立の勅や懇田永世私財法が發布され、奈良時代でも重要な施策の行なわれた時期であることは承知しているものの、この間における聖武天皇の行動を十分理解できていないのが現状ではなからうか。こんにちからみれば、全くの浪費に終わったとしかいいようのない五年間であるが、聖武にとっては無意味な期間ではなかつたはずであり、その真意を理解することが必要であろう。少なくともこの時期を抜きにして聖武天皇を語ることはできない。

そこで本稿では、聖武の行動を詳しく跡づけながら、「彷徨五年」の意味を考えてみたいと思う。

一 聖武天皇の「関東行幸」

十月壬午、平城京を出立した聖武天皇一行は山辺郡竹谿村堀越頓宮から伊賀を経て十一月二日、伊勢国菟志郡河口頓宮に到着、ここで東人から広嗣の逮捕、ついで広嗣誅殺の報を受けている（五日）。ちなみに広嗣の逮捕が伝えられたのは、大井王や中臣・忌部らを遣わして伊勢神宮に奉幣したその日（三日）のことであったが、その前後関係はわからない。またこの河口頓宮には前後十日間滞在したが、その間、ここを「関宮」と名づけている（2）のが留意される。ここは大和・伊賀から伊勢へ越える要衝の地であり、以前から関塞が設けられていたから、それにちなむ呼称であろうが、ことさら関宮と命名した背景には、この地で事件解決の報を受けたことに加えて、東国行幸の終点と考えている不破関と首尾対応させるという意図がこめられていたのではないか。そのことはやがて明らかになるう。

さて、この関宮（河口頓宮）を十二日に出発した聖武一行は、その後、菟志郡（衙）から北上、扈從する文武官人らに賜爵・賜祿などを行ないながら、十二月一日、不破頓宮に至っている。広嗣の乱が終熄したにもかかわらず、平城京へ戻らずに行幸を続けたのは、その意図するところが事件以外にあったことを暗示する。また聖武が伊勢神宮にまで赴かなかったことについて、当初の目標地（伊勢神宮）のすぐ近くにまで来ながら、戦勝の報を聞いたため、方向を転換したのだ、といった理解があるが、伊勢参拝が当初の目的ならその後の行動は不可解であり、わたくしは採らない。わたくしは河口（関宮）からの神宮奉幣（遙拝）も、北上して不破へ至ったのも、当初からの予定であったと考える。

しかもこの行幸は、元正上皇・光明皇后をはじめ、その陪從として塩焼王を御前長官、石川王を御後長官とし、さらには藤原仲麻呂を前騎兵大將軍、紀麻呂を後騎兵大將軍に任命、騎兵・東西史部・秦忌寸等を合わせれば総

勢四百人にもものぼるといふ多人数による大移動であった。このことを、先にみたような出立の経緯と重ね合わせるならば、「暫往^ニ関東^ニ」かんといった聖武の意図が、はじめから数日間程度の離京といったたぐいのものではなかったことは明白である。聖武の「意ふ所」は、よほど大きな計画であったとみななければなるまい。そこであらためて聖武一行のたどった道筋を考えてみたい。

そもそも聖武の離京＝東国行幸の道筋は、これまで述べてきたことで明らかのように、出発点の違い（吉野と平城宮）はあれ、大半が壬申の乱（六七二年）における大海人皇子のそれと重なっている。聖武の場合、川口路をとったが、この道は当時、平城から東国へ向う一般路であったばかりでなく、斎王の伊勢群行路であったこと、とくに河口頓宮（関宮）から重ねて伊勢神宮に奉幣していることをみても、その途次神宮を遙拝した壬申の乱における大海人皇子の行動にならうという聖武の強い思いがうかがえよう。伊勢神宮が天武（大海人）によってこの乱のあと整備されたことも知られるとおりである。

壬申の乱とのかかわりという点では、聖武が平城京を出発した十月二十九日―これまでことさら「壬午」と記してきたが、この日が大海人皇子が吉野で挙兵を宣した六月の、同じ「壬午」の日であったことに注目したい。

「壬午」は陰陽道では出行（出発）、行吉事（挙兵）のいずれにも吉日に当たるといい、大海人が意識して選んだ日とされているが、聖武の出発がその日であったのは単なる偶然とは思えない。ちなみに『日本書紀』によると、大海人が伊勢神宮を遙拝したのは七月二十六日（丙戌）であるが、聖武が関宮から奉幣した十一月三日も「丙戌」であった。

これらのことから聖武天皇が、壬申の乱における大海人皇子の行動を意識し、それを追体験しようとしていたことはまず間違いないであろう。はたせるかな聖武は、十二月四日、不破頓宮に至って行幸の態勢を解いている。『続日本紀』に「解^ニ騎兵^司、令^レ還^ヨ入京^ニ」めたとあり、騎兵だけは帰京させている。これは不破への行幸

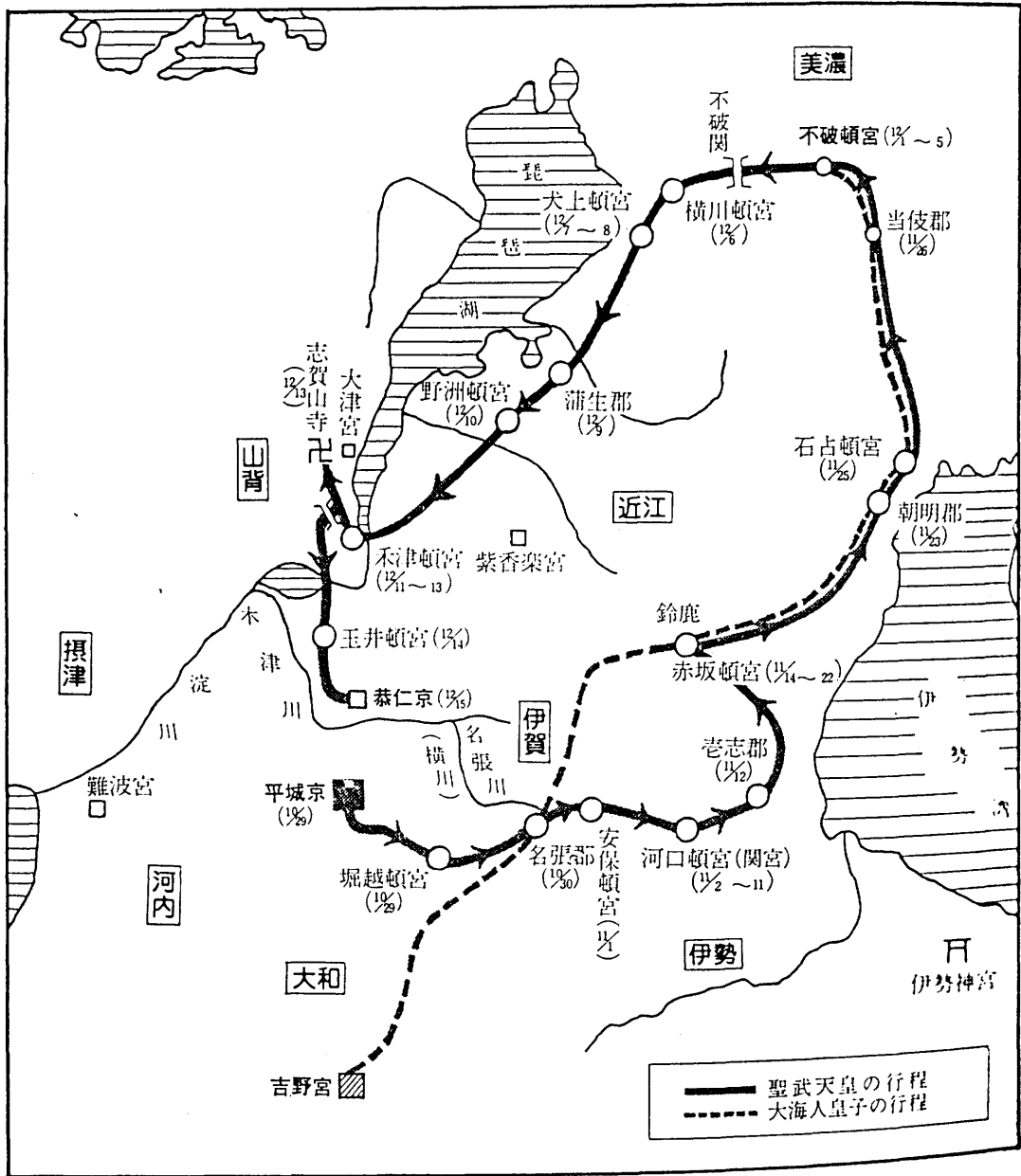


図1 大海人皇子と聖武天皇の東国行幸行程図
 () 内の数字は聖武天皇が当該地に到着もしくは宿泊した月日

が一応の目標であったことを示しているが、この不破こそ、大海人が拠点とし、大友皇子の首がもたらされて乱に勝利した記念すべき場所であったことはいうまでもない。騎兵司は威儀をととのえる上で不可欠の存在であるが、その行粧をあえて不破に至って解いたところに、聖武の真意がもっとも端的に示されている。すなわち聖武は、大海人皇子⁽⁸⁾壬申の乱を追体験することによって、皇子が抱いたであろう危機意識を扨從する貴族官人らと共有し、一体感を得ようとしたものであったと考える。その意味で、広嗣の乱は、行動を起こすにはもっともふさわしい契機であった。

ところで聖武は、九州での戦況の推移を全く無視して平城京を離れたわけではない。わたくしの見るところ、十月十九日に造伊勢国行宮司を任命して行幸の決意を表明したのは、その時点で事件はすでに峠を越え、解決への見通しがほぼついていたからである。『続日本紀』に記す東人からの報告によれば、九月二十五日に投降者があったといい、十月九日には勅使に対して広嗣が下馬、再拝し、「広嗣不^ニ敢^ニ捍^ニ朝命^一、但請^ニ朝廷乱人二人^一（真備と玄昉）^ニ耳、広嗣敢^ニ捍^ニ朝廷^一者、天神地祇罰殺」と叫んだために広嗣軍が動揺したことを伝えている。乱が始まってほぼ一カ月後のことであるから、東人の方ではかなり早い時期から広嗣軍の内情を把握していたと思われる。造伊勢国行宮司の任命はそうした状況下で行なわれたもので、東人からの報告が深刻であれば、おそらく出発はしていなかったろう。といって出立の時点で事件は解決していたわけではなく、なお緊張した雰囲気にあったが、出発の機会はおそらくこの期を逃しては得られない、というのが聖武の本音であったとみる。先にふれた「壬午」の出立を重視するゆえんである。ちなみに干支は六十日で一巡するから次の機会（「壬午」）は十二月三十日まで待たなければならない。こうした事情を考えると、聖武の行幸は、聖武自身の意図に即していえば、もっとも時宜を得た出発であったのである。

さて、騎兵司が解散され、聖武一行の行粧もごく日常的なものとなった。それまでの緊張感から解放されたの

か、『続日本紀』には騎兵司を解散したその日、聖武は国域を巡視し、夜は新羅楽・飛騨楽を楽しんだとある、しかし、これからの行動が示すように、これで行幸が終了したわけでも、平城京に戻ることはなかったわけでもない。この事實は、平城京を出立した聖武の真意が、不破までの東国行幸——壬申の乱の追体験だけに終わるものでなかったことの何よりの証拠である。じじつ天皇はこのあと恭仁京の造営に着手する。

すなわち『続日本紀』には、騎兵司解散二日後の十二月六日、「是日、右大臣橘宿禰諸兄在_レ前而発、経_コ略山背国相楽郡恭仁郷、以_レ擬_ニ遷都_一故也」とあり、それまで同行していた右大臣諸兄を先発させ、山背国相楽郡における恭仁宮の経営（＝恭仁遷都）に当らせたのである。

一般の理解では、不破で遊樂した時点では平城京へ戻るつもりであったが、六日になって突然、恭仁遷都が決定された、というふうにみるむぎが多い。しかしこれは正しい認識ではないであろう。聖武の行動がこれ以後積極的となることを考えるならば、離京の真意は、東国行幸が終わってからの行動にこそ込められているとみるべきである。聖武にとって、ここに至るまでの行幸は、その構想する事業の第一段階であったと考える。行幸の責任者でもある右大臣諸兄を先発させたのは、事業が第二段階に入ったことを示すものであった。恭仁京の造営はその最初の仕事であった。

二 恭仁京の造営

(1) 遷都に「擬す」

諸兄を先発させたあと、聖武一行は不破から琵琶湖東岸を南下して近江に入り、志賀山寺に幸して礼仏、十四日には山背国相楽郡玉井頓宮に到着している。聖武が恭仁宮に移御したのは翌十五日のことで、『続日本紀』は「皇帝在_レ前、幸_ニ恭仁宮_一、始作_ニ京都_一矣、太上天皇・皇后在_レ後而至」と記している。ことさら聖武が元正上皇

や光明皇后より「在^レ前」って恭仁宮に入つたことを記したのは、恭仁宮に対する聖武の強い思い入れを言おうとしているのであろう。

こうして恭仁京の造営⁽⁹⁾⇨恭仁遷都が始まったが、この恭仁京⁽⁹⁾については従来から全く不可解な造(遷)都とみなされ、聖武の行動の異常さの表われとさえいわれている。

不可解とされていることの第一は、その造営状況の異常さである。あまりにも突然であり、異例であるとする。たしかにこれ以前の藤原京や平城京の場合、まず造宮・造京工事が開始され、宅地班給のあと、時期を見はからって遷都が行なわれているのに対して、恭仁京では聖武が恭仁に遷御したあと、造営工事が開始されている。

第二は、恭仁京の立地条件の悪さである。藤原京や平城京に比し、はるかに狭隘な地がなぜ選ばれたのか。しかも平城京とは至近距離にあることが疑問をいっそう増幅させている。

第三は、これらに加えて、造営工事が三年で停止され、放棄されることである。いったい何のための造(遷)都であつたかわからないという疑問である。

たしかに前後の遷都に比すれば、恭仁京は全く異例づくめといわざるを得ない。しかし恭仁京遷(造)都を、それ自体が目的とみるのではなく、聖武のこれから実現しようとする事業のためのもの、というふうには考えられないであろうか。結論を先に述べることになるが、聖武のその後の行動から推測して恭仁京遷都⇨造都は、聖武にとって貴族官人を平城京に戻さな^レいたための拠^レ点^レづくりであつたように、わたくしには思われる。つまり恭仁京はその間の一時的な都——将来見込まれる平城還都に至るまでの仮りの皇都であつた、と。そう思う根拠としてわたくしは、右大臣諸兄が恭仁郷に向つて先発したことを記す『続日本紀』天平十二年(七四〇)十二月六日条(前掲)に留意したい。そこには恭仁郷(山背国相楽郡)の経略(⇨造宮)が「以^レ擬^レ遷都^二故也^一」とある。「遷都に擬す」といういい方は他の遷都には見られない表記であり、特殊な意味がこめられていたように思われるから

である。

恭仁郷の経略を遷都に「擬する」とは、これを正式の「ミヤコ」としたわけでないということである。聖武は恭仁京を平城京と同等の宮都、すなわち平城京にかわる新都として造営（遷都）したのではなかったのである。そのことは翌十三年十一月十一日、恭仁の宮名について奏上した、次のような諸兄の言葉にも如実に示されている。

右大臣橘宿禰諸兄奏、此間朝廷以何名号ニ伝ニ於万代、天皇勅曰、号为大養徳恭仁大宮也、

この「大養徳恭仁大宮」という宮名についてはのちに取り上げるが、諸兄が奇しくも発した「此の間の朝廷」の言葉は、単なる表現のフヤではなく、実際に諸兄たちは、ここにいる期間が限られたものであることを知った上での表現であった。恭仁京は当初から有限の宮都であった――⁽¹⁰⁾聖武の構想する、ある事業のための。

その聖武の事業とは何であったか。

ここで注目されるのが、造営工事が始まってほぼ一年、天平十四年二月、恭仁京の東北道を開いていることである。近江国甲賀郡に通じる道であるが、やがてその甲賀の地、紫香楽村で行なわれる大仏造立のための準備作業であったことはいうまでもない。だとすれば恭仁京の造営そのものも、紫香楽村における大仏造立のための拠点作りであったと考えられて来よう。のちにその紫香楽での造仏事業が挫折するや、ただちに恭仁京棄都＝平城還都が実現されたことから判断しても、このことは明らかである。なお恭仁の地が選ばれたのは、『万葉集』にも詠われた泉（木津）に近かったからで、物資の陸揚地として、この地以外に最適な場所はなかったといっているであろう。⁽¹¹⁾

ところで紫香楽山中における大仏造立については、これまでさまざまな意見が出されているが、中国における龍門の大仏を手本にしたとする理解に従っておきたい。周知の通り龍門は長安（唐の都）の副都洛陽の郊外に位

置するところで、この洛陽と龍門の在り方を模倣して、平城京を離れた紫香樂の地が求められたものと思う。天平十三年三月に下された国分寺建立の詔の中で、「其造塔之寺、兼為_二国華_一、必挾_二好処_一」として、その好所にあげられた条件は、「近人則不_レ欲_二薰鼻所_一及、遠人則不_レ欲_二勞_レ衆婦集_一」というものであった。宮都と適当な距離にあるのが好所で、遠くても近くてもいけないのである。むろん大仏造立の条件とは異なるが、この国分寺の構想が大仏造立に連なる事業であったことを考えると、無関係であったともいえない。平城京(恭仁京)から三十キロ離れた紫香樂は一、二日行程の距離であり、大仏建立のための「好所」であったといつてよい。造立地を求めるのが東国行幸の目的であったとか、恭仁京造営中に東北の紫香樂をみつけたといった理解もあるが、周知のように聖武自身の述懐によれば、大仏造立の発願は天平十二年二月、河内智識寺に行幸した折、本尊の廬舎那仏を礼拝したのがきっかけで、自分もいつかこの像を奉造しようと誓ったといわれている。広嗣の乱の起こる七カ月前のことであるから、造立の構想も、その場所の点定も、平城京出發時にはすでに固まっていたとみるべきである。

(2) 知識結の行幸

それにしても大仏造立を目的としながら、なぜ東国行幸といった人間の移動が行なわれ、さらには恭仁京造(遷)都という大事業が必要とされたのであろうか。今日の合理的考えからすると、時間的・経済的な浪費を重ねているとしかいいようがないが、聖武天皇にとっては決して浪費ではなかったとみななければならない。

そのことに関連してわたくしは、天平十五年(七四三)十月に下された大仏造立の詔に留意したい。有名な詔文ではあるが、改めて掲げると、それは次のようなものであった。

(前略) 粵以下天平十五年歲次_二癸未_一十月十五日_一、發_二菩薩大願_一奉_レ造_二廬舎那仏金銅像_一一軀、_二尽_二国銅_一而鎔_レ象、

削^ニ大山^ニ以構^レ堂、広及^ニ法界^一、為^ニ朕知識^一、遂使^下同蒙利益共致^中菩提^上、夫有^ニ天下之富^一者朕也、有^ニ天下之勢^一者朕也、以^ニ此富勢^一造^ニ此尊像^一、事也易^レ成、心也難^レ至、但恐徒有^レ勞^レ人、無^ニ能感^レ聖、或生^ニ誹謗^一、反墮^ニ罪辜^一、是故預^ニ知識^一者、懇発^ニ至誠^一、各招^ニ介福^一、宜^下毎^レ日^ニ三^ニ拜^一廬舎那仏、自当存^レ念、各造^中廬舎那仏^上也、如更有^レ人情願^下持^ニ一技草^一一把土^ニ助^中造像^上者、恣聴^レ之、(後略)

すなわち、このたび菩薩の大願を発してルシヤナ仏を奉造することにしたのは、万人がひとしく自分(＝聖武)の知識となつて結縁することにより、ともに利益をこうむり、ともども菩提にいたりたいからである。天下の富勢を持つのはこの自分であるから、自分が尊像を造るのは難しいことではない。しかしそれでは心のこもった真の造仏とはいえず、却つて人の誇りを招きかねない。だから(そういう趣旨に賛同して)知識に預ろうとする人々は、至誠をもって協力してほしい。それを望むなら、一枝の草でも、一把の土でも協力することを許そう、というものである。

これは、聖武が広く天下に呼びかけて造仏事業への知識結を募⁽¹³⁾つたものである。もっとも、一般には、その中にみる「有^ニ天下之富^一者朕也、有^ニ天下之勢^一者朕也」という言葉に、所詮は権力者の恣意にすぎない、といった理解がなされることが多いが、それでは聖武の真意を汲み取ったことにはならないであろう。ここで聖武が言おうとしているのは、人々の協力＝知識結を通じて造仏事業の意味を理解させ、いわば同朋意識を共有させようとしたことにある。そのためには、たとえ自分に天下の富勢があり、それによって事業を行なっても、それでは仏に魂を込めたことにはならないのだ、ということを強調するために、ことさら「天下の富勢……」と誇張したのである。河内知識寺で発願したという述懐に偽りはないと思われる。そしてこの詔に認められる聖武の意図は、東国行幸の趣旨にそのまま通じるものであつたろう。

東国行幸は、壬申の乱の追体験、換言すれば非日常の状況の中で、精神的な昂揚をはかることが目的であつた。

それによって同行の貴族・官人と共通の意識を持ち、精神的紐帯を強めることであった。とすれば、そうした貴族・官人との一体感の共有は、聖武のめざす知識結そのものであったとはいえないか。東国行幸は、聖武の主導による一種の知識結の行動であったと思う。関宮（十日間）や赤坂頓宮（九日間）での長い滞在は、広嗣事件が解決したにもかかわらず続行する行幸の趣旨について、貴族や官人たちに理解と同意を得るために費やされたものではなからうか。客観的には浪費としか思えない東国行幸であるが、聖武にとっては、そのあとに想定している事業の展開上、不可欠の手続きであったのだと思う。

(3) 知識結方式の「功罪」

さて、東国行幸とそれに続く恭仁京造営は、知識結によって大仏造立を実現するための手続きであったというのが、これまでの考察の趣旨である。聖武にとって、平城京へ戻っての造仏は全く意味のないものであった。それが、東国行幸の帰結として造仏事業を完遂するということであり、それを聖武は、鎮護国家のための大事業として行なおうとしているわけであった。そのために東国行幸という形で精神的昂揚がはかれたのであり、したがって日常的な次元——平城京に戻ってはならなかったのである。平城京の至近の場所でありながら、あえて恭仁京が造営された所以である。

ここが、狭いとはいえ交通の便利さにおいては平城京に勝っており、造仏事業の拠点として最適地であったことについては先述したが、この恭仁京の造営に関して留意されるのが、遷御して九カ月後の天平十三年九月に至り、智努王と巨勢奈氏麻呂の二人が造宮卿に任命され、ようやく組織的な事業が開始されていることである。

『続日本紀』に記す造営状況から判断するに、この九カ月間は新宮の造営と新京の条件づくりに専念されたもの⁽¹⁴⁾のようで、おそらく諸兄が中心になって推進したのであろう。ちなみに造宮卿が任命された日、勅が下され、

「以三京都新遷二大_ニ赦天下_ニ」すと発表され、広嗣の乱の縁坐者を含めて免罪され、また「大養徳・伊賀・伊勢・美濃・近江・山背等国供_ニ奉行宮_ノ之郡、勿_レ收_ニ今年之調_ニ」として、東国行幸の路次の郡に対して慰労している。他の例からすれば、これが恭仁遷都の詔とみていいのかも知れない。ただしこれも遷都の習いで、造都事業はこれ以後本格化している。造宮卿が任命された翌九日には早速、「為_レ供_ニ造宮_ニ、差_ニ発大養徳・河内・摂津・山背、四国役夫五千五百人_ニ」として四畿内から役夫を徴発しており、これが基本的な造都体制であった。三日後の十二日には百姓に宅地班給し、賀世山を境に左・右京が定められ、十一月に至って「大養徳恭仁京」との宮号も定められている。

ところでこの恭仁京の造営でもう一つ注目されるのが、周知のように、行基が登用されたことにある。すなわち天平十三年の七月から十一月にかけて行なわれた賀世山の東河の造橋は、行基に率いられた優婆塞らによるものと考えられている。それまで民衆を妖惑するものとして弾圧の対象であった行基が、ここに來て認められ、ついには大僧正まで贈られることになるが（『続日本紀』天平十七年正月二十一日条）、これは聖武の提唱する知識結の趣旨に合致する行為だったからにはかならない。

そのことに関連してわたくしが興味深く思うのは、天平十四年（七四二）、造宮録秦忌寸嶋麻呂が宮城の垣を造った功で正八位下より一挙に従四位下に叙せられ、あわせて太秦公の姓を与えられていることである。⁽¹⁵⁾ 恭仁京の造営に個人的・私的協力が求められていたことを示しているが、これも優婆塞らの労力提供に共通する一種の知識結といつてよいであろう。地方豪族の財力や労力の貢進は、たとえば長岡造都の折、山背国葛野郡の人外正八位下秦忌寸足長が造営に功あるをもって従五位上を授けられ（延暦三年十二月）、従七位上大（太）秦公宅守が太政官院の垣を築いた功で従五位下を授けられている（同四年八月）。また平安造都では秦氏の事例はみられないものの越前人船木直安麻呂が、亡父従五位下馬養の遺志をうけて米千石を造宮料として進めたというように、このの

ちしばしばみられるものである。恭仁京の場合、秦忌寸嶋麻呂は造宮省の官人であったから、関わりの深さが考えられるが、造都事業において特定の氏族なり個人の財力提供が恭仁京を初出とするのはきわめて重要な意味をもつ。なぜなら造都における個人的・私的協力はどの時代にもみられるといったものでなく、恭仁京ではじめて採用された方式であり、それは知識結による造仏事業の一環をなすものであったからである。

聖武はこの事業を推進するに当り、通常の方式である造宮機関による役人や物質の調達方式だけでなく、この知識結方式を併用し、場合によってはそちらに期待をかけることが大きかったのではないか、と思う。それが、工事が始まって九カ月後の造宮卿の任命——遅きにすぎる推進機関の組織化となったのではないか。そのために通常の方式による造都事業を不十分なものとし、その停滞をもたらしたのではなからうか。そのことを証する確かな材料はないが、わたくしにはそのように思われて仕方がない。そしてこの初期段階、すなわち恭仁京造都におけるこの遅れが、結局命とりとなったように思われる。

(4) 「大和」恭仁京

さて、これまで縷々述べてきたように、大仏造立の拠点として求められたのが恭仁京であったが、しかしその恭仁京の造営は決して平城京の放棄、決別を意味するものではなかった。そのことは天平十七年五月の平城還都までの間、平城京に留守官が常置されていたことが何よりの証左である。また恭仁遷御後間もない天平十三年閏三月、「自_レ今以後、五位以上不_レ得_二任意住_二於平城_一、如有_二事故_一、_二應須_二退帰_一、被_二賜官符_一、然後聽之、其見_二在平城_一者、限_二今日内_一悉皆催發、自余散在_二他所_一者亦宜_二急追_二」¹という禁足令が出されたのも、そのことを物語る。恭仁遷都の間、平城京は依然皇都として残されていたからこそ強制的に禁足する必要があったのである。なお禁足令が五位以上を対象とするものであったところにも、恭仁京が本格的な遷都でなかったことを示している。

その点で天平十三年十一月二十一日、聖武天皇が右大臣諸兄の奏上に応え、この恭仁宮の号を「大養徳恭仁大宮」としたという『続日本紀』の記載（前掲）はまことに意味深い。「山背の恭仁の都は春されば……」（『万葉集』境部老麻呂）と詠まれたように、恭仁の地が山背であることは周知の事実であるにもかかわらず、あえて大和（大養徳）の恭仁と号した背景には政治的な意味が込められていたように思われる。「大養徳恭仁大宮」の呼称には、奈良坂を越え木津川を渡ればすぐそこに恭仁京があるという地理的な親近感もあったに違いないが、大和のミヤコであると称することで、平城京体制から決定的に離脱したのではないのということを表明したものとみたい。重ねていえば恭仁京は、平城京には戻らずに造仏事業を行なうための拠点であった。あえて「大養徳」を冠したところに、人々の反発を抑えるための巧妙な配慮がうかがわれる。

なお恭仁京については、難波京のような平城京の陪都・副都であったという理解もなされているが、わたくしには従えない。難波京は平城京の外港であり、平城京を補完する機能をもつ（それがすなわち陪都）が、先述来の意図で造営された恭仁京を平城京の陪都とみるのは適当でない。

しかし恭仁京は、本格的な宮都ではないとしても、天皇以下が移った以上、最低限の機能が用意されたことはいうまでもない。伊勢神宮及び七道諸社に奉幣して遷都を奉告し（天平十三年正月十一日）、平城京の兵器（同閏三月）や東西市人を新京に移した（同八月）のもそれである。ただし都市造成そのものはそれほど計画的になされたとは思えない。天平十三年九月、賀世山西道を左右兩京の境界にしたというが、実際の地勢をみても不整形は免かれず、京城なども明確に定められたわけではなかったろう。⁽¹⁶⁾ 恭仁京造営の目的からすれば、狭い土地を有効利用し、平城宮から移建した大極殿などの殿舎を中心に必要最小限の官衙が建てられればよかったのである。

三 難波での「定京」

(1) 恭仁造都の停止

ところが恭仁京の造営は、着手して三年、天平十五年（七四三）十二月二十六日に至って停止された。その間の経緯について『続日本紀』は次のように記す。

初壞_ニ平城大極殿并歩廊_一、遷_ニ造於恭仁宮_一四_三年於茲_二、其功纔畢矣、用度所_レ費、不_レ可_ニ勝計_一、至_レ是更造_ニ紫香樂宮_一、仍停_ニ恭仁宮造作_一焉、

一読して明らかなように、造営に莫大な費用のかかったことがその理由である。しかしそのあと「是に至って紫香樂宮を造る、仍って恭仁宮の造作を停む」とあるように、恭仁京造都の中止は、実は紫香樂宮の造営にかかわる措置であったことが知られる。じじつ聖武は前年八月十一日、造宮卿智努王・同輔高岡連河内ら四人を造離宮司に任命し、近江国甲賀郡で紫香樂宮の造営をはじめている。恭仁京の造宮官の一部が派遣されているわけで、ここにも、紫香樂での事業が恭仁京造営の一環であったことが示されている。聖武は同八月二十七日、知太政官事鈴鹿王・左大弁巨勢奈旦（氏）麻呂・右大弁紀飯麻呂を恭仁京の留守官、摂津大夫大伴牛養・民部卿藤原仲麻呂を平城京の留守官となし、紫香樂宮に行幸している。ほぼ一週間滞在したのち九月四日に恭仁に戻っているが、これを皮切りに同年十二月、翌十五年四月と紫香樂への行幸を重ねている。滞在はいずれも数日から十日程度であったが、十五年七月の場合は三カ月余に及んでいる（七月二十六日～十一月二日）。紫香樂での事業の本格化が感取されるが、この間（十月十五日）大仏造立の詔を紫香樂で發布、翌十六日には東海・東北・北陸三道二十五箇国の調庸を紫香樂宮へ貢進せしめることとし、その上で同十九日、天皇は廬舎那仏を造る寺地を開いている。これには行基も弟子を率いて参加している。このようにみると、その後打ち出された先の恭仁京造営の停止

|| 紫香樂宮の造営が、大仏造立のための現地におけるいわば足場づくりであったことは明らかであろう。

ところが年が明けて天平十六年正月、聖武天皇が突如として装束次第司を任命するなど難波行幸の準備に着手しているのは、いかなることか。しかも翌閏正月一日には百官が召集され、「恭仁・難波二京何定為_レ都、各言_ニ其志_一」と問うている。これに対する官人たちの答えは、「陳_ニ恭仁京便宜_一者、五位已上廿四人、六位已下百五十七人、陳_ニ難波京便宜_一者、五位已上廿三人、六位已下一百三十人」であったという。この意見聴取はそれから三日後、市人にも行なわれ、巨勢奈豆麻呂・藤原仲麻呂が遣わされ、定京のことを問うている。先の官人の場合は恭仁京派がわずかに優勢であったのに対し、市人の場合は「市人皆願_テ以_ニ恭仁京_一為_ニ都、但有_テ願_ニ難波_一者一人、願_ニ平城_一者一人」といい、恭仁京希望者が圧倒的であった。市人には店舗や物資を移す煩わしさがあったのであろう。この数字は少なくとも当時恭仁京にいた官人（市人の人数は不詳）の数を示すものとして興味深いがいずれにしろその過半数が恭仁京をよしとしたわけである。意見聴取の真意がなんであれ、難波京は否定されたはずであった。しかるに一週間後の閏正月十一日、聖武天皇は鈴鹿王・仲麻呂を留守官に定めて難波京に向っている。一カ月ほど前、恭仁京の造営の停止と紫香樂宮の造営の開始を決定したばかりのことであり、しかも先の「定京」論議の結果を無視しての難波遷幸であった。遷都に関する意見聴取は先例がないが、それにしてもこれでは何のための意見聴取であったのだろうか。

結果はともかく、この異例な意見聴取が難波遷都の合意を取りつけようとしたものであったことは間違いない。計画では難波宮を願う者が大半とみなし、いわば世論に添う形で遷都の実現を目論んでいたところ、期待に反して逆の結果が出たというものであろう。そこで世論を無視しても遷幸を強行したものと考えられる。平城京からさらに離れることは抵抗が予想されたに違いない。そこで至近距離の恭仁を「大養徳恭仁大宮」と号したのと同じ配慮から異例の意見聴取が行なわれたのであろう。換言すれば遷都に対する衆議の形成をはかろうとしたもの

であった。しかし結果は裏目に出た。難波遷都に対する反対は、恭仁京や紫香樂にある人びとの間に不満が鬱積していたことを示している。しかも難波への遷都は、事態がうまく回転しなければ、紫香樂での造仏事業を否定しかねないものであった。そのあたりの情勢判断の甘さは覆いがたい。

聖武の難波遷幸にともない、二月に入るや、恭仁宮にあった厩鈴や内外印を難波宮に取り寄せ、諸司・朝集使からも召した上（乙未）、あらためて恭仁宮および平城宮留守官を任命（二日）、さらには高御座や大楯が恭仁京から移され、同じく兵庫の器械も運ばれている（二十日）。皇都としての条件づくりが行なわれたわけで、恭仁京百姓たちに対しても願う者には難波への移住を許している（二十一日）。このたびは禁足令は出されなかったようだ。それどころか、のちの事実に照らして、この時難波に移ったのは橘諸兄らごく一部の人に限られ、多くは恭仁京にとどまったとみられる。しかし二十六日には勅が下され、「左大臣宣^レ勅云、今以^ニ難波宮^一定為^ニ皇都^一、宜^下知^ニ此状^一、京戸百姓任^レ意往来^ト」として難波が皇都と定められている。

ところが聖武天皇は、この皇都宣言が出される二日前の二十四日、またまたその難波京を去って紫香樂宮に赴いている。翌天平十七年の元旦はその紫香樂宮で五位以上に賜宴しており、天皇はこの年五月に平城へ還都するまで、紫香樂宮を離れることはなかったのである。そんなわけで天皇が難波に滞在したのはわずか四十日に過ぎない。先の勅が天皇不在の皇都宣言であったことや、『続日本紀』に紫香樂を「新京」と記載していることから、難波に残った元正上皇⁽¹⁷⁾と諸兄と紫香樂の聖武・光明皇后⁽¹⁷⁾と仲麻呂との対立、いわば二所朝廷が現出したとみるむきもあるが、にわかに賛成はできない。これは聖武の新しい在所を「新京」と称したまでであって、紫香樂へは、恭仁京からも難波京からも「遷都」したわけではないし、不在中の皇都宣言は諸兄に勅を託したまでのことであつた。

しかしそれにしても恭仁京の造営をやめ、紫香樂宮の造営を打ち出した上での難波遷都の強行、しかもその難

波にも一時期しか滞在せずに紫香楽に赴いている——これだけから判断すれば、聖武の行動は不可解としかいいようがないが、これについてわたくしは、以下のように考える。

平城遷都を抑止しつつ大仏造立の間の宮都とした恭仁京の造営を中止すれば、それが引き金となって平城遷都への動きが生じないとも限らない。つまり難波遷都は、そうした恭仁京の造営中止を機に生ずる政治変動——恭仁京棄都⇨平城京遷都への気運を抑えることに真意があったのではないか。その限りでは遷都を避けつつ、大仏鑄造を進めるという当初の計画に添う措置であったと考える。その点で、既存の建物や施設が利用できる難波は恰好の場所であつたらう。したがってまた、この遷都は、天皇の造像にかける固い決意の表明でもあったといえる。

ただしわたくしは、この難波遷都は平城離京時の構想にはなかったものと考ええる。恭仁京造都の中止にともなうて急抛浮上してきた構想というか措置ではなかったか。したがって難波遷都は、聖武本来の意図からはずれるものであり、このあたりから紫香楽での造仏事業は大きく挫折しはじめている、というのがわたくしの認識である。難波遷都もそこに紫香楽へ先行した聖武の姿には焦躁感すら感取できよう。しかしその間に起こった事件は、造像にかける聖武の決意をいっそう増幅させる一方、事態を危機的な段階に進めることになった。

(2) 安積親王の死

事件とは、難波遷都の行幸に扈従していた安積親王が、その途次、「脚病」によって河内の桜井頓宮から恭仁宮に戻り、二日後の閏正月十三日に死亡したことである。十七歳の若さであった。

周知の通り親王は聖武の夫人県犬養広刀自を母とし、光明皇后所生の基王が夭逝した神亀五年（七二八）頃生まれに生きている。すでに天平十年（七三八）、阿倍内親王が皇太子となっていたが、安積親王が聖武の唯一の皇子で

ある以上、依然有力な皇位継承の有資格者であったことに変わりはない。そこでの急死であるから、古来安積親王の死には疑惑が抱かれ、藤原氏によって暗殺されたとみる意見が強い⁽¹⁸⁾。その論拠としてあげられるのが、一つは、恭仁京に留守官として残っていた藤原仲麻呂が、親王没後の二月二日になされた人事で、一人だけ留守官から解任されていることで、これを仲麻呂が暗殺に関与したことに對する処罰とみるのである。二つは、『万葉集』には親王の死を傷む大伴家持の歌を収めるが、そうした歌の作られた時期から判断して、親王は死ぬ直前まで元氣であったとみてこれを暗殺説の根拠とする。

しかし仲麻呂処罰説、つまり安積親王暗殺説の難点は、その後仲麻呂の身柄が拘束された氣配が全くないことである。それどころか仲麻呂は、翌天平十七年(七四五)正月、紫香樂宮で行なわれた叙位で従四位上より一挙に二階級特進して正四位上となり、さらに同年九月には近江守に任じられている。これは他の例からしても、仲麻呂が下手人であれば有り得ないことで、親王の死は予期せざる事態であったかもしれないが、決して不自然なものではなかったと考える。

恭仁宮の留守官を解かれた仲麻呂は、紫香樂宮での叙位が示すように、当時紫香樂宮にいた聖武天皇のもとに赴き、これに従ったとみられる。そしてこれを機に仲麻呂は、聖武天皇の造仏事業を推進するためその補佐に当たったのではなからうか。右にみた仲麻呂の二階級昇進も、このことに對する勸賞の意味があったと思われる。留守官を解かれた仲麻呂が元正上皇や橘諸兄らのいる難波宮へ赴いた可能性は少ないと思う。

仲麻呂については『続日本紀』天平宝字八年(七六四)九月十八日条の薨伝に、「率性聡敏、略涉書記、從大納言阿倍少麻呂、学_レ尤精其術」とあり、算術にも精通していたというが、土地測量や天文計数などの理論的・数学的才覚は、恭仁京時代に発揮されたであろう。たとえば天平十三年(七四一)九月、木工頭智努王・散位高丘連河内・主税頭文忌寸黒麻呂ら三人とともに、恭仁京における庶民の宅地班給や左右兩京の設定に当

ている。また先の難波遷都の折には中納言巨勢奈氏麻呂とともに市に派遣され、定京のことにも当たっている。むしろこうした任務は、民部卿や左京大夫といった仲麻呂の当時の職責によるものであったろうが、仲麻呂以上の適任者はそれほど多くはなかったはずである。しかも仲麻呂は、それらを処理していく過程で、しだいにその能力を認められていったようにみえる。天平十五年五月には、参議に任じられている。そうした仲麻呂を、安積親王の死を契機に造仏への傾斜をさらに強めた聖武天皇が紫香樂に呼び寄せたとみるのは、決して誤ってはいないと思う。

ちなみに留守官ということに関して付言すれば、天平十四年八月、始めての紫香樂行幸の時、恭仁京の留守には鈴鹿王（知太政官事）・巨勢奈氏麻呂（左大弁）・紀飯麻呂（右大弁）が、平城京の留守には大伴牛養（摂津大夫）・藤原仲麻呂（民部卿）があてられ、行幸には諸兄や藤原豊成らが随行した。また同年十二月の紫香樂行幸の時も大伴牛養を除く先の四人が留守官となり、諸兄らが従った。ところが翌十五年に入ると、四月の時は諸兄（右大臣）・奈氏麻呂・飯麻呂・多治比木人らが留守官に任じられ、また七月の行幸では諸兄・鈴鹿王・奈氏麻呂の三人が留守官となっていることから、この二回の紫香樂行幸（このうち後者が三カ月余に及んだ）には諸兄にかわって仲麻呂が同行したと考えられている。諸兄を恭仁に残した事情については明らかでないが、恭仁宮と紫香樂宮を並行して造営していく上での役割分担（恭仁京＝諸兄、紫香樂宮＝仲麻呂）といったことと関係あるかも知れない。おそらく紫香樂宮造営が具体化し、造仏事業が実務的な段階に入ったことで、仲麻呂が起用されるようになったものではなからうか。

恭仁京遷都に始まる紫香樂宮の造営、大仏造立、難波遷都といったためぐるしい政治動向を、橘氏と藤原氏の対立抗争の軌跡として理解することが多いが、にわかに賛成できない。しかし両氏の対立といえるものが明らかになるのは、天平十五年五月、仲麻呂が参議に任じられた頃からで、それは紫香樂における聖武天皇の造仏に協

力し、着々と実績をあげていく仲麻呂と、（恭仁棄都のあと）難波宮に残り、いわば留守官として無為に日々を過ごすことを余儀なくされた諸兄との間に生じたものとみてよいであろう。のちのことになるが、天平宝字元年（七五七）七月、仲麻呂の専權に対して乱を起こそうとして捕まった橘奈良麻呂は、仲麻呂の無道に対して「造東大寺、人民苦辛、氏々人等亦是為憂」と非難したが、「造寺元起自汝父時、今導人憂、其言不似」——責任は橘氏にもあると切り返され、返す言葉もなかったという。この時点（奈良に戻っていた）では大仏の鑄造、東大寺の造営を推進したのが仲麻呂であったことは明らかであるが、この奈良麻呂への反論は、当初橘氏（諸兄）もかわっていた造仏事業の主体が、ある時期から藤原氏（仲麻呂）に移ったことを示唆するものとして留意される。その分岐点は、両者が難波（諸兄）と紫香樂（仲麻呂）にわかれていた時期のことであったように思われる。

四 紫香樂造仏の放棄

さて天平十六年（七四四）二月、あわただしく難波を去った聖武天皇は、紫香樂の地で鋭意造仏に専念したとみられる。十一日には早くも甲賀寺に仏体の骨柱が建てられるまでになっていた。聖武自らがその縄を引いたというが、この儀式には、それまで難波宮に留まっていた元正上皇も参列している。聖武天皇は、翌十七年の正月も紫香樂宮で迎えている。

しかし四月に入る頃から紫香樂宮周辺の山々で火災が続発する。自然発火の類いかそれとも放火か、真相は明らかでないが、社会的な不安や動揺のあったことを暗示している。そうした状況の中で天皇は紫香樂での造仏を断念する。五月に入り、再び定京に関する世論調査が行なわれた。二日は太政官が諸司官人を召集して下問、「以何処為京」と、四日には大膳大夫栗栖王が平城京の薬師寺に出向き、四大寺（大安・薬師・元興・興福寺）の衆僧にも同じことを尋ねている。その結果は、いずれの場合も、「皆曰、可都平城」、すなわち全員一致し

ての平城遷都希望であった。今回は平城京に残っていた僧侶たちにも尋ねているところに、奈良の寺院勢力を無視できなかった事情が推測されよう。これは紫香樂での造仏事業の挫折とも無関係ではなかったはずである。恭仁京の造営停止から一年四カ月後のことであった。

かくして聖武天皇は、このたびは人々の意向に従う形で平城京へ戻った。五月五日、紫香樂宮を出発した天皇は、いったん恭仁京に立寄っているが、『続日本紀』によれば翌六日、車駕が恭仁京の泉橋にさしかかったところ、「于_レ時百姓遙望_三車駕_二拜_三謁道左_一、共称_三万歳_二」したという。そして十日、「是日、恭仁京市人徙_三於平城_一、曉夜争行、相接無_レ絶」とある（結局、市人は難波京へは移っていなかったのである）。天皇が平城京に戻ったのは翌十一日のことであった。

難波京にいた諸兄たちがどの道筋を経て平城京へ戻ったか明らかでないが、おそらく聖武天皇が恭仁京に滞在中これに合流し、ここに留まっていた官人たちと一緒に平城京に戻ったものである。

平城京に戻った天皇は中宮院を在所に、旧皇后宮を宮寺とし、諸司百官もおのおの本司に帰った。大極殿など重要な建物は恭仁京に遷されたため存在しなかったが、むろん他の建物は残っていたのである。六月に入って宮門に大楯も立てられ、十二月には恭仁京の兵器も平城に戻された。これをもって「大養徳恭仁大宮」は名実ともにその生命を終え、大仏造立を終局の目的とする「関東行幸」も終焉したのである。

聖武天皇による紫香樂での大仏鑄造事業はこうして放棄され、「彷徨五年」の歳月は何ひとつ成果をあげることなく終わった。これ以後、造仏は場所を大和の金光明寺（東大寺）に移して再開されることになる。ここは聖武の第一皇子基王の菩提寺で、ある意味では造仏事業が私的性格を帯びることになったといってもよい。しかし紫香樂での造像にかけた天皇の熱意を思うとき、平城京へ戻ってからどれほどの情熱を持ち続けられたであろう

か、わたくしは疑問に思う。天平十六年（七四四）正月以後、在位中でありながら、元旦の朝賀が行なわれなかったことが示すように、以後の聖武には政治に対する意欲すらみられなくなる。天平勝宝元年（七四九）七月、大仏開眼供養を待たずして譲位したのも、相応の理由あつてのものであらうが、この事業に対する天皇の意欲はすでに失われていたといつても間違いないであらう。還都以後の造仏事業が、聖武天皇を援けた仲麻呂の推進するところであつたことは先に述べた通りである。

東国行幸にはじまり、恭仁京造都（難波京遷都）を進めながらの紫香樂での造仏事業は、こうして挫折し瓦解した。何故か。ひとことでいえば、やはりあまりにもまわり道をしたということであらう。東国行幸を通じての知識結意識の形成は、あまりにも理想主義的であつたし、造仏のための拠点づくりである恭仁京造宮に時間（物資と財力）をとりすぎた。それに、詳しい実態はわからないが、造宮・造仏に採用した知識結方式は、必らずしも十分な成果をあげなかったとみられる。五年間の後半における聖武の行動をみると、大幅に遅れた事業の実現のために、半ば狂気になったとすら思えるふしがある。難波遷都以後とくにそれが著しい。ようやく紫香樂の地で廬舎那大仏造立にこぎつけたものの、時すでに遅く、貴族官人あるいは寺院勢力の不満も限界に達していた。

こうして聖武天皇は造仏を断念した。平城京へ戻ってからの聖武天皇は、いわばもぬけの殻であつた。

天平勝宝四年（七五二）四月九日、大仏開眼供養が盛大に行なわれた。「仏法東帰、齋会之儀、未嘗有_ニ如此之盛_一也」とは、この日のことを記す『続日本紀』の記事であるが、娘の孝謙女帝らとこれに臨んだ聖武上皇の胸中に去来するものは何であつたらうか。

（１） 広嗣の乱については、横田健一「天平十二年藤原広嗣の乱の一考察」（『白鳳天平の世界』所収）や北山茂夫「七四〇年の藤原広嗣の反乱」（『日本古代政治史の研究』所収）など参照。

（２） 『続日本紀』では伊勢国菟志郡河口頓宮が「関宮」と命名されたのを当地に到着した日、天平十二年（七四〇）十一月

二日条に記すが、その命名は本文に述べたような経過で行なわれたものと思う。

(3) たとえば田井泰子「日本古代遷都論——恭仁京をめぐる——」(『寧楽史苑』27号)など。

(4) 壬申の乱における大海人皇子の行程については、北村稔「壬申の乱地理新考(一)(二)(三)」(『史迹と美術』56輯8~10)に詳しい。

(5) 大海人皇子は名張から北上している。

(6) 聖武はこれ以前、広嗣の乱が起こるやただちに治部卿三原王等を伊勢神宮に派遣し、奉幣している(『統日本紀』天平十二年九月十一日条)。

(7) 大和岩雄「柿本人麻呂の『神』」(『東アジアの古代文化』40)、北村稔、註(4)前掲論文。

(8) 『統日本紀』によれば天平十二年十一月二十一日、鈴鹿郡赤坂頓宮で叙位が行なわれ、行幸に供奉した者の顔ぶれが知られる。むろんそれがすべてであったわけではなからうが、その中で塩焼王・道祖王(新田部親王の子)、智努王(長親王の子)、長田王・高安王(長親王の孫)、守部王(舍人親王の子)、安宿王・黄文王・山背王(長屋王の子)など天武の皇親の名が比較的多いのも、この行幸の目的に照らして留意されるところである。

(9) 恭仁京に関しては『加茂町史』(古代・中世編)の巻末に参考文献一覧が掲載されているので参照。

(10) 周知の通り、恭仁京には平城京寺院が移転されなかったが、そのことも恭仁京が一時的な都として造営されたことの傍証となろう。

(11) 恭仁の地が交通の要衝であったことについては田井泰子、註(3)前掲論文で詳しく論じられている。

(12) 横田健一「安積親王の死とその前後」(『白鳳天平の世界』所収)参照。

(13) 知識については中井真孝「古代における共同体と仏教——とくに『知識』を中心に——」(日本宗教史研究会編『共同体と宗教』所収)、竹内理三「上代における知識に就て」(『史学雑誌』42・9)など参照。

(14) 天平十三年の元旦、聖武は始めて恭仁宮に出御して朝賀を受け、七月には元正上皇が新宮に移御している。この間平城宮の兵器が運ばれ、禁足令も出された。また八月には市も移されている。

(15) 『統日本紀』天平十四年(七四二)正月七日条に、「天皇幸三城北苑、宴五位已上、賜祿有差、特給造宮卿正四位下智努王東緇六十疋・綿三百屯、以勸造宮殿也」とある。造宮録秦嶋麻呂の協力を考え合わせると、この時の褒賞に智努王の個人的奉仕が前提にあったと考えられなくもないが、文意から判断すると、ここでは造宮卿という職責に対する勸

賞とみた方がいいだろう。

(16) 恭仁京については足利健亮氏が「恭仁京域の復原」(『社会科学論集』4・5合併号)において独自の見解を発表されている。

(17) 直木孝次郎「天平十六年の難波遷都をめぐって―元正太上天皇と光明皇后」(『飛鳥奈良時代の研究』所収)。

(18) 横田健一、註(12)前掲論文。なお、林陸朗氏は横田説を否定はされないが、疑義を提出されている「奈良朝後期宮廷の暗雲―――――」(『上代政治社会の研究』所収)。

(19) 恭仁京の造宮卿で紫香樂宮の造営(造離宮司)にも当った智努王が、のち天平勝宝五年(七五三)七月、檀主となり知識によって仏足石を作らせているのは(『寧楽遺文』)、大仏造立の体験によるものであろう。造仏事業が与えた影響を考える上で興味深い。なおこの智努王は長親王の子で天武天皇の孫にあたり、基王の菩提寺金鐘寺(東大寺の前身)山房の造立にもたずさわった人物である。

三章 孝謙女帝の皇統意識

はじめに

聖武天皇の皇女高野天皇こと孝謙（称徳）女帝は、神護景雲四年（七七〇）八月、平城宮の西宮寢殿でその五十三年の生涯を閉じている。父聖武から体力の衰えを理由に、「法のまにまに」皇位を「朕の子の王」に授けるとして、位を承けたのが天平勝宝元年（七四九）七月のこと、以来二十一年、その間一度は位を退いたものの、あえて淳仁天皇を廃して重祚するという希有の体験も経ている。しかし未婚のままで皇嗣のなかったことが、この女帝の時代に、皇位継承をめぐる諸矛盾を一挙に噴出させることとなった。

その一は、何よりもまず女帝の時代が終焉したことである。六世紀末の推古女帝以来、皇極（斉明）・持統・元明・元正を経て孝謙（称徳）に及んだ六人・八代の女帝が、古代では、これを最後に再び登場することはない。女帝の時代の終焉は、この時期が皇位継承の上で重要な転換期であったことを思わせる。

その二は、孝謙を最後に、いうところの天武系から天智系へと皇統が移行したことである。周知の通り奈良時代は、草壁の皇子文武からこの孝謙（称徳）まで、天武系皇統で推移したが、称徳のあと白壁王（光仁天皇）、ついで山部王（桓武天皇）の即位により天智系皇統が実現し、平安朝を迎えることになる。その意味でもこの時期は、

皇位継承上の転換期であり、称徳の死をもって、事実上奈良時代は終わったといつてよい。

このようにみると、孝謙（称徳）天皇の置かれた皇位継承上の立場なり意味はけつして小さくはないことを知るが、これまでの古代政治史研究においては、この天皇に言及することはあっても、積極的に取り上げることとはまずなかった。おそらくそれは、古代史研究の中ではほぼ定着している、孝謙は藤原仲麻呂や光明子の傀儡でしかなかったという観念——先入主によるところが大きい。加えて道鏡事件が、この天皇の存在をいよいよ矮小化したことも否めない。孝謙は政治的な混乱以外の何ものもたらさなかったというのが、この女帝に対する一般的な認識・評価であり、それがことさらにこの女帝を取り上げる意欲さえも起こさせなかった理由であろう。

しかし孝謙を抜きにした女帝論はありえないし、奈良時代における皇位継承問題を正しく把握できないというのが私見である。

孝謙は唯一立太子の上、即位した女帝であり、その限りでは男帝と変わるところがない。その点、他の女帝と同一視することはできないと思われる。にもかかわらず現実には、女帝であるがゆえのさまざまな制約を受け、その存在さえもが否定されてしまう。

皇位継承論の一環としての孝謙女帝論を進めるに当って重要な鍵（を握ると思われること）が二つある。一つは、孝謙は聖武時代の皇太子として即位したにもかかわらず、次の淳仁天皇もまた聖武の皇太子となっている事実である。廃太子や死去といった場合ならともかく、一人の天皇に二人の皇太子が用意されたというのははなはだ奇異であり、孝謙の立場を考える上で看過できないものがあるように思われる。寡聞にしてこの事実のもつ意味について論じた研究を知らないが、わたくしが孝謙を取り上げるに至った直接のきっかけがここにある。

その二は、草壁皇統という意識のもつ意味である。先にもふれたように、壬申の乱で勝利した天武天皇以来、一般には天武系皇統の時代と認識されている。ところが実際には、七世紀末の文武の即位をはじめ、皇位継承が

問題にされる時、つねに強調されたのは、不思議なことに天武天皇ではなく、もっぱら草壁皇子の嫡系ということであった。そこでわたくしはこれを草壁皇統（意識）と呼んでみたいが、⁽¹⁾なぜ皇統が天武天皇ではなく、即位しないままで没した草壁皇子のそれなのか、けだし検討に値しよう。

このことに関連してわたくしは、皇位の継承と皇統の意識とを区別して考える必要があるように思う。なぜなら孝謙は皇位の継承者ではあったが、皇統の継承者とはみなされていないからである。孝謙に限らない、元明・元正女帝も同様であった。⁽²⁾これはさきに指摘した孝謙以後にもう一人の皇太子が立てられた（大炊王＝淳仁天皇）こととも密接な関係があるに違いない。

このようにみてくると、孝謙天皇は奈良朝末期における皇位と皇統に関わる諸問題を一身に体现した天皇であり、しかもそれが女帝であるがゆえに増幅されたと考えられる。その意味で奈良朝から平安朝への移行は、最後の女帝となったこの孝謙の考察なしには不可能であるとさえいえると思う。

本稿では以上のことをふまえながら、孝謙の皇統意識を通して女帝の本質と皇統にかかわる諸問題を明らかにし、あわせて道鏡事件のもつ政治的意味や、県犬養氏の役割についてもあらたな理解を得たいと思う。

一 もう一人の皇太子

(1) 尊号一件

孝謙女帝を考察するに当り、ここでは淳仁天皇の動向を跡づけることから始めたい。というのもこの淳仁は「聖武天皇の皇太子」に立てられたという事実があり、そのことが孝謙の立場を理解する上でも深刻な関わりをもっていたと推測されるからである。

ところで聖武の皇太子は、詳しくいえば三人いた。第一の皇太子は、夭逝した基王である。光明子との間に生

まれたこの皇子は神龜四年（七二七）十一月、立太子されたが、周知のように翌年九月に没した。奈良朝後半における政治的混乱はすべてここから始まるといつてよいが、光明子の立后など、これに関わる問題についてはすでに取上げたので（一章）、ここでは省略にゆだねたい。

第二の皇太子が阿倍内親王で、天平十年（七三八）正月に立太子、天平勝宝元年（七四九）七月に即位した。孝謙女帝その人である。

第三の皇太子が大炊王こと淳仁天皇である。

ところがこの大炊王の立太子（天平宝字元年四月）は、まことに不自然なものであった。というのは孝謙天皇の在位中のことであり、しかも当の聖武上皇はすでに没して⁽³⁾いたからである。大炊王の立太子の意図やそれがもたらした波紋を確かめる必要がある。

大炊王Ⅱ淳仁が聖武の皇太子に立てられたことが知られるのは、淳仁が天平宝字三年（七五九）六月十六日、内安殿に出御し諸司の主典以上を集めて下した詔の中である。

帝御ニ内安殿ニ、喚ニ諸司主典已上ニ、詔曰、現神大八洲所知倭根子天皇詔旨止宣詔乎、親王王臣百官人等天下公民衆聞食宣、比来太皇太后御命以氏、朕爾語宣久、太政之始波、人心未レ定在可波、吾子為皇太子止定氏、先奉_レ昇於君位ニ畢氏、諸意静了奈牟後爾、傍上乎波宣牟止為天奈母、抑問氏在津流、然今波君坐氏、御_レ宇事日月重奴、是以先考追皇止為、親母大夫人止為、兄弟姉妹親王止為与止仰給夫貴岐御命乎頂受給利、欲備貴美懼知恐利氏、掛畏我皇聖太上天皇御所爾奏給倍波奏世止教宣久、朕一人乎昇賜比治賜部流厚恩乎母、朕世爾波酬尽奉事難之、生子乃八十都岐爾自、仕奉報倍久在良之止、夜昼恐麻里侍乎、伊夜益須益爾朕私父母波良何良爾至麻氏爾、可_レ在状任止上賜比治賜夫事甚恐自、受賜事不_レ得止奏世止宣夫、朕又念久、前聖武天皇乃皇太子定賜比氏、天日嗣高御座乃坐爾昇賜物乎、伊何爾可恐久私父母兄弟爾及事得牟、甚恐自、進母不_レ知退母不_レ知止伊奈備奏、雖_レ然多比重氏宣久、

吾加久不_レ申成奈波、敢_レ氏申人者不_レ在、凡人子乃去_レ禍蒙_レ福麻久欲_レ為_レ流事波、為_レ親爾止奈利、此大福乎取惣持氏、親王爾送奉止教部宣夫御命乎、受給利氏奈母加久為_レ流、故是以自_レ今以後、追_レ皇舍人親王_二宜称_三崇道尽敬皇帝_一当麻夫人称_三大夫人_二兄弟姉妹悉称_三親王_一止宣天皇御命、衆聞食宣、

煩瑣ではあるが、以下の論述の出発点となるもので、その概略を記しておこう。

光明皇太后が私（淳仁）に言われた。これまで（橘奈良麻呂事件などで）世の中が落ち着かなかったために吾子（あなた）が即位してから時機をみて言おうと思い、控えてきたことがある（それはあなたの家族のことであるが）、いまようやく天下も治まった。だからあなたの父舍人親王に追皇し、また母の当麻夫人を大夫人とし、兄弟姉妹を親王（内親王）と称しなさい、と。私はそれを承り、大変嬉しくもあり、また恐縮もして、孝謙太上天皇にこの旨を申し上げたところ、上皇は、光明皇太后に申し上げなさい、といって次のようなことを私に教え諭された。私（淳仁）を天皇として即位させて下さった御恩ですら在世中には報いることが出来ませんのに、私の父母兄弟姉妹にまで恩恵を受けますことは恐れ多くて、お受け出来ません、と。また（上皇に言われて）私自身思いますのに、「前聖武天皇乃皇太子」と定めていただき、即位させていただいた（だけでも有難いの）、私の両親や兄弟にまで恩恵を……。お受けしていいのか、辞退すべきなのか、わかりません、と光明皇太后に申し上げた。しかし皇太后が度重ねて私に教えて下さった。（このことは）私が言わなければいいたい誰が進めましようか。子供が幸福を願うのは親のためでもあるのです。天皇となった大福を父舍人親王にささげなさい、と。私はこの皇太后の命をお受けすることに決めました。これからは父舍人親王に崇道尽敬皇帝の諡号を贈って天皇として遇し、また母の当麻夫人を大夫人、兄弟姉妹をみな親王（内親王）と称すことにします。

この詔の内容は、江戸時代、光格天皇が父典仁親王に太上天皇の尊号を贈ろうとして幕府老中松平定信に反対

された、いわゆる尊号一件を想起させる。そこでわたくしも、これを奈良朝の「尊号一件」と呼ぶことにしたいが、詔の主旨をもう一度整理すると、

① 淳仁の父舎人親王に崇道尽敬皇帝の諡号を贈って天皇として遇し、また母を大夫人、兄弟姉妹を親王（内親王）として扱うこと

② これについて孝謙上皇は反対し、自分も辞退したが、光明皇太後の強い勧めによって実現をみたこと
というものである。

当初淳仁天皇が孝謙に相談しているところに両者の微妙な関係がうかがわれるが、その結果、淳仁が一度は光明子の提案を辞退したのは、むしろジェスチャーであつたろう。問題の皇太子、すなわち「前聖武天皇の皇太子」とは、その際光明子に向って述べたものであるが、この言葉は孝謙に対する淳仁の精一杯の抵抗であつたように思われる。

光明子の提案やそれを受諾した淳仁の行動が、仲麻呂の意に出るものであつたことはいうまでもないが、淳仁が、上皇孝謙の意見が退けられた経緯を明らかにした上で、自分が「聖武天皇の皇太子」となった事実を群臣たちに公言したことの意味は重大である。それは孝謙上皇のプライドを傷つけたというにとどまらず、その後における孝謙と仲麻呂⇨淳仁との関係に濃い影を落していくことになるからである。

(2) 改元なき天皇

淳仁に尊号の辞退を勧めた孝謙の言葉には不快感が露わに出ている。ふつう孝謙が仲麻呂⇨淳仁批判を行なうようになるのは、光明子の没後、とくに道鏡との関係が生じてからと考えられているが、⁽⁴⁾ 実際にはそれ以前のことで、おそらくこれが文献上にみられる最初のものであろう。それにしても孝謙上皇は、なぜ母光明皇太后や仲

麻呂の勧める尊号提案に反対したのであろうか。この問題は淳仁の即位時に遡って考えてみる必要があるだろう。孝謙天皇が大炊王こと淳仁天皇に譲位したのは天平宝字二年（七五八）八月一日のことであった。譲位の理由について宣命には、すでに在位久しく、負荷の大位に耐えがなくなったこと、人の子として母光明子に孝養を尽くす閑暇を得たいこと、が述べられている。『続日本紀』によれば、光明子は前年秋から病気がちで、回復もはかばかしくなく、この年七月には重態に陥ったというから、光明子のこの病状悪化が譲位の引き金になったことは間違いないだろう。こうして淳仁天皇の即位が実現したが、留意されるのは、その後矢継ぎ早に尊号や諡号が献進されていることである。

最初は即位当日である。仲麻呂以下の百官および僧綱が孝謙上皇に上台、光明皇太后に中台の尊号をおくり、それぞれ上台宝字称徳孝謙皇帝、中台天平応真仁正皇太后と称することになっている。没後に日本風のおくり名を贈ることはあっても、生存中に、しかもこのような中国風の尊号をおくるのは前例のないことであった。仲麻呂の唐風趣味によるものとしても、これが淳仁の即位当日であるのは、孝謙上皇に対する配慮であったことを暗示する。

二度目は、それから八日後の八月九日のことである。このたびは、すでに没していた聖武上皇を勝宝感神聖武皇帝と尊称し、天璽^{アマノシロシタニオレハルヤトモヤクラヒノミコト}国押開豊桜彦尊という諡号を贈り、さらに聖武の祖父（文武の父）草壁皇子（日並知皇子命）にも岡宮御宇天皇との尊称が追贈された。聖武は生前出家していたため諡号をもたなかったという事情もあるが、即位せずに没した草壁皇子に対してまで天皇の称号が贈られたことは注目に値する。

『続日本紀』は、これら一連の尊号の撰進を新天皇淳仁の勅命で実施されたと記すが、もとより仲麻呂の推進するところであり、しかもそれが草壁や聖武、あるいは孝謙（草壁の曾孫）といった草壁皇子に連なる人々の顕彰であったところに意味がありそうだ。これについてはのちに詳しく論じることになる。

そんなわけで尊号の撰進がやがて仲麻呂自身にも及ぼされたのはいっそうに不思議ではない。八月二十五日、

仲麻呂は太保（右大臣）に任じられた上、周知のように恵美押勝という尊号が与えられ、恵美の家印を使用することが許されている。

さて、こうしてみると淳仁の父舎人親王への尊称追贈は、それまでに行なわれた尊号献上と同じ意味合いをもつものであったといえるが、この措置だけが遅れて即位十カ月後のことであったのは、いささか不自然さを免れがたい。不自然といえ、それ以上のものが、淳仁には即位後の代始め改元が行なわれていないことである。

わが国では中国と同様、即位と改元は不可分のもので、譲位による禅譲の場合は、即位と同日に改元されるのが通例であった。ところが淳仁だけは例外で、孝謙時代の天平宝字を継承している。これを、前年に改元されたばかりだったからとみるむきもあるが、天平感宝と改元された（天平二十一年四月十四日）三カ月後に即位した孝謙天皇でさえ、即位当日（七月二日）天平勝宝と改元しているから、その理解には従えない。しかも淳仁天皇の場合、六年間の在位中、一度も改元のことを取り上げられなかったというのも不思議である。

史料的な根拠は見出せないが、これは孝謙が意図的に拒んだ結果とみる以外に、考えようがない。わたくしのみるところ淳仁の即位に関しては、仲麻呂（光明子を含めてよい）と孝謙との間で必ずしも合意に達していなかったように思われる。先に掲げた詔で、「吾がかく申さずなりければ、あへて申す人はあらじ」といって、尊号追贈のことを淳仁に強く勧めた光明子の言葉からも、即位をめぐるそうした雰囲気が取られよう。

尊号や諡号の献進それ自体は珍しいことではないが、これまでにみてきたような一連の行為はあまり前例がない。単なる儀礼上のものでなく、ことさら天皇淳仁を正当化し、権威づけるための政治的手段であったことは明らかであり、取りも直さずそれは、淳仁を擁立した仲麻呂自身の権勢の強化を意図するものであった。⁽⁶⁾

周知の通り仲麻呂は、聖武天皇の譲位後、叔母の皇太后光明子と連繋し、紫微中台を拠点に権勢を振るってきた。しかしその光明子もすでに六十歳を迎え病気がちであったとなれば、仲麻呂の権力基盤も動揺を余儀なくさ

れよう。淳仁の権威づけは、仲麻呂自身にとって、紫微中台にかわる新たな権力の基盤づくりにほかならなかった。しかも淳仁（大炊王）は仲麻呂の養子（仲麻呂は亡き息真從の妻であった粟田諸姉を大炊王に娶せた）であったから、光明子（仲麻呂の叔母）や孝謙（仲麻呂の従兄）よりも、身近な存在であった。こうしてみると、孝謙の譲位＝淳仁の即位も、光明子の病氣に乗じて仲麻呂の推進するところであったといえるかも知れない。むしろ孝謙の下した譲位の宣命の内容からみて、孝謙自身、納得した上での譲位であったことは疑いないが、さりとて淳仁の即位を完全に了解したものでなかったように思われる。天皇の権限である代始めの改元を認めなかったのは、淳仁擁立に狂奔する仲麻呂に対して孝謙が抱いた不安感・警戒心の表われであったとみたい。孝謙に残された最後の宝刀であり、仲麻呂もこれを強制することはできなかったものと考えて。こうして淳仁は、独自の年号をもたない希有の天皇として立ち、そして廢位に追いやられてしまいが、やがて表面化する孝謙との対立の要因は、その即位時に胚胎していたことに留意する必要がある。

(3) 立太子の意味

ここで、大炊王が「聖武の皇太子」に定められたという問題に戻らなければならない。

大炊王の立太子について『続日本紀』天平宝字元年（七五七）四月四日条には、次のように記されている（一部摘記）。

①天皇召_レ群臣_一問曰、當下立_ニ誰王_ニ以為_中皇嗣_上、右大臣藤原朝臣豊成、中務卿藤原朝臣永手等言曰、道祖王兄塩焼王可_レ立也、摂津大夫文室真人珍努、左大弁大伴宿禰古麻呂等言曰、池田王可_レ立也、大納言藤原朝臣仲麻呂言曰、知_レ臣者莫_レ若_レ君、知_レ子者莫_レ若_レ父、唯奉_ニ天意所_レ択者_一耳。

②勅曰、宗室中、舍人、新田部両親王、是尤長也、因_レ茲、前者立_ニ道祖王_一、而不_レ順_ニ勅教_一、遂縱_ニ淫志_一、然則

可_レ沢_ニ舍人親王子中_一、然船王者閨房不_レ修、池田王者孝行有_レ闕、塩焼王者太上天皇責以_ニ無礼_一、唯大炊王、雖_レ未_ニ長壯_一、不_レ聞_ニ過惡_一、欲_レ立_ニ此王_一。(以下略)

すなわち①は、孝謙天皇が皇太子道祖王を廃したあと、皇太子をだれに定めるかを群臣に尋ねたところ、あげられた候補は塩焼王と池田王であったというものであり、②は、その塩焼・池田両王あるいは船王が皇嗣としては失格であることを指摘し、最終的には大炊王を立太子させたいというのが孝謙の意向であることを述べたものである。この史料の検討はあらためて行なうことにするが、ここには大炊王はもとより、他の候補者の王についても、それを「聖武」の皇太子に定めるという記載はない。また孝謙の譲位の宣命でも、大炊王について「日嗣止定賜弊流皇太子」に皇位を授けると記されているだけである。

一般に『日本書紀』以降の文献にみられる立太子の表記は「××皇子(尊)宜_ニ立_ニ為_ニ皇太子_一」というもので、「××天皇の皇太子」という記載はない。あるのは唯一大炊王(淳仁天皇)の場合だけである。けだし立太子とは皇位継承の資格(予定)を与えるということであるから、ことさら「××天皇の皇太子」という必要はなかったのである。またわが国では古来、皇太子は必ずしも現天皇の皇子とは限らず、兄弟や皇孫あるいは傍系の皇親であることも珍らしくはない。中には中大兄皇子(天智天皇)や首皇子(聖武天皇)のように数代にわたる皇太子という場合もあったわけで、特定の天皇の皇太子に定めるといふ觀念はほとんどなかったように思われる。大炊王の場合、それをことさら「前聖武天皇の皇太子」と称したのは、明らかに政治的意図があつてのものであろう。しかも「前」天皇の皇太子というのも異例の措置であつた。

舍人親王の子である大炊王は天武の傍系であり、聖武(草壁嫡系)とは直接血縁的なつながりをもつてはいなかった。そうした大炊王を擁立する仲麻呂にとっては、大炊王を皇太子_{||}皇位継承者とするだけでは不十分であり、ほかならぬ聖武の正統な継承者、すなわち聖武の皇統(いふところの草壁皇統)につらなる後継者に位置づけるこ

とでなければならなかった。それを成し得る唯一の手段は、擬制的にせよ大炊王を聖武の嫡子に仕立てる以外にはなかった。それがすなわち「聖武の皇太子」に立てるといふ措置であつたと思う。古代中国では皇帝の嫡子を皇太子と称したが、淳仁の場合、聖武の皇太子に立てることで聖武の嫡子に擬し、それによって傍系の淳仁を草壁系の天皇に仕立てて正統性を強調しようとしたのは、いかにも中国通の仲麻呂らしい発想であつたといつてよい。

しかし聖武の皇太子という点では、天平十年(七三八)に立太子し、十一年後の天平勝宝元年(七四九)、正式に聖武から皇位を継承した孝謙こそがそうであつたはずである。この孝謙の立太子や即位は、藤原四兄弟の相次ぐ死による社会的動揺とか、基王没後、聖武の唯一の皇子であつた安積親王の急死といった不測の事態に促されたというきらいはあるが、⁽⁷⁾その即位は、それ以前の女帝に比して、もっとも正統なものであつた。

周知のように推古に始まる五人の女帝は、いずれも立太子することなく即位しているのが特徴である。それは女帝のもつた臨時的・中継ぎ的役割によるものであり、だから孝謙の場合でも立太子なしの即位で一向にさしかえなかつたはずである。それをあえて男子の天皇と同様に立太子↓即位という手続きを取つたのは、当初から男帝と同質の、しかも正統なる聖武の皇位継承者、皇統の継承者と目され、期待されたことを意味している。天平十五年(七四三)五月五日、皇太子阿倍内親王(孝謙天皇)は恭仁宮内裏で自ら群臣たちを前に五節舞を舞つたが、このことについて元正上皇は、「直に遊びとのみには非ずして天下の人に君臣祖子の理を教へ賜ひ趣け賜ふ」と詔し、単なる遊びではない、「君臣祖子の理」を百官に教えるものであると述べたという。阿倍の正統性を印象づけるための政治的な演出であつたのである。

しかし、にも拘わらず孝謙の場合、女子であることは皇權継受の上で決定的なマイナス要因であつた。大炊王が孝謙女帝から讓位されたにも拘らず、ことさら「聖武の皇太子」に仕立てられたのが、その何よりの証左であ

った。これは、皇統が、孝謙を飛び越えて聖武から継承されたということにはほかならない。先述した、草壁系に関わる人々に尊号を与えて顕彰したのも、大炊王を草壁系に位置づけたのも、すべて淳仁の天皇としての正統性を誇示し、権威づけるための手段であったが、それはひとえに、孝謙の立場を否定する形で進められているわけである。孝謙が強い反感を抱いたのはむしろ当然であつたろう。そうした孝謙の鬱積した憤懣が表面化したのが、「尊号一件」にほかならない。

二 聖武上皇の遺詔

それにしても皇権継受の中で全く無視されてしまう孝謙女帝の存在とは一体何であつたのか。再言することになるが、女子でありながら皇太子に立てたうえ即位させたのは、この女帝に男帝と同じ正統性を付与するためであつた。じじつそうした孝謙の立場は臣下に繰返し述べられている。たとえば時期は降るが、例の宇佐八幡神託事件直後の神護景雲三年（七六九）十月一日、孝謙（称徳）が下した宣命の中に、父聖武がかつて群臣たちを前に語つたという次のような言葉が引用されている。

掛毛畏伎朕我天乃御門帝皇我御命以天勅之久、朕爾奉侍^{（光明子）}牽諸臣等、朕乎君止念牽人方、太皇后仁能奉侍礼、朕乎念天在我如久、異奈念曾、繼天方朕子太子爾、明仁淨久二心無之天奉侍礼、朕方子二利止云言波無、唯此太子一人乃味曾朕我子波在、此心知天、諸護助奉侍礼、

いつ述べられたものかは明らかでないが、自分に子供は二人としない、ただこの皇太子阿倍内親王一人が自分の子であるから二心なく仕えよ、と命じた聖武の言葉は、阿倍が嫡子に相当する立場にあることを強調し、阿倍の正統性を訴えたものにほかならない。

またその宣命の前段には、元正が群臣に語つたという詔が引用されているが、それによれば「朕が子天皇（聖

武)に奉へ侍り、護り助けまつれ、繼ては是の皇太子(孝謙)を助け奉へ侍れ」と命じ、これにそむいた者には「朕必らず天翔り給ひて」——自分があの世から下りて来て必ず処罰しようと言ったという。元正もまた聖武→孝謙への皇位継承の正統性を群臣に示し、協力を要請しているわけである。「天翔り」で処罰するという言葉には悲壮感さえ感じられよう。このことは、しかしながら、女帝孝謙が「男帝」と同じ地位を得るのがいかに困難であったかを告白している。

聖武は折りにふれ孝謙に言葉を与えているが、天平宝字八年(七六四)十月九日、淳仁天皇の廃位を命じた孝謙の詔にみえるそれは、孝謙の立場を明確にした点できわめて示唆的である。それは孝謙が一、二の堅子と一緒に聞いたという次のような言葉である。

掛末久毛畏朕我天先帝乃御命以天、朕仁勅之久、天下方朕子伊末之仁授給、事乎之云方、王乎、奴止成止毛、奴乎王止云止毛、汝乃為牟末仁末仁、仮令後仁帝止立天在人伊、立乃後仁、汝乃多米仁無礼之氏、不從奈米久在牟人乎方、帝

乃位仁置許止方不得、又君臣乃理仁從天、貞久淨岐心乎以天、助奉侍牟之、帝止在已止方得止勅岐、

すなわち事情によっては孝謙の意志ひとつで、いったん立てた王——天皇を廃して奴にしてもよいし、奴を天皇にしてもよい、と。ここで用いられている王でも奴でもというのはあくまでも言葉の綾とみるべきものであって、げんに同じことを述べた聖武の別の言葉(七六ページ)ではそこまでの表現はない。要は孝謙に与えた皇権に関する生殺与奪権の強さを強調したものであり、それも結局は孝謙が正統であることを表明したものにほかならない。その後における孝謙の行動や意識の展開を考える時、ここにみる聖武の言葉が一つの支えになっていたように思われる。

ところでこれほどまでに孝謙の正統性が強調されたのは、あとで述べるように、この時期、皇位継承は嫡系によるとする觀念があったからである。遡って神龜四年(七二七)十一月、聖武の嫡子基王が生後一カ月で立太子

されるといふ前代未聞のことがなされたのもそれで、立太子の日、とくに「累世の家の嫡子」のうち五位以上の者に絶が与えられたのも、嫡子の立場を強調する意味が込められていたとみられる。しかしこの基王は翌年に亡くなってしまった。聖武が孝謙に付与しようとした権限は、すべて孝謙の嫡系化のためであったといつてよい。そして孝謙も、そうした父の思いを一身に体して、正統なる継承者と自らを位置づけ、行動した。

周知の通り孝謙が立太子した時（二十一歳）、聖武には夫人県犬養広刀自との間に生まれた安積親王（十一歳）がいた。しかもこの安積は基王没後、唯一の聖武の皇子であったから、もともと有力な皇位継承の有資格者であったといつてよい。しかし現実にはその安積をさしおき、孝謙が立太子する。もとより聖武の意志に添うものであり、そこに聖武の嫡系観が示されている。⁽⁸⁾ 女子ではあっても嫡系である阿倍（孝謙）が存在する以上、これをさしおいて安積を立て太子することは出来ない相談であった。

皇位継承における聖武の嫡系意識は、むろん皇后光明子にも教諭され、受け継がれている。というより、ある意味では光明子の抱く嫡系観は聖武以上に深刻ではなかったか。光明子のそうした意識も孝謙の詔によって知ることが出来る。

それは天平宝字六年（七六二）六月三日、孝謙が五位以上の官人を朝堂によび集め、激しく淳仁を非難して大権を自らが掌握した詔の中で、光明子が孝謙に語った言葉として述べられたものである。

朕御祖大皇后乃御命以_且、朕爾告之_久、岡宮御宇天皇乃日継波、加久_且絶_索牟止_為、女子能_能継爾波在止母、欲_レ令_レ嗣止宣_且、此政行給岐、

あなたを、岡宮御宇天皇（草壁皇子）の日嗣_二皇統を絶やさないために即位させるのです、といった言葉には、聖武の嫡子基王を失くしたあとと長屋王を犠牲にしてまで立后したにもかかわらず、ついに目的とする皇子を得ることの出来なかった責任感と嫡系相承に対する使命感といったものがないまぜになっているように思われる。一

般に光明子のこの言葉から、聖武から孝謙への譲位が、直接には「御祖大皇后」⇨光明皇后によって進められたとみる意見や、ここにみる光明子の行為を理解し難いとする見方もあるが、わたくしはそうは思わない。自らの責任を果せなかった光明子だからこそ、いっそう強く望みを孝謙に託したのである。

阿倍内親王の立太子と即位は、草壁皇子から文武・聖武と続いてきた嫡系の皇位継承を続けるためのものであった。「女子の継には在ども」という言葉には、聖武や光明子にとって嫡系を遵守するためには女子であっても仕方がない、という判断と対応が示されている。しかしその反面、女子を皇嗣とすることの弱点や不安も十分に認識していたはずである。群臣たちに繰り返し孝謙の正統性を誇示したのもそのあらわれである。

ともあれ、両親から繰り返し教えられ、使命を与えられた孝謙は、自らの立場が草壁に連なるという嫡系観と信念を異常なまでに強く持つに至った。それは孝謙の皇統意識として、のちに強烈に表われることになる。

ところがこうした聖武や光明子のもつ嫡系の論理は、必ずしも当時の社会的通念となっていなかったのである。天平十七年（七四五）に橘奈良麻呂が佐伯全成に語ったという「陛下（聖武上皇）枕席不安、殆至三大漸、然猶無_レ立_三皇嗣、恐有_レ変乎」という言葉は、よく知られるように、立太子後七年も経っていないながら、阿倍内親王が結局は皇嗣⇨嫡子として認められていないことを示している。皇嗣すなわち皇統の継承者は男子であるという認識は、無条件に嫡系相承の原理となっていたようである。奈良麻呂の謀反計画は根深いもので、この天平十七年を最初に四回計画され、発覚まで十二年に及んでいる（『続日本紀』天平宝字元年七月四日条）。その間に阿倍は即位もしている。にもかかわらず孝謙の存在を否定し続ける奈良麻呂の主張に変わりはなかった。これは奈良麻呂だけの意見ではなく、当時における貴族の一般的な考え方であったと思われる。けだし嫡子は男子に限るという社会観念がある限り、孝謙を正統な天皇として認める余地はなかったのである。

さて、孝謙が即位して七年、聖武や光明子の努力にもかかわらず、配偶者も子供もない孝謙の在位は、いかに

聖武の嫡系であっても皇位継承の上で何の解決にもならず、わずかの年数の先送りにすぎないことは明白な事実であった。そういう状況の中で死を迎えた聖武上皇は、最後の決断に踏み切らざるを得なかった。『続日本紀』天平勝宝八年（七五六）五月二日条によれば、「是日、太上天皇崩_ニ於寢殿、遺詔以_ニ中務卿從四位上道祖王_一為_ニ皇太子_一」と記す。道祖王はこの聖武の遺詔により即日立太子する。

新田部親王の子、中務卿道祖王が立太子された理由については後述するが、これによって草壁系——嫡系相承が終わり、文武以後はじめて皇位は天武の傍系に移ることになった。聖武によるこの立太子は、むしろ没後の社会的混乱を避けるためであったが、わたくしがこの遺詔を重視するのは、聖武が自らの手で嫡系相承の原理を捨て、皇嗣問題に一応の決着をつけたことにある。奈良麻呂が「今天下乱人心無_レ定、若有_ニ他氏立_レ王者、吾族徒将_ニ滅亡_一、願_ニ率_ニ大伴佐伯宿禰_一、立_ニ黄文_一而為_レ君、以先_ニ他氏_一為_ニ万世基_一」と語っているように、臣下が天皇を擁立しかねない状況にまで事態が切迫し、没後の混乱のなかで内乱にまで発展する可能性は十分あった。しかもその後の展開をみると、皇嗣問題に関して聖武と仲麻呂（₉光明子）との間にすでに亀裂のあったことも事実であろう。その意味で聖武のとったこの措置、すなわち天武系王族への拡散は、その時点でなし得るもっとも有効・適切なものであったと思われる。しかも遺詔という形をとることで、聖武は最大限にその効力を発揮させたのである。それにしても上皇の聖武（孝謙に讓位する二カ月前に出家していた）が立太子の撰定をするのは異例というほかはないが、孝謙の女帝であるがゆえの立場の弱さを十分に認識したからこそこの措置であったろう。ここで想起されるのは先にあげた、王でも奴にでも自由にせよ、との言葉と同様、「朕が立て在る人と云とも、汝が心に能からずと知り、目に見てむ人をば、改^かへて立む事は心のまにまにせよ」（『続日本紀』神護景雲三年十月一日条）といった聖武の言葉である。確証があるわけではないが、それが孝謙に語られたのは、右の遺詔をしたためた折りではなかったろうか。与奪権を孝謙に託したのは、最後まで孝謙が正統であることを言い含めたものであるが、しかし

結局、こうした聖武の配慮がその後の悲劇を起こす原因となるのであった。

なお聖武没後の光明子については、これまで述べてきたように、淳仁を正統化する方向で草壁皇統の継統をはからうとする仲麻呂に同調している。こうした光明子の立場は、嫡系相承を傍系に転じようとした聖武と一見相通ずるようであるが、両者の嫡系意識は似て非なるものであったことに留意しておく必要がある。

三 皇位と皇統

(1) 草壁「皇統」

嫡系でありながら女性であるという点で、孝謙女帝も、客観的には中継ぎ的存在でしかなかった。しかし「女子の継には在ども嗣がしめんとす」と教えられてきた孝謙にとっては、自分こそが「岡宮に御宇しろしめし天皇」すなわち草壁の嫡系であるという信念とプライドは妄執に近いほどのものになっていた。そしてこの草壁に連なるという孝謙の嫡流観念・嫡系観がすべての混乱をもたらす原因となった。

しかし草壁の嫡系であるとする、いうなれば草壁「皇統」の意識は、考えてみれば奇異である。草壁皇子は天武と持統の嫡子として立太子したものの（六八一年）、皇太子のまま没しており（六八九年）、即位もしなかった。皇統をいうのであれば、その父であり、壬申の乱に勝利して古代国家づくりに大きな足跡を残した天武をこそ持ち出すべきではないか。それがなぜ草壁といわれ、天武ではないのであろうか。

この点に関する私見は以下の如くである。その一は、奈良期における皇位継承の論理、いわゆる天智天皇の定めたという「不改常典」が草壁を皇統の原点にしたことである。この「不改常典」の理解については諸説あるが、近時における村井康彦氏の説が注目される。⁽¹⁰⁾氏によれば「不改常典」は、文武や聖武といった年少皇子の即位を実現するための抛り所とされたものであり、とくに文武から聖武への皇位継承に最大限に援用されたというが、

わたくしが注目したいのは、そこで強調されたのが、文武は草壁の嫡子であり、聖武はその文武の嫡子であるという、つまりは草壁に始まる嫡系相承の論理であったことである。そしてこの正統性が文武↓元明・元正↓聖武（↓基王）と世代を重ねて強調される中で、いうところの草壁「皇統」の意識が定着したのである。むろんその前提として嫡系相承の觀念がなければ草壁系という皇統意識は生まれなかったが、事實は、「不改常典」が嫡系相承の論理・原則を育てたというべきである。

しかし天武が取り上げられなかった理由の二つは、当時、皇位継承資格をもつ天武の諸皇子やその子供たちがなお数多く存在していたことである。文武や聖武よりもより天武に近い世代である。ために文武（天武の孫）や聖武（天武の曾孫）の即位の実現にあたり、へたに天武天皇系を強調すれば、いたずらに有資格者の範圍を拡大し、文武や聖武の立場を弱体化しかねなかったからである。「不改常典」によって推移した文武以降の皇位継承においては、天武の果たした役割は見出せないばかりか、持ち出せば逆効果になりかねない存在であった。天武はむしろ意図的に避けられたものと思う。

天武と持統の嫡子である草壁皇子は、「不改常典」の論理のなかで意図的にクローズアップされた嫡系の始祖であり、草壁皇統の意識は「不改常典」の論理的帰結であったといえよう。ただし草壁が持ち出されるのはあくまでも皇統上のことであり、現実には草壁に対する敬意や追慕といった觀念はせいぜい子の文武にみられるだけで、むろん天智や天武には遠く及ばない。

こうして嫡系相承の論理は、それにより皇統を限定し、皇位継承上の混乱を回避する上で有効であったが、しかしこの限定は、逆に有資格者を欠いた時、かえって異常な混乱を招く要因に転化することに留意しなければならない。孝謙・淳仁の対立がまさにそれであった。しかもそのあげく、聖武の遺詔による道祖王の立太子で嫡系相承の原理は破棄され、ついで淳仁の即位で草壁皇統は完全に断絶する。この淳仁を孝謙が傍系天皇として扱お

うとしたのは、嫡系をもって任ずる孝謙にしてみれば当然の措置であろう。それを仲麻呂が草壁系に連なる天皇に仕立てようとしたところに孝謙の反発が生じたのである。孝謙と淳仁・仲麻呂の対立は、草壁皇統をめぐる争いといってもいいが、最大の悲劇は孝謙がその意識を捨てきれなかったところにあった。

(2) 「不改常典」と藤原氏の立場

文武以降の皇位継承は「不改常典」をよりどころに草壁皇統による嫡系相承として行なわれてきたが、看過出来ないのはそれを支えたのが藤原氏であったということである。草壁系による皇位相承の実現、いいかえれば「不改常典」の遵守は藤原氏を抜きにしては考えられないからである。

草壁皇子が亡くなったあと、天武の皇子たちの反対が予想される中で、幼少の嫡子軽皇子（文武）の即位を実現させるために、持統と不比等との間に一種の政治的妥協があったと考えられている。⁽¹²⁾ 藤原氏側の条件は、不比等の娘宮子を文武の夫人に納れて外戚としての地位を得るということであったとみてよい。文武に皇女が入内しなかったこと、また不比等の娘光明子を聖武に納れたことも、傍証となる。そしてこうした両者の関係を端的に象徴しているのが草壁皇子の佩刀であろう。その由来が、天平勝宝八年（七五六）六月二十一日、聖武の七七日に当り光明子が東大寺に献納した「東大寺献物帳」に記されている。

黒作懸佩 一口

右、日並皇子常所佩持、賜太政大臣、大行天皇即位之時、便献、大行天皇崩時、亦賜大臣、大臣薨日、更献太政天皇。

現物の佩刀は残っていないが、この由緒書によると日並皇子（草壁皇子）の佩刀が草壁から太政大臣（不比等）へ、不比等から大行天皇（文武）へ、文武から不比等へ、不比等から太政天皇（聖武）へ、というふうに皇室と藤

原氏との間に授受が繰り返された末、光明子から東大寺へ献納されたものという⁽¹⁴⁾。その真偽はたしかめがたいが、草壁皇子の太刀、すなわち草壁皇統のシンボルが藤原氏を介して伝えられていることは、藤原氏が天皇家を輔弼し草壁皇統の継承を後見してきたことを表明するものであり、持統（天皇家）と不比等（藤原氏）の間にとり結ばれた信頼関係を示す証しであろう。しかしその太刀が聖武の没後東大寺へ献納されたということは、太刀の授受に終止符が打たれた結果であり、それを余儀なくされたのは、聖武の生前において、この太刀の授受が行なわれる現実的条件がなくなったこと、すなわち草壁嫡系がいなくなったことを物語る。

それにしてもこれが事実なら、先述来の孝謙の正統性はどうなるのであろうか。あれだけ両親から期待する言辞を与えられながら、佩刀の継受を否定された孝謙。孝謙は結局のところ皇統の継承者とは認められていなかった、というより聖武や光明子でさえ社会通念をくつがえせなかったのである。孝謙の悲劇をみる思いがする。聖武がその死にのぞみ、傍系である道祖王の立太子を遺詔したのも、天皇家と藤原氏の両方で補完し合いながら続けてきた草壁皇統の終焉を認めたことにはかならない。

新興の藤原氏の発展の契機は宮子を文武天皇に入内させ（六九七年）、首皇子（聖武）を得たこと、すなわち天皇家のミウチ的存在の地位を得たことにある。草壁系の相承は藤原氏の立場そのものであり、その拠り所とされた「不改常典」は藤原氏の権力伸長の論理であった。それがいまや失われようとしていた。仲麻呂が、道祖王にかえて養子である大炊王を擁立し、種々の方策を用いて聖武の継承者に仕立てようとしたゆえんである。

ところで、これまで「不改常典」を根拠に貫かれてきた草壁系皇統について縷々述べてきたが、こうした嫡系相承の論理は皇位継承の上でいくつかの重要な変化をもたらした。

一つは皇位の継承を大きく制約する結果をもたらしたことである。すなわち八世紀では嫡系相承は社会的な慣行ではなく、極端に言えば、皇位継承者は皇胤でさえあればよかった。兄弟相承や時には遠い皇親の即位がみら

れた理由である。それが皇位が草壁系に独占されたことにより、草壁系（皇統）以外は正統な継承者ではないという観念―皇統意識を生み出した。つまり皇位の継承に皇統という要素が加わってきたわけである。仲麻呂が淳仁の扱いに腐心したのもそのためであった。

二つは、抛り所にされた「不改常典」の論理は、右にいう皇統から女性を排除し、女帝の立場を著しく制約する方向で作用したことである。改めて述べるまでもなく文武以後の皇位は、文武↓元明↓元正↓聖武へと継承されたにもかかわらず、元明は元正に対し、皇位（厳密に言えば皇統）は文武から聖武へと継承されるのだ、と述べている（聖武即位の詔に引用）。とくに元正は草壁の子でありながらその皇統から除外されている。元明・元正の二女帝は、聖武の即位までの間の中つなぎの天皇である、と自らその役割を述べている。けだし嫡子が男子に限られた皇位継承＝嫡系相承を実現するためには、女子は単なる皇位の保持者＝中継ぎに徹さざるを得なかったのである。黒作の太刀が女帝を経ず、草壁↓文武↓聖武という、いわゆる草壁皇統に伝授され、それで終わったことの意味も、あらためて理解されよう。

これが、孝謙が皇位を継承できても皇統の継承者としては認められなかった理由であり、嫡系相承の論理は女帝の役割とその立場を限定したばかりか、大きく後退、低下させたのである。

「不改常典」による嫡系論理からすれば、孝謙の立太子は不可欠な手続きであったといえるが、しかし社会通念からすれば、皇太子阿倍は明らかに矛盾した存在であった。「不改常典」の申し子とでもいえるべき聖武と光明子が、女帝孝謙の権威や正統性を主張し、その論理の矛盾の解決を背負わされたのは皮肉というほかはないが、孝謙の悲劇もそれを両親から受け継ぎ、あくまでも保持しようとしたところにあったとしかいいようがない。

四 法王道鏡との「共治」

(1) 大権の掌握

さて「尊号一件」において孝謙の意見は無視された。当然孝謙は仲麻呂（＝光明子）らに反発したと思われる。事実、その後の孝謙の動きをみると、仲麻呂に対するいらだちといったような感情が汲みとれるようである。というのも、孝謙上皇がこの前後から、淳仁天皇と共に政務や儀式にたずさわるようになることが少なくないからである。

たとえば天平宝字四年（七六〇）正月四日、「高野天皇（孝謙上皇）及び帝（淳仁天皇）」は内安殿に御して官人に叙位、翌五日、二人で仲麻呂第に行幸し、妻の袁比良女に叙位、また同七日には閤門に御し高麗の使者たちに位階を与え、国王への賜物を託している。上皇は法制上天皇の次位に置かれるが、その家父長的立場から政治に介入した例は珍しくない。持統が譲位後も孫の文武を後見し、共治したのが上皇の立場を端的に示している。しかしそれはあくまでも文武が十五歳の年少天皇だったからであり、いまの場合と対比することはできないであろう。孝謙の場合は度が過ぎた行為といわねばならない。なかでも正月四日などは、叙位の儀が終わったあと孝謙は口勅でこの日従一位となった太保（右大臣）仲麻呂を大師、すなわち太政大臣に任命し、近くに召して隨身契を与えている。臣下で生前ついたことのない太政大臣の地位に、左大臣を経ずに就任させようとしたことも留意されるが、それを孝謙が天皇淳仁をさしおいて与えているところに、仲麻呂に媚態を示すことで自己の立場を誇示しようとした孝謙の意図が汲みとれるように思われる。草壁皇子の正統なる嫡系として、また上皇としてリーダーシップを握ろうとする孝謙の焦りでもあったろう。不満を抱きながらも仲麻呂に迎合せざるを得なかったところに、孝謙の微妙な気持ちと立場が反映されている。

しかしこうした孝謙と仲麻呂⇨淳仁の関係は、天平宝字四年（七六〇）六月、光明子が没することで急速に悪化し、ついに対立することとなる。

周知の通り天平宝字五年十月、孝謙上皇は淳仁天皇とともに平城宮改作のために保良宮に遷御したが、その折病気に侍した道鏡を寵愛したことから淳仁（⇨仲麻呂）の非難を受けるようになり、翌年五月、淳仁が平城中宮院に還ったのに対し、孝謙は法華寺を在所にして、完全に両者は決裂してしまった。そして十日後、孝謙の下したのが次のような詔であった（部分的に前に引用したので、適宜意識してある）。

私は女性であるが草壁皇子の皇統を絶やさないようにという母の命で即位し、政治を行なってきた。しかし淳仁は私に恭順することなく、暴言をはき、無礼を働いてきた。私にはそんなことを言われる覚えはないが、同じ宮に住んでいるから聞かねばならないのである。恥かしいことである。

といい、

また一つには朕が菩提心を発すべき縁にあるらしとなも念^{おも}はず。是を以て家を出でて仏の弟子と成りぬ。但し政事は、常の祀りは小^{いさ}けき事は、今の帝行ひ給へ。国家の大事、賞罰二つの柄^{もと}は朕行はむ。かくの状聞し食し悟れと宣りたまふ御命を、衆聞し食さへと宣る。

と主張している。

この詔は天皇と上皇の同居がトラブルを招き、上皇別宮⁽¹⁵⁾の必要性が認識されている最初のものといつてよいが、要するに孝謙は、宮外の法華寺を在所に定めたことについて、出家の身となれば自分が天皇と別宮に住むのは当然であるとして、その行動の正当性を主張し、最後に国政権の掌握を宣言したのがこの詔の後半の核心部分である。

もっとも前にみたように、孝謙は上皇として国家の大事や賞罰と無関係ではなかったので、この詔はあらため

て、自身が天皇淳仁の上に立ち、政治上のリーダーシップを握ることを群臣たちに表明したものにほかならなかった。草壁皇統を継ぐ自らの正統性をあらためて主張したのである。

しかしこの詔でもう一つわたくしが留意したいのは、孝謙が出家という行為を巧妙に政治的に利用していることである。孝謙の出家は、父聖武の例にならうものであるが、それを別居の手段に用い、さらには大権奪回の方便にしているように思われる。上皇が天皇のもつ執政権を奪うという異常な行為やそれに対する後ろめたさを、仏教的権威で合法化しようとしたのかも知れない。

さて、こうした孝謙側の強硬措置に対して、仲麻呂も手をこまねいていたわけではない。八月十一日、腹臣らに命じて、中宮院に侍して淳仁の勅旨の伝宣に当らせている。平安期における蔵人頭の役割といつてよいが、こうなるとまさに「二所朝廷」の現出であった。もっとものち仲麻呂の乱の折、淳仁の居所である中宮院に置かれていた鈴印をめぐり孝謙と仲麻呂との間に争いがあったことから、実際に孝謙が国家の大事を掌握していたかどうか疑うむきもあるが、仲麻呂の就任した都督四畿内三関近江丹波播磨等国兵事使という特別官を、仲麻呂が孝謙に申し出て任命された（天平宝字八年九月二日）ということなどから判断しても、孝謙が国政の主導権を握ったとみてまず間違いないであろう。

こうして執政権を掌握した孝謙上皇は、ついに天平宝字八年（七六四）九月、仲麻呂を近江に追討し、十月九日、淳仁を廃位、大炊親王に貶して淡路へ配流した。『続日本紀』によれば、あまりの急に、淳仁天皇は身仕度も整わないまま母とともに配所へ護送されたというが、淳仁に対する処置は、仲麻呂の事件が起こって約一カ月も経っており、けっして早いとはいえない。これは当初、廃帝や自らの重祚までを意図していなかったからではないかと思われる。いずれにせよ、これによって「聖武天皇の皇太子」という擬制的関係は完全に解消されたのであった。

こうして孝謙上皇は再び即位した。称徳女帝である。大化改新後に重祚した皇極（斉明）女帝以来、絶えて無かった重祚に踏み切ったのは、孝謙にすればそれまで固執してきた草壁皇統意識の当然の帰結であつたろう。そしてこの重祚もまた女帝特有の皇位継承上の方便であつたといえる。翌年正月、年号も天平神護と改め、十一月には大嘗祭を行ない、あらためて即位を表明している。自らが草壁皇統を継ぐ天皇であることを内外に再確認したものであつた。

しかし皇嗣問題は、これによって振り出しに戻つたのである。

(2) 太政大臣禪師から法王へ

ところで孝謙の重祚は、皇位継承をめぐるさまざまな問題をあらたにひき起こしている。その一は、過去に例のない出家者の即位問題である。先にみたように孝謙が出家したのは上皇の時期でのことであり、またその時点では近い将来淳仁を廃して自らが重祚するとは思ひもしていなかつたろうが、これが即位する上で何の支障にもならなかつたとは考えがたい。しかしのちに引き合いに出す、道鏡を大臣禪師に任じた時の詔（八七ページ）では、国家の政を行なう必要がある以上、出家の身であることに何の支障があろうかといひ、そればかりか大嘗祭をすら行なっている。⁽¹⁷⁾ここでは孝謙の意思が先例や道理を超えているとしかいいようがない。

その二は、自らが重祚しても依然として残る継嗣者——皇太子問題である。すなわち淳仁天皇を廃したあとの孝謙（称徳）にとつて最大の課題は皇太子を立てることであつたはずである。事実、廃位から五日後の十月十四日、詔を下し、「国の鎮めとは、皇太子を置き定てし、心も安くおだひに在りと、常人の念ひ云ふ所に在り」として、立太子の必要性を説いている。にもかかわらず立太子できないことについて孝謙は、

今の間此の太子を定め賜はず在る故は、人の能^よけむと念ひて定むるも、必らず能しも在らず、天の授けざる

所を得て在る人は、受けても全く坐す物にも在らず、後に壊れぬ、故に是を以て念へば、人の授くるに依りても得ず、力を以て競ふべき物にも在らず、猶天のゆるして授くべき人は在らむと念ひて、定め賜はぬにこそあれ、此の天津日嗣の位を、朕が一人貪ほりて、後の継を定めじとは在らず、今しきの間は、念ひ見定めむに、天の授け賜はむ所は、漸々現われなむと念ひてなも、定め賜はぬ。

といい、その人のあらわれるのを待っているのだと弁明している。道祖王を廃太子し、いままた淳仁を退けた孝謙にとって、立太子問題は慎重に運ばねばならぬ仕事であった。立太子に対するこうした孝謙の姿勢は、この時期しばしば詔として表明されている（たとえば天平神護元年三月五日条）が、不思議なことに、現実には立太子しようとする動きは孝謙に全く見られない。しかも大嘗祭を行なった頃から、この問題についていっさい言わなくなってしまう。これはどういうことなのか。

繰り返して述べるまでもなく、文武以来の草壁皇統が孝謙をもって断絶したことは明白な事実である。皇位継承の上で、称徳の重祚が本質的な解決にならないことは、称徳女帝自身がもつともよく承知していたはずである。しかし自らの正統性を表明するために、あえて重祚したのが称徳女帝であった。わたくしのみるところ、重祚以後の孝謙（称徳）にとって、立太子問題よりは、女帝ゆえに生ずる社会的動揺をどのように乗り切るか、という問題が優先されていたように思われる。橘奈良麻呂の乱が想起されたことであろう。すでに両親を失った状況の中で、しかも廢帝という異例の措置をとってまでして再登場しただけに、孝謙の不安はいっそう大きかったに違いない。そこに求められたのが道鏡の助力であった。これ以後、孝謙にとって道鏡は不可欠の後見者となり、道鏡をいかに位置づけるかということが立太子問題にとってかわったといつてよい。それが大臣禪師、太政大臣禪師そして法王の任命にほかならない。これが第三の、そして称徳にとっては最大の課題となった。

道鏡を大臣禪師に任じたのは、仲麻呂を倒して二日後の九月二十日である。『続日本紀』によれば、この日称

徳は詔を下して、「自分は出家の身ではあるが天皇として国家の政治をとらないわけにはいかないのだ」といい、そこで「帝の出家しています世には、出家して在る大臣も在るべしと念ひて、（道鏡が）^{ねば}楽います位にはあらねども、この道鏡禪師を大臣禪師と位は授けまつる」と述べている。出家の身として即位した称徳が、その限りでは自分を世俗の長と位置づける一方、出家天皇の補佐には出家大臣がふさわしいのだ、というのは、いかにも自己に好都合な解釈であるが、ここで留意されるのは、仲麻呂の謀反が発覚した九月十一日、ただちに藤原永手や吉備真備らを昇格させ、さらに大宰員外帥として左遷されていた藤原豊成を右大臣に還任させるなどして、太政官体制の強化を図っていることで、これは俗界大臣と僧界大臣との併立をはかったものとみてよいであろう。

この時期称徳が構想した政治体制は、天平神護元年（七六五）十月十三日、道鏡以下百官を伴ない紀伊行幸に出かけての帰り、閏十月二日、河内弓削宮で発布した詔において、より明確である。道鏡の扱いを知る上での根本史料ともいふべきもので、全文を掲げ、その大意を付してみる。

詔曰、今勅久、太政官乃大臣方奉仕倍人乃侍坐時方、必其官乎授賜物仁在、是以朕師大臣禪師能朕乎守比多助賜乎見方、内外二種乃人等仁置天、其理仁慈哀天、過无久奉仕之米天保之米、可多良比能利布言乎聞仁、是能太政大臣乃官乎授末都流、敢多比奈牟、敢可止奈牟念、故是以太政大臣禪師能位乎授末都留止勅御命乎、諸聞食止宣、復勅久、是位乎授末都良申方必不敢伊奈等宣多方念之天、牟止奈牟念、不レ申之是能太政大臣禪師乃御位授末都流等勅御命乎諸聞食等宣、

——太政大臣は然るべき人のいる時、かならずその官に任ずることになっている。ここにわが師（道鏡）の、朕を守り助けてくれるありさまをみると、「内外二種の人ども」すなわち僧界・俗界の人たちにおいても、道理として、慈悲をもって過ちなく仕えてほしいと受けとめられていると知り、（道鏡に）太政大臣の官を授けたいとでもいえば辞退するであろうから、太政大臣禪師の位を授けたいと思う。みなもよろしく承知するように。（道鏡も）この位を授ける上はけっして辞退しないように……。

表3 称徳朝の政治体制

	(女帝関係)	(道鏡関係)	(永手・真備・白壁王関係)
天平宝字6(762)6.3	孝謙、淳仁を非難し、大権を掌握		
7(763)9.4		少僧都に任	
8(764)9.11	仲麻呂の乱		永手(従二位→正三位, 9月 正二位大納言) 真備(正四位下→従三位)
9.12			白壁王(従三位→正三位)
9.20		大臣・禅師に任	
10.9	淳仁廃位, 孝謙重祚 (称徳)		
10.14	称徳、立太子の必要性を強調		
天平神護元(765)正.7			永手 } 真備 } に勲二等(仲麻呂追討の功) 白壁王 }
10.13	紀伊・弓削(由義)行幸 (~閏10月)		(永手・真備, 御装束司長官) (白壁王, 御前次第司長官)
閏10.1		太政大臣・禅師に任	
11.16	大嘗祭		
2(766)正.8			永手, 右大臣に任 白壁王, 大納言に任 真備, 中納言に任(時に正三位)
正.17			称徳, 永手第に行幸
10.20		法王に任 { 円興を法臣 基真を法参議	永手, 左大臣に任 真備, 右大臣に任
10.23		(法王月料は供御に 準ずることを決定)	
神護景雲元(767)3.20		法王宮職の設置	
3(769)2.3			永手(正二位→従一位, 永手第に行幸の賞)
2.24			真備(正三位→正二位, 真備第に行幸の賞)
7.10		(始めて法王宮職) 印の使用	
9.25		道鏡事件	
10.1	「恕」の字を書いた帯下賜		
10.15	由義行幸(~11.9)		
宝亀元(770)閏2.27	由義行幸(~4.6)		
6.10			永手に近衛・外衛・左右兵衛事, 真備に中 衛・左右衛士事を兼ねさせる
8.4	称徳没		
8.21		遣下野薬師寺别当 に左遷	

すなわちこれによれば称徳は、内外の人たちが、道鏡が自分を補佐している事実については理解を示しているとした上で、しかし道鏡を俗界の長である太政大臣に任ずることは避け、僧界にあるものとして太政大臣禅師に任じたことがうかがわれる。ここでの称徳は、世間を内（聖・僧）・外（俗）に分けた上で、道鏡を前者の世界の長にしようとしたものであっても、俗界の長にする意図は毛頭もってはいない。したがって太政大臣の語は、道鏡を太政大臣禅師に任ずることをきわ立たせるためにことさら引き合いに出したまでのことであつた。そこでわたくしはこれを称徳の意図した聖・俗二元体制と呼びたいが、こうした称徳の意図は、次のような人事からうかがわれよう。

すなわち年が明けて正月、藤原豊成の病没の後任として藤原永手が右大臣に昇格、また吉備真備も中納言に登用されたあと、三月に藤原真楯の没後をうけて大納言に昇進した。左大臣は空席であつたから、この二人と大納言白壁王（正月八日就任）が廟堂の中樞を占めたことになる。太政大臣禅師道鏡に対するに、寵臣ともいべき永手や真備の人事を進めている称徳体制に留意する必要がある。

そして称徳の道鏡に対する処遇の上で最大の飛躍は法王の任命であつた。

弓削寺（宮）への行幸から一年後の天平神護二年（七六六）九月、隅寺に仏舍利が出現し、翌十月、法華寺へ収納するに際し、称徳は、「諸の大法師等をひきいて、上^{かみ}といます太政大臣禅師の理の如く勧め行なはしめ、教へ導き賜ふによりてし、かく奇しき尊き験は顕し賜へり」といい、こうした「験」の出現もすべて師道鏡の導くところであるとして、「この嬉しき事を、朕独りのみや喜こばむと念ほしてなも、太政大臣朕が太師に法王の位授けまつらん」との詔を下している。この場合でも、道鏡の仏教的立場とその教示をことさら強調しているのが称徳の詔の特徴といえよう。

あらためて述べるまでもなく法王は臣下ではない。仏教界における「天皇」であり、俗世間を離れた道鏡が就

き得る最高の地位であった。その証拠に、道鏡に対し、天皇に準ずる待遇が与えられている。『続日本紀』に

「詔、法王月料准_二供御_一」とある。しかしわたくしのみるところ、この法王の地位はあくまでも称徳女帝の在位を前提に実現されたもので、これが称徳の描いた最終的構想であったように思われる。このことは道鏡の立場や役割をどう評価するかにかかわってくるので、あらためて論じたいが、称徳が求めたのは女帝自身と法王とによる、いわば共治体制⁽¹⁸⁾であったと考える。しかし当然のことながら、この構想は最初から称徳の脳裏にあったものではない。当初は称徳のもとに聖・俗の大臣を置くという形の二元体制であったものが、ここに至って称徳と道鏡とによる二元_二共治体制_一に飛躍しているからである。その意味で、道鏡を少僧都から大臣禅師に任じたのが第一の飛躍とすれば、第二の、そして決定的な飛躍は太政大臣禅師から法王の位を授けた時であったといえよう。

そして何よりも大事なことは、この共治体制が、貴族たちの理解と協力のもとに実現され、維持されていることである。道鏡が法王に任じられた当日、永手が左大臣に、また真備も右大臣に拔擢されており、称徳_二道鏡体制_一を支えるものとして位置づけられている。このことは、道鏡を俗界から遊離した法王とする一方、永手と真備を太政官の上席に配置することで、自らのブレンとしたことを物語る。

道鏡が法王になってから四カ月後の天平神護三年（七六七）二月から三月にかけて、称徳女帝は東大寺（二月十四日）・山階寺（同二十八日）・西大寺院（三月三日）・大安寺（同九日）・薬師寺（同十四日）などをたて続けに巡訪し、礼仏しているのも留意される。しかも六月における景雲の祥瑞出現にちなみ二カ月後、聖武天皇の時以来用いてきた「天平」を捨て、神護景雲と改元したのは、女帝と法王による共治体制の新たなスタートを期したものであるといつてよいであろう。

ところで孝謙（称徳）の行動をあとづけるとき留意されるのは、つねに即断即決をさけ、段階的に事態に対処

していることである。道鏡を法王につけるまでの過程をみても短期間に一挙に実現したのではない。しかし称徳は、道鏡を法王にはしても皇位につける考えは当初、全くなかったというのが、わたくしの理解である。法王道鏡との共治が、称徳の抱いた最終的な政治構想であった。しかも称徳のイニシアチブによって道鏡が仏教界に君臨する限りにおいては、あえて道鏡を否定しうる法的理由は見出せなかったろう。永手や真備らが個人的に称徳をどのように見ていたかは明らかでないが、称徳の共治体制を実現し支えたのがかれらであったことは間違いない。そしてその限りで、称徳と道鏡の共治体制は、消極的ながらも官人たちに承認されていたのである。そして「こと」がなければ、この体制で推移するはずであった。

(3) 「恕」の帯

ところが周知の通り神護景雲三年（七六九）、大宰府の主神中臣習宜阿曾麻呂が八幡神の神託と偽って「道鏡をして皇位に即かしめば、天下太平ならむ」と奏上し、道鏡を皇位につけようとする神託事件が起こった。道鏡が法王となって三年目の出来事であった。

この事件に対する理解は二つに要約される。

一つは、道鏡自身がひそかに皇位への野心を抱いたとする道鏡の皇位覬覦説

二つは、道鏡擁立は孝謙の推進したもので、道鏡はそれに従ったにすぎない、と見る説

である。もっとも後者については、和氣清麻呂が宇佐へ出立する際、相談をもちかけたように、道鏡にもチャンスに便乗しようとする意図がなかったとはいえないであろう。

しかしわたくしは、右の二説のいずれにも賛成できない。この一件は道鏡にとってはもとより、称徳自身にとっても全く予期しなかった事態であったと思う。皇統意識にあればど固執しつづけてきた称徳を考える時、皇胤

でない道鏡を皇位につけることはまず考えられない。神託事件の背後は不明であるが、わたくしのみるところ、孝謙は八幡神の神託という魔術に衝動的にとり込まれてしまったというのが事の真相ではなかったか。

この事件は、法王宮職が設置されてから二年半、神護景雲三年（七六九）七月に法王宮職の印が始めて用いられ、名実ともに法王としての扱いがなされるようになった矢先に起こっている。それが神託という政治的次元を超えたものであっただけに、称徳に確証を得たいという思いが横切ったとしても無理はなからう。しかし事件後、持ち帰った神託を偽りとして清麻呂を嚴重に処罰しながら、重ねて宇佐へ使者を派遣するなどして、真相の追及に当たっていないし、以後、二度とこの問題をもち出すこともない。事件後の称徳は、むしろ安堵感さえ抱いているように見受けられる。

それを示すのが、事件から六日たった十月一日、称徳が群臣を集めて下した長文の宣命であろう。その前半は、かつて孝謙に語られたという元正上皇と聖武の詔の引用で、いずれも孝謙の正統性を強調したものであった。とくに聖武のそれが孝謙を唯一の子供と認め、皇位の与奪権を与えたものであることについては以前述べたところである。そのことを記したあと、称徳の詔は次のように述べている。

夫君乃位波願求乎以天得事方甚難止云言乎波、皆知天在止毛、先乃人波謀乎遲奈之、我方能久都与久謀天、必得天牟止念天、種種爾願禱止毛、猶諸聖天神地祇御靈乃不_ニ免給、不_ニ授給一物爾在波、自然爾人毛申願、己我口乎以天毛云都、変天身乎滅、灾乎蒙天、終爾罪乎己毛他毛同久致都、因_レ茲天天地乎恨、君臣乎毛怨奴、猶心乎改天、直久淨久在波、天地毛憎多麻波受、君毛捨不_レ給之天、福乎蒙身毛安家牟、生天方官位乎賜利昌、死_且波善名乎遠世爾流伝天牟、是故先乃賢人云天在久、休方灰止共爾地仁埋利奴礼止、名波烟止共爾天爾昇止云利、又云久、過乎知天方必改与、能乎得天方莫_レ忘止伊布、然物乎、口爾我方淨之止云天、心仁穢乎波、天乃不_レ覆、地乃不_レ載奴所止成奴、此乎持伊波称乎致之、捨伊方謗乎招都、猶朕我尊備拝美誦誦之奉留最勝王經乃王法正論品爾命久、若造_ニ善惡業、令_下於_ニ現在中、

京」と定め、河内国を河内職と改めている。またこれを機に西京造営工事も開始されている。八幡神託事件直後におけるこうした称徳の行幸や西京の造営に対して、不可解な行動であるとか、あるいは由義宮へ逃避すること、道鏡の心をいやし、道鏡即位を実現するための計画の巻き返しを図った、という見方がある。しかしそうではなからう。予期せざる突発事件を処理したあと、本来の姿に戻った称徳にとって、それは政治を忘れるいつときであったに違いない。とくに最後の行幸では西京に近い博多川のほとりで歌垣が盛大に催され、河内職の長官藤原百川らは女帝と道鏡のために和舞を奏している。このような行動は、逆に八幡神託が称徳の求めたものでなかったことを示しているよう。

道鏡との共治体制に戻った称徳にとって、次の課題は後継者、つまり皇太子を定めることであった。しかし、にわか弓削の地で発病した称徳は平城京に戻って百余日、再び政治をみることはなかった。ただ典蔵吉備由利だけが臥内に入り出して奏上を取りついだというが、六月に入り左大臣永手と右大臣真備に軍事権を委譲、ここでもかれらが称徳体制を支えていたといえる。

そして八月四日、ついにその生涯を閉じる。白壁王を立太子するという「遺宣」については、それを偽作とみる意見が強いが、疑う必要はないであろう（四章参照）。称徳の皇統意識は終始一貫しており、矛盾したものはない。これによって最後の仕事である立太子問題の解決を見届けた称徳は、始めて得た安堵の中に、波乱にみちた女の一生を終えている。

(1) 草壁皇子は立太子したが（六八一年）、即位せずに亡くなった（六八九年）。したがって草壁皇統という表現は正確でないが、奈良期における皇位継承がこの草壁系に限定して行なわれたという事実から、これをかりに草壁皇統（の意識）と呼ぶことにする。

(2) そのことは元明女帝が、自らの立場について、実際には文武から皇位を受け継ぎ元正へ授受したにもかかわらず、それ

を文武から聖武へと継承されるべきものだ」と述べていることにもうかがえる（『続日本紀』神龜元年二月四日条、聖武天皇即位の詔に引用された元正天皇の言葉）。

- (3) 聖武上皇が没したのは天平勝宝八年（七五六）五月二日で、道祖王が廃され大炊王の立太子が実現するのは翌年のことである。

- (4) たとえば岸俊男『藤原仲麻呂』や北山茂夫『女帝と道鏡』など。

- (5) 天平勝宝九歳（七五七）八月十八日、駿河国益頭郡の白丁金刺舎人麻呂が、蚕が産卵して「五月八日開下帝釈標知天皇命百年息」と書いた瑞字を献上したのを瑞祥として、天平宝字と改元された。

- (6) ちなみに天平宝字三年（七五九）六月十六日、仲麻呂一族が叙位され、さらに十月八日には惠美押勝の「美」と同字であるのを避けるため氏姓の「君」を「公」、「伊美吉」は「忌寸」に改められた。

- (7) 「光明子の立后とその破綻」（一章）参照。

- (8) 天平十六年（七四四）閏正月、安積親王が急逝したことから、これを暗殺事件とみる理解があるが、そうではあるまい（第二章「聖武天皇『彷徨五年』の軌跡」参照）。安積が聖武の唯一の皇子であるとはいえ、嫡子でなかった以上、阿倍をさしおき立太子することは出来なかった。確証はないが、聖武は孝謙の立太子後、第一には嫡男誕生を待ち、次善の策に直系の安積親王の立太子を考えていたかも知れない。そのためにも現時点で唯一の嫡系であった孝謙を正統な天皇としておく必要があった。

- (9) 聖武が没してわずか十ヵ月後、道祖王が廃され大炊王が立太子されることに明らかであろう。なお『日本霊異記』（巻下）に、仲麻呂が聖武に対して、皇太子道祖王の擁立を承認し忠誠を誓った、というエピソードを記す。むろん真偽のほどは定かでないが、皇嗣問題をめぐる両者の思惑を考える上で興味ぶかい話ではあろう。

- (10) 村井康彦「王権の継受―不改常典をめぐって―」（『日本研究』第一集所収）。

- (11) 文武天皇は慶雲四年（七〇七）四月十三日、草壁皇子の命日を国忌としている。その後草壁に対しては天平勝宝七年（七五五）十月二十一日、聖武上皇不予の際に孝謙天皇が山陵奉幣しているのが知られるのみである（第一部第五章表9参照）。

- (12) 土橋寛「藤原宮と藤原不比等」（『国語と国文』49-10）。

- (13) 文武夫人藤原宮子所生之首皇子（のちの聖武天皇）が立太子できたのも、文武には皇后が立てられず、夫人宮子が后妃

のうち最高位にあったからである。

- (14) この「黒作懸佩刀一口」の由来書については土橋、註(12)前掲論文、蘭田香融「護り刀考」(『伝承文化研究』第一号所収)、上山春平『天皇制の深層』などが考察されている。
- (15) 第Ⅱ部五章「奈良時代の上皇と『後院』―後院の系譜(その二)」参照。
- (16) 本書第Ⅱ部四・五章参照。
- (17) 高取正男「称徳朝の仏教政治」(『史窓』39)
- (18) 北山茂夫氏は神護景雲に改元された際、天平の文字が消えたことをもって「女帝専制の時代から道鏡との共治(へ)と云々」(『女帝と道鏡』93ページ)と共治の言葉を使われているが、共治の実態については何らふれられるところがない。

四章 藤原永手と藤原百川

——称徳女帝の「遺宣」をめぐる——

はじめに

神護景雲四年（七七〇）八月、最後の女帝孝謙（称徳）天皇が亡くなり、即日、天智天皇の孫、白壁王が立太子された。二カ月後の十月、大極殿で即位する光仁天皇である。ちなみに光仁のあとには、その第一皇子山部親王こと桓武天皇が即位し、皇統はいわゆる天武系皇胤から天智系へと移行⁽¹⁾、時代は平安朝を迎えることになる。その意味で、最後の女帝となった孝謙（称徳）は、時代転換のまさにターニングポイントに位置したといつてよい。その孝謙Ⅱ称徳から光仁・桓武朝への移行過程において、きわめて重要な役割を果たした人物が、藤原永手と藤原百川である。白壁王（光仁天皇）や山部親王（桓武天皇）の擁立に深くかかわったとみられるからである。

しかしこれまでの研究を振り返ってみると、この前後における藤原氏の人物——藤原鎌足・不比等や仲麻呂、あるいは藤原良房・基経らに比して、永手論・百川論というものはほとんどみられないし、また言及されたものについていえば事実認識や評価において問題があり、軽々には従えないものがある⁽²⁾。たとえば永手の場合、その活躍期の大半は称徳朝にあったといえるが、この時期に対する否定的な見方に災いされて、永手らについての研究もほとんどなされてはいない。これに対して百川の場合は、何よりもまずその地位や立場を得て活躍する

以前に没したこともあって、これまた十分な研究がなされていない。

奈良朝から平安朝への時代転換がこの二人だけで推進されたわけではもとよりないが、さりとてこの二人の存在と役割を抜きにしてなにも語れないことも確かである。永手が薨じた時、光仁天皇が与えた異例の弔賻や、百川の子緒嗣に対する桓武天皇の優遇ぶりがそうしたことを物語っている。

さて、その藤原永手や百川の画策によって実現したとされるのが白壁王の擁立である。子をもたなかった称徳が、皇嗣を定めないうまま没したため、いわゆる称徳女帝の「遺宣」なるものを偽作して白壁王の立太子を実現したとし、しかもこれについては永手よりはむしろ百川が中心的役割を果たしたとみるのが通説といつてよいであろう。称徳女帝の皇統意識は、前章で明らかにしたように、重祚後は自身と法王道鏡とによる「共治」体制の実現にあって、道鏡を天皇・皇位につける意図はなく、宇佐八幡宮神託事件はいわば一瞬の狂気もたらした事態であった。事件後の孝謙（称徳）は平静に戻ったとみてよい。わたくしのみるところ、草壁皇統の正統なる継承者という自覚と責任感、死の直前まで称徳の脳裏から離れることはなかった。後継者問題を放置したまま没したとは思えない。

前章では論旨の展開上、最晩年の孝謙については問題点を指摘するにとどめ、詳述することを避けたが、以下取り上げる称徳女帝の「遺宣」を分析することは、そこでみた孝謙の皇統意識の「結末」を見届けるためにも必要であろう。それを永手と百川の方に視点をすえて考察してみたいというのが本稿の意図するところである。その意味では、前章を補完する役割をになっている。

なお百川については、光仁朝における活躍、すなわち他戸・山部両親王の立太子問題を含めて論ずべきであるが、これも行論上、ここでは永手が没する時期までに限った。百川が本格的に手腕を発揮するのはむしろそれ以後であるが、永手没後の百川については別個に取り上げたいと思う。⁽⁴⁾

一 称徳女帝と「遺宣」

(1) 『続日本紀』と「百川伝」

奈良末の皇位をめぐる混乱は、一般に孝謙（称徳）が未婚で皇嗣をもたず、さらに道鏡事件に失敗して以後、結局皇嗣を定めないうちに没してしまつたことにある、と理解されている。しかし称徳女帝は本当に後継者問題を放置したままで没してしまつたのであろうか。それでは、先にふれたように、草壁皇統の正統なる後継者として使命と責任を負わされ、また自らも最後まで草壁皇統意識を持ち続けた称徳の心情と大いに矛盾する。

ところで、この称徳女帝のあとに白壁王が立太子される事情については、『続日本紀』宝亀元年（七七〇）八月四日条に次のように記されている。

癸巳、天皇崩于西宮寝殿、春秋五十三、左大臣従一位藤原朝臣永手、右大臣正二位吉備朝臣真備、参議兵部卿従三位藤原朝臣宿奈麻呂、参議民部卿従三位藤原朝臣縄麻呂、参議式部卿従三位石上朝臣宅嗣、近衛大將従三位藤原朝臣藏下麻呂等、定策禁中、立^{（光仁）}諱為皇太子、左大臣従一位藤原朝臣永手受遺宣曰、今詔久、事卒爾爾有依天、諸臣等議天、白壁王波、諸王乃中爾年齒毛長奈利、又先帝乃功毛在故爾、太子止定天奏波、奏流麻爾麻爾宣給布止勅久止宣、

内容の分析はあとに回すが、少なくともこの記事によれば、皇嗣決定の必要に迫られた諸臣たちは、協議の結果、白壁王が年長であり、先帝の功もあるという理由で皇嗣に定め、ただちにその旨を奏上したところ、天皇も承諾、白壁王が立太子された、というものであった。したがってこれによれば白壁王の立太子決定は称徳生前であつたことになる。にもかかわらず『続日本紀』のこの記載は、これまでほとんど重視されることなく、それどころか疑義さえもたれてきた。というのは、皇嗣決定があまりにも敏速で、話がうまく出来すぎているようにみ

られたからである。加えて次のような『日本紀略』所引の「百川伝」や『水鏡』の記載があらわれたことにより、偽宣説が決定的となった。⁽⁶⁾

皇帝遂八月四日崩、天皇平生未^レ立^ニ皇太子^一、至^レ此、右大臣真備等論曰、御史大夫從二位文室淨三真人、是長親王之子也、立為^ニ皇太子^一、百川与^ニ左大臣内大臣^一論云、淨三真人有^ニ子十三人^一、如^ニ後世^一何、真備等都不^レ聴^レ之、冊^ニ淨三真人^一為^ニ皇太子^一、淨三確辞、仍更冊^ニ其弟參議從三位文室大市真人^一為^ニ皇太子^一、亦所辞^レ之、百川与^ニ永手良繼^一定^レ策、偽作^ニ宣命語^一、宣命使立^レ庭令^ニ宣制^一、右大臣真備卷^レ舌無^ニ如何^一、百川即命^ニ諸仗^一冊^ニ白壁王^一為^ニ皇太子^一、十一月一日壬子、即^ニ位於大極殿^一、右大臣吉備乱云、長生之弊、還遭^ニ此恥^一、上^ニ致仕表^一、隱居、

すなわちこの「百川伝」によると、

① 称徳在世中、皇太子が定められなかった

② その後、立太子に関して諸臣の間に意見の対立が起こった

(a) 右大臣吉備真備ら——長親王の男である文室淨三、ついで大市を推薦

(b) 左大臣藤原永手・内大臣良繼・百川——白壁王を推薦

③ 反対派の真備を押え、白壁王の立太子を実現するために、藤原氏らは立太子の当日、宣命を偽作するという非常手段をとった

④ 藤原氏に出し抜かれた真備は恥を感じて致仕を願い出た

ということになる。先の『統紀』が、白壁王立太子を称徳の承認を得たもの——「遺宣」とするのに対して、ここではその宣命を藤原氏らによる偽作^{II}偽宣とみるのである。しかも留意されるのは『統紀』における永手の立場がここでは百川となり、百川が中心となって永手や良繼らと事を運んだという筋道になっていることである。

白壁王擁立について、『統紀』の記事をさしおき、後出の「百川伝」が重視されてきたのは、おそらく古代史研究の中ではほぼ定着している孝謙（称徳）の評価が大きく作用しているように思う。すなわち宇佐八幡神託事件の失敗後も、称徳は再び道鏡即位の機会をねらっていたという理解に代表されるように、政治的展望を何ひとつ持たなかった称徳が、死の直前に皇嗣を定めたとは考えられず、したがってそのことを記す『統紀』は事実を伝えたものとはみなしがたいとするのである。しかし前章で繰り返し述べたように、仲麻呂や母光明子の制約を受けていた時代はもとより、重祚後（称徳時代）でも草壁皇統意識を強く持ち続けていたことを考えると、『統紀』の記事を一概に無視することはできない。わたくしはここでも先入観を捨て虚心坦懐に検討し直す必要があるように思う。

(2) 「遺宣」と「遺詔」

そこであらためて前掲の『統日本紀』宝龜元年八月四日条の記事を検討してみたい。言うまでもなくこれは、この日に没した称徳女帝の薨伝であるが、内容に従って次の三つに分けられる。

①「天皇崩于西宮寝殿、春秋五十三」——称徳女帝の薨去について。

②「左大臣従一位藤原朝臣永手・右大臣正二位吉備朝臣真備……定策禁中、立諱為皇太子」——永手らが策定して白壁王を立太子したこと。

③「左大臣従一位藤原朝臣永手受遺宣曰、……宣給布止勅久止宣」——②の立太子に至るまでの事情を詳しく述べたもので、いわゆる称徳の「遺宣」と称されているのがこれ。

さて、①②については問題なからう。もっとも②の皇嗣策定会議については、この議席に列したのが必ずしも議政官とは限らない、むしろ特定の者たち、すなわち藤原氏一族による策略であった、とし、そこから③の遺宣

についても、「公式とはいいい難い」という認識がその当事者間にもあり、策謀であるとの指摘を避けるために執った方策⁽⁸⁾、つまり称徳没後になされた偽作とみる見方が強い。しかし左・右大臣が揃っているこの日のメンバーをあえて不自然とみる理由はないであろう。

それよりも問題は③が、「左大臣従一位藤原朝臣永手受遺宣^ニ曰く、すなわち称徳女帝の詔文として公表されたにもかかわらず、あと述べるような、詔文にあるまじき表現や内容が記されていることである。このことの意味は重大であるが、管見ではこうした観点から「遺宣」を分析し検討したものはないように思う。そこであらためて③の、いわゆる称徳の「遺宣」を掲載し、検討してみたい。その遺宣とは次のようなものであった（原漢文）。

左大臣従一位藤原朝臣永手遺宣を受けて曰く、今詔^{のりたま}はく、事卒^{にはか}爾に有るに依て、諸臣等議^{はか}りて、白壁王は諸王の中に年齒も長なり、又先帝の功も在るが故に、太子と定めて奏せば、奏せるまにまに宣^{さだ}め給ふと勅^{のりたま}はくと宣^{のりたま}ふ。

参考のため金子武雄氏⁽⁹⁾による通釈を記しておこう。

今仰せ下されるには、事が突然であるので、諸^{もろく}の臣たちが合議して、白壁王は王^{おほきみ}たちの中で年齢も上であり、又、御祖父天皇（天智）の御功績もあることだから、太子^{ひつぎのみこ}の御侯補と定めて奏上すると、奏上した通りに定め給ふと仰せ下されると述べ聞かせる。

金子氏のこの一文、読んでの通り文意がはなはだ不明確であり、文脈すらたどれない感じであるが、これももとはといえば原記事の晦渋さに原因がある。

すなわちこの遺宣で私が留意したいのは、第一に、表記上の問題である。

一般に『統紀』に収める詔文は「詔して曰く、天皇詔旨^{のりたま}勅く……」に始まり、「……と勅^{のりたま}ふ天皇御命を諸聞し食さへと宣^{のりたま}ふ」の言葉で結ばれる例が多い⁽¹⁰⁾。たとえばそのバリエーションであっても、最低限度、詔文として

の体裁を整えているのが普通である。それに比して、この遺宣では「今詔はく、……と勅はくと宜ふ」と記され、形式上詔文の形はとりながらも、とくに結びの語が非常に簡略化された記載となっている。まずこのことの意味を理解する必要がある。

第二は、内容上の問題である。

すなわち「藤原朝臣永手受遺宣⁽¹¹⁾曰、今詔久」とあるから、以下は称徳女帝の言葉⁽¹²⁾詔勅の具体的内容と考えられる。事実「事卒爾爾有依⁽¹¹⁾天」や「諸臣等議⁽¹²⁾天」あるいは「奏流麻爾麻爾定」がそれであるが、その詔文の中に「太子止定天奏波」というような、明らかに臣下の立場からする行為や言葉が含まれている。つまりここには永手の受けた詔文だけでなく、天皇と永手（ら臣下）の間でのやりとりも一括して宣命体で記されているとみななければならない。これは明らかにこの日の『統紀』の記述が、称徳の詔⁽¹³⁾宣命と、永手らの奏上文、いわば原詔と原奏文とが適宜取捨され編み直された上での叙述であることを暗示している。右に述べた形式上の不備も、そうしたことによるものである。先にあげた金子氏の解釈が、主語が二転、三転して文脈がつかめなくなっているのも、そのところをおさえていないことから来る混乱とみてよい。従来はそうした点の考慮が全くなかったわけである。これも「遺宣」に対する先入観のなせるわざであろう。

先入観といえば「遺宣」という表記から一般に遺詔、つまり没後に公表された称徳の言葉（そのように偽作したというのが偽作説）と理解しがちであるが、これについても考え直してみる必要がある。というのも、詔文中にみえる「今詔⁽¹⁴⁾はく」の語句が従来の研究ではほとんど考慮されていないからである。改めて述べるまでもなく、永手が受けた詔文⁽¹⁵⁾遺宣は「今詔はく」で始まるわけだが、たとえば「詔して曰く、今宣はく、奈良麻呂が兵起すに……」（天平宝字元年八月四日条）といった事例に明らかのように、これは詔勅の中にみられる文言の中でも、まさに「今、仰せ下されるには」とのニュアンスを示している。⁽¹³⁾詔の公表の直前に下されたということであ

る。したがってその表記がなされている以上、称徳の「遺宣」もたった今、病床での称徳が発した宣（命令）と考えざるを得ない。つまりこれは遺詔Ⅱ死後に公表された称徳の言葉でなく、生存中に発令したものであることを示している。その意味で、この言葉は大変重要である。

もっともそこで奇異に思われるのは「遺宣」や「先帝」の語であろう。「今詔はく」と永手が述べ聞かせながら、永手の受けた詔を「遺宣」といい、称徳のことを「先帝」と称しているからである。しかしこの疑問は、この日の記事が称徳の薨伝であることを考えれば氷解する。つまり称徳が没した記事を過去の記事として編さんする体裁上、宣↓「遺宣」として編者が呼称をととのえたのであり、それに対応して帝も「先帝」に改めたものと考ええる。でなければ永手が「先帝」の功もある故にと奏上したなら、この「先帝」は称徳ではありえず、天智天皇といった誤った理解にもなるのである。白壁王が天智天皇の時に功績をあげるということは、年齢的にいってありえない。⁽¹⁴⁾

以上から、これは生存中の宣命とみていっこうに不都合はない、というより称徳女帝は生前に詔を発したとみるべきである。偽作とする理由は存しない。そして先に述べたような編纂上の都合を勘案すれば、この「遺宣」と称される記事は、次のような詔文や奏上、あるいはその間における称徳と永手とのやりとりを要約し、一つの宣命本文にまとめ直したものと考えられよう。

- (1) 称徳が永手に示した最初の宣命——「事卒爾に有るに依て、諸臣等議りて」
- (2) (1)を受けた永手は諸臣らと策定し、白壁王の立太子を決議（その議決を天皇に奏上）——「白壁王は諸王の中に……太子と定」

- (3) (2)を聞いて称徳が下した二度目の宣命——「奏せるまにまに定めよ」

こうした経過をへて白壁王は立太子されたのである。実際にはもっと長文の詔であり奏文であつたらう。それ

をここでは各々の中の必要な言葉をピックアップしながら一つの文に組み立てたのである。

ちなみに『続日本紀』光仁天皇即位前紀ではさらに簡略にして記されている。

八月四日癸巳、高野天皇崩、群臣受_レ遺、即日立_レ諱為_三皇太子_一、

つまりここでは遺_二遺宣を受けたのが永手でなく群臣と一括されてしまっている。また策を禁中に定めて白壁王を推薦したことや、それを天皇に報告して許可を得たこと、なども省略されてしまっている。⁽¹⁵⁾ 称徳の命を受け、群臣会議の下に白壁王が立太子されたことを述べればよかったからである。

それにしても管見では『続日本紀』の中で遺宣という表記はここ一カ所にみえるだけである。持統上皇や文武天皇が自らの葬儀に関して指示したことも、また元明が文武のあとを受けて万機を摂知するようになったのも、いずれも「依_三遺詔_二」と記している。⁽¹⁶⁾ つまり遺詔とは、生前の天皇の意志が天皇没後に公表され実現された場合の表記である（もっともその場合でも、内容を生存中に聞かされている可能性は十分にあった）。こうしたことから考えると、遺宣と書かれていても、それが称徳生前の言葉であったとみることをなんら妨げるものではないであろう、というより、生前の言葉であったから、（遺）詔ではなくことさら（遺）宣と書かれたとみるべきである。

(3) 策を禁中に定める

孝謙（称徳）は白壁王の立太子を承諾することで文武以来の草壁皇統に一応の結着をつけて没したと考える。その間、病床の孝謙の意を体して事を運んだのが藤原永手であった。『続日本紀』には白壁王を擁立するという結論だけが記され、その間の経緯を逐一記してはいないが、むろん簡単に群臣の合意が得られたというわけのものではなからう。それを記すのが「百川伝」や『水鏡』であった。

けだしこれ以前でも七世紀末、珂瑠皇子（文武天皇）立太子をもくろむ持統が日嗣の決定を王公卿士に審議させ

たところ、「時に群臣、各々私好をはさみ、衆議紛紜」であったといい（『懷風藻』葛野王伝）、また近くでは天平宝字元年（七五七）、道祖王が廃太子されたあとの群臣審議でも塩焼王や池田王らが候補にあげられ、当初から大炊王（淳仁天皇）立太子が衆議の一致するところとはならなかったこと、周知の通りである。ましていまの場合、称徳女帝が病気で出席していない会議であったことを考えると、相当の激論、意見の対立があったとしてもおかしくはない。「百川伝」や『水鏡』に伝えるように、真備が急先鋒となって文室浄三（もしくは弟の大市）を推した可能性も十分にある。孝謙の皇太子時代の師であった真備が寵を得て永手や白壁王らとともに称徳・道鏡朝を支えたとい⁽¹⁷⁾っても、それはあくまでも称徳の信任に応えたもので、決してその体制に共鳴したというわけではなかったろう。称徳の死期が切迫した時、皇嗣をめぐる意見のくい違いが表面化したとしても不思議ではないし、むしろその方が自然というべきである。ことに草壁の嫡系に終止符が打たれるとなれば、皇統をせめて天武の傍系（文室浄三・大市兄弟は賜姓されたが長親王の子で天武の孫に当る）に戻そうとするのは、いかにも儒者たる真備にふさわしい意見と思われる。そうしたことからわたくしは「百川伝」や『水鏡』の記載が全く根拠のない、荒唐無稽のものとは思わない。といって真備が、そこに記されるほどの強硬な態度をとったとすることは賛成できない。ましてや宣命を読み上げる時に偽作の宣命とすりかえた、とか、藤原氏の謀略に真備が舌を巻いてどうすることも出来なかった、といったような事実はなかったとみる。

真備については「百川伝」に、皇位継承の争いに敗れた真備が恥を感じて致仕を願い出たとあり、事実、白壁王が立太子した一カ月後の宝龜元年（七七〇）九月七日、骸骨を乞う上表を提出（同年十月八日条）、翌二年三月にその職が解かれていたことから、白壁王を擁立した藤原氏と反藤原的立場の真備の対立を記す「百川伝」を真実とみるむぎが多い。しかしこれ以前の天平宝字八年（七六四）正月、大宰大貳であった真備は、七十歳に達したというので大宰府を通して致仕を願い出たことがある。それが上奏されない間に仲麻呂の乱が起こり、急拠内裏

に召されて軍務に参画、乱後は称徳朝の重鎮として仕えたのであり、致仕の意向は以前からのものであった。ちなみにこれに対する光仁（十月一日に即位）の返詔は一カ月後の十月八日に下されたが、

昨省^ニ来表^一、即知^ニ告帰^一、聖忌未^レ周、懸^レ車何早、悲驚交緒、卒無^ニ答言^一、通夜思^レ勞、坐而達^レ旦、不^レ依

所^レ請、似^レ逆^ニ謙光^一、欲^レ遂^ニ来情^一、弥思^ニ賢佐^一、宜^レ解^ニ中衛^一猶帶^中大臣、坐塾之閑、勿^レ空^ニ朝右^一

という理由で真備の骸骨は許されず、ただ激務の中衛大将のみがはずされるにとどまった。そこには真備に対する信頼感がうかがわれ、真備を排除しようとする意図は微塵も感じられない。翌年三月に真備が右大臣を解かれたのも「依^ニ累抗表^一許^レ之」（『公卿補任』）したというものであった。「累抗表」した真備の行為と、その前月、二月二十二日に永手が急逝したことは無関係でなかったとみられる。ともあれ、真備の致仕は年来の宿願であり、かつ称徳の死、白壁王の立太子を見届けた上でのものであったとみる。

それにしてもなぜ『続日本紀』に疑義がもたれ、「百川伝」や『水鏡』の記載に真実があると受けとられてきたのか。わたくしのみるところ、前節でみた②―「左大臣従一位藤原朝臣永手、右大臣正二位吉備朝臣真備、参議兵部卿従三位藤原朝臣宿奈麻呂、参議民部卿従三位藤原朝臣繩麻呂、参議式部卿従三位石上朝臣宅嗣、近衛大將従三位藤原朝臣蔵下麻呂等、定^ニ策禁中^一、立^ニ諱為^ニ皇太子^一」（『続日本紀』）の理解に大きな問題がある。つまり「定^ニ策禁中^一」めることを、従来は何か策略をめぐらして決定したと解釈して疑わず、天皇危篤の下、未決定の皇嗣という状況の中で藤原一派（百川・永手ら）が白壁王冊立のための策略をめぐらした、という理解に陥っていたのであった。「百川伝」や『水鏡』の記述はまさにその「策定」の内容にふさわしいものではある。しかし果してそうであらうか。

この点に関して、わたくしには天平勝宝八年（七五六）、聖武上皇の遺詔によって立太子された道祖王が翌年廃される時の経緯が想起されてならない。『続日本紀』淳仁（廃帝）即位前紀にはその時の事情を、「高野天皇（称

徳)、皇太后(光明子)、与_ニ右大臣從二位藤原朝臣豐成、大納言從二位藤原朝臣仲麻呂、中納言從三位紀朝臣麻路、多治比真人広足、摂津大夫從三位文屋真人智努等、定_ニ策禁中_一、廢_ニ皇太子(道祖王)_一、以_レ王還_レ第_一らしむ、とある。先ほどの解釈に従うならば、いかにも激論がたたかわされ、計略をめぐらして廢太子に追いこんだことになるが、廢太子時(天平宝字元年三月二十九日)の『続日本紀』の記述では「皇太子道祖王、身居_ニ(聖武上皇の)諒闇_一志在_ニ淫縱_一、雖_レ加_ニ教勅_一、曾无_ニ改悔_一、於_レ是勅召_ニ群臣_一、以_ニ先帝遺詔_一、因問_ニ廢不之事_一、右大臣(豐成)已下同奏云、不_ニ敢乖_ニ違願命之旨_一、是日廢_ニ皇太子_一、以_レ王歸_レ第_一」としている。すなわち孝謙は形式的であったにせよ右大臣豐成以下の群臣に道祖王のことをはかった上で廢太子を決定したわけで、それを先の淳仁即位前紀では「定_ニ策禁中_一」との表記をとったのである。これまでの経緯からいって、白壁王の擁立も、真備らの合意を得た上での決定であったとみるべきである。

これまでも述べたように、わたくしは決して「百川伝」などにみえる伝承を否定するわけではない。議論が白熱したことも事実であったろう。しかしそうであればなおさら、そうした衆議を白壁王の擁立に収斂したのは、まさしく永手の力量であり政治的手腕によるところであったとみるべきである。「洎_{オホビテ}于宮車晏駕_一、定_ニ策遂安_ニ社稷_一者、大臣之力居多焉_一」という永手評(『続日本紀』)は、そうした実績を物語っているものであろう。

『続日本紀』に「諸臣議天」とか「定_ニ策禁中_一」といった記載がなされていたことから、白壁王擁立の経緯が多分に誇張され、「百川伝」や『水鏡』などの話に仕立てられていったというのが真相ではなからうか。⁽¹⁸⁾

二 白壁王の擁立と永手

(1) 称徳朝における永手

それにしても永手はなぜ白壁王の擁立を進めたのであろうか。先に引用した立太子の宣命には、「諸王の中に

(あつて)年齒も長」け、「先帝の功も在る」がゆえとある。ところが一般には、これは表面上の理由であり、藤原氏の真意は別の所にあつたとみてさまざまな見解⁽¹⁹⁾が出されている。しかしわたくしはこの人撰を、永手が言われるほどの藤原氏の立場で進めたとは思わない。それは永手の業績や官職をたどることで明らかとなろう。前章と多少重複するきらいがあるが、ここでもう一度永手の置かれた立場を確認しておきたい。

藤原永手は房前(北家)の二男で、母は橘諸兄と同母妹の牟漏女王である。つまり孝謙女帝と同じく橘三千代は外祖母に当るから、当時の藤原氏の中では、血縁的にもっとも孝謙に近い存在であつた。永手の経歴を逐一述べることは省略するが、表4からも明らかのように、主な活躍期は孝謙朝以降、光仁朝初期に及ぶ。その間、淳仁即位後、すなわち仲麻呂時代に目立った業績のないことを除くと、その時々で重要な使命が与えられ、その役割を果たしていることが知られよう。なかでも天平宝字元年(七五七)四月、道祖王廃太子後の皇嗣策定会議には中務卿の立場で参画し、右大臣豊成とともに塩焼王を推薦したこと(もっとも決して強く推してはいない)、同年七月、橘奈良麻呂の変に際しては勅使として与党一味を勘問、とくに東大寺の造営が人民を辛苦させていると非難した奈良麻呂に、それは汝の父諸兄の時に始まったのではないかと永手が切り返したことは有名である。こうした永手の言動と業績から判断するに、その力量は衆目の認めるところであり、しかも人柄も穏便で、決して独断専行型の人物ではなかつたとみられる。永手が亡くなった時の光仁天皇の弔賻の宣命に、「大臣の万政総ねもちて、怠り緩む事なく、曲げ傾くる事なく、王臣等をも彼此別く心なく、普く平らけく奏さひ、公民の上をも、広く厚く慈みて奏さひし事、これのみにあらず(以下略)」とみえるのも、あながち誇張とは思えず、永手の人柄を表わしている。先に塩焼王を推したのも、そうした穏当な判断によるものであつたろう。大炊王立太子の翌日、仲麻呂(紫微内相)とともに、立場の異なっていたはずの永手も任官(中納言)されているところに、永手の立場がうかがわれるし、孝謙の信任を得ていたことも知られよう。

表4 永手年表

(六国史をもとに作成した)

	年 号	年齢	主な経歴・事績	備 考
聖武(上皇) ・ 孝謙(天皇) 時代	天 平 9 (737)	24	9 月 従五位下	4～8 月 藤原四子没
	天平勝宝元(749)	36	4 月 従四位下	
	2 (750)	37	正月 従四位上	
	4 (752)	39	正月 大和守に任	
	6 (754)	41	正月 従三位	
孝仲 謙麻呂 時代・	8 (756)	43	7 月 中務卿兼左京大夫侍従(在任)	4 月 道祖王廃太子 5 月 大炊王(淳仁)立太子, 仲麻呂, 紫微内相に任 7 月 奈良麻呂の変
	天平宝字元(757)	44	4 月 塩焼王を皇太子に推薦 5 月 中納言に任 7 月 小野東人らを勘問, また宣勅使として藤原豊成男を召す	
	2 (758)	45		
	6 (762)	49		
淳仲 仁麻呂 時代・	7 (763)	50	正月 兵部卿を兼任	8 月 淳仁天皇即位 6 月 孝謙, 淳仁天皇を非難し, 大権を掌握
称 徳・ 道 鏡 時 代	8 (764)	51	9 月 正三位, 大納言に任	9 月 仲麻呂の乱, 真備従三位 白壁王正三位 右大臣藤原豊成召還 道鏡大臣禪師に任
	天平神護元(765)	52	正月 戦功により勲二等を授かる 9 月 紀伊行幸の御装束司長官に任(時に従二位)	10 月 淳仁廃位, 孝謙重祚 正月 真備・白壁王ら勲二等を授かる 9 月 真備, 行幸の御装束司長官に任 閏10 月 道鏡太政大臣禪師
	2 (766)	53	正月 右大臣に任 10 月 左大臣に任	11 月 右大臣豊成没 正月 白壁王大納言 真備中納言 3 月 真備大納言 10 月 道鏡法王となる 真備右大臣
	神護景雲 3 (769)	56	2 月 従一位	2 月 真備従二位 9 月 道鏡事件
	宝 亀元(770)	57	6 月 近衛・外衛・左右兵衛のことを撰知	6 月 真備(中衛・左右衛士のことを撰知) 8 月 称徳没
光 仁 時 代	2 (771)	58	2 月 没	10 月 光仁即位 11 月 井上立后 正月 他戸立太子

さて、こうした永手であるが、先にもふれたように、仲麻呂・淳仁時代には目立った業績がなかった。これは仲麻呂の権勢下に置かれていたことと無関係ではなからう。⁽²⁰⁾それを証拠づけるかのようには、その永手が天皇の股肱の臣として登用されるようになるのは、孝謙が淳仁と対立し大権を掌握してからである。詳しくいえばその半年後の天平宝字七年正月、兵部卿に任命されて以後のことである。この任命が孝謙の意に出ることはいうまでもないが、永手の性格や忠勤ぶりが孝謙に信頼感を抱かせたのであろう。以後永手は称徳が没するまでそのブレーンとして、真備とともに称徳朝を支えることになる。すなわち翌天平宝字八年九月、仲麻呂の謀反が発覚するや即日正三位、ついで大納言従二位となり（真備は即日従三位、ついで正三位）、また平定後には勲二等（真備も同じ）⁽²¹⁾が与えられている。仲麻呂はその計画をすべて事前にキャッチされ、たえず孝謙の追討軍に先手を取られているが、軍事上の献策を行なった真備に対し、内政面での中心になったのが永手であったことは容易に理解されよう。永手に対する孝謙の信任と期待は、道鏡が太政大臣・禪師となり、さらに法王となるに及んで決定的となったようだ。天平神護二年（七六六）正月には藤原豊成の死没によって右大臣となり（この日の人事で真備は中納言、ついで大納言に任）、また同年十月、道鏡が法王になったその日、同じ詔文の中で永手は左大臣（真備は右大臣）に任命されている。繰り返す述べるように、これはまさしく称徳・道鏡体制の補佐役として永手が信頼されていたことを如実に示すものである。それを受けた永手（さらにいえば真備や白壁王らも）は、内心はともかく、表面上は称徳・道鏡体制を支える役割を果しているのである。神護景雲三年（七六九）には自邸に称徳の行幸を得て、従一位を授けられている。⁽²²⁾

もっともこうした永手や真備の昇進を、道鏡の処遇に対する称徳女帝への不満を押えるための抱き合わせ策とみるむきもあるが、わたくしには従えない。宝龜元年（七七〇）、称徳の病気が長びいた時、元来天皇の掌握するところであった統帥権のうち近衛・外衛・左右兵衛の事を永手（中衛・左右衛士の事は真備）に摂知させているの

はよほどの信頼なくしてはありえない措置であらう。

仲麻呂没後、称徳⁽²⁴⁾Ⅱ道鏡による共治体制を支えたのは、永手を筆頭とし、真備や白壁王ら貴族・皇親であった。永手らの存在と役割がなければ、称徳Ⅱ道鏡共治体制の実現も維持も不可能であったというのがわたくしの理解である。したがってまたこの共治体制は、けっして孤立していたものではなく、貴族官人社会のなかにその支持基盤を有していたと考える。

(2) 「志乃比己止」の書

称徳朝における永手の立場や称徳の信任ぶりをもっとも端的に示すのが、次に掲げる二つの宣命である。

(A) 二年春正月甲子、詔曰、今勅久、掛畏岐近淡海乃大津宮仁天下所知行之天皇我御世爾奉侍末之藤原大臣、復後

(丙午) 丁巳朔
(不比等)

乃藤原大臣爾賜天在留志乃比己止乃書爾勅天在久、子孫乃浄久明伎心乎以天、朝廷爾奉侍牟乎波、必治賜牟、其継方

絶不^(不比等)賜止勅天在我故爾、今藤原永手朝臣爾、右大臣之官授賜止勅天皇御命乎、諸聞食止宣、

(B) 復勅久、此寺方朕外祖父先乃太政大臣藤原大臣之家仁在、今其家之名乎継天、明可仁浄伎心乎以天、朝廷乎奉助理

仕奉流右大臣藤原朝臣^(永手)遠婆、左大臣乃位授賜比治賜、

前者(A)は天平神護二年(七六六)正月八日、時に大納言従二位であった永手に右大臣を授ける際に下されたものである。この永手の任命は前年十一月、右大臣豊成が没したあとの後任人事であったが、その意味するところは単なる後釜の補充にとどまらない。なぜなら「近淡海の大津宮に天下知しめしし天皇が御世に侍へ奉りまし藤原大臣」Ⅱ鎌足、「後の藤原大臣」Ⅱ不比等の跡を継ぐ人物として、永手に右大臣の地位が与えられているからである。この宣命は称徳にとって永手の存在がいかに大きなものであったかを示す以外の何ものでもない。そして十日後の十七日、称徳は永手第にはじめて行幸、永手に正二位、妻の正五位上大野仲智に従四位下を与え

ている。

つぎに後者(B)は同年十月二十日、隅寺から出現した舍利を法華寺に迎えた折に下されたもので、この時、道鏡が法王とされている。そしてその同じ詔文の中で、不比等の邸宅に法華寺を受け継ぐ藤原家の長として永手に左大臣が授けられたのであった。右大臣(A)となつてから、九カ月後に下されたものである。

こうした永手の抜擢は、仲麻呂の乱以後における称徳女帝の一貫した姿勢であるが、この二つの宣命は女帝のおかれた政治的立場を示すものとしても興味深い。すなわちこの宣命を通して称徳は、

①永手が藤原一族の中でも鎌足・不比等を受けつぐ、いわば藤原宗家の立場にあること

②そうした立場の永手が天皇である称徳に朝廷を補佐してくれることを内外に誇示したのである。

ところで、このうちわたくしがとくに注目したいのが前者(A)の宣命である。というのも天平勝宝八年(七五六)六月二十一日、聖武上皇の七七日の斎会に際して献納された「東大寺献物帳」から知られる、例の草壁皇子の「黒作懸佩刀」の由緒書との関連が想起されるからである。煩瑣なきらいはあるが、ここでもう一度宣命(A)を、適宜言葉を補いながら意識すると、次のようになる。

近淡海の大津宮にあって天下を治められた天皇(天智)の御世にお仕えしてきた藤原大臣(鎌足)、また後の藤原大臣(不比等)に(天皇が)賜ったしのびごとの文に、淨く正しい心で朝廷に仕えてくれる汝らの子孫たちには、必ずそれに報いよう、汝らの家の後継者を断絶させはしない、とある。だから今、藤原永手に右大臣の官を授けよう。

志乃比己止(しのびごと、誄詞)とは故人をしのんで哀悼の意を述べることばで、⁽²⁵⁾鎌足や不比等に対して生前の徳行などを哀惜する詔が与えられたのであろう。具体的に内容を示すものが伝えられているわけではないが、⁽²⁶⁾

「子孫の淨く明き心を以て、朝廷に侍へ奉らむをば必ずや治め賜はむ、其の繼は絶ち賜はじ」という言葉には、天皇家と藤原氏のきわめて密接な関係が示されている。それは両者の信頼と相互補完・連帯関係の立場を約束するものにほかならない。まさに「黒作懸佩刀」の由緒書と重なり合うものであろう。この由緒書きは草壁皇子の太刀、いわば草壁皇統のシンボルが不比等を通して伝えられていることを述べたもので、天皇家と藤原氏の信頼関係を示す証しであった。そしてこうした不比等の立場を受け継いだのが、まさにこの永手であることを先の宣命は述べているのである。

道鏡との共治体制を実現し維持していくには、永手の協力が絶対に不可欠であった。聖武や光明子といった後見を失ない、一人の身内も持たない称徳天皇の、それが弱味であった。ある意味では草壁や高市皇子を失なったあとの持統朝のあり方にも似かようなものがある。その期における持統と不比等⁽²⁸⁾の協力関係を、永手との間に再現しようとしたのが称徳のこの宣命であり、いわば永手には持統朝における不比等の役割が求められたのであった。永手は、称徳朝における「不比等」であった。

右大臣に任命するに際して、鎌足・不比等に賜わったという「志乃比己止の書」が持ち出された理由がそこにある。

(3) 白壁王の立太子

さて、死期を悟った称徳女帝は、永手に皇嗣問題の密議を命じた。称徳の代理として全権を永手に委ねたのも、これまでみてきた両者の信頼関係からすれば、けだし当然のことであつたろう。むろん議論の分かれることは当初から承知されたことであつたに違いない。そうした衆議を統一し、白壁王の擁立に一本化したのは永手の手腕によるものであり、その報告を受けた称徳は、白壁王の立太子を確認した上で没したのであった。

ところでこれ以前から、皇位継承をめぐる不穏な動きが日立ちはじめていた。聖武天皇の皇子と称する男子が出現したり（天平神護二年）、例の道鏡事件の四カ月ほど前には氷上志計志麻呂を皇位につけようとする詐謀があった。志計志麻呂は不破内親王が塩焼王との間に生んだ子供で、県犬養広刀自を通して聖武の血をうけた男子である。いずれの事件も聖武とのつながりをテコに皇位篡奪を狙っているのが特徴であるが、こうした風潮の中で白壁王が擁立されたわけである。

周知の通り、白壁王自身は聖武と血縁関係をもたないが、妻の井上内親王は聖武の娘（母は不破内親王と同じ県犬養広刀自）であったから、その井上を介して聖武の血脈に連なる一面があった。その意味で白壁王の擁立は当時の状況のなかではもっとも妥当な選択であったといえよう。そしてわたくしが興味深く思うのは、そうした人撰にみられる永手の判断である。

これ以前、道祖王廃太子後の皇嗣策定会議において永手の推薦したのは塩焼王だった。おそらく県犬養系の不破内親王（塩焼王の妻）を介して塩焼王が聖武に連なるということがその理由であったろう。仲麻呂が身内の大炊王を推したことに比すれば、筋の通った理屈であったといえるが、永手はその論理をこの白壁王の場合にも貫いたわけで、その点、草壁Ⅱ聖武嫡系消滅後の皇位継承に関する永手の考えは、聖武の傍系を推すという点で首尾一貫していたといえてよい。しかもそれは、従来いわれるような藤原氏の利害に基づくものでなく、穏当かつ適切な判断であった。⁽²⁹⁾ 称徳もそうした永手の考え方を十分承知していたに違いない。

さて、群臣審議の結果、白壁王は年長であること、また称徳帝に対しても功績多大であり、擁立してはどうか、という永手の報告を称徳はどのような思いで聞いたであろうか。

わたくしのみるところ、白壁王の擁立は当初から称徳の期待するところであった。そのことは大納言昇任以後の白壁王の経歴からも判断されるように思う。

永手（和銅七年生）とほぼ同年齢の白壁王（和銅二年生）は、すでにふれたように永手の下にあって称徳・道鏡体制を支えた一人であった。事実、仲麻呂の謀反が発覚して数日後、正三位（当時従三位・中納言）に叙され、平定後はその功により永手・真備らとともに勲二等を授けられた。その後、称徳の紀伊行幸の折には御前次第司長官をつとめ、翌天平神護二年正月、永手が右大臣に任命された同日、大納言に昇任している。この時白壁王は五十八歳であった。

ところが注目したいのは、これ以降官職・位階ともに昇叙のことなく、自身の立太子に至っていることである。その間四年有半であった。むしろこの間、王に失策があったとも思えない。ちなみに真備は、白壁王が最後の官大納言に任命された同日、中納言に就任（正月）、つづいて大納言（同三月）から王を超えて右大臣に昇任（同十月）している。白壁王の立太子に至るまでの官位停滞期間、白壁王を取り巻く状況を語ってくれる史料はないが、しかしそれまでの昇進ぶりに比しての急な停止に、何らかの状況変化があったことだけは間違いない事実であろう。確証のあることではないが、わたくしにはその停滞時期——道鏡が法王に任命された前後に始まる——が、白壁王立太子の構想と無関係ではないように思われる。

今江広道氏の研究によれば、⁽³⁰⁾律令制下の皇太子には叙品・任官のないのが原則であったようで、それに従えば、仲麻呂の乱の功労者として昇叙された中で、白壁王のみがある時期から停滞（しかも兼任官もなし）しているのも、予定された昇叙の停止であったとみてよいのではないか。つまり白壁王の擁立はこの頃からの計画であり、生前の称徳の意向であったことを暗示しているよう。年長であるだけでなく、称徳朝を支えた一人であったことは、最善でなかったにせよ、称徳の跡を受け継ぐものとしてはもっともふさわしい人物であったろう。しかも妻の井上を介して聖武に連なる面もあった点で、皇嗣決定に最大の責任をもつ称徳にとって、親近感を抱かせる人物であったと思われる。

こうした称徳の思惑を、むろん永手が承知していなかったはずはない。生前にそうした考えを称徳が永手に漏らしていたことも十分に考えられるところである。「事卒爾に有るに依て、諸臣等議りて（奏上せよ）」という宜命を受けた永手は、そうした称徳の意向を熟知した上で諸臣にはかり白壁王の擁立を実現した、というのがほぼ間違いない事実といってよからう。白壁王の擁立を意図しながら称徳があえて遺詔を残さなかったのは、おそらく父聖武の遺詔⁽³¹⁾——道祖王の立太子と廃立——の二の舞になりかねないことを知っていたからではなからうか。皇位が天皇個人のものでなく、衆目の合意を得て始めて国家の君主たりうることを身をもって体験した称徳だったからである。合議という方法をとったのも、最後まで皇統に対する責任を感じていたことを示している。

なお付言すれば、白壁王の擁立に聖武の血をひく他戸の存在が視野に入っていたことは事実であろう。しかしこの時点で他戸に決定的に有利な条件があったわけではない（これについては五章参照）。したがってその他戸の立太子のために、ひとまず父の白壁王を中継ぎとして即位させた、といった理解は、わたくしには本末転倒した議論⁽³²⁾とは思えない。

三 百川の役割

これまで称徳女帝の「遺宣」や藤原永手について論じてきたが、周知の通り、その際必ず引き合いに出される人物が藤原百川であった。百川を策士とみて、白壁王擁立の中心的役割を果たした、とか、そこまでいわないまでも、称徳女帝不予の状態を知った頃から白壁王擁立を永手らに働きかける一方、自身は道鏡に密着して行動し、道鏡を皇太子策定から遠ざけるための策謀に全力を傾け、藤原氏が一丸となって新政権の形成をめざしていた、といった理解⁽³³⁾もある。ともかく白壁王の擁立に百川もかかわっていたとみるのが通説で、その根拠の大半が「百川伝」や『水鏡』にあったことは、すでに幾度となくふれたところである。

しかしわたくしのみるところ、白壁王の擁立に百川が直接かわったことはまずありえない。むろん立太子の策定会議に出席したこともない。その点、百川の名を記さない『統紀』の記載に誤りはなく、それが永手の果した役割と決定的に違うところである。そのことは、次に記す光仁天皇の両者に対する心情の違いにも端的に示されていよう。

及^レ薨、天皇甚痛^ミ惜^ミ之、詔遣^下正三位中納言兼中務卿文室真人大市、正三位員外中納言兼宮内卿右京大夫石川朝臣豊成、弔^弔贈^之曰、藤原左大臣爾詔大命乎宣、大命坐詔久、大臣明日者参出来仕^牟止待比賜間爾、休息安麻利^且、参出末須事波無^之帝、天皇朝乎置而罷退止聞看而於母富佐久、於与豆礼加母多波許止乎加母云、信爾之有者、仕奉之太政官之政乎波、誰任之^且加母罷伊麻須、孰授加母罷伊麻須、恨加母悲加母、朕大臣、誰爾加母我語比佐氣牟、孰爾加母我問比佐氣牟止、悔弥惜弥痛弥酸弥、大御泣哭之坐止詔大命乎宣、悔加母惜母加、自^二今日^一者、大臣之奏之政者不^二聞看^一夜成牟、自^二明日^一者、大臣之仕奉儀者不^二看行^一夜成牟、日月累往麻爾麻爾、悲事乃未之弥可^レ起加母、歳時積往麻爾麻爾、佐夫之岐事乃未之弥可^レ益加母、朕大臣春秋麗色乎波、誰俱加母見行弄賜牟、山川淨所者、孰俱加母見行阿加良閑賜牟止、歎賜比憂賜比大坐坐止詔大命乎宣、（以下略）

これは宝亀二年（七七二）二月、永手が没した時に下された光仁の弔贈の詔の一部である。哀惜の情はさらに連綿と続くが、永手に対する追慕と慟哭に満ちた異例の弔贈であり、光仁擁立に果した永手の役割の大きさをうかがうに十分であろう。

百川、平城朝参議正三位式部卿兼大宰帥宇合之第八子也、幼有^二器度^一、歴^二位顯要^一、宝亀九年至^二從三位中衛大將兼式部卿^一、所^レ歴之職、各為^二勤恪^一、天皇甚信^二任之^一、委以^二腹心^一、内外機務莫^レ不^二関知^一、今上^{（桓武）}之居^二東宮^一也、特属^レ心焉、干^レ時上不予、已^レ経^二累月^一、百川憂形^{アラハレテ}於色、医薬祈禱、備尽^二心力^一、上由^レ是重^レ之、及^レ薨甚悼惜焉、時年四十八、延暦二年追^二思前勞^一、詔贈^二右大臣^一、

一方これが、宝龜十年（七七九）七月九日に没した百川の薨伝である。永手にみられたような光仁の弔贈は『統紀』にはなく、光仁にとって両者の立場が同じでないことを示して余りがある。むしろここには桓武天皇との関係が強調されている。もっとも「天皇甚信_レ任之、委以_二腹心_一、内外機務莫_レ不_二関知_一」と記すように、百川も光仁の腹心として重用されたことも事実であるが、永手の立場に比すべくもなかった。こうした百川の存在や光仁天皇（白壁王）との関係は、もう少し詳しくかれの事績や官歴をたどることといっそう明らかとなろう。

百川は式家宇合の八男で天平四年生まれであるから、永手より十八歳、光仁天皇より二十三歳年下であった。この百川の経歴をわたくしは三期に区分できるように思う。第一期は称徳・道鏡時代、第二期は白壁王立太子から永手が没するまでの時期、第三期は永手が没して以後、である。そして百川が光仁の腹心として活躍するのは第三期の中でも最晩年と考えるが、そこでの百川については次章（「桓武天皇の皇統意識」）に委ね、ここでは永手とのかかりから第一期と第二期における百川を考えてみたい。

第一期 称徳・道鏡時代

表5から明らかなように百川は神護景雲以前、すなわち仲麻呂Ⅱ淳仁時代には官職に恵まれず、さしたる働きもない。仲麻呂の乱平定後の勲功にも名がみえず、当時三十三歳の壮年であったが、おそらく乱そのものに直接関わることはなかったのであろう。この仲麻呂の乱に関してはむしろ弟（異母）藏下麻呂の活躍が目立つ。

『統日本紀』によれば、仲麻呂の謀反発覚の折、朝廷軍を率いてその追討に向ったのはこの藏下麻呂であり、その功により乱後、従五位下から一挙に従三位に叙され、永手らとともに勲二等が与えられている。淳仁廃帝母子を淡路国に移送したのもこの藏下麻呂である。またそうしたことから翌年、初代の近衛大将に任じられるなど、業績は兄百川の比ではなかった。ちなみに仲麻呂Ⅱ淳仁時代でも、位階こそ百川に遅れるが官職では少納言や備前守を経るなど実績をあげている。百川の母が正六位上久米連奈保麻呂の女であるのに対し、藏下麻呂の母は従

五位上佐伯徳麻呂の女、といった出自の違いも無関係ではなかったろう。

それはともかく、こうした百川が急激に地位を得るようになるのが称徳朝に入ってからのもので、『続日本紀』神護景雲元年（七六七）二月二十八日条には、「左中弁侍従内匠頭武蔵介正五位下藤原朝臣雄田麻呂（百川）為三兼右兵衛督」とある。左中弁・侍従・内匠頭・武蔵介の各々にいつ就任したかは明らかでないが、このように百川の場合、兼官数の多いのが特徴といえそうだ。なおこの時兼任した右兵衛督は、かつて蔵下麻呂が兼任していたものであった。

さて、百川の兼官数の多さは称徳朝から光仁朝の初期にまで続くが（表5参照）、官職を通してみる称徳時代の百川について、さらに次のようなことが指摘できよう。

その一つは神護景雲二年十一月に檢校兵庫副將軍、翌三年三月には内豎大輔を兼任するが、いずれもその長官（檢校兵庫將軍・内豎卿）は道鏡の弟弓削浄人の就任するところで、いわば弓削浄人の配下で百川が事実上の指揮をとっていたということである。このうち内豎省はこれ以前からあったが、（道鏡・称徳の意向で）八省に並ぶ規模に拡大されたものというから、百川が称徳・道鏡に重用され、永手や真備らの下で称徳朝を支える一人であったことも事実である。このことに関連して想起されるのは神護景雲三年十月、称徳と道鏡が由義宮に行幸した折、百川が河内守に任じられ、さらに由義宮が西京と改称され河内職とされるに及んで河内大夫に任じられたことである。三十余日に及ぶこの行幸の間、百川は河内にいて行事を取りしきり、また翌年二月再度の行幸時、葛井以下六氏の男女二百三十人が歌垣に供奉したあと百川が和舞を奏上したことなど、周知の通りで、称徳・道鏡の寵愛ぶりがうかがえる。

その二は、中務大輔や内匠頭など機密にかかわる要務にたずさわっていたことである。しかも一時期はこの両職を同時に兼任している。おそらく百川は事務能力にたけた人物であったのであろう。先にみた薨伝の百川評

(内外機務莫_レ不_レ関知)を考える上でも留意される。

その三は就任年数であるが、百川は先に述べた右兵衛督の地位に十一年間いた。しかもそれは宝亀九年(七七八)、中衛大将に任じられて始めて解かれたわけで、これは百川の考え方を知る上でも興味深い点である(たとえば仲麻呂は中衛大将を十五年間、自ら握って放さなかった)。

こうした実績をみるに、百川の官人としてのスタートは決して恵まれたものではなかった。それは弟の蔵下麻呂と比べてみても明らかであろう。ところが称徳朝に入ってから述べたような立場を得たのは、やはり敏腕な実務官僚であり、どちらかといえば小才のきく人物であったからとみたい。

それにしても百川が称徳朝に入ってから地位を得、寵愛されるようになったのはなぜか。わたくしはそのことに百川の生母無位久米連若女(奈保麻呂の女)の存在が深く関わっているように思う。すなわち若女は神護景雲元年十月、石上・大伴並びに弓削姓の二人の女性とともに従五位下を与えられ、さらに翌二年十月には従五位上を授かっている(宝亀三年正月―正五位上、同七年正月―従四位下、同十一年六月卒)。かつて聖武天皇時代、石上乙麻呂と和姦の罪により配流されたことのある女性である。それが女性数人とともにこうした昇叙に預っていること、しかもその時期が神護景雲年間にはじまっていること、などから判断して、若女が後宮にたずさわって、称徳と関わりがあったことは間違いないであろう。百川と称徳の関係は、永手を介してというよりも、この生母とのつながりによって生じた可能性が十分考えられるところである⁽³⁵⁾。

もっとも百川が地位を得たといっても、これまでから明らかのように、決して政務決定に参加できるほどの高位・高官にあったわけではない。そうしたことから、称徳崩御の時、左中弁・内豎大輔・内匠頭・右兵衛督・河内大夫の立場にあった百川が、「百川伝」(や『公卿補任』本系)にいう白壁王擁立に口をはさみうるほどの権能をもっていたとは考えられない。さらにいえばわたくしは、擁立の中心人物永手は当時の百川よりも、先にみた

表5 百川・蔵下麻呂関係略年譜

(六国史により作成)

称 徳・道 鏡 時 代					仲麻呂・淳仁時代				
3 (七九)	2 (七八)	神護景雲元(七七)	2 (七六)	天平神護元(七五)	8 (七四)	7 (七三)	3 (七五)	天平宝字2(七五)	百川 年 齢
38	37	36	35	34	33	32	28	27	百川の主な経歴
2月 伊勢大神宮使に任	2月 武蔵守に任(左中弁・内匠頭・右兵衛督もとの如し) 10月 従四位下 11月 中務大輔・檢校兵庫副將軍に任(左中弁・内匠頭・武蔵守もとの如し)	2月 右兵衛督を兼任(時に正五位下・左中弁・侍従・内匠頭・武蔵介)	9月 山陽道巡察使に任			4月 治部少輔に任	6月 従五位下		一般事項
			10月 道鏡法王	閏10月 道鏡太政大臣禪師	9月 仲麻呂の乱 10月 孝謙重祚(称徳天皇)				蔵下麻呂 年 齢
36	35	34	33	32	31	30	26	25	蔵下麻呂の主な経歴
		3月 伊予・土佐二国按察使を兼任(近衛大将・左京大夫もとの如し)		正月 勲二等を授けらる 2月 近衛大将に任	10月 右兵衛督となり、淳仁廃帝を淡路に移送	正月 備前守に任 9月 仲麻呂追討將軍として凱旋、功により従三位	正月 従五位下、少納言に任	正月 山陽道問民苦使に任、時に正六位上	

		光 仁 時 代							
弘 延 仁 曆 14 (八三)	2 月 贈右大臣 贈太政大臣・正一位	10 (七九)	9 (七八)	8 (七七)	6 (七五)	5 (七四)	2 (七二)	宝 龜元(七〇)	
		48	47	46	44	43	40	39	
5 月	2 月	7 月 没、時に参議中衛大將兼式 部卿從三位(贈從二位)	2 月 中衛大將に任(式部卿も との如し)	10 月 式部卿を兼任(右兵衛督も との如し)		5 月 正月 正四位上 從三位	11 月 3 月 大宰帥に任 時に参議	10 月 8 月 越前守つづいて右大弁を兼 任(内豎大輔・内匠頭・右 兵衛督もとの如し) 正四位下	10 月 3 月 内豎大輔を任 河内守つづいて河内大夫に 任(左中弁・右兵衛督・内 匠頭もとの如し)從四位上
				7 月 藤原良繼没			2 月 藤原永手没	8 月 称徳没	
					42	41	38	37	
					7 月 没、時に参議大宰帥從三位 勲二等	5 月 4 月 大宰帥に任* 参議に任(時に從三位)	5 月 正月 東宮大夫を兼任 大宰帥に任*	9 月 兵部卿を兼任(近衛大將も との如し、時に從三位)	
*ともに「続日本紀」の記載による。									

*ともに「続日本紀」の記載による。

弟の蔵下麻呂とのつながりの方が強かったように思う。永手・真備の下で仲麻呂の乱を勝利に導く働きをしたからである。そしてこのことは、次に述べるように百川のその後を考える上で、大きな意味をもつように思う。

第二期 白壁王立太子から永手没まで

白壁王が立太子して二十日後、百川は河内大夫から越前守に転任、さらに数日後、左中弁から右大弁に昇進している。移動があったのはこの二つの職だけで、その他の内豎大輔・内匠頭・右兵衛督は引き続き兼任、光仁即位後、永手が没するまでの間、ほとんど変わらなかった。こうしてみると百川は、称徳朝の官職をほとんど引き続き兼帯していたことになる。

官職そのものは決して高くはないが実務上重要ポストにあったことは前に述べた。留意されるのは、この間の百川に比し、やはり弟蔵下麻呂が拔擢を受けていることである。すなわち白壁王皇太子時代の宝亀元年九月には近衛大將從三位として兵部卿を兼任、さらに光仁朝に入って翌二年正月、他戸が立太子されるや即日東宮大夫に兼任されている。ちなみに大納言大中臣清麻呂が東宮傅、右中弁大伴伯麻呂が東宮亮をそれぞれ兼任した。この人事が当時の首班だった左大臣永手によるものであったことは多分間違いないだろう。位階の上でも官職の上でも百川は弟蔵下麻呂に先を越されているわけである。そしてこのことが永手没後、百川をして、「奇計」を出しても山部親王の擁立を実現させる伏線となったように思う。しかしこれについては五章での考察にゆだねたい。

本稿は、前章が孝謙⇨称徳に即してその皇統意識を考察したのに対して、それに信任された永手の役割を通して、末期における称徳の皇統意識を探ったものである。前章に述べた称徳⇨道鏡の共治体制が、これによっていっそう明確になったと思う。そして永手と称徳との関係をみる中で、従来、百川の役割が過大視されていたこと、その分永手が過少評価されていたことも明らかになったと思う。

永手による白壁王の擁立は、ある意味では聖武系皇統継統の可能性をもつものであり、それは孝謙の皇統意識に沿うものであった。一方、百川の役割は永手没後、山部親王を立太子させたことにある。永手に比し、はるかに個人的立場で行動したのが百川であったが、しかしこのことは皇統を思わぬ方向に転換させることになる。

永手の死は、称徳女帝の死とともに奈良朝から平安朝への移行を象徴する「事件」であった。

(1) 桓武天皇の即位により、結果的に皇位は天智系皇胤に移行したことになるが、桓武自身、当初から天智系であることを自覚していたわけではなかった。本書第一部五章「桓武天皇の皇統意識」参照。

(2) 永手や百川については赤羽洋輔「奈良朝後期政治史に於ける藤原式家について（上・中・下）」（『政治経済史学』39・40・41）、林陸朗「鼎犬養家の姉妹をめぐって——奈良朝後期宮廷の暗雲——」（『上代政治社会の研究』所収）、中川収「光仁朝の成立と井上皇后事件」（『日本歴史』二二七号）などで取り上げられている。

(3) 本書第一部三章「孝謙女帝の皇統意識」。

(4) 本書第一部五章「桓武天皇の皇統意識」。

(5) 『水鏡』の記載は『日本紀略』所引の「百川伝」と細部において多少の違いはあるが、文意はほぼ同じものなのでここでは省略した。参考のために、その『水鏡』を記しておく。

神護景雲四年八月四日称徳天皇失サセ御座シニシカバ、女帝崩給後可即帝位ニ人ヲ彼計定メ申サ事是偏ニ依テ道鏡法皇ノ政悪ニ東宮御座セサリ故ナリ位ヲ継ギ給ベキ人モ無テ、大臣以下各此事ヲ定申奉給シニ、武天皇ノ御子長屋天皇ト申シム人ノ御子ニ、大納言文屋浄三ト申シム人ヲ位ニ付奉ラント申サルム人々アリキ、又白壁皇子ト申テ、天智天皇ノ御孫ニテ此御門ノ御座シヲ、位ニ付奉ツルベシト申サルム人アリ然共、尚ヲ文屋ノ浄三ヲト申ルル人ノミ多ク強クシテ、既ニ其御子位ニ付給ベキニテアリシニ、此浄三我身共器物ニ叶ズトアナガチニ遁レ申給ヒ然バ、共弟ニ宰相ノ大市ト申シヲ、更バ付申サント申ニ、此大市請引給然バ、既ニ宣命ヲ読ベキニ成テ、百川、永手、良継此人々心ヲ一ニシテ、目ヲクワセテ密ニ白壁皇子ヲ太子ニ定メ申ス由宣命ヲ作テ、宣命ノ使ヲカタラヒテ、彼大市ト云宣命ヲバ卷隠シテ、此宣命ヲ読ベキ由ヲ云然バ、宣命ノ使俄ニ立テ読ヲ聞ニ、此日比定メ来ツル大市ニハ非ズシテ、此白壁皇子ヲ読メル間、諸臣達ノハカラク、白壁ノ皇子ハ諸王ノ中ニハ御年たけなわに闕給ヘリ、如何ガアルベキト覚ニ、此御子ハ先帝ノ御為ニ功御座スル故ニ、太子ト定メ奉ト云由ヲ読ヲ聞テ、此大市ヲト申合給ツル人々、アサマシク思テ、ト

カク云ベキ方モ無テアリシ程ニ、百川總テ司々ヲ催シテ、此白壁ノ皇子ヲ迎奉テ、御門太子ト定メ奉ヌ、此御門ノ御位ニ付給シ御事、偏ニ百川ノ計給シ故ナリ。

(6) 管見によれば偽作としないのは河内祥輔「奈良朝政治史における天皇制の論理」(佐伯有清編『日本古代政治史論考』所収)だけである。もっとも氏は、他戸親王が生まれた段階で孝謙は淳仁天皇を廃し、道鏡・白壁王を中継ぎにして他戸立太子を意図したものと理解されている。偽作でないという点では同意見であるが、後者の理解はわたくしには承服できない。三章で述べたように孝謙には道鏡を天皇に立てようとした意図はないこと、またかりに譲って他戸立太子を意図したとしても——わたくしは、そこまで考えられていたとは思わないが——、道鏡・白壁王の二人を中継ぎにすることなど考えられない。第一、そうした考えが孝謙にあったのなら、白壁王立太子はもっと早くに実現していたはずである。

(7) たとえば北山茂夫『女帝と道鏡』など。

(8) 中川収「光仁朝政治の構造と志向」(林陸朗先生還暦記念会編『日本古代の政治と制度』所収)。

(9) 金子武雄『統日本紀宣命講』。

(10) たとえば『統日本紀』慶雲四年四月十五日・同年七月十七日・和銅元年正月十一日条など。なお詔勅・宣命などに関しては金子武雄註(9)前掲書参照。

(11) 「事卒爾爾有依天」という言葉は、通説のように称徳女帝の容体にかかわる事態をさすものと考えられるが、これを藤原永手らの言葉とみる意見には賛成出来ない。臣下にあるまじき不遜な言葉であらう。

(12) これを藤原永手らの言葉とみる理解も多いが、称徳天皇の言葉とみるべきである。永手の言葉であれば、『統日本紀』記載の例からみて「諸臣」でなく「臣等」と記載されるはずだからである。

(13) たとえばそうした事例は『統日本紀』天平神護元年十一月二十三日・同二年正月八日条など数多い。

(14) 周知の通り天智天皇は天智十年(六七二)に没しており、したがって天智天皇時代、光仁天皇(和銅二年生)はまだ誕生していない。

(15) ちなみに『公卿補任』神護景雲四年(七七〇)条には「改三十月一日己丑ニ為ニ宝龜元年」(肥後国献ニ白亀)、十「一」(「当衍」)月一日光仁天皇即位(八月癸巳日高野天皇崩、依ニ遺詔ニ云々、大納言白壁王為ニ太子ニ、十月一日即ニ帝位)とあり、称徳の遺詔で立太子されたことになっている。

(16) たとえば『統日本紀』大宝二年十二月二十二日条に「太上天皇(持統)崩、遺詔、勿ニ素服拳哀」とみえるのをはじ

め、慶雲四年六月十五日・十六日・二十四日、養老五年十二月十三日、天平勝宝八年五月二日、天平宝字元年三月二十九日、同年四月四日条などである。

(17) 本書第一部三章。

(18) 「百川伝」を作成するに当って、百川を顕彰するために永手の功績を百川の功績として強調されたものと思われる。

(19) 註(2)前掲論文など。

(20) たとえば聖武天皇に寵愛された永手の弟藤原八束(真楯)は、仲麻呂が自分の才能を嫉んでいることを知り、病氣と偽って家にこもり、もっぱら読書に親しんだという(『統日本紀』天平神護二年三月十二日条)のはよく知られるところである。

(21) なお『統日本紀』宝龜六年十月二日条(吉備真備墓伝)によれば、この時真備は、仲麻呂政権の私兵的存在とされていた中衛府の長官(中衛大將)に任じられたという。

(22) ちなみにこの時、息藤原家依(従五位上)・同雄依(従五位下)ならびに妻大野仲智(正四位下)にもそれぞれ一階昇叙されている(『統日本紀』神護景雲三年二月三日条)。

(23) たとえば北山茂夫、註(7)前掲書。

(24) 本書第一部三章参照。

(25) 田村円澄氏は「不改常典考」(竹内理三博士還暦記念会編『律令国家と貴族社会』所収)の中で、これを「忍び事の書」、つまり天智天皇が藤原鎌足に与え、元明天皇あるいは元正天皇が藤原不比等に与えた「内証の手書」で、藤原氏の特権的身分と地位の保証を内密に約束したものと理解されているが、従えない解釈である。

(26) ちなみに「家伝」(上)には鎌足を哀惜する天智天皇の詔がみえ、『統日本紀』養老四年八月三日条には、この日亡くなった不比等に対して、「特有_ニ優勅_一、弔_ニ賻_一之礼、異_ニ群臣_一」とある。

(27) 本書第一部三章参照。なお「黒作懸佩」の由緒書については土橋寛「藤原宮と藤原不比等」(『国語と国文』49-10)、上山春平『天皇制の深層』などに詳しく述べられている。

(28) これについては土橋寛、前掲註(27)論文参照。

(29) 本書第一部三章参照。なお永手の母(牟漏女王)が県犬養橋三千代の娘であったことから、永手に県犬養氏との同族意識が全くなかったとはいいい切れないが、塩焼王や白壁王(光仁)は広刀自系の人物であり、永手の立場や行動から考えて、

自身の利害にもとづいての判断であつたとは考えられない。

(30) 今江広道「皇太子と位階制」(林陸朗先生還暦記念会編『日本古代の政治と制度』所収)。

(31) 本書一部三章参照。

(32) 河内祥輔、註(6)前掲論文など。

(33) たとえば中川収、註(8)前掲論文など。

(34) 『続日本紀』宝龜十年十二月十三日条(藤原縄麻呂薨伝)によれば、「式部卿百川薨後相継用事」と記されている。これは縄麻呂についての記載であるが、光仁朝における百川の立場が知られる。

(35) 赤羽洋輔、註(2)前掲論文参照。

五章 桓武天皇の皇統意識

はじめに

奈良朝から平安朝へという移行期の諸問題を、これまでの章では皇統意識を中心に論じてきた。それによって明らかになったことは差し当り以下の如くであった。

(1) 七世紀の末、年少の珂瑠皇子（文武天皇）の即位を実現するためにもち出された、いわゆる「不改常典」によって、皇統が天武の嫡男である草壁皇子の嫡系に限られるに至ったことである。そこでわたくしはこれを「草壁」皇統と呼ぶことにしたい。

(2) (1)と表裏の関係で、女帝の役割が大きく制約され、ために孝謙（称徳）女帝に至り、皇位・皇統をめぐる矛盾が一挙に噴出したことである。そしてこれが最後の女帝となった。孝謙の悲劇は、自らがその草壁皇統の正統な継承者であるという自覚と責任感を持ち続けたことにあったといつてよい。白壁王（光仁天皇）の擁立を見届けて亡くなったのも、女帝の執念というべきものであった。

ところがこの光仁の皇太子他戸親王は、わずか一年四カ月で廃され、かわって皇太子となったのが山部親王こと、のちの桓武天皇である。二人の立太子には藤原氏が深く関与している。この点について従来は、光仁・桓武

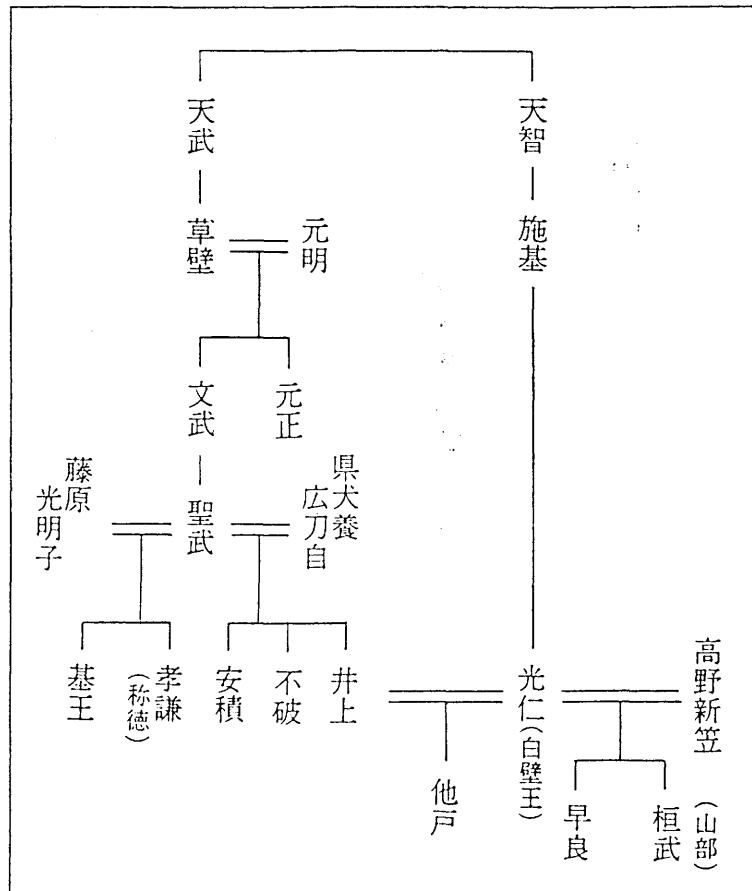


図2 皇室系図

系図参照)。これは、他戸廃太子という事件の有無にかかわらず、光仁の即位が天智系への切り換えといったものではなかったことを物語っている。それがなぜ「切り換え」と誤解されたのか。わたくしはその理由を、次のような点についての理解が足りなかったためと考える。

その一は、⁽²⁾ 県犬養氏の存在とその役割についてである。とくに県犬養広刀自を母とする井上内親王の「立后」については、従来ほとんど留意されることがなかったが、その意味するところを十分考えてみる必要がある。

ともに天智系とみなし、したがってその即位により皇統は天武系（前述の草壁系）から天智系へ切り換えられた、という認識でほぼ一致している。⁽¹⁾ しかし、この皇統の切り換えを藤原氏がどこまで意図していたか、そもそもまた、これが

「切り換え」といえるのか、光仁・桓武の即位を同列に扱ってよいのか、など疑問点が少なくない。はいい話、光仁の場合を考えてみれば、順調にいけばそのあとは皇太子他戸親王が即位し、皇位・皇統はそのまま子孫、すなわち県犬養系を通しての草壁皇統——くわしくいえば聖武系皇統に継承されたはずである（図2

その二は、光仁・桓武の擁立を進めたのは藤原式家、とくに百川であると理解されてきたが、前章で述べたように、光仁擁立にかかわった中心人物は永手（＝北家）であって、百川（＝式家）ではない。百川が進めたのは山部親王（桓武天皇）の立太子であった。この永手と百川の役割に対する誤認を正すことによって明らかになってくるところがあるに違いない。

その三は、そしてわたくしが本章でもっとも問題にしたいのは、光仁と桓武、とくに桓武の皇統意識についてである。というのはその中に、奈良朝に生起した皇統意識の終着点が見出せるように思うからである。

以下わたくしは、右にあげたような諸点を考慮しながら、皇統譜における光仁・桓武朝の位置づけを試みたいと思う。そのことはおのずから奈良朝の終焉＝平安朝の成立を見届けることにもなるであろう。

一 井上内親王の立后

白壁王こと光仁天皇の妃、井上内親王が皇后とされたのは宝龜元年（七七〇）十一月六日のことであった。内親王は県犬養広刀自が聖武天皇との間にもうけた子供である。同じ日、光仁の父施基皇子には天皇号が追称され、兄弟姉妹には親王・内親王の称号が与えられている。光仁が大極殿で即位（十月一日）してから一カ月の措置であった。ついで翌二年正月二十三日には、この井上所生の他戸親王を皇太子とすることが公に示された。即位と立太子が比較的短時日の間に行なわれているのは、皇位継承者をいち早く決めることで光仁体制を打ち出し、政治的な安定をはかったものといつてよい。

白壁王（光仁天皇）が称徳朝を受け継ぐ天皇として、年齢や功績の上からもっともふさわしい人物とされたことは、前章で述べたので繰り返さないが、それに加えて、王が井上内親王の夫であったことも重要である。王は、井上内親王（＝県犬養氏）を介して聖武天皇に連なる立場にあったからである。

これ以前でも県犬養系の皇子女が、皇位継承に関して全く圏外にあったわけではない。たとえば氷上志計志麻呂。志計志麻呂は、皇嗣をもたなかった孝謙⁽⁴⁾称徳朝の晩年、その立場を主張して天皇調伏の呪法を行ない、発覚して土佐国へ流されている。これは宮廷女性数人による呪咀事件で、組織的なものではなかった。県犬養氏に関わる事件が概して私的範囲にとどまり、不成功に終わるのは、県犬養系諸皇子の置かれた立場がさして強くなかったことと無関係ではなからう。けだし文武天皇以来、草壁皇統であること、別のいい方をすれば藤原氏を介しての皇統意識が強調され、正統視されてきた伝統の中では、急死した安積親王をはじめ県犬養系の諸皇子が陽の当たらない場所に置かれたのは当然のことであつたらう。それが白壁王（光仁）に白羽の矢が立てられたことにより、にわかに県犬養氏の存在がクローズアップされることとなった。それが証拠には、光仁の即位にともない県犬養氏の立場が一挙に浮上していることである。即位直後の宝龜元年（七七〇）から同三年に至る間に、橘三千代に関わる橘氏とともに、県犬養氏の叙位が集中しているのもそれであるが、何よりも重視されるのは、県犬養系の皇子他戸親王の立太子が実現をみたことである。かつての安積親王もその機会を得ないまま没したから、⁽⁵⁾県犬養系皇子の立太子はこの他戸だけで、ここに始めて県犬養氏が皇位継承者の仲間入りを果たしたことになる。県犬養氏の存在は、光仁の即位と他戸立太子を誘導しただけでなく、かろうじて草壁嫡系を聖武系皇統として存続させる上で重要な役割をになうことになったわけである。

ところでこの他戸立太子の時期について、光仁即位と同時になかったことを疑問とし、これを藤原氏内部における意見の対立があつた結果とみる理解がある。⁽⁷⁾すなわち白壁王（光仁）の即位では挙族体制に結集した藤原氏であるが、光仁の皇太子については他戸親王派（北家の永手）と山部親王派（式家の良継・百川）とに分かれたため、意見の調整に手間どつたというものである。しかし先に述べたように、皇太子制度の定着していない奈良期ではむしろ手早い措置というべきであつて、ことさら遅いとみるのは当たらない。⁽⁸⁾

上で決して優位な立場にあったわけでない。立太子に先立つ井上内親王の立后が、わたくしは、そのためにとられた措置であったと考える。

立後の意味するところは、それによって次代の皇位継承者が決定されることにあり、立后は立太子を引き出す重要な政治的行為であった。これについては光明子立后⁽¹⁰⁾に関して論じたように、わが国では複数の后妃がいても皇后所生の皇子の立太子が優先されており、皇太子の生母は皇后とする觀念・慣習があった。光明子の場合、所生の皇太子基王が亡くなった前後、聖武天皇のもう一人の夫人の県犬養広刀自に安積親王が誕生していたから、その安積を押え、将来生まれてくる（と期待された）皇子を確実に立太子させるためには、その伝統の通り光明子が皇后となる以外に道はなかったのである。長屋王を犠牲にし、法を犯してまで強引に立后した所以である。井上内親王の立后は明らかにこの光明子の先例にならったもので、いわば光明子立後の宝亀版であった。他戸

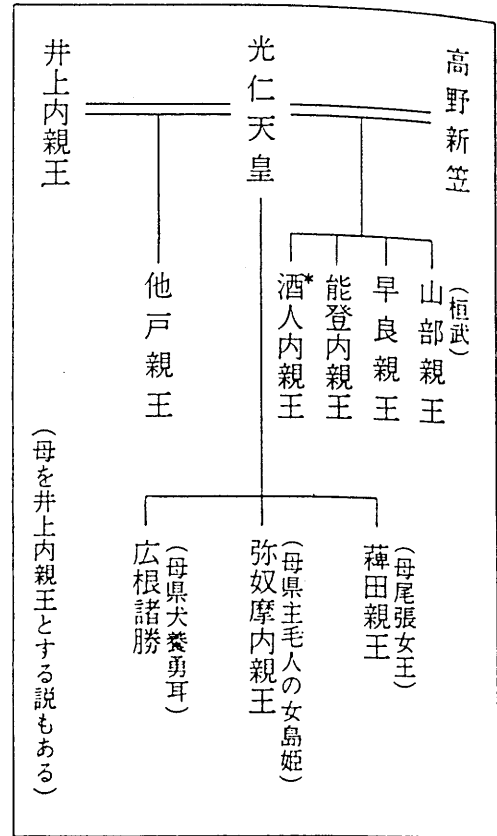


図3 光仁天皇の皇子女

即位時、すでに六十三歳になっていた光仁には多数の皇子女がいたが、少なくとも他戸の兄として高野新笠との間に生まれた山部親王（第一皇子、他戸立太子時三十五歳）・早良親王（第二皇子、同じく二十二歳）、尾張女王との間の稗田親王（第三皇子、同じく二十一歳）の三人がいたことが知られる。ちなみに『水鏡』には立太子の時他戸が十二歳であったと記している。他戸が光仁の長子でなく、しかも年少であったことは確か⁽⁹⁾なよう⁽⁹⁾で、立太子する

親王が皇太子とされた当日、光仁の下した詔に「随^レ法[、]爾[、]皇后御子[、]他戸親王立為^ニ皇太子^一」（宝龜二年正月二十三日条）と述べられているのがそのことを端的に示している。他戸は「皇后御子」たることによって立太子できたわけである。

光仁即位後、まず立后を決定し、その上で立太子を発表するという、一見回りくどい手続きがとられたのは、以上述べたような事情があったからである。即位から立太子までの期間が三カ月余あったとしても、決して不自然でないとした理由である。意見の調整に手間どったとみる理由はどこにもない。しかしこうした段階を踏んで立太子を実現しているのは、そのまま他戸親王の立場が、決して卓越したものではなかったことを暗示している。

井上内親王の立后は光明子のそれに倣うものとはいえ、井上が皇族であったから、立后そのものにむろん問題はなかった。しかも井上内親王の場合は、すでに皇子他戸をかかえていただけに（光明子の場合は、将来生まれてくる皇子に期待をかけた）、より確実な対応であったといえる。そして井上が立后したことで、他戸以外の諸皇子たちにとって、立太子への可能性はほぼ完全に断ち切られたことになる。このことの意味は大きいが、のちに触れることにする。

こうして天皇光仁―皇太子他戸という皇位継承路線が定まった。皇統における聖武傍系⇨県犬養系の誕生である。県犬養氏を介して聖武皇統（広義には草壁系）が受け継がれたわけである。繰り返すことになるが、称徳女帝のあとの光仁の擁立が決して天智系皇統への切り換えをもくろんだものでなかったことは、これから明らかにあろう。光仁天皇が天智の孫ではあっても、その立場と存在は、むしろ聖武（系）に連なるものとして理解されていたのである。

なお光仁天皇の擁立に当り、聖武の血を直接うける他戸の存在が考慮されていた、という理解があるが、おそらく事実とみてよいであろう。しかし、だからといって、その他戸を立太子させるためにひとまず父の光仁を中

継ぎとして即位させた⁽¹¹⁾ というのは、わたくしには本末転倒した議論のように思われる。ましてや山部親王のために光仁の立太子―即位がもくろまれたとするに至っては、とうてい従えない。

二 百川の「奇計」

(1) 井上・他戸母子の廃位

ところが事態は一転してかわった。宝龜三年（七七二）三月、突然、井上皇后が巫蠱に連らなったとして廃され、しかもその罪は皇太子他戸親王にも波及し、同五月に廃太子されるといふ事件が起こったからである。その後は周知の通り、翌宝龜四年正月、三十七歳の山部親王が皇太子とされた。のちの桓武天皇である。他戸廃太子から八カ月後の立太子であった。

この他戸廃太子―山部立太子については、『公卿補任』宝龜二年藤原百川条に「本系云」として、

大臣（百川）素属ニ心於桓武天皇、龍潜之日共結ニ交情、及ニ宝龜（光仁）天皇踐祚之日、私計為ニ皇太子、于レ時庶人他部在ニ儲貳位、公（百川）数出ニ奇計、遂廢ニ他部、桓武天皇為ニ太子

とある。要するに百川が、山部を立太子させるために「奇計」を用いて他戸を廃太子に追い込んだというものである。「本系」なるものが明らかでなく、記述を鵜呑みにすることも出来ないが、百川の薨伝（『続日本紀』宝龜十年七月九日条）に、

今上（桓武）之居ニ東宮ニ也、特属ニ心焉、于レ時上不予、已經ニ累月、百川憂形ニ^{アツヘレ}於色、医藥祈禱、備尽ニ心力、上由レ是重レ之、及ニ薨甚悼惜焉。

とあること、とくにのち桓武が百川の子緒嗣を拔擢し、二十九歳の若さで参議に任じた折、

微ニ緒嗣之父、予豈得レ踐ニ帝位ニ乎、雖レ知_下緒嗣年少為_中臣下所_レ佐、而其父元功、予尚不_レ忘、宜_下擇ニ参議ニ以

と述べていることなどから判断して、百川が山部の立太子（いいかえれば他戸の廢太子）にただならぬ働きをしたことは間違いない。

しかし留意されるのは、事件の経過からみて、母親井上の事件が他戸廢太子の直接の理由になったとみられることである。そのことは光仁天皇が他戸を廢太子した日、官人たちを集めて下した次の詔にも明らかであろう。

今皇太子止定賜部流他戸王、其母井上内親王乃廢魅大逆之事、一二遍能味仁不_レ在、遍麻年久発覺奴、其高御座天之日嗣座波、非_三吾一人之私座_一止奈母所思行須、故是以天之日嗣止定賜比儲賜部流皇太子位仁、謀反大逆人之子乎治賜部例婆、卿等百官人等天下百姓能念良麻久毛恥志賀多自氣奈志、加以後世乃平久安長久全久可_レ在伎政仁毛不_レ在止、神奈賀良母所念行須仁依而奈母、他戸王乎皇太子之位停賜比却賜布止宣、（宝龜三年五月二十七日条）

すなわち廢太子の理由について、皇太子他戸の母井上内親王の廢魅による大逆の事は一度や二度ではなく、何度にも及んでいる、高御座天の日嗣の座は自分一人のものではない、それ故、皇太子の位に謀反大逆人の子を立てていることは恥かしく、面目ない、またのちの世の乱れをさそうことにもなろう、と述べている。この詔による限り、他戸自身に全く過失はなく、責任はすべて母の井上内親王にあったことになる。事実であれば光仁にとって、この廢太子の措置は断腸の思いであつたろう。他戸の立太子に当たり井上立后のもつ意味が大きかっただけに、逆に皇后の問題が他戸の命取りの因となった。廢后がそのまま廢太子を促がす口実となったのである。立后―立太子のもつ意味が改めて考えさせられる事件であらう。

ところで、百川の出した「奇計」とは、意表をついたばかりごとの意であらうが、どのようなことをしたのか。真相は不明というほかないが、事件に関してわたくしが疑問に思うことの一つは、「皇后井上内親王坐_三巫蠱_一廢」として下された廢后の宣命には、関係者の粟田広上・安都堅石女にふれることはあっても、井上自身のこと

はいっさい語られていないことである。わずかに先の光仁の詔に、「井上内親王乃魔魅大逆之事一二遍能味仁不在」とみえるだけである。さすがにこの不自然さに気づいた本居宣長は、「もしくは皇后を廢給ふよしの詔は、此前に今一つ別に有しが、記に漏たるにやあらむ」といったが、早良親王の例もあるように、意図的に記事が削除された可能性もないではない。⁽¹⁵⁾

疑問に思うことの二つは、百川が関与したことが事実であるにも拘わらず、そのことが先の廢太子の詔はむろんのこと、これ以後のどの詔にもふれることがない点である。これは光仁が、百川に対して疑いを抱くことが全くなかったからとみてよいのか、知っていて表にあらわさなかったのか。ともあれ百川の「奇計」は光仁天皇をも欺くような巧妙な方法であったのであろう。いずれにせよ、他戸立太子の手続きが法制上何の落度もなかっただけに、その廢太子を実現するには「奇計」を出さなければ不可能であったということであらう。井上廢后は、そのための方便であったように思われる。

井上母子の悲劇は、しかしこれに留まるものではなかった。周知のように宝龜四年（七七三）十月、光仁の同母姉難波内親王が薨去（七十歳）すると、これを再び井上内親王による魔魅の所為とし、五日後に母子ともに大和宇智郡の没官宅に幽閉された。⁽¹⁶⁾ その後の消息はいっさい不明で、『続日本紀』宝龜六年四月二十七日条に、わずかに「井上内親王、他戸王並卒」とあり、幽閉中の母子が同日に没したことが知られるのみである。そうした状況からこの母子は暗殺されたとする見方が強いが、簡単に断定は出来ないであらう。すでに幽閉しており、その上殺さなければならぬ積極的理由が見当らないからである。結局のところこの事件の真相もまた不明というほかはないが、いったんは県犬養系の井上母子が立后・立太子されたものの、それが一転廢后・廢太子されるという一連の事件がもつ意味は決して小さくはない。のち宝龜十年（七七九）六月、周防国で「自称他戸皇子」する人物が現われたのも、また天応元年（七八一）閏正月、光仁の諒闇中に乗じて県犬養系の氷上川継が皇位を

狙って謀反を企てたのも、すべてこの事件に誘発されたものであった。

(2) 「内臣」良継の立場

それにしても他戸が廃され、山部が擁立されるという転換劇の背景に何があったのか。

すでに指摘されているように、藤原永手の急死がこれに関連することはまず間違いない。永手没後、藤原良継が内臣という特別職に就任し、その政治的野心がストリートに現われてくるように思えるからである。

永手が急死したのは宝亀二年（七七二）二月二十二日のことで、一カ月前、他戸立太子の実現をみた矢先のことであった。改めて述べるまでもなく、永手は吉備真備や即位前の光仁とともに股肱の臣として称徳朝を支え、称徳女帝の意向を受けて光仁朝の実現をはかった人物であっただけに、光仁天皇のショックは想像を絶するものであったようだ。そのことについては四章でふれた。

中納言の良継が「内臣」に任じられたのは翌三月十三日の新人事においてであるが、内臣とは、かつて中臣鎌足が蘇我氏を倒した直後に任命され、ついで参議房前が死を覚悟した元明上皇から「當作内臣計（17）会内外、准勅施行、輔翼帝業、永寧国家」として任じられたもので、天皇のブレーンともいうべき私的要素の強い存在であった。そうした内臣に良継が任じられたことから、良継が鎌足・房前に次ぐ藤原家の惣領として期待され、評価された^{（18）}と考えるのは無理からぬところであろう。しかしわたくしが留意したいのは、二日後の十五日、内臣の職掌として、「内臣職掌、官位・禄賜・職分・雜物者、宜皆同大納言、但食封者賜二千戸」と定められていることである。すなわち職掌は大納言と同じとし、但し食封を一千戸とすることでその立場を右大臣（二千戸）と大納言（八百戸）の間に位置づけているわけである。このことは、鎌足や房前の場合、非制度的存在であった内臣が、ここでは太政官体制に組みこまれ、その立場や権限がむしろ限定され、制限されたことを暗示する。ちな

みに三月のこの新人事では、大納言大臣清麻呂（七十歳）が右大臣として筆頭公卿となり、ついで中納言良継（宇合の二男、五十六歳）が内臣、参議文室大市（六十八歳）と藤原魚名（永手の弟、五十歳）が中納言を経ずに大納言に任じられている。永手没後、良継は年齢的にも藤原氏の中で長老的立場にあったが、内臣になったといっても光仁の永手に対する信任とは決定的に違っている。良継の内臣任命は褒賞の一面をもつと同時に、良継の立場を限定・抑制する意味もあったと、わたくしはみる。

宝龜八年（七七七）正月、内大臣に任じられるまでの六カ年間、良継が内臣の立場に留められていたのも、その証左となろう。しかもその翌日、正三位魚名が従二位を授けられ、位階がこの良継と並んだことを考えると、良継の内大臣就任は魚名の加階と抱き合わせであった可能性が大きい。先にみた永手没後の人事でも、参議魚名が中納言を経ずに大納言に任じられており、良継の内臣就任はむしろこの魚名拔擢をとりつくりうためのものであったとみてよいであろう。わたくしのみるところ、永手没後、光仁は良継よりもこの永手の弟魚名に期待していたように思える。従二位に加階して二カ月後の三月、光仁が魚名の曹司に行幸し、息末茂に従五位下を与えているのもその表われであるが、その後の魚名の内臣・内大臣への任命についても、良継の場合とは明らかに扱いの違いがみられるからである。

すなわち魚名が「内臣」に任じられたのは、良継が没（宝龜八年九月十八日）して半年後、宝龜九年三月三日のことであるが、同三十日、早くも「忠臣」に改められ、さらに翌十年正月、内大臣に任命されている。ここには少なくとも二つの点で良継の場合と扱い方の違いが認められる。第一は、内臣に任じたあとただちに「忠臣」としていることである。第二は、早くも十カ月後（翌十年正月）、内大臣に任命していることである。第二の事実から判断するに、内臣任命は内大臣任命を前提としたものであったといつてよく、しからば第一の忠臣も良継時代に職掌を制約された内臣から解放する一方、忠臣を内大臣任命へのテコとしていることになる。これは良継が内

臣を六年間在任したという先例を破るために取られた措置であったとみて間違いない。

さて論を良継に戻せば、右大臣清麻呂が老齢であったことから、実質良継が政界を取り仕切ったものと思われる。「専」政得志、升降自由（宝龜八年九月十八日条）といわれたのも、この期における良継の行動を述べたものであろう。先にふれたように光仁は、こうした良継らに対し（あとに述べるように百川に対しても）警戒の念を抱いていたと思えるフシがある。

この良継に重用されたのが、異母弟の百川である。良継の娘・諸姉が百川の室となっている（二人の間に生まれたのが旅子で、のち桓武夫人となる）ことから両者の親密な関係が知られるが、とくに良継時代の百川の昇進は、永手の時代に比べると雲泥の差があった。

称徳時代の百川については前章で述べたので繰り返さないが、光仁朝（永手時代）になっても、ほぼ称徳朝の官職——内豎大輔・内匠頭・右兵衛督・右大弁などを引き継いでいる。弟の近衛大将兼兵部卿蔵下麻呂が他戸立太子の日に東宮大夫を兼任したのに比すれば、むしろ事務官僚として働いていたといえる（一二二ページ表5）。

ところが先にみた宝龜二年三月の永手没後の新人事では大宰帥に任命され、同年十一月には従三位の蔵下麻呂（百川は正四位下）に先んじて参議とされている。さらに留意されるのは同五年正月、正四位上（正四位下には四年間留まっていた）とされ、わずか四カ月後の五月には従三位にまで昇叙していることで、背後に良継の引級のあったことは十分に考えられよう。

もっとも光仁天皇は、良継と組んだこの百川に対しても、官職の上で格別報いることはなかったように思われる。百川が始めて八省卿の一つ、式部卿に任じられたのが宝龜八年十月、さらに中衛大将を兼任したのも翌九年二月のことで、むしろ遅い。しかもいずれも良継没後のことである。百川の薨伝に、「天皇甚信ヨ任之、委以三腹心ハ内外機務莫レ不ニ関知」と記され、光仁の百川に対する信頼ぶりを述べたものとしてしばしば引用されるが、

これは桓武天皇（ただし即位以前に百川は没している）との関係から多分に誇張された表現とみるべきであろう。⁽¹⁹⁾ 百川はかれ一流の政治性で光仁に取り入り、腹臣として用いられるほどの才覚を発揮したが、⁽²⁰⁾ といって光仁が無条件に信任していたわけでもない。それは良継に対する接し方とも共通するもので、光仁と百川の親密性を過大視することは事実を誤認することにもなりかねない。わたくしには、他戸廃嫡をめぐるシヨリがそこに影を落しているように思われて仕方がない。

(3) 山部親王の擁立

話は前後するが、百川によるその他戸廃嫡＝山部擁立は、おそらく良継のバックアップにより実現されたものと考ええる。林陸朗氏は、良継の娘乙牟漏が安殿親王を生んだのが宝龜五年（七七四）八月であることから、乙牟漏の入内を同三～四年の山部立太子前後のことと推定されている。ほぼ首肯される理解と思われるが、他戸廃太子＝山部立太子＝良継娘乙牟漏入内は計画的になされた一連の行為であり、良継の協力を得た百川の推進するところであったと考えてよいであろう。それは、これまでの光仁＝永手体制にかわるものであるが、山部擁立を実現した百川にはどのような思惑があったのであろうか。

改めて述べるまでもなく、他戸を擁立した永手の意図は、県犬養系を通して聖武系皇統を存続させることにあった。これは草壁嫡系が称徳女帝で終焉した以上、穏当かつ適切な判断というべきであり、しかも前章で述べたように、そうした永手の立場は、孝謙時代から一貫したものであった。永手は藤原氏の長老的立場にはあったが、つねに称徳の腹臣として行動したところに特徴がある。他戸の擁立も称徳の意にかなうものと判断した結果とみてよい。

このような永手の政治姿勢は、およそ百川の体質とは異なるものであっただけに、永手に対してかねがね不満

がなかったとはいきれない。といって、良継も百川も永手に対抗しうる立場にはなかった。それはこれまでみてきたことから明らかであろう。

藤原氏一族の力関係をどのように理解するので、山部立太子が構想された時期について、正直、判断の材料を欠くが、わたくしはすべてが永手没後に始まったものとみる⁽²¹⁾。さらにいえば、永手没後の新人事で、光仁天皇が良継に示した、褒賞と抑制の姿勢が、あるいは引き金になったかも知れない。良継や百川たちには、永手や白壁王(光仁)らとともに仲麻呂を追討し(良継は追討の功で勲二等をもらっている)、称徳時代を築いてきたといった自負があったはずである。内豎大輔・内匠頭・右兵衛督といった職を長年兼任してきた百川は、直接政治の裏をみてきただけにそうした思いは強烈であつたろう。しかし永手の敷いた光仁Ⅱ他戸体制が確立すれば、他戸と何のかかわりもない良継や百川にとって、権力の拠り所は皆無となるに等しい。かれらの不満が権力の根源となりうる別の天皇の擁立へと向けられたのは、けだし自然の成り行きであつたろう。これが他戸廃太子を企てさせた最大の理由であつたと考える。

その際、これにかわる人材として山部親王が選ばれたのは、むろんいわれるように母親(高野新笠)が卑姓で外戚関係を得やすかつたといったこともあつたろうが、山部が光仁の長子であり、すでに三十七歳という壮年であつたことが望みを托するに足る人物と考えられた理由であろう。百川は山部の病気が長びいた時、寝食を忘れて医薬・祈禱に狂奔したという。百川にとっては掌中の宝であつた。

こうして山部の立太子が実現し、これをもって一般には、天智系への皇統の切り換えが終わつたとする。しかしわたくしはこの理解を採らない。あとで述べるように、当初桓武自身、皇統は聖武から受け継いだという意識をもっていたからである。父の光仁も、皇后井上を介して聖武に連なる立場にあつたから、桓武が同様の認識をもったのは当然のことであつたろう。

ここで、この時期における藤原氏の家意識についてふれておこう。光仁の擁立によって式家の立場が強められ、藤原四家の中で優位に立ったこと、家意識も式家においてもっとも早く表われたと考えられている⁽²²⁾。これまでみてきたように良継・百川らの行動は、永手没後のリーダーシップを掌握するという、個人的な次元での政治的行動であって、それをもって直ちに家意識の昂揚とはみなしがたいが、しかし百川以後、山部を擁立したという緊張感が家意識を強めたことは事実であろう。とくに種継の場合、叔父の良継や百川に比して実績がなかっただけに、叔父たちの成したことが種継の政界での抛り所となったわけで、種継によって式家意識が昂揚されたことは確かである⁽²³⁾。

ともあれ、百川の「奇計」によって実現した山部立太子・桓武即位は、県犬養(氏)系の皇位継承への望みを完全に断ち切ることになった。孝謙||称徳の皇統意識に沿い、奈良朝体制の維持をはかった永手の思惑は、こうして良継・百川らによって否定され、舞台は平安朝へと回されることとなる。

三 天智への回帰

宝亀八年(七七七)九月、良継が亡くなり、中一年をおいて同十年七月、百川が没した。山部親王こと桓武天皇が即位するのはその翌々年(七八一年)であるから、桓武は即位前に、自分を擁立してくれた人物たちとあらかた死別したことになる。いいかえればこれは、かれらからの掣肘を受けることはなかった反面、有力なブレーンをもたなかったということでもある。即位に当たり、弟早良が還俗させられ皇太子とされた背景も、そうした観点から考えてみる必要があるように思う。

ともあれ、聖武天皇と血縁関係をもたない桓武の即位によって、文武以来提唱されてきた草壁皇統も、聖武皇統も、事実上断絶した。血脈からいえば、明らかに天智系に移っている。

しかしこれはあくまでも結果論であって、当初、皇統の断絶はもとより、転換といった意識もなかったように考える。それは、百川はもとより、桓武自身においてさえ、即位当初、皇統は父光仁を介して聖武から受け継いだものと認識していたからである。

長岡京時代のことであるが、『統日本紀』延暦四年（七八五）十月八日条にみえる次の記事は、そのことを端的に示している。

遣_ニ中納言正三位藤原朝臣小黒麻呂、大膳大夫從五位上笠王於山科山陵、治部卿從四位上耆志濃王、散位從五位下紀朝臣馬守於田原山陵、中務大輔正五位上當麻王、中衛中將從四位下紀朝臣古佐美於後佐保山陵_一以告_下廢_ニ皇太子_一之状_上

すなわち二週間前に起こった種継暗殺事件の嫌疑をうけた皇太弟早良親王の廃太子を山陵に報告したものであるが、その報告先が、山科山陵_ニ天智天皇（曾祖父）、田原山陵_ニ光仁天皇（父）のほか、後佐保山陵_ニ聖武天皇であったことに留意したい。この事実、廃太子という重大事件に関連し、桓武が自分の立場を聖武天皇に連なるものという意識、いわば聖武系皇統の意識をもっていたことを示している。この場合に限らないが、山陵への奉幣・奉告は、先帝に対する顕彰であるとともに、それを行なう天皇の存在や立場を強調する一種の示威行為でもあった。

ただし、同じ意味において逆に留意されるのが、聖武天皇陵への奉告奉幣はこれが最初にして最後であったことで、聖武天皇に対するこの早良廃太子の奉告は、事実上、その聖武系皇統への決別ともなった。

さて、このような桓武の皇統意識の変化を考える上で看過できないのが、延暦元年（七八二）閏正月に発覚した氷上川継事件であり、つづく三月、同じく未然に終わった三方王の魘魅事件である。それぞれの事件の経緯については省略するが、前者は、聖武皇女不破内親王（母は県犬養広刀自。井上内親王の妹）を母、塩焼王（天武の孫、

新田部親王の子)を父にもつ川継が、皇位を望んだものである。同じく皇位を狙って称徳女帝を呪咀した志計志麻呂は川継の兄であった。後者の三方王の事件は川継事件に比してはるかに規模は小さく、根は浅いが、先の川継事件で左降された三方王ら三人が起こしたもので、加担した三方王の妻弓削女王が舎人親王(天武の子)の子三原王の娘であった点、川継事件と一連のものといつてよいであろう。したがってこれも皇統を主張した事件とみなしうる。しかも時期が光仁没後に集中していただけに、桓武の受けた衝撃は多大であったと考えられる。とくに川継事件は、左大弁大伴家持・右衛士督坂上田麻呂といった桓武朝の官人ら合わせて三十五人にのぼる姻戚や知友らが与同したというから、兄の志計志麻呂事件に比してはるかに大きな規模であり、孤立した行動でなかったことが知られる。

桓武は聖武から皇統を受け継いだものと認識していた。しかも即位まで九年間、皇太子の地位にあり、次代の天皇とのコンセンサスは得られていたはずである。ところが事実はそうでなく、聖武との擬制的関係——光仁を介して聖武から皇統を受け継ぐ——は否定されたのである。奈良朝を通じて形成された皇統意識の伝統、いわば「不改常典」の重みがここでも否応なく思い知らされたのである。事件に直面した桓武が自らの皇統意識、すなわち天智系との意識をかきたてられたことは容易に想像されるところである。というより、これらの事件によって、いわば聖武系における桓武の立場が否定された以上、桓武の抛り所は天智に求めるしかなかったのである。川継およびそれに続く三方王事件については、藤原氏との関係も含めてなお検討の余地があるが、桓武が自らの立場を自覚し、天智系皇統の意識を覚醒されたという点で、きわめて重要な出来事であったといえると思う。

事実、すでにふれたように早良廃太子の奉告以降、桓武が聖武陵あるいは天武系皇胤の山陵に奉幣することはない。延暦十二年(七九三)三月、平安遷都に先立ち山階(天智)・後田原(施基)・先田原(光仁)の各山陵に奉告し、翌十三年正月には、大伴弟麻呂を大將軍とする蝦夷経略に当り、天智・光仁の山陵に奉告している。いずれ

表6 桓武天皇の山陵奉幣

年 月 日	山 陵 (天皇) 名	目 的
延暦4(785)10・8	天智・光仁・聖武	早良廃太子のこと
12(793)3・25	天智・施基・光仁	平安遷都のこと
13(794)正・16	天智・光仁	征夷のこと
24(805)7・27	天智・光仁・早良	唐物を献上

も長岡京時代のことである。平安京遷都後では最晩年の延暦二十四年(八〇五)七月、前月に帰国した遣唐大使藤原葛野麻呂の将来した唐物を天智・光仁と、崇道天皇こと早良廃太子の三陵に奉っている(表6参照)。奈良朝では概して「諸陵」と所出し、だいた天智・天武・持統・元明・元正・聖武陵などが対象とされており、新羅の王子が来朝した折には応神天皇陵なども含まれているのに対して、桓武の場合は、施基や早良を含めて、すべて桓武に直接かわる者に限られているのが特徴である。さらにいえば、奈良朝では病氣平癒などとり立てて重大事ではない理由の奉幣であったものが、ここでは廃太子・平安遷都・征夷といった政治上の特別事態に際してなされているのが特徴で、桓武にとって山陵奉幣は天智・光仁への奉告が、先祖との精神的紐帯を強める役割を果たしたことが知られる。

このような桓武天皇の皇統意識の転換を決定的にしたのが、延暦四年(七八五)における長岡遷都である。翌延暦五年正月、天智が大津京の西北山中に建てた崇福寺のかたわらに梵刹寺を建立したのも、天智追慕のあらわれであろう。天智への傾斜が如実に示されている。

さて、この長岡遷(造)都に深くかかわったのが、周知の通り藤原種継である。式家百川の甥にあたる。

長岡遷都や造都の経緯について語る場ではないが、この遷都の方針が打ち出されたのは、二年前の延暦元年、例の「今、宮室居るに堪へ(る)」という詔を下して造宮省が廃止された時である。造宮省を廃止しながら、中一年をおいて遷都したことから、長岡遷

都を不可解とする理解が喜田貞吉氏⁽²⁴⁾以来の見方であるが、村井康彦氏⁽²⁵⁾の指摘する如く、これは平城棄都の表明であり、この時点で遷都が計画されていたとみるべきである。というのも詔が出される二週間前、すなわち三方王の魘魅事件の処置がとられた日（三月二十六日）、藤原種継が参議に任命されており、種継の抜擢と平城棄都Ⅱ（長岡）遷都が連動する措置であったことが明らかに知られるからである。この時点では、まだ新京の地が決定されていたわけではないと思うが、桓武にとって遷都の地がどこであれ、遷都は聖武系皇統と決別し、天智系皇統の天皇に生まれかわる出発点であった。それは種継にとっても同様で、桓武を擁立した百川の意志を継ぐべき、式家の命運をかけた一大事業であったに違いない。

むろん遷都は皇統の転換のためだけに行なわれたわけではない。長岡遷都の場合は、水陸の便や寺院勢力の排除といったことも理由であった。しかし県犬養系Ⅱ聖武系皇統を断ち切り、桓武自身の抛り所、すなわち天智系皇統の都を造ることが長岡遷都の最大の目的であった、とわたくしは思う。したがって極端に言えば、大和の地以外であれば宮都はどこでもよかったのである。それを長岡の地で、桓武の標榜する天智系皇統意識を具体的に結実させたのが種継であった。そしてこの長岡遷都は、県犬養（氏）系の皇位継承への望みを完全に断ち切り、聖武系皇統が復活することは二度となかったのである。

山陵奉告——むすびにかえて

ここでもう一度山陵奉告・奉幣をめぐる皇統意識について考えておきたい。参考のため十陵四墓が制定されるまでの主な事例を一覧表（表7）にしてみた。表から知られることは、

①奈良朝は平安朝と違い、山陵奉告・奉幣が聖武・孝謙時代に集中しており、すべての天皇が行なっているわけではない。

	12・20 10(843)4・21 嘉祥3(850)2・7 3・16				神功皇后 神功皇后 ○ ○	崇あり 成務陵と誤ったため 仁明天皇の病氣平癒 崇あり
文徳	嘉祥3(850)4・16 10・5 11・30 斉衡1(854)12・3 2(855)7・2 3(856)5・25 11・22 天安1(857)2・21 2(858)3・12	○	○	○	仁明 施基・平城・嵯峨・ 淳和・仁明 嵯峨・仁明 嵯峨 聖武 聖武 諸山陵 仁明	文徳即位 賀瑞の出現 惟仁親王立太子 改元 東大寺ルシャナ仏の修造 ルシャナ仏修造の遅延 昊天祭祀 改元 恠異
清和	天安2(858)10・23 11・5 12・9	○		○	文徳 嵯峨・仁明・文徳・ 源潔姫	鎮謝 清和即位 (十陵四墓制定)

(六国史をもとに作成)

- ②奈良朝においては天智天皇も天武天皇も扱いにおいて区別がない。文武の時、両天皇の忌日が国忌とされているように(大宝二年十二月二日)、決して天智が排除されていたわけではない。
- ③奈良朝では、意識の上では草壁皇統が強調されるが、草壁への奉幣はほとんどみられず、いわゆる草壁皇統意識が山陵奉幣に投映されているわけでない。
- ④桓武に至り、初度を除いて聖武がはずされ、施基・光仁などにも奉幣されるようになり、明らかに天智系皇統が意識されてきている。
- ⑤その後、平城天皇以後においては、桓武陵への奉幣が主となる。
- ⑥天武(系)への奉幣は平安期に入ると、いっさいみられない。ただ東大寺大仏に関連したことだけは聖武陵に奉告されている。
- 皇統は皇位継承上、問題のある時に自覚されるものであった。換言すれば皇統とは自分の立場を

表7 奈良・平安朝の山陵奉幣・奉告

天皇名	年 月 日	天智	天武	光仁	桓武	そ の 他	目 的
文武	文武2(673)正・19		○				新羅貢物を献上
聖武	神亀5(728)9・23 天平1(729)8・5 2(730)9・25 14(742)5・17 17(745)5・11					諸陵 諸陵 山陵6所 斉明 諸陵	皇太子基王の病氣平癒 改元 渤海信物を献上 陵墓崩壊したことによる
孝謙	天平勝宝4(752)閏3・28 6(754)3・10 7(755)10・21	○ ○ ○	○ ○			応神・元明・元正 持統・文武・草壁・ 元明・元正・(不比等墓)	新羅王子の来朝を報告 唐国信物を献上 聖武の不予祈願
桓武	延暦4(785)10・8 12(793)3・25 13(794)正・16 24(805)7・27	○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○		聖武 施基 早良	早良廃太子のこと 平安遷都のこと 征夷のこと 唐物を献上
平城	大同2(807)11・11				○		伊予親王を廃すこと
嵯峨	弘仁1(810)9・10 12・18				○	紀掾姫	薬子の変のこと 読経
淳和	天長4(827)8・15					聖武	東大寺ルシャナ仏のこと
仁明	天長10(833)3・5 12・3 承和3(836)5・22 5(838)7・11 6(839)4・25 12・13 7(840)6・5 8(841)5・3 5・12 10・29 9(842)7・24 8・4				○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	藤原乙牟漏 崇道・平城 (12・18乙牟漏) 神功皇后 神功皇后 崇道・平城 (12・23乙牟漏) 神功皇后 神功皇后 嵯峨	仁明即位 唐物献上 遣唐使派遣のため 物佐あるにより読経 山陵の伐採を謝す 唐物献上 物佐, 桓武の祟りという 肥後国神靈池の沽濁 重ねて奉幣, 祈雨 仁明天皇の病氣平癒 恒貞親王廃太子の報告 道康親王立太子のこと

意味づけ、合理化する必要のある時に主張され、武器とされるものであった。天智系という皇統意識は何よりもまず、桓武自身の抛り所とされたものであった。しかし結果的にみて天智系皇統の意識は、この時期における皇統切り換えの論理となったことを知る。したがってその桓武体制が完成すれば、天智系意識さえも必要ではなくなる。それに代わって、平安京を造った桓武が直接の祖とされるようになった。右にみた山陵奉告(幣)のあり方の変化は、まさしくそうした皇統意識の推移を反映しているといえよう。そしてここに至れば、天智をことさら抛り所とする必要もない。平城以後、天智陵への奉幣がほとんどみられなくなる所以である。もっとも清和に至り、天智天皇にはじまるこの皇統について十陵四墓の制が定められるが、そののもつ意味は別個に考えられる必要がある。⁽²⁶⁾その点、平安初期における天智系皇統の意識は草壁系のそれよりも短かったのである。そして草壁系にしろ天智系にしろ、限られた、特定時期の意識であって、けっして超時代的なものでなかったことに留意しておきたい。

なお「天武」系意識については、これまでも縷々述べてきたように、奈良朝でも意識された形跡はなく、持ち出されるのはもっぱらその皇子の草壁であった。天武に対する意識は、桓武の強調した天智系意識に対応するものとして、平安期に入って醸成された、新しい意識であるというのがわたくしの考えである。しかもそれが言葉として登場するのはさらに時代が下り、平安末期、源氏の蹶起を促した、例の以仁王の令旨においてである。

……違_レ逆 帝皇、破_レ滅_レ仏法、絶_レ古代_二者也、于_レ時天地悉悲、臣民皆愁、仍吾為_二一院第二皇子_一、尋_二天武
天皇旧儀_一、追_レ討 王位推取之輩、……
(『吾妻鏡』治承四年四月二十七日条)

しかもここで注目されるのは、天武を篡奪者とみる意識があったとみられることである。これは奈良期にはみられなかった天武天皇観といわねばならないが、これも天智系皇統が定着したことで裏腹の関係にある。ちなみに天智と天武を対比している最初の書物は、管見によると『神皇正統記』である。これは南朝を正統視した、

文字通り皇統論であるが、その中で次のように記し、天智の正統性を主張している。

其後相統^{ついで}で天智天武御兄弟立給しに、大友の皇子の乱^{みだれ}によりて、天武の御ながれ^{ひましくつたえ}久伝^{ひましくつたえ}られしに、称徳女帝にて御嗣^{みぎ}もなし、又政もみだりがはしくきこえしかば、たしかなる御譲^{ゆずり}なくて絶にき。光仁又かたはらよりえらばれて立給、これなん又継体天皇の御ことに似給へる。しかれども、天智は正統^{せいとう}にてまし／＼き。第一の御子大友こそあやまりて天下をえ給はざりしかど、第二の皇子にて施基のみこ御とがなし。其御子なれば、此天皇の立給へること、正理にかなへるとぞ申侍べき。

天武は万葉の世界でしか生きておらず、平安期以後においても以仁王を除いて回顧されることはなかった。これは貴族社会を牛耳った藤原氏の立場からも、大事なのは天智であって天武ではなかったからである。鎌足や不比等など後者とのかわりが薄かったことにもよるだろう。また以仁王にみられるような篡奪者という認識を忌避するということもあったろう。その意味では天智系・天武系という言い方は限られた時期、限られた意味をもち、限られた機能を果たした意識・觀念であって、超歴史的なものとみるのは適當でない。

皇統意識は、時々の政治情勢・力関係をもっとも敏感に反映し、そして消えていったものといえるようである。われわれは好んで天智系・天武系という言葉を用いるが、このような理解と認識をもって使う必要があるのではなからうか。

(1) たとえば中川収「光仁朝の成立と井上皇后事件」(『日本歴史』二二七号)参照。ちなみに天武系から天智系へ切り換えられた理由については、①それにより長年続いた皇嗣問題を清算しようとしたものである、②天武系皇子女に適材がなくなつたためである、③当初から白壁王の皇子山部親王(桓武)の擁立を目的としたものである、④白壁王の官歴を重視し、律令官人の統領として即位させようとしたものである、というのが主たる理解である。

(2) 県犬養氏については林陸朗「県犬養家の姉妹をめぐって——奈良朝後期宮廷の暗雲——」(『国学院雑誌』六二の九、

ち『上代政治社会の研究』に所収）参照。

- (3) 奈良期における立太子の状況をみると、他戸親王の場合、光仁即位から一年三カ月後に定められたもので、生後一カ月で立太子された聖武皇子・基王につぐスピード決定であったことになる。

- (4) この事件については阿部猛「氷上川継の叛乱」（『日本社会史研究』一号）に詳しい。

- (5) 近江昌司「井上皇后事件と魔魅について」（『天理大学学報』三十九輯）。

- (6) 安積親王は天平十六年（七四四）閏正月十三日、「脚病」によって難波遷都の行幸から恭仁宮に戻り、二日後に没した。急死であることからこれを暗殺事件とみる意見が強いが、わたくしには従えない。これについては本書第一部第二章を参照のこと。

- (7) 中川収、註（1）前掲論文。

- (8) 奈良期の皇太子制度については村井康彦氏が「王権の継受——不改常典をめぐる——」（『日本研究』一集）で論じられている。

- (9) 河内祥輔「奈良朝政治史における天皇制の論理」（佐伯有清編『日本古代政治史論考』所収）。

- (10) 立后のもつ政治的意味については、本書第一部一章で詳しく論じた。

- (11) たとえば河内祥輔、註（9）前掲論文など。

- (12) たとえば北山茂夫「藤原種継事件の前後」（『日本古代政治史の研究』所収）など。

- (13) 林陸朗、註（2）前掲論文によれば、本系は藤原氏本系で、「百川伝」の基になったものという。

- (14) 本居宣長『統紀歴朝詔詞解』。

- (15) 『日本後紀』弘仁元年九月十日条によれば、早良親王の祟りを恐れた桓武天皇が『統日本紀』から親王の淡路配流の記事を削除したというが、こうした事実から判断して、井上母子についても同様に記事が削除された可能性は十分考えられよう。

- (16) 難波内親王の魔魅事件については、井上母子に対する糾弾とみるのが通説であるが、林陸朗氏（註（2）前掲論文）が指摘されるように、井上廃后に難波内親王がかかわっていた可能性もないわけではなく、そのため逆に恨みを抱いた井上が本当に難波を魔魅したということも考えられよう。

- (17) 藤原房前の内臣任命については本書第二部第二章「武智麻呂政権の成立——『内臣』房前論の再検討——」で論じた。な

お内臣に因しては山本信吉「内臣考」(『国学院雑誌』六二―九)、二宮正彦「内臣・内大臣考」(『続日本紀研究』九―一)など参照。

- (18) たとえば林陸朗、註(2)前掲論文、中川収「光仁朝政治の構造と志向」(『林陸朗先生還暦記念会編『日本古代の政治と制度』所収)など。

- (19) 藤原百川の薨伝(『続日本紀』宝龜十年七月九日条)を収める『続日本紀』が桓武天皇時代に編纂されたものであることに留意する必要がある。なお光仁朝における百川については本書第一部四章参照。

- (20) 『続日本紀』宝龜十年十二月十三日条に記す中納言藤原純麻呂薨伝によれば、「(純麻呂は)式部卿百川薨後、相繼用事」とみえる。光仁朝における百川の立場が示されているよう。

- (21) 近江昌司、註(5)前掲論文、中川収、註(1)前掲論文などが、永手の死を重視されている。なお中川氏は、良継・百川らによる山部親王立太子の計画は永手生前からのもので、それが永手の死により再燃したと述べられている。

- (22) たとえば中川収、註(18)前掲論文。

- (23) その点弘仁元年(八一〇)に起こった、いわゆる薬子の変は、まさに式家の復権をはかって起こされた事件といえよう(本書第二部四章参照)。

- (24) 喜田貞吉『帝都』。

- (25) 村井康彦『日本の宮都』。

- (26) 十陵四墓についてはここでは深くふれないが、四墓が藤原鎌足(多武峯墓)・藤原冬嗣(宇治墓)・藤原美都子(宇治墓、冬嗣室)・源潔姫(愛宕墓、良房室)であるように、それは良房による藤原氏の祖先への回顧と顕彰に基づくものであり、その立場から天智天皇を筆頭とするいわゆる天智系皇胤の山陵が持ち出されたもので、ここにおける天智の回顧は、以前の天皇による奉幣とは意味合いを異にしており、同列には扱えない。

Ⅱ

場の政治学

一章 参議論の再検討

——貴族合議制の成立過程——

はじめに

わが国古代の政治構造については、太政官の下に組織された有力貴族による合議制、いわゆる太政官制が奈良期以来の基本的な政治形態であり、これによって天皇権も制約を受けたとするのが、ほぼ通説となっている。⁽¹⁾ そうした観点から、太政官合議体制は、迺れば大化前代の大友合議制を継承するものであるとする理解が生まれる一方、降つては平安期の摂関政治や院政も根本は太政官制であり、摂関政治や院政という概念自体無意味であるとする見方さえ出されている。わたくしも、太政官機構の役割を一貫してとらえ、太政官合議制を重視することに異論はないが、当然のことながら過大な評価はさけなければならない。

太政官合議制を考察する上で留意すべき点は、第一に、合議制といわれるものの実態を的確に把握することである。⁽²⁾ ことにその構成員が、当初左・右大臣、大納言の合わせて六人⁽³⁾、しかも多くの場合このうちのどれかを欠き、時の政治情勢によっては一人か二人⁽⁴⁾ということもあったとすれば、合議とは名ばかりといった事態も考えておかねばならないであろう。合議制の存在自体を疑問視する意見⁽⁵⁾が出てくるのも故なしとしない。

第二は、右のことと表裏の関係にあるが、国政の審議・決定に果した議政官の役割を全政治構造の中で正当に

位置づけることである。たとえば平安期以前の政治運営において、議政官の存在とは関わりなく政治上の意見をひろく官人に徴取した、いわゆる「意見封進」の制とか、逆にそれを特定の個人に求めたものともいえる「参議」の制などが採られているのは、議政官合議制が限定された機能しかもたなかったことの何よりの証左であり、合議制を補完（別の言い方をすれば制約）する役割をになつていたといえるのではなからうか。その意味でわたくしは、少なくとも奈良期においては、議政官合議制の外にあるものの存在とその役割にもっと注目する必要があるように思う。そしてこれらは結局、天皇権をどのように理解するかにかかつており、⁽⁶⁾それとの関係で、合議的な要素とその枠外にある、いわば非合議的な要素とを総合的・多角的にとらえ、位置づけることが重要であらう。

以上はしごく当然のことを指摘したまでであるが、裏返せばそのまま、従来の研究に抱くわたくしの率直な疑問でもある。そしてこうした疑問は、結局のところ太政官合議制と不可分の形で取り上げられてきた「参議」の理解に由来するように思われる。というのはこの「参議（制）」については、字面（議に参ずる）にひかれてであらう、無媒介に「合議（制）」の同義語と理解され、⁽⁷⁾用いられているが、参議（者）の機能なり職掌を当初から合議（議政官）と考えてよいのか、大いに疑問が存するからである。

大宝二年（七〇二）五月、大伴安麻呂以下五名を「参議朝政」せしめるという形で登場した「参議（者）」については、かつて竹内理三氏が、「新官制に収容し切ることのできなかった旧氏族を、新機構による政治機構に参加させるために案出された便法ではなかったか」と⁽⁸⁾され、この理解が大方の承認を得て今日に至っている。竹内氏の参議論は、新官制すなわち律令官制を、各氏族から代表が参画して廟堂を構成するという原則、いわば氏族のバランス・オブ・パワーが図られたものとみるところに特徴があり、「氏族均衡論」といってよい。⁽⁹⁾そしてこの均衡論は、（氏はことさら言及されていないが）とりも直さずこの参議を、大臣や納言と同様の議政官であり、廟堂の構成員（ただしその最下位に置かれた）であったとする認識に基づいている。でなければ、参議に任ずるこ

とが新しい政治機構への参加ということにはならないであろう。こうして、参議Ⅱ合議Ⅱ太政官制という図式に集約される竹内氏の参議論が構築され、これが以後、古代における合議制、ひいては天皇や貴族の研究にも大きな影響を与え、あるいは方向づけたといっても過言ではない。

参議制については、その後ほとんどみるべき研究はなかったが、近時、二、三の論考が出された。まず高島正人氏は、「参議」設置の理由を「表面的（形式的ないし名目的）理由」と「裏面的（本質的）理由」とに大別し、当時わずか四名となった公卿人員の補充強化といったこともあるが、それらは表面的な理由で、本質的には、(1)令制による人選の不平不満の解消策、(2)大伴安麻呂・粟田真人らの大納言補任を阻止するため藤原不比等が案出した巧妙な他氏排斥策、の二点にあったとされた⁽¹⁰⁾。つぎに黒板伸夫氏は、参議の相当位を正四位下と記す『職原抄』の理解を疑問とし、参議に対して正式な官位相当制の必要がしばしば説かれながらも、結局、法制上相当位を制定することがなかった事実を指摘された⁽¹¹⁾。この相当位を中心に論じたのが虎尾達哉氏である。氏は黒板氏の説を承けながらも、参議の相当位についてはこれを四位とし、四位（者）と大化前代の大夫層との関連を検討した上で、参議制は三位以上の令制議政官に対する「四位の議政官」として案出されたもので、大宝二年当初よりすでに「正官」であったとされた⁽¹²⁾。

わたくしのみるところ、これらの意見はいずれも竹内氏の氏族均衡論に対する疑問や批判を含みながら、竹内説の根幹ともいうべき、参議は議政官であり、合議制の構成者であるとする考え方を継承する点では共通しているように思われる。そのため、それぞれ聴くべき見解を打ち出されながらも、論点はもっぱら参議の制度化の時期といった議論に終始し、もっとも肝心な、参議そのものの検討、すなわち参議の本義はもとより、その変質過程についての考察はほとんどなされるところがない。氏族均衡論に基づく竹内氏の参議論が合議制論と不可分である以上、その合議制論の内容にまで立ち至って検討しない限り、それが当然の帰結であったと思う。

参議とは、先の初見記事が示すように、本来は「朝政」に参議⁽¹³⁾することである。この「朝政参議」については、参議が議政官である大臣・納言らとの合議に参画したものとするのがこれまでの理解であるが、前稿「武智麻呂政権の成立——『内臣』房前論の再検討——」⁽¹⁴⁾で、参議・内臣となった房前に対する通説の再検討を通して明らかにしたように、天皇の諮問に応え、各自の立場から意見を具申すること、もしくはその立場（人物）のことであつたとみるべきものである。したがってこれは別に「待問参議」⁽¹⁵⁾といわれたものに等しい。参議——初期の参議は、天皇との個人的なかかわりにおいて存在する、私的・非合議的な性格にこそその特質があつたというのが前稿での結論であり、それがまた本稿の出発点にもなっている。そこでわたくしは、こうした待問参議を特質とした初期参議のあり方を「朝政参議（者）」と呼び、いうところの議政官化した参議を「廟堂参議（者）」と呼んで区別することにした。

このように見てくると、いま参議制論に必要なのは、参議をアプリアリに議政官とみなしてきた通説の抜本的な見直しであり、初期の参議がどのような過程を経て議政官化していったかの、いわば質的变化の考察⁽¹⁶⁾ではなからうか。換言すれば「朝政参議（者）」から「廟堂参議（者）」への変質過程であり、それを通して、不十分な形でしか存在しなかった合議制がどのように充実・整備されていったかを跡づけることである。太政官制は参議を廟堂構成員に取り込んだ段階で始めて実体ある組織となり、その時点で貴族合議制は確立したといつてよい。公卿（層）の成立がそれである。

本稿では以上のような学説的反省に立って参議（制）を多角的に考察し、それを通して貴族合議制の確立していく過程を明らかにしたい。おのずから考察の範囲は、参議の登場時から議政官との同質化を経て合議体制ができ上がる平安前期にまで及ぶが、参議論のあらたな展開のためには、そこまでを視野に入れることが不可欠の要件と考える。

なお本文中、とくに断らない限り、引用史料とその日付けは六国史による。

一 初期参議の性格

(1) 「参議」の登場

大宝二年（七〇二）五月二十一日、文武天皇から大伴安麻呂以下五名に対して、次のような勅が下された。

勅ニ從三位大伴宿禰安麻呂、正四位下栗田朝臣真人、從四位上高向朝臣麻呂、從四位下毛野朝臣古麻呂、小野朝臣毛野ハ、令_レ参_二議朝政_一。

参議制に関するこれが初見史料であるが、「はじめに」でふれたように、この「朝政参議」の勅を「新官制に收容しきれなかった旧族を参加させるための措置」とみなされたのが竹内氏であった。

しかしこの理解には疑問がある。これまで出された意見をふまえて整理すれば、さし当り次の二点が指摘できよう。

(1)もし新機構への参加＝吸収なら、参議任命者は当時の有力氏族であるべきであるが、五人のうち大伴氏を除く他の四氏は、むしろ二流三流の氏族でしかない。

(2)もし新機構への編成なら、任命されたポストはその後継的に補充されてしかるべきであるが、⁽¹⁷⁾実際にはそうならない。

とするならば、この時の参議任命には別個の理由なり背景があったとみるべきであろう。わたくしはそれを理解する鍵は、ほかならぬこの五人の経歴そのものに存しているように思う。

この顔ぶれで注目される第一の点は、特殊な経歴や才能の持主だったことである。周知のように栗田真人と下毛野古麻呂は、大宝律令の編纂メンバーである。ことに古麻呂は大宝元年（七〇二）四月、律令の施行に先立ち、

親王や諸臣百官のため新令を講義しており、撰定に主要な役割を果たしていたことが知られる。⁽¹⁸⁾ いっぽう高向麻呂と遣隋使小野妹子の孫に当る毛野とは、天武から持統朝にかけて、遣新羅（大）使の任をつとめた人物である。

帰朝後、毛野が外交に関わる筑紫（のちの大宰）大貳に任じられた（文武四年十月）のも、毛野自身の経歴が買われたものといつてよい。この点については先の栗田真人も同様で、持統朝に筑前大宰を務め、大宝元年正月、遣唐使に任じられている。真人はその後先の「参議」の詔を得、翌月に入唐、二年後（慶雲元年）に帰朝したが、経史を好み文章も巧みであったことは中国の史書にも記すところである。⁽¹⁹⁾ また五人中、筆頭位にあった大伴安麻呂は、天武朝の末年、新羅使を饗するため筑紫に派遣されている。これも、渡航こそしていないが、その任にふさわしい教養の持主であったことを思わせる。⁽²⁰⁾

こうしてみるとかれら五人の中には、古代国家の理念となる律令に精通した者たちが少なくないこと、またそのほとんどが中国への渡航経験を持つか、対外事情に明るい者であったことが知られよう。「朝政参議」の詔が下される前年の正月には中国風の賀正礼が挙行され、ついで二月には始めて积奠が行なわれるなど、律令国家にふさわしい制度の整備に力がはらわれていた時期である。かれらが「参議朝政」に預ったのは、幅広い知識や体験、斬新な国際感覚が求められたためとみてまず間違いない。

参議の顔ぶれで留意される第二の点は、五名の中に、天武十四年（六八五）に新羅から帰朝して以来、官歴不詳、というより官途についていない高向麻呂のような、いわゆる散位者が含まれていたことである。⁽²¹⁾ 大伴安麻呂の場合も、前年に式部卿に任じられてはいるが、長らく散位であった。⁽²²⁾ 前稿武智麻呂論で指摘したように、初期官司・官人制のあり方は、律令期以前の氏族社会における慣習を基調としており、嫡男以外は散位＝無官的経歴をたどるのが普通であった。その散位者の「参議」任用は、そうした官司＝官人制とは別個の原理で登用の枠が拡大されたもの、というだけでなく、「参議」の立場が、天皇の諮問に依って政治上の意見を述べる個人的なも

のであったことを推測させる何よりの材料である。

天皇の下間に預り意見を具申する待問参議の立場なり職掌は、（令には直接規定するところはないが）当然大臣や大納言など、いわゆる議政官にもあったとみられる。したがってその点では、「参議」と議政官とは共通する立場にあったといつてよい。しかしそうであればなおさらのこと、その議政官とは別個に「朝政参議（者）」を任命し、その意見が採用されるような当時の政治構造が問題なのである。「はじめに」で、この時期の国政は議政官合議制の枠外にあったものにこそ特質があり、そこに注目する必要があると指摘したのがこのことにほかならない。それはまた天皇（側）に政治的主体性があったことの徴証でもあった。

こうした「参議」の立場やあり方をもっとも典型的に示してくれるのが、元正天皇から「参議朝政」せよとの命を受けた阿倍広庭の場合である。『続日本紀』によれば、養老六年（七三二）二月二十三日に詔が下され、諸府の衛士・仕丁の役年数を減じて三年一番の制が定められたが、これは約一年前の養老五年三月、兵部卿阿倍首名らが、衛士たちの逃亡に対処するため役年数の軽減を奏言したのに対する裁可であり、その首名らの奏上は、元正天皇の「意見徴召」に促がされてのものであった。⁽²³⁾ 奏上から裁可までに一年もの期間を要した背景には、問題の困難さがあったことを推測させるが、それがここにきて急転直下裁可されたのは、その二十日前、広庭が参議に任命されたことと深い関係がある。

すなわち広庭の「参議」任命は同六年二月一日であるが、翌月知河内和泉事に任じられ、さらにその後、催造宮長官も兼任する。河内・和泉といえ、当時は和泉監の置かれていた特別行政区であり、右の両職に、智努宮の管理はもとより、距離的にも近い難波宮の造営役民の差配など、実務能力がとくに要求されたことを考えると、先の衛士対策に広庭の見識が求められ、それが力役の軽減という元正の勇断に反映されたとする推測は十分に可能であろう。この時期の「朝政参議」とは、このような形で国政にかかわること、またはその人物にほかなら

い。のちのことになるが神亀四年（七二七）三月、聖武天皇が南苑に御した折、衛府の者たちに日夜闕庭に宿衛すべきことが命じられたが、その勅を宣べたのも「参議従三位」の阿倍広庭であった。広庭と衛府との深いかわり、さらには先にみた力役問題に發揮された広庭の手腕を裏づけるものとして留意される。

いずれにせよ当時左大臣（長屋王）・大納言（多治比池守）・中納言（大伴旅人・藤原武智麻呂）がいたにもかかわらず、大臣・納言でもない「参議」が勅を宣べるという行為に、前述来の、天皇と個人的関係で結ばれた「朝政参議（者）」——初期参議の特質が示されているといえよう。

(2) 中納言の設置

大宝二年にはじめて「朝政参議（者）」が任じられてから三年後の慶雲二年（七〇五）四月、つぎのような勅により、新しく中納言を設置する⁽²⁴⁾方針が打ち出されている。

依_レ官員令、大納言四人、職掌既比_ニ大臣、官位亦超_ニ諸卿、朕願念之、任重事密、充_レ員難_レ滿、宜_レ廢_ニ省二員、為_レ定_ニ兩人、更置_ニ中納言三人、以補_中大納言不足、其職掌、敷奏宣旨、待問参議、其官位料祿、准_レ令商量施行、太政官議奏、其職近_ニ大納言、事関_ニ機密、官位料祿、不_レ可_ニ便輕、請其位擬_ニ正四位上官、別封二百戸・資人卅人、奏_ニ可_レ之。

大納言の任務が重大なために人材が得がたく、定員を満たしがたいという現状から、四人の定員を半減して二名とし、新たに三人の中納言を置くことにしたもので、太政官からの議奏により、官位は正四位上の相当官、料祿については別封二百戸・資人三十人を与えるとしている。しかし中納言新設の真意は、大納言の不足を補うため（たしかに当時大納言は、従二位藤原不比等と従三位紀麻呂の二人だけであった）という以上に、議政官の構成を二階層から三階層（左右大臣―大納言―中納言）に再編成することによって、より機能的で実効ある合議体制をつくる

ことにあったとみられる。したがってこのような意図をもつ中納言の設置は、参議あるいは合議制の展開に深いかかわりがあったにもかかわらず、これまでそうした観点からこれを取り上げ、論ずることはほとんどなかったように思う。

中納言の職掌については、右の勅に「敷奏宣旨・待間参議」とある。前者の敷奏宣旨とは臣下の言葉を天皇に奏上し、天皇の命を下へ伝達すること、もともと大納言の職掌（の一部）であり、⁽²⁵⁾後者の待間参議は天皇の下問を待つて参議するの意であるから、以前述べた「参議朝政」と同義である。そしてこの参議朝政は大納言以上の議政官の職掌に含まれていたから、中納言の職掌は、部分的ながら大納言以上のそれと重なり、また参議（者）とも共通していたわけである。ただし詭弁を弄するようであるが、追々明らかにするように、中納言が大納言と参議（者）の権限を兼ねたことと、中納言が大納言と参議の中間に位置づけられたというのとは同じでない。⁽²⁶⁾

中納言の設置でとくに注目されるのが、参議（者）との関係である。右の勅が出されて五日後の除目で、栗田真人・高向麻呂（以上正四位下）・阿倍宿奈麻呂（従四位上）の三人が中納言に任命されたが、このうち前二者は先に参議とされた五人中の二人であった。またこの年八月には、「参議」大伴安麻呂が中納言を超えて大納言となり、⁽²⁷⁾残る二人の「参議」のうち毛野も和銅元年（七〇八）三月、中納言に任じられている。五人中四人までが短い期間に参議から議政官へと進んでいるわけで、最後の一人、古麻呂も和銅二年十月に没しなければ、その可能性は十分にあった。この事實は、参議→中納言→大納言という昇進のルートが開かれたことを思わせる。換言すれば中納言の設置は、中納言以上にとどまらず、参議（者）をも含めた議政官体制の確立をもたらしただけの如くである。

あらためて指摘するまでもなく、このような理解は参議が議政官であってはじめて可能なものであるが、しかしその前提に疑義がある以上、にわかに賛成はできない。中納言に参議が任命されたのは、有資格者の四位のな

かでは当然参議（あるいはその経験者）が有利であったまでのことで、参議が中納言につながる下位の地位であったからではない。⁽²⁸⁾ 右のうち参議からいきなり大納言に任じられた者がいるのも、その証左となろう。

中納言について、つぎに留意されるのは、相当位階が四位であったことである。四位といえば、先にもふれたように、大化前代の大夫層の系譜を引く「四位以上」を、三位以上の令制議政官に対する四位の議政官として設置したのが参議であり、当初より正官であったとする虎尾説が想起される。しかし参議は最初から「正官」であったのではない。それどころか、この参議の正官＝職事官化に関しては、のちにあらためて取り上げるように、実に菅原道真の時代に降ってもなお問題にされており、その点、虎尾説の論拠には難点がある。しかし中納言は間違いなく「四位の議政官」である。もし虎尾説が生かせるものならば、それは四位の参議ではなく、むしろ四位の中納言においてであろう。

もう一度確認しておく。「参議」から「中納言」への就任は、非議政官＝非正官から議政官＝正官への入閣を意味するものであっても、同一組織内での昇格ではない。この点は、両者の間にみられる処遇面での違いの大きさからもうかがえると思う。

すなわち先の勅に明らかなように、相前後して設けられた参議（七〇二）と中納言（七〇五）であるが、中納言には「其職近_ニ大納言、事関_ニ機密、官位料禄、不_レ可_ニ便輕_コ」とて、位階は正四位上とし、別封二百戸・資人三十人が与えられたにもかかわらず、参議については、員数や相当位階・職掌はもとより、身分的な保証や特権など、なにひとつ具体的な規定がない。このことは「参議」が中納言（あるいは大臣）と同質・同次元の存在でなかったこと、換言すれば参議は「大臣―大納言―中納言」という議政官体系に連なる存在ではなかったことを暗示している。むしろ参議が議政官でなかったからこそ、参議とは無関係に「納言」級の再編整備、すなわち中納言の新設が行なわれたものとみるべきである。「参議」は、なおこの段階でも、太政官＝議政官の枠外の存在であ

った。

しかし、これまでの考察からも観取されるように、この中納言の設置は、その後における議政官制度の整備・序列化に少なからざる影響を及ぼしたこともたしかである。ことに天平宝字五年（七六一）三月の格で中納言の相当位が従三位に引き上げられたことは、その下に四位の参議を置く、いわば「受け皿づくり」として注目されるところであるが、それについてはあらためて取り上げよう。

二 武智麻呂と参議の変質

(1) 参議の権任

参議制の展開の上で看過できないのが藤原武智麻呂の役割である。というのは前稿でもふれたように、弟房前の「参議」および「内臣」任命と、それへの武智麻呂の対応が密接にかかわっているからである。

房前が元正天皇の詔によって参議とされたのは養老元年（七一七）十月のことであるが、房前はそれまではほとんど散位で格別の功績があったとも思えないから、房前の任命はこれ以前の参議に比しても異例の抜擢であり、その引級に継母三千代の働きかけがあったことは間違いない。しかも父不比等が没した翌養老五年（七二二）十月には「内臣」に任命され、内外を計会して天皇を補佐することを命じられている。内臣はのちに「忠臣」⁽²⁹⁾ともいわれたように、近臣・寵臣のことで、他の議政官とは異質の存在であった。この内臣任命には鎌足再来を思わせるものがある。そこから房前を兄武智麻呂にまさるとする見方⁽³¹⁾（わたくしは賛成できない）も生まれたわけであるが、それについてはここでは立ち入らない。

こうした房前の参議・内臣就任が、兄の武智麻呂を極度に刺激し、対抗意識をかり立てたであろうことは想像にかたくない。武智麻呂が、その「参議」（内臣）の換骨奪胎化をはかり、天皇と参議の関係を希薄にする方策に

出たのは十分に理由のあることといわねばならない。具体的には、天平三年（七三一）に行なわれた、諸司の挙による参議の任命がそれであるが、その二年前、長屋王の事件における「参議の権任」も、武智麻呂の参議対策を理解する上で見落せないように思う。

長屋王の事件は、前稿で検討したように、当中納言の地位にあった武智麻呂の領導するところであるが、この事件が「参議」にかかわりがあるのは、天平元年（七二九）二月十一日、すなわち密告のあった翌日、大宰大貳正四位上多治比県守・左大弁正四位上石川石足・弹正尹從四位下大伴道足の三人を長屋王宅に派遣するに当り、「権為参議」⁽³²⁾しているからである。かれらは武智麻呂に近く、ことに県守はかつて征夷將軍の経験⁽³³⁾を有しており、「弹正尹」道足とともに、事件対応のための人材にふさわしい。しかも多治比・石川・大伴ら三氏は伝統的氏族であり、時の首班・左大臣長屋王を糾問するためには、そうした勢力の糾合が何よりも必要であった。「参議」⁽³⁴⁾任命はそのためにとられた手段であり、しかも「朝政参議（老）」が天皇と個人的關係を有する立場であったことを考えると、「参議」は天皇の意思の代弁者の役割を果すことにもなったろう。換言すれば武智麻呂は、「権（仮）りに」でも参議を任命することで衆議の拡大を図り、長屋王の糾問が政界の支持を得た合法的なものであることを表明する一方、それを通じて自己の体制強化を図ったのである。長屋王（左大臣）の下位にあった武智麻呂（中納言）が、その行動に大義名分を求めるためにとった、これはきわめて巧妙な方策であったといわざるを得ない。事件後、石川石足が長屋王の弟鈴鹿王の宅に遣わされ、一族の縁坐すべき者ことごとくを赦除すると勅を宣べる任に当たっているのも、先の阿倍広庭と同様、参議の立場を考える上で留意されるところである。ところでこの長屋王事件の際に任命された参議をめぐる二つの点から問題にされてきた。一つは、「権りに」これを任命したことの意味、二つは、参議の語の動詞的用法から名詞的用法への変化の意味、である。

まず第一の点については、多治比池守（当時大納言）・大伴旅人（中納言）がすでに議政官として存在しているところから、正官の一族連任をさけるための措置と理解されている。⁽³⁵⁾これは、参議の登場を、新官制に漏れたものの吸収とみた理解（竹内説）と裏腹のものであり、参議を議政官とみる立場からは当然の解釈であるが、⁽³⁶⁾氏族均衡論はもとより参議そのものの理解に問題がある以上、わたくしは採らない。この時参議の権任が可能であったのは、ひとえに参議が議政官ではなかったからで、連任をさけるといった意味はまったくない。むしろ有力氏族を糾合する方便としては、議政官の枠外にあり、任命方法や人数の上で融通のきく「参議」の登用以外にはなかったというべきである。

またこの時任じられた参議三人のうち二人（残りの一人は死亡⁽³⁷⁾）が、二年後の「諸司の擧」で再度参議に任命されているのは、事件後かれらの立場がいったんは解消されたことを思わせる。それまで「権参議」であったものが、これで「（正）参議」にされたという理解もあるうが、長屋王事件の時の参議は文字通りの権任、すなわち「権り」の任命であって、のちの時代に登場する「権参議」の任命ではない。⁽³⁸⁾あくまでも参議の資格を与えるための、臨時的・緊急的な措置であったとみるべきものである。

第二の点、すなわち補任表記がそれまでの「参議朝政」から「（権り）に為参議」となり、参議の語が動詞的用法から名詞的用法へと変化したことについては、これをもって参議の正官化とみなす見方がある。用法の変化は、たしかに参議の立場が明確になってきたことの表われであり、その限りでは注目すべき現象といえるが、この時の参議に負わされた臨時的な役割を考えると、それをもって正官化の指標とまでみることはいえない。結局、長屋王事件における参議の「権任」は、基本的には「朝政参議」の体裁を取りながら、実質は武智麻呂の体制づくりに利用されたもので、形ばかりに終わったが、ここには参議の変質——「廟堂参議」への傾斜を予感させるものがある。事実二年後、武智麻呂によって「諸司の擧」の任命方式が採用されるにおよび、参議制は

大きく変質するのである。

(2) 諸司の挙

天平三年（七三一）八月五日、諸司の主典已上が内裏に召され、執事の卿等が薨逝したり老病のため理務に堪えない、よって各々知るところの人材を推挙せよとの勅が伝えられた。そこで七日、主典已上三九六人が然るべき者を推奏、その結果十一日に次のような詔が下されている。

詔、依_ニ諸司_一挙、擢_ニ式部卿_一從三位藤原朝臣宇合、民部卿從三位多治比真人鼎守、兵部卿從三位藤原朝臣麻呂、大藏卿正四位上鈴鹿王、左大弁正四位上葛城王、右大弁正四位下大伴宿禰道足等六人、並為_ニ參議_一。

この時期、左・右大臣はともに空席、大納言もまた一カ月前に大伴旅人が没して武智麻呂一人という有様で、勅にいう通り、まさしく執政官枯渇の状態にあった。そこで諸司_{||}八省の官人に命じて適任者を推挙させたのが、いうところの「諸司の挙」である。その結果、四百人近くの官人たちの推薦により藤原宇合以下の六人、すなわち式部・民部・兵部・大藏卿という八省の長官四人と、左・右大弁という（太政官）弁官局の長官二人が参議に任じられたのであった。この措置は、武智麻呂が事実上政界の首班となった直後という時期からいって、武智麻呂の意に出るものであったことはまず間違いない。しかも任命の形式というか手続きも、従来の方法とは全く異なるだけに、これがもつ参議制史上の意味が検討されてしかるべきであるが、不思議なことに従来これを本格的に論じたものはほとんどなかった。

この諸司の挙による任命が参議（制）の歴史の上で注目される点の第一は、これによりはじめて参議任用に具體的な基準が打ち出されたことである。これまでの参議は、たびたび指摘したように、適当な人物が、官職の有無を問わず起用された。房前の場合、散位（者）であった。ところがこの諸司の挙で八省や弁官局の長官が任命

されたことで、以後、これが参議の任用の基準、もしくは資格とされるようになった。⁽³⁹⁾ 以前の非制度的な要素が払拭されただけでなく、この方式によれば推挙・任命の主体も官司⁽⁴⁰⁾官人の側に移り、天皇(側)の意思は大きく制約されることになる。おそらく武智麻呂のねらいもそこにあり、これが元正天皇⁽⁴¹⁾房前側に与えた衝撃は少なくなかったと思われる。

もっとも諸司の挙というものはこの時だけであり、したがって官司の推挙による参議の任命方式がそのまま定着したというわけではない。⁽⁴²⁾ しかし大事なのは、これが契機、先例となって参議の資格が明確化されたことで、のちに述べる除目での任命とあいまって、恣意的な任用に歯止めがかけられることになった意義は大きい。参議は当初より勅任官であり、その限りではこれ以後でも最終的な任命者が天皇であることにかわりはないが、基準の有無という点では、似て非なるものであり、それにともないかつての非制度的、恣意的な形での参議任用の余地はなくなったといえる。⁽⁴³⁾ わたくしは、これをもって「初期参議」の終焉とみたい。

諸司の挙で注目される点の第二は、位階の上でも参議の基準が定まったことである。すなわち八省の卿や大弁は、令制によればいずれも正四位上⁽⁴⁴⁾従四位上が相当位であった関係上、その卿・大弁の任じられる参議も、おのずから四位相当とされたことをいう。これまででも参議の多くは四位者であり、五位者は見当らないが、三位の参議がいなかったわけではない。それがこの諸司の挙が契機となって原則として参議の相当位が四位と定まり、これも以後踏襲されることになる。

しかも四位といえば、前節でもみたように、これ以前に設けられた中納言と同等位であったから、これと四位の参議との間に位階の上での上下関係がなくなった。立場・職掌を異にするとはいえ、おのずから中納言と参議との間の、位階上の整合が課題となったに違いない。しかしそれも公式には天平宝字五年(七六一)に至り、中納言の位を三位に引上げること、決着がつけられることになる。こうして位階の上でも中納言と参議との間の

序列化が進んだが、その要因ももとをただせば諸司の挙に胚胎していたわけである。中納言の扱いについては他の問題とあわせて、のちにあらためて取り上げよう。

諸司の挙で注目される点の第三は、参議の員数にも影響を与えたと思われることである。参考までにこれまでの参議の数について整理してみると、大宝二年にはじめて置かれた五人の「朝政参議」は、和銅二年（七〇九）に下毛野古麻呂が没したことで消滅、その後房前が任じられて復活（養老元年）、さらに阿倍広庭の任命（同六年）で二人となったが、広庭が中納言となり（神亀四年）、参議は再び房前一人となっていた。したがって「諸司の挙」により六人の参議が撰ばれたことで、房前を加えて参議の数は一挙に七人にまでふえたことになる。その後藤原四子の急逝により、一時期二人に激減したこともあるが、途絶えることはなく、時には九人・十人にものぼった。

このような推移からも知られるように、諸司の挙が参議の増員化の契機となり、かつまたその常置化を促したことが留意されよう。もっとも人数については以後も不定であり、定員化するにはなお時間を必要とするが、しかしわたくしはこの諸司の挙による八省の卿の任命が、のちに「八座」ともいわれるようになる参議の員数を八人前後とする観念を生んだように思う。⁽⁴⁶⁾

このようにみてくると、諸司の挙が参議（制）に及ぼした影響は予想以上に大きく、おそらく武智麻呂の思惑をはるかに超えるものがあったのではなからうか。そしてここで明確にあらわれはじめた制度化への方向性は、諸司の挙で行なわれた一連の措置により、いっそう促進されることになる。

(3) 廟堂参議の成立

諸司の挙につづく措置として注目されることの1は、その三カ月後の十一月二十二日、参議が畿内惣官・諸道鎮撫使に任命されたことで、これは参議の職掌を理解する上で注目に値する。というのは、大惣管に知五衛及び

投刀舎人事の新田部親王が、副惣管に宇合、山陽道鎮撫使に多治比県守、山陰道に麻呂、南海道に大伴道足と、参議六人のうち王二人（鈴鹿・葛城）を除く四人までが、これに任命されているからである。新田部親王をはじめ宇合・県守・道足はいずれも武智麻呂に近く、例の長屋王事件で派遣された人物でもあったから、鎮撫使にふさわしい人選とみられるが、京畿の治安維持と地方政治の督察という国政の一端を担ったことで、ここに始めて参議に具体的な職掌（国政）が付与されたといえる。鎮撫使の設置は武智麻呂の対地方政策の一環であり、参議をもつて任命したところにその特徴があるが、これは職務内容からいって、平安初期、平城天皇の時参議の号をやめて置かれた諸道觀察使（三節）との関連性が考えられよう。これについてはあらためて取り上げる。

その二が、翌十二月、参議に封八十戸が与えられたことである。⁽⁴⁸⁾この数字は、中納言の二百戸に比すればはるかに少ないが、なんらの規定もなかった参議にはじめてなされた経済的な保証であったというだけではない。令制では三位以上に限られていた食封が支給されたことで、参議も三位に准ずる立場であることが明確にされたわけである。これはとりも直さず参議が中納言の下に位置づけられ（先述のように、位階の上ではなお同等であったが）、正官Ⅱ職事官として扱われはじめたことの証左であろう。

以上二つの措置は、むろん武智麻呂の関与するところであり、諸司の挙による任命と合わせて、参議の原型がほぼこの時期に形成されたことを示している。その意味で天平三年（七三一）は、参議（制）の歴史上、重要な画期であったといえると思う。

参議（制）はこうした時期を経て漸次実体化が進んだが、それは初期参議（朝政参議）が議政官Ⅱ正官、すなわち廟堂参議へと変質していく過程にはかならない。

その点に関してわたくしは、のちに道真が参議が職事か否かについて奏上した際、「所_レ食者職事之封、所_レ載者除目之簿、号_三之職事、所_レ扱非_レ少」といい、参議が職事の官であることの根拠として、先にみた食封ととも

に除目による任命をあげていることに注目したいと思う。というのは、たしかに除目での任命が、参議の議政官化の表徴とみなされるからである。

これまでみてきたように、参議の任命は大宝二年以来、単発的に行なわれる、いわば特別人事であったが、この期に至り、除目の一環として行なわれるようになった。

たとえば天平十五年（七四三）五月の場合、右大臣橘諸兄を左大臣に、兵部卿藤原豊成と左大弁巨勢奈氏麻呂（ともに参議）を中納言に任じたあと、藤原仲麻呂と紀麻呂が参議に任命されている。諸兄を首班とする体制の強化という意味もあったが、留意されるのは、この人事（参議任命）が他の議政官のそれと一連の形で行なわれていることである。天平勝宝元年（七四九）七月二日、孝謙天皇即位に際して行なわれた除目でも同様で、これまで参議であった仲麻呂を大納言に、同じく参議多治比広足・石上乙麻呂・紀麻呂の三人を中納言とし、新たに大伴兄麻呂・橘奈良麻呂・藤原清河の三人が参議とされた。天平宝字元年（七五七）八月、奈良麻呂の陰謀が発覚した直後の人事でも、参議石川年足が中納言に、巨勢堺麻呂・阿倍沙弥麻呂・紀飯麻呂の三人が新たに参議に任じられている。

このように参議の任命が除目の一環とされたことに関連して、先に言及した中納言と参議の関係が明確となり、整序されたことも重要である。右にあげた事例にもみられるように、新中納言へは大半が参議から任命され、またそのあとに新参議が補充任命されている（但し人数的には一定せず）。とくに多治比広成（正四位上）の場合、中納言や参議ら多数が相ついで没したあと参議に任じられたが（天平九年八月十九日）、早くも九月二十八日には中納言に昇任している。おそらく広成の参議任命は、二カ月前に死亡した兄の中納言県守の後任にすえるための便法であつたと思われるが、逆にいえばこれは、中納言になるためには短期間でも参議を経ることが必要とされたことを暗示する。以前にみたような、参議からいきなり大納言へ任命されることは、仲麻呂のような特例を除き、原

則として有り得ないものとなったわけで、ここにも参議・中納言の間の序列化の進展がうかがわれよう。

この序列化の仕上げの意味をもったのが、天平宝字五年（七六一）三月、中納言の相当位を正四位上から従三位に引上げたことである。それは中納言と参議がともに「四位の議政官」という変則的な状況を解消するための処置であった。以前わたくしは、中納言の三位引上げを、その下に参議を迎えるための「受け皿づくり」であったといったが（一節）、実際にはその逆で、参議の四位議政官化が基因となって、中納言の三位議政官への押上げが図られたというべきなのであった。

ともあれ、こうして奈良後期に至り、中納言と参議の序列化（それは大臣―大納言―中納言―参議という序列化でもあった）がほぼ完了した。その点でわたくしは、この時期から史料の上で、かれら議政官に対し「大臣以下参議以上」という呼称が見られはじめる事実注目したい。それは参議を含めた議政官集団の誕生を示す証左といつてよいが、これについては他の徴証の検討とともに、四節であらためて論じたい。

なお参議の議政官化に関連して、参議の「奏議」への参加をあげておかねばならない。⁽⁴⁹⁾天平宝字二年（七五八）、淳仁天皇即位直後の八月二十五日、太政官以下の官名が唐風に改められた際、太保藤原仲麻呂、中納言石川年足、参議文室智努・巨勢関麻呂・紀飯麻呂・藤原真楯らが新官号としての唐名を奏議し、勅許を得ている。改名の発案者が唐風好みの仲麻呂であったことはいうまでもないが、中納言藤原永手を除く議政官と、当時の参議全員が連名しての奏議であったことが留意される。議政官による奏議に参議の参画したことが確かめられる初見でもある。ついで宝亀元年（七七〇）五月十一日には、白鹿と白雀という祥瑞の献上に対して、天皇の命により各々関係者への褒賞を奏議しているが、ここでは「左大臣藤原永手、右大臣吉備真備已下十一人奏」すと記されている。『公卿補任』によれば、当時中納言以上は五人、参議は八人（このうち藤原清河は在唐、したがって実質は七人）であったから、「十一人奏」の表記に参議の大半が含まれることは明らかである。さらに延暦元年（七八二）七月の場

合、「右大臣已下、参議已上、共奏備」くと記されるように、参議が議政官の末端に連なり奏上に加わっていることが確かめられる。のちに取り上げる「公卿奏」の成立である。

以上、「諸司の挙」とそれに続く諸政策の検討を通して、参議が議政官の末端に連なってきた事実、すなわち「朝政参議」から「廟堂参議」への変質をみてきた。もっとも、廟堂参議とはいえまだ定員はなく、したがって先にみた欠員補充も恒常化したとはいいいがたい。その点、制度化はなお不十分であったといわざるを得ないが、このような過程で廟堂参議が登場したことの政治的意味はまことに大きいといわねばならないであろう。

(4) 参議と「非」参議

参議以上が議政官集団として機能するようになり、一定の階層を形成するにつれ、新たな問題として出てくるのが、有資格者でありながらその集団の外に置かれたものたち、いわゆる「非参議」ざる者の扱いである。この非参議の登場も、参議と表裏の関係において注目しておく必要がある。

たとえば弘仁十四年（八二三）十二月、凶年における礼服の着用が停止された時、皇太子及び参議、「非参議」三位以上、並びに職掌に預る人らが除外されている。また承和六年（八三九）四月には王臣並びに「非参議」四位已上」らが、走馬のことについて兵部省より訴えられている。この二例からも四位あるいは三位以上の者に対し、「参議」であるか「参議に非ざる」かが、扱いの上での基準になっていたことが知られよう。その「非参議」が平安初期に現われてくる。

もともと三位以上は令制でも「貴」と称され、五位以上の「通貴」と区別される上層貴族であったから、官職の有無にかかわらず特別扱いされるのはむしろ当然のことであった。これ以前の弘仁九年（八一八）正月、所司に賀正の礼を教習させるように命じた時、「参議并三位已上」はこの限りでないとして、教習の対象からはずさ

れている。この場合の三位以上も、先に掲げた用例からいって「非参議」三位以上のこととみてよいが、この時期、このように三位以上について「参議に非ざる」ことをわざわざ確認しているところに、「参議」の立場が重視されてきたことを物語っている。

ところが同じ「非参議」ざる立場であっても、三位とちがい四位者の場合は、参議と「非」参議との間に敢然たる差異があったことに留意する必要がある。これは四位でも参議になれば公卿としての扱いを受けたのに対し、非参議の場合は無縁のことだったからである。たとえば斉衡三年（八五六）四月に没した右京大夫藤原諸成は、従四位上に叙されたものの参議には任命されなかった人物であるが、卒伝には「諸成才学不_レ後_二等輩_一、資性勤為_レ宗、恨不_レ登_三八座_二而遽然傾逝」と記されている。参議が「八座」と称されたことを知る早い時期の史料としても注目されるが、その八座になれなかったことを恨んでいるところに、四位者にとっての八座＝参議のもつ重みがうかがわれる。もっとも有資格者でありながら「非参議」ざる立場で過ごした年数や実績は無意味というのではなく、時期は降るが天元三年（九八〇）正月に提出された菅原文時の奏状（『本朝文粹』）には「非参議_二之四位中、文時已為_三第一_一也」とあり、「非参議」として重ねた年歳が昇進への一つの資格となったことを示している。ちなみに『源氏物語』（二・簞木）にも、「なま_くのかんだちめよりも、非参議の四位どもの、よのおぼえくちをしからず」と記され、また別の個所（四四・竹河）では「右兵衛督・右大弁にて、みな非参議なるをうれはしと思へり」とあり、資格がありながら「非参議」に甘んじなければならぬ立場に同情しており、当時における非参議四位者観ともいうべきものが示されていて興味をひく。

こうした「参議」「非参議」の意識や観念が、とくに四位者にとって重要な意味をもってくるのは、先に述べたように参議が議政官集団の末端に位置づけられることにより、四位でも参議になれば三位以上の上層貴族の仲間入りが出来るようになったからである。この点についても、先の文時の場合が参考になる。すなわち当時正

四位、下行式部大輔兼文章博士であった文時は、八十歳の老境に及ばんとしているところから、「是以文時、変三座難^レ登之情、仰三品有^レ例之恩」と哀願し、可能性の少ない参議の望みを捨て、三位への昇叙を願っている。考えてみればまことに勝手な論理といわざるを得ないが、これも四位の参議[〓]公卿[〓]三位という参議の特殊なあり方を逆用・便乗したものといつてよい。いずれにせよ「非参議」という呼称や観念の発生は、参議が議政官になったことと表裏の関係にあり、その別表現であったといえよう。これ以後の平安朝期における非参議については、ほかにもとり上げるべきこともあり、別の考察にゆだねたい。

三 観察使と意見封進

(1) 参議と観察使

元慶六年（八八二）七月、菅原道真是参議の職事官化に関する奏状を起草している。奏状の内容についてはあらためてふれるが、留意されるのは、その冒頭に「今之参議、古之観察使也」と記述していることである。参議についての当時の理解が知られるが、この認識はのちのちまで受け継がれている。

参議は、観察使設置以前から存在していた。にもかかわらず、なぜ平城天皇の時に置かれた観察使を「今の参議（制）」の出発点とする理解が生まれたのか、参議を対象とする以上、この問題を避けて通るわけにはいかないであろう。そこで以下、観察使を参議論の立場から検討してみたい。

観察使の設置は平城天皇即位直後、大同元年（八〇六）五月のことで、二十年に及ぶ桓武の「軍事と造作」（蝦夷征討と長岡京・平安京の造営）による民の疲弊に対処し、地方政治の刷新を図ることを目的として、参議ら六人を観察使に任じ六道に配したものである。当時六人いた参議のうち、菅野真道（左大弁兼大宰大貳）と藤原縄主（大宰帥兼任）の二人については当初任命されなかったもののごとくであり、それを補う形で吉備泉と阿倍兄雄が「准

参議⁽⁵²⁾として相ついで任じられている。

さて、こうして設置された觀察使であるが、さらに翌二年四月十六日の詔により、「宜罷参議号、独置觀察使」きものとされ、食封二百戸を賜わることになった⁽⁵¹⁾。参議の号を廃止するという思い切った措置とともに、天平三年（七三一）に八十戸と定められていた参議の食封を一挙に二倍強に増封し、中納言の二百戸と同額にしていること、しかもこの間觀察使を畿内七道に拡大するとともに、先の二人も觀察使に任命し、八人としたところにも、觀察使設置に対する平城の積極的な姿勢がうかがわれる。なおこの觀察使については、職掌の類似性から、按察使や巡察使の再興とみるのが通説であるが、参議を任じたという点から判断しても、わたくしはむしろ以前に述べた鎮撫使に連なるものであり、その前例を襲うものであったと考えている。

觀察使設置にともなう参議の号の停止については、それにより参議の政務審議権を制約しようとしたものとする⁽⁵²⁾見方も一部にはあるが、多くは平城朝における冗官整理の一環と理解している⁽⁵³⁾。しかしわたくしは、まさに発展途上にあつた参議を冗官とみる後者の見方はもとより、前者の理解にも従えない⁽⁵⁴⁾。なぜならこれらの議論は、いずれも「参議の号の停止」に対する誤解から出発しているからである。

この参議の号の停止についても、やはり竹内理三氏の理解が流通している。すなわち氏は、「参議が廃官となつたのである。これまでの参議は、ここに至って『参議朝政』の職能を失い、専ら地方政治監察の官となつたのである」というふうに理解され、觀察使についての諸氏の論考（ことさらふれるところも少ないのだが）も、その点ではおおむね共通の認識に立っている。しかし参議の号の停止は、参議そのものの廃止であつたのだろうか、いささか疑問である。

そう思う理由の一是、觀察使設置の詔⁽⁵⁵⁾によれば、使は道別に一人、判官一人、主典一人とし、「自非下国由」⁽⁵⁶⁾興、政関成敗、宜遣判官以下一督察、兼復取所司清廉幹了、官差発檢校」とあるように、よほどの重大事で

ない限り、現地に下るのは判官以下であつて、觀察使自身は都に留まつていたと思われることである。理由のその二は、参議号の停止以後でも「(大臣已下) 觀察使已上」として括られ、その限りでは、以前の「大臣以下参議以上」と同様の扱いを受けていることである。この「觀察使已上」なる表記は、⁽⁵⁶⁾参議が復活されるまでの間用いられている。以上のことは、参議の号の廃止後も議政官としての立場が保持されていたことを暗示するものではないだろうか。

わたくしは、大同二年四月の詔は、それまで参議の兼任であつた觀察使を専当の官とすることにより、参議に具体的な職掌を付与したものとみるべきで、参議の号が廃止され觀察使に改められたとしても、その成果を国政に反映させる立場、すなわち議政官としての職能が切り捨てられたというものではないと考える。むしろ呼称廃止の対象となつてゐるところに、本来の議政官である大臣・納言とは区(差)別される参議の立場の弱さがあつたことは確かである。

しかし觀察使にかけた平城天皇の熱意は、生来の病弱もあつて次第に薄れ、大同四年(八〇九)四月の退位で、事実上消滅してしまふ。二週間後に即位した嵯峨は、ただちに百姓の疲弊と財政難を理由——それは平城が觀察使を置いた理由そのものであつた——に、觀察使の特典である食封について、「⁽⁵⁷⁾宜_下暫返納、令_レ兼_二外任_一、以_二彼公_一解_二代_中此食封_と、すなわち食封をしばらく停止し、代償として外任を兼ねさせ、公解を配分することとしてゐる。嵯峨のこの措置については、一般に平城側の勢力を削がんとして参議を外官の兼任としたもので、平城に対する嵯峨の公然たる挑戦であつたとみられている。⁽⁵⁸⁾しかしわたくしはこの意見にもすぐには従えない。

嵯峨天皇は即位後、それまでの経緯のなかで実質を失つてゐた觀察使の扱いに苦慮したと思われる。觀察使を廃し、本来の正常な政治組織に戻すことは嵯峨体制にとって一向に不都合なことではなかった。しかし觀察使の廃止は、平城上皇を真向から否定することになる。そこで採られたのが、本来の参議に比して増額されていた観

察使の俸禄制度を改めることであつたように思われる。

ところがこの時の措置——「令_レ兼_ニ外任_一、以_ニ彼公卿_一代_ニ此食封_一」については、ふつう觀察使を「外官の兼任」にしたものというふうに理解されている。外官、すなわち国守など地方官の兼任としたものならたしかに本来のあり方を変えたことになるが、これは「外任（官）を兼」ねさせたとの意であつて全く別個のことである。外官を兼任するとは、觀察使の俸禄である食封にかえて、外官としての公卿を当てること、具体的には地方国衙の正税を当てたことをいう。事実これ以前でも、西海道觀察使の藤原純主は大宰帥として下向してその公卿を受け取り、觀察使の封の返納を申し出ている。⁽⁶¹⁾嵯峨の措置は、冗費節減という名目でこの純主の方式を採用したものにほかならない。参議の号の廃止といい、この外官兼任といい、觀察使をめぐる議論には事実誤認に基づくものが少なくない。

それはともかく、納言以上の議政官の食封——それは三位以上の特権であつた——はそのまま、觀察使に対してのみこの措置を取ったところに、觀察使を換骨奪胎しようとする嵯峨の思惑があつたことも否めない。この措置が上皇の反発を買つたのも当然で、それはあと取り上げる参議復活の詔となつてあらわれる。

觀察使の外官兼任は、嵯峨としては平城との対立をさけたもっとも穏便な形での骨抜き策であつた。⁽⁶²⁾それはまた嵯峨による觀察使の解消＝参議復活への端緒でもあつたが、現実における参議の復活は、そうした嵯峨の思惑とは別個の形で急展開することになる。翌大同五年六月二十八日、平城が上皇として次のような詔を下し、觀察使（の号）を廃し参議の号の復活を命じたからである。

去大同元年為_レ行_ニ三十六条_一、置_ニ並觀察使_一、各委_ニ一道_一云々、夫参議之寄、望重守大、帰任_ニ責成_一、職非_ニ虚設_一、是以廢_ニ置之_一、云々、宜_レ罷_ニ觀察使_一復_ニ参議号_一、封邑之制、亦仍_ニ旧数_一。

（『日本紀略』）

この詔は一般に外官の兼任とした先の嵯峨の勅に対抗したものと理解されている。事実詔には、参議の職は

「虚設」でないといひ、食封の復活を要求しているところに、嵯峨の措置に対する不満が露骨に表明されている。しかし嵯峨の措置からすでに一年有余を経ており、いささか遅きに失した感がある。これはあくまでも平城の建前であり、真意は別にあつたのではないか。わたくしは平城の措置は、三カ月前に行なわれた嵯峨の蔵人所（頭）設置が直接の引き金になつたものと考えている。

というのは、嵯峨による蔵人所（頭）設置は、平城讓位の前後から顯著となつてきた尚侍薬子の動きを警戒し、平城薬子の連繫に対抗した措置とみるからである。⁽⁶³⁾ 薬子は内侍司の尚侍であり、自身は上皇とともに平城旧宮にあつたが、嵯峨の近辺には薬子と意を通ずる女官の存在を当然予想しておく必要があつた。蔵人頭の職掌である奏請・伝宣が、それまでは尚侍の職掌・権限であつたことに注目する必要がある。したがつてそうした意味をもつ蔵人所（頭）の設置は、嵯峨が平城との対決姿勢を打出した最初の措置であり、平城側を刺激しないはずはなかつた。

平城の本音は、嵯峨によつて骨抜きにされた觀察使の廃止と參議の復活によつて、当時觀察使であつた腹臣、藤原仲成を參議となして廟堂に送りこみ、それによつて嵯峨側の動きに楔を打ち込むことであつたとわたくしはみる。嵯峨が平城との対立を表面化しながらも、參議復活にあえて反対しなかつたのは、それが嵯峨の施政に格別支障を来すものではなかつたこと、というより自身の政治路線の正常化に沿うものでさえあつたからである。しかし參議復活に込めた平城の意図は、それから三カ月後に起こつた薬子の変により、瞬時にして打破されたのである。変の経緯（四章参照）については、ここではふれない。

こうして參議は、嵯峨天皇の思惑とは別個の形で復活したが、⁽⁶⁴⁾ 議政官としての立場がなお微弱であつたといふ点では、以前と変わりはなかつた。薬子の事件の落着後、弘仁二年（八一）七月、平城宮の諸衛官人らが意にまかせて出入し、宿衛しないことに対して「宜_レ直_レ彼參議加_二督察_一」との勅が下されている。これも明らかに、

鎮撫使——觀察使の系列にそう措置であり、二カ月後、参議に代えて少將の校校に改められたから一時的な扱いで終わったが、平安京を離れての職務に従事させられているところにも、議政官としての参議の立場の軽さが示されている。

このように見てくると、觀察使をめぐる一連の事件は、参議制の歴史の上に本質的な変革をもたらしたというものではない。しかし道真の起草案にみられたように、この事件はその後における参議理解——参議はもと觀察使であったという——に大きな影を落している。とくに八人の觀察使が参議と改称されたことにより、参議の人数がこれ以後八人を超えることがなくなったことの意味は大きい。そして議政官としての参議の立場は、こうした時期を経なければ定着することもなかったのである。前に述べた「非参議」という認識が生まれてきたのも、実にこれからまもなくの、弘仁年間のことであった。

(2) 意見封進と詔勅

これまでみてきたように、参議抜き合議制論はありえないが、そうした合議体制の確立過程を考えていく上で看過できないものに、奈良から平安初期にかけて事例の多い意見封進や詔勅がある。いうまでもなく詔勅は天皇の発意・命令であり、意見封進(事)とは天皇から発せられた意見徴召に応じて意見を書き、それを密封して奏上することをいう。したがってこうしたあり方は天皇の政治関与の一環であり、公卿合議制になじまない意味をもっていた。それだけに合議制の未熟な段階では、それらの果たした役割を無視することができない。

意見封進については所功氏に詳しい研究がある。⁽⁶⁵⁾そこでも指摘されているように、その先蹤は大化改新にまで遡るが、本格的には養老五年(七二二)二月のそれが最初といつてよい。この意見封進は、不比等が没した翌年、長屋王が首班の座についた直後のもので、十六・十七の二日間にわたって徴召があった。天皇に進められた意見

封事は、これを「朕將親覽」とあるように、天皇自らが目を通して判断を下したとみられる。もっとも天平宝字三年（七五九）の淳仁天皇詔の場合、「朕与宰相、審簡可否」とある。ここにいう「宰相」とは藤原仲麻呂（惠美押勝）のことであるが、天皇による意見封事の取捨撰択に、このようなブレーンの関与することはあったであろう。ただしこうしたことから所氏は、「天皇は公卿と共に意見封事の内容を審議されたようである」と理解されているが、公卿合議制がなお未熟な段階では、そこまで行なわれたとは思えない。むしろ意見徴召⁶⁶封進は、本質的には合議制の不十分な段階でのあり方であり、より正確に言えば天皇の主體的な政治関与の表徴であった。

意見徴召の対象は、初例の元正天皇の場合、「左右大弁及八省卿等」であった。⁶⁶これは政治上の意見が議政官以下から広く求められたことを示す。淳仁・仲麻呂政権下の場合は「百官五位已上、緇徒師位已上」、つまり下級官人のみならず僧侶へも拡大されている。この時は中納言石川年足以下四名の封進が採用され、⁶⁷六月二十二日、所司に付して施行されている。このように元正・淳仁の徴召は、いずれも長屋王や仲麻呂が首班の座につき、政権を確立した直後のことであるが、これは社会的動揺を抑え、支配体制を強化する目的から衆議の吸収をはかった、きわめて意図的な政治行為であったといえよう。

天平九年（七三七）二月十五日の詔では、わが国の使者（遣新羅使）に対する新羅の非礼について、「五位已上并六位已下官人惣卅五」が内裏に召され、意見を求められている。外交上の重大事に対処するため、的確な判断が必要とされたからであるが、ここにも合議制が確立する以前の姿がうかがわれる。

ところが平安期に入ると、徴召の対象に大きな変化が現われる。淳和天皇即位七ヵ月後の弘仁十四年（八二三）十二月十二日の場合、「旱疫更侵、年穀不登、黎甿残耗」という現状に対し、「宜各陳所思」との徴召があったのは「公卿」に対してであった。この場合の「公卿」が参議以上の議政官であったことはいうまでもない。

しかもこの時には、意見封事を求める一方、詔を出して凶年における礼服用の停止を提案し、「宜議定奏^レ之」と命じている。つまり個人的な意見の徵召と同時に、議政官の評議による奏議が、同じ「公卿」集団に対して要求されているわけで、封進のもつ意味や役割が公卿奏議に取って代わられつつあった様子をみる事が出来る。一週間後の十二日、さっそく詔の趣旨を認める公卿の覆奏が行なわれ、また「意見奏上」として提出された公卿の封進のうち六カ条が採用され、翌年八月、諸司に下されている。⁽⁶⁸⁾

このような傾向は、清和天皇代になるとさらに顕著となる。すなわち貞観四年（八六二）四月十五日の徵召は、藤原良房の輔佐を得た幼少清和が即位五年を経過したのを機に発せられたものである点、奈良期のものとニュアンスを異にし、儀礼的要素が強いといってよい。対象が「参議已上」であること、また「各論^ニ時政之非^一、詳^ニ世俗之得失^一」するよう意見を求めている点では、先の淳和天皇の場合と変わりなく、平安朝的な特色といえるが、これが同年十二月二十七日、この徵召に応じて上表した右大臣藤原良相の意見となると、右大弁南淵年名や山城守紀今守といった良吏五名を推薦し、かれらに意見を上表させることを提案したもので、内容といい、日時といい（徵召から八カ月もたっている）、封進の形骸化がいつそう進んでいる。さらに貞観七年六月に出された権太納言藤原氏宗の上疏は、その徵召から三年たっても封事の評議が進まない状態に不満をもち、「先^ニ択^ニ要切^一」との提案を行なったものである。この時期になると封進の処理が「公卿會議」にゆだねられただけでなく、その審議さえ滞りがちで、封進は事実上機能を失なっていたことが知られる。

こうして合議制の外にあって機能した封進の制は、公卿合議制の確立と引きかえに衰微した。意見封進が本来の意味をもつのは奈良期一杯のことであったといえよう。

次に詔勅であるが、森田悌氏が『類聚三代格』をもとに整理された八〜九世紀における年度別詔勅・官符の一覧表⁽⁶⁹⁾によっても、前後に比し格段に詔勅数の多かった時期は孝謙（称徳）朝であったことがわかる。⁽⁷⁰⁾ 森田氏の論

考は官符についてのもので、詔勅に関してとくに言及されるところはないが、孝謙の場合、その内容が道鏡事件前後、自己の立場の弁明に終始していることからわかるように、詔勅は天皇が直接貴族官人たちへ自分の意思を伝える、ほとんど唯一の方法であった。しかしこの時期を過ぎると激減し、それでも八二〇年までは平均五〜六通が下されているものの、八二一年以降はさらに減少し、一〜二通にすぎなくなる。嵯峨天皇末期のことで、この頃が詔勅が意味をもった最後の時期であった。

留意されるのは、詔勅の減少と踵を接するように太政官符の発給が激増していることである。⁽⁷¹⁾ 光仁朝の七七〇年代から増加が目立ちはじめ、七九一〜八〇〇年で激増し、以後におよぶ。太政官符は、天皇の裁可を得て発給されるものではあるが、その主体が公卿会議にあったことを考えると、これは明らかに議政官集団の拡充と機能の充実による結果である。「詔勅から官符へ」という変化は、先にみた意見封進の衰微⁽⁷²⁾とともに、そのまま奈良朝と平安朝の政治（構造）の変質に対応していたのである。

四 公卿の成立

(1) 「公卿伝」の登場

以上三節にわたり「参議」について検討を加えてきたが、参議（制）の歴史は、当初の「朝政参議」の立場が変化して議政官の末端に組み込まれ、「廟堂参議」の地位を得る過程であったといつてよいであろう。それは議政官集団が拡充され、合議体制の機能が整ってきたということでもある。

その意味でわたくしは、『続日本紀』天平宝字四年（七六〇）十一月二十日条にはじめて登場する「大臣以下参議以上」という表記にあらためて注目したい。以前言及したように、これは参議が大臣以下中納言以上と同列の立場（議政官）となり、一つのグループを形成した何よりの証左だからである。事実延暦三年（七八四）六月、

長岡遷都に先立ち新京での宅地造りのため「右大臣以下参議以上」に正税が班賜されていることや、延暦二十四年（八〇五）四月、重病の桓武が「皇太子以下参議以上」を呼び、後事を託したことなどに、この時期における参議の立場がうかがわれる。ちなみにこの時の皇太子が安殿親王、すなわち翌年即位する平城天皇である。

このような意味をもつ「大臣以下参議以上」がやがて独自の呼称を得た時、これを「公卿」といった。記録の上では『類聚国史』延暦十四年（七九五）十一月二十二日条に記す奏状の冒頭に「公卿奏す」とあるのが初見である。この両様の表現は、その年次が示すように、実際には相前後して登場している。けだし前者が具体的な内容（構成員）、後者がその総称とみれば、前者の「大臣以下参議以上」の層が形成された時、「公卿」と呼ばれる条件は出来ていたのである。

もともと公卿の語は、すでに『日本書紀』にも「公卿大夫及百寮諸人初位以上」⁽⁷³⁾や「公卿百官及諸百姓等」⁽⁷⁴⁾とみえるが、これらは唐風の表現による上級官人の汎称というべきものである。養老五年（七二二）二月、元正天皇の命により属司に意見封進をさせた「公卿等」も、左右大弁や八省卿など、もう少し下位者を含むとみられるが、基本的には先の場合と同様の用法であろう。これに対して、いまいうところの公卿は明確な概念をもつ議政官の総称であり、これらとは区別される必要がある。

すなわちその意味での公卿とは、大臣・納言および三位以上、ならびに四位の参議をいうが、この概念には二つの原理——公は官職、卿は位階による——が含まれており、⁽⁷⁵⁾そのことがのちのち公卿の理解を微妙なものにした理由ともなっている。

それはさて、「大臣以下参議以上」⁽⁷⁶⁾「公卿」の成立にともない、そのことを示すさまざまな徴証が記録の上で見られるようになる。その一は、早速「公卿伝」の類が作成されはじめたことである。平安初期の成立になる『歴運記』が一名『公卿記』ともいわれ、また同じ時期、『公卿伝』なるものが存在していたことも知られる。

たとえば承和七年（八四〇）七月に没した右大臣藤原三守の薨伝に「至于諸操、見公卿伝矣」とみえ、同十二年二月、大納言藤原良房が民部卿などの辞職を上表して許されなかった経緯について「事具公卿伝」とある。『公卿記』『公卿伝』ともにその一部しか知られておらず、したがって両者の内容や相互の関係は明らかでないが、伝記や薨伝の類であったことは間違いない。なお『歴運記』と『公卿補任』は二、三の点を除き記載様式が酷似していたとの指摘もあるが、⁽⁷⁶⁾おそらく『公卿補任』はこうした公卿記・公卿伝の類を素材として編纂され、書き継がれていったものである。いずれにせよ伝記類の登場は公卿層の成立を物語る何よりの証左である。

(2) 公卿奏議と内裏上日

その二は、公卿の成立にともない、奏議の形態や奏上のあり方にも変化が生じたことである。公式令に定める太政官奏には、奏上内容の軽重により論奏・奏事・便奏の三種があったが、『続日本紀』にも「太政官奏すらく」「太政官議奏すらく」「太政官奏して曰く」などと記される。ところが延暦十四年（七九五）十一月、諸国七太寺の出挙稲の減省について、「公卿奏すらく」という形で提案されているのを初見として、以後、「公卿奏議（言）すらく」「公卿奏状すらく」との表記が多くなる。いわば「太政官奏」から「公卿奏（公卿奏議）」への変化である。⁽⁷⁷⁾その間、「左大臣藤原朝臣永手、右大臣吉備朝臣真備已下十一人奏」（宝龜元年五月。ちなみに当時の公卿は実質十二人）とか、「右大臣已下参議已上共奏」（延暦元年七月）といったいい方もみえるが、これは先にもふれたように「公卿奏議」を具体的に表記したものにはかならない。

「公卿奏」との表記は、いうまでもなく公卿＝議政官集団が主体となって国政を密議し、天皇に奏上したことを示しており、手続き上、太政官奏議と大差がなくても、そのものつ歴史的な意味は全く異なっているといつてよい。公卿が文書に署名する「公卿署」についても、『三代実録』仁和二年（八八六）五月十二日条に、外記が

石見国の断罪奏文を作り「公卿署」を申請したところ、二人の公卿（ちなみに公卿はこの時十六人）が連名に反対したため奏上が半年後のこの日になったという記事をのせる。この「公卿署（名）」も、議政官としての公卿の役割の一端を示している。

ここで公卿奏議に関連して「上卿」についてもふれておく必要がある。上卿とは公事の際、責任者としてこれを奉行する人物のことであるが、土田直鎮氏によれば、大同四年（八〇九）七月二十五日の宣旨に「上宣」（上卿宣の略）と記すのが語句としての初見である。上卿は時に公卿の同義語として用いられることもあるが、これは公卿が国政審議の主体となり、公卿奏議の形が整ったことにより生まれた立場であり呼称であった。ただし参議の場合、原則として上卿をつとめることは出来ず、官符や官宣旨を下す権限をもたなかったのは、公卿の一員ではあっても、中納言以上と権限の上で大きな差があったことを物語っている。おそらくそれは、中納言以上の相当位が三位以上であるのに対して、参議が事実上、四位相当位であったことに基づく、貴族社会における序列意識によるものである。参議が正官でないとする認識がのちまで持ち続けられることも無関係ではない。なお、こうした問題については、かつて長屋王事件あるいは聖武行幸の折、参議の石川石足や阿倍広庭らが勅をのべる役に当たったことが想起されよう。同じ参議でも議政官でなかった段階のそれと議政官の末端に位置づけられた参議との違いがここでも明確に表われており、参議が公卿となることの一面が示されている。

公卿の成立を示す徴証のいくつかをみてきたが、最後に「内裏上日」（宣衙への出仕）と同様に認められ、これを通計することが許されるようになることも、政務の場所に関連して留意されるところである。延暦十一年（七九二）十月二十七日の宣旨により、五位已上の上日について、自今以後朝座上日だけでなく、これに内裏上日を通計することを認めているのがそれである。⁽⁷⁹⁾ただしその後のある時期、これが適用される階層について改められることがあったが、結局、参議以上について内裏の上日が認められるようになっていく。⁽⁸⁰⁾

こうした上日条件の緩和は、律令制の弛緩ととらえるのが従来の理解であろうが、橋本義則氏の指摘⁽⁸¹⁾にあるよ

うに、より直接的には公卿の内裏上日が日常化したことの反映とみるべきであろう。大同四年（八〇九）正月十

一日の宣旨⁽⁸²⁾によれば、「觀察使已上々日、宣_ニ毎日奏聞_一」とあり、参議の号をやめて觀察使と称していた時期の

ことであるが、觀察使以上の上日を毎日天皇に奏聞することが新しく制度化されている。これもまた参議を含む公卿の成立を別個の形で示したものといつてよいであろう。

なお当然のことながら、内裏上日に示される、公卿らの内裏での政務の実態——「定」や「政」など——が問題となるが、それらについては紙数の関係もあり、すべて別稿⁽⁸³⁾にゆだねたいと思う。

むすび

元慶六年（八八二）七月、参議の官を職事とすべきであるとの奏請が式部省から提出されているが、その奏文は、式部少輔菅原道真の草するところであった（『菅家文章』）。内容は、前段で参議に関するいくつかの事例をあげた上で、道真（式部省）の解釈を展開するという形をとっているが、論点は、参議が実際には職事官として存在するにも拘らず、そうでないとする意見があるのは、格式において考禄馬料や相当官位が定められていないからであるとして、その式を定め、参議を永く職事官となすべきことを進言したものである。

道真が論拠とした明法博士らの解釈には、参議を当初から職事官とするようなものもあり、その点、道真の意見を全面的に認めることはできないが、しかしわたくしがこの奏状を重視するのは、当時、参議が事実上職事扱いをされていたながら、依然として職事でないとする認識のあったことが知られるからである。これは、参議を理解する上で看過できない事態といわねばならない。

これまで、参議が長い時間を要して議政官化し、公卿の末端に連なった道程を跡づけ、貴族合議体制の熟成す

る過程をみてきた。それが、いうところの参議の職事＝正官化にはかならない。そして、当初の未熟な合議制は、この参議の議政官＝職事化によって拡充整備されたといっても過言ではない。ところが現実には、その参議の官制上の位置づけは、九世紀末のこの時点でもなお不十分であったというのである。しかもこの史料に徴すると、この時の道真の建策は結局実現化されることはなかった。

公卿、すなわち参議の議政官化を基本とする議政官集団が成立してはや一世紀近くにもなろうかというこの段階で、なおこうした議論（参議は正官でない）があるのはどういふことなのであろうか。

これについてわたくしは二つの点を指摘しておきたいと思う。

一つは、同じ議政官でも具体的な職務を与えられて任じられた中納言以上と違い、結局参議には、一時期を除き、明確に職掌を定められることがなかったという、そもそもの成立過程に由来するものがあつたと考えられることである。長い参議制の歴史の中で、職掌について定めたことがあるとすれば、鎮撫使や觀察使に任じ地方政治の督察に専任させた時くらいのものであろう。その点、『宇多天皇御記』寛平二年（八九〇）正月二十八日条に「就_ニ議筵_一問_ニ太政大臣_一曰、参議所_レ掌、其職如何、大臣答云、為_レ政大夫、然則諸国長官、有_下聽_ニ其行_一者、具以奏_レ之」と記されているのも、参議の職掌が觀察使的なものであるとの認識があつたことを示す。先の道真の奏状が、太政大臣の職掌を明確にすることが求められたのと同じ時期に出されたのも留意されるところであるが、参議についていえば結局見送られることになる。

それにしても法制的な面でこうした参議のもつ曖昧さ——官にして官にあらざる——が依然として尾を引いているのは、結局のところ、初期参議が有した「朝政参議」の性格そのものに由来するのではなからうか。繰り返し述べたように、それは「参議」が令制の議政官とは全く別個の原理で生まれ、別個の過程を経て議政官になつたという、まさに参議の歴史そのもののなかに最大の原因があつたというべきである。「朝政参議（者）」が、通

説の如く当初から議政官・正官であったなら、こうした事態も議論も起こらなかったはずである。その意味でも参議を当初から議政官とみる従来の参議論には本質的な疑義があり、そこから出発した本稿での初期参議の理解の妥当性をあらためて確認しておきたいと思う。

二つには、やはり法文化されてはいないものの、参議の相当位が四位（以上）であるという認識と無関係であったとは思えない。そのため参議は公卿でありながら、上卿をつとめることが出来ないばかりか、官符や官宣旨を下す権限も与えられなかった。令制に規定されているように、基本的には三位以上を「貴」とする身分社会の中では、参議であっても四位である以上、おのずから埒外存在とする認識は根強いものがあつたのである。

参議は議政官化した。しかし法制上位置づけられることがなかつた点で、参議は最後まで公卿のなかの他者であつたといえよう。これは位階による序列を基本とする貴族社会の宿命であつた。

(1) 例えば阿部武彦「古代族長継承の問題について」(『北大史学』二、昭和二九年)、関晃「大化前後の大夫について」(『山梨大学学芸学部研究報告』一〇、昭和三四年)、石尾芳久『日本古代天皇制の研究』(昭和四四年)、早川庄八「古代天皇制と太政官政治」(『講座日本歴史』古代二所収、昭和五九年)など。

(2) 律令太政官制が合議体制であるとする理解は、奈良朝政治を論ずる場合、ほとんど無条件に承認され、疑う余地のない前提とされてきたが、その論拠はいったい何なのか、いわれるほどには明確でないように思う。たとえば早川庄八氏は、(1)勅任官・奏任官の任用候補者の適格性を議政官(氏によれば参議を含む)が密議することが、大宝令の施行の直後から行なわれてきたこと、(2)藤原宮子の称号事件を起こしたのは長屋王に代表される議政官たちであつたこと、などの点を指摘され、さらに平安時代における陣定が合議制をとっていることから、(3)陣定の原型としての議政官の合議制は、大宝令の施行直後に遡って存したとみてよい、と結論されている(註(一)、前掲書)。しかし勅任官・奏任官の問題や宮子事件をただちに合議制と結びつけるのは疑問であるし、同様に陣定の原型を大宝令にまで遡らせることにも無理があり、今後の検討を要する。いずれにせよ、わたくしも太政官制に合議的要素を認めるにやぶさかではないが、合議体としては不十分であつたことに留意する必要があるというのが本稿の主旨である。

- (3) この他則關の官として太政大臣が置かれ、また知太政官事が任じられたこともあるが、常置ではなかった。
- (4) 大宝年間ではほ三人（右大臣一人、大納言二三人。ただし参議は除く。以下同じ）、左大臣長屋王が首班であった時代（養老八年以降）でも四五人、長屋王の変以後は二人（大・中納言各一人）、藤原四子没後も橘諸兄（大納言）と中納言一人、さらに中納言が没した天平十一年から十四年まではわずかに諸兄（右大臣）一人という状況であった。
- (5) 佐藤宗諱「律令太政官制と天皇」（『大系日本国家史』一古代、昭和五〇年）。もっとも氏は、「太政官での諸氏族の代表者による政務の執行が合議制であったかどうか、それは直接にはもはや明らかにしがたいことである」として考察を断念されている。
- (6) 最近、長山泰孝氏は「律令国家と王権」（『続日本紀研究』三七、昭和六〇年）において、合議体制の内実を王権の在り方と関連づけて考察された。合議制をアブリオリに承認しているところに問題はあるが、十分に評価する必要がある。
- (7) 例えば竹内理三氏は「参議」制の成立」（『律令制と貴族政権』第一部所収、昭和三三年）で、「元来、『参議朝政』の職掌は、令制では大納言の有するところであって、職員令に『大納言四人、掌参議庶事』と定め、義解に『謂与右大臣以上、共参議天下之庶事』とあるように、令において大納言の職掌として参議する庶事は、天下の庶事、即ち『天下事』であって職原抄上、『朝政』に外ならなかった」と述べられ、朝政参議Ⅱ庶事参議と理解されている。
- (8) 竹内理三、注（7）前掲書。以下断らない限り竹内氏の見解はこの書による。
- (9) 阿部武彦、註（1）前掲論文などもこの立場をとる。
- (10) 高島正人「大宝二年の『参議朝政』について」、同「中納言・『参議』の新置とその意義」（『立正史学』四九～五〇号連載、昭和五六年）。
- (11) 黒板伸夫「『参議』に関する一考察」（『平安時代の歴史と文学』歴史編所収、昭和五六年）。なお参議の正官化については「むすび」で取り上げる元慶六年七月の式部省（菅原道真）奏状参照のこと。
- (12) 虎尾達哉「参議制の成立―大夫制と令制四位―」（『史林』六五―五、昭和五七年）。以下断らない限り虎尾氏の見解はこの論考による。
- (13) 元慶六年七月の式部省奏状に引用する『続日本紀』の記事には、「参預朝政、但本官如元」とあるが、現行の『続日本紀』には、「但本官如元」とともに「参預」の文字は見えない。
- (14) 本書第Ⅱ部二章に所収。

(15) 『続日本紀』慶雲二年四月十七日条。なお本章「中納言の設置」(一六六ページ)を参照。

(16) この点について、参議の質的变化をどの程度理解していたものかは知るべくもないが、『職官志』に「参議非正官也、大宝二年五月(中略)、養老元年十月(中略)、六年二月(中略)是也既而為正官」(天平三年八月(中略)是也)とあるのが留意される。これによれば、参議を当初から正官とみていなかったことが知られる。

(17) 議政官でも継続的補充が十分なされていないこともあるが、参議の場合、それ以上に断続的である。

(18) ちなみに古麻呂は大宝三年二月、律令撰定の功により田一〇町、封一五〇戸を与えられ、さらに翌三月、功田二〇町を賜わっている。また『続日本紀』天平宝字元年十二月九日条によれば、律令撰定の功田一〇町を下功として古麻呂の子に伝えることが認められている。

(19) 『旧唐書』など。真人の経歴については佐伯有清「粟田朝臣真人の経歴」(『日本古代氏族の研究』所収、昭和六〇年)参照。

(20) 安麻呂は長徳の六男。旅人・田主らの父で、『万葉集』に作歌があり、佐保大納言と称されたことも知られている。

(21)(22) 史料的な制約もあり得るが、二章「武智麻呂政権の成立」で論じたように、その経歴・官職から散位であったと考えて間違いない。また大伴安麻呂の官歴も地相視察や殯宮の奉仕など、知られるのは臨時的性格が強く、長徳の六男という立場からも、同様と考えられる。

(23) 『続日本紀』養老五年二月十六・十七日条。十六日、元正天皇は左右大弁及び八省卿らを殿前に召見して詔を下し、翌十七日にも再び意見徴召を命じている。なおこの時の徴召は、不比等が没し長屋王を中心とする元正朝の新体制がスタートした直後に出されており、官人たちのコンセンサスを得ることを意図していたと考えてよい。

(24) 中納言はすでに七世紀に置かれたことがあり、慶雲二年の設置をその令前中納言の復活とみるかどうか、また中納言の「中」は大・少納言の間の中か禁中の中かなど、意見の分かれるところである。

(25) 『養老職員令』によれば、大納言の職掌は「掌参議庶事、敷奏、宣旨、侍従、献替」とある。元来「納言」の名義そのものが天皇のそばにあって宣命を出納すること、敷奏宣旨がそれに当る。なお少納言の職掌は詔勅宣下を掌り内印・官印を取り扱うもので、本稿で問題とする議政官の構成員ではない。

(26) 竹内理三氏は、参議を議政官とする立場から中納言をその参議と大納言との中間に位置づけられたが、この段階では参議はなお議政官でない、氏の理解は正しいとはいえない。

- (27) 大伴安麻呂について、『公卿補任』では慶雲二年四月二十日「任中納言」、また和銅七年条には(大納言)「在官十年(中納言三カ日、三木四年、中納言又五カ月)」とあるが、おそらくこれは後世の加筆であろう。安麻呂が中納言に任じられた事実は認められない。
- (28) ちなみに当時四位を帯する者に、例えば長屋王(正四位上)、中臣意美麻呂(從四位上)、大市王・手島王・氣多王・美努王・息長老・巨勢麻呂(以上從四位下)などがいた。
- (29) 『続日本紀』宝龜九年三月三十日・同十年正月一日条。
- (30) 房前の内臣就任は祖父鎌足以来のことで、そこには亡き不比等への顕彰の意がこめられていたと考えられる。なお内臣については本書第一部四章「藤原永手と藤原百川」で詳しく論じた。
- (31) 例えば野村忠夫「不比等政權」「長屋王首班体制から藤四子体制へ」(『律令政治の諸様相』所収、昭和四三年)など。
- (32) 直木孝次郎「長屋王の変について」(『奈良時代史の諸問題』所収、昭和四三年)参照。とりわけ多治比県守は養老三三年正月、大極殿での拝朝の折、武智麻呂とともに皇太子(のちの聖武天皇)を先導するなど側近として活躍しており(『続日本紀』、武智麻呂と緊密な関係にあったことが察せられる)。
- (33) 養老四年九月、蝦夷反乱に持節征夷將軍となり、同五年四月に帰還している(『続日本紀』)。
- (34) なお薬子の変に際して、平城上皇の東国行きの阻止を命じられた坂上田村麻呂が、変発覚後平城宮より召還して禁錮に処せられていた文室綿麻呂を武芸の人であるから同道したいと奏上したところ、嵯峨天皇は綿麻呂を正四位上に叙し参議に任命して派遣したというのも同例であろう(『日本後紀』弘仁元年九月十一日条)。
- (35) 例えば長山泰孝「律令国家と王權」(註(6)前掲書)参照。
- (36) ただしこれを論者に即していえば一貫せず、竹内説を批判した人が唱えているところに、参議研究の現状が反映されているといえよう。
- (37) 石川石足。天平元年八月九日没(『続日本紀』)。
- (38) 大同元年三月十八日、すなわち桓武天皇が没した翌日、從三位藤原葛野麻呂・從四位上藤原園人が「並為三權参議」(『日本後紀』)されたのが初見である。なお二人は同年四月十八日、参議に任命された。
- (39) のちには藏人頭、近衛中将さらには受領歴任者にも拡大されていく(『江次第』『官職秘抄』)。
- (40) 「諸司の掎」以後しばらく参議の任命はなく、藤原四子が没した直後の天平九年十二月に兵部卿藤原豊成(從四位下)

が、つづいて同十一年四月には陸奥国按察使兼鎮守府將軍大義徳守大野東人（從四位上・勲四等）・民部卿兼春宮大夫巨勢奈氏麻呂・摂津大夫大伴牛養・式部大輔県大養石次（以上從四位下）が参議に任じられたが、諸司の推挙によるものではない。ただここでも諸司の長官が参議を兼任しており、「諸司の挙」に連なる人選とみなされよう。もっとも豊成以下がこの時期参議に任じられた背景には、阿倍内親王立太子後の社会的な動揺や四子没後における諸兄体制の確立といった事情が考えられ、かれら参議がある種の政治的配慮をもって任命されたという点では初期参議に近いが、その性格や役割は全く違ったものになっているといつてよい。

(41) すなわち散位や無官であっても、知識や才能によって「朝政参議」に起用されるという可能性が事実上断ち切られたことになる。

(42) 令制では中務卿は正四位上、以外の七省卿は正四位下、彈正尹・左右大弁は從四位上が相当位であった。

(43) 天平十年、参議は大伴道足・藤原豊成の二人である。

(44) 『公卿補任』天平宝字六年・同八年・神護景雲二年条など参照。

(45) 『公卿補任』神護景雲四年・天応元年条など参照。

(46) 参議が「八座」と称されるようになるのは觀察使の人数に由来すると考えられており（『職原抄』上）、それを否定する材料はないが、八省の卿の任命が無関係とも思えない。

(47) 武智麻呂自身は「諸司の挙」の一カ月後の九月、大宰帥を兼任している。惣官・鎮撫使はその二カ月後に置かれたものである。武智麻呂が自ら帥となったのは地方政治に対する配慮で、長屋王事件後の政治のひきしめを意図したものである。また翌年、西国を中心に節度使が置かれたのも一連の措置と考えてよい。

(48) 『公卿補任』天平三年条に、「十二月四日勅始給三木食封八十戸、依延暦八年八月二十日符致仕之封准職封減半」とみえる。

(49) なお『歴運記』（冒頭部分が『延喜式』付録に収められている）には参議の「論奏」に関して、「大宝二年始置参議（自此年至今年）、……養老二年始宜論奏、天平三年十月四日勅、始給食封八十戸、……」とある。その意味するところは、養老二年はじめて参議に論奏することが認められたということであろう。とすれば大宝二年参議がはじめて置かれた時には、参議に論奏の権限はなかったことになる。これは、参議は当初から議政官ではないとする私見を補強する材料といえるが、引用記事の日付に誤りが多いなど、にわかに信用できない部分もあるので、いまはこれを積極的に取り上げること

は差し控えておきたい。

- (50) 『公卿補任』大同元年条に、吉備泉と阿倍兄雄の二人を「准参議」と記す。当時の立場か後世の判断による表現か、検討を要するが、「准参議」とされたのはかれらがその時点で参議でなかったからであろう。そしてこのことは、觀察使を参議の兼任とみる認識のあったことを示すものといえよう。

- (51) 『日本紀略』大同二年四月十六日条。

- (52) 門脇禎二「律令体制の変貌」(『岩波講座日本歴史』古代三所収、昭和四二年)。

- (53) 大塚徳郎「平城朝の政治」(『平安初期政治史研究』所収、昭和四四年)、目崎徳衛「平城朝の政治史的考察」(『平安文化史論』所収、昭和四三年)など。

- (54) 門脇氏が觀察使の政治的役割を重視するのに対し、大塚・目崎氏がこれを形骸化したものとみる点で、両者の理解は対蹠的といってもよい。しかしこの時点で、参議の存在をなお流動的とみるわたくしには、参議を過大評価する前者の理解にも、また廟堂構成員の参議を後者のように過少評価することにも賛成できない。

- (55) 『日本後紀』大同元年六月十日条。

- (56) 『類聚国史』(三二)大同二年八月八日・同十二月十九日条、『日本後紀』大同三年七月二十一日条など参照。

- (57) 『日本紀略』大同四年四月二十日条。なおこの後に続けて「若依理解任、及致仕者、則還給例封、其返封宜待兼国」とも記す。

- (58) 例えば大塚・目崎、註(53)前掲論文など。

- (59) 大塚氏、註(53)によれば、觀察使の実質的な活躍は大同三年の時点で終わっていたという。

- (60) 例えば大塚・目崎・註(53)前掲論文など。

- (61) 『日本後紀』大同三年六月十一日条。西海道觀察使藤原純主は大宰帥を兼任しており、当時は大宰帥として下向していた。平城朝では觀察使が食封の返納を申し出る例は他にもみられる。ちなみにこれ以前、延暦十六年正月二十三日の詔(『日本後紀』)で、「参議以上左右大弁八省卿」の兼国徭任が停止されているのも、当時京官の外任兼帯の風潮が一般化していた状況を物語っている。

- (62) 嵯峨天皇は、少なくとも平城上皇が還都令を出す頃までは上皇に対して何かと政治的配慮を行ない、波風を立てる行為は極力避けていたように思われる。四章「薬子の変と上皇別宮の出現——後院の研究(その一)——」参照。

(63) 四章参照。

(64) 『日本後紀』弘仁二年九月十六日条。

(65) 所功「律令時代における意見封進制度の実態——延喜天曆時代を中心として——」(『延喜天曆時代の研究』所収、昭和四四年)。

(66) 註(23)参照。

(67) 『続日本紀』天平宝字三年六月二十二日条に、中納言兼文部卿神祇伯耆十二等石川年足、参議従三位出雲守文室智努及び少僧都慈訓、参議従三位氷上塩焼、播磨大掾正六位上山田古麻呂らの封進内容が記されている。

(68) 『類聚三代格』卷七。

(69) 森田悌「律令奏請制度の展開」(『史学雑誌』九四—九、昭和六〇年)。

(70) ちなみに詔勅数が格段に多かった時期は、(1)七二一—七三〇年(元正末—聖武朝)……十通、(2)七五一—七六〇年(孝謙朝—淳仁初)……十六通、(3)七六一—七七〇年(称徳朝)……十二通である。

(71) 七七〇年(この年八月に称徳天皇崩御)以前は十通以下であったのが、七七一—七八〇年(光仁朝)では一六通、七八一—七九〇年(桓武朝)では二〇通、七九一—八〇〇年(同上)では七四通に急増、以後五〇通を下ることはない。

(72) ちなみに意見封進は十世紀に降ると、事実上、三善清行の「意見封事十二ヶ条」を最後に本来の性格は失われ、いよいよ儀礼的な文章となる。しかもほとんどの召徴封進が、各天皇の即位当初、政治全般にわたっている点に、政治的緊張の中で行なわれた奈良期のものとの違いを示している。それは天皇が国政にあたる決意を示すものとみられるが、それがなお封進という形で残されているところに、むしろ伝統化された要素を強く感じる。また徴召の対象も公卿にとどまらず、秀才・明経・課試・及第などのいわゆる儒者に及ぶ場合が多い。文章に練れたかれらの封進が観念的な徳政論であったことは想像にかたくない。封進の末期的姿を示すものである。その行き着くところ、『大槐秘抄』のような一種の帝王学に換骨奪胎されていたのは当然の帰結であった。

(73) 『日本書紀』天武天皇四年正月壬戌条など。

(74) 『日本書紀』白雉元年二月甲申条など。

(75) 北畠親房の『職原抄』には、「公」は摂政・関白・太政大臣・左右大臣をいい、「卿」は散一位及び三位以上の者をいい、四位でも参議に任じられた者は公卿に入るとある。これが公卿についての一般的な理解である。

- (76) 土田直鎮「公卿補任の成立」(『国史学』六五、昭和三〇年)。なお氏は『歴運記』を弘仁二年(八一二)の成立とされている。
- (77) もちろんこれ以後、公卿奏議がすべてであったというわけでない。ことに嵯峨朝初期にはかつて觀察使であった藤原園人や同緒嗣など個人奏状の多いのが特徴的で、過渡期における現象とみてよいであろう。森田悌「上奏と奏状」(『続日本紀研究』二四〇号、昭和六〇年)参照。
- (78) 土田直鎮「上卿について」(『日本古代史論集』下所収、昭和三七年)。
- (79) 『類聚符宣抄』卷十。
- (80) 例えば『類聚符宣抄』卷十、天長九年三月二十一日宣旨など。
- (81) 橋本義則「『外記政』の成立——都城と儀式——」(『史林』六四—六、昭和五六年)。
- (82) 『類聚符宣抄』卷十。
- (83) 「議所と陣座——仗議の成立過程——」(三章)。

二章 武智麻呂政權の成立

——「内臣」房前論の再検討——

はじめに

わが国では律令が制定されて以来、天皇を頂点とし、太政官の下に組織された、貴族による「合議制」の政治形態、いわゆる太政官制がとられてきたと考えられている。平安期の摂関政治も院政も、基本的にはこの合議制を踏襲するものであり、その意味で太政官制は、日本の君主制あるいは貴族制を特質づける政治構造であったといつてよい。

したがって太政官制＝合議制については、奈良期から平安期を通して、一貫した考察が必要なのであるが、その初期の段階に限っていえば、大宝二年（七〇二）五月、大伴安麻呂以下五名を「参議朝政」せしめる（『続日本紀』。以下とくに断らない限り出典は同書による。年次も同じ）という形で登場した、いわゆる「参議制」の位置づけが重要な課題となる。合議制はこの参議制の出現・成立によって拡充整備されたとみられるからである。

もっともこの「参議制」の出現については、早く竹内理三氏が、「新官制に収容し切ることのできなかった旧氏族を、新機構による政治機構に参加させるために案出された便法ではなかったか」と述べられたこと⁽¹⁾があり、これが大方の承認を得て今日に及んでいる。竹内氏の説は、律令官制には各氏から代表が参画して廟堂を構成す

るという原則、いわば各氏族のバランス・オブ・パワーがあったとみるところに、その特色がある。参議制については、その後ほとんどみるべき研究はなかったが、最近に至り、相当位階などの検討から参議制の成立を論じたものや、竹内氏の氏族均衡論に対する批判が出されるなど、新しい研究の動きが見られる。ことに王権の在り方と関連づけて考察された長山泰孝氏の論考は、以下に述べることから、十分に評価される必要がある。⁽³⁾

しかしわたくしのみるところ、竹内氏以来の参議制論あるいは合議制論に欠けているのは、もっとも肝腎な、参議あるいは合議そのものについての検討ではないかと考える。奈良朝と平安朝とで参議・合議の在り方に違いがあるのはもちろんであるが、初期の参議や合議についても、その構造的な特色といったものを確認しておかなければ、以後の議論は空虚なものになりかねない。参議とは先に引用した初見記事が示すように、本来は「朝政」に参議することであるから、参議論には、第一に、朝政との関わり、もしくは朝政の一環として位置づけ理解するという視角が、何よりも大事である。第二に、したがってその参議は、単純に合議と言い換えることができないばかりでなく、むしろ非合議的とすらいえる要素もあったことを考えておく必要がある。そのあたりの問題については、稿を改めて論じたいが、⁽⁴⁾参議論の一環として武智麻呂や房前を取り上げた本稿でも、おのずから言及するところがある。

さて、その参議研究の中で必ず取り上げられてきたのが、藤原武智麻呂・房前兄弟の扱いである。⁽⁵⁾

周知の通り、房前は、養老元年（七一七）十月、「参議朝政」せしめよとの元正天皇の詔を得ている。当時兄武智麻呂が式部大輔であったことを考えれば、朝政に参議する資格を与えられたのが房前にとって異例の抜擢であったことはたしかである。そこから従来は、武智麻呂よりも房前の方に政治的資質や才能があったと判断し、さらに養老五年、房前が「内臣」に任命されたことにより不比等の後継者としての地位が確立した、とも理解さ

れてきた。とくに野村忠夫氏は、両者の関係を、「長嫡子としての法的な後継者と政治上の実質的な後継者との分離併立方式」というふうに考えられ、房前の政治的手腕を高く評価している。一見、柔軟な理解のようであるが、法的後継者と実質の後継者といった使い分けが現実には可能であったのか、疑問である。実際にそうした措置がとられたら、かえって混乱を惹きおこすだけではなからうか。このような理解なり評価は、わたくしには、参議・内臣に対する先入観から導き出された房前の虚像のように思われてしかたがない。

たしかに房前に与えられた「内臣」という職掌は、鎌足再来を彷彿とさせるが、だから房前が「実質的な後継者」に選ばれたとはいえないし、ましてや他方の武智麻呂の資質が、「不比等の後継者としてなお多くの権謀策動を必要とする政界の中枢に立つことは不適當」（野村氏）な人物とみなす根拠にもならないであろう。

そのように思うのはほかでもない。武智麻呂の経歴や事績を丹念に跡づけていくと、わたくしには、武智麻呂が不比等の衣鉢を継ぐべき嫡男としての扱いをうけているばかりか、自身、一門の長たるにふさわしい実績をあげていると判断されるからである。その点、従来の研究では、こうした事実（経歴）の整理と検討が十分であったとは思えない。またなされたとしても結局は、「参議」「内臣」の既成概念にとらわれ、そのフィルターを通してしかみなかったために、偏った武智麻呂や房前理解に陥っているように思う。

そこで本稿では、従来の見方を離れて武智麻呂・房前の立場や役割を再検討してみたい。その結果は、参議制の在り方や太政官制・貴族政治の構造にとどまらず、日本君主制の本質を理解する上でも重要な示唆を与えてくれるであろう。また、なかば常識化している長屋王の変の理解についても、別個の見方を提示してくれるように思う。

一 武智麻呂と房前

(1) 二人の略歴

不比等には武智麻呂・房前・宇合・麻呂の四人の息、いわゆる藤原四子があり、のち各々が南家・北家・式家・京家の祖とされたことは周知の通りである。このうち長男武智麻呂と二男房前、三男宇合と四男麻呂が、それぞれ一歳違いであり、また武智麻呂・房前兄弟と宇合・麻呂兄弟の生年には、十数年の差があった。『尊卑分脈』には、武智麻呂・房前・宇合三人が同母（蘇我連子娘・娼子）で、麻呂の母は、五百重夫人（鎌足娘）と記す。

さて、長男武智麻呂が史料上に初見するのは大宝元年（七〇一）のことで、この年、正六位上に叙せられ、大宝令で新設された内舎人に任じられている（『家伝』）。時に二十二歳。野村氏によれば、この叙位は祖父鎌足の嫡孫としての蔭階に一致するという。ちなみに『家伝』には、不比等家の家令・小治田志毘が武智麻呂の爵位の低いことを歎いたところ、不比等は、国家の新法令による叙位であるといって、志毘の不平をなだめたとある。

これに対して房前の方は二年遅く、『続日本紀』同三年正月二日条の、東海道巡察使に任命された記事が初見である。時に正六位下、二十三歳であった。房前の場合、この正六位下が最初の位階で、初叙における武智麻呂（正六位上）との一階差は、大宝令の蔭階構成にみえる嫡子と庶子との一階差に対応している（野村氏）。五位と六位の間には格段の区別があり、志毘が慨歎したように、鎌足Ⅱ不比等流の子供としては不当に低いものであったかもしれない。しかしともかく武智麻呂と房前は、正六位を出発点として官人社会に登場したのである。そして以後、各々のコースを歩むことになるが、ここでは、房前が問題の「参議朝政」の詔を得る前後までを一応の区切りとして、両者の経歴をたどってみたい。不比等が没するのはそれから数年後であるから、この時期の両者の経歴は、むしろ不比等の承知するところであった。

武智麻呂の経歴 さて武智麻呂は、内舍人となった翌大宝二年（七〇二）正月、中判事（刑部省）に遷るが、体調が思わしくなかったのか、翌三年四月、病気を理由に官を辞した。このことがのちに述べるように、位階の上で数年間、房前との並列を招くことになるが、官職の上では一足早く、一年後の大宝四年三月、大学助として復帰し、以後は順調に昇進している。すなわち復職してから養老五年（七二二）に中納言として廟堂に参画が認められるまでの十七年間（二十五歳から四十二歳まで）に就任した官職は、大学助→大学頭→図書頭兼侍従→近江守→式部大輔→式部卿→東宮傅などであった。

史料の乏しい奈良時代前期でありながら、武智麻呂の経歴がこのように詳細に知られるのは、『続日本紀』のほかに、その生涯を編年的に記した『藤氏家伝』下（『武智麻呂伝』）が存在するからである。

もっとも『家伝』の編纂は、武智麻呂の子仲麻呂の企図するものであり、武智麻呂の顕彰がモチーフとなっているため、誇張や潤色を考慮しなければならないが、『続日本紀』を補う点で重要な史料であることにはかわりはない。そして従来は、この『家伝』に、武智麻呂を評して「これより庭弱、進み趣るに病を饒しぬ。年長し大なるに及びて、小さき節に繋らず、形容条暢にして、辞氣重遲なり」とあるところから、武智麻呂は「権力意志や権謀的な素質を欠く、凡庸で温良な貴公子」（野村氏）に仕立てられたわけである。しかし先にも述べたように、大学助として復職以後の昇進は順調であり、同じ『家伝』にも武智麻呂の事績が数多くあげられている。天武天皇の晏駕や藤原京遷都など国家事業が頻繁で、学問どころではなかった折、当時大学助であった武智麻呂が長官良眞王（百済王禪広の子）と計って学校を復興させたといい、慶雲二年（七〇五）には积奠文を作らせたとある。従五位下の昇叙（同年十二月）は、その功績によるものであろう（時に二十六歳）。さらに図書頭兼侍従時代には、壬申の乱以来散佚していた官書を民間に訪ねて写し取らせている。職務上当然とはいえ、とくに学問面でのかれの行政手腕にはみるべきものがあった。

その後近江守に任じられているが、そこでは「良吏」として善政を仰がれたという。良吏の真偽はともかく、武智麻呂の行政手腕に対する評価と受けとってよいであろう。その一つに、靈龜二年（七一六）五月、国内の寺が檀越によって私物化され、荒廃していたのを歎き、朝廷に対策を奏上して寺を復興させたことがあげられているが、『続日本紀』（靈龜二年五月十五日条）にもほぼ同じ内容の記事を収める。この時の武智麻呂の奏言が諸国の寺院を対象とする中央の施策に吸い上げられたわけで、これは寺院に対する国家の統制強化が計られる端緒ともなった。

このような『家伝』や『続紀』の記載から知られる武智麻呂像は、凡庸なイメージとはうらはらに、一時期の病気後は、むしろ精力的・積極的な行動型人間へと成長したことを思わせるに十分である。そしてこの認識は、長大となるに及び鷹揚重厚になったという先の『家伝』の表現——武智麻呂を評価しこそすれ、少しも貶してはいない——にも合致する。その武智麻呂がなぜ「弱々しい」「無氣力な貴公子」⁽⁶⁾とのレッテルを貼られてきたのか、不思議でさえある。

房前の経歴 いっぽう房前については、『続日本紀』によって五位以後の昇進状況が知られるだけで、かれの資質や性格・事績など、経歴をたどるに十分な史料がない。ところがこの房前に対しては、兄武智麻呂を超える政治的才覚の持主であり、父不比等だけでなく天皇からも絶大な信任があった、というような理解が当然のこととされてきた。しかし武智麻呂についての理解に疑問をもつたくしには、それとの対比で打ち出された、こうした房前像にも異和感を禁じえない。

すでに述べたように、房前の史料上の初見は大宝三年（七〇三）であった。『続紀』によれば、正月二日、政績を巡省するため七道に使者が發遣されたが、房前は東海道使に任命されている。時に正六位下、七道巡察使の中ではもっとも高位であった（二十三歳）。この任務がいつ解かれたのか、どういう成果をあげたのか、などは不

詳であるが、その後房前も従五位下（慶雲二年）↓従五位上（和銅四年）↓従四位下（靈龜元年）と順調に昇叙している。もっともこの間、慶雲四年（七〇七）十月、前月に崩御した文武天皇大葬の造山陵司（の一員）と和銅二年（七〇九）二月、東海・東山二道の巡察使に任命されただけで、後者の場合、大宝年の時と同様、就任期間や活動など具体的にはわからない。そして養老年（七一七）に至り、問題の詔（「参議朝政」）が下されることになる。武智麻呂に比べて官職歴ははるかに少ないといってよい。

(2) 位階と官職

以上、房前が「参議」に任命されるまでを限り、両者の経歴や事績をみたが、これらから両者について次の諸点が指摘できるであろう。

第一は、位階をめぐる問題である。武智麻呂は房前より一階の上位差をもってスタートしたが、慶雲二年（七〇五）十二月、正六位上から従五位下に昇叙された時、房前（時に正六位下）も従五位下に叙され同等位となった。これは和銅四年（七二二）四月の昇叙でも同様で、ともに従五位上となっている。しかしこの関係は和銅六年正月、近江守であった武智麻呂が房前に先んじて従四位下に叙されたことで解消し、それ以降は再び武智麻呂が一階をリードすることになる。

こうした両者の帯位状況については、次に述べる官職同様、これまで意外と注意されていないが、わたくしは、この受位の変遷の中に両者を考える鍵があるように思う。すなわち慶雲二年から和銅五年までの数年間の位階の並列は、先にもみた武智麻呂の病氣によるものと考えてよいであろう。そこでも指摘したように、武智麻呂は、官職に関しては約一年後に大学助として復職（七〇四）するが、位階の上ではしばらくその後遺症がみうけられ、両者の並列位が続くことになる。しかし和銅六年の叙位でそれも終止符を打ち、優位に立つ。武智麻呂自身の近

江守としての実績によるものであったことは言うまでもない。そしてこの一階差は、房前が内臣に任命される年まで続くことになる。

このようにみてくると、武智麻呂と房前の位階は、一時期並列することはあったものの、基本的には兄の武智麻呂が上位にあったと言える。武智麻呂に病気のハンディがなければ、当初の一階差は守られていたとみてよく、その点からも、武智麻呂＝藤原家の嫡子と房前＝藤原家の庶子の立場は、少なくとも不比等生存中は厳密に区別されていたとみるべきである。

第二は、官職にかかわる問題である。先述のように、武智麻呂が中判事から大学助、同頭を経て図書頭兼侍従、近江守、式部大輔などを歴任したのに対して、房前は、文武大葬造山陵司と東海・東山道巡察使（東海道使は大宝三年と銅二年の二回）に任じられたにすぎない。武智麻呂が主に京官を通して昇進していったのに対して、房前のそれは恒例の除目での任官ではない。短期間の臨時職で、しかも地方官的性格が強いといえる。また官位相当の上からは、武智麻呂がほぼ相当の職を歴任しているのに、房前の場合は無関係であり、両者の間には、いわば職事と散位ほどの違いがあった。そこでこれを、かりに「有官的経歴（コース）」と「無官的経歴（コース）」と名づけるなら、この兄弟はそれぞれの典型的な事例といえよう。ここで問題にしたいのは、とくに後者である。

すなわち房前には、武智麻呂に比して実績といえるほどのものが見当らない。わずかに和銅二年、東海・東山二道に巡察使として派遣された折、伊勢守大宅金弓以下四国守の政績が誉られているのが、房前の報告によるものであったと推測されるにすぎない。これは、『家伝』もない房前についての史料的な不足といったものではなく、かれの経歴のあり方に基づく結果とみるべきである。房前には実際に特筆されるほどの業績がなかったし、第一、房前は、政治的才能を発揮しようにも、官職そのものについていなかったのである。そのあたりの事情や意味を次に考えてみたい。

二 有官的と無官的

(1) 散位者の存在

武智麻呂との対比で注目されたことの 하나가、先にもふれたように、房前の経歴が散位的であったという事実である。位階の方は順調に昇叙されているにもかかわらず、なぜ房前は職事官に任命されなかったのか。こうしたことについては、従来指摘されることは全くなかったといつてよいが、わたくしには、そこに武智麻呂とは違う立場にあった房前理解の緒があるように思われる。しかもこれは房前だけの特異な例ではなく、他氏族にも共通する事態であつたと考える。

大伴氏の場合 たとえば大伴氏の場合、武智麻呂・房前兄弟とほぼ同世代に旅人（大伴安麻呂第一子、母は巨勢郎女）・田主（第三子、母は旅人と同じ）・宿奈麻呂（第三子、母は不詳）兄弟がいる。かれらの父安麻呂は、壬申の乱の功臣として知られ、後述するように大宝二年五月の勅で「参議朝政」を認められた五名の中の一人であるが、三兄弟の官歴をみると、それぞれの昇進過程に違いのあつたことがわかる。

すなわち嫡男旅人は、和銅三年（七二〇）正月、左將軍に任じられた（時に正五位上）のを手はじめに、中務卿（靈龜元年）、中納言（養老二年）となり、山背国摂管（同三年）などを兼任して大納言に至っている。したがって官人としてはほぼ順調なコースであつたといつてよい。むろん同じ嫡子とはいえ鎌足・不比等流の武智麻呂とは比ぶべくもないが、三兄弟の中ではもっとも恵まれており、安麻呂の嫡子として、武智麻呂に匹敵する官位をたどつたといえよう。

これに対して三男宿奈麻呂は、和銅元年（七〇八）、従五位下に叙されたのが初見記事で、神龜元年（七二四）、従四位下に昇叙されて以降は不詳であるが、その間の位階は順調に昇つていたとみられる。しかし官職の方は左

衛士督と、備後国守・按察使に起用されて安芸・周防を管したにとどまり、散位的性格が強い。『伴氏系図』などから右大弁が最終官と推定されているが、旅人の武智麻呂的な官歴に比し、これは房前であったといえる。二男田主に至っては「天下無双の美男」(『伴氏系図』)といわれ、万葉歌人として名が知られるだけで、官歴はほとんど明らかでない。記述さるべき実績がなかったのか、官途以前に没したのか、判断の手がかりがないが、嫡子でなかったという田主の立場と無関係とは思えない。ちなみに父安麻呂が「参議朝政」、あるいは式部卿、兵部卿に任じられて活躍するのは、氏上であったその兄御行(大納言贈左大臣)没後であることに留意したい。兄弟間の序列といったものの存在にとどまらず、氏上であることと職事、つまり官途との対応関係をも示唆していると思うからである。

多治比氏の場合 このような特徴は、多治比氏ではさらに顕著である。多治比氏には同時期に池守・県守・広成・広足の兄弟がおり、大宝元年の新令により左大臣に補任された嶋を父とする。生年はいずれも不詳であるが、『公卿補任』の記載から池守が嫡男であったことが知られる。また昇叙時期から、池守・県守・広成・広足の年令順であったことは間違いない。そしてかれらの場合でも、嫡男池守が民部卿、右京大夫、大宰帥を経て中納言、大納言へと昇進したのに対して、弟の県守は慶雲二年(七〇五)に従五位下に叙されたのを初見とし、以後、位階の昇叙はみられるものの、その間、造宮卿に任じられただけで霊龟二年(七一一)遣唐押使として入唐、帰国後も按察使や征夷將軍として地方に派遣されたことが知られるにとどまる。池守の官歴に比べるとこれも散位的である。

つぎに広成(嶋の第五子)は、和銅元年(七〇八)の初見以来、下野守、迎新羅使左將軍や按察使などやはり地方官や臨時的官職に任じられただけで、遣唐大使となって入唐しており、これも官歴は県守とかわりがない。広足に至ってはさらに極端で、従五位下に叙された霊龟二年の初見以後、天平五年(七三三)に上総守に任じられ

るまでの十七年間、頼宮司を二度つとめたにすぎない。上総守以後も武蔵守といった地方官にittedただけである。もっとも先の県守は、天平期に入ってようやく職事官（京官）として活躍するが、それが嫡男池守の没後であったこと、同様に広成・広足が政界で地位を得るのが、前者は県守、後者は広成の没後であったことが、先に大伴氏についてふれたことと同様留意される点である。

(2) 嫡子と庶子

さて大伴氏や多治比氏にみられたこうした事例は、一門内における嫡子と庶子の間に存在した、公私にわたる立場上の差異を暗示する。すなわち旅人や池守などの、いわば職事的・有官的経歴は嫡子であったことによるものであり、宿奈麻呂や県守などの、いわば散位的・無官的立場は庶子であったからとみられる。⁽⁷⁾したがって房前の官歴が武智麻呂と違い、無官^{||}散位的であったのは、そうした氏族社会における慣習を基調とした初期官司・官人制の在り方によるもので、房前だけにみられた特異例ではなかったと考えるべきであろう。それは武智麻呂・房前の弟である宇合や麻呂についてもあてはまる。この時期では、庶子に官途が開かれるのは、一般的にいつて嫡子没後のことではなかったか。それが当時、父子兄弟間で公卿の連任が避けられた理由でもあった⁽⁸⁾と考える。

大宝新令によって官位相当が規定されたが、六国史の記事に、官位不相当を示す「行」⁽⁹⁾（官職の方が低い）の表記を多数見かけるのは、受け皿としての官司制の整備が不十分であったことを物語っている。しかしそれ以上に留意したいのは、散位者が歴大な数にのぼっていた⁽⁹⁾ことで、これは、受け皿の広狭というよりも官人任用の原則に関わる問題、すなわち嫡男を登用したという事情によるものではなからうか。このような在り方は、鎌倉幕府の御家人が一門中の惣領であったこと、鎌倉後期に至り、庶子の御家人化が図られたこと、などを想起するだけでも容易に理解できよう。この時期、位を有しても官職をもたない、いわゆる散位者が多数いて当然だったわけ

である。貴族の家族成員が嫡子・庶子を問わず官職につくようになるのは、家の分立ともからまって、もう少し先のことである。その意味で、貴族官人の給与や財産の問題などについても、こういう観点から検討される必要がある。

(3) 参議制の成立

「参議朝政」の詔が出された大宝二年五月の時期は、基本的にはこうした形で官人制が存在していたのである。参議制については別に論ずるので、ここでは以下の行論に必要な限りで「参議朝政」についてのわたくしの考えを述べ、「参議」制が創設された背景や意義を確認しておきたい。

大宝二年五月、文武天皇から「参議朝政」せよとの勅を蒙ったのは、従三位大伴宿禰安麻呂、正四位下栗田朝臣真人、従四位上高向朝臣麻呂、従四位下下毛野朝臣古麻呂、同小野朝臣毛野の五人であるが、わたくしが留意したいのは、第一に、この五人の中に律令の習熟者たちが少なくなく、またほとんどが渡航経験者あるいは対外事情に通じた者であったことであり、第二は、高向麻呂のような、天武十四年（六八五）に新羅から帰朝して以来官歴不詳、というより、いわゆる散位とみられる者に、「参議朝政」の詔が下されていることである。大伴安麻呂の場合も、前年に式部卿に任じられてはいるが、長らく散位であった。ここではとくにこの第二の点に注目したい。というのは、この事実は、先にみたそれまでの官司・官人制とは別個の原理でその枠が拡大されたことを物語る一方、参議の立場が、天皇の諮問に答えて政治上の意見を述べる、個人的なものであったことを暗示するからである。

すでに記したように、この「参議」の登場について、竹内理三氏は、「この職掌が政治上の必要というよりも、特定の人のために設けられた便宜的なものという感じが強い」「新官制に収容し切ることのできなかった旧氏族

を、新機構による政治機構に参加させるために案出された便法ではなかったか」とされたが、前述来の観点からすれば、これは天皇親政Ⅱ朝政の強化の必要上、庶子や無官（散位）であっても経験や才幹ある者を朝政に参画させるための措置であった、というのがわたくしの結論である。いわば一本釣りで個人の才能を吸い上げようと試みたものが、天皇に直属する「参議」であり、吸収の主体はあくまでも天皇側にあったと考える。⁽¹⁰⁾その後、かれらが公卿に昇格するため「参議」に欠員が生じて、直ちに補充されていないのは、かれら五名が余人をもつてかえがたい関係を文武天皇との間にもつていたからにはかならない。

大宝律令の実施にともなうて登場した「参議」制が、その後の官人制に及ぼした影響は決して小さくはない。というのは、かれら五人のその後の官歴をみると、栗田真人・高向麻呂の二人は慶雲二年（七〇五）三月、中納言が設定された際、これに任じられ、また同年、大伴安麻呂は大納言紀麻呂が薨じた翌八月、中納言をこえて大納言となった。したがって参議として残ったのは小野毛野と下毛野古麻呂の二人となったが、古麻呂は中納言設置と同じ日、兵部卿に任じられ、毛野は同年十一月、中務卿となり、さらに和銅元年（七一〇）三月（元明天皇即位後の除目で）中納言に任じられた。しかし一人残った古麻呂が翌和銅二年十二月に没して、参議は中絶したのである。つまり五人中四人までが「参議（朝政）」から本来の議政官となり、残る一人も長生きすればその可能性が十分にあったということになる。

こうした結果を議政官への昇進過程に重ね合わせて考えると、「参議」が創置されたことの意義がより明確となろう。すなわちこれ以前は、藤原や大伴・阿倍といった伝統的氏族でも、嫡男以外は散位Ⅱ無官的経歴をたどるのが普通であった。庶子の場合、嫡男の死没を待つ以外、政界での活躍は、まずあり得なかった。まして畿外の中小氏族に至っては、たとえ職事官になりえても議政官になる可能性は皆無であったといつてよい。ところが高向や下毛野、小野といった二流・三流氏族が「参議朝政」に任じられ、数年後にはほとんどが議政官に昇格され

たことで、議政官への昇進に新ルートが開かれたことになる。これは先に述べた、散位Ⅱ無官的経歴（コース）のなかに出現した新たなコースであり、「参議コース」と呼ぶことが出来よう。

(4) 房前の「参議」任命

おおよそ以上が、初期参議についてのわたくしの理解であるが、こうしたことを念頭におきながら、再び房前に立ち戻ることにはしたい。

房前は、養老元年（七一七）十月の詔により、元正天皇の「参議」とされている。時に三十七歳、従四位下にあったが、すでに述べたように、これ以前（政界に登場して十六年）、大半は散位の立場にあったから、いわば無官Ⅱ散位的ルートから「参議」となったわけである。ところが房前の場合、以前指摘したように、それまで格別の功績があったとも思えない。この点は、大宝二年に任じられた「参議」五人に比しても異例の措置であったといえる。

その点で留意されるのが、翌養老二年三月の人事である。前年一月、中納言巨勢麻呂が没し、つづいて三月には、左大臣石上麻呂が亡くなったため、当時本来の議政官（太政大臣は欠）は右大臣不比等と中納言栗田真人・阿倍宿奈麻呂の三人となり、正官（七人）のうち四人が欠員（左大臣一、大納言二、中納言一）となったが、この時、長屋王（新任）と阿倍宿奈麻呂（中納言から）が大納言に、多治比池守・巨勢祖父・大伴旅人の三人が新たに中納言に任じられ、栗田真人と合わせて中納言は四人となった。とくに中納言任命は、房前の参議登用からわずか四カ月余後のことであり、しかも定員（三人）をオーバーしている（¹¹）とみられるだけに、この人事の不自然さが感じられる。これは房前の参議登用をカモフラージュする、いわば彌縫的な人事であることは明らかで、それはまた房前の抜擢がかれの能力に基づくというより、別個の原理によるものであったことの傍証となろう。

すなわち房前を参議に任命したのは元明・元正であるが、その引級の背景には継母三千代の働きかけがあったとみられる。

後宮で実力を保持していた三千代は、周知のように不比等の後妻となったから、武智麻呂や房前らの継母にあたるが、房前に、前夫美努王との間に生まれた牟漏女王をめあわせており、三千代にとって房前は娘婿でもあるという、二重の親子関係にあった。和銅七年（七一四）、房前三十四歳の時、牟漏女王との間に永手が生まれているから、婚姻はそれ以前であったことになる。和銅七年といえ、六月に不比等の娘宮子と文武との間に生まれた首皇子が立太子したことで、藤原氏が外戚としての地位を確立した年である。翌靈龜元年（七一五）九月には、元明天皇が娘の元正に譲位し、さらに翌二年には光明子が皇太子首（のちの聖武）に入内する。房前が元正女帝から参議の詔を得たのは、その翌年のことであった。庶子であり、しかも嫡男武智麻呂とはわずか一歳違いでしかなかったことを考えれば、当時の慣例からいって廟堂に参画する機会は何に一つもなかった房前が、である。藤原氏が政界での主導権を握る過程で、三千代が日蔭の立場にある房前を引き立てようと働きかけたのは、むしろ当然といえるかも知れない。⁽¹²⁾

ちなみに兄武智麻呂は、この時、従四位上・式部大輔であった。位では一階差を保っているが、朝政参議の資格をもたない点では房前よりは劣位にあり、結果的に房前が兄を超えたことになる。しかも以前の「参議」任用が、かれらの才能や知識を利用する政治的意図に基づいたのとは異なり、房前の場合は、三千代を介しての全く個人的な抜擢であったことが、武智麻呂をいっそう刺激したことであろう。ことに「参議」房前が武智麻呂よりも先に中納言や大納言に昇格されてもした場合、連任を避けるという当時の慣習下では、武智麻呂の朝政参画への道が事実上閉ざれることを意味する。

こうした事態が武智麻呂の反発を招いたであろうことは容易に察せられるところで、兄弟の間に亀裂を生じさ

せる要因にもなったが、留意されるのは、その間における武智麻呂と不比等の動きである。そこで次に、房前の「参議」任命以後におけるこの兩人の行動を通して、内臣の問題を考えることにしたい。

三 「内臣」房前

(1) 不比等の後継者

養老二年（七一八）九月、武智麻呂は、長屋王のあとをうけて式部大輔から式部卿に昇格する。また翌三年正月二日、大極殿で元正女帝拝朝の儀が行なわれた時には、多治比県守と二人で皇太子首（聖武）賛引（＝先導）の任に当り、同月十三日、正四位下に昇叙、さらに同年七月、東宮傳に任じられるという、短期間での昇進が目立つ。なお武智麻呂の昇位と同じ日、房前も従四位上に叙されているが、位階差は依然一階が保たれていた。

もともと「東宮傳」の任命は『家伝』の記すところで、『統紀』には見えないが、その後の武智麻呂の行動から判断して、事実とみてよい。また東宮傳が常置される八世紀末以降は、立太子の直後、東宮坊の職員と一連の人事で任じられるのが一般的となるが、武智麻呂の場合は、首皇子の立太子から五年も経っている（時に首は十九歳）。しかし慶雲四年（七〇七）、文武が没したあと、中継ぎとして即位した元明・元正はともに立太子してはならず、首（聖武）が大宝令制定以来の最初の皇太子ということを考慮すれば、東宮坊や東宮職の機能も、この時に始まったと考えられ、任命の遅れもそのあたりに原因があったとみてよいであろう。二年後の養老五年（七二一）正月には佐為王以下、当時一流の知識人や文人学者十六名に、「退_レ朝之後、令_レ侍_二東宮_一」めよとの詔が下され、東宮聖武の教育係ともいふべき職員が配属されている。これは東宮傳武智麻呂の献言によるものとみられるが、この時期でもなお東宮職（坊）の充実整備が進められていることを知る。

さて武智麻呂にとって式部卿（相当位は正四位下、時に武智麻呂は従四位上）・東宮傳（相当位は正四位上、時に武智麻

呂は正四位下）は、ともに相当位をこえる官職（つまり「守」であった。これは一般に「行」の場合が多かった当時としては、注目すべき昇進であったといわねばならない。

そればかりではない、武智麻呂のこの短期間での昇任が、養老二年から三年にかけてであったことに留意したい。なぜならそれは、房前の任参議（養老元年）に対応する人事であったとみられるからである。とくに東宮傳の就任は、藤原氏の唯一の切り札ともいふべき外孫聖武の後見役に武智麻呂が当てられたことを意味するが、その決定者は、この時期、不比等を措いてほかにはない。この事実はまだ、不比等のもつ地位と役割が武智麻呂に約束されたことを示している。武智麻呂が嫡男である以上、当然の措置であろう。

このように見てくると、不比等の後継者が名実ともに武智麻呂であったことは明白といわねばならない。これが、武智麻呂は法的嫡子にすぎず、実質の後継者は房前であったというような理解に従えない理由である。

(2) 宮室の改作

ところが首皇子の即位に向けて体制をととのえていた不比等が、養老四年（七二〇）八月三日に病死してしまふ。翌四日、ただちに舍人親王が知太政官事に、新田部親王が知五衛及び授刀舍人事に任じられ、明けて五年正月五日の除目で、長屋王が右大臣に、多治比郡守が大納言に昇任されるとともに、武智麻呂が新たに中納言として議政官に加えられている。前述来のことからいって、武智麻呂の中納言（議政官）任用は、不比等の衣鉢を継がせることにあったとみられよう。

ただしここで気になるのは、新中納言の任官に先立ち、武智麻呂が従三位に叙せられているだけでなく、同時に房前も従三位に昇叙されていることである。しかもこの昇叙は、武智麻呂の二階に対して房前の方は一挙に三階も昇叙されており、その結果、これまで保たれてきた兄弟の一階差がなくなり、位階上は同等となった。これ

は、房前重視のあらわれにほかならない。

このように不比等の没後、早くも波瀾含みの状況となるが、しばらく武智麻呂の行動を跡づけてみる。

不比等死後における武智麻呂の事績としてあげられるのが、聖武即位に向けての造宮に關与したことである。

『家伝』(養老五年)に、公(武智麻呂)が造宮卿として工匠達を率いて平城宮内を巡察し、「旧によって改作」(旧例⁽¹³⁾故実に従って宮室の改作が行なわれたこと)し、その結果、造られた宮室の敞麗なのを見て人々が帝の偉大さを知った、とある。

武智麻呂による造宮とは、聖武のために平城宮内に営まれた新宮のことをさす。周知のように、わが国では藤原京以前、天皇一代一宮という歴代遷宮の慣行をとっていたが、そうした歴代遷宮の慣行は、藤原京以後、平城宮でも宮内遷宮の形で遵守されていた。これについては別稿(「歴代遷宮論」本書第Ⅲ部第二章)で述べた通りである。それが聖武の時にも行なわれたわけで、天皇は造宮後これに遷っている。武智麻呂の造宮卿は、先に任じられた東宮傳の立場の延長といつてよいであろう。

なお武智麻呂は、その後造宮卿の任を県犬養筑紫に譲り、自らは知造宮事という総監督的立場となり、工事一切を指揮する。聖武の即位にかける武智麻呂の意欲をうかがわせるが、それが不比等路線の繼承を意図するものであったことはいふまでもない。

(3) 不比等の死

不比等の死が元明・元正ら天皇側に及ぼした影響も少なくなかった。

先に記したように、不比等が没した翌日、残り二人になっていた天武の皇子、舎人親王が知太政官事に、新田部親王が知五衛及び授刀舎人事に任じられている。これ以前、知太政官事には刑部親王(持統上皇没後)と穂積親

王（同前）が立てられ、死没するまで任にあったが、その特徴は太上天皇と連繫しつつ天皇の後見的役割を果す、いわゆる皇親政治の一環として存在したところにある。今回の舎人親王の場合は、元明上皇が健在なので以前とは事情を異にするが、和銅八年（七一五）七月、穗積親王の薨去以来五年ぶりの再置で、皇親体制の復活が意図されたことはいうまでもない。また新田部親王の就任も五衛府と授刀舎人寮という、いわば朝廷の総軍事力を皇親が掌握した点では一連のもので、これらの人事が元明・元正天皇側の意図に出ることはあきらかであろう。明けて養老五年正月五日には、大納言長屋王が右大臣として首班の座につき、元明（元正）側の意図する皇親体制は、ほぼ整ったといってよい。しかしこの年、五月頃から病気を伝えられていた元明上皇は、同十月十三日、右大臣長屋王と参議房前を召し入れ、崩後の措置について遺詔するところがあった。内容は、火葬場所や諡号の指示など形式的なものであったが、それだけに意味ありげで、皇族の代表として長屋王を、臣下（藤原氏）の代表に房前を選び、二人に遺詔を下すことで元明の信任が誰にあるかを暗々裏に示したものといえる。果せるかな、十一日後の十月二十四日、次のような上皇の詔が出されている。

詔曰、凡家有_二沈痼_一、大小不安、卒_レ発_二事故_一者、汝卿房前、当下_レ作_二内臣_一計_二会内外_一、准_レ勅施行、輔_二翼帝業_一、永寧_二国家_上。

房前に、内臣となり、内外を計会して元正天皇を補佐せよというもので、十三日の長屋王と房前の呼び出しは、この内臣任命のための布石であったとみられよう。二人はその時点で、元明の内意を打ち明けられていたとみて間違いない。

房前の内臣の就任は、むろん祖父鎌足以来のことであるが、そこには亡き不比等顕彰の意がこめられていたとみられる。しかも内臣任命の詔で、房前に「輔_二翼帝業_一」（『家伝』には「二弟北卿知機要事」とある）という職権が与えられたことは、当時皇太子の輔弼に当たっていた武智麻呂を極度に刺激したろうことは想像にかたくない。

しかし房前の内臣就任は、房前が自ら望んだものとは思えない。むしろ三千代の要望に応える形をとりながら、元明・元正が、房前を皇親体制の中に取り込み、あわせて武智麻呂と対抗させようとしたものとみる。つまり元明にとって房前の内臣任命は、皇親体制実現の総仕上げを意味したのである。

このようにみてくると、房前の内臣任命が、従来言われているような皇親勢力とのバランスとか、皇親への示威といったものでないことは明らかである。それどころか逆に房前を皇親側に取り込み、政界での武智麻呂を孤立させる、もっとも有効な手だてとされたものであって、藤原氏の分裂さへ期待されたといつてよいと思う。しかしそれが可能であったのは、内臣が他の議政官とは違って律令に規定されず、直接天皇と結びつくものであったからである。内臣は私的ブレンという点では参議と同様であり、その延長線上に位置づけられるもの、いわば参議中の参議であった。内臣がのちに「忠臣」⁽¹⁴⁾ともいわれたのは、ゆえなしとしない。

(4) 房前と長屋王

このような政治的意義をもつ内臣任命の理解を助けるのが、長屋王と房前の親密な関係である。

もっとも不比等の娘長娥子⁽¹⁵⁾が長屋王の妃になっており、長屋王と姻戚関係にある点では兄弟共通であるが、詩歌の才があった房前の場合、『懷風藻』などからも、長屋王主催の詩宴に招かれるなど、詩文の交換を通じて長屋王と親交のあったことが知られる。こうした房前と王の間柄は、房前の妻牟漏女王（父は美努王、母は橘三千代）や妻の兄葛城王（のちの橘諸兄）・佐為王（橘佐為）などの王族を介して深められていくとともに、房前自身、武智麻呂よりも早くから参議の立場において、王との親交の機会があったように思われる。

ちなみに植垣節也氏は、武智麻呂には文学的才能はなく、長屋王に招かれた証拠もなければ、その可能性もなかったと指摘されている。⁽¹⁶⁾ その点でも房前の方が、藤原氏の宗家・惣領であった武智麻呂に比して、いわば皇親

的性格の持ち主であったように思われる。元明・元正が、右大臣長屋王の政治的パートナーとして房前を選んだのは当然であった。

なお『統日本紀』養老五年五月十九日条によれば、不比等が没して九カ月後のこの日、三千代が落飾している。理由は記されていないが、前後の事情からみて不予の元明上皇に対する追従と考えられる。ことのほか元明とは結びつきが深かったこの三千代の入道が、元明による房前の内臣任命の契機となったとしてもおかしくはない。

ともあれ房前の内臣任命は、武智麻呂の立場を無視するに等しい行為であったから、房前の参議就任以来、鬱積した不快感も極限に達したに違いない。もっとも武智麻呂にとっての救いは、内臣が房前自身の求めた地位ではなく、また房前に政治的野心がなかったことで、これが両者の関係を破滅にまでは至らせなかった理由である。この時期武智麻呂は藤原氏一門の危機をすら感じていたかも知れない。

元明上皇は一ヶ月余後の十二月七日に没し、房前の内臣はいわば元明の置き土産となった。

四 「右大臣」武智麻呂

(1) 長屋王の変と兄弟

不比等につぐ元明上皇の死が、政治的な意味をもたないはずはなかった。あとを継いだ元正にとっては、皇親体制（天武一族の体制）を維持し首皇子に譲位することが課題であったが、神亀元年（七二四）二月四日、その首皇子が即位し聖武天皇となった。ほとんど異動のなかった中で唯一の人事は、当日、右大臣長屋王が左大臣に昇任したことである。また舍人親王に封五百戸が加増され、新田部親王は一品を授けられている。これは聖武朝下での主導権が長屋王以下の皇親にあることの表明といっていよいであろう。一方藤原氏に対しては、武智麻呂と房前がともに従三位から正三位に昇叙され、かつ増封されているが、不比等生前と異なり、ここでも兄弟が同等の

扱いを受けている。

一方聖武の夫人光明子は、神亀四年（七二七）閏九月、待望の皇子を出産し、十一月には早くも立太子している。生後二カ月での立太子は前代未聞で、武智麻呂の推進するところであったとみられる。勢いづく皇親に対して武智麻呂が打ち込んだ、強力なクサビであった。ところがこの皇太子は翌年九月、わずか二歳で夭逝してしまう。そして皮肉なことに、その前後、もう一人の聖武夫人県犬養広刀自に安積親王が生まれた。周知のように、その五カ月後、天平元年（七二九）二月に起こったのが、長屋王の変である。

この変で不思議なのは、そこに房前がいつさい登場しないことである。

二月十日、長屋王がひそかに左道を学び国家を傾けようとしている、との密告により、その夜、式部卿藤原宇合をはじめ衛門佐、左右衛士佐らが六衛府の兵を率いて長屋王の宅を囲んだ。翌十一日には、大宰大貳多治比県守以下三名を「権為ニ参議ニ」した上で、舍人・新田部両親王、大納言多治比池守、中納言武智麻呂らとともに罪の糾問に出向かせている。このように当時の皇親を代表する二親王以下、政界の指導者の大半が動いた大事件にもかかわらず、房前の名だけがなぜか全く出てこない。

この点については、事件のかなめに実力者である内臣房前が隠れていたとみる理解（野村氏）⁽¹⁷⁾もあるが、房前が隠れねばならない理由がない。まして房前が当時中衛大将の任にあったとすれば、なおさらであろう。そればかりではない。事件が終わった三月四日、三十一名が叙位されている。時間的経過からいって、関係者に対する論功行賞とみて間違いないが、ここにも房前の名はない。ここまでくると、房前はこの事件に関与していなかったのではないか、とみるのが筋道ではなからうか。

これに対して武智麻呂の方は、同じ日（三月四日）、中納言から大納言へと昇進している。事件後の人事異動は武智麻呂のこの一件だけであり、特別の人事といわねばならないが、これは、事件の中心人物が武智麻呂であっ

たことを雄弁に物語っている。

長屋王の一件に房前が関わった形跡は全くみられない。わたくしはそれを、意図的に事件からはずされた結果とみる。はずしたのは武智麻呂である。それは、公私にわたり長屋王と親しかった房前の立場を見越した上での武智麻呂の計算——内臣となって皇親体制に取り込まれる房前を、この長屋王事件で封じ込め、その立場を弱めること——であった。武智麻呂が房前に対し、それ以上の対決的な態度に出なかったのは、以前ふれたように、房前自身に政治的な野心や動きがなかったからである。

長屋王の事件に際し、これを主導した武智麻呂の手腕として看過できないのが、密告のあった翌十一日、大宰大貳正四位上・多治比県守、左大弁正四位上・石川石足、彈正尹從四位下・大伴道足の三人を「権為參議」して派遣したことである。この措置は、「権りに」でも「參議」となすことにより衆議の拡大をはかり、左大臣長屋王の糾弾が政界の支持を得た合法的なものであることを示す一方、この事件を推進した武智麻呂がその行動に大義名分を求めた、きわめて巧妙な方策であったと考える（一章「參議論の再検討」参照）。

事態は急速に進み、密告から二日後、長屋王の自刃で終わった。叔父に当たる舍人・新田部兩親王から糾問された長屋王は、皇親の結束力のもろさに失望したことであろう。皇親の分断を狙う武智麻呂の思惑通りに事が運んだことになる。

ちなみに『続日本紀』同年四月三日条によれば、「舍人親王參入朝庁之時、諸司莫為之下座」との太政官処分が下されたことが知られる。舍人親王に対する礼式の改変を示すもので、変の二カ月後であることから、事件に対する責任を負わされたあらわれとみられるが、⁽¹⁸⁾これもまた皇親勢力の抑圧の一つであったといつてよい。しかもこの舍人親王は、数カ月後の八月、光明子の立后に際しては、⁽¹⁹⁾皮肉にもその宣命を述べる役目を担わされる。ここに至って皇親勢力は完全に後退し、武智麻呂＝藤原氏の傘下に入ったといえよう。

周知のように奈良時代の末、天武系皇統の人材が枯渇し、それが皇位継承をめぐる混乱の因となったが、このようにみえてくるとそれを促す役割を果たしたのが、ほかならぬ武智麻呂であったといえそうである。

(2) 諸司の挙

変後、武智麻呂は大納言となり、名実ともに政界の首班となった。元明の置き土産ともいべき房前の「内臣」も、この事件で完全に色あせたものとなった。長屋王の事件は、皇親のみならず房前に対しても鉄槌を下したのである。

房前についていえば、事件後は、天平元年（七二九）九月二十八日に至って史料上にあらわれ、中務卿に任じられているが、そこでは「内臣」の記載はない。そればかりかこれより以前に宇合も式部卿に任じられている。房前の中務卿任命は、宇合（約十歳違いの弟）と同等に扱われたことを意味しており、藤原一門内での房前の地位の低下が知られる。そしてこうした傾向は、天平三年八月十一日、式部卿宇合・兵部卿麻呂が参議になることで、決定的となった。武智麻呂を除く三兄弟が参議として肩を並べたからである。しかもこの時の措置が留意されるのは、宇合・麻呂以下、任命された参議六人が、「依_レ諸司_ノ挙_ニ」るものであった点で、それまでの天皇による恣意的な拔擢と全く原理を異にしている。天皇との個人的関係で選ばれたこれまでの参議の在り方を、オープンな形にしたのがこの「諸司の挙」であり、わたくしはこの時、参議の在り方が大きく変質したと考える。参議制の展開に果した武智麻呂の役割については、あらためて別稿（一章）で論じたい。

さて武智麻呂は、このような形の「参議」選出の一カ月後の九月、自らが大宰帥を兼任、さらに十一月には畿内に惣官、諸道に鎮撫使を置いているが、これらの人事も、中央における参議の制度化と一連のものともなされる。自らが帥となったのは、地方政治に対する配慮で、事件後の政治のひきしめを意図したものであろう。ちな

みに宇合と麻呂がその任に当てられ、房前は任じられなかったが、その一環として翌年、西国を中心に節度使が置かれた時、房前は東海・東山二道の節度使に任じられている。それでも房前は、他の弟たちと同じ参議の立場で扱われているわけである。

こうして武智麻呂は、皇親勢力を後退させて政権を握ったばかりでなく、一門に対しては弟たちを参議という地位に就かせることで房前を抑え、自らは兄弟の上位に立った。わたくしはこれをもって武智麻呂政権の確立とみる。

大納言武智麻呂が従二位に昇叙され、不比等と同じ右大臣に就任したのは天平六年（七三四）正月のことであった。長屋王の変から五年目で、その間、左右大臣は欠けたままであり、天平三年七月に大納言大伴旅人が没して以後は、ただ一人の大納言として廟堂最高位を占めていた。それがここに至って右大臣となったのは、前年正月に継母三千代が亡くなったこととおそらく無関係ではなかったように思う。そしてこの昇任の結果、養老五年以来つづいた房前（この時正三位）との同等位が崩れ、武智麻呂は名実ともにポスト不比等の座に着くことができたのだった。なおこの叙位で弟の宇合が正三位となり、房前と並んだことも留意されよう。房前は、神亀元年（七二四）二月、聖武即位の日に正三位に叙されて以後、ついに生前、昇叙されることはなかったのである。こうしてみると、あらゆる意味において、房前が武智麻呂よりまさっていた時期は一度もなかったというのが、わたくしの理解である。

むすび

だが天平九年（七三七）、猛威を振った天然痘は、それまでの武智麻呂の努力をすべて無にしてしまった。武智麻呂を含めて藤原四子のすべてが命を奪われるからである。まず四月に房前（参議民部卿正三位）が亡くなった。

『続日本紀』に「送以三大臣葬儀、其家固辞不受」とみえるのは、武智麻呂に対する遠慮があったのであろうか。その武智麻呂も七月、麻呂（参議兵部卿従三位）におくれること二週間で没した。『家伝』によれば、前日（二十四日）光明皇后自らが見舞いに訪れ、その計報を聞いた聖武は「羽葆鼓吹」を与えたという。また『続日本紀』には、正一位・左大臣を授けられ、即日没したと記す。鎌足が亡くなる時、天智天皇から大織冠と藤原姓を賜わったことが想起されよう。武智麻呂こそ鎌足であり不比等であった。そして翌八月には宇合（参議式部卿兼大宰帥正三位）が世を去り、四子の時代は終わる。

ここに一つだけ付け加えるならば、その年十月、房前に正一位左大臣が贈られ、あわせて二十年を限り食封二千戸が「其家」に与えられている。没後ではあるが、ここで再び武智麻呂と房前が官位の上で並んだ（天平宝字四年六月には、仲麻呂により武智麻呂と房前に贈太政大臣が与えられる）ことになる。これは武智麻呂が没したことになされた房前の復権であり、それが元正や橘諸兄たちの意に出るものであったことは言うまでもない。そしてこの措置も、房前の参議・内臣就任が皇親側の意図に出るものであったことを暗示している。

(1) 竹内理三『参議』制の成立（『律令制と貴族政権』第一部所収、昭和三十三年）。以下断らない限り竹内氏の見解はこの書による。

(2) 虎尾達哉「参議制の成立——大夫制と令制四位——」（『史林』第六五巻第五号掲載、昭和五七年）、黑板伸夫『参議』に関する一考察（『平安時代の歴史と文学』歴史編所収、昭和五六年）、高島正人「大宝二年の『参議朝政』について」、同『中納言・参議』の新置とその意義（『立正史学』第四九・五〇号連載、昭和五六年）など。

(3) 長山泰孝「律令国家と王権」（『続日本紀研究』第二三七号掲載、昭和六〇年）。

(4) 本書第Ⅱ部一章「参議論の再検討——貴族合議制の成立過程——」。

(5) 藺田香融「国造豊足解をめぐる二、三の問題」（『関西大学文学論集』第八巻第四号掲載、昭和三四年）、野村忠夫「不比等政権」、同「長屋王首班体制から藤原四子体制へ」（『律令政治の諸様相』所収、昭和四三年）、中川収「藤原四子体制と

その構成上の特質」(『日本歴史』第三二〇号掲載、昭和五〇年)など。なお断らない限り、以下の野村氏の見解はこの書による。

- (6) 植垣節也「家伝と武智麻呂」(『歴史教育』第一五卷第四号掲載、昭和四二年)。
- (7) 関口裕子氏は、嫡庶子の問題を「律令国家における嫡庶子制について」(『日本史研究』第一〇五号掲載、昭和四四年)において論じられているが、位階だけでなく、官・位の両面から検討される必要がある。
- (8) 高島、註(2)前掲論文。
- (9) 『続日本紀』天平宝字二年十二月二十八日条によれば、「以式部散位四百人、蔭子位子留省資人共二百人、兵部散位二百人、為定額」とあり、想像以上に散位者の数の多かったことが知られる。
- (10) このような観点から、長山、註(3)前掲論文が留意されよう。
- (11) ちなみに栗田真人の没年は養老三三年二月五日(『続日本紀』。ただし『公卿補任』は六月二日とする)、すなわちこの人事の翌年のことであるが、『公卿補任』一本には養老二年三(ニイ)月と記す。それによればおのずから理解は異なってくるが、ここでは前者の記述に従う。なお中納言は、和銅元々四年の間四人いたことになっているが(『公卿補任』、これについては栗田真人の大宰帥就任との関係を検討してみる必要がある)。
- (12) 中川収氏は註(5)前掲論文で、「永手が生まれたところから不比等の意向を無視した三千代の房前押し出し運動が開始した」と述べられている。わたくしはそこまで強調することには賛成できないが、そうした傾向はあったとみてよい。
- (13) 本書第三部第二章「歴代遷宮論——藤原京以後における——」で詳しく論じたので参照のこと。
- (14) 『続日本紀』宝龜九年三月三十日・同十年正月一日条。
- (15) 角田文衛「不比等の娘たち」(『律令国家の展開』所収、昭和四〇年)。
- (16) 植垣、註(6)前掲論文。
- (17) 笹山晴生「中衛府の研究」(『古代学』第六卷第3号掲載、昭和三二年)。なお衣服令集解の朝服条引用の養老六年二月二十三日条の格では、この前後房前は「授刀頭」となっている。
- (18) 新田部親王に対して、直接責任が追求されなかったのは、親王の母(五百重夫人)が鎌足の女で、しかも麻呂と異父兄弟にあたるという関係によるものかもしれない。
- (19) 光明子立後の問題については、本書第一部一章「光明子の立后とその破綻」参照。

三章 議所と陣座

—— 仗議の成立過程 ——

はじめに

平安貴族政治の中核となったのは、公卿による合議制であつた。ここにいる公卿とは上級官人に対する一般的汎称ではなく、しばしば「大臣以下参議以上」という形で呼称された、いわゆる議政官集團のことを指し、非制度的存在としての参議が議政官の末端に組み込まれることにより成立した。平安初期のことである。その意味で、「公卿」の成立こそが奈良朝の政治（構造）と平安朝の政治（構造）とを区別する最大の指標であつた。

ほぼ以上のようなことを論じたのが前稿「参議論の再検討——貴族合議制の成立過程——」⁽¹⁾であるが、紙幅の関係で割愛せざるを得なかつたものに、こうして成立した公卿による国政密議の「場」の問題があつた。「場」に即して政治のあり方を考えてきた観点からしても、公卿合議の場の問題は、避けて通ることは出来ない⁽²⁾と考える。

もっともこの点に関しては、一般に、長岡京（宮）で朝堂院と内裏がはじめて分離したという発掘報告を手掛りとして、奈良時代では天皇は毎日大極殿に出御して日常的な政務をみていたが、平安朝になるとその場所が紫宸殿に移り、政治も内廷的で儀礼化し矮小化した、というふうに理解されてきた。⁽²⁾ところが最近古瀬奈津子氏は、長岡・平安京で内裏と朝堂院が分離したという点では通説に立ちつつ、この分離の結果、奈良期と異なり、天皇

が全官人に姿を見せるのは儀式の時だけとなり、日常は内裏で上日の認められた参議以上および少納言を通して政務をみる事が可能となった。これは天皇―太政官―諸司という官僚機構・組織が確立したことを意味し、「一般に奈良時代こそ律令制の最盛期だと考えられているが、機構・組織といった面からみると、必ずしもそうとは言えない」とし、律令体制における太政官政治の完成を平安期に求めるという見解を提出された。⁽³⁾

氏の意見は、平安朝政治を公私混淆・矮小化とみる従来の理解に対する批判として聴くべきものがあるが、最終的には賛成出来ない。その理由の第一は、近時、発掘当事者の間で平城宮の平面構成が再検討され、朝堂院と内裏の分離はすでに平城京にはじまっていたとみられるようになったことである。⁽⁴⁾これが事実とすれば、氏の論拠そのものに重大な影響がある。第二は、どの時代であれ、天皇が大極殿に出御するのは儀礼的な時に限られており、ここに毎日出御して政務をみたとは考えられないことで、史料的にもそれを裏付けることは出来ない。森田悌氏は、八世紀においても天皇は内裏で論奏・奏事をみていた可能性の強いことを指摘されているが、⁽⁶⁾わたくしも国政審議を含めて天皇が出御する場合の政務は、奈良朝以来一貫して内裏で行なわれたと考える。この点でも、古瀬氏の論の前提である、政務の場が大極殿から紫宸殿へ移ったという従来の理解そのものに抜本的な検討の要がある。

国政審議の場が内裏であったということは、政務の基本が「面議」―御前会議にあったことを意味する。重要政務は大臣らが内裏正殿（のちの紫宸殿）や天皇在所に召集され、面前で審議したのが奈良時代の姿であり、平安時代でも正式には同様であった。しかし前稿で論じたように、平安初期、公卿の合議体が形成され、それが実質的に機能しはじめると、天皇が出御しない場合でも公卿僉議が内裏でもたれ、国政が推進されるようになった。そこで以下これを「非面議」と称することにするが、そうした非面議の際に用いられたのが紫宸殿近辺にある左右近衛陣（仗座）であり、そこでの公卿たちの評議が陣定（議）・仗定（議）と称されたことは周知の通りである。

この陣（仗）議については藤木邦彦氏に先駆的な研究があり、弘仁（八一〇～二四）頃にはじまると推測されている。そして以後陣（仗）議については、成立時期の問題を含め、藤木氏の説がほぼ踏襲されてきたといっている（8）。

しかし仗議に関する従来の理解についても、少なくとも三つの点で疑問がある。一つは、これまで陣（仗）座の使用をもって陣（仗）議の成立とみなしてきたきらいがあるが、仗議というからにはそれにふさわしい使用内容が吟味される必要がある。その結果によっては成立時期についても別個の理解が生まれてこよう。その点、太政官政務が陣に持ち込まれるようになるのは十世紀に入ってからであるという武光誠氏の指摘は、直接陣定（議）を論じたものではないが、留意される。

二つは、公卿僉議の場としての宜陽殿の存在とその機能がまったく等閑に付されてきたことである。紫宸殿の東南にあった宜陽殿には、その西廂に「公卿座」が、南廂には「議所」が用意されていて、九世紀以来、公卿僉議の場として用いられており、陣（仗）座が政務の場となる背景に、この宜陽殿（議所・公卿座）の存在が深くかわっていたのである。その意味で宜陽殿（西廂・議所）を抜きにして仗議の成立過程も意義も明らかにし得ないといつて過言ではないが、これについて取り上げた論考を寡聞にして知らない。

三つは、前項と同様の意味において、内裏に設けられた摂政直廬の存在とその機能に注目することがほとんどなかった点である（10）。このことへの考慮も、議所や陣（仗）議の理解に深くかわってこよう。

以上の理由から本稿では、場に即して政治構造を考察するという視点から、宜陽殿（西廂・議所）や内裏における摂政直廬の機能の検討を行なう一方、それらとの関連を通して陣（仗）議の成立過程を明らかにし、合わせて公卿合議制の実態や摂関政治の特質の解明にも及びたいと思う。

一 宜陽殿西廂と陣座

(1) 二つの公卿座

宜陽殿は紫宸殿の東南にあり、母屋に累代の重宝が收藏されていたことから納殿とも呼ばれていたが、この宜陽殿にはその西廂、正確にいえば「乾角庇二間」に公卿座が設けられていた。二間（ふたま）というから、ごく限られた広さの廂間であったとみられるが、そこが公卿、すなわち「大臣以下参議以上」が参内した時の座とされていたもので、『西宮記』卷十九に次のような記述がある。⁽¹¹⁾

件座公卿本座也。仍初着座時着此座也。凡行諸儀式之時、公卿着此座行之。尋常時仮着近衛陣一

すなわち宜陽殿の公卿座は「公卿本座」とされ、初（任）着座はもとより、改まった行事や儀式に際しては、公卿はまずこの宜陽殿の座に着した上、事を行ない、通常の行事は近衛陣を用いたというのである。ちなみに前段で述べられている初（任）着座については、同じく『西宮記』卷八に、「公卿取吉日着宜陽殿及陣座」とあって、初任公卿は任官されると吉日を撰び、まず宜陽殿と陣に定められた自己の座に着してから任務に当るのが慣わしとされていた。たとえば天慶二年（九三九）十月一日の句儀の際、

是日天皇御三南殿、有三旬宴事、仍親王、大臣以下諸卿参入、但左大臣、依未着三初宜陽殿座、尚在三左近陣本座二行事。⁽¹²⁾

とあり、左大臣藤原仲平が宜陽殿に初任着座をしていなかったために左近衛陣の本座で行事に当たっている。同様のことは道長の時代に降ってもみられるから、⁽¹³⁾のちのちまでこうした慣例が伝統として遵守されたことが知られる。思うにそれは宜陽殿（西廂）と陣（仗）座、ことに前者が公卿本座とされ、政務と深いかわりをもつ場所であったからにほかならない。

こうした意味をもつ公卿座が宜陽殿や陣（仗）に設けられた時期は明らかでないが、前者については『類聚国史』天長四年（八二七）正月二日条に、

於_二宜陽殿廂下_一、召_二親王已下侍從已上_一、命_二酒食_一賜_レ被。

とある「廂下」を西廂の初見とみてよいであろう。また後者については『続日本後紀』承和六年（八三九）正月一日条に、

廢_二朝賀_一、緣_二天皇之同産芳子内親王去月薨背_一也。是日天皇不_レ御_二紫宸殿_一、但於_二陣頭_一、賜_二侍從已上酒及祿_一。とみえるのが史料上の初見であるから、ともに平安時代のごく早い時期に設けられたものとみて間違いない。

さて、先にもふれたように、同じ公卿座でも宜陽殿（西廂）と近衛陣とではその格式に差があり、前者の方が南向きの場所とされ、公卿本座とも呼ばれていた。そのあたりの事情を検討するなかで、公卿座の機能や性格も明らかにってくるに違いない。

周知のように近衛陣・仗（陣頭・仗下とも所出）は内裏の警固に当る左右近衛府の官人たちの詰所で、左近衛陣は紫宸殿と宜陽殿をつなぐ紫宸殿の東北廊南面、右近衛陣は紫宸殿の西南の校書殿の東廂にあった。承和八年十月二十七日、仁明天皇が不予に陥った時、「皇太子親王以下五位已上、就_二左右陣頭_一候_レ之」とみえ、天皇不予の時、ここが公卿以下官人たちの控え所となったことが知られる。⁽¹⁴⁾緊急時に公卿たちが待機するのに格好の場所であったからであろう。したがって陣（仗）の使用は、先に引用した初見記事や、『文徳実録』仁寿二年（八五二）四月一日条（帝不_レ御_二南殿_一、侍從已上近仗下飲_一）に見るごとく、天皇が紫宸殿に不出御の場合に限られているのが特徴的である。またこの頃には、そうした際仗頭での賜宴が「承前の例」⁽¹⁵⁾ともなっていた。

陣（仗）座が臨時的措置として政務の場とされたのも、同様の理由からであろう。これについては『三代実録』天安二年（八五八）十二月十一日条に、

公卿於_二外記候庁_一聴_レ政、自_二文徳天皇崩御_一、於_二近衛陣頭_一聴_二弁官所_レ申之政_一、今日始復_二常儀_一。

とあるのが留意される。元来、外記庁で行なわれていた公卿聴政（「聴_二弁官所_レ申政_一」）が、文徳天皇の崩御（天安二年八月二十七日）後は近衛陣頭で行なわれていたのを、この日「常儀」に復したというものである。これは仗頭が数カ月にあつて政務の場に用いられたことを示す早い時期の記事である。同じく元慶四年（八八〇）十二月十九日には、清和天皇崩御以来仗下で行なってきた公卿聴政を太政官候庁に戻している。また元慶八年（八八四）五月十九日宣旨には、

右大臣宣、今朝有_レ事、公卿早参_二入内裏_一、不_レ可_二更就_二侍従所座_一、弁官所_レ申之政、宜_下於_二左近陣_一令_レ申者。

（『類聚符宣抄』巻六）

とあり、有事により公卿たちが早く参内したため、臨時的措置ではあつたが陣で公卿聴政を行なわせている。こうした事例からも、しだいに陣に政務が持ち込まれるようになった状況が知られると思う。むろんこれは太政官政務_二政であつて、いわゆる公卿審議_一定ではないし、仗頭の使用もなお一時的なものでしかなかったが、あと述べるようにやがて陣が政務の主要な場となっていく傾向が予見されよう。

(2) 非面議の常態化

このように見てくると、仗頭の使用は天皇が紫宸殿に出御しなくなる九世紀半ば、ことに文徳朝から清和朝初年にかけて顕著であり、それがしだいに常態化していったことが知られる。とくに文徳天皇は病弱のため、「頻_二廃_二三万機_一」（『文徳実録』天安二年八月六日条）すという状態であつたことや、文徳のあと藤原良房を外祖父とする幼少の清和が即位したことが、こうした傾向を促進する条件となつたとみられる。しかもこの清和は、即位時九歳という幼少のためであらう、貞観七年（八六五）十一月、仁寿殿に遷御するまでの七年間、東宮に起居してい

た。東宮の所在地は明らかでないが、この場合、内裏内になかったことは確かである。⁽¹⁶⁾ 天皇が長期にわたり内裏外で生活するという事態はきわめて異例なことであったが、この間、諸行事はもっぱら仗頭で行なわれている。長期にわたる天皇の不在が陣（仗）頭の使用を盛んにさせた原因であったといつてよい。

ちなみに貞観八年（八六六）閏三月の応天門事件は、清和が東宮から内裏に遷御（前年十一月）した四カ月後のことである。また事件の数カ月後、八月には良房が人臣初の摂政に任じられている。こうした一連の政治的動きが短期間に起こったことを考えると、応天門事件には清和の内裏遷御が密接にかかわっていたように思われる。少なくとも良房の外祖父としての地位や権限の強化が、この七年に及ぶ天皇の内裏不在を通して図られたことは間違いない。人臣摂政の登場に、清和の長期にわたる内裏不在と仁寿殿への遷御のもった政治的な意味といったものを考えてみる必要がある。

それはさて、この清和については、『三代実録』貞観十三年（八七一）二月十四日条に、

天皇御_ニ紫宸殿_ニ視_レ事、承和以往、皇帝毎日御_ニ紫宸殿_ニ視_ニ政事_一、仁寿以降、絶無_ニ此儀_一、是日、帝初聴_レ政、当時慶_レ之。

とあり、面議が清和朝の半ばによりやく復活したかにみえたが、それも結局は一時的な現象に終わっている。またこの記事によって天皇の紫宸殿への出御は承和の仁明朝を最後とするという認識が生まれていたことも知られるよう。

天皇不出御が常態となるなかで当然必要となってくるのが、これまでの紫宸殿にかわる政務審議の場であるが、そうした非面議の場として用いられたのが、従来ほとんど考慮されることのなかった宜陽殿南廂の議所である。

この議所についてはのちに詳しく述べるが、ここで除目・叙位が行なわれたのは、累代の重宝を収蔵するといふ宜陽殿のもつ格式と無関係ではない。そしてこのことがまた、同じ宜陽殿の一面に設けられた公卿座としての

「西廂」を公卿本座にした理由でもあったと思われる。

すなわち宜陽殿西廂は、史料の上では朝賀や重陽などの宴飲がほとんどで、⁽¹⁷⁾その限りではこれまで述べてきた仗（陣）頭の機能とほとんど区別がない。しかし『西宮記』卷十七によれば、宜陽殿（公卿座）については「大臣北面西上、（中略）大中納言東西対座、（中略）参議南上東西対、（中略）親王西面、納言以上東面、参議対座、除日上外西面」とあって、いわゆる公卿の座配についてしか記されていないが、左右近陣座の場合は公卿のほか、四位大弁・非参議大弁をはじめ弁少納言や外記・史にいたるまでそれぞれの座次・座り方などが記されている。これは、宜陽殿（西廂）に設けられた座が公卿に限られていたのに対して、陣の座は公卿以外（以下）の官人にも用意された、紫宸殿に付属するより一般的な控え所であったことによる。たとえば延喜十年（九一〇）七月、左近陣（公卿座）が改敷された折、

大臣東面、大中納言、参議並南北面、但東端西面座有、是出居侍従、弁少納言、弁、少将等、就事祇候之處也。
（『西宮記』卷十七）

とあって、近衛陣に公卿以下の官人たちの座が用意されていたことがわかる。このようにともに公卿の座でありながら、陣の方にはそれ以下の官人の座も用意されていたことが、両者のその後のあり方を異なったものにした理由ではなかったろうか。

(3) 天慶の公卿座移動

なお宜陽殿西廂の機能については、時期は降るが、その変化をもたらしたものとして、天慶元年（九三八）九月三日に行なわれた天皇在所の移転に伴う左近陣公卿座の改替移動をあげたい。『本朝世紀』に次のように記されている。

今日、左近陣公卿座、相_レ変年来例、忽以改替、所_レ以然_二者、自_二七月廿七日_一、主上移_二御綾綺殿_一、自_二敷政門外北腋_一、作_二屏東行_一、為_二御在所内_一已了、依_レ壞_二陣吉上舍人居所_一、以_二大弁已下外記史所_一着床子、更立_二敷政門外南殿_一、改_二宣仁門内公卿座_一、公卿一同、着_二宜陽殿西庇_一、陣官、并弁、少納言、外記、内記、史、則着_二宣仁門内座_一。弁少納言外記内記史
在_二南_一陣官在北(以下略)

すなわち天皇が常寧殿から綾綺殿に移御するに伴って当時宣仁門内にあった公卿座を宜陽殿西廂に変更し、あわせて陣官や弁・少納言・外記・内記・史などを宣仁門内に着させたというものであるが、すべてが宜陽殿に移されなかったのは、そこが本来純粹に公卿だけの座であったからにはかならない。西廂が本座と称されたゆえんもそこにあったと考える。

留意されるのは、このように宜陽殿西廂が臨時的に審議の場となったことにより、公御本座としての候所だけの機能から審議の場という性格をもつようになったことである。すなわち公卿座が臨時に西廂に移されていた時期、陣申文や諸国解文の審議、あるいは仁王会や奉幣使・宣命、ときには受領功課や讓位に関する諸雜事など、日常政務のほとんどが西廂にもち込まれ、公卿たちがここで政務処理に当たっていたからである。⁽¹⁹⁾

ところで、近衛陣公卿座が宜陽殿西廂に移置されていたのは前後十年間であった。『日本紀略』天曆二年(九四八)五月十七日条に「始移_二公卿座於左近陣座_一、年来着_二宜陽殿_一、如_レ旧移_レ之」とあり、この年、十年ぶりに左近陣に戻されている。⁽²⁰⁾その理由は、『九曆抄』によれば、「去天慶元年朱雀天皇遷_二御綾綺殿_一之時、上達部座敷_二宜陽殿西廂_一、而今上去月九日遷_二御清涼殿_一、今日如_レ本還_二着左近衛陣座_一」とあり、天皇の清涼殿移御によるものであったことが知られる。そしてこれを機にそれまで果していた西廂の審議の場としての機能が陣頭へ戻されていったと考えられる。

すなわち公卿座が近衛陣に戻されてからは、西廂の方は朝賀など諸節会、平座、封事定めなど、事改まった行事

について用いられ、日常政務はほとんど行なわれなくなっているからである。これは公卿座が近衛陣に戻った結果、日常政務は陣、西廂には本座にふさわしい伝統的行事に関するものだけが残された結果とみられよう。その点で『西宮記』が、陣座での行事については格別ふれるところがないのに、宜陽殿（西廂）の場合は、諸節会・擬階奏・郡司読奏・旬の平座・封事定といった年中行事をあげ、「天皇不出御儀」にも言及しているのは、理由のないことではない。けだしこうした宜陽殿のあり方に固定したのは、右にみた天慶―天暦年間における公卿座の移動によるものであり、その結果本座としての西廂は、儀礼的・伝統的な国家行事に関わる場となり、形骸化していったものと思われる。

二 議所と摂政直廬

(1) 議所の機能

宜陽殿（西廂）に設けられた公卿座について、前節では陣座とのかかわりを通して検討してきたが、宜陽殿の機能や役割を考える上で西廂以上に大きな意味をもつのが、同じ建物に設けられた議所である。

前に述べたように、議所とは宜陽殿の南廂の一画、東二間に設けられた部屋で、『西宮記』卷二に「始除目議之後、經_二数日_一例」として、「貞観十三年正月九日、公卿就_二議所_一云々、廿九日議定了、於_二官庁_一令_レ召」と掲げるのが早い時期の所見である。⁽²²⁾この時の除目議が中断された理由は明らかでないが、『三代実録』貞観十三年

（八七二）二月八日条によれば、太政官の報告を聴く公卿聴政も正月以来行なわれず、この日よりよく再開されたというから、政務全般が滞っていたようである。それはともかく『西宮記』には、また「議所装束了後、停_二除目_一例」、すなわち除目（議）のために議所の用意がなされたが理由あってそれが停止された例として、「嘉祥四年（八五二）二月二日、仁寿三年（八五三）二月五日、貞観二年（八六〇）二月十二日」をあげている。具体的

な事情は不明であるが、議所に関する記事としてはこれが初見であるから、宜陽殿西廂や陣⁽²⁴⁾（仗）の公卿座と同様、議所もまた平安初期から設けられていたとみて間違いない。というより、議所と公卿座の設置は同時期のものではなかったろうか。

さて、右の事例からも明らかのように、議所は除目・叙位の審議がなされたところと考えられ、事実のちには「除目の議所」（『本朝世紀』天慶二年十二月二十六日条）とさえ称されるようになる。こうした議所のあり方に関して留意されるのは、『貞信公記』延長三年（九二五）正月二十六日条に、「於^ニ議所^ニ除目議始、昨今依^ニ御物忌^一也」とみえ、また『日本紀略』天慶八年（九四五）三月二十日条にも、「天皇不^レ予、不^レ能^レ召^ニ諸卿於御前^一、仍於^ニ議所^一令^レ行^ニ除目^一」と記されているように、天皇が物忌や病氣によって御前定めが出来ない時、それにかわる場として議所が用いられた事実である。⁽²⁴⁾これは議所での除目が御前定めに行なわれたこと、つまり議所が面議の行なわれる紫宸殿や清涼殿に准ぜられるような場であり、いわば紫宸殿や清涼殿のミニチュアとしての機能を果たしていたことを物語る。

しかしわたくしには、議所が当初から除目・叙位のためだけに設けられたとは思えない。議所は本来、非面議の際の内裏における国政審議^ニ公卿僉議^一の場として設定された場所ではなかったろうか。前稿で論じたように、平安期に入り、公卿を主体とする合議体制が整い実質的に機能しはじめるに伴って、当然そうした審議の場の必要性が生じていたからで、それが議所であったと考えたい。議所⁽²⁵⁾（議場とも書き、「ギノトコロ」とも訓む）という名も、それに由来するのではなからうか。それがもっぱら除目・叙位に限られるようになったのは、あと述べるように除目・叙位に示される人事権の掌握が天皇権力の中枢をなすものであったからで、それゆえ、やむをえず天皇が面議出来ない時は、御前に准ずる場所として議所が用いられるようになったものと考ええる。格式のある宜陽殿という建物の南廂に設けられた議所は、それにもっともふさわしい場所であったろう。

留意したいのは、議所の機能が除目・叙位に限られるようになるに伴い、かえって宜陽殿西廂や陣（仗）の公卿座としての機能が多様化していったことである。換言すれば議所の機能が限定されるのに対し、西廂、とくに陣（仗）頭の役割が多様化し、単なる控え所にとどまらず天皇不出御の際の宴飲はもとより、時には政務の場にも用いられるようになったことで、「除目の議所」の出現と公卿座の発展とは表裏の関係にあったといつてよい。これは当初議所がもった諸機能のうち、除目・叙位を除く政務が宜陽殿西廂もしくは陣座へ移行した結果と考える。ここで、このような議所と除目・叙位のかかわりを諸記録をもとに具体的にみておこう。

除目・叙位の当日、大臣以下は陣（仗）座で待機し、議所の装束が終わると日華門を出て議所に参入したが、その際、左大臣および執筆の大臣だけは南面から入るのに対し、右大臣以下は良（北東）から（執筆でも納言は良）入るのが作法であったようで、執筆に当った者は、その作法に種々神経を使っている。⁽²⁷⁾ その間議所では申文や大間書、あるいは筆や硯など必要な品々が用意され、公卿の着座を待って審議に入る。時期は降るが天慶二年（九三九）十二月二十五日の場合は、

左大臣以下、於_二議所_一被_レ始、三省二寮、例_二奏官人事_一、参議（藤原）元方朝臣執_レ筆、以_二近衛将監_一、申_二陽成院并中宮、京官御給名簿_一、今日只此等許也。
（『本朝世紀』）

といい、わずかながらも議所における除目審議の実態をうかがうことが出来る。また同五年三月の場合は、二十五日に左大臣以下八人が「着_二議所座_一、被_レ議_二除目之事_一」（『本朝世紀』）たのを皮きりに、二十九日までの五日間、毎日同メンバーが議所で審議を行なっている。除目はだいたい三カ日であるから、これは希有の例であろう。こうした審議の結果は、奏覧ののち議所に戻って清書（叙位の場合は入眼）され、もう一度覆奏した上で封の字を書し筥に納められた。ついで議所で下名を与え、最後の直物を終えて除目は完了したのである。

もっとも先に述べたように、議所での除目・叙位はあくまでも臨時的措置で、本来は御前除目であった。した

が、御前除目の際、議所では申文や大間書の用意、清書など事前・事後の事務的処理がなされるにとどまっていたが、その場合でも、公卿らは必ず一度議所に着し、そこから殿上に参入するのが原則であった。次に記すのはそうした殿上除目の一例であるが、その間、議所で饗応がなされることも少なくなかったようである。

此日、於_ニ殿上_ニ有_ニ除目議_一、午刻、太政大臣参_ニ入職御曹司_一、大納言藤原実頼卿、権中納言源清蔭卿、中納言藤原師輔卿、参議源高明朝臣、同清平朝臣、藤原忠文朝臣、伴保平宿禰、藤原顕忠朝臣、同敦忠朝臣、参入、着_ニ宜陽殿西庇座_一、未刻、諸卿着_ニ議所座_一、諸司依_レ例、弁_ニ備饗_一、此間、藏人頭左近中将藤原師氏朝臣、奉_レ勅、進_ニ議所_一召_ニ諸卿_一、諸卿起座、入_レ自_ニ日華門_一、出_レ自_ニ内衙門_一、入_レ自_ニ左青瑣門_一、就_ニ殿上座_一、……

（『本朝世紀』天慶四年十二月十七日条）

この場合、議所に参入する以前、宜陽殿西廂座で待機しているが、これは天慶元年以来、左近陣の公卿座がここに移されていたこと（前述）によるもので、通常なら仗座から議所へ向うのである。そして議所から殿上へ赴く前の「議所着座」「着議所」の作法は、この場合、半ば儀礼的なものであったろうが、以前ふれた初任公卿の宜陽殿や陣の着座作法と同様の意味をもつもので、議所が除目にかかわる場であることを如実に物語っている。ちなみに『兵範記』保元三年（一一五八）十一月二十六日条に、秋除目に関わる議所での大臣以下の座が図示されている。議所の機能が形骸化した時代のものであるが、平安末期でも議所の伝統が保持されていることに留意しておきたい（図4参照）。

(2) 摂政の内裏直廬

注目されるのは、このように御前除目が出来ない時に用いられたのが議所であったはずだが、平安中期になると、その議所以外のところで除目・叙位が行なわれる例がみられることである。摂政の内裏直廬がそれで、管見

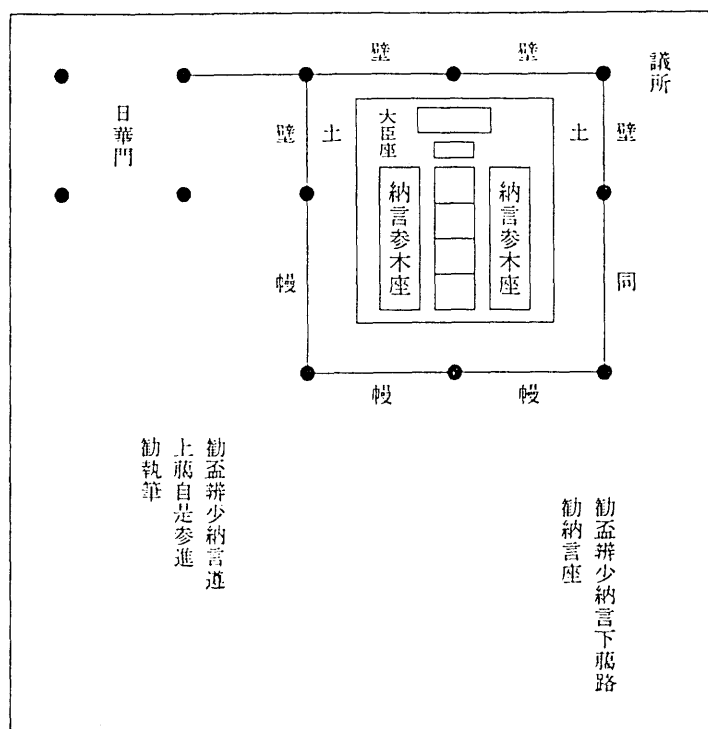


図4 議所の図 『兵範記』保元3年(1158)11月26日条裏書

によれば、『貞信公記』承平元年(九三二)三月十日条にみえる次の記事が初見である。

除目議、梅壺始行、依予病、此儀于今延引、仍諸卿相定云、待平損事、其程難知、不如下雖不_レ出_二議所_一早始行_上者、招_二大納言_一(藤原保忠)、中宮大夫(平伊望)等簾前_二行_一。

これ以前(正月二十八日)、忠平は病気のために除目が行なえないことを宇多法皇に奏上しており、ここまで延引されていたが、ようやくこの日、梅壺(凝華舎)で行なわれたというもので、この梅壺というのが、摂政忠平(前年九月、朱雀天皇受禪の日、摂政に任)のために用意されていた直廬(内裏宿所)であった。

公卿たちが忠平の直廬に呼ばれ、簾を下ろした摂政面前で除目が行なわれたということは、実質、摂政を「天皇」とする御前会議であったことを意味しており、したがってその宿所は議所、すなわち清涼殿や紫宸殿に相当する役割を果たしていたといつてよい。右の記載によれば、忠平の病氣平癒を待っても埒が明かず、これ以上の延引を恐れた諸卿たちが相談し、慣例を破って議所ではないが忠平の直廬で行なうことにしたというもので、むしろ忠平がそのように仕向けたのである。そしてこれを初度として、忠平が摂政であった天慶四年十一月までの間、除目・叙位の大半は忠平の直廬(はじめ凝華舎、のち桂芳坊)で行なわれている(後掲表8参照)。

摂政がその直廬で除目を行なっているのは、摂政の本質にかかわるものであった。すなわち摂政とは天皇にかわってその政務を行なうことであり、またその立場であったことを示しており、したがって直廬での視事そのものは決して私的・恣意的な行為というものではなかった。というより摂政権確立の表徴が、天皇にかわる人事権の行使とその「場」の保有にあったことを物語っている。事実これを逆手に取って三条天皇を退位に追いやった道長のような例もある。『日本紀略』長和四年（一〇一五）十月二十七日条に、次のような記述がある。⁽²⁸⁾

自今日ニ於ニ左大臣（道長）直廬飛香舎ニ始行ニ京官除目ハ、其儀如ニ摂政之時ニ、大納言公任参ニ仗座ニ、召ニ大外記文義ニ仰云、除目雑事、宜レ令ニ左大臣ニ准ニ摂政儀ニ行ニ之者。

すなわちこの日道長が直廬飛香舎で除目を行なったが、「其儀如ニ摂政之時ニ」とか「准ニ摂政儀ニ行ニ之」とあるように、当時内覧・左大臣であった道長は事実上摂政として振舞っているわけである。『御堂関白記』によれば、「從今日ニ除目召仰、此前資平朝臣来仰云、可下仰ニ太皇太后宮大夫、以ニ左大臣ニ准ニ摂政ニ令行ニ除目・官奏事等ニ者、宜旨書了云々」とあるから、この日はじめて准摂政の宣旨を得て道長が直廬で除目を行なったことがわかる。すでに二十一日、三条天皇の内諾を得ており、その理由も、「仰云、京官除目悩御間、於ニ宿所ニ可ニ奉仕、日来雖有ニ此仰、依レ有レ恐不レ承、人々猶可ニ奉仕ニ由相示、仍承レ之」とあるように、天皇の病氣にあったが、これを辞退していたのは宿所（直廬）で行なうのが、道長にとっては尋常なことではなかったからである。しかし結局道長は、衆議に従う形で直廬で除目を行なっている。おそらくそれは、道長のもくろむところであったろう。こうした経緯からも、宿所＝直廬で除目を行なうことが、摂政としての権限の行使であり、したがってこの場合道長は、除目の場を直廬に持ち込んだことで、事実上摂政となったといつてよい。極論すれば、すでに四十歳であった三条天皇の関白となるべき立場にあった道長が、直廬で除目を行なうことによって、可能性のなかった摂政の立場や権限を獲得する手段としてしているわけである。こうして道長は准摂政となって三条天皇の代行権を

得た。幼年天皇ではない成人天皇の代行権を得たことは、その天皇の存在そのものが否定されたということでもある。抵抗も空しく三条天皇が譲位したのは、これから三カ月後のことであった。ちなみに除目当日（二十七日）の『御堂関白記』によると、「資業朝臣、内大臣（藤原公季）以下候陣座相示云、有所勞不能遠行、為之如何、諸卿等相引来向（直廬）」とみえるが、むろん陣座に行けないというのは、道長のかげひきであったろう。あとに示すように、これが忠平以来、直廬で行なう時の常套文句になっていたからである。

こうして摂政忠平が始めて直廬で除目を行なったのが先例となつて、摂政が直廬で除目を行なうのが常態となり、故実として伝えられるようになる。次のような記事も、そのあたりの事情をよく示しているよう。

〔西宮記〕除目

有所勞者、着議所二行、参議執筆、有所勞者、以弁示諸卿云、有所勞不能罷着議所、此方仁、諸卿向宿所、摂政在策中、弁執宮文、内蔵儲饗、除目後、摂政下公卿給、

〔江家次第〕秋除目摂政時儀

蔵人五位帶弁者為先来陣着膝突伝摂政命其詞曰、有障不能大臣召外記仰云、宮文候、外記三人取視宮一合宮文

二合二列立小庭、公卿着直廬、

『江家次第』には、このあと摂政の文言や作法がこまかく記されているが、これより古い『西宮記』にはみられない。「有障不能着陣、人々此方爾」（『江家次第』）という言葉が、摂政直廬で行なう場合の常套文句になっていることも知られよう。なお『江家次第』では「着議所」ではなく「着陣」となっているのは、この間に除目の場が本来の議所から陣（仗）へ移った事実を示しているが、これについては次節で述べる。

ともあれ、摂政直廬で行なわれた場合でも、除目にかかわる議所の伝統は保持されていた。その一端は、天慶元年（九三八）十二月十三日、荷前事などの定めを宜陽殿西廂（公卿座が左近陣から移っていた）で行なったあと、

あらためて議所に着した上、忠平の直廬桂芳坊に赴き、除目を行なっていること、翌天慶二年十二月二十七日、桂芳坊での審議が終わったこの日、議所に戻り清書・覆奏、下名を行なっていること（『本朝世紀』）、などにうかがわれよう。除目の行事の首尾は議所でなければならなかったのである。

しかし議所が除目の場として用意されながら、摂政直廬が頻繁に用いられたことは、こののち議所の機能を空洞化していく要因にもなったに違いない。事実、入眼儀について、本来は「大臣着議所」すべきものが、「近代着左仗二行⁽²⁹⁾之」とされるようになっていく。そしてこうした傾向を促進した理由の最大のものが里内裏の出現にあったと思う。

周知の通り、平安京内裏は天徳四年（九六〇）の焼亡を始めとして以後しばしば炎上し、再建されるまでの間、貴族の私邸を仮皇居としたのが里内裏⁽³⁰⁾である。多くの場合、既存の建物が内裏殿舎に模されたが、時には新たに改造されることもあった。しかしそんな時でも本来の内裏そのままを再現することは困難であった。長和三年（一〇一四）十月十四日の除目の場合、道長の枇杷殿で行なわれたが（この年二月に内裏焼亡、四月に移御）、その時の様子を『小右記』は、「参内、陣座有⁽³¹⁾饗、（中略）臨⁽³²⁾申剋⁽³³⁾諸卿着陣、硯・筥書等在⁽³⁴⁾陣座、依⁽³⁵⁾無⁽³⁶⁾議所」と記している。また長和五年正月十日の除目もやはり枇杷殿であったが、同様に仗座を「擬⁽³⁷⁾議所」（『小右記』）して饗を儲け、内豎所の簡をたて筥書を置き、諸卿が着座、このあと道長宿所で除目議が行なわれている。里内裏では議所までは設けられず、陣（これも正確には陣に擬した場所）を議所に擬して使用されているのであるが、ここには議所の形骸化していく状況が端的に認められよう。この頃になると議所に着する意味そのものが忘れられ、着座の作法もあいまいになっている。『江家次第』によれば、本来、議所で清書されていた大間書きも議所もしくは陣座でと記され、また雨の日は議所に着さず御前に参入したが、そうした慣習もわからなくなっている。⁽³²⁾こうして議所にかわって陣が浮上し、除目の議も陣座で行なわれるようになっていく。

なお参考のために忠平以降頼通までを限って、除目・叙位が天皇御前および議所（仗座を含む）以外で行なわれた事例を一覧表（表8）にしておこう。

表8 除目・叙位一覧

藤原忠平 (摂政)	藤原忠平 (摂政太政大臣)	藤原実頼 (関白太政大臣)	藤原実頼 (摂政太政大臣)
承平元（九三一） 承平二（九三二） 一一・一一	天慶元（九三八） 天慶二（九三九） 一二・一三 正・二六 正・二八 一二・二七 三・二二	康保四（九六七） 安和元（九六八） 一一・一二 一二・一六 正・二二 三・二六 閏五・二〇	天禄元（九七〇） 正・二一 正・二二 正・二八 二・一七
除目議、梅壺（凝華舎）で行なう。 除目、桂芳坊議。 桂芳坊で叙位。	除目議始、宿所で定め行なう。 除目議、桂芳坊で行なう。 叙位議、桂芳坊で行なう。 除目議始、桂芳坊で行なう。 除目議、桂芳坊で行なう。 除目議、桂芳坊で行なう。	除目、職曹司で行なう。 叙位議、職曹司で行なう。 除目議、職曹司で行なう。 除目議、職曹司で行なう。 除目・叙位、職曹司で行なう。 除目、職曹司で行なう。	叙位、職曹司で行なう。 女叙位、職曹司で行なう。 除目、職曹司で行なう。 除目、職曹司で行なう。 小除目、職曹司で行なう。 直物、職曹司で行なう。

藤原道長 (准摂政)	藤原道隆 (摂政)	藤原兼家 (摂政)	藤原兼通 (関白太政大臣)	藤原伊尹 (摂政太政大臣)	藤原伊尹 (摂政)
長和四(一〇一五) 一〇・二七 長和五(一〇一六) 正・一〇 正・一〇	正暦四(九九三) 正・一一	寛和二(九八六) 八・一一 永延元(九八七) 正・五 永延二(九八八) 九・二六 永祚元(九八九) 正・二七 一二・二六	貞元二(九七七) 一〇・一一	天禄三(九七二) 一二・一五 正・六 二・一九	天禄二(九七一) 八・五 一一・一五 一一・二六 一二・一五 正・二七 七・五
京官除目、左大臣直廬飛香舎で行なわれる。 叙位議、左大臣直廬で行なわれる。 除目始、左大臣直廬で行なわれる。	除目、摂政宿所で行なわれる。	除目、摂政直廬で行なわれる。 叙位議、摂政直廬淑景舎で行なわれる。 除目始、摂政直廬で行なわれる。 小除目、摂政宿所で行なわれる。 斎宮寮官除目、摂政宿所で行なわれる。 除目始、摂政直廬淑景舎で行なわれる。 直物、摂政直廬で行なわれる。	除目、桂芳坊で行なわれる。	除目・職曹司で行なう。 叙位議、職曹司で行なう。 直物・除目、職曹司で行なう。	除目、淑景舎で行なう。 叙位、淑景舎で行なう。 女叙位、摂政直廬で行なう。 除目、摂政直廬で行なう。 除目、淑景舎で行なう。 小除目、摂政職曹司で行なう。

藤原頼通 (摂政)	藤原道長(摂政)
寛仁二(一〇一八) 寛仁三(一〇一九) 八・九 八・一四 正・二一	長和五(一〇一六) 二・三 二・六 二・一五 一〇・一〇 一一・一四 一一・二五 正・五 正・二二
坊官除目、摂政直廬で行なわれる。 除目、摂政直廬で行なわれる。 除目始、摂政直廬で行なわれる。	坊官除目、摂政直廬で行なわれる。 叙位、摂政直廬で行なわれる。 除目、摂政直廬で行なわれる。 小除目、摂政直廬で行なわれる。 叙位議、摂政直廬で行なわれる。 除目始、摂政直廬で行なわれる。 叙位議、摂政直廬で行なわれる。 除目始、摂政直廬で行なわれる。

藤原兼通の事例を除き、内裏直廬(桂芳坊・淑景舎・飛香舎など主に後宮が当てられている)を使用する者は摂政に限られていたことが、これによっていっそう明らかとなる。ただしこの表で留意されるのは、藤原実頼や同伊尹のように除目を職曹司で行なっている場合が少なくないことである。

職曹司とは内裏の東にある殿舎で、天皇や中宮・皇后なども使用する建物であるが、これを用いた兩人、とくに実頼の場合、康保四年(九六七)六月二十二日に関白となったあと、同年十二月十三日に太政大臣に就任しており、太政大臣という立場からの使用であったことが考えられる。事実『日本紀略』によればその間の十月七日の除目について「於_ニ左大臣職曹司_ハ、被_レ行_ニ除目_ニ」とみえるのを除いて、以後はすべて「太政大臣於_ニ職曹司_ニ被_レ行_ニ」とある。もっともこの実頼は二年後の八月に摂政となっているが、内裏に直廬をもたなかったものか、引き続き職曹司を使用しており、『日本紀略』も「於_ニ太政大臣職曹司_ニ除目_ニ」と記している。摂政となりながら、太政大臣の時と同様職曹司を用いている理由についてはなお検討を要するが、もとより摂政が職曹司を使用する

のは一向差し支えないことであつた。そんなわけで太政大臣は職曹司を用いるものとされていたようで、伊尹の場合も、天禄二年（九七一）十一月二日に太政大臣に任じられてからは職曹司をもっぱら用いている。

以上のことから、実頼や伊尹が職曹司で除目を行なつたのは関白としてではなく、太政大臣（もしくは摂政）の立場においてであつたと判断される。一覧表からも明らかのように、忠平は摂政時代は、ほとんど直廬桂芳坊を用いていたのに比し、天慶四年（九四一）十一月八日、関白（太政大臣はもとの如し）となり摂政の立場を離れてからは、職曹司を使用することはあつても、⁽³³⁾内裏直廬で除目・叙位を行なうことはなかつた。これは摂政と関白の立場の違いを端的に示している。ちなみに除目・叙位を議所以外の場所で主催している点では、太政大臣も摂政と同様の権限を有しており、その事實は看過出来ないが、しかし職曹司は内裏外の殿舎であつて、摂政が桂芳坊・淑景舎など内裏内に与えられた直廬で行なう除目とは本質的に異なるものといわねばならない。その意味では摂政と太政大臣の地位は似て非なるものといえよう。さらに関白となると、内裏直廬はもとより、原則として職曹司に於ける除目・叙位にも関与していないことが留意される。⁽³⁴⁾摂政・関白・太政大臣それぞれの地位や権限については不明確な点が多く議論の存するところであるが、除目・叙位を行なつた場の違いを通して明らかになるところがあるのではなからうか。

三 仗議の成立

これまでの考察によって宜陽殿の西廂や議所の機能と役割がしだいに陣（仗）頭に吸収されていったこと、それにともない陣（仗）の機能が多様化し、政務運営に占める比重が大きくなったことが明らかになったと思う。そこで以下、あらためてそうした陣（仗）が政務運営に果たした役割を考えてみたい。

すでに述べたように、平安初期から登場する陣（仗）は、当初天皇不予の時の控え所として、あるいは天皇不

出御の際の宴席として用いられていた。これらは紫宸殿に近いという仗頭の場所的な関係によるものであるが、しかしそこが公卿以下の座とされたことから、時に政務審議の場にも利用された。外記政や郡司擬文読奏などが行なわれたのがそれであるが、あくまでも臨時的・一時的な利用であつたことはいうまでもない。

ところがその陣（仗）頭が、政務に関しても積極的に用いられるようになる時期がある。光孝天皇の時で、これには同天皇の政治姿勢といったものが無関係ではなさそうである。周知のようにこの天皇は、陽成天皇が廃されたあとを承けて元慶八年（八八四）二月、藤原基経に擁立されたという経緯や、臨終に際して基経と宇多の手を両の手に取りながら後事を托したといったエピソード（『愚管抄』巻三）などから、主体性を欠く存在であつたとみるのが普通であるが、子細に検討していくと、そうした評価とはいささか異なつたイメージが浮んでくる。以前の天皇に比して政務への取り組みに積極的なものが感取されるからである。たとえば即位二カ月後の四月二十三日、自ら紫宸殿に出御して諸国銓擬郡司擬文の読奏を聴いているが、これについて『三代実録』は次のように記している。

天皇御_ニ紫宸殿_ニ、式部省奏_ニ諸国銓擬郡司擬文_ニ、式部卿本康親王、太政大臣、左右大臣、及諸公卿侍、参議正四位下行左大弁兼播磨守藤原朝臣山陰奉_レ勅読奏、此_レ儀_ニ終_レ久_レ停_レ絶_{、是日、尋_ニ檢_ニ旧儀_ニ而行_レ之_、}

長い間廃絶していた郡司読奏を、旧儀を尋ねてこの日行なつたというものである。二カ月後の六月十日には御体御卜の読奏も復興しているが、そこでも自ら紫宸殿に出御し、左大臣源融に奉行させている。『三代実録』はこれについても「承和以後、是儀停絶、是日尋_ニ旧式_ニ行_レ之_」つたとする。承和とは仁明朝を意味し、貞観十三年（八七二）二月十四日、清和天皇が「御_ニ紫宸殿_ニ視_ニ政事_ニ」ることを復興した時（ただしこれは一時期的のもので終つた）にも以前引用したように、承和以往（前）、この儀は絶えていたとあり、面議など天皇出御による行事が事実上承和で終つたとする認識があつたことを示している。それを光孝はあらためて復興したもので、『三代

実録』にも光孝が紫宸殿に出御して事を視たという関係記事が頻出する。もっとも郡司読奏や視政事といっても儀礼的な要素が強いとみられ、旧儀の復興をもったただちに天皇親政の再現というふうに理解することは出来ないが、以前の天皇にはみられない、成人天皇としての政治姿勢がうかがわれる。その意味で光孝天皇については、従来とは別個の見方がなされてしかるべきであろう。

留意されるのは、光孝のこのような旧儀の復興気運のなかで、陣（仗）座での公卿議定、いわゆる陣定が盛んに行なわれるようになってきていることである。これまで陣頭は、天皇の紫宸殿不出御の際、便宜的、消極的に使用されるにすぎなかったが、それが光孝の時には、むしろ紫宸殿出御の頻度が高まるのに対応して陣（仗）頭の使用も盛んとなっており、明らかに陣座の機能に変化が生じている。論奏審議がしきりに左仗で行なわれるようになるのもそれで、仁和元年（八八五）三月、「公卿於_二左仗頭_一、定_下修_二仁王会_一行事之人と、翌二年六月、相撲司任官の人撰について「左右大臣已下於_二左仗下_一、先議定」、同年十二月には「左大臣及参議正四位下源朝臣直於_二左仗下_一、定_二荷前使并元日大極殿侍從_一」（以上『三代実録』）というごとくである。むしろこれ以前でも陣（藏人所）で文徳天皇の葬儀や陽成院の退位が議され、諸国郡司擬文読奏が仗頭で行なわれたことはあったが、光孝朝における頻度には及ばない。その意味で、陣（仗）頭が公卿審議の場として定着し常態化するのには光孝朝以後のこととみてよいであろう。

このことに関連してわたくしは、光孝天皇の時、基経が「年中行事障子」を献進したことに注目したい。

周知のようにこの障子は、清涼殿の東廂の南、殿上の間の上戸の前に立てられていたが、そもそものは基経が仁和元年（八八五）五月に献じたもので、元旦から大晦日に至る年中行事が書き上げられていた。この障子を検討された村井康彦氏は、そこに記されている年中行事の内容が、(1)本来の朝儀政事に関するもの、(2)神事法会に関するもの、(3)民俗行事に関するもの、に大別されること、時代が降るほど(1)の政事が形式化する一方、(2)(3)の遊

樂的なものの比重が大きくなっていったことなどを、宮廷政治の年中行事化のなかで理解されているが、基経⁽³⁷⁾に

よる障子献進もこの時期における宮廷政治のあり方と無関係であったとは思えない。光孝の旧儀復興に基経がどの程度のかかわりをもったのか、なお検討を要するが、障子の献進は、光孝の旧儀復興に添う形をとりながら、天皇を儀式行事の主催者に仕立てることで、現実的な政治から遊離させ、天皇権をコントロールするということもくろみがあったのではなからうか。かりにそれが深読みであったとしても、年中行事障子の作成・献進が、宮廷政治の基準・規範づくりの役割を果たしたことは間違いない。ともあれ、光孝による旧儀復興により紫宸殿は儀式の場としての性格を強め、そういうなかで紫宸殿が本来有した政務審議の場は陣(仗)頭に移行した。わたくしは王朝貴族政治の要件が、ここにおいて備わったと見る。

こうして陣(仗)が恒常的な審議の場となったことで生じた変化のなかでもっとも注目されるのが、定の中心である除目・叙位がこの仗座で行なわれるようになったことである。管見によれば寛平三年(八九一)九月四日、伊勢神宮幣使の叙位(『西宮記』五)、翌四年三月十四日には皇太后班子の六十賀にちなむ男女九人の叙位のことについて左近衛陣で行なわれている(『伏見宮御記録』)のが早い事例であり、その後同九年八月十四日、「於陣頭有_二女官除目_一」(『西宮記』卷二)、天慶五年(九四二)四月十三日、伊勢神宮の禰宜三人に叙位、同四月二十三日には受領の加階叙位といった事例を見ることができ⁽³⁸⁾る。

ただしこれらは除目・叙位といっても女官の除目や伊勢神宮の幣使・同禰宜の叙位といった特殊な場合で、一般人一般についての除目、いわゆる京官除目や県召除目ではない。後者の意味での除目・叙位の審議が仗頭で行なわれた事例は、意外と遅く、十世紀後半以降に降らないと所見しない。管見によれば、『西宮記』に収める貞元二年(九七七)七月の臨時除目が早い例である。すなわち同月二十五日、

中納言為光卿、参議惟正朝臣、着_二左近陣座_一、有_二除目_一、春宮大夫藤原朝光、及文式官并七人也。

とある。もっともこれは前年五月に内裏が焼亡し、新造内裏に戻るのが右の四日後の二十九日のことなので、この除目の場は里内裏であったとみられなくもない。もしそうであれば、寛和二年（九八六）⁽³⁹⁾正月の場合が、本来の内裏の仗座における除目の初見となろう。

このように見てくると、除目・叙位についても、(イ)特殊なものから一般的なものへ、(ロ)議所から陣座へ、と審議の様態がかわった様子が知られると思う。言いかえれば、これは仗頭が議所の機能を吸収し、その分陣座の機能が多様化したことを示している。先にふれた宜陽殿西廂との機能分化も、こうした仗頭の役割の明確化を促したといえよう。

その意味でわたくしは、除目・叙位の審議が議所から陣（仗）に持ち込まれた時が仗議（陣議）が名実ともに確立した時期と考えたい。その時期はほぼ十世紀半ば、摂関制がこれから本格的に展開しようとする時期のことであった。

むすび

平安初期、「大臣以下参議以上」という、いわゆる公卿層が出現し、公卿を主体とする合議制が機能するようになったのにもない、当然問題となってくるのが、公卿たちによる政務審議の場である。むろん天皇の出御による御前会議Ⅱ面議には、紫宸殿や天皇在所が用いられ、それが建前とされたが、天皇の不予時、これにかわるものとして設けられたのが宜陽殿の南廂の議所であり、これにともない公卿の控え所として用意されたのが同じく宜陽殿の西廂で、紫宸殿かたわらの陣（仗）とともに用いられるようになる。

本稿は、そのような理由から出現した宜陽殿の議所と公卿座（宜陽殿西廂・陣座）の機能やその変遷を論じたものである。このうち陣座については、これまでとても言及されなかったわけではないが、宜陽殿に設けられた議

所や西廂の公卿本座の存在とその役割についての認識は、平安政治史研究のなかではほとんどなかったように思う。しかし宜陽殿南廂（議所）が「除目の議所」と称された理由や、陣座（ことに左仗）がその除目を含めて政務（政や定）審議の場となる過程の解明なしには、貴族政治の構造を知ることが出来ないし、そのためには、それぞれの「場」の有した機能とその相互関係を明らかにすることが不可欠の作業であろう。その考察を通して、内裏に設けられた摂政直廬のもつ政治的な意味が明らかになったことも、わたくしにとっては新しい知見であった。本稿はそうした意味で、貴族政治―公卿合議制の成立課程を論じた前稿の主旨を場に即して考察したものであり、それを補完する目的をもっている。

しかしこうした時期でも、国政審議の陣（仗）頭における公卿僉議は略式の会議とする觀念があり、建前はあくまでも御前もしくは議所（除目の場合）での会議とされていたことにも留意しておく必要がある。寛治六年（一〇九二）八月、伊勢内宮正殿が傾いたことに関して開かれた陣定について、『中右記』の著者藤原宗忠は、「彼時小野宮右大臣被_レ申云、公卿定於_二御前_一可_レ被_レ行也、国家大事於_レ陣被_二定申_一事、不_レ被_二甘心_一者」（寛治六年八月十七日条）としているがごとき、それである。しかしこれは政治が有職故実の世界に埋没しはじめた時期の建前でしかなかった。

- (1) 本書第Ⅱ部一章「参議論の再検討―貴族合議制の成立過程―」。
- (2) 例えば吉村茂樹「平安時代の政治」（『岩波講座日本歴史』昭和八年）、藤木邦彦「陣定について」（『歴史と文化』V、昭和三十六年）、早川庄八「八世紀の任官関係文書と任官儀について」（『史学雑誌』九〇―六、昭和五十六年）など。
- (3) 古瀬奈津子「宮の構造と政務運営法―内裏・朝堂院分離に関する一考察―」（『史学雑誌』九七―三、昭和五十九年）。
- (4) 当初、奈良国立文化財研究所から発表されていた第一次内裏Ⅱ朝堂院、第二次内裏Ⅱ朝堂院という構想が改められ、内裏は最初から朝堂院の東側に設けられており、その南に、のちに第二次朝堂院が付加されたとする理解が出されている。

- (5) 大極殿は天武天皇時代に出現するから、むしろその利用はこれ以後のことである。
- (6) 森田悌「律令奏請制度の展開」(『史学雑誌』九四一九、昭和六〇年)。
- (7) 藤木邦彦、註(2)前掲論文。
- (8) もっとも、最近美川圭氏は藤木説を批判し、「公卿議定制から見る院政の成立」(『史林』六九一四、昭和六一年)の中で陣定の始まりを九世紀後半、つまり氏が陣定の初見とされる『大鏡』の記事にある元慶八年(八八四)をそれほど遡らない時期に求めるのが妥当とされている。
- (9) 武光誠「摂関期の太政官政治の特質―陣申文を中心に―」(『ヒストリア』一〇六、昭和六〇年)。
- (10) 村井康彦氏が「蜻蛉日記の歴史的背景」(『一冊の講座蜻蛉日記』日本の古典文学1、昭和五六年)の中でふれている。ぐらいのものである。
- (11) 『西宮記』巻十九ではこの宜陽殿西廂座とやらんで清涼殿御前座・清涼殿侍所座を「公卿本座」と称している。
- (12) この年は、あと本文でも述べるように、近衛陣の公卿座が宜陽殿西廂に移された翌年のことであり、当然旬儀の行事は西廂で行なうべきであったが、仲平は左大臣として着座していなかったため、従来通り近衛陣を用いたことを示す。したがって左近衛陣本座とは左近衛陣にあったもとの座というほどの意で、公卿本座と同格の用語ではない。
- (13) 例えば『御堂関白記』長和二年六月二十七日条、『小右記』同年同月二十八日条によれば、頼通(任権大納言)と教通(任権中納言)の着座の日の撰定に当り、父親の道長が何かと神経を使っている。
- (14) 『続日本後紀』その後仁明天皇が再び不予に陥った承和十二年十月十四日・承和十五年二月十六日(『続日本後紀』、文徳天皇危篤時の天安二年八月二十二日(『文徳実録』)も大臣以下官人たちが陣頭に候している。
- (15) 『続日本後紀』天安二年十月二日条には「公卿不_レ就_二太政官曹司_一、承前例、於_二仗頭_一賜_二次侍從已上_一飲_二、是日隨_二停止_一、以_二諒闇_一也」とあり、この日文徳天皇の崩御により賜宴が停止されたというのであるが、当時仗頭での宴飲が一般的であったことが知られる。
- (16) 清和天皇は仁寿殿への遷御(『三代実録』貞観七年十一月四日条)に先立ち元慶七年八月二十一日、東宮から太政官曹司庁に遷っているが、その理由を『三代実録』には「為_二来十一月將_一遷_二御内裏_一也、当_二此之時_一、陰陽寮言、天皇御本命庚午、是年御絶命在_二乾_一、從_二東宮_一指_二内裏_一直_二乾_一、故避_二之_一焉」と記しており、東宮が内裏外(内裏南東)であったとみて間違いない。なお山下克明「平安時代初期における『東宮』とその所在地について」(『古代文化』三三一二、昭和五

六年）参照のこと。

(17) 例えば『三代実録』貞観八年正月一日・同九年四月一日・同十三年九月九日条など。

(18) 『日本紀略』承平六年十一月五日条によれば、この日天皇は飛香舎から常寧殿に移り、以後ここを在所としている。

(19) 例えば『本朝世紀』天慶元年十月八日・同十二日条など。この時期、同書には宜陽殿西廂に着座して政務を行なう記事が数多く所見する。

(20) 藤木氏は註(2)前掲論文で、左近衛陣の場所を「日華門内、すなわち紫宸殿の東南にある宜陽殿の西廂にあったが、のち紫宸殿と宜陽殿をつなぐ紫宸殿の東北廊南面に移り(ただその移った年時については、大内裏図考証第十四所収有職抄も『年月未明、俟後考』といっているが、やはりまだ明らかにし難い)云々」と記されている。氏の根拠は明らかでないが、天曆二年のこの時の移動事実を混同されているのではなからうか。

(21) 『西宮記』卷一・三・六・七など。なお宜陽殿の東廂は九世紀から『日本紀』講読の場に当てられ、日本紀講所と称されていた。

(22) ちなみに『三代実録』貞観十三年二月二十九日条によれば、この日、二十二人の任官が決まっている。

(23) 嘉祥四年(仁寿元年)二月二日については、この日地震があり(『文徳実録』)、除目の停止はそれが理由であったと思われる。

(24) ちなみに前者の延長三年正月の場合、翌二十七日には御前で除目議定がなされているし(『貞信公記』)、また後者の天慶八年三月の場合も二十六日、同様に御前行なわれており(『日本紀略』)、議所が非面議の際に用いられたことを知る。

(25) 『小右記』天元五年正月三十日条など。

(26) 『西宮記』『北山抄』などを参照。

(27) 例えば『貞信公記』延喜十三年正月二十五日条(『西宮記』卷一所収)や『左経記』長元四年二月七日条など。

(28) 『百鍊抄』長和四年十月二十七日条にも同類の記事あり、参照。

(29) 『西宮記』卷一。なおこれについては三節「仗議の成立」参照。

(30) 里内裏については本書付録「皇居年表」及び「皇居年表解題」で述べた。

(31) 例えば『小右記』寛仁四年八月二十八日・長元四年二月十五日条など。

(32) 例えば『中右記』長承二年正月二十日条など。

(33) 例えば『本朝世紀』天慶四年十二月十七日・同五年三月二十五日条など。もっともこれは、いずれも太政大臣の立場において職曹司を使用したものである。

(34) 藤原頼忠・藤原道隆の場合。

(35) 『三代実録』天安二年八月二十七日条。

(36) 『大鏡』卷二。

(37) 村井康彦「宮廷と寺院」(『日本芸能史』2、昭和五七年)

(38) いずれも『本朝世紀』による。なおそれらが「宜陽殿西廂座」で行なわれているのは、そこに公卿座が移動されていたからである。また安和元年九月二十六日には大嘗会御禊装束使次第司除目も「仗座」で行なわれている。

(39) 『本朝世紀』寛和二年正月二十六日・二十七日・二十八日・二十九日条。

四章 薬子の変と上皇別宮の出現

——後院の系譜（その一）——

はじめに

後院とは、上皇御所として天皇の在位中もしくは譲位後に点定された内裏外の建物をいうが、時には皇后や皇太后などの居所にも使用された。一般には嵯峨天皇が京中に営んだ冷然（泉）院・朱雀院が最初の後院といわれている。またこれとは別に、嵯峨天皇の嵯峨院をはじめ淳和天皇の淳和院、宇多天皇の亭子院・河原院、円融天皇の円融院など数多くの建物が後院として点定された。このうち冷泉院と朱雀院は皇室世襲の財産として多くの上皇が使用したことから、のちに「累代の後院」と呼ばれたことは知られる通りであるが、これに対して天皇の個人的な後院、たとえば右の嵯峨院や淳和院のごときをわたくしは「一代の後院」と呼ぶことにしている。「累代の後院」と「一代の後院」の問題については稿を改めて論じたい。

ところで嵯峨天皇といえば、弘仁元年（八一〇）に起こった、いわゆる薬子の変を機に蔵人所（頭）を設置するなど、政治改革にのり出したことが想起されるが、即位直後に起こったこの変は、嵯峨にとってその後の施政方針を決定した歴史的事件であったといつてよい。その意味では嵯峨による後院の創始という点からも充分留意する必要があるであろう。というのも、薬子の変は一面では、上皇である平城の御所を平安京外に設けたところ

に起因した事件といってよく、上皇御所の扱い、ひいては上皇の存在そのものがもっともシリアスに問われた事件であったといえるからである。

このことは、後院論が結局は讓位の問題に帰着することを暗示する。すなわち上皇御所としての後院は、讓位が一般化する中で整備され制度化されたものにほかならず、讓位との関連において理解する必要がある。その点でおのずから後院論は、平安初期といわず奈良時代にまでさかのぼって展開される必要がある。

以上の理由からわたくしは、本稿では、讓位の問題を薬子の変にかかわる平城上皇時代と、それに先立つ孝謙上皇時代を中心に考えることで、後院の出現する過程及び後院のもつ歴史的な意味を明らかにしてみたい。それはまた天皇と上皇という二重構造の上に展開された日本の君主制についての一試論にならうかと思う。

一 上皇の位置

わが国における讓位の慣習は、文武元年（六九七）、持統女帝が孫の珂瑠皇子（文武天皇）に位を譲り、太上天皇と称されたことに始まる。その後元明・元正・聖武・孝謙および平城上皇と、奈良・平安時代を通じて常態とさえなったが、この持統天皇を最初とする太上天皇の称号は、『養老律令』（儀制令）に「太上天皇讓位帝所⁽¹⁾称」と記されているように、讓位の天皇に対する尊称であった。「太上」とは「無上」「至上」の意で（當時は「だいじゃう」とも「だじゃう」とも訓まれたよう⁽²⁾だ）、太上天皇もしくは単に上皇とも略称され、中国の太上天皇あるいは太上皇帝の称号に由来する。もっとも中国では太上皇帝と太上皇との称号を、国政を統治し得たか否かによって使い分けた先例もあるが、わが国の場合、そうした意味の区別はなされなかったようである。また中国で、秦の始皇帝が父⁽³⁾莊襄王を太上皇と称したのは、没後に追尊したものであり、ついで漢の高祖が太上天皇と尊称したその父太公は、帝位に即いたことはなかった。つまり中国での太上皇（太上天皇）は讓位の帝を意味するのではなく、皇帝の父に⁽⁴⁾

対する尊号として使用されたものであったことを特徴とする。そして中国では讓位が制度化されることはなかったのである。

これに対してわが国の讓位の制度は、女帝の存在とともに、王権の日本的特質をなすものであったといえる。このうち女帝は、奈良時代、七～八世紀中頃に集中して出現し、七代のうち四代までが女帝であった。もっとも、ひとしく女帝といっても、これ以前の女帝、推古・皇極（斉明）・持統がいずれも先帝の皇后であったのに対して、奈良時代では元明が文武の母（草壁皇子の妃）、元正は文武の姉、孝謙（称徳）は聖武皇女であったという違いはあるが、女帝の即位が皇位の中継ぎ的な役割と意味をもったことは否定できない。たとえば靈龜元年（七一五）、元明天皇が讓位に際して娘の元正に、最後には文武から受け継いだ皇位を間違いなく首皇子（聖武天皇）に授けるように、と教え命じていること⁽⁵⁾にもうかがわれよう。元明・元正の二女帝は、自分たちは聖武の即位までの間の中つなぎの天皇であると述べ、自らの役割を自覚している。女帝の果した中継ぎ的役割をもっとも典型的に示した事例といえよう。その点で天皇在位中に、先を見通した上で確実に後継者に王権を授受するという讓位の制は、女帝を立てることと類似する意味をもつ皇位継承上の方便であり、女帝の存在と讓位の制は深いかかわりがあったといえる。それはともかく奈良時代では、天平勝宝元年（七四九）、孝謙に讓位した聖武が男帝での最初であった。もっともそれ以前、文武も母元明に讓位の意味をもっていたが、実現しないままに没している。

さて、讓位により天皇と上皇とが並存する、こうした政治形態は、王権の二重構造ともいうべきもので、これがわが国の天皇制を長く存続させた根本理由であるが、太上天皇（上皇）の地位および身分については『養老律令』（儀制令・公式令）に天皇と太皇太后・皇后・皇太子との間に位置するものとされ、またその言辞は天皇と同様に詔あるいは勅として下達されることが規定されている。ちなみに上皇の詔については、これを有り得べき事

実ではないとする意見もあるが、たとえば『続日本紀』には元明・元正など太上天皇の詔がいくつも収められており、上皇の詔は決して異例ではなかった。なかでも孝謙上皇の詔勅の多いことが留意され、また即座の言葉が「口勅」⁽⁷⁾として下されることもあった。そのほか『令集解』⁽⁸⁾に所収する諸説や実例によって、上皇が他所に赴く場合も天皇と同様に「行幸」あるいは単に「幸」、乗物は「車駕」あるいは「乗輿」と称したこと、などが知られる。

このように上皇は、天皇に准すべき待遇を受けたものの、法制上は天皇の次位に規定された存在であった。しかし実際には、天皇の父（あるいは母・兄・姉）であること、つまり家父長ともいえるべき立場から政治面上皇の意志が反映され、時には天皇より優位に立つ場合も少なくはなかったのである。上皇ではないが、光明皇太后や孝謙上皇の場合がその好例であろう。

『続日本紀』によると、孝謙天皇の天平宝字元年（七五七）七月四日、いわゆる橘奈良麻呂の変に際して謀反が事前に発覚し、小野東人らを究問したところ、次のように白状したという。

（前略）將以_二七月二日闇夜_一、發_レ兵_二内相（仲麻呂）宅_一、殺_レ劫即_二大_レ殿（皇太子宮）_一、退_二皇太子（大炊王）_一、次傾_二皇太后宮（光明子）_一而取_二鈴璽_一（同年七月十二日の孝謙の詔の中では「皇太后朝乎傾鈴印契乎取而」とある）即召_二右大臣（藤原豊成）_一將使_二号令_一、然後廢_レ帝、簡_二四王中_一、立_二以為_レ君（後略）

その計画はまず仲麻呂を殺害し、ついで皇太子大炊王を退けたあと皇太后宮を攻撃して鈴璽（鈴印）を取り天皇を廢する、という手順であったらしい。皇太后光明子（を中心とする組織）を「皇太后朝」と称していること、しかもその皇太后宮には皇権のシンボルである鈴璽が置かれていたことが留意される。これについては孝謙も、のちに自身の在位時代を「皇太后朝（オホミオヤノミカド）」⁽¹⁰⁾と称している。孝謙天皇の時代は母である光明皇太后が、紫微中台という強大な官庁を設置して実質上の権限を握った藤原仲麻呂と連繫していた時代であった

から、そういう光明皇太後の政治が意識的に皇太後の「ミカド(朝)」と称されていたことには十分意味がある。

次の淳仁天皇時代、孝謙上皇を太上天皇といわず、「高野天皇」と称していたのも同様であろう。『続日本紀』によれば、天平宝字四年(七六〇)正月四日、「高野天皇(孝謙)及び帝(淳仁)」が内安殿に御して太保從二位惠美押勝に従一位を授け、さらに高野天皇は口勅で押勝を太保に任命したとある。時の天皇淳仁を「帝」と呼んでいるのはともかく、孝謙上皇を「天皇」と呼んでいるのは、光明皇太后没後は孝謙が実権を有したことの証左であろう。なお「高野天皇」という呼称であるが、「高野姫尊」と諡され、大和国にある陵墓も「高野山陵」と称されていることや『続日本紀』でも称徳天皇の巻を「高野天皇紀」と記しているから、⁽¹¹⁾「高野」の名称が通用していたのであろう。それにつけても『続日本紀』の編者は、法制上の立場はともかく、実権を握りそれを行使した者について、的確な表現をしているといわねばならない。そして大事なことは、光明子の場合であれ孝謙の場合であれ、上皇や皇太後の政治介入は、当然のことといわないまでも決して異例ではなく、むしろその権力を行使しうる時代であり、世間もそう認識していたという事実である。考えてみれば、⁽¹²⁾持統が孫の文武に譲位した時、文武は十五歳であった。そこで持統は譲位後もこれを後見した。のち元明天皇が即位した折の詔に、この時のことについて「並坐而、此天下平治賜比諧賜岐」と述べており、「共治」したと回想している。上皇は本来政治に関与すべきものとして出現したものであったのである。それだからこそ、譲位の制が確立していない段階では、上皇の「朝」は政治的な波紋を誘発する可能性を含んでいた。平安初期の「二所朝廷」が薬子の変を引き起こした理由である。

二 いわゆる「二所朝廷」について

いわゆる「二所朝廷」とは、弘仁元年（八一〇）九月四日、嵯峨天皇が詔を下し、薬子について次のように酷評した中に所見する言葉である。

（前略）尚侍正三位藤原朝臣薬子者、（中略）今太上皇乃譲_レ国給_レ閑流大慈深志乎不_レ知之_レ氏、己我威権乎擅_レ為止之_レ氏、非_二御言_一事乎御言止云都々、褒貶許止任_二心_一氏、曾无_二所_一恐憚_一、如_レ此惡事種種在_二止_一、太上天皇爾親仕奉爾依氏思忍都々御坐、然猶不_二飽足_一止之_レ氏、二所朝廷_{（二）}乎母言_{（一）}隔氏遂爾被大乱可_レ起、（後略）（『日本後紀』）

この「二所朝廷（廷）」については、平城上皇の寵を得た尚侍藤原薬子とその兄仲成とともに政治に介入したことから嵯峨天皇と上皇との対立が生じ、その結果政令二途に出るといふ変則的事態が現出した、とみるのが通説である。⁽¹³⁾つまり天皇と上皇の対立を、同じ次元での権力抗争と理解するわけで、したがって「二所朝廷」については、両者の対立をどの時点に求めるかという時期の問題として論じられたのも自然の成行きであった。しかし両者の対立を、そのようなものとして理解してよいものか、問題があるように思う。ここでは平城と嵯峨の動向を具体的にあとづけることで、いわゆる「二所朝廷」が現出する過程とその実態を明らかにしてみたい。

まず別掲の関係年表で留意されるのは、平城が譲位して以後も政治に関与していたと考えられる場合が少なくなかったことである。たとえば嵯峨が即位した年の大同四年（八〇九）五月二十九日、大嘗会を停止する勅が下されている。しかし『続日本紀』によると、一ヶ月前の四月二十六日、参河国が悠紀国に、美作国が主基国に卜定されており、すでに準備が進められていた中での停止であったことが知られる。⁽¹⁴⁾藤原清輔の『袋草子』に、「十一月停_二大嘗会_一、造_二平城宮_一、依_二太上天皇命_一也」と記されるのは問題があるとしても、この停止の勅の発令に平城上皇が関係していたことは当然考えられよう。また同年十一月頃から始まる平城宮地の占定および造宮使の任

命はもとより、その功績による叙位・加階、あるいはこの年から翌五年にかけての上皇の親王・内親王たちへの賜田・賜稻など、いずれも平城上皇の意に出る措置であったと考えられる。とくに讓位直後の四月十三日、北陸道觀察使に任じられた仲成の、同年後半から翌五年にかけての数々の昇進は上皇のバックアップ以外の何ものでもなく、国家行事、ことに人事に関して深く介入していたことが推測されよう。ほとんどの場合、平城上皇の意志が伝えられており、それだけに嵯峨天皇の政治的配慮が推察される。しかし前述したように、嵯峨と平城のこうした関係は、奈良時代以来の上皇と天皇の在り方からすればむしろ当然であった。それに反して嵯峨が始めて上皇と対立する姿勢を示したのが藏人所（頭）の設置である。

嵯峨天皇は即位の翌大同五年三月十日、巨勢野足と藤原冬嗣を藏人頭に、清原夏野と朝野鹿取を藏人に任命した。藏人所の始まりである。この創始については、天皇側の機密が外部に漏れるのを防ぐことを意図したものの、というのが定説となっている。もっとも藏人所については、奈良時代以後、とくに内侍司が重視され、内侍宣が政治面でも重大な比重を占めるという傾向の中で、大同二年（八〇七）⁽¹⁶⁾、内侍司の禄が大幅に引き上げられたこと、平城讓位の直前、薬子ただ一人が従三位を授けられるという異例の拔擢をうけたこと、また天皇側近という職掌だけでなくその長官である頭も尚侍と同じく二員制であったこと、など一連の事実経過から考えると、単に機密保持というだけでなく、内侍司の政治的権限や機能に匹敵するもの、すなわち平城・薬子の連繋に対応する措置であったとみるべきであろう。しかも任命された藏人頭は冬嗣・野足という嵯峨の腹臣であった。その意味で嵯峨が天皇として始めて意思表示をしたものであり、しかも上皇との関係を断ち切る最初の政策であったといえよう。といって決して表だって上皇と対立したわけではない。翌四月にはほぼ平城宮の造成が終わったのであろうか、従事者の労をねぎらったの叙位を行なっている。しかしこの藏人所の設置は平城側を刺激した。六月二十八日、平城は次のような詔を下し、觀察使を廃して参議を復活することを命じている。

（太上天皇）詔曰、去大同元年為_レ行_二十六條_一、置_二「並」觀察使_一、各委_二一道_一云々。夫參議之寄、望重守大、
 婦任_二責成_一、職非_二虛設_一、是以廢置之、云々、宜_下罷_二觀察使_一復_中參議号_上、封邑之制、亦仍_二旧數_一、

（『日本紀略』）

參議は重大な職掌で、決して「虚設」ではないというのが復活の理由であるが、「是以廢置之」との言葉には、平城独自の論理があった。それは、觀察使は參議の号の替わりに設けたものであるから、その參議の職が必要となつたいま、觀察使の職にある者をそのまま參議に任命すればよい。つまり觀察使から參議への復活は官職名が旧に戻るだけで、人員構成は現在と何ら違いがない、というものである。しかしこの論理だと、かつて參議ではなかつた者でも、その時点で觀察使であれば參議になり得るわけで、一種のトリックといわねばならない。事実、仲成はこの措置によって新たに參議になっている。つまり平城は、この措置を通じて腹臣を廟堂に送り込むことを試みたわけである。

參議の復活が、藏人所を設置した嵯峨に對抗するものであることは明らかであつた。しかし上皇の挑発的行為にもかかわらず、天皇は九月一日、平城宮の經營維持費として大和国の地子稻を永く割きおくよう勅を下しており、依然として嵯峨は、平城上皇に同調する形で事態にのぞんでいる。とはいへ嵯峨の隱忍自重もこの時までであつた。それから五日後、「依_二太上天皇命_一、擬_レ遷_二都於平城_一」⁽¹⁸⁾との事態が生じ、さすがの嵯峨もこれに対してただちに坂上田村麻呂・藤原冬嗣らを平城に派遣した。表向きは造宮使としてであつたが、彼らが天皇の命を受け上皇方を掣肘するための使者であつたことはいふまでもない。その後事態は一挙に進展し、いわゆる薬子の変の結末となる。

さてこのように見てくると、平城讓位から薬子の変にいたるまでに上皇と天皇との関係には二つの段階があつたことがわかる。第一が藏人所の設置と參議の復活であり、第二が平城還都の発令である。しかもいずれの段階

大同4(809)年

- | | | |
|------|--------------------------------------|---|
| 4 月 | 1 平城天皇譲位 | |
| | 2 譲位の旨を伝えて東宮に避御 | |
| | 13 嵯峨天皇即位(類)。仲成、北陸道観察使に任(公) | |
| | 14 高岳親王立太子(紀) | |
| | 20 観察使に外官を兼任させる(紀) | <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 0 5px;"> カッコ内は出典。記載がないのは『日本後紀』による。
 類…類聚国史
 紀…日本紀略
 公…公卿補任 </div> |
| 5 月 | 29 大嘗会停止の勅が下される(類) | |
| | この月、仲成、右兵衛督に任(公) | |
| 6 月 | この月、仲成、大蔵卿を兼任(公) | |
| 7 月 | 1 上皇の病氣癒ず、小安殿で薬師法を行なう(類) | |
| | 10 上皇、右兵衛府に遷御(類) * | |
| 8 月 | この月、仲成、伊予守に任(公) | |
| 10 月 | 5 上皇、東院に遷御(類) | |
| 11 月 | 5 摂津豊嶋・為奈野、平城旧都などに太上天皇宮地を占定(類) | |
| | 12 仲成等に平城宮を造営させる(類) | |
| 12 月 | 4 上皇、平城宮に移御するも未完成により故大中臣清麻呂家に御す(類・紀) | |
| | 20 摂津・伊賀国などの米稻を造平城宮料にあてる(紀) | |
| | 27 造平城宮のため、畿内諸国の雇工夫を徴発す(紀) | |
| この年 | 平城皇女上毛野・叡努・石上内親王らに賜田す | |

弘仁元(810)年

- | | |
|-----|--|
| 1 月 | 29 造平城宮使藤原真夏に賜稻(類) |
| 2 月 | 29 平城皇子巨勢親王に賜稻(類) |
| 3 月 | 10 蔵人所(頭)の設置 |
| 4 月 | 19 石上・大原・叡努内親王らに賜稻(類)。平城宮造営の功労者に叙位(類) |
| | 30 平城宮供奉の者に叙位(類) |
| 6 月 | 28 上皇の詔により参議復活(紀) ** |
| 7 月 | 戊午 仲成、近江守に任(公) |
| 8 月 | 29 仲成、伊勢守に任(公) |
| 9 月 | 1 勅を下し、大和国田租地子稻を永く平城宮雑用料にあてる |
| | 6 上皇、平城還都の命を下し、天皇、坂上田村麻呂・藤原冬嗣らを造宮使として派遣す |
| | 10 天皇、固関の詔を下し仲成を逮捕 |
| | 11 仲成射殺さる。上皇・薬子東国に向けて出発 |
| | 12 天皇方の兵に遮ぎられ薬子自殺、上皇平城宮に連れ戻されて出家 |

* 朝日版『日本後紀逸文』では左兵衛府とするが、これについては註(26)参照。
** 『公卿補任』は参議任命をすべて6月10日としているが、誤りか。

でも上皇は天皇よりも優位にあった。「二所朝廷」ともいうべき天皇と上皇との激突は、上皇が還都令を下した九月六日以後、わずか一週間ほどのこととみるべきである。そしてそれは、上皇権と天皇権の対立の必然的な帰結であった。

ここであらためて嵯峨の下した詔を考えてみると、「二所朝廷」と言った天皇の真意は、平城上皇の「非御言一事乎御言止云都々、褒貶許止任心氏、曾无所恐憚」¹⁹ かった薬子が「二所朝廷乎母言」い、天皇と上皇の間を「隔氏」た（隙間を作った）までのこと、と表明するところにあり、あくまでも上皇に対する嵯峨の配慮から下された詔と理解すべきである。さらに付言するならば、『日本後紀』に、平城還都が太上天皇の詔（正式な決定）でなく「命」（私的な呼びかけ）と記さしめたところにも、天皇としての上皇に対するいたましいまでの心遣いを読み取ることが出来る。

三 孝謙天皇と法華寺宮⁽¹⁹⁾

『続日本紀』には孝謙上皇（称徳天皇）の下した詔勅が多数記されている。天平宝字五年（七六二）十月、上皇は平城宮改作のため保良宮に移御したが、その折、病気に侍したことが機縁となって道鏡を寵愛したことから、その弁明を余儀なくされ、詔勅をたびたび下したものである。これは称徳時代の特徴であり、逆に詔勅のもつ意味といったものを理解する一助ともなっている。なかでも翌天平宝字六年六月三日、五位以上の官人を朝堂に召集して下した詔は、淳仁天皇を激しく非難した内容で、とくに留意されるところである。論の展開上、全文を掲げておこう。

喚集五位已上於朝堂、詔曰、太上天皇御命以、卿等諸語都止宣久、朕御祖大皇后乃御命以、朕爾告之久、岡宮御宇天皇乃日継波、加久弓絶奈牟止為、女子能継爾波在止母、欲令嗣止宣、此政行給岐、加久為今帝止

立_レ須麻比久流間爾、宇夜宇也自久相從事波無之_レ、麻斗卑等乃仇能_レ在言期等久、不_レ言岐辞母言奴、不_レ為使行母為_レ奴、凡加久伊波流倍枳朕爾波不_レ在、別宮爾御坐坐牟時、自加得言也、此波朕劣爾依_レ之加久言良之止念召波、愧自弥伊等保自弥奈母念須、又一爾波、朕応発菩提心縁爾在良止奈母念須、是以出家_レ且仏弟子止成奴、但政事波、常祀利小事波、今帝行給部、国家大事、賞罰二柄波朕行牟、加久能狀聞食悟止宣御命、衆聞食宣、
 (『統日本紀』)

適宜言葉を補いつつ称徳に引きつけて解釈すると、次のようになろう。

私は女の身であるが、岡宮御宇天皇(天武天皇の嫡子、草壁皇子)の皇統を断絶させないため母光明皇太后の勧めによって即位し、天皇として政治を行なってきた。そして今淳仁天皇に譲位し年月を経ってきたが、その間淳仁は私に恭順することはなく、謀反人のような暴言をはき、また無礼を働いてきた。私にはそのようなことを言われる覚えはない。同じ宮に住んでいるからこそ聞きたくもないことを聞かねばならないのであって、こうして別の宮に住めば、そんなことを言われるわけもない。それはひとえに私が不徳であるからなのだが、何と恥しいことか。別宮に住んだもう一つの理由は、いまこそ菩提心をおこすべき時期と考え、出家したからである。但し政事については今の天皇淳仁は^{つねのまうり}常祀と小事を行ない、国家の大事と賞罰の二つは、私が行なおう。

保良宮に遷御して以来淳仁は、道鏡との関係について孝謙を非難することも少なくなかったようであるが、病気が治ってからの孝謙と淳仁の不仲はしだいに顕著となり、『統日本紀』によると、ついに五月二十三日、「高野天皇与_レ帝有_レ隙、於是車駕還_ニ平城宮、帝御_于中宮院、高野天皇御_于法華寺_二」⁽²¹⁾している。淳仁は平城中宮院に還幸したが、高野天皇(孝謙上皇)は平城宮には帰らず、法華寺を御在所にしたというのである。右の詔はそれから十日後に下されたものであった。

さてこの詔は、次の二つの事実が示されている点できわめて意味深い。その一つは、上皇に別宮のないことが

恥しめを受けた原因であると強調する孝謙の言葉から、逆に特別な事情がない限り上皇が皇居の外に移御することとはなかったと推測されることである。これは讓位が制度化されていなかった当時としては、天皇と上皇は同一宮に住むのが慣例であったことを示している。第二は、その特別な事情というのが、この場合は落飾出家することであった点である。出家が別宮を求める一つの手段となっているわけで、これは出家、すなわち俗人身分を離脱することが、従来の慣習から解放されるための要件であったことを知る。孝謙の出家は父聖武の例にならなかったものであろうが、別居のための方便という意味合いもあったと思われる。

ところで聖武の出家は天皇（あるいは上皇）としての最初の例であったことが注目される。聖武は天平勝宝元年（七四九）七月二日、孝謙に讓位したが、出家はその前後のことで、皇太后光明子とともに行基を請じて受戒し、法号を勝満と称している。出家の時期を讓位の「前後」といったのは、記録の上で(1)讓位の後、(2)讓位の日、(3)在位中、という違いがみられるからで、⁽²²⁾今後の検討にゆだねたいが、いずれにしても、この年に出家したことは事実である。そしてそのことと関連して留意されるのが、讓位の一カ月余り前の閏五月二十三日、「天皇遷御薬師寺宮、為御在所」(『続日本紀』)したという事態である。薬師寺の一部をおそらく御所として改造したものであろうが、寺が在所に選ばれているところに、讓位に先立つこの薬師寺宮への遷御が出家と深くかわるものであったことを示している。ちなみに『東大寺要録』によると、天平勝宝八年(七五六)五月、聖武天皇が没した「寢殿」は平城宮の建物であるから、ある時期、⁽²³⁾平城宮に戻ったと考えられる。薬師寺宮は一時的な御在所であったわけで、その最期を本来の平城宮内で終えているのも、宮外に出る先例のなかった傍証となる。そうした意味をもつ上皇宮として使用されたのが薬師寺宮であり、上皇別宮の濫觴とみなし得る。孝謙が出家して上皇の別宮(法華寺宮)に移御したことの正当性を強調したのも、そのような先例があったからにはかならない。

ともあれ天皇と上皇との同居がトラブルを増幅し、そこから上皇の別宮の必要性が認識されたことは大いに留

意さるべきである。のち道鏡の薨伝⁽²⁴⁾に、当時の法華寺を「平城別宮」と表記しているのも、天皇の平城宮に対しここが上皇御所としての機能を果たしたことを物語っている。ちなみに平城宮出土の木簡の中に、法華寺の孝謙上皇から平城宮の大膳職あてに、小豆・醬・酢・味噌などを請求したと推定されるもの⁽²⁵⁾があったのが興味深い。孝謙が、天皇には小事をゆだね、自分は国家の大権を掌握すると断言したのも、上皇が権力を有する存在であったからにはかならないが、事実、上皇は法華寺を政治的拠点として、藤原仲麻呂の追討を命ずる一方、十月には兵を中宮院に派遣して天皇を捕え、淡路島へ配流している。そして自身は平城宮に戻り、重祚して称徳天皇となった。この間の経緯やその後の女帝の施策については、ここではふれない。称徳が没したのは、宝亀元年（七七〇）八月のことで、平城宮の「西宮寝殿」で五十三歳の生涯を終えている。それまでいた河内弓削宮から本来の宮殿に戻って四カ月後のことであった。

以上、孝謙上皇の別宮をめぐる考察から明らかになった諸点をもとに平城上皇の場合を考えると、上皇が平安宮内数カ所を遷御したのち、ついに内裏を出て奈良の地に移ったことについても新たな理解が可能となるのではなからうか。次にそのあたりの事情を考察してみたい。

四 平城上皇と平城宮

大同四年（八〇九）四月一日、平城天皇は病気の悪化を理由に在位三年余りで皇太弟神野親王（嵯峨天皇）に譲位したが、その後も病状ははかばかしくなかったようで、ついに同年十二月、平城旧宮に遷御している。その間の経緯について『日本後紀』（四月三日条）は、「天皇遂_レ伝_レ位、避_ニ病_一於数処、五遷_ニ之後、宮_ニ于平城_一」と記し、平城旧宮へ遷御するまでの間に、五度にのぼる遷居がなされたといい、病状の回復を祈って執拗に居所の移転が繰り返された事情が知られる。この五ヶ所の中、たしかに居所として使用されたと考えられるのは東宮・右兵衛⁽²⁶⁾

府・東院⁽²⁷⁾の三カ所のみで、ほかは明らかでない。これに小安殿と平城京の故大中臣清麻呂家を加えて上皇五遷の場所とみる向きもあるが、適当な解釈ではない。

たしかなことは東宮といい、右兵衛府や東院といい、いずれも平安宮（大内裏）内の建物であったという点である。従来意見では、平城のそれを平安京、中での遷御と拡大解釈しているが、これも正しい認識ではない。つまり平城上皇は宮内での転居（五遷）を繰り返したあと、平城旧都へ遷御したものである。

これは先にも指摘したように、譲位した天皇（上皇）は、内裏から退くことはあっても大内裏（宮城）内に居住するというのが当時の慣例であったからにはかならない。そういった慣習がなければ、かりに宗教上の理由があったとしても、五度までも平安宮内を転々とするなど、宮内に固執する必要はなかったと思われる。

ところがそうしたことの末、十一月五日にいたって摂津国の豊嶋・為奈⁽²⁹⁾などの野および平城旧都が「太上天皇宮地」として占定されている。もしこれが実現すれば、京外、それも国外への遷御であって、宮域を出て京中の別宮に移御した聖武や孝謙の先例をも越える異例の行動と言わねばならない。結局は平城旧宮が「太上天皇宮地」に占定され、一週間後の十二日、造宮使が任命され、翌十二月四日、上皇は早々と平城に移御している。もとより宮殿は未完成であったから、故大中臣清麻呂の旧宅に入っている。清麻呂の女百子が天皇の後宮に入った関係によるものである。こうした上皇の動向に対して嵯峨天皇方は、上皇宮の造営に援助を惜しまなかった。その間の経緯についてはあらためてふれないが、その後両者の対立が顕在化し、上皇による平城還都の命が下されるに至り頂点に達した。いわゆる薬子の変であるが、この事実は、上皇別宮がそのまま政治的な拠点となる可能性をもっていたことを示している。

平城上皇の平城宮移御、すなわち京外遷御は、前例のない行動であった。孝謙上皇は天皇と同一宮にいることがトラブルのもとだとして上皇別宮の必要性を強調し、自身が出家することで内裏を去ること、つまり別宮への

遷御を正当化した。しかし平城の場合は出家をしたわけではない。故実・先例がなお重んじられた当時においてそれがともかく容認されたのは、平城が病氣であったことによる。⁽³⁰⁾このように孝謙上皇と平城の場合とでは事情は異なるが、しかし出家にしても病氣にしても、世俗政治からの離脱が予想されている点では共通しているといえる。そしてそれが先例を破りうる唯一の根拠であった。

そんな中でいまなおいくつかの殿舎の残る平城旧都への思いがつのり、忘れがたい故里として、奈良の地で余生を送りたいという願いが燃えあがったとしても不思議でない。宮地占定から一カ月、工事に着工してからでもわずか二十日という時点での早急な移御も、そのような平城の気持ちのあらわれとみてよいであろう。嵯峨としても上皇の別宮、それも京外遷御という事態が、政治的意味をもち得るものであることを予想しなかったとは思えない。にもかかわらず嵯峨がこれを静観したのは、病氣を理由に譲位した平城には、天皇に干渉しようという政治的意識はほとんどない、とみる嵯峨の認識とも無関係ではなかったように思う。

ちなみに「先例に背く」ということでは、大同元年（八〇六）五月、平城即位当初の歴代遷宮故実の⁽³¹⁾ことが想起されよう。その日、即位したばかりの天皇に、公卿らが故実・先例によって天皇は新京に遷御すべきであると進言したところ、平城は、興作をすれば、人民が疲弊し先帝の意志に背くことになるであろうとして、遷都の意志のないことを表明し、結局は御在所の修造にとどめたのであった。「先例に背いて」京外に別宮を求めた平城には、遷都しなかったこの時の思いが潜在意識になかったとは言いきれないであろう。

それはともかく、こうして平城上皇は平城の地へと移御した。その後九月六日に至り、突如として平城京還都の「命」が上皇から下され、薬子の変へと発展する。四日後、天皇方は遷御による人心騒動を抑えるために兵を派遣し、伊勢・近江・美濃の三国府及び三関をかため、ついで仲成を捕えて射殺している。これに対し上皇は、畿内及び紀伊国の兵を發したが形勢の不利を知り、薬子を伴ない東国に逃れようとして嵯峨側の頓兵に前方を遮

断されている。十二日、薬子は毒を仰いで自殺、上皇は平城宮に連れ戻されて剃髪入道した。いわゆる薬子の変はこうしてわずか数日で終結する。

上皇の別宮が還都の命によってにわかに政治的意味をもちはじめ、それが変へと発展する拠点となったことは明らかであろう。しかも還都令が平城宮に移御してから九カ月もたった時点で出されているのは、上皇による還都の計画が当初からのものでなかったことを示唆する⁽³²⁾。むしろ平城宮へ移御してから、次第にふくらんでいった構想と考えられる。そしてわたくしは、こうした還都への動きの背景に、仲成・薬子の異常ともいえるべき執念のあったこともまた無視出来ないように思う。

というのは、長岡京遷都Ⅱ造都の中心人物であった藤原種継は、ほかならぬ仲成・薬子の父であり、延暦四年（七八五）九月、事業半ばにして暗殺されたことは周知の通りである。その後も造都工事は進められ、主要部分は完成されたにもかかわらず、結局延暦十三年（七九四）長岡京は放棄され、平安京へ遷都した。これは仲成らにとって父の努力を無にする措置であったに違いない。桓武没後のことと思われるが、『日本後紀』に、早良親王の祟りを恐れて桓武が削除したはずの『続日本紀』の親王配流の記事を、かれら兄妹があえてもとの如く挿入したという話を伝えている⁽³³⁾。この出来事について同書は「无礼之事也」と記しているが、記事の復元はまさしく父種継の復権を意図したものにほかならない。さらにいうなら、かれら兄妹のこうした行為は、長岡京を棄てて平安京へ遷った桓武天皇への明らかにさまざまな抵抗であった。しかも薬子には、かつて桓武によって後宮を追放されたという苦い経験があった。そうしたかれら兄妹にとって、桓武の造った平安京は否定さるべきものであった。かれらが擁した上皇の平城還都には、上皇自身の思いもあったろうが、それ以上にかれら兄妹の怨念があったと思う。

平城上皇は変後もそのまま平城宮に住み、天長元年（八二四）七月、その西宮で五十一歳の生涯を終えている。

薬子の変は、平城宮、つまり平城上皇の「別宮」が上皇権力の拠点として機能しはじめた時点で勃発した事件であったといえる。その点でわたくしはこの変を、仲成・薬子の小人的言動がひき起こしたささいな事件であるといった理解はとらない。そうではなく、讓位が慣例化するなかで早晩惹起することが予想された上皇権力と天皇権力の対立の結果であり、起こるべくして起こった事件であった。とするならば、変後、嵯峨天皇によって京中に上皇御所、いわゆる後院が創設されたのも、きわめて政治的な意味をもつ措置であったはずである。

奈良時代には上皇が大権をもち、政治に介入するのがむしろ常態であった。それが皇権のスムーズな継受を目的とした讓位の本来の意味に添うものであった。それゆえにこの上皇権力が求めた別宮は権力の拠点として機能しかねなかったし、事実機能したのが孝謙の法華寺宮であり、また平城の平城宮であった。こうした上皇権力のひとり歩きを制限したのが、わたくしは後院の設置であったと思う。換言すれば後院は、上皇を天皇権の範囲内に位置づけるための手段であった。後院が内裏内でなく、また京外でもなく、京中に設定された所以である。

上皇の別宮が、上皇の求めた、天皇からの離脱の手段であったとすれば、天皇が上皇を規制し、その体制内に吸引したのが後院であり、その契機となったのが薬子の変にはかならない。そこにこの変の意味も見い出せよう。そして後院が設置されることで、上皇問題は一つの画期を迎えた。またそれとともに、やがて朝覲行幸あるいは尊号の献上が制度化され、観念上の父子儀礼が成立する。ここにいたって讓位の制、つまり上皇制度が整備されたとみていいのではなからうか。

その後における後院については、別稿で考察したい。

- (1) 『塵添瑤囊鈔』『安斎随筆』など。
- (2) 『漢書』一下、高帝紀。
- (3) 『史記評林』六、秦始皇本紀。
- (4) 『史記評林』八、高祖本紀。
- (5) そのことは聖武天皇即位の詔(『続日本紀』神亀元年二月四日条)に引用された元正上皇の言葉にみえる。
- (6) 元明太上天皇については、『続日本紀』養老五年十月十三日、同十六日条など。元正太上天皇については『続日本紀』天平十九年五月五日条など。
- (7) たとえば『続日本紀』天平宝字四年正月四日条など。
- (8) 公式令や儀制令。
- (9) たとえば『続日本紀』大宝元年六月二十九日、天平十六年十月十一日条など。
- (10) 『続日本紀』天平宝字二年八月一日条。
- (11) 『続日本紀』第二十六〜第三十までの五巻。また同書宝龜三年四月七日条にも、道鏡が孝謙上皇に寵愛されたことについて「語在_三高野天皇紀」と記されている。
- (12) 『続日本紀』慶雲四年七月十七日条。
- (13) 薬子の変、あるいは二所朝廷について論じたものは、北山茂夫「平城上皇の変についての一考察」(『続万葉の世紀』、目崎徳衛『平安文化史論』、阿部猛『平安前期政治史の研究』、林屋辰三郎「後院の創設」(『中世日本の歴史像』)など数多い。
- (14) なお『類聚国史』によって、薬子の変が終結した弘仁元年十一月十九日、朝堂院で大嘗会の行なわれたことが知られる。
- (15) 平城宮の地を占定し、造営にとりかかったのは十一月のことで、大嘗会停止の勅が下された五月の段階では、平城宮遷御はまだ計画されていなかった。
- (16) 『類聚国史』大同二年十二月十八日条。
- (17) 『日本後紀』大同四年正月一日条。薬子は前年十一月十九日の大嘗会の叙位に従四位下から正四位下に昇進されて、わずか一ヵ月半後の叙位は甚だ異例のことであったといつてよい。
- (18) 『日本後紀』弘仁元年九月六日条。

(19) 『続日本紀』には法華寺宮という表記はみられないが、孝謙は上皇の別宮として法華寺に入ったわけで、聖武上皇の御在所となった「薬師寺宮」の場合にしたがって法華寺宮と称してさしつかえない。

(20) 『続日本紀』天平宝字五年十月二十八日条。

(21) 平城宮の東にある。もと藤原不比等の邸宅で、その後光明子の皇后宮にあてられ、さらに宮寺とされたのち法華寺と称された。法華寺については林陸朗『光明皇后』、井上薫『光明皇后と皇后宮職』（『ヒストリア』20）参照。

(22) 『水鏡』は讓位後のこととし、『一代要記』は讓位の日とし、『続日本紀』『扶桑略記』などは在位の時のことと記す。なお『弘仁私記』は在位中の出家であったとみて「世号法師天皇」と記している。

(23) 『続日本紀』天平勝宝二年二月九日条には、この年一月一日より東大寺行幸を終え大郡宮に還御していた孝謙天皇が大郡宮から薬師寺宮に移御した、とある。聖武はこの時、すでに平城宮に還御していたものか。

(24) 『続日本紀』宝龟三年四月七日条。

(25) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅱ

(26) 右兵衛府が御在所にあてられたのは、当時右兵衛督であった仲成と妹薬子の勧めによるものであろう。

(27) 東院に移った際、内蔵寮や異母弟万多親王より奉獻があったことから判断すると、それ以前の東宮・右兵衛府への遷御は、東院が上皇御所として結構されるまでの一時的居所であったと考えられる。

(28) 小安殿が平城の在所となったかどうかは定かでなく、単なる儀式の場所として使用されたと考えるべきであろう。

(29) 豊嶋（豊嶋郡）も為奈野（猪名野とも書く。河辺郡）も『延喜式』に勅旨牧とある広大な原野。平安京の近郊という地理的關係から、別荘地あるいは遊獵地として古くから貴族達とのつながりも深かったようで、とくに猪名野は天平十三年（七四一）、行基が遊水池として作った昆野池（もと上池と下池の二つがあり、現伊丹市の昆陽池公園にある池が上池の名残りと伝えられる）は有名で、当地を詠みこんだ歌が『万葉集』『拾遺集』などに収められている。また天長二年と承和二年、摂津国府が猪名野に移建することが計画されたこともある（『類聚三代格』）。

(30) 平城の病気は、罹病時の状態から判断して、風病（一種の精神病）であったろうと推測されている。

(31) 歴代遷宮については本書第Ⅲ部第二章「歴代遷宮論―藤原京以後における―」参照。

(32) 平城還都の命が出されるまでの九カ月間は遷都の準備期間であったと考えられなくもないが、嵯峨側が立ち上がった折も折、平安京に居合わせる（たとえそれが天皇方の動きを探るためであったとしても）という不用意な仲成の行動から、

(33)

遷都が周到に計画されたものであったとは思えない。
『日本後紀』弘仁元年九月十日条。

五章 奈良時代の上皇と「後院」

——後院の系譜（その二）——

はじめに

「後院」創始の契機となった、いわゆる薬子の変は、一面では平城上皇がその御所を平安京外に設けたところに起因した事件であったといえる。これ以前、上皇御所の扱い、ひいては上皇の存在そのものがこれほどシリアスに問われたことはなかった。この事実は、後院が讓位上皇制と不可分のものであったこと、したがって後院については、讓位の一般化した奈良時代にまで遡って論じられることの必要性を示唆している。

おおよそ以上のような観点に立って後院を論じたのが前稿「薬子の変と上皇別宮の出現」（四章）であったが、主眼点は薬子の変とそれに先立つ孝謙上皇の時代におかれており、奈良時代については部分的な考察に留まっていた。そこで本稿では、前述の主旨から、あらためて奈良時代における歴代上皇の存在形態や動向を全体的に検討することにより、「後院」の源流を探ってみたいと思う。

周知のようにこの時代は女帝が多く、それが讓位上皇制を複雑にしている。その点で男帝として最初の讓位者となる聖武上皇がおのずから注目されるが、事実、残された史料からも、聖武の場合が上皇としての典型的な条件を備えていたことが知られる。在所としての「後院」や「院御所」、組織としての「院庁」や「院司」、及び

財産としての「後院領」など、いわゆる後院のもつ諸要素がいずれもこの期に胚胎していると見られるからである。本稿での考察が主として聖武上皇時代におかれているのもそのため、前稿での考察とあわせて、後院の出現過程及び後院のもつ歴史の意味をさらに深く考えてみることにしたい。

一 初期太上天皇の条件

わが国で天皇が生存中に位を譲る譲位は、持統天皇が、十一年（六九七）八月、孫の文武に位を譲り太上天皇と称したのはじまる。『日本書紀』はこれ以前にも、継体天皇が二十五年（五三一）二月七日、安閑天皇に位を伝えたといい、皇極天皇が大化改新（六四五年）に際して孝徳天皇に譲位したとするが、前者には疑義があり、後者も特殊な事例とみなされる。譲位は持統上皇以後においてほとんど恒例となり、女帝の存在とともに日本君主制を特徴づける最大の要件となった。

譲位が常態化するにつれ、おのずから問題になるのが、譲位後の天皇＝太上天皇の政治的動向とか居所についてであるが、史料上の制約に加え、女帝の存在が問題を複雑にしているという事情もあり、初期太上天皇については、これを全体として取り上げ論ずることはほとんどなかったように思う。⁽¹⁾そこでまず藤原京時代の持統上皇を含め、奈良時代歴代上皇の関係史料を整理し（表9）、それを通して上皇の条件といったものを探ることにする。

藤原・奈良時代の約九十年間、九代（八人）の天皇のうち、在位中に崩御した文武天皇と、淡路廃帝こと孝謙上皇によって廃された淳仁天皇とを除き、六人が譲位して上皇となっている。持統につづく文武にも実は譲位の意志があったが、これは母の元明が固辞したことにより実現しなかった。そこでこの文武を含めると、九代のうち七人までが、譲位したか、その意志を有していたことになる。

ところで譲位の理由はさまざまで、元明・光仁の場合が高齢、聖武の場合は病弱、孝謙は孝養のためとするが、

表9 歴代太上天皇（上皇）関係史料（表記は所見史料に従った）

天皇		上皇		皇		の		動		向	
聖		武		元		正		元明		文	
元		正		元		明		元		明	
神龜1・2・4	天平11・3・23	天平12・12・15	天平13・7・10	天平16・2・14	天平16・7・(戊戌)	天平18・1	天平18・10・6	天平20・4・21	持統11・8・11	大寶2・12・22	大寶3・12・29
<p>不改常典に従って皇位を繼承せよとの元明の遺志によって聖武に讓位す</p> <p>天皇・太上天皇、邇原離宮に行幸</p> <p>恭仁宮遷御、太上天皇・皇后後に在りて至れり</p> <p>上皇、新宮（恭仁宮）に移御</p> <p>天皇、紫香樂宮に行幸、上皇・橘諸兄難波宮に留まる</p> <p>上皇、仁岐河に御幸、陪從の衛士已上に禄を賜う</p> <p>太上天皇御在所「中宮西院」とあり（万）</p> <p>天皇・太上天皇・皇后、金鐘寺に行幸</p> <p>「寢殿」に崩御</p>								<p>崩御</p> <p>不改常典によって讓位し、文武天皇と共治す</p> <p>「西殿」に殯す</p> <p>親王以下百官人ら、太上天皇の殯宮を拝す</p> <p>百日齋を御在所に設く</p> <p>文武天皇不予により讓位の志あるも、元明固辭して受けず</p> <p>文武天皇崩御（場所不詳）</p>			

五章 奈良時代の天皇と「後院」

桓 武 光 仁	光仁	称 徳	淳		仁		孝 謙	
			孝		謙		聖 武	
天応1・12・23 天応1・4・3		宝亀1・8・4 天平宝字8・10・9	天平宝字8・10・9 天平宝字8・11・11 天平宝字6・8・3 天平宝字6・6・23 天平宝字5・10・28 天平宝字4・1・7 天平宝字4・1・5 天平宝字4・1・4 天平宝字3・6・16 天平宝字2・8・1				天平勝宝1・1・14 天平勝宝1・閏5・23 天平勝宝1・7・2 天平勝宝1・12・25 天平勝宝7・11 天平勝宝8・3・1 天平勝宝8・5・2	
崩御（場所不詳）	病氣および高齡のため、讓位	孝謙上皇重祚 称徳天皇、「西宮寢殿」に崩御	高野天皇、兵を發して中宮院を固ましむ		高野天皇及び帝、藥師寺に行幸 高野天皇及び帝、平城宮改作のため保良宮に移御す 高野天皇と帝と隙あり、帝「中宮院」に遷り高野「法華寺」に御す 上皇、淳仁とのトラブルを理由に別宮に御し、自らは国家の大事を決せんことを宣す 藤原訓儒麻呂らを中宮院に侍して勅旨を宣伝せしむ		聖武、「平城中島宮」で菩薩戒を受ける（扶） 聖武、「藥師寺宮」に遷御 病弱により孝謙天皇に讓位 天皇・上皇・太后、東大寺に行幸 聖武のもとに、橘諸兄謀反を企つとの密告あり 上皇、（難波）堀江のほとりに行幸 「寢殿」に崩御（「平城宮」、東）	
			人並みに孝養をつくしたいとの理由で讓位 淳仁天皇から、父母兄弟の追尊について、太上天皇（孝謙）御所に奏上あり		高野天皇及び帝、内安殿で叙位を行なう 高野天皇及び帝、仲麻呂第に幸し叙位を行なう 高野天皇及び帝、閑門に御し高麗の使者に賜宴 高野天皇及び帝、藥師寺に行幸			

留意されるのは、いずれの場合でも譲位に際して、いわゆる「不改常典」が必ず引き合いに出されていることである。これは譲位の根拠が、天智天皇の定めたという「不改常典」に存していたことを示唆する。その意味で譲位や後院の問題は、「不改常典」にまで遡及して論ずることが必要であると考えているが、この「不改常典」についてはあらためて別稿で取り上げたい。⁽²⁾これが譲位について注目される第一の点である。

第二の点は、この「不改常典」とも関連するが、上皇のもつ権限の強さについてである。表9からも知られるように、持統天皇は譲位後も、十五歳で即位した文武天皇を後見し、「共治」している。また死期の近づいたことを悟った元明上皇は長屋王や藤原房前を枕席に召入れて後事を託し、孝謙上皇は、淳仁天皇の在位中にもかかわらず高野天皇と称され、⁽³⁾常の政と小事は天皇が、国家の大事と賞罰の二事は自分が行なう、と宣言している。これらの事実に徴する時、上皇が政治に関与するのは一向不思議でなく、むしろそれが当然のこととして認識されていたことが知られよう。前稿でも論じたように、上皇は法制上は天皇の次位に置かれたが、奈良時代では天皇を超える大権を有し、政治に介入するのがむしろ常態であった。元明・元正・聖武・孝謙の各上皇が、時々天皇の行幸に同行する場合が多くみられ、あるいは上皇同席のもとで任官・叙位などの儀式が行なわれているのも、そうした上皇の立場を端的に示している。しかもこの上皇権は、上皇が「出家」しても変わらなかった。これについては聖武の出家をめぐる諸問題を取り上げる際、もう一度言及しよう。

第三は、譲位後の上皇の御所についてである。上皇の権限なり立場なりが以上の如くであるとして、上皇は譲位後どこに住んでいたのか。これについては具体的な史料を欠くが、元明上皇の場合、元正天皇の養老五年（七二二）十二月、「平城宮中安殿」で崩御しており、次の元正上皇は、聖武天皇の天平十八年（七四六）正月頃、「中宮西院」を在所としていたことが知られる（『万葉集』）。このうち元正の「中宮西院」は、聖武が五年間の恭仁京遷御に終止符を打ち、平城宮に戻って以後の在所として所見するもので、譲位の当初からここを居所として

いたかどうかは定かでない。しかしその恭仁京には、元正は皇后の光明子とともに移御しており、⁽⁴⁾そのことから上皇の在所は内裏内にあったと考えられる。元正上皇がその後天平二十年四月に崩御した「寢殿」というのも、右の「中宮西院」の建物を指すのかも知れない。ちなみに平城遷都後の聖武天皇は、「中宮院」を在所にしたと⁽⁵⁾いうから、上皇はその近くに住んでいたものであろう。

聖武上皇は、天平勝宝元年（七四九）閏五月、讓位する一カ月前に薬師寺宮に遷御している。薬師寺は右京六条二坊にあったから、これは宮外への遷御ということになる。ただし同八年五月に聖武が崩御した「寢殿」はこの薬師寺宮ではないであろう。『東大寺要録』には「天皇崩_ニ於平城宮」とあり、寢殿は平城宮内の建物であったと理解されるからで、上皇はある時期薬師寺宮より平城宮に戻ったものと考えられる。⁽⁶⁾薬師寺宮は一時的な在所であったとみられ、最期を平城宮内で終えているのは、やはり上皇が宮外に出るという先例のなかったことの傍証となろう。

次の孝謙（称徳）も法華寺（宮）、すなわち平城宮の東外部に移御している。称徳の場合、のちに詳述するように、淳仁天皇との間にトラブルがなければ法華寺を在所とすることもなかったわけで、その点、称徳が宮外に居所を求めたのも特殊な例とみなされよう。その後称徳は道鏡と、西宮こと河内弓削宮に移御し、ここに滞在中病に倒れるとただちに平城宮に戻り、宝亀元年（七七〇）八月、平城宮の「西宮寢殿」で五十三歳の生涯を終えている。聖武と同様孝謙も、本来の内裏で没しているわけである。

なお持統と光仁上皇の在所については明らかでない。大宝三年（七〇三）四月、持統の百日齋が設けられた「御在所」が藤原宮内の建物であったことから判断するに、前年の十一月、持統の殯宮となった藤原宮「西殿」というのが、この御在所（寢殿）もしくはその近辺の建物ではなかったろうか。光仁上皇の場合は、在位中、宮内の東南隅に営んだ楊梅宮を愛し、⁽⁷⁾宝亀四年（七七三）二月に移居したこともあったから、楊梅宮が讓位後の在所と

された可能性はある。しかしその場合でも宮内に住んだことに変わりはない。

このように見てくると、男帝であれ、女帝であれ、特別な事情のない限り上皇となっても原則的に宮外に出ることはなく、宮内にとどまるのが慣習であったことを知る。建物は別であっても平城宮（内裏）内で天皇とともにあるのが通例であった。すでに述べたように、天皇の行幸に上皇が同行することが多かったのも、そのことを裏付けている。

しかし聖武の薬師寺宮や孝謙の法華寺宮への移御のように、一時的ながら宮外の建物、いわば別宮を利用したことも事実である。ことに、ここではふれなかったが、孝謙の場合は宮外別宮としての法華寺宮が政治的な機能を果たしている事実があり、そこに元明や元正と異なる条件の現われたことが推測される。そこで次にその点を考えてみたい。

二 上皇の別宮

(1) 聖武の譲位と出家

聖武が薬師寺宮に遷御したのは天平勝宝元年（七四九）閏五月二十三日のことであったが、それから一カ月余のちの七月二日、「万機密く多くして、御身あへたまはずあれ」と詔を下し、皇女阿倍内親王（孝謙天皇）に譲位している。時に聖武四十九歳、神龟元年（七二四）の即位以来、二十五年間の在位であった。

ところがこの薬師寺宮への遷御には、譲位とともにもう一つ注目すべきことが関係していた。それはこの前後、光明子とともに行基を戒師として出家しており、遷御が出家とも深くかかわっていたとみられる点である。しかもこの聖武の出家は、以後の上皇にも少なからぬ影響を与えることになる。行論の展開上、ここで聖武の出家をめぐる諸問題をまとめて論じておきたい。

聖武は出家して法名を勝滿と称した。文武中宮宮子（法名は徳太）とその妹光明子（聖武皇后、法名は滿福）も同じ時受戒したともされるが、その時期については明確でない。出家を讓位と同じ日のこととも、讓位後のこととも記す記録がある一方、在位中のこととして、聖武を「世号⁽¹¹⁾法師天皇⁽¹²⁾」と記述するものもある。なかには同じ史料の中で混乱しているものもあるというわけで、早くから正確な事実が忘れられたものようである。現在のところ、聖武の出家は讓位の前後いずれともには決めがたいが、讓位前、行基の没する前月⁽¹³⁾のことであったと見ておきたい。同様の疑問は受戒の場所についてもある。

すなわち『扶桑略記』天平感宝元年（七四九）正月十四日条に、「於^ニ平城中島宮^一、請^ニ大僧正行基^一、為^ニ其戒師^一、太上天皇（聖武）受^ニ井（菩薩）戒^一、名^ニ勝滿^一」とあり、これが場所について知られ得る唯一のものである。しかし「平城中島宮」とは具体的にどの建物を指すのであろうか。⁽¹⁴⁾聖武が、四年有余滞在した恭仁京を引き上げ、平城宮に戻ってからの在所とされた「平城中宮院」⁽¹⁵⁾の誤写とも考えられるが、確証はない。出家の日時・場所については今後の検討にゆだねたいが、いずれにしても聖武が天皇（あるいは上皇）として最初の出家者であったことは確かである。

第二は、先にも指摘したように、聖武に始まる天（上）皇の出家が以後の先例となり、上皇の存在形態に大きな影響を及ぼしたとみられる点である。『続日本紀』天平宝字元年（七五七）六月二十八日条に載せる次のような記述はそのことを考える上で貴重である。

記事というのは、天平勝宝七年（七五五）冬十一月、左大臣橘諸兄に仕える佐味宮守なる人物から、諸兄が飲酒の席で無礼な言辞をはき、「反状」を抱いているとみられるふしがある、との密告があり、聖武太上天皇はすでに重体に陥っていたが、これに対して「太上天皇優容不^レ咎⁽¹⁶⁾」というものである。

聖武の寛大な処置には、諸兄が皇后光明子の異父兄にあたるところからする配慮もあったのであろう。しかし

このことを知った諸兄はやがて致仕している。⁽¹⁷⁾ 事件はその後、橘奈良麻呂の謀反発覚という事態にまで発展するが、ここで注目されるのは、密告が、天皇孝謙をさしおいて譲位後の、しかもすでに出家している聖武に対してなされ、上皇が裁断している事実である。ちなみにこの時点では、聖武は平城宮に戻っていたと思われるが、この一件は、上皇が譲位や出家にかかわらず政治に関与し得る存在であったことを示している。

皇太后の場合であるが、光明子にも同様のことがいえる。周知の通り光明子は、聖武没後の孝謙天皇時代、仲麻呂と連繫して紫微中台を中心に権勢を誇った。実権は仲麻呂のものであったろうが、「皇太后朝」と称され、その皇太后宮には皇権のシンボルである鈴璽さえも置かれていたことを考えれば、光明子の立場は女院であったといえるかも知れない。⁽¹⁸⁾ しかも前述したように、光明子はすでに聖武と一緒に出家しており、ここでも出家が治政の上で障害とはなっていないことがわかる。

孝謙（称徳）になると、それがさらに顕著である。孝謙が落飾出家した上、平城宮外の法華寺に入ったこと、淳仁天皇をさしおき、「国家の大事と賞罰の二つは自分が行なおう」と主張したことはよく知られている。「出家上皇」孝謙が政治上の大権を掌握行使できたのは、もっぱら聖武らの先例に従うものであった。ことにこの称徳はその後、道鏡を少僧都から大臣・禪師に任じる際にも、それに先立って次のように表明し、その行為を正当づけている。⁽¹⁹⁾

（前略）然て朕は髪をそりて、仏の御袈裟を服てあれども、国家の政を行はずあることを得ず。仏も経に敕りたまはく、国王い、王位に坐す時は、菩薩の淨戒を受けよと敕りてあり。此に依りて念へば、家を出でて、も政を行ふに豈障るべきものにあらず。故是を以て帝の出家しています世には、出家してある大臣もあるべしと念ひて、^{ねが}樂ひます位にはあらねども、此道鏡禪師を大臣・禪師と位は授けまつる事を、諸聞し食さへと宣る。……（原漢文）

上皇という存在、あるいは上皇権について考える時、右のことは十分に留意される必要がある。

聖武の出家に関連して注目される第三点として、諡号の問題がある。時期は遡るが、聖武が没した二週間後の天平勝宝八年五月十九日、孝謙天皇は詔を下し、「太上天皇（聖武）出家帰_レ仏、更不_レ奉_レ諡、所司宜_レ知⁽²⁰⁾」と命じている。しかし『続日本紀』によると、その後、天平宝字二年（七五八）八月九日に「勝宝感神聖武皇帝」という尊称と「天璽国押開豊桜彦尊」という諡号が追贈されている。この聖武への追尊号は別に論じたように（孝謙女帝の皇統意識」第一部三章）、淳仁天皇の正統性を強調するための一環として仲麻呂が行なったものであった。

すなわちこれより一週間前の八月一日、淳仁天皇が即位した日、孝謙天皇には「上台宝字称徳孝謙皇帝」が、光明皇太后には「中台天平応真仁正皇太后」との尊号を献上する一方、聖武にも与えられたものであり、しかもこうした中国風の尊号は、唐風を好み権威主義者であった仲麻呂にふさわしいものであった。聖武・孝謙・称徳の漢風諡号はこの時の尊号に由来し、以後は、出家の有無にかかわらず、歴代天皇（上皇）にはすべて諡号が献上されることになる。

このようにみえてくると、出家上皇としての聖武の存在がさまざまな形でその後の上皇制に大きな影響を与えたことが知られると思う。宇多上皇に始まる太上法皇の呼称、院政期、多くの上皇が出家して法皇と呼ばれ、治天の君として実権を有したことなども、遡ればその原型は、すでに聖武・孝謙の時に形づくられていたわけである。

(2) 薬師寺宮と法華寺宮⁽²²⁾

さて譲位に先立つ一カ月前、聖武が薬師寺宮に移御したことについては先に述べた。しかし『続日本紀』には「天皇遷_二御薬師寺宮、為_二御在所_一」と記すだけで、その間の事情は明らかでない。

薬師寺といえは天武九年（六八〇）、天武天皇が皇后持統の病氣平癒を祈願して建立した勅願寺で、元明天皇の平城遷都にともない、養老二年（七一八）、藤原京から右京六条二坊の現在地に移されている。聖武の在所とされたのは、戒師となった行基が当初薬師寺僧であった関係によるものと思われる。具体的な結構などはいっさい明らかでないが、薬師寺宮という以上、寺の一部を御所として宮殿風に改造したものであろう。しかもすでに論じたように、薬師寺宮への遷御は聖武の出家にかかわるものであった。

この薬師寺宮へは、翌二年二月九日、孝謙天皇も難波の大郡宮から「移御」⁽²³⁾している。大郡宮は、前年の暮れに東大寺行幸を終えた孝謙が、この年の一月一日に遷御して以来留まっていた在所であるが、そこからの移御は、聖武が平城宮へ還御したあとのことと思われる。そうすれば聖武が薬師寺宮を在所としたのは最大限十カ月ほどのことであり、ここが上皇の政治的拠点として機能するまでには至らなかったろう。しかし一時期ながらもこれをはじめて上皇の宮外御所として出現したことの意味は小さくない。事実、次の孝謙上皇になると、法華寺宮が明確に上皇御所として機能を發揮している。

周知の通り孝謙上皇は、天平宝字五年（七六一）十月、平城宮改作のため淳仁天皇と保良宮に遷御したが、その折病氣に侍した道鏡を寵愛したことから淳仁と不仲になり、翌年五月、天皇が平城中宮院に還幸したのに対して、自身は「法華寺」⁽²⁴⁾を在所とした。そこが在所とされたのは、天平宝字四年（七六〇）六月に没した母光明子のため境内に堂宇が設けられていたこともあったようだ。そして十日後に孝謙は詔を下し、次のように強調している。

五位已上を朝堂に喚集め、詔りたまはく、

太上天皇（孝謙上皇）の御命以て、卿等諸に語らへと宣りたまはく、朕が御祖大皇后（光明皇后）の御命以て、朕（孝謙上皇）に告りたまひしく、岡宮に御宇しめしし天皇（草壁皇子）の、日継はかくて絶えなむとす、女

子の継にはあれども、嗣がしめむと宣りたまひて、此の政行ひ給ひき。かくして、今の帝（淳仁天皇）と立ててすまひくる間に、うやうやしく相従ふ事は無くして、とひとの仇のあることのごとく、言ふまじき辞も言ひぬ、為まじき行も為ぬ。おほかたかくいはるべき朕にはあらず。別宮に御坐し坐さむ時、しか得言はめや。此は朕が劣きに依りてし、かく言ふらしと念ほし召せば、愧しみいとほしみなも念ほす。又一つには朕が菩提心を発すべき縁にあるらしとなも念ほす。是を以て家を出でて仏の弟子と成りぬ。但し政事は、常の祀り小けき事は、今の帝行ひ給へ。国家の大事、賞罰二つの柄は朕行はむ。かくの状聞し食し悟れと宣りたまふ御命を、衆聞し食さへと宣る。

（『統日本紀』天平宝字六年六月三日条。原漢文。カッコ内は滝浪註）

すなわち孝謙が御在所を「平城別宮」ともいうべき宮外に求めた理由は、淳仁天皇との同居によるトラブルの増幅にあるといい、さらに今や出家の身となった自分が別宮に住むのは当然であるとして、その行動の正当性を主張している。そして最後に執政権の掌握を宣言したのがこの詔であった。

孝謙はこの法華寺に在る間に、藤原仲麻呂を追放し、淳仁天皇を淡路へ配流した上で、内裏に戻り称徳天皇として重祚した。孝謙の場合、法華寺（宮）にある期間は二年余に及んだばかりでなく、上皇御所としても十分に機能したといえる。孝謙の出家は、父聖武の例にならないながらも、それを巧妙に政治的に利用し、別居の方便とされているように思われる。その意味で、実質的には孝謙の法華寺宮が、（平城）宮外に設けられた上皇別宮のはじめであったといえるのではないだろうか。「後院」の濫觴である。

(3) 宮外の別宮・宮宅

藤原京・平城京時代、讓位後の上皇は内裏内に居住するのが通例であった。そこに薬師寺宮や法華寺宮のような宮外別宮の出現した意味があったわけだが、それならばこの時期、内裏外に天皇あるいは上皇の別宮が全く存

在しなかったかといえ、実はそうではない。

聖武が没した七カ月ばかりのち、天平勝宝八年（七五六）十二月十二日、孝謙天皇によって「聖靈御宇之時別宮」すなわち聖武天皇の「別宮」が国忌（聖武の忌日五月二日）齋会料として東大寺に勅施入されている。⁽²⁸⁾ただし施入されたのは「平城京東六条三里、七条三四箇里」の地であり、「其料物、以件庄地利充用」と記されているように、客体は庄地（のちの春日庄）であったとみられるから、むしろ「別宮の地」という方がふさわしいものであったろう。しかし「別宮」といわれている以上、そこに何らかの建造物が存していたとみるべきである。

そのことに関連して留意されるのが、これより先、同年五月二十五日、すなわち聖武が没した直後に、同じく孝謙により「左京五条六坊」にあった「宮宅及田園等」が東大寺に施入されている事実である。⁽²⁹⁾のちの関連文書⁽³⁰⁾から、孝謙によるこの施入が、亡父聖武の永代供養三宝料としてのものであったことが知られるが、聖武の別宮と同様、ここでも「宮宅」についての具体的な記載がない。

この宮宅に関しては、聖武に縁の深いものとし、また右の勅書に仲麻呂以下紫微中台の官人が連署していることから、付近にあった仲麻呂の田村第の一部とみる理解⁽³¹⁾がある。しかし仲麻呂の田村第は、天平勝宝四年四月九日、東大寺大仏落慶供養に行幸した折、孝謙がここを御在所としたのが史料上の初見（『続日本紀』）というだけでなく、仲麻呂の立場から考えて田村第（宮）と関係深いのは、聖武よりも孝謙とすべきで、右の理解をわたくしは採らない。この時施入された宮宅及び田園地などは、半年後に施入される聖武の「別宮」とも別の、おそらく孝謙自身の別宮であったと考えたい。聖武の別宮がいつ設定されたものかも明らかでないが、この孝謙の別宮と同様、在位中のことであつたとみてよいであろう。聖武・孝謙ともに宮城の近辺に「別宮」およびそれを含む田園地を保有していたわけである。

しかしこれらは遊宴や納涼などの砌に、一時的に用いられる施設であり、在位中は、当然のことながら、在所

として長期間居住する本宮（平城宮）に対する意味での「別宮」というものではなかったし、それは上皇時代でも同様であつたろう。つまり別宮の施設は存在しているが、なおそこが上皇御所として政治的な機能を果すまでには至っていないかつたということである。

反面、これらの施設は、聖武の別宮が没後において、孝謙の別宮も亡父聖武の永代供養料として、いずれも東大寺に施入されたが、こうした自由な処分はそれぞれの別宮が天皇あるいは上皇の私的財産として保有されていたことを示し、これ以後に発展する天皇領あるいは上皇領の原型とみなすことが出来る。その点、同じく宮外別宮でも、先に見た薬師寺宮や法華寺宮とは異なる存在であつたとしなければならぬ。これらの「宮宅・別宮」や「薬師寺宮・法華寺宮」はそれぞれに、のちの後院にみる上皇御所としての「機能」か「施設」のいずれかを欠いており、後院としては未熟であつたといわねばならない。この二つの要素が結合・統一される時、いうところの後院が成立・出現するわけである。

ともあれ後院は、こうした時期を経過したあと、いわゆる累代後院・一代後院⁽³²⁾ともに薬子の変後、嵯峨天皇によって本格的に設置されるのであるが、萌芽的ながらもその原型・母胎が奈良時代に存在したことを、ここでは確認しておきたい。

三 上皇の近臣

(1) 人員構成

聖武上皇の没後に行なわれた関係者の論功行賞や遺領処分は、それを通して生前における上皇の存在形態がうかがわれる点で興味深いものがある。すでにその一端については考察したが、あらためて聖武没後になされた一連の処分を簡条書にして掲げ、上皇の近臣や上皇経済について検討してみよう（各大寺で行なわれた、いわゆる仏事

法要の類は省略する。とくに記さない限り、記事は『統日本紀』による。

天平勝宝八年（七五六）

五月 二日 聖武太上天皇、（平城宮）寢殿で崩御。

十九日 佐保山に葬る。謚を奉らず、との勅が下される。

二十二日 三七日、「先代の寵臣」左衛士督坂上忌寸大養・右兵衛率鴨朝臣虫麻呂ら、旧恩を思い山陵への奉仕を願い出て許され、褒賞される。

二十三日 禅師法榮、山陵に侍ることを許され、所生一郡の課役を免除される。

二十四日 看病禅師一二六人の戸の課役を免じ、とくに鑑真・良弁を大僧都に、慈訓を小僧都に任じて労をねぎらう。

二十五日 左京五条六坊の「宮宅及田園等」を東大寺に勅施入する。（随心院文書）

六月 九日 聖武太上天皇の供御米塩等を供養料として鑑真・法榮に下賜する。

二十一日 七七日、光明皇太后、聖武の遺品を東大寺へ献納する。（東大寺献物帳）

七月 八日 聖武の遺品を法隆寺に献納する。（法隆寺献物帳）

二十六日 聖武の遺品を東大寺に献納する。（東大寺献物帳）

十二月 十二日 聖武の「別宮」を国忌斎会料として東大寺に勅施入する。（平安遺文）

二十一日 聖武上皇の御興丁に位階を進む。

記録の上では、十二月二十一日の御興丁への論功行賞をもって処分がすべて終わっている。聖武が没してから七カ月余後のことであった。これにより上皇関係者は本官に戻り聖武との関係は名実ともに消滅したとみられる。さて、以上の事実から聖武上皇には供奉集団ともいべき一群の人々の存在したことが知られよう。中でも留

意されるのが五月二十二日に褒賞されている坂上犬養と鴨虫麻呂である。「先代の寵臣」といわれるからには、生前の聖武に格別寵愛された人物であり、その関係は上皇時代はもとより天皇在位中に始まっていると思われる。こうした寵臣の存在に関して、時期は聖武の東宮時代に遡るが、『続日本紀』養老五年（七二二）正月二十三日条にみえる次の史料に注目したい。

詔從五位上佐為王、從五位下伊部王、正五位上紀朝臣男人、日下部宿禰老、從五位上山田史三方、從五位下山上憶良、朝來直賀須夜、紀朝臣清人、正六位上越智直広江、船連大魚、山口忌寸田主、正六位下樂浪河内、從六位下大宅朝臣兼麻呂、正七位上土師宿禰百村、從七位下塩屋連吉麻呂、刀利宣令等、退朝之後、令侍東宮、

これは十六人の中・下級官人に対して、退朝の後、東宮（聖武）に近侍するよう命じたものである。時に聖武は二十一歳であった。もっとも聖武の立太子は七年前の和銅七年（七一四）六月のことであるから、かれらが東宮付きとされたのは立太子の始めからではない。留意されるのは、かれらが「朝を退いたのち」に供奉せしめられていることで、当然その立場は、いわゆる東宮坊の官人としてでなく、私的な性格をもったことが考えられる。これを「近臣」ということが出来る。

さて、聖武に供奉した官人で史料上から知られるのは、こうした「近臣」及び先の「寵臣」犬養・虫麻呂ら十八人である。そこで聖武との関係を中心に各人の略歴を整理した（ただし僧侶は除く）表10（後掲）をもとに、聖武近臣の特徴を検討してみよう。

第一に指摘されるのは、高齢者が少なくなかったことである。山上憶良はこの時六十二歳、刀利宣令は聖武即位の頃五十九歳⁽³⁴⁾、紀朝臣男人は天平初年で五十二歳前後と推定される。また天平二年（七三〇）三月、算術家山口忌寸田主が弟子をとってその道を伝授するよう命じられたのも、高齢のため業が廃絶するのを恐れての措置で

あった。高齢者であるのは、次にあげる第二の点とあわせて、輔弼を任務とする「近臣」にふさわしい条件であったといえる。

第二は、特殊技能や知識を有する者、あるいは文人学者が選ばれていることである。山田史御方は新羅に学んだ留学帰朝僧で、還俗して持統朝に仕えた⁽³⁵⁾。のち盗みを働き贖罪を課せられた折、その文才を惜しむ元正天皇の勅により赦免されている⁽³⁶⁾。楽浪河内は文章道の師範者であったが、恭仁京や紫香樂遷御に際しては宅地班給使あるいは造離宮司に任命されるなど、造営技術面でも才能を有していた⁽³⁷⁾。山上憶良が万葉歌人として著名なことはいうまでもない。しかも注目されるのは、この東宮近侍を命じられた四日後の二十七日、文武兩道において後学者のために師範とよぶにふさわしい人物が選ばれ褒賞された中に、山田史御方（文章道）・紀朝臣清人（文章道）・楽浪河内（文章道）・塩屋連吉麻呂（明法道）・越智直広江（明経道）・山口忌寸田主（算道）の六人が含まれていたことである。十六人中の六人、つまり三分の一強が師範者たりうる人物であったというから、東宮配属者の中でも、学者文人の占める比重の大きさがうかがわれる。かれらは教育係、いわゆる東宮聖武の帝王教育を任務とする「近臣」であった。けだし、陰陽思想による冬至賀宴が聖武天皇時代に始められたのも興味深い。

こうした「近臣」の配属は、早逝した文武の皇位をその子聖武に継承することを使命とした元明が、死を目前にしてとった措置であったと考えられる⁽³⁹⁾。元明はそれから九カ月後の十月、床下に長屋王と藤原房前を召して後事を託し、十二月、六十歳の生涯を終えている。

第三は、右のこととも関連するが、紀朝臣男人や日下部宿禰老のような武人も含まれていることである。とくに男人は平城京造當時には將軍に任じられて役民逃亡を防ぐ任に当った。また天平五年（七三三）九月、伊勢使發遣の折には少納言であったが、舍人として中臣・忌部氏を率いて奉幣している。いっぽう当時右衛士督であったと考えられる老の事績は詳らかにしないが、男人と同様、武人としての体験を有することが「近臣」に選ばれ

た理由であろう。これも帝王教育の一環であったと思われる。

以上、三点にわたって指摘した内容はいずれも近臣の必要条件ともいえるものであり、そうした関係が当面考察の対象としている上皇時代に及ぼされる時、後世の院司の要件が出揃うことになる。

(2) 寵臣の条件

ところがこうした近臣らと聖武との関係をみると、有期的であり、全体としてはゆるやかであったことに気づく。すなわち先の十六人のうち、東宮時代から天皇時代にも関係が続いた佐為王や紀朝臣男人・紀朝臣清人・楽浪河内などが存在する反面、即位後は別の官職に転じ、聖武から離れた者も少なくない。事件を起こして失脚した山田史御方は、生年から考えて聖武とは東宮近侍の関係で終わったと考えてよい。また山上憶良や土師宿禰百村・刀利宣令は、天皇時代には大宰府や筑前・伊予など地方へ赴任しており、塩屋吉麻呂のように配流された者もいるなど、聖武との関係においては粘着性が弱かった。先に指摘したように、高齢者が多く、大半が天皇時代、それも初期に没している（あるいは没したと推測される）から、その意味では「近臣」と聖武との関係は当初から希薄であったとみるべきかも知れない。

ちなみにそのことと表裏の関係にあるが、こうした「近臣」が聖武の立太子から七年も経った時点で配属されているところに、当時、東宮坊の組織が十分にととのっていなかったことを思わせる。

文武天皇が母元明に譲位の意志を伝えながらも果さずに没したのが慶雲四年（七〇七）、そのあと元明・元正が中継ぎとして即位したが、女帝の例としていずれも立太子はしていない。したがって和銅七年に立太子した聖武が大宝律令制定以来最初の皇太子で、官司としての東宮坊の機能は、実質、その時に始まったと考えられる。東宮大夫の初見は天平十一年⁽⁴⁰⁾、すなわち孝謙立太子の翌年のことで、聖武の東宮時代、職員としては文献の上で少

属と舍人の所出しかみられないのも、あながち史料上の制約とはいきれまい。⁽⁴¹⁾

それにしても、聖武との関係はすべてがこのように希薄であったのだろうか。美努王と橘三千代を父母とする佐為王は光明子の異父兄にあたり、濃厚な血縁関係があった。近侍を命じられた養老五年の九月、聖武の娘井上内親王が斎内親王として北池辺の新宮に移御した時、兄葛城王とともに前興長をつとめたのもその関係からであろう。聖武即位の頃には「風流侍従」と称されている。⁽⁴³⁾ 時期は不明であるが、娘広岡朝臣古那可智も聖武夫人となっている。⁽⁴⁴⁾ 位階は男人より低い、王は「近臣」の中心人物であり、長命であれば上皇時代にまで関係をもちつづけていたに違いない。

こうした佐為王の存在は、東宮時代から天皇時代、さらに上皇へ、と連続して仕えることの多かった後世の院司を連想させるものがある。

そこであらためて「先代の寵臣」といわれた虫麻呂・犬養について考えてみたい。聖武没後の天平勝宝八年五月二十二日、彼らに対して下された孝謙天皇の詔は次のようなものであった。

勅曰、左衛士督従四位下坂上忌寸犬養、右兵衛率従五位上鴨朝臣虫麻呂、久侍禁掖、深承恩渥、悲情難抑、伏乞奉陵、朕嘉乃誠、仍許所請、先代寵臣、未見如此也、宜下表褒賞以勸事君、犬養叙三位上、虫麻呂従四位下、其所従授刀舍人廿人増三位四等、
(『統日本紀』)

内容は、坂上犬養と鴨虫麻呂が、生前にうけた聖武天皇の深い寵恩を思うにつけ悲情たえがたく、山陵の護衛奉仕を請うたところ、変わらぬ忠誠に感歎した孝謙天皇が二人の申し出を許した上、褒賞して各々に叙位したというものである。虫麻呂についてはこの記事以外に聖武とのつながりを示す史料は見当らないが、天平宝字八年(七六四)十二月に没した犬養の場合、その卒伝⁽⁴⁵⁾によると、代々衛士府に勤仕する家筋であったという。聖武より二十歳年長であったが、武芸に秀いでたことで聖武に仕えたもので、天平十一年三月、聖武が元正太上天皇と

遷原離宮に行幸した折に供奉した功であろう、從五位下に叙されている。年頃からいって聖武とのつながりは東宮時代にまで遡り得る可能性は十分にあるが、「少^{わかきとき}以^も武才^{ぶさい}一見^{いちけん}稱^{しょう}、聖武皇帝登^{のぼ}祚^そ寵^{くわい}之^の厚焉^{こうん}」というから、本格的には即位後に始まる関係のようだ。左衛士督を本官とする犬養も右兵衛率の虫麻呂も、讓位後もひきつづき上皇の警固のため近侍し、その職掌は聖武の没年にまで及んだと見られる。⁽⁴⁶⁾ 孝謙天皇の勅による行賞が、聖武の三七日に行なわれていることがその傍証となろう。

ちなみにこの犬養については、天平勝宝八年六月の「東大寺献物帳」のうち、檀御弓八張の中に、「一^長張^六尺^六寸^六、赤深^{あかふか}鮎^{あや}皮^{かわ}斑^{まだら}洗^{せん}皮^{かわ}、檀弓^{だんきゅう}把^{つか}、坂上^{さかのうえ}犬養^{いんぎょう}」とあって、聖武の没した直後、犬養が檀弓一張を献上したことが知られる。⁽⁴⁷⁾ 生前の聖武に仕えた時、犬養が愛用し重宝した弓であったのだろう。それを奉獻しているところに聖武に近侍した犬養の立場や関係の深さがしのばれる。

上皇への奉仕ということに関連しては、これ以前の養老五年⁽⁴⁸⁾（七二二）五月、元明太上天皇が不予となった時、右大弁從四位上笠朝臣麻呂が出家を請うて許された事実が想起される。麻呂は寵臣として元明に供奉したことが推測されるが、女帝上皇の場合、⁽⁴⁹⁾ 近臣の立場はおのずから男帝上皇のそれとは異なるところもあったろう。

犬養や虫麻呂らは本官を有し孝謙天皇に仕える一方、常に聖武上皇に近侍したと考えられる。といって彼らの立場は制度化された職掌というのではなかったろう。その点で、後世に見る院司とはいえないが、しかし右にみた限りでも、上皇付官人として「院司」の要素は十分に備えている。さらに先の孝謙の勅で、彼らとともに四等を加階された二十人の授刀舎人もまた、生前の聖武上皇に供奉し警固に当った集団であったろう。こうした上皇に供奉する集団の存在は、のちの院司を理解する上で十分に留意されてよい。

なお上皇供奉の集団のうち見落せないのが、聖武関係者への最後の処分となった御興丁たちである。『続日本紀』天平八年十二月二十一日条に、「太上天皇御興丁一人叙^よ四階^{しかい}、一人二階、五十七人外二階、一百廿六人外

一階」と記す。その数は計一八五人に及び、いずれも上皇の御幸に供奉した駕輿丁たちであったと考えられるが、これも「院司」の一部を構成していたといえる。天皇の駕輿丁は五十人前後であったと考えられるから、一八〇⁽⁵⁰⁾人もの駕輿丁を擁した聖武上皇の存在の大きさが注目される。このことも、駕輿丁を含めて聖武上皇の「院司」の規模を推測させるものがある。

四 上皇料・領について

聖武天皇の東宮時代および没後の関係者の整理を通して、生前の「近臣」をみてきたが、前節はじめにあげた関連処分の記事からは、部分的ながら経済的な問題——上皇供御料や上皇領についても知ることが出来る。

その意味で、時期は前後するが、聖武が没した一ヶ月後の六月になされた次の処分が留意されよう。⁽⁵¹⁾

太政官処分、太上天皇供御米塩之類、宜_下充_ニ唐和上鑑真_一禪師、法榮二人、永令_中供養_上焉、

聖武の看病につとめた鑑真と法榮の二人に先帝用の供御の米塩を充て、その供養の資とするよう処分したものである。聖武没後、鑑真にも法榮にも、ともに看病の労に対して褒賞されたことはすでにふれたが、こうした事実から、生前の聖武上皇に対して、一定の供御料が太政官から支出されていたことが知られる。国家財源の一部が割き置かれていたわけである。なお聖武の供御料ということでは、これ以前、聖武の三七日にあたる五月二十二日に下された孝謙天皇の勅（『東大寺要録』所収）にふれておかねばならない。

勅 大膳職江人近江 若狹 紀伊 淡路 志摩等、国久代已来、毎月常貢_ニ供御異味_一、今也、

太上天皇山陵、永遷、恐礙_ニ冥路_一、臨_ニ震極_一、而増_レ痛対_ニ月殿_一、而崩_レ心、仍因_ニ紫微中台所願_一、為_ニ太上天皇、並停、自今以後无_ニ更令_一貢、亦断_ニ天下諸国義鷹_一、因_ニ此方便_一、先帝陛下聖靈、往_ニ生花藏之界_一、面奉_ニ舍那之仏_一、国土安寧朕有_ニ此願_一、主者施行、

内容は聖武の冥福を祈るために近江以下五カ国の江人（贄人）から毎月貢進される異味供御物を停止し、あわせて諸国の養鷹を禁じたものである。この場合、停止されたという異味供御物は、生前の聖武に進上されていたものを指すのではない。孝謙天皇に献納されていたものが、亡き聖武を追慕し、あるいは殺生禁断の意から停止されたともみべきもので、先の太政官処分とは異なることに注意したい。

聖武の供御料処分に関連して、第二に留意されるのが、やはり孝謙上皇の場合である。淳仁天皇と不仲になった孝謙は保良宮から内裏には戻らず、法華寺宮に入ったが、近時発見された木簡によって当寺から平城宮大膳職あてに小豆・醬・酢・味噌などを請求したことが明きらかにされている。⁽⁵²⁾ 内膳職でなく大膳職であるところに、上皇料の扱いが一般官衙なみであったことを思わせるが、聖武の場合も、先の供御米塩は大膳職から支給されたものであろうか。大膳職といえば、孝謙が聖武追慕のために停止した異味供御物も大膳職管轄下の贄人からの進上であった。しかしその場合孝謙には、天皇として内膳職に貢進された同種の供御物もあったに違いなく、右にあげた勅によって諸国から貢進されるすべてのものが停止されたわけではないだろう。

以上は食膳供御料に関してであるが、それ以外の上皇諸経費については詳かにしない。またそれがどの程度制度化されていたかも不詳である。聖武供養料に関する先の太政官処分も、永代の資とするよう記されているが、貢進はおそらくこの時一回限りのものではなかったろうか。

最後に、上皇経済の問題として上皇（天皇）領ともいふべきものの保有についてふれておく。

聖武や孝謙が各々宮外に「別宮」「宮宅」を所持したことについては、以前に取り上げたのでここでは繰り返さない。もっとも聖武の場合には「上皇」の別宮として処分されたが、その所有は上皇以前の、在位中に始まるものであった。その点厳密な意味での上皇領―上皇独自の財産というものではないが、没後、遺領として処分され、それらが皇室領というよりも私的財産として保有されていたことが留意される。これについては、やがて出

現する勅旨田などとともに、あらためて考える必要がある。また、こうした私的財産の在り方は、没後、その皇子女に処分されたという平城上皇の別宮平城西宮、あるいは夫人橘嘉智子に伝領されてのち大覚寺に改められた嵯峨上皇の一代後院嵯峨院や、同じく淳和上皇の一代後院淳和院などに通じるものがある。のちの後院領の原型として、ここでは留意するにとどめたい。

- (1) 上皇の崩御のもつ意義について論じたものに岸俊男「元明天上天皇の崩御」(『日本古代政治史研究』所収)がある。
- (2) 本書第一部三章参照。
- (3) 孝謙上皇が高野天皇と称されたことについては、本書第三部五章参照。
- (4) 『続日本紀』天平十二年十二月十五日条。
- (5) 『続日本紀』天平十七年五月十一日条。
- (6) 聖武上皇が平城宮に還御した時期は明らかでないが、薬師寺宮を在所としたのは、最大限十カ月余の期間であったと考えてよい。二八八ページ参照。
- (7) 『続日本紀』宝龜四年二月二十七日条。前年末からの造営工事が完成し、この日光仁天皇は楊梅宮に移居している。なお楊梅宮については岸俊男「藤原仲麻呂の田村第」(『日本古代政治史研究』所収)に詳しい。
- (8) 『扶桑略記』天平感宝元年正月十四日条。なお聖武はその後、天平勝宝六年四月五日にも光明子・孝謙とともに東大寺大仏前で鑑真を戒師として菩薩戒を受けている(『東大寺要録』など)。
- (9) たとえば『一代要記』など。
- (10) 『水鏡』など。
- (11) 『続日本紀』『扶桑略記』など。
- (12) 『弘仁私記』
- (13) 行基は天平勝宝元年(七四九)二月二日、八十九歳で没した(『続日本紀』『東大寺要録』など)。
- (14) ちなみに『行基年譜』にも「平城京中嶋宮」とある。なお『行基菩薩伝』に「平城島宮」とあるのは「中島宮」の誤りか。

- (15) 『続日本紀』天平十七年五月十一日条。
- (16) 美努王と県犬養橘三千代との間に生まれたのが橘諸兄で、三千代はその後藤原不比等に婚し、安宿媛（光明皇后）を生んだ。
- (17) 『続日本紀』天平勝宝八年二月二日条。
- (18) 本書第一部三章参照。
- (19) 『続日本紀』天平宝字八年九月二十日条。
- (20) 『続日本紀』天平勝宝八年五月十九日条。
- (21) 『続日本紀』天平宝字二年八月一日条。なお尊号諡号にかかわらず存命中に献上された例はこの時が始めてであった。
- (22) 記録の上では法華寺宮という表記はみられないが、孝謙は上皇の別宮として法華寺に入ったわけで、聖武上皇の御在所となった「薬師寺宮」の例にしたがって法華寺宮と称してさしつかえない。
- (23) 天平勝宝元年十月九日、河内国智識寺に行幸した孝謙天皇が、同十五日、大郡宮に還御したというのが史料上の初見（『続日本紀』）。
- (24) 平城宮の東にある。もと藤原不比等の邸宅で、その後光明子の皇后宮にあてられ、さらに宮寺とされたのち法華寺と称された。法華寺については、林陸朗『光明皇后』、井上薫「光明皇后と皇后宮職」（『ヒストリア』20）参照。
- (25) 『続日本紀』天平宝字五年六月七日条。
- (26) たとえば道鏡の薨伝（『続日本紀』宝龜三年四月七日条）に、当時の法華寺を「平城別宮」と表記している。天皇の平城宮に対してことが上皇御所としての機能を果たしたことを物語っている。
- (27) 詔の解釈については四章参照。なお『東大寺要録』によると、孝謙天皇が出家したのは天平勝宝六年四月五日のことである。註（8）参照。
- (28) 『平安遺文』四六八号。
- (29) 随心院文書（『大日本古文書』四の二一八）。参考のために全文を掲載しておこう。
（表題）
「勅書并絵図佐伯院二天平勝宝八年」
勅

奉入東大寺宮宅及田園等

五条六坊園 葛木寺以東

地肆坊 坊別一町二段廿四步

四至 東少道 南大道 西少道并葛木寺
北少道并大安寺園

倉參宇

檜皮葺甲倉一字 長一丈八尺三寸 広一丈六尺
高一丈二尺

草葺板倉二字

一字 長二丈八尺八寸 広二丈六尺
高一丈六尺一寸 着鐮

一字 長二丈七尺二寸 広二丈五尺
高一丈六尺六寸 着鐮

以前 奉去五月廿五日 勅 所入如件

天平勝宝八歳六月十二日

(行脱カ)

從二位大納言兼紫微令中衛大將近江守藤原朝臣仲麿

從三位行左京大夫兼侍從大倭守藤原朝臣永手

從四位上行紫微少弼兼中衛少將山背守巨万朝臣福信

紫微大忠正五位下兼行左兵衛率左右馬監賀茂朝臣角足

從五位上行紫微少忠葛木連戸主

葛木寺東所 地肆坊 左京五条六坊

(地図中略)

左京職勘上件式所 天平勝宝九歳正月四日

正七位上行少属坂上伊美吉子老

正六位上大進坂合部宿禰友足

正七位下行大属船連庭足

(30) 『平安遺文』四五五一号。

(31) 岸俊男「藤原仲麻呂の田村第」(註(1)前掲書)。

(32) 皇室世襲の財産として多くの上皇が使用したことから「累代の後院」と呼ばれた冷泉院と朱雀院に対して、嵯峨天皇の嵯峨院や淳和天皇の淳和院など各天皇の後院をわたくしは「一代の後院」と呼ぶことにしている。累代の後院と一代の後院については別稿で論じたい。

(33) 『続日本紀』和銅七年六月二十五日条及び聖武天皇即位前紀。

(34) 『懷風藻』『寧楽遺文』

(35) 『日本書紀』持統六年十月十一日条に「授三山田史御形務広肆、前為三沙門「学問新羅」とある。この時に還俗したものであろう。

(36) 『続日本紀』養老六年四月二十日条によれば、贖罪を課せられた当時、御方は家に尺布もないほど赤貧していたという。

(37) ちなみに河内の父沙門詠は百濟の人で、天智二年（六六三）に渡来している。

(38) 聖武即位の翌神龜二年十一月十日が国史上の初見（『続日本紀』）。

(39) 前年八月には右大臣不比等が没し、また本年に入っては元明太上天皇が病氣となり死期間近いという政治状況の中で、勢力の巻き返しをはかる皇親と藤原氏との間に緊迫した空氣のあったことは事実であるが、この時の配属や人選はそのことと無関係であるともみてよい。

(40) 『続日本紀』天平十一年四月二十一日条。

(41) 『続日本紀』養老四年十二月二十一日及び同七年十月二十三日条。なお東宮坊の初見は同三年十二月二日条。

(42) 東宮坊については、皇太子の権限などを含め、あらためて考察したい。

(43) 『寧楽遺文』

(44) 『続日本紀』天平宝字三年七月五日条。

(45) 『続日本紀』天平宝字八年十二月十三日条。

(46) 天平勝宝八年五月二十二日の孝謙の詔に「久しく禁掖に侍る」とある「禁掖」は本来は内裏のことであり、したがって天皇時代を意味するが、犬養と虫麻呂は讓位後の聖武上皇にも近侍したとみてよい。

(47) 天平勝宝八年六月の「東大寺献物帳」によると、大伴淡等（旅人）の「槻御弓一張長六尺六寸六分、體權藤、末曲、紫皮鐏弓把、黄袖袋緋綾裏」や同じく佐伯浄（清）麻呂の「槻御弓、一張長七尺二寸、黒漆、既鐏系、紫皮鐏弓把」が奉納されたことが記されており、聖武との関係で留意される。し

かし淡等はすでに天平三年七月に、また清麻呂も天平勝宝二年十一月に、すなわちいずれも聖武天皇（上皇）時代に没しているので、坂上犬養の場合と同一に取り上げることとは出来ないであろう。

(48) 『続日本紀』養老五年五月十二日条。法名を滿誓と号した。

(49) 付言すれば、女帝上皇の場合、身辺の雑務は中宮職や皇后宮職が代行したと思われる。上皇というよりも皇太后・太皇太后として扱われ、その限りでは事務処理の上で女帝の讓位は従来の政治体制に大きな変化をもたらすものではなかったといえよう。

(50) 『令集解』（宮衛令・職員令）『延喜式』（左右兵衛・同近衛）など参照。

(51) 『続日本紀』天平勝宝八年六月九日条。

(52) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅱ。

表10 聖武近臣

上皇	天皇	持統	文武	元	明	元明	正	元正	聖	孝	聖

	日下部 宿祢老	紀朝臣 男人
持統		
慶雲4・4・25		慶雲2・12・27 從六位下より 從五位下
和銅3・正・13	和銅元・正・11 從六位下より 從五位下	慶雲4・10・3 文武天皇の葬 儀に造御竊司 をつとめる 和銅4・9・4 平城京役民の 逃亡を防ぐた めに將軍に任 和銅5・正・19 從五位上
養老4・正・11	靈龜元・4・25 從五位上	養老元・正・4 正五位下 養老2・正・5 正五位上
*養老5・正・23	*養老5・正・23 養老6・2・22 時に右衛士督 正五位上	*養老5・正・23 養老5・9・11 伊勢奉幣使發 遣に際し、舍 人として中臣 ・忌部を率い る。時に少納 言 養老7・正・10 從四位下
神龜5年頃	神龜元・2・22 從四位下 天平4・3・22 卒去。時に散 位從四位下	天平2年 時に大宰大式 天平3・正・27 從四位上 天平8・正・21 正四位下 (大宰大式正 四位下の時、 57才) 天平9・6月 時に正四位下 右大弁 天平9・7・25 右大臣武智麻 呂第に勅使と して派遣さる 天平10・10・30 卒去。時に大 宰大式正四位 下

山田史 御方	山上憶 良	朝来直 賀須夜	
6・10・11 務広肆			
学士であるこ とを優して布 整塩穀を賜う 時に正六位下	大宝元・正・23 遺唐少録に任 時に無位 慶雲元・7・1 帰朝		
從五位下 (從五位下の 時・大学頭) 和銅3・4・23 周防守に任	和銅7・正・5 正六位上から 從五位下		和銅7・2・10 国史の撰にあ ずかる。時に 從六位上
從五位上	靈龜2・4・27 伯耆守に任	養老元・正・4 從六位上より 從五位下	靈龜元・正・10 從五位下 靈龜元・7・10 学士を優し褒
養老5・正・27 文章道の師範 にふさわしい 人物として褒 賞さる 養老6・4・20 盗みを犯すも、 文才を惜しま れ赦免さる (周防守從 五位上)	*養老5・正・23	*養老5・正・23	*養老5・正・23 文章道の師範 者にふさわし
文雅として著 名	神龜3年頃 筑前守として 赴任(天平 4年前後帰京) 天平5年 没(齊明6 年生)		神龜の頃 文雅で著名 天平4・10・17 右京亮に任
			天平勝宝5・7・11 卒去。時に散位從 四位下

船連大 魚	山口忌 寸田主	紀朝臣 清人 (浄)
和銅 5・7・17 和銅 2・10・25 時に民部大録 正八位下	和銅 2・10・25 時に民部大録 兼陰陽曆博士 正七位下	
		賞さる 養老元・7・23 再び学士を優 し褒賞さる
*養老 5・正・23 *養老 5・正・23 時に正六位上 養老 7・正・10 従五位下	*養老 5・正・23 養老 5・正・27 算道の師範者 にふさわしい 人物として褒 賞さる	い人物として 褒賞さる 養老 7・正・10 従五位上
神亀元・5・13	神亀の頃 歴算に著名 天平 2・3・27 衰老のため業 の廃絶を恐れ て弟子をとら しむ	天平 13・7・3 治部大輔兼文 章博士に任 天平 15・5・5 正五位下 天平 16・2・2 難波宮遷御に 際し平城宮留 守官に任 天平 16・11・21 従四位下 天平 18・5・2 武藏守に任
天平勝宝 3・正・25		

<p>呂臣大宅朝 兼麻</p>	<p>内 楽浪河</p>
	<p>正倉を造り功 績多大により 加階、時に播 磨大目従八位 上</p>
<p>*養老5・正・23 時に従六位下</p>	<p>養老5・正・27 文章道の師範 者にふさわし い人物として 褒賞さる、時 に正六位下</p>
	<p>高丘連を賜姓 神亀の頃 文雅として著 名 天平3・正・27 外従五位下 天平3・9・27 右京亮に任 天平13・9・12 恭仁京に遣わ され百姓に宅 地班給、時に 散位外従五位 下 天平14・8・11 紫香樂宮行幸 に際し造離宮 司に任命さる。 時に造宮輔 天平17・正・7 外従五位上 天平18・5・7 従五位下 天平18・9・2 伯耆守に任</p>
<p>305</p>	<p>天平勝宝6・正・16 正五位下 従五位上</p>

越智直 広江	刀利宣 令(神 亀年間 59才)	塩屋連 古麻呂 (吉)	土師宿 祢百村
	慶雲の頃 対策文あり		
	和銅の頃 対策文あり		
養老4・2・4 時に大学明法 博士			
養老7・正・10	*養老5・正・23 時に正六位上 養老5・正・27 明法第一博士 で師範者にふ さわしい人物 として褒賞さ る	養老6・2・27 律令撰定の功 により賜田さ れる	*養老5・正・23 時に正七位上
神亀3・11・15 時に従五位下 神亀年間 宿儒として重 要な地位をし める	神亀年間 正六位上伊予 掾	天平13・正・22 藤原広嗣の乱 に連坐して配 流、時に外従 五位下	天平2・正・13 時に大宰少監

坂上忌 寸犬養	鴨朝臣 虫麻呂	
		從五位下 (從五位下の 時、刑部少輔 兼大學博士)
天平8・正・28 正六位上から 外從五位下 天平11・正・13 外從五位上 天平11・3・23 張原離宮行幸 に際し、從五 位下に叙さる 天平14・2・1 正五位下 天平15・5・15 正五位上		
天平勝宝8・5・22 山陵に奉仕するこ とを許され從四位 下に叙さる、時に 右兵衛率	天平勝宝8・5・22 山陵に奉仕するこ とを許され從四位 下に叙さる、時に 右兵衛率	天平勝宝元・7・2 正六位上より從五 位下
天平勝宝8・6・21 東大寺に檀御弓献 納 天平宝字元・7・9 勅使として藤原豐 成の男乙繩を逮捕 天平宝字元・閏8・11 時に造東大寺司長	天平勝宝8・5・22 山陵に奉仕するこ とを許され從四位 下に叙さる、時に 右兵衛率	

<p>天平18・7・11 時に正五位上、 左衛士佐近江 員外介、勳十 二等</p> <p>天平20・正・7 從四位下</p>
<p>官 天平宝字2・7・6 時に正四位上、造 東大寺司長官、左 衛士督左右馬監播 磨守</p> <p>天平宝字4・6・7 光明皇太后葬送の 山作司に任</p> <p>天平宝字7・正・9 大和守に任</p> <p>天平宝字8・12・13 卒去(83才)</p>

(六国史をもとに作成)

付論 薬子の変

はじめに

こういう話が『日本後紀』に記されている。

平城天皇が即位して二年目、大同三年（八〇八）四月のこと、若犬養門（のちの皇嘉門）の樹の枝に集まった二羽の鳥が翼を接し、頭を交えたまま、ともに死ぬということがあった。しかも不思議なことに、この二羽の鳥は終日落ちなかった。そこでこれを見た人々は、仲成・薬子兄妹が「尤を招く」、すなわちなにか異変の起こるきざしではないか、と恐れたという。当時、こうしたうわさが広がるほど彼ら兄妹の行状が顰蹙を買っていたのであろう。

人々の予感は的中した。いわゆる薬子の変が起きたのは、それから二年後のことである。

薬子の変とは、平城天皇（上皇）の寵愛を受けた藤原薬子が、兄の仲成とともに政事に介入したことから、大同五年、平城上皇方と嵯峨天皇方との間に対立が起こった事件である。その結果、一時は役所や官人たちも二分されるまでに至ったが、機先を制した天皇側によって仲成は射殺され、薬子も毒を飲んで自殺、上皇が落飾したことで事件は決着をみた。

薬子の変は、このような経緯から一般に、計画性に乏しい些末な事件として扱われ、歴史的な意味を見いだすこともほとんどなされなかった。しかし事変に至る過程や乱後の処理を考えると、これほど重大なできごともう多くはないように思われる。

一

そもそもこの事件は、仲成・薬子の兄妹が政事に容喙したことにはじまるが、薬子がかつて桓武天皇から宮廷を追放されたこともある女性である。

薬子は、桓武の寵臣藤原（式家）種継の女として生まれた。生年はあきらかでないが、兄仲成は、四十七歳で没したとする『尊卑分脈』の注記によれば、天平宝字八年（七六四）生まれとなるから、それより二、三年のちの誕生であろうか。とすれば、平城よりは数歳年長であったことになる。もっとも『続日本紀』天平宝字四年正月四日条に、無位から従五位下に叙された「藤原薬子」の名を見いだすが、年齢から判断して、問題の薬子とは同名異人と考えられる。

さて薬子は、長じて藤原縄主と結婚した。『公卿補任』によればこの縄主は、相当の酒好きであったが、職務を怠ることなく、恩義にも厚かったというから、典型的なまじめ人間であったようだ。のちの薬子にみられる奔放な生き方は、案外こうした夫との結婚生活に原因があったのかもしれない。

薬子は縄主との間に三男二女をもうけたが、このうち長女を皇太子安殿親王、すなわちのちの平城天皇の後宮に入れている。しかしそのことが薬子の生涯を狂わせることになる。事情は詳かにしないが、東宮（坊）宣旨として皇太子安殿に仕えた母親の薬子自身が、その臥内に入り出して寵を受けるようになったからである。桓武天皇は激怒し、ただちに薬子を追放した。「文華を好まず」「宸極（皇位）に登りて心を政治に励まし」てきた桓

武にとって、このような薬子の振舞いは、許しがたいものであったにちがいない。こうして薬子は、一度は安殿親王から遠ざけられていたのである。

しかし桓武の死は、この二人を再び結びつけることになる。親王が大同元年三月に即位すると、薬子は内侍司の尚侍（長官）となったからである。

ちなみに内侍司とは天皇や后妃に仕える後宮十二司（内侍司・蔵司・書司・薬司・兵司・聞司・殿司・掃司・水司・膳司・酒司・縫司）の一つで、尚侍以下典侍（次官）・掌侍（判官）など一一〇人が所属したが、なかでも天皇に常侍する尚侍は奏請（臣下の言葉を天皇に伝える）や伝宣（天皇の言葉を臣下に伝える）、あるいは陪膳を職務としたことから、強い発言力を持ち、后妃となるものも少なくなかった。薬子はこうした尚侍として宫廷にカムバックし、政事に容喙するようになったのである。その後における仲成の異例の昇進も、薬子の働きかけによるものとみてよいであろう。

二

平城天皇は、生来、病弱な体質であった。心配した桓武が陰陽師に占わせたところ、故早良親王の怨霊の祟りと出たため、天皇は急ぎ使者を淡路に派遣し、親王の墓を掃除し、僧侶に読経させている。延暦十一年（七九二）六月のことである。

これより先、延暦四年九月、長岡の地は造都事業が本格化しはじめたばかりであったが、工事現場を視察していた種継が何者かに射殺されるという事件が起こった。時に平城旧宮にあった桓武は、報を聞くやただちにとつて返し、関係者を一網打尽に捕らえ、処罰したが、その一味が東宮坊の坊官たちであったことから皇太弟早良親王も嫌疑をかけられ、乙訓寺に幽閉された。しかし、無実を叫ぶ親王は断食し、自ら命を断っている。遺骸は淡

路島に運ばれた。いま北淡町の山中にある墳墓が、親王の墓と伝えている。

そうした事件のあと皇太子に立てられたのが、安殿親王であったから、その病弱を早良親王のせいとみるのは自然の情であろう。しかも延暦七年五月に桓武天皇の夫人藤原旅子が没して以来、生母高野新笠、皇后藤原乙牟漏が相ついで亡くなり、またその間、蝦夷との戦いにも大敗するなど、桓武天皇の周辺には不幸や異変が続いていた。しかし怨霊が意識されたのは、このときが初めてである。

そこで天皇は、先にみたように淡路島に勅使を派遣し、親王の墓に堀をめぐらし墓守を置くことにしている。これを初度として以後、親王の霊への鎮謝が重ねられ、平安遷都後の延暦十九年七月には崇道天皇の尊号を追贈し、同二十四年四月に至って親王の骨を大和国へ改葬している。現在、奈良市八島町にある崇道天皇陵がこれである。またこの間、淡路島には親王の冥福を祈るため一寺が建立されている。北淡の山中、九十九折の道を上りつめたところにその寺は今もあり、常隆寺と号する。

早良親王の陵墓は、この寺から下る途中、字仁井にある。前述の理由から遺骸はないのであろうが、今もその姿（円墳）をとどめていて、地元ではこれを「崇道」テンノ一の墓」とか「ソーラ（早良）親王の森」と呼んでいる。傍らの池は「ソーラの池」が転訛して「ソーマの池」。かつては水が赤かったが、それは親王の刀を洗ったため、との伝説もある。この池が、墓に堀をめぐらせたという、その堀の名残なのであろうか。石段を上ると小祠があり、背後が墓であった。毎年正月七日の夜に、「ゴカキ」と称して栗の木をこの親王の墓前に捧げるのが習わしで、またその際、半紙に「八坂神社」を中央に、左右に「牛の玉」「宝の印」と書いて、田圃に立てるという。これはある時期に、疫神である牛頭天王を祀り、御霊信仰の対象となったことを意味している。とすれば先の「テンノ一」は、牛頭天王と習合したものであるのだろう。

話を戻せば、こうして桓武は早良の霊を慰撫するため多大の努力を払っているが、しかし安殿親王の健康はい

っこうに良くなる氣配がなかったし、それは、桓武の没後、即位してからも続いていたようである。

『日本後紀』には、平城の病氣を「風病」と記している。正確な病名はわからないが、症状から判断して、一種のノイローゼにかかっていたことはまちがいない。時として正常な判断力を失い、活動力が極端ににぶることも少なくなかった。まま見受けられた平城の激情も、そうした病氣と無関係ではなからう。たとえば父の桓武が崩じたときのごとき、「哀号擗踊」のあまり「迷いて起て」ず、坂上田村麻呂らに扶けられてやっと退下したが、それからの一週間というもの、粥以外は食べなかったという。時に平城は三十三歳であった。

そういう平城であつてみれば、これを妖惑することなど、年上の薬子にはかんたんなことであつたらう。というより、薬子の存在は平城にとってなにもまさる安らぎとなっていたように思われる。

即位直後の平城は、政治に積極的に取り組んでいる。桓武天皇時代、二十年にわたり二つの造都事業で疲弊した民情を視察するため、観察使を任命して諸道へ派遣する一方、緊縮財政の方針から中央官司の大規模な統廃合を実施するなど、政治改革に熱意を燃やし、その緒政にはみるべきものがあつた。「古先哲王といえども及ばざるところあり」（『類聚国史』）とまで称賛されている。

しかしそうした姿勢も長続きしなかった。はやくも大同四年四月、病氣の悪化を理由に「此位（天皇位）は避けて、一日片時も御体を養わんと欲す」と表明し、退位している。わずか三年の在位であつた。そして皇位から解放された平城は、その分だけ薬子にのめり込んでいったようである。

『日本後紀』はこの前後のありさまを、薬子はつねに帷房にあって「矯託百端」を並べたて、その結果平城は薬子の「言う所の事、聴き容れざるは無」かつたと記している。また（平城の）御言にあらざる事を御言と言いつつ褒め貶すこと、（薬子自らの）心に任せて、かつて恐れ憚る所無し」とも記す。誇張があるにせよ、平城が薬子のとりこになっていたことは信じてよいであろう。しかもその赴くところ、「二所朝廷」といわれるような皇

権の分裂をもたらし、平城上皇が平城還都を呼びかけるといふ事態にまで発展するのであった。

三

いわゆる二所朝廷とは、嵯峨天皇と平城上皇が対立し、政令二途に出るといふ変則的狀態が起こったことをいう。天皇が存命中に皇位を譲り上皇（太上天皇）となるのは持統女帝にはじまるが、持統上皇は孫の文武天皇と「共治」したという（『統日本紀』）。つまり上皇の意志が政治面に反映されたのが、この時期の特徴だった。そのかぎりでは、讓位後の平城が政治に関与したのも、決して不可解なことではない。ただ平城の場合、天皇のいる平安京を離れていたところに問題があった。

平城上皇が平城京に移ったのは大同四年十二月のことである。この年四月に讓位した平城は、その後も病状が思わしくなかったのか、東宮・右兵衛府・東院など大内裏内の建物を転々としたあと、摂津の豊嶋や為奈野（猪名野）にまで使者を遣わし、宮地を求めさせているが、結局移ってはいない。最後に平城旧都を選んだのは、生まれ育った大和に戻り病氣を癒したいという思いからであらうか。そしてこれが上皇の安住の地となる。

さっそく平城宮（といっても必要なかぎりの建物であろう）の再建工事が開始され、平城上皇自身はその年の暮れ、はやばやとこれに移っている。宮地占定からでも一カ月、工事に着手してからわずか二十日後のことである、宮殿はむろん未完成であったから、平城はいったん故大中臣清麻呂の旧宅に入っている。清麻呂の女百子が平城の後宮に入った関係によるものであった。この間、嵯峨天皇の方も、諸国に命じて造営の費用や人夫を調達するなど、上皇の意思に従いつつ、平城宮の再興に尽力しているのが目につく。

ところで上皇が天皇のもとを離れて、京外はもとより、国外（平城旧都）に遷御するのは前例のないことであったが、嵯峨がそれを承知で援助したのは、少なくともこの段階では、両者の間に表立った対立がなかったこと

を暗示する。十二世紀末に成立した『水鏡』や十三世紀初めに慈円の書いた『愚管抄』には「嵯峨東宮ノ間、平城国主ノ東宮ヲ廢シ奉ルベキノ由サタアリケリ」などと記して、桓武朝以来、平城と嵯峨の間に対立があったとするが、それは薬子の変に引きずられた理解であって、正しい認識ではない。

しかし翌大同五年三月、嵯峨天皇が、平城宮の上皇＝薬子への対抗上、祓人所の頭を設けたことで対立が表面化し、ついに破局を迎える。この年九月六日、突如、平城上皇から平城宮還都の命令が、平安京にいる貴族官人たちに下されたのである。

だが、嵯峨天皇方の反応は早かった。天皇は即日、坂上田村麻呂や藤原冬嗣らを造平城宮使に任命して平城宮へ派遣し、これに対処している。この二人はいずれも嵯峨の腹臣であり、特に田村麻呂の武勇はかつての蝦夷経略で知られるところであった。つまり天皇方は、上皇の還都令に同調するとみせて、その実、平城方の動きを制肘したわけである。さらに四日後、嵯峨天皇は、還都令による人心騒動を理由に伊勢・近江・美濃の国府および諸関を固めさせ、平城宮にいる官人を召還する一方、仲成を平安京で逮捕した。折も折、こともあろうに平安京にいたとは、仲成も実に不用意といわざるをえない。それとも天皇方の動きを探っていて不覚をとったのである。翌十一日に射殺、あえない最期であった。

いっぽう平城京の上皇は、思わぬ嵯峨側の出方に逆上し、畿内や紀伊の兵を発し、薬子を伴って東国に入ろうとした。藤原葛野麻呂や同真雄ら側近は上皇を諫めたが、聞き入れなかったという。上皇はわずかの者を従え、川口道より東国に向かおうとしたが、その途次大和国添上郡越田村（現・奈良市北之庄町付近）で天皇方の兵に前方を遮断されて成らず、平城宮に連れ戻され落髪入道した。しかし観念した薬子は死を選び、毒を仰いでいる。九月十二日のことである。この間、上皇に呼応して挙兵する動きも一部にはあったが、薬子の自殺でそれも未然に終わり、事態は一挙に終息した。

二所朝廷に薬子の変を狭義に解釈すれば、平城遷都令から薬子の自殺までの、わずか六日間のできごとであった。

四

平城宮は、遷都の命（大同五年九月）によって、にわかに政治的意味をもち、それが事件へと発展する拠点になった。しかも遷都令が、上皇が平城宮に移って（大同四年十二月）から九カ月もたった時点で出されているのは、遷都の計画が当初からのものでなく、平城宮へ移御してからふくらんだ構想であったことを示している。

それにしても平城上皇は、なぜ平安京の貴族官人たちに平城京への遷都を呼びかけたのであろうか。

平城古京にはなお宮殿もいくつかは存在し、大中臣清麻呂の旧宅をはじめ貴族の邸宅も存在していた。上皇ならずとも、故里への郷愁がかきたてられたとしても不思議でない。しかしそれだけが遷都令の動機ではあるまい。平城上皇には、実は天皇時代、遷都にまつわる思い出があった。

大同元年（八〇六）七月、即位したばかりのころ、平城天皇に公卿らが意見を奏上し、国家の恒例によって忌（先帝桓武の忌）が明けると天皇は遷都（宮）することになっている、として新宮の造営を進言している。これに對して天皇は、この都は水陸の便もよく、殿舎もとのつているので、これからも手を加えないようにしたい、造作をすれば人民が疲弊し、かえって先帝の意志に背くことになろう、と述べ、遷都の意思のないことを表明したが、これを聞いた公卿らは天皇の決意に賛嘆したという。ここにいう国家の恒例とは、飛鳥京時代に典型的にみられたように、天皇ごとに宮殿を移した、いわゆる歴代遷宮の慣習・故実を意味する。のちに平城遷都に平安京遷都を呼びかけた折、平城上皇に遷都を断念したこのときの思いが去来しなかったとはいえないであろう。

しかし上皇による平城遷都には、もっと深刻な、仲成・薬子らの怨念ともいえるべきものが隠されていた。

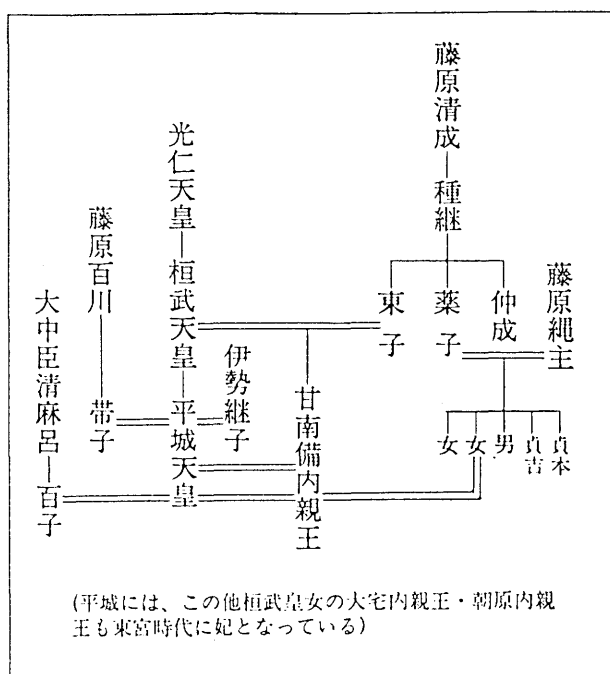
仲成・薬子兄妹は、いわゆる藤原四家のうち式家（宇合流）に属している。式家は奈良期における広嗣の乱以来、日の目を見る機会は少なかったが、百川が山部親王（のちの桓武天皇）の立太子に尽力したことからの寵を得て、政界で活躍するようになっていた。この百川亡きあと政治的手腕をふるい、長岡造都を推進した種継こそ、仲成・薬子兄妹の父にほかならない。

しかし種継は、すでに見てきたように、長岡造都の工事が軌道にのった矢先に暗殺されてしまう。しかも長岡京は主要部分が完成していたにもかかわらず、十年で放棄された。放棄の理由がなんであれ、仲成らにとってこの桓武の処置は、父の努力を無にし、その死をないがしろにする許しがたい背信行為であったにちがいない。『日本後紀』に、早良親王の祟りを恐れた桓武が『続日本紀』から削除したはずの親王の淡路配流の記事を、彼ら兄妹がもとのように挿入したという話を伝えている。記事を復元することで種継の死の前後の事情をあきらかにし、父の復権を図ろうとしたものであろう。それは長岡京を棄てて平安京へ遷った桓武へのあからさまな批判であり、抵抗であった。兄妹にとって、桓武の造った平安京は否定さるべき都であった。ありていにいえば平安京以外であればどこでもよかったのである。それに薬子は、かつて桓武から追放されたという恨みも忘れてはいない。

こうして、積年にわたる鬱屈した怨念が、彼ら兄妹をして平城還都に突き進ませたとみてよい。しかし平城還都＝平安棄都の妄念を晴らすことはついに出来なかった。

五

平城還都は実現しなかったが、このとき旧都に思いをはせ、上皇の呼びかけに応じて平城宮に移った官人たちがいかなかったわけではない。しかし薬子の変は、人々の抱く「故里」への思いを完全に断ち切り、平安京以外



歴史の皮肉とはこういうことなのであろう。

さて、薬子の変の本質は二所朝廷、すなわち（平城）上皇と（嵯峨）天皇との政治的対立にあった。先述したような上皇権が野放しであるかぎり、早晚、起こるべくして起こった事件であつた。それだけにこの変は、その過程においてはもちろん、以後の政治社会や貴族の在り方に及ぼした影響は決して小さくはない。

特に尚侍（内侍司）と同じ権限をもつ蔵人頭の任命が、留意される。蔵人頭は嵯峨天皇が平城―薬子の連繫に對抗するために任命したものであるが、この結果、奏請・伝宣といった宮中の重要事務が、それまでの女官（尚侍）から男官（蔵人頭）の手に移ることとなる。この蔵人頭の職が平安貴族の登竜門となり、それが最初の蔵人頭となった冬嗣（藤原北家）流の繁栄をもたらししたことは、周知のとおりである。

に都のないことを思い知らせることになった。その点十三世紀はじめ、鴨長明が『方丈記』のなかで、「おおかた、この京（平安京）のはじめを聞ける事は、嵯峨の天皇の御時、都定まりにけるより後、すでに四百余歳を経たり」と述べ、平安京が定まったのを嵯峨天皇のときであるとしているのが留意される。長明が桓武による平安遷（造）都を知らないはずはないから、これは薬子の変により「定都」と理解したことを示している。けだしの確な認識であろう。

薬子の変によって藤原式家は衰微し、平安京は、逆にその事件を経ることではじめて永遠の都となった。

また事件後、上皇御所としての「後院」が設けられたことも重要である。

おそらくこの事件で、嵯峨天皇は上皇権の抑制の必要性を痛感したにちがいない。冷然（のち泉に改む）院と朱雀院は、そうした意図をこめて京中に設けられた後院である。ちなみに冷然院は大炊御門南・二条北・大宮東・堀川西の四町を占め、朱雀院は、二条南・四条北・朱雀西・皇嘉門東の八町に及ぶ。ともに京中の、しかも大内裏近辺に用意されたところに、後院の性格を暗示する。

なお、この二つの後院は、皇室の世襲財産として伝えられたことから、のちに「累代の後院」と呼ばれ、嵯峨院や淳和院のような天皇（上皇）個人の後院（二代後院）と区別された。

賀茂斎王の創始も、薬子の変にかかわりがある。嵯峨天皇が変に際して賀茂社に戦勝を祈念したことから、未婚の皇女を同社に奉仕させたのにはじまるものである。伊勢神宮の斎宮に対して斎院と呼ばれたのは、洛北紫野に設けられた斎院に入ったことにちなむ。初代斎院には当時五歳の嵯峨皇女有智子内親王が選ばれた。斎院は斎宮とちがい都に近かったことから、世俗とも交わり、しばしば文芸サロンとなった。紫式部が、当時の「大斎院」（村上皇女選子内親王）を羨望したことは『紫式部日記』で知られるところであろう。華麗だった斎院御禊の行列を見物するために、貴族たちが一条大路に棧敷を構えたことや、場所を求めて車争いをした話などは、王朝期の文学作品にもしばしば登場する。

ともあれ、こうしたことを考えると、薬子の変は起こるべくして起こった事件であり、その結果、ようやく奈良官人の歴史が終焉し、平安貴族の時代がはじまったといつて過言ではない。

六

薬子の変では、主謀者仲成が射殺された以外、関係者のほとんどが罪を軽減されるか免ぜられている。先の葛

野麻呂も、薬子の姻戚者として重科に処されるところを上皇を諫めたとして免罪、藤原真雄に至っては一命を捨てて諫めたとして逆に位階を上げられている。事件が仲成・薬子兄妹の意に出たものとして処理された事情を示しているが、おそらくこれも上皇に対する嵯峨天皇の配慮ではなかったろうか。ちなみに薬子の夫縄主は、九州に左遷されているが、とんだ迷惑であった。

さて、一度は激しく対立した平城と嵯峨の兄弟であるが、その仲もいつしか回復したようである。『経国集』には、上皇の五言詩「旧邑対雪」に和した嵯峨天皇の五言詩「奉和旧邑対雪」が収められており、天皇が旧邑（平城宮）へ出かけることもあったようである。

しかし薬子亡きあとの平城は、ついには女性には心を開かなかった。弘仁三年（八二二）、朝原内親王と大宅内親王の二人が平城の寵を得られず、相次いで後宮から退下している。しかしその一方で、平城はなぜか年若い甘南備内親王を側に仕えさせている。内親王は平城の異母妹であるが、母は種継女東子というから、ほかならぬ薬子の姪に当たる。平城は、あるいはこの内親王に若き日の薬子の面影を見いだしていたのではなからうか。しかしその内親王も弘仁八年二月、平城に先立ち没してしまふ。時に十八歳であった。

平城にとって薬子は永遠の女であったのだらう。

平城の心を思えばあわれでもある。平城宮に一人余生を送った上皇の胸中に去来するものはなんであったのだらうか。

故里となりにし平城の都にも色は変わらず花は咲きけり

『古今和歌集』に、上皇の歌として収める一首である。

上皇は天長元年（八二四）七月七日、その五十一歳の生涯を終えている。遺骸は平城京のすぐ北、楊梅陵に葬られ、その心を汲んで平城とおくり名された。

Ⅲ

宮都の構造

一章 初期平安京の構造

——第一次平安京と第二次平安京——

『山槐記』の賑給記事——序にかえて

近時、古代史の分野で国際的にも論議を呼んでいるものに、わが国の都城制は中国のどの宮都を手本にしていたのかという、都城のルーツをめぐる問題がある。古くから関心のもたれたテーマであるが、発掘調査の進展により古代宮都のデータが飛躍的に豊富となった今日でも、なお結論が出ないところに、この種の問題の困難さがあるがわれよう。いうまでもないことだが、こうした論議が成立するためには、彼我都城の構造が明らかでなければならぬが、わが国の場合、その前提部分に問題があるように思う。たとえば平城京についていえば、北辺部の有無や形状をめぐる、幕末、藤堂藩古市奉行所の役人で国学者でもあった北浦定政以来、いくつかの説が出されたものの、いまだ帰する所がない。今日では北辺部は右京にのみ存するという変則的な形状が考えられて⁽¹⁾いるが、定政が嘉永五年（一八五二）に完成した平城宮⁽²⁾図には、大内裏の北（およびその東西）に一定の空間、いわゆる北辺坊を有する「藤原京型」の平面構成が描かれている。定政が何を根拠にそのように理解したかは明らかでないが、一概に否定し切れないものがあり、検討の余地があるように思われる。そうした点についての理解如何では、日中都城の比較の前提そのものがかわることになる。

全く同様のことが長岡京や平安京についてもいえるのではないか。ことに平安京の場合は、周知の如く「大内裏図」や「京中図」など各種指図があるところから、発掘調査の上では大きく制約を受けているものの、平面構成や構造などに関する知識は格段に豊富で、それが長岡京以前の都城発掘のよりどころともされてきた⁽³⁾。しかもこれらの指図によって、平安京は藤原京とは違う「北闕型」(大内裏が都城の北詰めまである)であったと了解されてきたわけである。しかしわれわれは、指図の存在ゆえに、かえって平安京理解の陥穽にはまっていたのではないだろうか。

ちなみに平安京の指図としては、近衛家本と九条家本延喜式所収の古写図とがもっとも古い。前者は「元応元年(一三二九)八月三日、於鎌倉大藏稻荷下足利上総前司屋形一模^レ之了、右筆頼円(花押)」という奥書があり、後者も「四位大外記中原師重之本云」という勘記から、やはり鎌倉期(師重は建久九年十二月に任大外記、建保六年七月に叙従四位下)につくられたことが知られ、ともに確かな由緒をもつ。むろん手本とされたのは、さらにそれ以前、おそらく平安時代にも遡る指図であつたらう。

しかしこれらの指図は、京中図にしても大内裏図にしても、同一の図面に時期を異にする邸宅や官衙などが書き込まれており、時間的な経過の中で理解する必要がある。そればかりではない、全体の構成そのものについても、重大な変更が書き落されているのではなからうか。

わたくしがそのような疑問を抱くにいたったきっかけは、平安末期、中山忠親の日記である『山槐記』長寛二年(一一六四)六月二十七日条の、次のような賑給記事に出会ったことにある。いささか長文にわたるが、立論の出発点でもあるので、左に關係部分を掲出する。

賑給定、

(中略)

賑給使定文^{白紙}也、書樣事、

賑給使

左京

一条^{加北}
辺^一

左衛門權佐藤原朝臣為親

少尉平

康俊

大志清原

能景

二条

左兵衛權佐藤原朝臣親信

少尉藤原

盛房

少志大江

時賢

右京

一条^{加北}
辺^一

二条

(左京)

三四条

五六条

七八条

(右京)

三四条

五六条

七八条

長寛二年六月廿七日

(便宜上、左右兩京を対比した形で記した)

以上大概如此、(中略)亦上卿被^レ仰^二大丞^一云、或書^二七八条^一歟、或書^二七八九条^一、此例文、久寿二年只書^二七八条^一、其外皆書^二七八九条^一、被^レ案旨如何、大丞申云、可^レ書^二七八九条^一歟、上卿被^レ仰曰、七八条已在^二其中^一、只随^二存知^一可^レ被^レ書者、亦上卿如何之由被^レ仰、予并右大丞兩人共申、可^レ被^レ加、於^二宣仁門外^一(大外記師元)申云、書^二七八条^一、已九条其中候也、加^二北辺^一者一条北武者小路候之故也、依^二上卿御疑^一、外史^一□等書^二七

八条一、最不可然事也、右大丞有不甘心之氣、予依無益強不申出、久寿二年定文、左右京共書三七八一
 敷之由、予奉尋、上卿被仰云、右京許也、左京者加九字、以之知之落字敷、此事專無其理、所謂一条
 者、自土御門一至于中御門、二条者、自中御門一至于二条、三条者、自二条一至于三条、如此次第可計、
 仍以坊門立三条中、一条内有四坊、一坊内有四保、小一条者、近衛南東洞院西町也、東三条者、二条北
 西洞院東也、小六条者、楊梅北鳥丸西也、故皆有二条号、何以大路許在九条哉、亦北辺者、一条南土御
 門北也、昔以土御門為一条大路、其後北辺二丁被入宮城、既為京中、仍有賑給、師元存武者小路、
 最不審、重可尋事也、依其儀者、京極東有朱雀堤、被寄彼如何、亦右京加北辺、右京有武者小路、
 敷、旁無理、無異儀可書三七八九条事也、左大丞書了定文、(後略)

賑給とは、水旱損の時、被害者に官の米塩を放出支給する社会救済の制の一つであるが、その際賑給定め、す
 なわちそのことに当る官人や担当範圍(この場合は京中)を書き上げた書類を作成するのが慣例であった。『山槐
 記』の記事は、当日用意された賑給定めの書式についての議論で、「一条加北辺」から順次南下して「九条」に
 至るべきところ、左右兩京とも「七八条」と記すだけで九条の記載がなかったことに端を発している。それにし
 てもここには平安京理解の上でいくつかの重要な事実が指摘されており、これから逐次検討を加えていくが、当
 面注目したいのは、上卿に提出された定文のうち、左右兩京の一条に「加北辺」と付記されている点に関連し
 て忠親が次のように指摘していることである。

亦北辺者、一条南土御門北也、昔以土御門為一条大路、其後北辺二丁被入宮城、既為京中、
 すなわちこれによれば、

(1) かつては土御門大路が一条大路であった。

(2) その後(一条大路を二丁北上したこと)、北辺二町(分)が宮城(大内裏)に取り込まれ(それに伴い北辺の兩翼部

も)京中とされた。

というのである。もし忠親のいうところが事実なら、大内裏の平面構成はある時期大きく手直しされたことになる。これは、平安京研究の長い歴史の中で、従来誰一人として考え及ばなかった事態であり、忠親の指摘は、初期平安京の構造を理解する上で、まことに重大といわねばならない。

ところで、忠親のいう一条大路の北上については二通りの理解が可能であろう。その一は、平面構成の上で北闕型の北への延長拡大、すなわち平安京はもともと北闕型であり、その形態のまま拡大されたとするものであり(図6(1)↓(ハ))、その二は、藤原京型であったものが大内裏の拡大により北闕型にかわったとする見方である(図6(ロ)↓(ハ))。単純に考えれば、第一の理解(これを仮説(1)とする)が自然であり妥当なように思われる。しかしそれで

は、いささか不都合な点が生じてくるのである。なぜなら、右の「拡大部分」(図6(1)の点線内)内外には、早くから桃園・茶園その他、宮廷関係の禁園や大蔵の倉庫群が設けられていたばかりでなく、賜姓皇族や有力貴族の邸宅あるいは官衙の厨町なども存在しており、それらのすべてが京外であったとは考えられないからである。そのあたりの検討が本稿の課題となるわけであるが、右の事実からも、仮説(1)はまず成り立たないといつてよい。したがってわたくしは、第二の見方(これを仮説(2)とする)、すなわち「北辺部」はもともと京中であり、その一部(A)

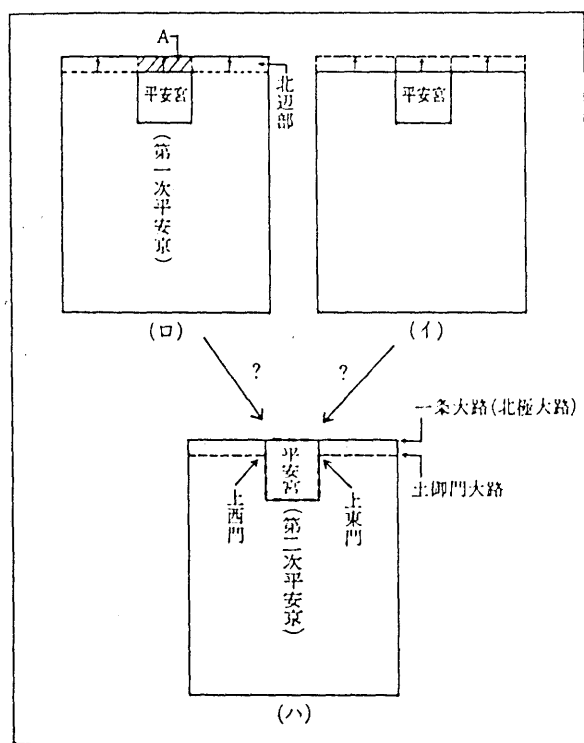


図6 平安宮の変遷

を大内裏内に取り込むような形で一条大路を北上させたのではないかという理解の方を採りたい。つまり二丁北にはすでに東西に走る北辺（京極）路あるいはそれに準ずる境界が設けられており、それが新たに一条大路とされたとみるわけである。このことはおのずから、図6の平面構成（現存京中図・大内裏図がこれ）についても、それが、平安造都時にまでは遡れないことを推測させる。

平安京は、元来は大内裏の北に一定の地域、いわゆる北辺部を擁する藤原京型の平面構成をとっていたのではないか、それが北闕型にかわったのは、『山槐記』にいう一条大路の北上の結果ではないのか、という問題提起は仮説の域を超えるものがありそうである。そこでわたくしは、論述の便宜上、変更される以前を「第一次平安京（大内裏）」、以後を「第二次平安京（大内裏）」と呼ぶことにする。以下、北上の時期や理由をはじめ、初期平安京の構造をめぐる諸問題を多角的に検討していきたい。

一 一条大路の北上

土御門大路がもとは一条大路であり、ある時期それが二丁（町）北に移されたという事実については、不思議なことに、他の記録には全く所見しない。しかしその点についての中山忠親の発言は自明の理の如くであり、識者の間では知られた事実であつたらしく思われる。残念なのは「昔」というだけで、その時期に言及してくれていないことである。文意から判断するのに、北上したことをいえば事足りたからであろう。忠親のいう「昔」とはいつのことだったのか。

これについては、当然のことながら上東門・上西門（東・西土御門）の初見年次が一つの目安となろう。この二門は、一条大路の北上と大内裏の北への延長・拡大、すなわち第二次平安京の造成にともない、その（旧）一条大路に向う宮門として新たに設けられたものという推測ができるからである。平安京（宮）の宮城門が、十二で

あったそれまでの宮都と違い十四となったのも、その結果であるに違いない。もっとも、大内裏拡大に伴ないこの二門が造られたとする理解は、仮説(I)の場合でも可能であるが、先述の理由により、おのずから排除される。そこで以下、右二門の史料上の初見をおさえることにより、逆に一条大路の北上の時期(の下限)を明らかにしていきたいと思う。

(1) 北極大路

延長五年(九二七)に撰進された『延喜式』は、平安京を研究する上でも重要な史料であるが、その「左京職」京程の条に、「北極(大路)并次四、大路広十丈、宮城南大路十七丈」(傍点ならびにカッコ内は瀧浪註。以下同)とある。『延喜式』ではこのように、北極大路とか南極大路、あるいは宮城南大路・宮城東(西)大路といった表記をしていて、一般に知られる街路名が用いられていない。これは貞観期の成立になると推定される『貞観儀式』でも同様で、それだけ古い用法と考えてよいが、このうち北極大路については、承和十一年(八四四)十二月二十日、賀茂社に下された太政官符(『類聚三代格』卷一)が留意される。賀茂(御祖)社(下鴨社)近辺の川原や野を神戸百姓に禁護させることを認めたもので、その四至のうち「南限_ニ故参議左近衛大将大中臣諸魚宅・北路末」とある。これは諸魚宅の北側東西路を(東へ)延長した線上(京外)が南限とされたことを意味し、下鴨社より南、現在の糺川原やその周辺の野をさすものであろう。地理的な関係からいって、この北路は、北極北辺大路のことと考えられるが、そうと断定するには、この場合決め手を欠く。しかしこれについては、寛仁元年(一〇二七)十一月二十五日、同じ賀茂社に行幸した後一条天皇が当社に寄進した、愛宕郡八郷の南限が「限_ニ皇城北大路」(『小右記』)であるのが参考になろう。この皇城北大路は、いま問題にしている北極北辺大路にはかならないが、伝統的にこれが社領域の境界とされてきたことを思わせる。ついで先の『貞観儀式』(卷一)のうち、

賀茂祭儀に関する記述の中に見える「北辺路」は、まず間違ひなく北極北辺路であろう。賀茂祭に当り、内裏を先発した奉幣使が、「北ノ辺ノ路」に到り斎王の出発を待つ間、山城国司も同所に祇承して、斎王の輿の到着を待ち、騎兵・歩兵を率いてこれを先導すべきことが記されている。山城国司の所管は京外（山城国）であったから（京中は京職の所管）、そこで待機した「北辺路」とは、おのずから京城と山城国の境界の道、すなわち北極北辺大路以外にはありえない。山城国司と京職の所管分掌は、のちのちまで厳密に実行されている。

北辺路が北極大路であることを確認したのは、のちに問題とするように、旧一条大路（上東門大路）を北辺路とする理解もあったからであるが、『延喜式』は、この北（辺）路こと北極大路と、宮城南大路すなわち二条大路との間に四大路があったとする。その四大路とは、南からいって郁芳門（のちに大炊御門とも称される。以下同じ）・待賢門（中御門）・陽明門（近衛御門）の三大路に、残る一つが上東門（土御門）大路であろう。ここには上東門の記載はないが、同じく『延喜式』（左衛門府）の、宮城門の守衛に関する次のような記事の中に、十四門の名称がすべて所見し、残る一門が上東（上西）門であることが知られるからである。

凡宮城門者、并令_レ衛士衛_レ之、美福・郁芳・待賢・陽明・上東・達智等門左府衛_レ之、皇嘉・談天・藻壁・殷富・上西・安嘉等門右府衛_レ之、但朱雀門左右相共衛_レ之、偉監門左右隔年通以衛_レ之、

しかも管見によれば、これが上東・上西門を含め宮城十四門がそろって所見する、もっとも早い時期の用例である。

なおこの二門について『拾芥抄』は、「或書云、西会_フ廂門、東会_フ廂門、是上西門（上東門）_{無額イ}本名也、見_ニ日本紀云々」と記し、裏松固禪も『大内裏図考証』において、『拾芥抄』のこの記載を引用し「見_ニ日本後紀」と記す（誤写か）が、『日本書紀』『日本後紀』はもとより、六国史のどれにも上東門（上西門）・会廂門の文字は見当たらない。東会廂門を上東門の本名とする説は留意されるが、他に所見がない。八省の南内門である会昌門（『統日本後紀』承和七年五月九日条に所見）あたりと混同したものであろうか。

(2) 二つの北辺大路

上東(西)門および上東(西)門大路は、おそくとも十世紀初頭には存在した。おのずから一条大路の北上はそれ以前とみなされるが、時期の確定のためには、なおしばらく関連史料の検討が必要であろう。

上東門・上西門大路について『侍中群要』(焼亡奏事)に次のような記事がある。京中が焼亡した際、その場所の条里号を報告する要領を述べたものである。

(A) 申_三条里号_二之事、一条大路_{申_三北辺_{大路}}、二条以下如_レ恒、大宮大路_{申_三宮城東大路_{若宮城西大路}}、陽明門大路、待賢門大路_{以下、}
上東門大路_{東京、}上西門大路_{西京、}京極大路_{東、}堀河大路_{申_三号元小、}洞院東大路_{西京、}……。

ここに所見する上東門大路・上西門大路の名は、宮城の門号に即した呼称であり、かつ左右京の区別を明示する意図が含まれているところから、のちに一般化する土御門大路の名よりは古い呼称と考えられる。『口遊』が土御門大路を上東門大路の「俗称」であるとしているのも留意されよう。『侍中群要』にその土御門(大路)名が所見しないのは、記事内容の古さを思わせる。この『侍中群要』は、侍中こと藏人(頭)として必要な知識や心得を、『藏人式』(寛平二年、橋広相の撰述)をもとに類聚したもので、成立は平安後期に降るとみられるが、所収記事のなかには古いものが含まれており、右に引用した箇所についても、時期を遡らせることが可能である。ちなみに大炊御門(郁芳門)や中御門(待賢門)・近衛御門(陽明門)が通りの名として一般化するのも、土御門の称の出現に触発されたものかも知れない。むろん十世紀以後のことである。

『侍中群要』で、先の記事との関連で留意されるのが次の記事である。

(B) 申_三条里号_二事

北辺大路_{或_レ只_レ申_三一条_{大路}、}是俗説、上東門大路_{西、}陽明門大路_{十二門准_レ、}二条大路_{以下、}宮城東大路_{西、}洞院東大路_{西、}東京極大路_{西、}……。

同じく「焼亡奏事」を敷衍した記述の中に、「申_ニ条里号_ニ事」として書かれたものであるが、注目されるのは、(A)にいう「一条大路申_ニ北辺大路」がここ(B)では「北辺大路或只申_ニ一条大路、是俗説」と記されていることである。一条大路は北辺大路ともいう(A)、(しかし)北辺大路をただ一条大路というのは俗説である(B)——なぜ逆はかならずしも真でないのか。

まず、一条大路を「北辺大路」とも称するという前者(A)については、一条大路が宮城の北辺を通る道である以上、疑問とするところはない。問題は、後者(B)がその「北辺大路」のことを「只」(たんに)一条大路とだけなのは俗説であるとする論理にある。それだどうして俗説なのであろうか。

このことに関してわたくしは、『清辨眼抄』の記述が手掛りとなるように思う。本書は鎌倉初期の成立になる故実書であるが、次のような関連記事がみられる。

(イ)奏_ニ焼亡之事_ニ詞

陽明門大路北若南不_レ称_ニ近衛御門、余門准_レ此可_レ知、但土御門称_ニ上東上西門、又称_ニ北辺大路……

(ロ)称_ニ名大路小路、北辺大路一条、上東門大路土御門、鷹司小路、陽明門大路近衛、勘解由小路……

これによれば、(イ)では「土御門称_ニ上東・上西門、又称_ニ北辺大路」、すなわち北上後の北極大路Ⅱ(新)一条大路を北辺大路とする一方、(ロ)では「北辺大路一条、上東門大路土御門」、すなわち北上後の北極大路Ⅱ(新)一条大路を北辺大路ともいっており、北辺大路に二通りの理解があったことを知る。先に検討した北極大路とは別に、北上以前の大内裏北辺の東西路も北辺大路と称していたことがわかる。つまり前者(イ)は第一次平安京時代の宮城(大内裏)北辺路であり、後者(ロ)は第二次平安京での宮城(京域)北辺路である。北辺の語そのものが北側を意味する一般的な言葉である以上、どちらが間違いというわけではないが、鎌倉時代では北辺大路Ⅱ一条(北極)大路というのが自明であったのだから、土御門(大路)も北辺(大路)であるとするのは、この場合適切な表現ではない、とい

うより誤解を招きかねない。しかしそのことが逆に、『清辨眼抄』の典拠とした史料の古さを思わせよう。こうした「奏焼亡事」が義務づけられた時期は明確でないが、散斎以外は直ちに京中失火を報告させることを恒例化した寛平五年（八九三）の法令が本項目の最初に揭示されているから、おそらく九世紀末には始まっていたとみてよい。むろん『清辨眼抄』が作られた時期には、「奏焼亡事」は伝統的行事としても形骸化していたから、本書はそれを故実として記したまでであるが、記述のなかに第一次平安京（北上以前の平安京）時代でしか通用しない用法が残っているのは、けだし注目値する。

北辺（大路）の呼称をこのように理解すれば、『侍中群要』で俗説と注記されたことの意味もおのずから納得されてくる。すなわち北辺大路をたんに、一条大路と呼びかえるだけでは、間違いではないが、第一次平安京の宮城北辺路、つまり旧一条大路（土御門大路）との混淆・誤解を招き、厳密でない、との意味にはかならない。これは『清辨眼抄』の記事ともども、中山忠親がいう一条大路の北上が、まず間違いのない歴史的事実であったことを裏づけるものであろう。おそらく忠親の有した知識も、こうした故実に基づいていたと思われる。

(3) 一条大路溝

さて、遅くとも十世紀初頭以前であることは確かだとしても、一条大路の北上はいつのことであつたろうか。そのことを示す直接的な史料は見当たらないが、わたくしは『三代実録』元慶八年（八八四）八月二十八日条に載せる、「以_二山城国正税稻一千三百八十七束九把_一、充_下造_二左京北辺溝橋等_一料」という記事に注目したい。この場合、左京北辺の溝橋を「造る」とは、単なる溝の修理や橋のつけかえとかいう以上に、この時本格的に溝橋を造り北辺を整備したものと推測されるからである。それを山城国が正税稻を支出して担当したのは、その溝が京外にあったからで、そう判断するのは、先に賀茂社の祭儀について述べたのと同じ理由による。これが京域内であ

れば、京職が事にあたった。たとえば堀河の場合、天長十年（八三三）五月二十八日、「課_レ左右京戸_一、令_レ輸_三檜柱一万五千株_一、以充_三東西堀河杭料_一」という太政官処分が下されている（『続日本後紀』）。堀河は京中の河川であったから、その杭料は山城国の公民でなく、京戸に賦課されたのである。

興味ぶかいのは、この山城国による北辺溝の整備が、以後長期にわたって行なわれていたらしいことである。百三十四年後のことになるが、『小右記』寛仁二年（一〇一八）十一月二十五日条に、「一条大路隍山城国所_レ堀、自今以後、随_三宣旨_一、（賀茂）下社司可_レ令_レ堀事等可_三宣下_一」とある。先の「北辺（大路）」溝が、ここには「一条大路」隍（溝）と出てくるのも時代差を思わせるが、この一条大路は、別の記事に「皇城北大路」（『日本紀略』同日条）とも書かれているように、北極北辺大路、すなわち北上したのちの一条大路であることは明らかで、その外側の溝隍がここでも山城国の担当とされているわけである。この一条大路（隍）は、元慶の北辺（溝）と同じものと考えてよい。藤原京型の平面構成からいって、北上以前の北辺（土御門）大路（溝）ならば京中にあり、したがって山城国がこれに関与することはなかった。

溝隍の修造がこの時下鴨社にゆだねられたのは、寄進地（愛宕郡四カ郷）の中にこの地域が含まれていたことによるが、こうした措置が、その後における賀茂祭の発展、たとえば一条大路に見物のための施設としての棧敷、いわゆる一条棧敷が設けられるなど、この祭の盛大化に及ぼした影響は少なくなかったであろう。

ところで元慶八年、北辺の溝橋が新たに造られたという記事を根拠に、平安京の周囲には羅城はなかったにしても、それにかわる溝や盛土があったと指摘されたのは村井康彦氏であるが、わたくしはこの時の溝橋の造営が一条大路の北上にともなう北辺大路の整備、いわば第二次平安京の造成工事の一環であり、前後の事情からみて、この元慶八年の北辺の整備（詳しくいえば再整備）は、一連の拡張工事の最終段階のものではなかったかと推測する。もっとも右京（北辺）については、北辺溝の整備を示す直接の記録は見当らない。平安京が左右相称形の構

成をとっていた以上、この前後、同種の工事は右京にも及ぼされたとみられるが、右京の衰微を考えれば、左京に比して不十分であったことは予想されよう。ともあれ以上のことからわたくしは、一条大路の北上時期を貞観から元慶（八五九―八五）にかけての頃と考えている。平安遷都から七・八十年後のことである。

二 大蔵倉庫群の整備

京中の賑給定文の記載様式に関連して述べた中山忠親の発言のうち、とくに「昔以_二土御門（大路）_一為_二一条大路_一、其後北辺二丁被_レ入_二宮城_一、既為_二京中_一」という個所を手掛りに、初期（第一次）平安京の構造について考察を重ねてきた。すなわち平安京は当初「藤原京型」の平面構成をとっており、それがのちの京中図や大内裏図に見られるような「北闕型」にかわつたのは九世紀末、おそくとも元慶年間のことではなかったか、というのが、これまで述べてきた事柄の要点である。次の問題は、平面構成の変更がなぜ行なわれたのか、その理由の解明にある。

(1) 宴の松原と大蔵

ここでもう一度忠親の指摘について考えてみたい。そこでふれているのは、一条大路を北上したことにより北辺（部）二丁（分）が「宮城」に取り込まれ、また「京中」とされたという点である。ここに二丁という数字が出てくるのは、北路とも北辺大路ともいわれた北極大路が、一条大路よりその距離ほど北に、すでに存していたからである。したがって（旧）一条大路の北上とは、直接にはその北極大路が（新）一条大路と改称された（そして旧一条大路は上東門大路と改められた）ことであって、二丁北に新たに東西大路が通されたわけではない、ましてやその間が宅地として新しく造成されたというものでもない。つまり一条大路の北上は、平安京が藤原京型の平面構成をとっていたからこそ可能だった措置であり、しかもそこに唯一の現実的な条件があったわけで、工事は

大内裏を囲繞する築地塀の北への延長を主とするものであったと思われる。したがって造都時のような大規模な工事が行なわれたというものではない。

さて一条大路の北上により、(イ)大内裏の北方一帯(大内裏北辺部)は大内裏(宮城)内に取り込まれ、また(ロ)その両翼部(左京北辺部・右京北辺部)も「京中」とされた。前者は大内裏の拡大であり、後者はいわば京城の拡大であるが、北上の主眼はそのいずれにあったのであろうか。

まず後者について言えば、「両翼部」には九世紀初頭以来、厨町や親王・公卿邸宅があり、早くから市街化されていたにも拘わらず、他の京城とは異なる扱いがなされていたので(詳しくは「城北の禁園」参照)、その部分を京中として設定しなおすのが目的であったと考えることも出来よう。この地域を取り込むことにより、賦課の対象の増大が期待されるからである。しかし仮にそうした要素があっても、おそらくそれは結果において言えることで、もともと京城内であり、また右に見たようなこの地域の特殊性に照らしても、当初の意図がそこにあったとは考えがたい。

それよりもわたくしは、北上したのがほかならぬ「一条」大路であったことを重視したい。一条大路とは、すでに見てきたように、南の二条大路と彼我対応して、宮城域の北と南を限る東西路のことであり、したがってそのの北上は、とりも直さず宮城域の北への拡大を意味していたからである。一条大路の北上は、(イ)の大内裏の北への延長・拡大に目的があったにちがいない。

後世の大内裏図、つまり第二次平安京の大内裏を見ると、北部には大蔵省およびその所管になる倉庫が群立しており、全体のスペースのうちの主要部分を占めている。このことは——結果をもって論ずることになるが——大内裏の拡大が、その大蔵倉庫群の整備に関わる措置であったことを推測させる。むろん、その東西にある茶園や兵庫寮などもそれに合わせて再編されたものと思われるが、全体の構成の上からいっても、大内裏拡大の直

接、最大の眼目がこの大蔵倉庫の整備充実にあったことは、まず間違いないであろう。

ちなみに拡大以前、つまり第一次平安京大内裏における大蔵の倉庫群がどこに配置されていたかについては、その規模ともども明らかでない。

周知のように平安京では、九世紀のはじめ、大同年間を中心にしばしば官司の統廃合が行なわれており、そのおおよそは『類聚三代格』巻四に収める一連の文書で知られる。もっとも大蔵省については、延暦十八年（七九九）四月、主鑑大少各一員を省いているものの、大同三年（八〇八）七月には大丞・少録各一員を増員し、また翌四年三月には史生八員を加えるまでに増大している。当然こうした措置に伴い、官衙の建造物についてもかなりの変動があったに違いないが、詳かにしない。大内裏図のなかに南都所伝本という一本があり、流布本より古いとされているが、断簡であり、肝心の部分は知られないのである。

その点で留意されるのが、大内裏中央部に広がる空間、いわゆる「宴（縁）の松原」の存在である。内裏西から武徳殿にいたるまでのかなり広い空間を占めるもので、若き日の中関白藤原道隆が、弟の道長と競った肝試しで、右衛門陣から豊樂院へ行く途中、宴の松原あたりから聞こえてくる声におびえ、一目散に逃げ帰ったというエピソードは『大鏡』巻下に収めるところである。これ以前、『三代実録』仁和三年（八八七）八月十七日条によれば、九世紀の末でも、鬼が出没するという噂のあったことが知られ、早くから人々に恐れられるような淋しい場所となっていた。ここは、「宴」（「縁」の字をあてるものがあり、エンと訓む）の文字からいって、野外における饗宴の広場とされたとも、歴代遷宮（宮内遷宮）の伝統のなかで、内裏を建て替えるべき予備空間ではなかったか、とも推測される場所であるが、ともにそれを明示する史料がない。ただし後者（遷宮）について実例がみられないのは、平安京に入ってから宮内遷宮は清涼殿の建て替え、いわゆる「動かざる遷宮」によって処理されたからである。したがって、仮に当初そうした意図が込められていたとしても、宴の松原がそのために用いられること

はなかったはずである。^(?)

そんなことから、この「宴の松原」に、第一次平安京時代、大蔵省の倉庫群があったのではないかと考えてみるのだが、その可能性はまずなさそうである。あとにもふれるように、倉庫はつねに火災の恐れがあり、大蔵についてというわけではないが、それに備えて周辺に池や渠が設けられ、五十丈以内に館舎を設置することは禁じられていた(『養老倉庫令』)。そうした倉庫の群列が、内裏のすぐかたわら(西側)にあったとは考えがたい。確証はないが、「宴の松原」は延暦の造都時から、のちにここを核として大内裏域が「内野」と呼ばれるようになるまで、一貫して広場として推移したと思われる。

宴の松原ほどの広い空間が除外されとなると、大蔵倉庫群の適地を大内裏内の他の場所に求めるのは困難、というより不可能であろう。大蔵省(倉庫群)は大内裏(宮域)の内ではなく、大内裏の外域にあったのではなからうか？

(2) 倉の条件

『類聚国史』弘仁十四年(八三三)十月二十一日条に、大蔵十四間長殿の焼亡記事がみえる。長殿に火災が発生し、役人達がかけつけたところ、火の回りが早くすでに制止出来る状態ではなかった。そこで「左・右衛門・東西京・呼告集衆」め、三十人ばかりの勇士が北長殿に登り、湿った幕をかぶせて消し止めたというものである。このように京中の人間を消火に動員できたのは、大蔵の倉庫が大内裏の内ではなく、外にあったからではなからうか。大内裏内にある官衙の場合、こうした事例を見ることは出来ない。一カ月後の記事(同前、十一月二十二日条)によると、この火災は優婆塞らの放火によるものであったというが、この場合、管理上の不備は大蔵のあった場所とも無関係ではなさそうだ。また火災の当日夜には大臣以下が大内裏に侍し、諸門の出入りが禁じられて

るが、この諸門は、おそらく大蔵の倉庫群を取り囲んでいたと思われる垣塀の門ではなく、大内裏の宮門のことであろう。それを閉鎖したのは、不測の事態が発生するのを防ぐためであった。この宮門閉鎖が大蔵の焼亡中、つまり京中の人間を呼び集めているさ中のことであれば、その中に焼亡中の倉庫があったとは考えがたいから、大蔵省の倉庫群は問題なく大内裏外にあったことが証明されるのであるが、残念ながらこの記事からそこまではわからない。もっともこの諸門閉鎖については、それが事後であったことから、逆に、大蔵は大内裏内にあったという見方が出来なくもないが、先の理由からここでは採らない。この夜、内裏に宿侍した大臣達は、消火に功のあった者の選考に当り、翌朝、奏聞している。

大蔵倉庫の場所に関しては、それよりも『三代実録』貞観八年（八六六）七月十三日条に、「大鳥、集大蔵正蔵院納薬倉上」とある納薬倉の存在が注目される。この納薬倉は、禁園（薬園）で栽培された薬草が納められたのになむ呼称であり、「野（御）倉」とも称されていた（『江家次第』『大内裏図考証』）。のちのことになるが『親信卿記』によると、天延二年（九七四）十二月五日・六日、野御倉から肉縦容・遠志などを取り出して関白藤原兼通に賜わっている。ともに強壯剤として用いられた漢方薬であるが、開園の儀は不動倉のごとくであったとい、倉の形状が推測される。野倉という表現は、いかにも大内裏の北方に広がる薬園に存在する倉庫にふさわしいが、のちの呼称で、納（薬）倉の当て字である。しかし右の貞観の記事から、この納薬倉と並んで大蔵の正蔵院があったこと、したがって大蔵の他の倉庫群も、園池の一部、つまり大内裏北方にあったことが推測されよう。ちなみに『続日本紀』延暦元年（七八二）七月三日条に、この日雷雨のあったことを記すが、雷が落ちたのであろう、「大蔵東長蔵災、内厩寮馬二疋震死」したという。これは平城京でのことであるが、東長蔵付近では馬が飼育されていたことが知られよう。

ところで、長岡京の場合は見当たらないが、平城京や平安京（第一次）時代の大蔵関係記事にはほぼ共通して、天

皇が「幸大藏省」し、陪従の侍臣以下に禄物を給うとみえるのが留意される。井上薫氏⁽⁸⁾によれば、『統紀』の記述では、天皇が内裏から京中・京外へ出かける時は「幸」、これに対して大内裏内の他の官衙や殿舎に移御する時は「御」と書き分けられているという。例外（『続日本紀』天平十年十月七日条）がないわけではないが、この指摘に従うならば、「幸大藏省」との記載はいよいよもって大藏省（及び倉庫群）が大内裏の域外にあったことを思わせる。もっとも管見によれば、大藏省への移幸記事は延暦十五年が最後である。

平安時代、大藏省には正倉（藏）院・率分所あるいは長殿など所管の倉庫が多数あった。こんにちと異なり、当時の大藏省は経済官庁ではなく、一部生産工房をかかえていたが、主として官物の保管に当たっていた。すなわち諸国から運京される調庸物や交易雑物の保管・管理に当る一方、これを諸司の経費や官人の禄物として分配するのを業務とし、おのずから大藏省にとって倉庫の安全は第一義であった。その意味で、基本的には相通ずる地方官衙（国衙・郡衙）における倉庫（正倉）と館舎の在り方が参考となろう。国衙や郡衙など地方官衙に付属する倉庫群の具体的な様相は、近時、発掘調査の進展にともない漸次明らかになってきたが、いずれの国を問わず正倉は必ずしも庁舎から離れたところ、別の区画に設けられ柵で仕切られている。延暦十年（七九二）、類焼をさけるために郷倉を設置した際、倉庫間に一定の距離をおくよう命じられたことは知られる通りであり（『続日本紀』同三月十三日条・『類聚三代格』卷十二）、福岡県小郡遺址の場合、まわりに溝のめぐらされていたことも明らかにされている。こうした配慮が、中央官衙の配置においても払われていたことは十分考えられるところで、大藏の倉庫群が大内裏の域外（北方）に設けられていたとする推論は、けっして荒唐無稽とはいえないと思う。

その点で岸俊男氏が、平城京の場合であるが、平城京と北方の松林苑との中間地帯に大藏省の倉庫群の設けられた可能性を想定されているのは興味深い。おそらく平安京大内裏図から着想されたものと推測するが、奈良国立文化財研究所の一九八一年度報告書⁽¹⁰⁾は、その岸氏の説を前提として、宮城の背後に大藏省があったとしている。

ただしそこでは、北辺坊が存在したとするなら大蔵省の占地は成り立たないという理由から、宮城の背後の北辺坊の存在についてはこれを否定されている。つまり大蔵省の倉庫群を大内裏の外で京（域）外にあったと理解されているわけである。わたくしは平城京も平安京と同様、基本的には藤原京型の平面構成をとっていたと考えており、また北辺坊があることと大蔵省が存在することとは矛盾するものでもないから、大蔵が京外でなければならぬとする点には、にわかに賛意を表しがたいが、大内裏の北方背後にあったとする観点は注目に値しよう。

長岡京については、最近（昭和五十七年秋）、平安宮大内裏図で大蔵にあたる地域から礎石が発見された。遺構が総柱の倉庫様の建物や石組溝であり、かたわらに池溝が発見されたことから大蔵倉庫跡かと話題を提供したが、確認されるまでには至っていない。これを大蔵倉庫跡としても、その位置は朝堂院や内裏として確認されている場所から四町以上も北に離れており、わたくしには大内裏域外とみる方が自然なように思われたが、今後の検討に期待したい。ともあれ平安京はもとより、平城京やおそらく長岡京でも、大蔵省の倉庫群が大内裏外（北）にあったとすれば、それが大内裏の中に取り込まれたところに、平安京（第二次）の特徴があったと言えるのではあるまいか。

(3) 官庫の整備と元慶官田の制

一条大路の北上が、大内裏の外にあった大蔵倉庫群を大内裏内に取り入れることであったとするなら、これは、類焼を避けるため別区画に設けられていたという本来の趣旨に反する施策といわざるを得ない。しかしそれをあえて行なったのは、この時期、大蔵の管理強化とあわせて、倉庫群の整備——規模の拡大とより機能的な運用を必須とする事情があったからにちがいない。わたくしはそれを、新しい財政制度の実施に伴う措置であったと考える。元慶官田の制がそれである。

元慶官田の制とは、元慶三年（八七九）、畿内五カ国に四、〇〇〇町歩の官田を設置し、それからの穫稻（直営方式の場合）もしくは地子（請作方式の場合。この方が主となる）をもって逼迫する中央財源を支えようとしたものである。その設置理由は、建策者である中納言藤原冬緒の奏状に明らかである（『類聚三代格』元慶三年十二月四日官符）。

近代以来一年例用位禄王禄、准穀十七万余斛、又京庫未_レ行_三衣服月料_一、必給_三外国_一、其数亦多、並是正税用尽、終行_三不動_一、当今年中所_レ用卅五六万斛、又有損之年多費_三不動_一。

すなわち、京庫で支給すべき位禄・王禄や衣服料・月料など官人給与財源が不足し、近ごろはそれを便宜外国（地方国衙）で支給してきたが、そのため地方国衙の正税官稻を用尽し、平時は開用してはならない不動穀を流用するまでになった。そこでこうした地方財政の圧迫、崩壊を回避しつつ、中央官衙財政を再建するために、畿内にあらたな財源として官田を設定したのである。この元慶官田の詳細は既往の研究にゆだねるが、四、〇〇〇町歩（山城・河内・摂津国は各八〇〇町、大和国一、二〇〇町、和泉国四〇〇町）の官田は直営もしくは請作方式によって耕営され、それによる穫稻もしくは地子があらたな財源とされた。その結果大量の官稻が中央官庫へ運ばれることになったわけである。

元慶官田に関する従来の研究では、経営方式や労働力の問題、あるいは諸司への分割といったことが主として論じられ、明らかにされてきたが、運京されてくる大量の官稻の納入・保管の問題についてはほとんど取り上げられることはなかったように思う。藺田香融氏⁽¹³⁾や村井康彦氏⁽¹⁴⁾が指摘されているように、この時期中央官衙財政が、それまでの軽貨物中心から重貨物（正税）へと移行する傾向を考えても、収蔵庫の整備は大きな課題であったはずである。その意味からもこの官田の制は、耕営の推進とともに、官庫の整備があつてはじめて十分に機能するものであったといっても過言ではない。

元慶官田は、設置の二年後あたりから諸司（官衙）に分割されはじめ、それぞれの官衙領となるが、しかし過半は本来の官田として存続する。諸司田化された官田の官稲については、諸官衙付属の廩院に収納されたと思われるが、それぞれに十分な施設があったとは考えがたく、やはりいったんは大蔵省所管の倉庫に運ばれ、それから随時運用されたと考えられる。ともあれそうした官田の制の実施が、これまで一条大路北上の時期として想到した元慶年間のことであったのは偶然の一致とは思えない。というより、この両者はまさしく対応していたと考える。

大蔵省倉庫群の大内裏内への移行——具体的には、大内裏北辺の垣を二丁北に延長して宮域を拡大したこと——は、元慶官田の制と対応して行なわれた「京庫」の充実整備を目的としたものであり、かつその有機的な運用を意図してなされた措置であった、というのが、わたくしの結論である。

なお調庸物は諸国貢調郡司によって運京され、民部省の官人が現物を勘会したあと、大蔵省に移送されることになっていたが、その手続きに時間がかかり過ぎることから、元慶七年十一月二日の勅により、五日以内に処置するように改められている（『三代実録』）。こうした事務的な手続きの合理化がなされているのも、大蔵倉庫群の再編整備に伴う措置であったと言えるのではあるまいか。むしろこの前後相ついだ地震などによる官衙建造物の破壊が、こうした事業を行なわせる促進剤になったことは、十分考えられるところである。

ちなみに、この元慶官田の制に少し遅れて延喜年間、二種の別納制（別納租穀制・別納租糴米制）が実施され、ここでも重貨物の大量運京が行なわれることになるが、それが可能となったのも、元慶年間における官庫の充実整備があったからと考える。

こうして平安京は、九世紀の末に大内裏北部が再編された。第二次平安京（宮）の成立である。

三 宮城十四門

平安京の平面構成は、九世紀の末、一条大路を北へ二丁移すことによって、藤原京型（第一次平安京）から北闕型（第二次平安京）へと改編されたが、それは大内裏外にあった大藏倉庫群の再編整備を眼目とするものであり、この時期最大の課題となっていた国家財政の再建策に対応する措置であった、というのが、これまで述べてきたことの要旨である。その間わたくしがしばしば重要な論拠としたのが、上東・上西門（あるいは上東・上西門大路）であり、そのつど関説してきたが、ここで改めて、この二門に関わる諸問題をまとめて論じておきたいと思う。というのも、第二次平安京の成立に伴って新たに設けられたこの上東・上西門は、多くの場合、他の十二門とは区別して扱われており、その理由を検討することにより、この二門のもつ特殊な性格——構造や機能が明らかとなるばかりでなく、ひいては大内裏拡大——第二次平安京成立の意味がより明確に把握出来ると考えるからである。

(1) 宮門の守衛と年中行事

第一章で述べたように、上東・上西門を含めた宮城十四門の名は『延喜式』（左衛門府）に所見する。ほぼその時期に遡ると推定される『侍中群要』の関連記事にも右の二門が大路名（上東・上西門大路）として見えており、十四門の存在が確認できるが、十四の名のすべてが書き上げられるのは『延喜式』のうち、宮城門の守衛についての条項（左衛門府）に見えるのが最初である（記事は「一条大路の北上」に引用）。

いっぽう『貞信公記』天慶三年（九四〇）正月十二日条には、「駿河国飛駅到来、官職（宮城カ）十四門可置_レ兵士二事、左中弁（藤原在衡）可_レ行之状仰了」と見え、ここでは「宮城」十四門」と総称されている。駿河国からの飛駅とは、いうまでもなく東国での将門の反乱についての報告をさすが、同書によれば、一カ月半後の二月

二十八日には外衛・検非違使に市中の夜行（夜間巡邏）を命じるとともに、「宮城十四門」のおのにおに兵士を二人ずつ配置している。管見によれば、これが宮城十四門と総称された文獻上の初見である。

ちなみに「十二門」という呼称の方は、皇極四年（六四五）六月、飛鳥板蓋宮で蘇我入鹿を誅殺した際、中大兄皇子が「戒衛門府、一時俱鎖三十二通門勿使往来」（『日本書紀』）を初見とし（ただしこの記事内容については問題がある）、以後平城・平安京時代を通して間々所見するが、「宮城十四門」の方は、その使用例がきわめて少ない、というより先の『貞信公記』の記事（二例）がほとんど唯一のものである。しかもわずかな事例から判断するに、十四門は、その名称のすべてが書き上げられるか「宮城十四門」と総称されるかの違いはあっても、登場するのは宮門の守衛・警固といった場合に限定されているのが特徴的である。けだし守衛という性格上、すべての宮城門がその対象とされるからにはかならない。

ところがこれが恒例・臨時の宮廷行事となると話は別で、十四門のすべてが登場することはまずない。たとえば毎年大寒の日の前夜、陰陽師によって営まれる土牛祭は、慶雲三年（七〇六）十二月、諸国に流行した疫病を祈禳するために始められ、のちにこれが追儼として年中行事化したものであるが、土牛童子の立てられるのは十二門に限られ、上東・上西門に置かれることはなかった。五色に塗り分けられた土牛の配置については『弘仁式』（陰陽寮）に見え（ただし十二門は唐風に改められる以前の和名門号で記されている）、『延喜式』（陰陽寮）にもほぼ同文が記されている。前者は第一次平安京（大内裏）、つまり十二門の時期であるから当然としても、後者は第二次平安京（大内裏）、つまり十四門がすでに存在していた時期であるから、上東・上西門が除外されたのには、何らかの理由があったとしなければならない。

各種行事が十二門に限られていた例は、右にとどまらない。『三代実録』によると、仁和元年（八八五）四月二十六日の仁王会は、紫宸殿で営まれたあと、「諸殿諸司、十二門・羅城門」でも修されたが、宮門はここでも十

二門である。この記事の限りでは不詳であるが、十二門のなかに上東・上西門が含まれている可能性はまずないとみてよい。また時期は降るが、長保三年（一〇〇二）五月、当時流行していた疫病の祈攘に際しても、大般若經が転読されたのは、やはり「宮城十二門」においてであった（『権記』）。

これらの事例から考えるに、第一次平安京はもとより、第二次平安京の時代でも、この種の年中恒例もしくは臨時の行事の場合は宮城十二門に限られ、二門は除外されていたことがわかる。このような扱いの違いは何に起因するのであろうか。わたくしは、そのあたりに二門の本質にかかわる問題がひそんでいるように思う。

(2) 中国の上東・上西門

まず考えられるのは、上東・上西の二門が九世紀末に新たに造られた後出の門であり、他の十二門のように、いわゆる門号氏族に由来する伝統をもたなかったということである。ここにいう門号氏族とは、大伴・佐伯兩氏に率いられた氏族で、朝廷の護衛の任に当たったことから宮城十二門にその名がつけられたことをいい、藤原宮・平城宮、さらに平安宮の十二門号にも踏襲された。おそらく長岡宮についても同様であったろう。⁽¹⁵⁾それが弘仁九年（八一八）四月、当時の唐風文華への関心のたかまりの中で、遣唐使として入唐した菅原清公の進言もあって、壬生（氏）門を美福門、佐伯（氏）門を藻壁門というように、巧みに唐風の呼称に改められたのである。

『江談抄』（第二）には、この時諸宮殿院および「大内十二門の額」が能書家によって新たに書かれたという逸話が収録されているが、『古今著聞集』（巻七）にも、十二門についてのエピソードを載せている。弘法大師の書いた南面三門の額字を見て小野道風が嘲笑したところ、中風となり、以来、手跡も異なってしまった。のち寛弘年間、額字の修飾を命じられた藤原行成は、大師尊像の前に香花をささげて祭文をよみ、ことに当たったというものである。なお同書には、焼失したり転倒して当時残っていたのは安嘉・待賢の二門だけであったともある。い

ずれにせよ十四の宮城門のうち、話題になるのはいつも十二門で、上東・上西門に関するエピソードは全くといってよいほど出て来ない。

ここで、門号の改称に関連して留意すべき点の一、二にふれておきたい。その一は、門号が唐風に改称されたのは、時期からいって当然上東・上西を除く十二門であるが、改められたあとの門号は、中国の都城にあった宮門号と直接には関係がないという点である。和名門号の音を取って巧みに唐風に転換したものではあっても、呼称そのものは門号氏族に由来する、日本独自のものであり、むしろそれらの呼称は中国には存在しない。

その二は、上東・上西門の号は中国に存在しており、改称手続きを経なかった（というより、それ以後に造られた）両門の方が、かえって中国的門号であったことである。この名称は、中国史の研究者には周知のものであるが、わが国の宮城に関連して言及されることは、不思議となかった。

すなわち北魏末の『洛陽伽藍記』によれば、漢時代、洛陽城の東面にある門のうち、北の第一門が上東門（同じく第二門は中東門）と呼ばれており、対する西面の第一門が上西門と称されたことを知る（図7）。もっとも魏の洛陽城になると、漢代までは十二門だったのを西面に一門を増して十三門とした上、名称も、上東門は建春門、中東門は東陽門、上西門は閭闔門と、經典や陰陽思想に基づく名称に改称されているが、その後唐の東都洛陽城で上東門の名は再び登場する。その前身である隋時代の洛陽城では上春門と称されていた、東面の北第一門が唐初に上東門と改められたもので、西の宣仁門に相對する（『唐兩京城坊攷』）。ただし、漢時代の上西・中東門の呼称は復活しなかった。

興味あるのは、入唐した円珍が帰朝後（貞観五年）求法の公驗を請うた奏状ならびにこれに応じて發布された貞観八年の太政官符（「園城寺文書」）の中に、この上東門が登場することである。すなわち円珍は、仁寿三年（八五三）七月十六日、唐商人欽良暉の帰便に乗船し、渡唐したが、翌々年五月六日、留学僧円載とともに洛陽城に

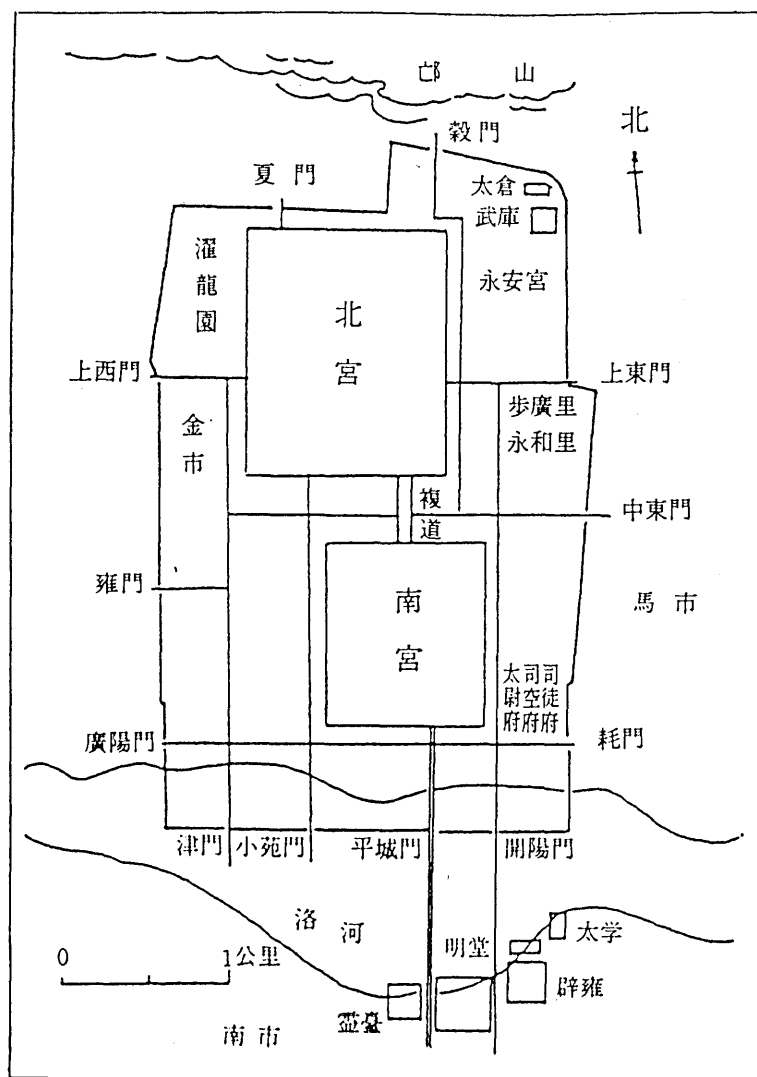


図7 漢洛陽城図（王仲殊『中国古代都城概説』所載）

入っており、「得_レ到_二東都洛陽之域_一、從_二上東門_一入、一日停住、七日自_二徽安之門_一出、至_二磁澗宿_一」と記されている。ちなみに円珍はこのあと十四日を要して長安城に到っている。このように「上東門」は、本来中国に存在した宮城門号であった。

上東・上西という門号名は宮城の東西、つまりその位置関係からする一般的な呼称といってもよいから、第二次平安京十二門の北に新しく設けられた二門のそれを、ことさらに中国に求める必要はないかも知れないが、円珍

のような入唐帰朝者の経験、

知識が無関係であったとは思えない。上東・上西門は唐名を手本としてつけられた門号といつてよいであろう。

ともあれ門号については以上の如くであるが、十二門と二門の扱いの違いは、こうした呼称に示される伝統の有無だけでは説明しきれない問題があるように思う。

その点についてわたくしは、天禄元年（九七〇）の成立になる『口遊』が上東・上西兩門

を「十二門外」とし、平安末期に記された『中外抄』が「脇門ハ非門、内裏上東西不_レ入_二門数_一、仍無_レ額」といい、この二門を「脇門」扱いにしかしていない事実注目したい。これらの記述に従えば、この二門は十二門と構造的に異なるところから、扱いにも差違が生じたように考えられるからである。次にそのことを、宮門を出入りする車についての規定を通して、具体的に検討してみたい。

(3) 牛車の宣旨

宮門を出入りする車には大別して輦車と牛車とがあつたが、輦車というのは輿であるから、狭義の車は牛車ということになる。『延喜式』（雜式）に、輦車についての条項に続いて、「凡_レ乗_レ車出_二入_一宮城門_一者、妃已下大臣嫡妻已上_二限_一宮門外_一、四位已下及内侍者、聴_レ出_二入_一土門_一、但不_レ得_レ至_二陣下_一」とある。この場合の宮門とは内裏門のことで、つまり妃以下大臣の嫡妻以上は宮城門（大内裏門）を通じて内裏門外までは牛車が許されたのに対して、四位以下及び内侍は「土門」からの出入りのみが許されたのである。これ以前では、承和六年（八三九）正月、先にふれた文章博士従三位菅原清公が、「老病羸弱、行歩多_レ艱」（『続日本後紀』承和九年十月十七日条）との理由で牛車による参内を認められた例がある（ただしどの門を用いたかについては記されていない）。このように輦車・牛車の宣旨（輦車の宣旨が下されたのち牛車の宣旨が与えられるのが先例であつた）は親王以下僧侶にいたるまで、特別の恩寵によって与えられたが、それが制度化されたのがこの『延喜式』にみえるものである。これによれば牛車の使用は当初女性にだけ適用され、しかもその場合、身分によって通行の許される場所にも違いのあつたことがわかる。

これに対して男性の場合、牛車の使用を認められた人物として藤原忠平が注目される。忠平の日記『貞信公記』承平二年（九三二）二月二十九日条に、「有_レ乗_二牛車_一聴_下從_二上東門_一出_二入_一宣旨」とあり、この日忠平に、問

題の上東門からの出入りを認める牛車の宣旨が下されているからである（『日本紀略』にもほぼ同文あり）。これより先、元慶八年（八八四）、父基経が輦車（寛平元年には腰輿）で宮中の出入りを許されたことはあったが、大臣として牛車の宣旨を受けたのは忠平に始まる。当時忠平は摂政左大臣の立場にあったから、牛車の宣旨がその職掌と無関係に与えられたというわけではないが、清公の例からも、この場合はこの前後忠平が病気がちであったことへの配慮からと思われる。しかしこれが先例となり、以後、輦車・牛車の宣旨は摂関家の人に与えられる特権となっていく一方、牛車による出入りがもっぱら上東門であったことから、上東門がさながら「執政家の門」のようになっていった。藤原詮子（東三条院）につづいて道長の女彰子に宣下された女院号が「上東門院」であったのも、こうした背景との関連で理解すべき問題であると思われる。しかも彰子の場合は女院制において門院号が誕生する先蹤となった点でも、その意味はきわめて重大である。

もっとも道長の時代になると、規定にも混乱が生じていたようで、『小右記』治安元年（一〇三二）七月二十八日条によると、藤原公季が宣旨を蒙るまでの間、上東門から出入りしたことに對して、「摂政関白人外、牛車輦車、出入自_レ待賢門、而任_レ意用_二上東門_一如何」ということが論議され、この牛車・輦車が出入りする宮城門についても故実が求められている。留意されるのは、その中で実資が、輦車は宮中の出入りを許し、牛車は上東門からの出入りを許すという古記録の記載をもとに、「非_レ是因_レ人、依_二牛車_一無_レ便_レ出_二入他門_一歟」と判断していることである（同二十九日条）。つまり人の身分や位階によらず上東門を用いるのは、牛車は他の門では出入りに不便だから、というのである。『河海抄』（卷一）が、「牛車は牛のよる所まで乗なり。牛車を聴て上東門を出入するなり」と述べているのも参考になろう。

ともあれ、こうしたことから牛車の場合、上東門から出入りするのが原則であり、「古礼」（『台記』康治元年三月十三日条）であったが、どうやらそれは、実資がいうように、上東門特有の構造にかかわっていたように思わ

れる。

(4) 上東(西)門の構造

上東門の構造については、『枕草子』(一〇四段)にある次のような一文が想起される。

などかこと(異)御門のやうにあらで、この土御門しも、上もなく作りそめけむと、今日こそいとにくけれ。清少納言らが中宮の代理として郭公を聞きに出かけての帰り、土御門(上東門)に着いた辺りから雨に降られ、雨宿りしようにも上東門には屋根がない。なぜ上東門にだけは屋根が作られなかったのだろうか、と嘆いているうちに雨は本降りとなり、笠のない供の男たちがひたすら車を門内に入れたというくだりである。

上東門・上西門の構造は詳しくはわからないが、『延喜式』や『拾芥抄』の記載からある程度推測され、『大内裏図考証』所載図のようなものであったと思われる(図8・9)。すなわち単に築地を切り開いただけで、屋根や扁額はもちろんのこと、基壇すらなかった。しかも『吾妻鏡』元久二年六月二十三日条によれば、将門の乱に際して始めて門扉が設けられたといい、他の十二門とは構造上、格段の違いがあったことが知られる。ちなみに十二門は五間三戸、単層の門で、『信貴山縁起絵巻』などに描かれるところでは、瓦葺の築地で、門の真中の戸に一段と高い置路(おきみち)が続き、両縁には石が並べられている。そして同じ門でも身分によって出入りする戸や通るべき道が定められており、また脇には詰所のほか「厩亭」(『延喜左京職式』)も設けられていた。これを上東門と対比するなら、後者が「脇門」として認識されていたことの意味が明解に理解されると思う。極端に言えば、門にして門にあらざる扱いをされていたのが上東・上西の土御門門であった。

しかしわたくしは、上東・上西門が構造の上で特殊なのは、屋根がなかったということ以上に、他の十二門のような基壇がなく、外部の溝にかかる橋を渡ればただちに通過出来る門であったことではなかったかと考える。

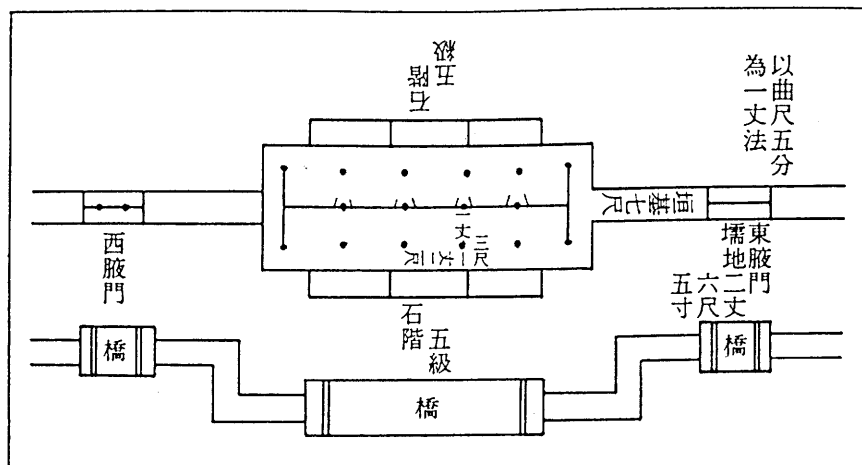


図8 宮城十二門（皇嘉門）平面図（『大内裏図考証』所載）

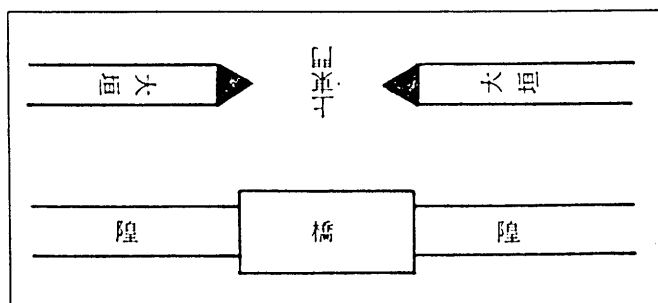


図9 上東門平面図（『大内裏図考証』所載）

その点で、先にふれた『延喜式』の規定が、左衛門府式では上東・上西門と記しながら、車の出入りについての条項（雜式）では「土門」と表記していたことが、あらためて想起されよう。あの土門は、実は土御門のことであったと考えられる。それは上東（西）門が牛車の出入りに便利な、基壇のない門であったからで、『延喜式』ではそのあたりを考慮した上で書き分けられていたのがある。事実、先の『吾妻鏡』の記事に、「上東上西兩門元土」と記されていた。この場合の土門とは、いわゆる上土門のこととみるより、基壇がなく、土（道路）面をそのまま通行できる門との意ではなかったろうか。

上東・上西門が後出の門であることは、これまで縷々述べてきた。しかしかりそめにも宮城門、それも京中との境に立つ外郭門の一つとして築造されたのであるなら、

時期のいかんを問わず、既存の十二門（ただし十二門のすべてが同一の構造であったかどうかについては、検討を要する）と同様の規模や構造をもって造られるのが当然であり、またけっして不可能なことでもなかったろう。それをなぜ、あえてこのような全く異なった門に仕立てたのであろうか。なぜ土門でなければならなかったのか。

(5) 宮城腋門

ここでわたくしは、あらためて二門の設置された背景を想起したい。二門の設置は大内裏が北へ拡大された時のことであるが、その大内裏の拡大は大蔵倉庫群の整備を意図した措置であり、大量の重貨物を収蔵するための対応策であった。となれば、物資を運搬する車の出入りが考慮されたことは言うまでもないと思う。前節では上東門の構造を知るために、もっぱら牛車の使用による人間の出入りについてのみ論じたが、『三代実録』貞観十二年（八七〇）二月二十五日条などからみても、当然のことながら宮門は物資の搬入にも用いられたのである。

すなわち「運_ニ廩院雜物_一車馬、聴_レ出_ニ入_一自_ニ美福門腋門_一、大膳職自_ニ郁芳門_一、春宮坊自_ニ待賢門_一、中院木屋自_ニ談天門_一と定められ、雜物運搬の車馬に対して各々の官衙に近い門を指示し、その腋門からの出入りを許可している（『延喜彈正台式』には右と同様の趣旨のことが、より詳しく記されている）。むろん腋門では大蔵省の倉庫に搬入される物資の量とは比較にならなかったが、このように人間の通行とは別個に、物資についても宮城門の使用されたことが知られよう。そのことは上東・上西門についても同様であり、それどころかわたくしは、大蔵倉庫への官物の搬入を第一義として開かれたのがまさしくこの二門であったと考える。『延喜式』に、他の宮城門については右に述べたような規定があるのに、上東・上西門について特別の記述がない理由も、そこにあったといつてよい。この二門は、宮城門としての威容よりも、実用性を優先して造られた門であった。

なお、大蔵への門ということでは、その背後にあった宮城北面の三門（この三門も実際には大内裏拡大後、移建新

造されたものである)のことが留意される。むろん土門ではなかったから、大々的な物資の搬入に用いられたとは考えがたいが、安嘉門については、その額が人を取るとの噂があつて恐れられていたし(『古今著聞集』)、もと玄武門と呼ばれていた偉鑿門は、俗に「あかずの門」と呼ばれ、花山院が出家の時、この門から出て以後開けられることがなかったという(『拾芥抄』)。偉鑿門のかわりには、達智門が、平野祭や大嘗会の際斎場に向う時に用いられたようである。もっともこれらの慣習は時期的にはのちに成立したものであるが、北面三門が大蔵倉庫への搬入に大きな役割を果したとは考えがたく、大蔵省への搬入はもっぱら上東・上西門であつたといつてよい。

このようにみてくると、大内裏の北への拡大―大蔵倉庫の再編整備―土門の設置は、相互に密接、有機的に関連する措置であり、土門―上東・上西両門は、いうなら第二次平安京(大内裏)の象徴的存在なのであつた。

上東・上西両門は、まさしく土門(土御門)でなければならなかつたのである。

四 一条一坊の戸主

平安初期以来たびたび行なわれた官衙の統廃合のうちでも、大内裏北辺部を構成する大蔵省倉庫群の再編整備は、大内裏の拡大延長という構造の変更を伴った点で、その最たるものであつたといつてよい。一条大路が北上された背景とか、上東門・上西門が他の宮城門と違い土門であつた理由なども、時期的な構造変化という視点を導入することで了解されたのであつた。わたくしはそれらのことを中山忠親の日記『山槐記』の記述に触発されて論じてきたのであるが、初期平安京の構造については、なお重要な事柄が、われわれの気づかずに残され、あるいは見直しを求められているように思われてならない。

九世紀の始め以来、皇親の貫付された「一条一坊」の地をめぐる問題も、その一つではなからうか。すなわち源姓を賜与された皇親があわせて一条一坊に貫付されたことについて、従来の理解では、その(左・右京)一条

一坊の地が大内裏域に重なるともみられるところから、これを大内裏の中に貫付されたもの（ただし形式的に）とするのであるが、名目的にもせよ、内裏や官衙の群立する大内裏の内に貫付するといったことが有り得るのであるのか、いささか疑問なきを得ない。わたくしには、政治史にも深く関わるこの問題を検討することがまた、初期平安京の構造を理解する上でもきわめて重要な意味をもっているように思われる。

(1) 大内裏内の貫付

『新撰姓氏録』（左京皇別）に、次のような記載がある。

源朝臣信、年六^腹弟（中略）信等八人、是今上親王也、而依弘仁五年五月八日勅賜姓、貫於左京一条一坊、即以信為戸主

弘仁五年（八一四）五月八日の勅により、源信ら嵯峨天皇の皇子女八人が源朝臣姓を賜わるとともに、信を戸主として「貫於左京一条一坊」せられており、これが一条一坊の貫付に関する初見記事である。改賜姓にとまなう京貫（京中各所に貫付し編戸すること）記事は、地方民については幾多の事例があり、さして珍しいことではないが、この源信らの場合が留意されるのは、先に言及したように、貫付された場所が「左京一条一坊」の地、すなわち大内裏の内（北部）に当たるとみなされるところにある。しかし通常貫付といえは、当該場所に土地を与え、居住せしめるものであることを考えると、大内裏内での貫付はいかにも不自然である（註24参照）。

管見によれば、この一条一坊への貫付記事にはじめて注目し、これを検討されたのは福山敏男氏である。その後川勝政太郎氏も取り上げられたが、ほぼ福山氏の見解を踏襲されている。⁽¹⁹⁾

すなわち福山氏は、(i)『掌中歴』（保安四年頃成立）や九条家本延喜式所載の左京図が、一条及び二条の各一坊を宮城内としていること、(ii)同じく『掌中歴』に左京一条一坊を説明して、「上東門以下、待賢門以上、朱雀半

路以東、大宮路以西為「一坊」と記していること、また、京貫地の中に二条四坊が見えるのは、一坊を宮城内に起こして数えたものであろうこと、などを根拠に、左右兩京の一条一坊が宮城内となることは動かしがたいとされつつも、しかし宮城内に貫付されたとは考えがたいから、これらはいずれも単なる名目上の本貫を示すにすぎないものであろう、と疑問を残したままで考察を終えられている。

いっぽう川勝氏は、平安京居住者の問題を取り上げられた中でこの件にもふれ、関連史料を補充された上、かれらは宮城内を本貫とすることを許されたと考えざるを得ないが、宮城内の居住ということは有り得ないから、住居と本貫地とは別であったと見なければならぬ、とされ、結局は福山氏同様「一条一坊」への貫付を形式的なものとは断定された。以後この問題は、関心を寄せられることもないままこんにちに及んでいる。

かつて裏松固禪（一七三六—一八〇四）も『大内裏図考証』（卷二）の中で、宮城内を第一坊と図示しているが、そのように一条一坊を大内裏の中とみなすのも、したがってまた、というか、それゆえに一条一坊への貫付を事実上有り得ない、形式的・名目的なものとするのも、誰しもが抱く当然の理解というべきであろう。しかし翻って考えるに、形式的にしろ、ことさら大内裏内に貫付すること自体が不自然であるし、第一その必然性がないのではあるまいか。そればかりではない。形式的な貫付であるにせよないにせよ、そもそも大内裏域内は左（右）京一条（二条）一坊といった条坊で表示されるような場所なのであろうか？ わたくしは、大内裏内での貫付を形式的・名目的とする見方にも従えないものを感じる。

もっとも福山氏も、名目的な貫付とすることには不自然さを認められていて、一条一坊の貫付が平城京でも一例（但し左京一条一坊戸と所見⁽²¹⁾）あることから、平城京では「北辺の存在を考ふべきであろうか」と北辺の存在に留意されたが、「平安京に於ては北辺は問題外となることは云う迄もない」と断じておられる。思うにその時点では、第一次平安京・第二次平安京という理解は存在しなかったから当然の帰結であったろうが、実はそのあたり

に解決の鍵がひそんでいたのではなかったろうか。結論を先にいえば、わたくしは氏の否定された、まさにその

北辺部こそが、いうところの一条一坊に当るものと考ええる。詭弁のようであるが、一条一坊への貫付という場合の一条一坊とは、正しくは「一条北、一坊」のことであり、その省略形であったと見るのである。それで通用したのは、大内裏内を条坊で表示する慣習がなく（というより有り得ないし）、また一条一坊が実際には存在しなかったから（一条・二条は二、四坊のみ）、一条一坊というだけで間違いなく大内裏北部（一条北、一坊）のこととして受け取られたものと思う。事実から帰納されるころでは、そうした観念は早くから成立していたとみられるのであるが、その観念なり認識こそ、初期平安京の構造に由来するものであり、そこに存在した北辺部の特殊性をもっともよく示していると考ええる。

いずれにせよこうしたことを理解するためには、第一次平安京時代における北辺部の様態をもう少し明らかにしておく必要がある。

(2) 城北の禁園

そこで北辺部を大内裏の北の部分と、その両翼部（左京北辺坊・右京北辺坊）とに分けて検討してみると、まず前者については薬園・枸杞園・乳牛院などがあり、いずれも典薬寮所管の禁園であった。典薬寮といえば、『続日本後紀』承和四年（八三七）七月二十九日条の記事によって、「宮城の北」に園池司の管轄地が三十二町あり、そのうちの荒廢地二町がこの日典薬寮に充てられたことが知られる。のちの記録であるが、『拾芥抄』（中）に「園ノ池（本司内（膳）別当、大宮（西）一条北、一条南半西（許カ）或云一云、荒廢堂「計」一云枸杞園）と記される園池がそれであろう。記載にあいまいな部分もあるが、これによれば園池は大内裏のすぐ北に広がっていたと考えられる。なお、禁園としての桃園の初見は、管見によれば、『経国集』（巻十）所収空海作「難言。入レ山興」に、「君不レ見、京城御苑桃李紅、灼灼紛紛顔色同、

一開_レ雨、一散_レ風、飄上飄下落_三園中_二」とみえるものである。

それに関して留意されるのが、大内裏（第二次平安京）の東北隅にあった茶園、いわゆる大内裏茶園の存在である。典藥寮の所管になるこの茶園がいつ設けられたか、直接的な史料はないが、九世紀の初め、喫茶の風の昂揚した時期、嵯峨天（上）皇代のことと考えられる。嵯峨天皇は弘仁六年（八一五）六月、畿内近国に榛を植えさせ、毎年貢進するよう命じている（『日本後紀』）。この貢茶は制度的に定着することはなかったが、その後のある時期に設けられたのがこの官営茶園で、季御読経の際の引茶に用いられる茶も、この茶園で供給されたものと思われる。『西宮記』（巻三）などから、平安後期まで、典藥寮の管理下に造茶所で茶がつくられていたことが知られる。毎年三月一日の造茶使の発遣例が承和年中（八三四―四八）からみられるのも、成育年数を考慮に入れば、この官営茶園の創設時期が弘仁・天長から承和初年にかけてであったことを思わせる。おそらく北辺部に広がっていた園池の一部が茶園とされたもので、先の荒廃地二町の割分もあるいはこの茶園造成に関するものかも知れない。それが、大内裏が北方へ拡大された結果、第二次大内裏内に取り込まれた（一町）のであろう。

ちなみに大内裏の北方部については、藤原京の場合、宮城の北に「テンヤク」の小字名が残っており、付近からは典藥寮関係の木簡が多数出土したほか、「藺司」「藺官」と記されたものも発見されている。恭仁京についても同様のことが知られるから（『続日本紀』天平十四年正月七日条参照）、これらは平安京の先蹤として留意されよう。

つぎに北辺部兩翼の部分（といっても主に左京北辺部だが）は、早くから住宅地化していた。すなわち、北辺二坊内には帯刀町・縫殿町・内教坊町・女官町、三坊には正親町や内膳町・采女町などの厨町があった。このうち采女町は、承和九年六月四日、西北の地四分の一が右衛門権佐橘海雄に与えられている（『続日本後紀』）。さらにその東、京極に接する四坊には、有名な藤原良房の染殿があり、南北に二丁、つまり北辺部の長さを占めていた。

ここは良房女、文徳夫人明子が御所とし、染殿の后と呼ばれたことも知られる通りである。邸内には花亭をはじめ射場・釣台・望遠亭が設けられ、外孫清和天皇を迎えてしばしば観桜の宴が催され、東垣外で山城国司の率いる郡司百姓らの「耕田の礼」が行なわれたこともあった（『三代実録』貞観六年二月二十五日条）。讓位後の清和天皇は、はじめこの染殿に住し、ついで清和院に移居している。

このようにみてみると、第一次平安京（大内裏）の北辺部は、大内裏の北にあたるという位置関係から、禁園的な性格をもつ空間とされ、その両翼部も、京城内ではあったが、一条（つまり土御門大路）以南の京中とはおのずから異なる特殊な地域とされ、いわば京中にして京中にあらざる扱いを受けていたことが推測されると思う。

第一次平安京時代、嵯峨天皇の皇子女八人が貫付された（左京）一条（北辺）一坊とは、おおよそ以上のような空間であった。

(3) 北辺ノ大臣

さて「一条一坊」貫付の史料上の初見は、すでに述べたように弘仁五年、嵯峨天皇による皇親賜姓の時である。この時、信は六歳で戸主とされたが、信らの貫付された左京一条一坊の場所について貴重な手掛りを提供してくれるのが、信がのちに「北辺（左）大臣」といわれ、その邸宅が「北辺ノ亭」と称された事実である。『吏部王記』延長二年（九二四）十二月二十一日条に、醍醐天皇四十の賀が行なわれたのち、清涼殿で曲宴が催された時、「北辺大臣」こと源信が清和天皇時代に書いた春鶯囀の譜によって箏が弾じられたとあり、『今昔物語』（巻二四）にも、「今昔、北_い辺_いノ左_い大臣_いト申_いス人御座_いケリ、名_いヲ信_いトゾ云_いケル。嵯峨天皇ノ御子也。一_い条_いノ北_い辺_いニ住_い給_いケルニ依_いテ、北_い辺_いノ大臣_いトハ申_いス也」とあって、「一条の北辺」に居住したことが信を特徴づける要素となっていたことを伺わせる。むろん『今昔物語』の成立は一条大路北上後であるが、信が一条大路北上以前の人物（八一〇―一六

八)であったことを考えると、この場合の「一条の北辺」は京外ではなく、京内(中)の北辺、すなわち第一次平安京大内裏の北辺部のことと考えてまず間違いないと思う。『吏部王記』にいう北辺大臣の場合も、同様であろう。賜姓源氏の最初であったこと、しかも一条北辺の戸主であったことから、ことさらその称で呼ばれたのである。源信といえ、『伴大納言絵詞』に、応天門事件の張本人として逮捕の使者が派遣される場面に邸宅の結構が描かれているが、それが北辺邸であったかどうか、また北辺邸であったとしてもその所在地の記載がなく、明確に知ることとは不可能である。ただし『拾芥抄』は、信の邸宅「北辺亭」を「土御門北、西洞院西」としており、これによれば左京北辺二坊七町にあったことになる。信は事件の二年後、貞観十年(八六八)に没しており、その後大内裏の拡大などもあって、子孫の代に邸宅が北辺二坊に移されたとも考えられるが、そこを当初からの邸宅とする理解には従えない。

一条一坊の貫付については源融の場合も留意される。融も信と同じく嵯峨天皇の皇子であり、遅れて(時期不詳)賜姓されたが、臣籍に降下された時、おそらく信の例にならって左京一条一坊に貫付されたのであろう。延喜十二年(九二二)の売券(『平安遺文』二〇七号)に、融の一男湛が「左京一条一坊(坊)戸主」として所見し、またその子理についても、延長七年(九二九)の売券に「左京一条一坊戸主」と所見するのは(『同前』二三二号)、遡って融に始まるものと推測されるからである。のちに河原院で著名となる融も、元来は左京一条一坊の戸主であった。

一条一坊に貫付されたことを示す第三の史料は、清和天皇の皇子女の場合であるが、これは別の意味で重要である。『三代実録』貞観十五年四月二十一日条に、この日親王八人、源氏四人を定めて「貫隸左京一条一坊」したとある(但し戸主は不明)。この時の貫付が注目されるのは、それが「源氏」だけでなく「親王」にも拡大適用されたと考えられる点にある。すなわち賜姓源氏の特例として、一代限りの親王号が付与され、子の代からは

源氏にするというのである。この区別は、生母の身分の違いによるものであるが、翌十六年四月二十七日に、「勅、賜_ニ親王及源氏新銭三千七百貫、令_ニ各買_ニ居宅_一」⁽²²⁾とあるところを見ると、居宅については基本的に同じ扱いを受けていることが知られよう。この結果、源氏だけでなく親王にも一条一坊に家地が班給されることになったわけで、これ以後この場所に関係のある親王が多く見られるようになるのも、故なしとしない。

たとえばこの時親王宣下された貞平親王の女は「一条君」と呼ばれている（『本朝皇胤紹運録』）。京極御息所（藤原襲子）の女房として仕え、『後撰拾遺集』の撰者としても著名な歌人であるが、その呼称は、まさしく一条に居住したことにちなむものであった。おそらく父貞平親王が「一条一坊」に構えた邸宅を伝領したものである。

(4) 北辺と桃園

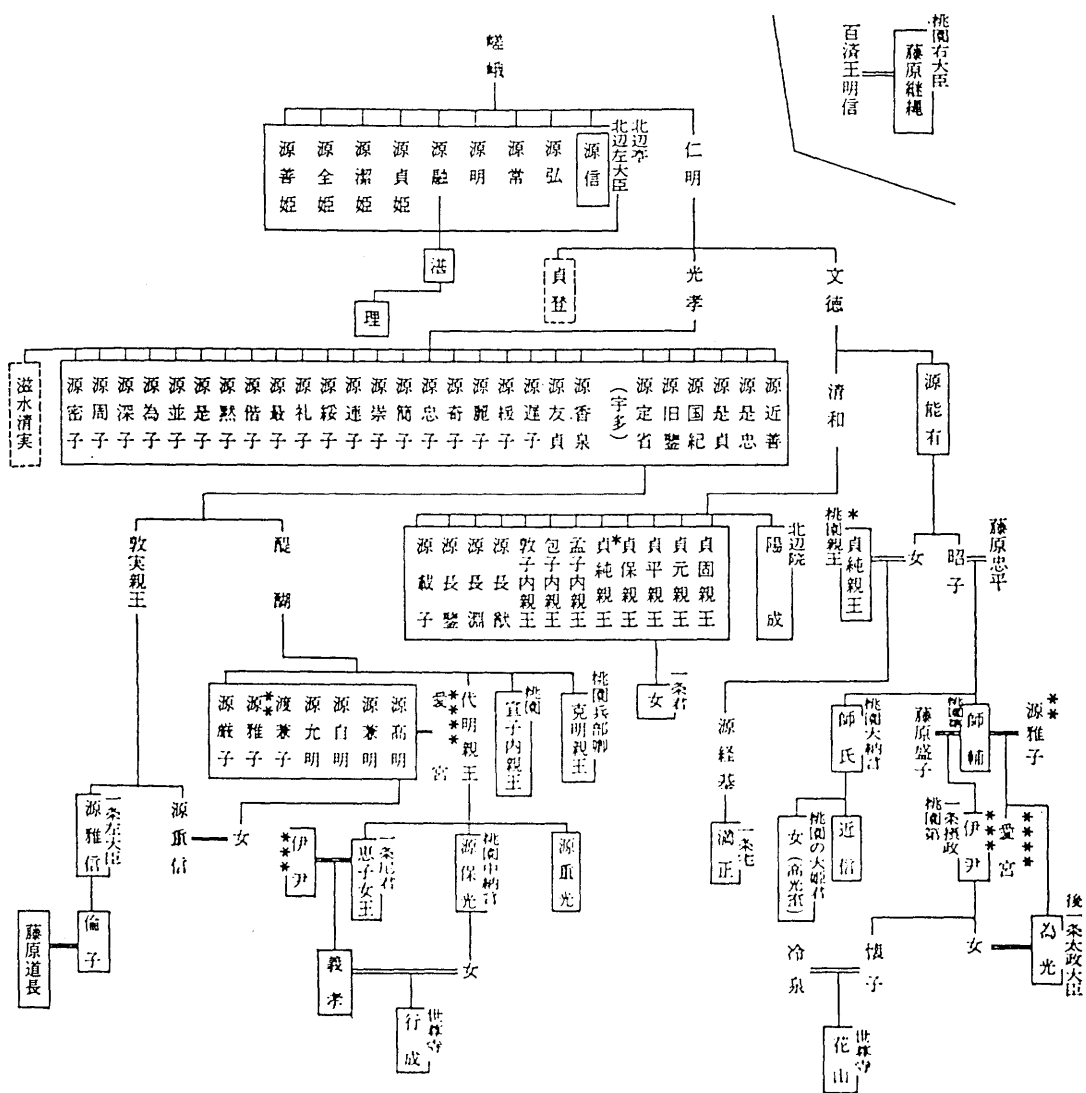
同じ時親王とされた、貞平親王の弟貞純親王についても同様のことがいえる。この貞純（清和第六皇子）は、人々の夢に、一条大宮桃園池に住む龍として現われたところから、世に桃園親王といわれた人である（『尊卑分脈』）。ちなみにその子が清和源氏の祖とされる経基王であり、応和元年（九六一）源朝臣を賜姓され、その年に没しているが、経基の子満正（満仲とともに武勇で著名）の邸宅は一条にあった。これらの事実から貞純も「一条一坊」に邸宅を構えたことが推測されるばかりでなく、問題の「一条一坊」が、「桃園」と呼ばれた禁園、すなわち前節で述べた、大内裏北部に広がる園池の一部であったことが知られる点でも重要である。ただし満正の一条宅は、松村博司氏も言うように、⁽²²⁾一条北辺四坊にあったものと思われる。先の貞平親王の女一条君の場合も明確ではないが、時期からいっておそらくそれも北辺坊にあったのであろう。一条大路の北上により、「一条（北辺）一坊」に与えられた邸宅が京北外、あるいは北辺二坊・三坊・四坊の、いわゆる北辺坊に移されたことが考えられるか

表11 一条一坊貫付の関係略年表

左京	弘仁5年(814)5月8日	嵯峨皇子女8人(戸主・源信)
左京	仁寿3年(853)6月10日	文徳皇子女9人を左京職に隸く
右京	貞観8年(866)3月2日	仁明皇子貞登(承和の始め、源朝臣を賜姓されるも母の過失により除籍、この日復籍)
左京	貞観15年(873)4月21日	清和皇子女12人(親王8人・源氏4人)
左京	元慶8年(884)4月13日	光孝皇子女29人(戸主・源近善、ただし名前が確められるのは27人)
右京	仁和2年(886)10月13日	光孝皇子滋水清実(これ以前、過失により除籍、この日貞登の例に准じ別姓を賜い復籍)
左京	延喜21年(921)2月5日	醍醐皇子女7人(戸主・源高明)

らである。そしてこのことが、第二次平安京時代、北辺(実際には左京北辺)に源氏邸宅が多く存在する理由ともなっている。

時期は降るが、源高明についても同様のことがいえる。『類聚符宣抄』によれば、延喜二十一年(九二二)二月五日、高明以下醍醐天皇の七人の皇子女が源賜姓され(実際には前年十二月二十八日に賜姓されている)、この日問題の左京一条一坊に貫付されたことが知られる。戸主は年長者(当時八歳)の高明であった。留意されるのは、『今昔物語』(卷二七―三)に、「今昔、桃園ト云ハ今ノ世尊寺也、本ハ寺ニモ无クテ有ケル時ニ、西ノ宮ノ左大臣ナム住給ケル」という話を収めていることである。源高明といえば西宮(四条北・朱雀西)の主であり、安和の変で左遷された直後邸宅が炎上したことは、慶滋保胤の『池亭記』などにも取り上げられて知られるところであるが、『今昔物語』に従えば、西宮第以前には(世尊寺が建立される前の)桃園に住んでいたことになる。その意味で『今昔物語』の記述は桃園と世尊寺との時期的推移を暗示するだけでなく、高明の貫付された「一条一坊」がその桃園であったことを推測させる好材料であろう。この桃園の地(の一部)が一条(一坊)と呼ばれている事実は、のちの論のためにも記憶に留めておきたい。桃園はこれまでも言及したように、大内裏北部に広がる園池の一部であった。『延喜式』(内膳司)によれば、大内裏の北に十八町三段を占めたと推定される京北園に由来し、天皇供御の果実や蔬菜類を栽培した菜園である。その名は主に桃



凡	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 10px; display: inline-block;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 10px; display: inline-block;"></div>	左京一条一坊へ貫付
	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 10px; display: inline-block;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 10px; display: inline-block;"></div>	右京一条一坊へ貫付
例	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 10px; display: inline-block;"></div>	枠内の一人記入は
	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 10px; display: inline-block;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 10px; display: inline-block;"></div>	北辺・桃園・一条に邸宅などあり

図10 北辺・桃園・一条に関係ある人物の略系図

の樹が植えられていたことによる。弘仁九年、嵯峨天皇時代、条坊にも唐名が付けられた折、近く的一条(坊)が「桃花坊」と命名されたのもこれに関係がある。

皇親の貫付の地がもっぱら大内裏の北方に選ばれたのは、その辺り一帯のもつこのような土地柄―禁園的性格によることは言うまでもない。しかも貫付が繰り返し行なわれたのは、そこが当初は公の土地として保有されていたからで、世代が離れた場合、同じ場所や類地に別人があらためて貫付されることもあった。それが、この辺り一帯をいうのに、桃園(宮・第)・一条(邸)・北辺(院・亭)といった呼称としていく通りにも呼ばれる理由ともなったのであろう。しかも九世紀の末、一条大路の北上、大内裏の拡大(第二次平安京)以後も、こうした「一条一坊」貫付の伝統はそのまま保持され、(新)一条大路の北辺、すなわち京外に家地が与えられていったと考える。源朝臣として臣籍に付され、一条一坊に貫付された高明が、桃園に住したというのはまさにそのことを示すものであった。したがって北上以後の北辺、たとえば陽成上皇の「北辺院」(「北辺馬埒亭」とも。『日本紀略』天慶三年五月六日条、『三代実録』仁和三年五月十四日条、『江談抄』)とか一条(北辺)・桃園は、当然京外か北辺坊であったとみるべきである。それにしても別掲系図にみられるように、実に数多くの関係者がいたことにあらためて驚かされる。個々の事例については、論の展開上、すべて「桃園と世尊寺」(三七四ページ)で検討することにした。

(5) 北辺と後宮

このような一条北辺部への貫付の先蹤として、私は藤原継縄が「桃園右大臣」と呼ばれた事実(『尊卑分脈』『公卿補任』)に注目したい。継縄が右大臣となったのは延暦九年(七九〇)、すなわち長岡京時代であり、平安遷都の二年後、延暦十五年には没しているが、この「桃園」も、これまでと同じく大内裏の北の地と考えてよいと思う。妻の百済王明信が桓武天皇の殊寵を得たことから、継縄も桓武の信任と寵を受けたことは知られる通りで、それ

が桃園に宅地を与えられた理由であろう。ちなみに明信は、平安新京への遷都に際し、宅地造成の名目で国稻を与えられているが、『類聚国史』延暦十三年七月九日条)、この時国稻を与えられた明信以下十五人は、いずれも桓武の寵を得たもの、あるいは信任されていた女官たちであった。おそらく彼女らは、桃園に宅地を班給され、その一部が継縄の桃園邸に用いられたものであろう。

ともあれ、桃園の地が賜姓皇族(源氏)以前、時の寵臣に班賜されていたという事実は看過出来ない。弘仁五年にはじまる賜姓皇族の「一条一坊」への貫付の背景には、それ以前にあった寵臣処遇の慣習が考えられ、それが皇室の藩屏としての賜姓皇族に適用されたものであることを思わせる。そうであるならばこの北辺部は、最初から政治的にも重要な意味をもつ場所であったことになる。

これが第一点とすれば、一条一坊貫付について注目される第二の点は、それが後宮対策の一環であったと見られることである。賜姓Ⅱ貫付記事に共通するのは、(イ)いずれも幼年年齢で戸主とされていること、(ロ)女子も少なからず賜姓されていること、の二点であるが、これは家を立てるということが、かれらの母親を含む後宮女性の処遇にかかわる措置でもあったことを暗示している。のちに述べるように、当該地が多くの場合、母方を通して伝領されたというのもそれであろう。その点、母の過失で源氏を除籍されて出家した沙弥深寂(仁明皇子、母は更衣三國氏)が、貞観八年(八六六)三月に復籍を許された際、「嵯峨遺旨、母氏有_レ過者、其子不_レ得_レ為_三源氏_二」(『三代実録』)として新たに貞朝臣登の姓名を賜わっているのはまことに意味深い。

桓武や嵯峨天皇時代、内寵により増加したキサキの措置として、後宮職員令に規定された后妃以外に、女御や更衣が新しく設けられたが、それらのキサキ所生の皇子女を対象とする賜姓源氏の制が創められたのもまさしく同じ時期のことであった。後者が皇子女に対する措置であるとすれば、前者はその母親を対象にしたものであったわけで、両者は別個のものではなく、表裏一体の関係をなすものであったことがわかると思う。わたくしは、

奈良期では、原則として皇后（天皇嫡妻）以外は京中に居住していたと考えているが、女御や更衣の増加に伴ない、内裏背後の後宮の建物が、のちに十二殿舎と呼ばれるものとして整備される一方、大内裏外に後宮に関わる土地が設定されたものと考ええる。

その点で注目に値するのが、『延喜式』にみられる後宮官司関係の記事である。すなわち「凡采女卅七人賜近宮城二地止（采女司）とあるのをはじめ、縫殿寮では内侍司東堅子女孺脅力婦に四町、女孺以下に二町、計六町の土地が与えられているが、前者は「左京北辺三坊」（二町分）および「右京北辺二坊」（三町分）に、後者の二町は「（右京カ）一条二坊」にあった。また女王地として、「在左京北辺三坊」の一町が正親司に与えられている。いずれも北辺二坊もしくは三坊で、これも北辺部のもつ特殊性を物語っている。先にあげた明信らの場合が、おそらくこれの先蹤をなすものであらう。

このように見てくると、一条一坊への貫付は、桓武朝に続く嵯峨朝における後宮の肥大、后妃・皇子女の増加への対応措置であり、一条北辺一坊を中心とする北辺坊は、「大内裏外の後宮」とでもいうべき地域であったと思う。

(6) 源氏と平氏

最後に賜姓皇族の貫付に関連してふれておかねばならないものに、同じ皇親の出でありながら源氏と平氏（あるいはそれ以外の氏族）とでは扱いに格段の違いがあったこと、それが貫付地にも左京と右京の差としてあらわれているという事実がある。先に述べた沙弥深寂（仁明皇子）や清実（光孝皇子）は当初源氏を賜姓され貫付されたところから（表11参照）、おそらく左京一条一坊であったと思われるが、その後過失により除籍、改めて貞朝臣・滋水朝臣（『三代実録』によれば清実の場合、仁明皇子貞登―深寂のこと―に准じてとある）を賜姓され、「右京一条一坊」

に貫付されている。また平氏の場合、桓武天皇の孫高棟王（葛原親王の一男）は天長二年、父親王が頻りに抗表して平朝臣姓を賜わり、左京二条二坊に貫付されたことが知られる（『公卿補任』承和十年条）。平斉章一人を除いて、平氏の場合、左京一条一坊関係の史料は見当らない。⁽²⁴⁾ また賜姓に当り女子が除外されていることも、源氏との差違である（『三代実録』貞観四年四月二十日条）。こうした扱いの違いは源氏と平氏との間だけでなく、源氏とそれ以外の皇親との間にも見られるが、賜姓皇族の問題は、このような京貫あるいは宅地班給を含めてあらためて検討される必要がある。

ちなみに源信の子孫は北辺氏の名を継承し、また桃園も貞純親王の系統が氏の名として受け継いでいる。

五 桃園と世尊寺

九世紀の初め以来、皇親が貫付された「一条一坊」とは「一条北辺一坊」、つまり大内裏北部（京中）のことであり、そこへの貫付は、賜姓皇族の制や後宮（女御・更衣）の制と表裏の関係にあったことを知った。

こうした伝統は、九世紀末、一条大路の北上後も保持されたが、北上後の「一条一坊」貫付は、おのずから京外に移行した。十世紀に入り大内裏北方に広がっていた桃園の関係記事がにわかにふえるのも、そのことを示している。また一条大路北上の結果として、桃園への貫付と同じ意味で、一条一坊の貫付が、大内裏の両翼、いわゆる北辺坊（主に左京）にも及ぼされ、拡散されたことも留意される。当然、十世紀における一条一坊の貫付は、この桃園や左（右）京北辺坊との関係が主要な問題となる。そこでここでは、個別的な論証となるが、この地に関わりのあった人物を取り上げ、前章で述べた北辺部の意味づけの補い⁽²⁵⁾としたい。

(1) 親王の桃園

①貞純親王（桃園親王）

？—延喜十六（？—九一六）

清和天皇第六皇子、母は棟貞王の女。『尊卑分脈』に「此親王於三条大宮桃園池_ニ為_レ龍之由、時人多得_ニ夢告_一云々」とあり、桃園の主とされる人物。また親王を世尊寺の祖とする『世尊寺縁起』によれば、寺は「桃苑之甲第」と称する親王宅（別業）の旧地で、邸宅は風流の限りを尽したと伝えるが、その間の経緯は明らかでない。親王と一条一坊貫付との関係については前にふれた通りである。

②克明親王（桃園兵部卿）

？—延長五（？—九二七）

醍醐天皇第一皇子、母は源旧鑒女・更衣封子。『大和物語』（九段）に所見する「桃園兵部卿の宮」について、敦固親王（宇多天皇皇子）あるいは貞純親王（①参照）とみる説もあるが、前後の状況から判断して克明が適当と思われる。⁽²⁶⁾ 外祖父源旧鑒は元慶八年（八八四）六月二日に賜姓された光孝天皇の皇子女二十九人中の一人で（『三代実録』によれば、旧鑒はすでに貞観十二年二月十四日に賜姓されていた）、「左京一条一坊」に貫付されている。桃園宮の伝領は母方の関係によるものであろうか。克明の子が賜姓されていることから、克明自身に班給された可能性も強い。ちなみに克明親王が兵部卿に任じられたのは延長五年四月二十二日のことであるが、『吏部王記』『扶桑略記』（同年二月二十五日条）にいう、民部卿藤原清貫の六十の賀のため「桃園宮」に於て法会を営み、仏像を造つて経を奉納した「彈正尹」もこの克明のことである。⁽²⁷⁾ なお『拾遺和歌集』（卷二）に所収する紀貫之の歌の詞書に、「ももぞのにすみ侍ける前斎院の御屏風に」とあることから、前斎院（この場合、前斎院とは克明と同胞の宣子内親王とみるのが妥当である）も桃園に住んだことが知られる。とすれば、宣子は克明と同居していたのである。

(2) 藤原氏の桃園

① 藤原師輔 延喜八―天徳四(九〇八―一六〇)

忠平二男、母は源能有女・昭子。桃園に邸宅(桃園第)を有していたが、一般には九条右相府(坊城大臣とも)と称され、「桃園」を冠して呼ばれることがない。桃園は別邸であったからであろう。桃園家には寢殿が営まれていたが、師輔の日記『九暦』によれば、天徳三年(九五九)二月、前年に建てた坊城家が貧相であるとして、北対に桃園第のこの寢殿を移建している。その後桃園に寢殿が新築されたかどうかは不詳であるが、半年後の八月三日に「右大臣(師輔)桃園雑舎」が焼亡している。九月二十一日、「位禄」を材木取料に充てたとあるから、早速雑舎の再建に取りかかったのであろう。火事といえば、十一年前の天暦二年(九四八)六月九日夜にも桃園第が焼亡している。『日本紀略』に、「桃園第有^レ火」とあり、桃園第の傍に「師輔」との注記が付されている。注記が正しいとすれば師輔の桃園家は二度焼亡したことになるが、この天暦二年の場合は、師輔の弟師氏の桃園邸であったとみるべきではないか。『九条殿記』(師輔著)の記事によれば、天暦二年当時、師氏が桃園宰相と呼ばれていた事実が知られるからである。ちなみに師氏は『九暦』や『九条殿記』には、天暦三年から同七年までの間は「参議師氏」とか「参議右衛門督」の称で記され、桃園宰相(相公)の呼称が見えない。これは、この五年間、師氏が桃園第を離れていたことを暗示しており、わたくしはその理由を先の天暦二年の火事にかかわるものとみたい。

ところで師輔は、この桃園家のほか、一条宅も有していた。ここには承平六年(九三六)正月五日、師輔の父忠平が春日社出立に当り、方違えのために宿泊しており、また同年十二月十六日には、師輔が大饗を催したことが知られる(『九暦』)。所見はこの二例だけであるが、この一条宅を先の桃園家と同一視する説がある⁽²⁸⁾。しかしこれは問題で、あと述べるように師輔の息伊尹も桃園と一条の邸宅を有しているが、両者は別であった⁽²⁹⁾。しかも伊尹

の桃園と一条第はおそらく父師輔から受け継いだと考えられるので、師輔のそれも当然別の邸宅であったと理解すべきである。ただし両者は近接していた。

②藤原師氏（桃園大納言・桃園宰相） 延喜十三―天禄元（九一三―七〇）

忠平四男、師輔の同母弟。枇杷大納言ともいう。『大和物語』にも見える「桃園宰相（相公）」の称は、天暦二年（九四八）が初見で（『九条殿記』同年正月四日条）、師氏が桃園第を領有もしくは本拠としたのはその前後と推測される。師氏と桃園との関係については、『宇治拾遺物語』（卷六）にも、「世尊寺（桃園第のこと）といふところは桃園の大納言住給ひけるが」、大納言こと師氏が任官の宣旨を蒙り祝賀の饗応のために桃園を修理したものの、祝いのその朝急逝したという話を収めている。物語は、師氏没後、桃園は甥の伊尹が取り上げた話へと展開するが、これについては後述する。天暦二年に焼亡した桃園は、この師氏の邸宅である（①師輔の項参照）。

師氏の桃園第に対して師輔のそれは物語や説話に登場しないこともあって、従来、ほとんど留意されていないが、このように見てくると師輔と師氏の兄弟は、十世紀半ば、ともに桃園（一条付近）に邸宅を有していたことが了解されよう。能有女昭子を母とする同母兄弟として、近接地に邸宅を領有していたと考える。

ところで藤原姓の師輔・師氏が皇親とゆかりの深い桃園を領有しえたのは、この母方の系統によるものではないかだろうか。外祖父源能有は文徳皇子で、仁寿三年（八五三）六月に源賜姓されており、『文徳実録』によれば、その際「隸_ニ左京職」とある。つまり左京の「一条一坊」に貫付されたとみられるが、師輔・師氏の桃園第はそれを分割して伝領したものに違いない。これはまた一条（一坊）が桃園と称されたことを物語る好例でもある。ちなみに先の桃園親王こと貞純親王も能有の女を妻とし、経基が生まれている。

③藤原伊尹 延長二―天禄三（九二四―七二）

師輔の長男、母は藤原盛子。大内裏近辺の邸宅として桃園第と一条邸（一条南・大宮東）を有していた。ともに

父から伝領したものと考えられるが、桃園第については先にふれた『宇治拾遺物語』（巻六）に、師氏が没したあとと荒廃し、その子主典頭近信（原文には「とのもりのかみ（主殿頭）ちかみつ」とあるが、誤か）から伊尹が取り上げたという話を収めている。通説では、この記載や縁起に基づき、桃園（世尊寺）の伝領を師氏↓近信↓伊尹（↓保光↓行成）とする。しかしこれには疑問がある。

その一は、伊尹の桃園が師氏からの伝領であるなら、師輔の桃園家は誰に伝えられたか、という問題、その二は、師氏の息（三人）をさしおき、甥の伊尹が師氏所領を伝領しえたことの理由如何、である。まずその一については、天徳四年（九六〇）、師輔没後、桃園は弟の師氏が受け継ぎ、自分の桃園と合併、伝領したとみることも出来よう。しかし幼少ならともかく当時三十七歳（従四位上、同年参議となる）の伊尹をさしおき、師氏が受け継いだとみるのは不自然といわざるを得ない。やはり師輔の桃園第は、長男の伊尹が伝領したとみるべきである。

つぎにその二、師氏の桃園について。『尊卑分脈』によると、師氏の三人の息とは上から親賢・近信・保信であったが、『宇治拾遺』では、桃園を伝領したのは二男の近信であったとする。長男の親賢をさしおいてなぜ二男が伝領したのか、これもいささか不自然である。不自然といえば二男近信・三男保信が「信」の字を共有する名前であるのに対して、長男親賢だけが異なるのも気になる。親賢の名前の付け方は、むしろ伊尹の子親賢・惟賢・拳賢兄弟に近い。師氏の長男親賢と伊尹の長男親賢——この両者は、じつは同一人物ではなかったらうか。

もちろん『尊卑分脈』に記載するところは官職・位階ともに違ふから速断は出来ないが、同一人物の可能性は高く、伊尹の長男「親賢」が師氏の養子になったものと考えられよう。あと述べるように、伊尹の子のうち本流をついだ義孝（弟義懷）と親賢（弟惟賢・拳賢）も同腹とは考えられず、親賢が養子に出される条件は十分にあった。

このように親賢を師氏の養子と考えることで、近信兄弟との名前の相違が納得されるだけでなく、師氏没後、「（近信から）此家（桃園家）を一条摂政殿（伊尹）とり、給て」と記す説話の真意がより深く了解されるのではなか

ろうか。ともあれわたくしは、父師輔と叔父師氏の両桃園を受け継いだのが伊尹であったと考えたい。その結果、両桃園が（再）統合され、十世紀末、伊尹によって名実ともに摂関家の桃園として整備されたのであった。

ところでこの伊尹の桃園第については寝殿や広大な山池が築かれていたこと（『今昔物語』巻二八―八）、季御読経が行なわれた折の庭木立をめぐる僧侶たちのエピソード（同前）、その後太政大臣に任じられた伊尹が、御堂を建立するため邸内にあった塚を掘らせたところ、石棺の中から尼の遺骸が出てきた話（『宇治拾遺物語』）などが知られ、その景観を想像することが出来る。しかも『大鏡』（伊尹）には「御族の氏寺にておかれたる」とあり、伊尹家と親しかった平親信の日記『親信卿記』にも、「桃園（殿）御堂」と記していることから、伊尹の時代、桃園は御堂が主となっていたこともうかがえよう。ちなみに天禄三年（九七二）六月、伊尹は大僧都遍敷をこの桃園第に招いて不動安鎮家国法を修させ、一週間後には銀錢や経文などを埋めているが（『安鎮法日記』）、半年後、四十九歳で没している。ただし伊尹の本拠も桃園第でなく、一条殿であった。伊尹が一条摂政とも称されるのはそのためで、没後、「一条殿寝殿」で仏事が修されていることからみても、伊尹は一条殿で亡くなったとみてよい。

なお『拾芥抄』によれば、この一条第は伊尹の女婿為光に伝領されたことがわかる。為光が後一条太政大臣と称された理由である。ただし伝領は伊尹時代のことではない。伊尹没後、桃園と一条第は義孝もしくは伊尹の室恵子女王に伝領されている。『小右記』永観二年（九八四）十二月十九日条に、為光室（伊尹女か）が「一条尼君」こと母恵子の名をかりて輦車で参内したとあり、伊尹・義孝没後、恵子が出家し、一条殿に住していたことが知られるからである。しかし翌寛和元年六月三日条に、為光がはじめて「一条大納言」と記されるから、その半年の間に没したと思われる恵子から一条邸を伝領したものであろう。

④ 藤原義孝 天曆八―天延二（九五四―七四）

伊尹四男、母は代明親王女・恵子女王。先少将（兄拳賢）に対して後少将と称される。母とともに一条殿と桃

園家を伝領したと考えられる。義孝と桃園の関係は、義孝の二七日忌および七七七日忌が「桃園（殿）御堂」（伊尹建立の御堂）で行なわれていること（『親信卿記』）、義孝生前のことになるが、『今昔物語』（卷五十一・四二）に、天延二年秋、疱瘡が流行した折、「少将（義孝）、土御門より出でて大宮登り行きて、世尊寺（桃園第のこと）の東の門より入りて」、東の対で読経したとみえること、などからも推測される。義孝が桃園に住したことを示すものは見当たらないが、桃園と関係の深かったことは知られよう。しかし早く没した（伊尹が没して二年後）ことで、ことさら桃園を冠して称されなかったと思われる。

義孝は、天延二年（九七四）九月十六日、疱瘡にかかって亡くなったが、『親信卿記』同日条に「先少将入滅」とあり、兄挙賢も同じ十六日に没したことが知られる。⁽³⁰⁾そして同年九月二十九日条には、「今日当故少将二七日、仍行御誦経於桃園御堂」とあり、また閏十月三日、「於桃園殿御堂、修故少将七々日御法事」、同五日、「故少将卅九日正日也、仍参桃園」とみえるが、親信が記す「故少将」とは、前後の情況から考えて兄の挙賢でなく、また兄弟二人を指すのではなく、後少将こと義孝であると考えられる。とするなら、桃園御堂での法事はすべて義孝のためで、兄挙賢には関わりのないことであつたとみてよい。義孝と挙賢に対する母恵子の扱いには、明らかに違いがあつた。

義孝には三人の兄（親賢・惟賢・挙賢）と弟（義懷以下）がいたが、『尊卑分脈』には、母はいずれも代明親王女（恵子女王）と記す。当面問題となつてゐる挙賢・義孝は天曆七年（九五三）と八年生まれで、一歳違いであり、同腹であつても不思議ではない。しかし同腹とするには、名前のちがいにいささか異和感がある。むしろ親賢・惟賢・挙賢兄弟と義孝・義懷兄弟とは異腹ではなかつたろうか。確証はないが、親賢以下三兄弟の母は『尊卑分脈』に、師氏の長男「親賢」に記す安芸守雅明女であり、義孝・義懷の母が恵子女王ではなかつたろうか。伊尹が数多くの女性と交渉のあつたことは残された贈答歌などからも知られるところ⁽³¹⁾で、長男親賢が猶子に出された

のも、異腹、ことに卑姓の母親に対する父伊尹の配慮であったことが十分考えられる。その点『大鏡』（裏書）に所収する謙徳公（伊尹）系図に親賢の名がなく、筆頭に惟賢が書かれていること、また『中古歌仙三十六人伝』では義孝を伊尹三男とするのが興味を惹く。さらに留意されるのは、『公卿補任』が行成について、「故太政大臣伊尹孫^{但為}、右少将義孝一男」と記すことである。行成が生まれたのは伊尹が没した同じ天禄三年（九七二）で、義孝は十九歳、この措置が伊尹が没する直前のことであつたのか、事情は不確かであるが、義孝・行成父子が早い時期から伊尹の嫡系扱いとされていたことを示している。摂関家の邸宅が四男である義孝・行成に伝領された事情も、そのあたりに原因があつたのではなからうか。

こうしたことは義孝の行為からもうかがわれる。天延二年十二月二十七日、一条殿寢殿において故伊尹の五十算賀を仏事にかえた法事が行なわれたが、それは「故少将」が平生計画していた算賀を、その遺志を成就するため、保光が恵子にかわつて行なつたものであつた（『親信卿記』）。保光が代行したのは、恵子は妹であり、恵子の子義孝は娘婿でもあつたからである。この場合の「故少将」が挙賢でなく義孝であることは明らかであるが、義孝と母恵子の絆の強さが伺われると共に、挙賢が異腹であつたことを暗示していよう。ちなみに『大鏡』では二人を「同腹^{はらみ}」とし、仏道心に厚い義孝に対して、挙賢は「すこし勇敢にあしき人にてぞおはせし」とし、恵子は挙賢よりも義孝を恋しがつていたという話になるが、「同腹」とするのは問題で、足弟というほどの意であろう。なお二男惟賢については伊尹より早く没したようで、『一条摂政御集』に、源重光との間にかわされた哀悼歌や孫に衣を贈った歌などが記されている。

(3) 賜姓源氏の桃園

①源高明 延喜十四—天元五（九二四—八二）

醍醐天皇皇子、母は源唱の女周子。延喜二十一年（九二一）、兄弟七人が源賜姓され、先例によって左京一条一坊に貫付されたこと（高明が戸主）、その「一条一坊」が桃園で、西宮第を本拠にする以前、桃園第に住んでいたこと、などについては前に述べた。なお高明の後妻（愛宮）は師輔の女で、『蜻蛉日記』（中）によれば、高明左遷直後、西宮が焼亡したことにより、「我御殿のもゝその」に移っているが、「我御殿」とは用語上、愛宮自身ではなく、おそらく夫高明にかかるものであろう。したがって高明の桃園は師輔（藤原氏）のそれとは別個のものであると考える。

②源保光（桃園中納言） 延長二―長徳元（九二四―九五）

克明の弟代明親王の二男、母は藤原定方の女。賜姓の年月は不明であるが、通説では桃園中納言の呼称から伊尹の桃園を伝領したと考えられている。もっとも『世尊寺縁起』には、娘婿の義孝が没した後、保光が伊尹の桃園に「寄住」し、幼少の外孫行成を養育したと記す。つまり保光は実際には伊尹の桃園を領有していたわけではなかった。けだし外祖父であっても、摂関家の邸宅を源氏の保光が伝領することはまずありえない。とすれば桃園中納言の称はその寄住によるものであろうが、さりとて他家への寄住で呼称が生まれたとも考えがたい。

このように見てくると、保光の桃園は伊尹のそれとは別個に考えてみる必要がある。縁起にいう保光の「寄住」というもののちの表現で、実際には、自分の邸宅を娘夫婦に与えていたが、婿義孝の没後、妹恵子女王との関係もあって幼少の孫を後見するため、あらためて旧宅に戻った、というものではなからうか。管見によれば、保光を桃園（中）納言と称するのは永祚元年（九八九）六月が初見であるが（『小右記』）、これは保光がその前年、永延二年に権中納言から中納言に進んだことによるものである（『公卿補任』）。伊尹が没して十七年後のことであるが、その時期保光は、たしかに桃園に住んでいたのである。

『栄華物語』（巻二）に、伊尹の息義孝が「桃ぞのゝ中納言保光」の「御女君に年頃通ひきこえ給」い、「うつ

くしきをのこぶ(行成)」を生んだとあるのも、義孝がごく近所にある保光の桃園第に通ったことをいうのである。ちなみに行成は、天元五年(九八二)二月二十五日、「桃園家」で元服したが(『権記』、むろんこれは伊尹―義孝と伝領され、当時は祖母恵子の領有していた藤原氏の桃園邸である。

なお『日本紀略』永観元年(九八三)三月二日条に、「中納言重光卿家焼亡一条北、大宮東」とあり、保光の同母兄源重光も「一条北、大宮東」に邸宅を構えていたことが知られる。確定出来るわけではないが、師輔・師氏の場合と同様、この兄弟も同時期、大宮通りの東西に並んで住していたと考えられよう。「摂関家の桃園」に対して「源家の桃園」ともいうべきもので、近接して領有していたわけである。

以上のことから考えるに、克明親王とともに、重光・保光兄弟の父代明親王(母・醍醐更衣藤原鮮子。克明の異母弟)にも、桃園付近に邸宅が与えられた可能性がある。史料的には確かめられないが、父代明の桃園を兄弟が各々分割して伝領したとみるのである。あるいはより直接的に、兄弟が源賜姓と同時に一条一坊||桃園に貫付されたものかも知れない。

(4) 桃園御堂から世尊寺へ

① 藤原行成 天禄二―万寿四(九七一―一〇二七)

義孝の息、母は源保光の女。長徳元年(九九五)正月二十九日に行成の母が亡くなり、ついで五月九日、父親代わりの保光も没した。行成が桃園を仏寺とすることを決意し、世尊寺と名づけたのはこの年のことであったというが、堂供養が行なわれたのは長保三年(一〇〇二)のことで、『百鍊抄』同年二月二十九日条によれば、それに関連して、「件寺、故中納言保光卿旧宅」と記している。このことは世尊寺(桃園)の地が母方(保光女)からの伝領によるものであったことを推測させる。しかしすでに述べたように、それを父方(伊尹↓義孝)と記するのが縁

起であった。こうした矛盾は、繰り返し指摘したように、桃園を一本化して理解していたことから生じた混乱である。行成は、父方の桃園、いわば摂関家に伝来の桃園はもとより、母、ついで祖父保光が亡くなったことで母方の桃園、いわば源氏由来の桃園も伝領したことを示しており、その結果「両桃園」が行成の手に帰したのである。さて世尊寺は、「旧主の菩提」を願う行成がその地に建立した寺であるが、この世尊寺については、これ以前、同じ桃園にあった伊尹の桃園邸に御堂があったことに留意したい。世尊寺はその伊尹時代の御堂の要素が拡大されたものといえるからである。もっとも『権記』によると世尊寺は、寢殿を仏堂としたもので、既存の建物や施設がそのまま流用され、保光の本尊であった観音像も安置されたというから、直接寺にされたのは藤原家の桃園というより、源家の桃園の方であつたらうか。それが藤原家（行成）に統合され寺として整備されたものである。その経緯にも、この場所（大内裏北方域）をめぐる時代的推移が象徴されている。

縁起によれば、この地には、行成以外にも寺院を建立している。すなわち参議修理大夫平親信が建立した尊重寺は、行成から世尊寺境内の西部分を譲り受けてのことであつたという。先にも見たような親信と行成との親密な関係からすれば理解できることである。建立の時期については明らかでないが、世尊寺の供養と相前後した頃であろう。

十一世紀初め、桃園には世尊寺・尊重寺のほかにも寺院が建立された。伊尹の御堂がすでにそうであつたし、その東には寛弘元年（一〇〇四）、行円が一条革堂こと行願寺（一条北辺にあつたことから北辺堂とも）を建立している。また『権記』長保三年（一〇〇一）三月二十二日条によれば、この日世尊寺の東に、南北に並ぶ道場が実相寺と妙覚寺として供養されている。北の妙覚寺はもと故坂本亮直宅であつたのを大僧正観修の手を経て竹田利成が建立したという。当面留意されるのは南の実相寺で、内蔵允丈部保実の建立になるが、同書には、「本是摂津守方隆宅・桃園・保実買得為寺」と記している。「桃園宮」とあるからには、貞純親王・克明親王・宣子内親王のいずれ

か、あるいは別の皇子女が住した、いわゆる親王の桃園であったろうか。詳細はわからないが、右の記事に従えば、その後摂津守藤原方隆の所有となっていたのを保実が買得したことが知られる。方隆は長徳四年（九九八）二月二十三日、摂津守に任命されているから（『権記』）、保実が買得したのもその前後であったと思われるが、実相寺や妙覚寺といい、先の尊重寺といい、いずれも世尊寺に触発されての建立供養であったようだ。

(5) 桃園の消滅

以上、これまでの考察をあらためて要約すると、従来、桃園第（世尊寺）の伝領は、貞純―師氏―（近信）―伊尹―義孝・保光―行成と一本化して考えられてきたが、貞純親王・克明親王あるいは師輔・高明など、多くの人物が桃園に邸宅を有しており、その伝領過程や消長を、簡単に説明出来ないことがわかう。それが通説のようない元的理解を生んだのは、行成がこの地に建立した世尊寺が著名となったため、桃園＝世尊寺と解されるようになり、そこからさらに、それ以前、桃園に存した邸宅はすべてこの世尊寺と結びつけられるに至ったものと考ええる。『大鏡』や『今昔物語』『宇治拾遺』などの理解がそれで、『拾芥抄』『二中歴』などもすべて混乱しているといつてよい。

桃園についていま一つ指摘できることは、各事例の中でもすでに述べたように、桃園の地が時に一条と呼ばれる場合のあったことである。第一次平安京に於ては、おそらく北極大路の南北一帯に広がっていたであろう桃園は、第二次平安京以後、大内裏の北、すなわち一条大路以北を占めたと思われる。しかし十世紀前後から、鴨東地域の発展とともに北郊の市街化が進む中で、本来の桃園の経営が廃れていったことも事実であろう。その時期は、条坊制下の地点表示にかわり、大路に即した地点表示が一般化しはじめていた。大内裏北部に関しては、一条（大路）を冠した地名や邸宅名が「桃園」にとつてかわるようになったのがそれであるが、加えて桃園の呼称

が行成の建立による世尊寺に集約されたことが、桃園の称を消滅させた決定的な要因であったといえよう。こうして桃園のもつ地域的特性は、世尊寺の出現によって、事実上消滅したのであった。⁽³²⁾

しかしその世尊寺も平安末期、養和元年（一一八一）十一月十五日、「（皇子内親王）前斎院世尊寺亭炎上」^(『百鍊抄』)とみえるのを最後に、以後、関係記事はなくなる。その頃には尊重寺も廃絶していた。

六 北辺坊の終焉

『山槐記』長寛二年（一一六四）六月二十七日条の記事に触発され、初期平安京の平面構成が、われわれが普通通知っているような北闕型ではなく、いわゆる藤原京型であったことを提言し、それに関わる諸問題を多角的に考察してきたが、ここでもう一度『山槐記』の記事に立ち戻り、残した問題について検討を加えておきたい。この記事には、これまで見てきた第一次平安京（藤原京型）から第二次平安京（北闕型）への変化のみならず、第二次平安京についても、その変貌を示唆するものがあると考えられるからである。

(1) 北辺と九条

記事の内容は、はじめにもふれたように、当日の賑給定めにおいて用意された定文、すなわち賑給使とその担当範圍を記す文書の書式について、「一条加北辺」から順次南下して「九条」に至るべきところ、左右両京とも「七八条」と記すだけで九条の記載がなかったことをめぐる議論であった。この定文は、久寿二年（一一五五）の例文に従って作成されたというが、他の史料（『九条年中行事』など）に徴しても、九条の欠落はこれ以前からのものであった。そこでこの点を疑問とした上卿から意見を求められた大外記中原師元は、「八条」と書けばおのずから「九条」（条坊としての）がそれに含まれる。これは、一条大路とその北にある武者小路との間（それを師元

は「北辺」とみる)を、「加^三北辺」と記して一条に含ませているのと同じ理屈である、と答えている。この意見に対して忠親は異議を唱えたが、それ以上の反論は無駄であるとして口にせず、日記の中で以下のような批判を加えている。

そもそも条坊とは、東西に走る二つの大路にはさまれた空間のことであるから、一つの大路名をあげるだけでは条坊を表示することにはならない。したがって八条(大路)といえはその南にある九条坊も表示されるとする師元の考え方はおかしい。ただ条中には坊門が立てられ、条号を冠した坊門小路(たとえば二条大路と三条大路の間、すなわち三条坊の真中には三条坊門小路がある)が通っているから、坊門小路に面していれば所在の邸宅を小一条殿・東三条殿あるいは小六条殿と呼ぶように、一つの小路名で条号を表現できないわけではない。しかし八条大路というだけで、それに地域としての九条(坊)が含まれる理由は全くない、と。そして忠親がその論拠としたのが、「北辺」なのであった。

すなわち忠親によれば、

(1)北辺とは一条南・土御門北のことである。昔は土御門大路が一条大路であったが、その後一条大路を二丁北へ移したことで、この北辺二丁分(のうち宮城北の部分)が「宮城」(大内裏)に取り込まれ、また、その両翼の北辺部も「京中」とされ、賑給の対象になったのだ。したがって北辺とは(新)一条大路の南であって、師元の言うようにその北のことではない。

(2)京極の東に朱雀堤があるが、師元流の考え方でいけば、これも東京極大路と書くだけで京極・朱雀堤の間までを含むことになろう。しかしそこは賑給の対象にはなっていないではないか。

(3)定文には右京にも「一条加^三北辺」とあるが、右京に武者小路はあるか(ないではないか)。となると右京の場合、どこまでを北辺とみなして賑給すればよいのかわからなくなろう。

(4)これらのことから、南についても八条だけでは不十分で、七八九条と書くべきである――。

言葉を補いながら師元と忠親の意見を要約すれば、ほぼ以上のごとくである。

ここで議論の対象となっている賑給とは、京中の居住者を対象として、官の米塩を放出して困窮者を救済した施策である。したがって早い時期の史料である『本朝世紀』天慶五年(九四二)四月九日条に載せる定文を見ても、一条に北辺が加えられているのはもとより、「七八九条」と、問題の「九」の字も明記されていて、賑給が京中全域に使者を派遣して行なわれたことが知られる。なおこれは仁和五年(八八九)の例にならって実施されたものというから、大内裏拡大直後のあり方を示していると見られる。『西宮記』(五月)にも、賑給に当り「必以_三檢非違使尉若志等_二差_三七八九条_一、是有_三濫行_二之時、為_レ令_三糺行_二所_レ差_一」とあり、ここでも九条(坊)が含まれている。『親信卿記』によれば天延二年(九七四)五月二十八日には、著者の平親信が「西七八九条使」に定められたこと、また八月条には、「件使佐・尉・志為_二一手_一、而佐九条・尉八条・志七条、各相分賑給、 府弁、八条手始」とある。庖瘡が大流行した年であった。

ところが、当初は事が起こった時のみに行なわれていた賑給も、平安中期あたりから次第に年中行事化され、毎年五月の吉日、条坊ごとに使者を派遣して賜与されるという形式的なものとなった。『山槐記』の賑給定めも、そうした時期のものであったが、その過程で、明確な時期は不明だが、「九」の字が欠落したものの如くである。忠親はそれを文書作成過程における落字であるといい、事実この時の例文(久寿二年のもの)は左京のみ欠字であったことが指摘されている。しかし九の字なしでも通用していたのは、それで良しとする共通の認識があったからで、単純な落字というだけでは片付けられないものがある。

その理由としては、南辺の九条域が衰微し、市街地としての実を失いつつあったことがあげられるかも知れない。しかし町の衰微が理由なら右京地区にも同様の欠落があつてしかるべきなのに、賑給から除外されることは

ない。とすると九条の不記載は、やはり師元の言うような、大路名で条坊を表わすという理解の仕方にかかわるものであったと見られよう。ことにそれが京辺部であったことに深い関わりがありそうだ。この点についての師元の論拠が、忠親とは別の意味ではあるが北辺部に求められているところに、そのことがうかがわれよう。

(2) 北辺の意味変化

議論の発端は九条坊の記載の有無にあったが、それをめぐる師元と忠親の意見を通して明確になってきたのが、「北辺」もしくは「北辺坊」についての両者の認識の違いである。すなわち師元はこれを(新)一条大路の北、つまり京外とするのに対して、忠親は(新)一条大路の南、つまり京中(いわゆる北辺坊)のこととする。ともに北辺といっているが、一条大路をはさんで前者は北、後者は南と、全く別の認識となっている。どうしてこんなにも理解が違ってきたのであろうか。ここでわたくしは、大路と条坊の対応関係について考えておく必要があるように思う。すなわち宮城北辺東西路として的一条大路が北上する以前、大路名と条坊名とは即応していた。つまり一条(坊)とは一条大路(のちの土御門大路)以南、中御門大路(但し当時この呼称が存在していなかったと思われる)以北であり、二条大路以北中御門以南が二条(坊)であった。そして一条(旧北辺)大路の北には、北極大路までの間に北辺部があった。

ところが一条大路が北上した結果、(新)一条大路と中御門大路との間(通常ならば一条坊と呼びうる地域)に北辺部(坊)が介在することとなり、この間の六丁分を単純に大路名に即して一条坊と称することに不都合が生じた。とくに旧一条大路と北極大路との間の二丁分の空間が、これ以前から特殊な地域として存在し、旧一条大路以南とは別個の扱いをうけていたことが、その障害となったことは明らかである。むしろ北辺坊としての性格は一条大路の北上によってより明確になったと見られ、それはこの地域に坊長が任命されたこと(坊長卅五人、条別四人、但二条各三人、北

「北坊」、掃除夫もほかの条坊と同じ比率で割り充てられていたこと（「掃清丁卅六人^{条別四人、但二条各三人、北辺坊二人}」）などにもうかがわれよう（『延喜左京職式』）。そういう実態をもつ北辺坊の称を抹消し、一条坊として一括することは出来なかったのである。これが定文に見られるように、「一条（坊）加北辺（坊）」という表記にせざるを得なかった理由である。

もっともこの場合、賑給使を北辺坊・一条坊それぞれに任じていればこうした表記の必要もなかったわけであるが、北辺坊は二丁分と、他の半分であったからであろう、一条坊に付して担当させたことが、「一条加北辺」という表記をとらせた、より直接的な理由である。

しかし重要なことは、「一条加北辺」という表記からも予想されるように、やがて北辺坊・一条坊の区別が解消され、さらには北辺坊の地域を表わすのにも一条の呼称が用いられるようになっていく事実である。たとえば北辺坊にあった藤原伊尹あるいは源雅信の邸宅が一条殿と称されたのは、（新）一条大路に接していたことに由来する。また（新）一条大路が北辺大路・北大路とも通称されたこと（『権記』長保二年五月二十八日条、『小右記』長和四年四月十九日・治安二年五月二十八日条など）、とくに（新）一条大路の北に建立された行願寺が一条北辺堂と俗称されたことなどはそのもっとも典型的な事例で、むしろ北上以後の名称である。いずれにせよこれらの事実から、北辺坊という認識が薄れ、むしろそれを含み、大路名（一条）に即応する形で一条坊が事実上拡大されたことが知られると思う。そしてこれはまた、北辺坊だけでなく、条坊という形での空間認識がようやく廃れてきたこと

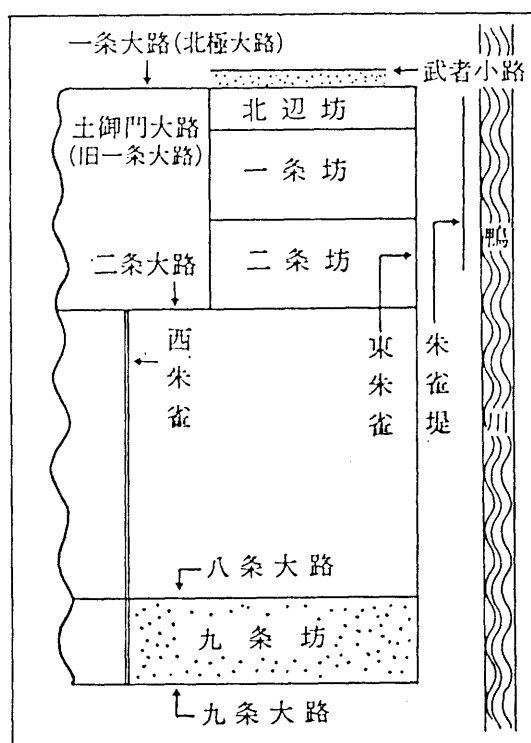


図11 大路と条坊の対応関係

を暗示するものでもあらう。

こうして北辺坊の独自性が失われ、いわば一条坊に解消されてしまうと、次に出てくるのは、北辺を(新)一条大路の北、すなわち京外とみる認識であった。これまでの京中の北辺坊のこととする認識からすると、これは大転換といわねばならないが、北辺坊にこだわらなければ、この方がむしろ北辺という言葉に対する素直な理解であつたらう。かつての北辺坊にしても旧一条大路の北だったからで、新一条大路の北を「北辺」とみるのが自然だからである。ましてや(そして大事なことだが)一条大路の北上といった歴史的事実を知っていなかったらしい師元にしてみれば、叙上の迂遠な論証をまつまでもなく、北辺とは当初から一条以北(京外)以外ではありえなかったに違いない。

(3) 北辺と朱雀堤

北辺坊をめぐる忠親と師元のくい違いは、結局のところ、前者が条坊についての伝統的な理解に立つのに対し、後者が市街地の変貌に対応する形で理解するところにあつたと言えそうである。しかしこれは一概にどちらが正しく、どちらが間違いとは言えない。なぜならこの時期には地点の表示についても、現実的な利便から、条坊制に基づく方法(条坊保―四行八門の制)から道路を基準にする表示(たとえば三条北、室町東といった)へと移行しており、これも同質の問題とみられるからである。九条坊をいうのに八条(大路)でよしとする考え方も、全く同様の理由によつていたわけである。そしてこうした変化をもたらした要因は、武者小路の新設などにうかがわれるように、京外北辺が市街地化してきたことにより、京中京外の区別を必要としなくなったことであつたと考えられる。

この時期における平安京は、北辺部の発展とは対蹠的に、右京の衰微がいつそう進んでいた。中央路であつた

朱雀大路が市域の西辺となり「西朱雀」と呼ばれたのもそれであり、しかもこれに対応するように「東朱雀」の語が出現する。東朱雀とは東京極大路、ことに二条以北のことを指すが、それに伴い従来東河と呼ばれていた鴨川も「朱雀河(原)」と称されるようになっていく。師元への反論として忠親の例示した「朱雀堤」が、まさにその朱雀河の堤のことであった。こうした市域の東進については「東朱雀大路と朱雀河」(六章)での考察にゆだねたいが、そこでもふれたように、節季料(地口銭)の徴収分担範囲が、条坊に基づく(東西に走る大路による)ヨコ割りから、市街地の現状に即してタテ割りにかわっている。これも市街地の変貌がもたらした結果であった。北辺坊の概念の消滅は、市域の東進とそれにつづく東朱雀大路や朱雀河(原)の呼称の出現とともに、第二次平安京から京都へ、古代都市から中世都市への変貌を象徴するものといつてよいであろう。

(1) 平城京の場合、東方に突出している外京の存在も特異であるが、基本的な平面構成に関わる問題ではないので、ここでは取り上げない。

(2) 「平城宮大裏跡坪割之図」奈良国立文化財研究所刊。

(3) 但し『玉葉』治承四年六月十五日条によれば、この日福原遷都について語り合ったなかで「奈良京旧指図」を持参したことが知られ、平城京指図の存在が確かめられる。もっともどのようなものであったか、明らかでない。

(4) 臚谷寿「加茂祭の棧敷」(『角田文衛博士古稀記念 古代学叢論』所収)。

(5) 『京都の歴史』第一巻。

(6) 『平安通志』所収。

(7) 宴の松原や清涼殿の建て替えについては、二章「歴代遷宮論——藤原京以後における——」参照。

(8) 『続日本紀』宝龜三年六月三十日・宝龜七年九月二十日条、『日本後紀』延暦十五年八月二十五日条など。

(9) 井上薫「光明皇后と皇后宮職」(『ヒストリア』20)。

(10) 奈良国立文化財研究所「平城宮北辺地域発掘調査報告書」。

(11) 『向日市史』上巻。

(12) 元慶官田に関する研究としては、村井康彦「元慶官田の史的意義」(『古代国家解体過程の研究』所収)、大塚徳郎「元慶三年設置の官田について」(『東北大学教養部文科紀要』六集)、同「元慶官田の諸司田化についての二つの問題」(『日本歴史』一八〇号)がある。

(13) 藺田香融「出挙——天平より延喜まで——」(『律令国家の基礎構造』所収)。

(14) 村井康彦「平安中期の官衙財政」(『古代国家解体過程の研究』所収)。

(15) 宮城十二門(号)に関する研究には、井上薫「宮城十二門の門号と乙巳の変」(『日本古代の政治と宗教』所収)、佐伯有清「宮城十二門号と古代天皇近侍氏族」(『新撰姓氏録の研究』研究編所収)、川勝政太郎「平安宮十二門に関する問題」(『史迹と美術』15の6)などがある。

(16) 長岡宮について断定は出来ないが、『続日本紀』延暦十年九月十七日条に、「仰_二越前、丹波、但馬、播磨、美作、備前、阿波、伊予等国、壞_二運平城宮諸門、以移_二作長岡宮_一矣」とみえるのが、十二門であったことを推測させる。

(17) 福山敏男「信貴山縁起に見える宮城の門」(『日本建築史研究』所収)。

(18) 福山敏男「平城京及び平安京の一条一坊」(『建築史』三ノ四)。

(19) 川勝政太郎「平安京左右京と居住者」(『史迹と美術』二六の三)。

(20) 「抛諸図所考定北辺坊保図」。

(21) 天平十七年(七四五)十二月の写書所解に「左京一条一坊戸從八位下水宿禰広万呂」とみえるが、墨抹されている(正倉院文書)。

(22) 『栄花物語全注釈』三。

(23) 藤原有貞(仁明女御藤原貞子の弟)の卒伝(『三代実録』貞観十五年三月二十六日条)に、「(承和)十二年、見疑私_二通後宮寵妃_一とあることより、深寂母の過失とは有貞との密通であったと思われる。

(24) ここで取り上げた皇親あるいは賜姓皇族以外にも、一条一坊や二条一坊の戸主として、あるいはそこに貫付された事例がいくつか所見する。次に掲げるのが管見におよんだものである。

〔左京一条一坊〕

① 平斉章……天曆九年(九五五)七月十七日官符(東寺に年分度者四人を与えたもの)に、「平朝臣真光年十七_{左京一条散位從五位上}」と所見(東宝記八)。
同姓齊章戸口

② 源同……天徳三年（九五九）八月三日官符（①に同じ）に、「源澄年二十五左京一条一坊戸主從五位下源朝臣同戸口」と所見（東宝記八）。

③ 藤原在衡……応和元年（九六一）八月十五日の三条令解（売券）に、買手が「左京一条一坊戸主大納言正三位藤原在衡戸口、散位從四位下藤原朝臣守義女子、同姓貴子」と所見（朝野群載二一）。

〔左京二条一坊〕

④ 石川真主……貞観十二年（八七〇）四月二十三日の某郷長解（売券）に、売手が「左京二条一坊戸主石川朝臣真主戸口、同貞子」と所見（平安遺文一六三号）。

〔右京一条一坊〕

⑤ 貞登……貞観八年（八六六）三月二日、「沙弥深寂賜姓貞朝臣名登、叙正六位上、貫右京一条一坊」と所見（三代実録）。

⑥ 藤原国風……康保五年（九六八）六月八日の官符（①に同じ）に、「藤原朝臣善秀年廿三右京一条一坊戸主從四位下藤原朝臣同戸口」と所見（東宝記八）。

⑦ 良峯高峯……康保五年（九六八）六月八日の官符（①に同じ）に、「良峯朝臣尚材年□□右京一条一坊戸主正六位上同姓高峯戸口」と所見（東宝記八）。

〔右京二条一坊〕

⑧ 榎井嶋公・同嶋人・同嶋長……和泉国日根郡の人で、承和十二年（八四五）二月二日、「戸主正六位上春世宿禰嶋公、兄左坊城主典從七位上春世宿禰嶋人、弟主税大允正六位上春世宿禰嶋長等、賜姓榎井朝臣、貫右京二条一坊」と所見（続日本後紀）。

このうち①平斉章と⑤貞登については三七二～三七四頁参照。②源同については、『尊卑分脈』に、源弘（八一二～六一六）の息、および源常（弘の異母弟、八一二～一五四）の子直の息に、その名がみえる。しかし両者とも天徳三年（九五九）まで生存することはまず不可能で、②と別人と思われるが、いずれにしても②は賜姓貴族の系統であるから問題は無い。その点では、⑦良峯高峯も同様である。皇族賜姓の早い例に桓武皇子の良峯安世（嵯峨天皇の異母弟）がいるが、高峯はその後裔と考えられるからである。次に藤原姓の③在衡と⑥国風であるが、前者は栗田左大臣と称され、安和の変により高明にかわって右大臣となった人物、後者は魚名流に所見する大宰大貳国風のことかと思われる。ともに「一条一坊の戸主」となった経緯は明らかでないが、戸籍が意味をもたなくなった十世紀も半ばの所見であることから推測するに、

虚偽の記載であった可能性も強い。

問題は(左・右京)二条一坊にみえる④石川真主と⑧榎井嶋公ら三人である。まず前者であるが、貞観期の売券に「戸主」とある以上、実際にその地「左京二条一坊」に居住、もしくは家地を有していたと考えざるを得ないが、そこは大内裏の東南部、太政官や宮内省の官衙が現実存在していたところで、これまでに縷々述べてきたように、事実として有り得ない。誤記(写)と考えて間違いない。後者についても同様で、確証はないが有り得ず、誤写と考えてよい。

(25) なお本稿では参考に出来なかったが、桃園・世尊寺については、新潮日本古典集成『今昔物語集』(本朝世俗部三)の付録および高橋康夫氏が『京都市中世都市史研究』(『国語と国文学』昭和三十五年十一月)。

(26) 迫徹朗「大和物語における兵部卿宮考」(『国語と国文学』昭和三十五年十一月)。

(27) 克明が彈正尹に任じられたのは延長二年(九二四)十二月二十一日以前のこと。なお克明と清貫の関係は不詳。ただ清貫が、例の桃園右大臣と称された藤原継繩の後裔であることは興味深い。

(28) 角川日本地名大辞典・京都府下巻。

(29) 『親信卿記』参照。

(30) 『大鏡』『栄華物語』『蜻蛉日記』など参照。

(31) 『一条摂政御集』など。

(32) なお『中右記』寛治六年(一〇九二)十二月十八日条に「及夜半、一条北辺小屋焼亡桃園云々」とあって、桃園の名が用いられているが、これが最末期の用例ではなからうか。

(33) 京外の武者小路については、のちの『拾芥抄』にも「一条北有_二小路_一、武者小路」とあるが、いつ頃形成されたかは不詳である。右京にまでは通じていなかったようで、おそらくこの『山槐記』の記載が早い時期のものであろう。

二章 歴代遷宮論

——藤原京以後における——

遷宮の「故実」——緒言にかえて

近年、都市開発に伴う史跡の発掘調査が多く、その成果には目をみはるものがある。飛鳥諸宮をはじめとする古代宮都の建物址はもとより、藤原京・平城京などから統出する土器や木簡など多数の出土品は、古代人の生活を鮮かに再現してくれるかのである。

しかしながら遺跡の発掘調査が進み、考古資料が豊富となるにともない、これを文献とどう関係づけるかがいよいよ問題になってきている。豊富な遺跡資料の提供がかえって宮都の歴史を複雑にしているというのが現状で、発掘の調査結果を有機的、総合的に位置づけ理解しうる文献上の構想が、いまほど必要とされることはないように思う。

さて、日本古代の宮都史を特質づけるものとして歴代遷宮の慣行があったことは周知の通りである。摂津難波に宮居を構えた孝徳天皇を難波宮治天下天皇と呼び、又天智天皇を近江宮治天下天皇とも追称する(1)ように、その天皇が営んだ宮室名を冠する称号は歴代遷宮の所産にほかならない。しかもこうした歴代遷宮は、知られるところではわが国独自の慣行であり、したがってその実態や特徴を明らかにすることが、日本古

代史の解明にきわめて重要かつ有効であるに違いない。

この歴代遷宮については、律令制の整備にともなう宮室・宮都の規模の拡大によって、七世紀の末に至り終止符を打たざるを得なくなる、その最後が天武天皇の飛鳥浄御原宮であった、というのがこれまでの理解であろう。じじつ次の藤原京では二代の天皇が、平城京では七代というように、以後は何代かの天皇が同じ宮室を皇都とし、またそれにつれて先にあげた宮室名を冠した天皇の追称も消滅した。

しかし歴代遷宮の慣行は藤原京に至って「終焉」したと言えるのであろうか。考えてみれば、藤原京以後、遷都の期間は間遠くはなるけれども、平城京―長岡京―平安京への遷都のどこかに、それまでの歴代遷宮の慣行が影を落していないとは、誰も断言はできないはずであるし、それよりも歴代遷宮が七世紀末で終わつたとすれば、次のような事実の理解が困難となるのではなからうか。

その事実とは、時代は降るが、桓武天皇崩御後に即位した平城天皇に対して、公卿たちが次のように奏上したことである。

……国家恒例、就_レ吉之後、遷_二御新宮_一、……亮陰之後、更建_二新宮_一、古往今来、以為_二故実_一、臣等准_二抛旧例_一、預請_二処裁_一、伏奉_二今月十三日勅_一、偶、朕為_二民父母_一、不_レ欲_二煩勞_一、思_レ抛_二旧宮_一、……

（『日本後紀』大同元年七月十三日条）

その主旨は、新帝が立ち、先帝の忌が明けたら、新しい宮に移ることが天下国家の「故実」となっている、として、天皇に遷宮（都）の意思を尋ねたのに対して、平城がその気持のないことを表明したものである。内容の検討はのちにあらためて行なうが、この記事が注目されるのは、この時点における遷都の可能性の有無もさりながら、もし天皇に意思さえあれば遷都が行なわれたかも知れないこと、しかもそれが、天皇の恣意といったものではなく、「国家の故実」と観念されていたという事実である。「故実」という以上、新帝の遷宮がこの時期で

も、一つの慣行として生きており、そういう認識なり觀念が現に存在していたとしなければならぬ。とするならば、われわれは先にみたように歴代遷宮は藤原京の段階で終わったとし、それ以後はなかったかのごとく思い込んで来たが、実際にはなんらかの形で遷宮が行なわれていたのではないかと考え直さざるを得ない。藤原遷都からこの時まで一世紀もの期間、その事実が継続的に存在しているのでなければ、それを「故実」ということはできないと思うからである。

藤原京以後にも影を落していたと考えられる歴代遷宮の「故実」の実態はどんなものであったのか。おのずから本稿における歴代遷宮論は、一般にそれが終わったとされる藤原京から始められることになる。そしてその「故実」を分析することによって、古代における遷都の意味がより明確に理解されるであろうし、考古資料の位置づけにも有意義な見方を提出することになるかと思う。

一 藤原京をめぐる諸問題

(1) 新益京

大和三山に囲まれた藤原京の造営は持統女帝によって着手されたが、それはわが国ではじめて都城制に基づく宮都であったという点で画期的な意味をもっていた。文獻の上でたどると、その造営はすでに天武時代に計画され、唐の長安や洛陽には及ばないとしても、律令国家の首都として構想されたものであった。畿内畿外にわたる官人の「出身」——京師への集住策を展開する上で、京城をもたない浄御原宮の不便さ、狭小さは痛感されていたに違いない。それあってか天武は、浄御原遷都の四年後には早くもあらたな都づくりを計画し、新城や信濃といった地域にも使者を派遣して候補地を探索させている。しかし結局はいずれも実現せず、最終的に藤原の地が選ばれている。その決定に際しては天武自らが幾度か現地を視察したのであるが、『日本書紀』天武十三年

(六八四)三月九日条に、天皇が京師に赴き「宮室の地」を定めた、とみえるのが、視察に関する最後の記事である。天皇はそれから二年後に浄御原宮の「正宮」おのみやに没し(朱鳥元年九月九日)、藤原遷都の遺志は、皇后の持統にゆだねられることになる。

さて、こうして天武のプランになる藤原京は、持統の即位によって本格的な造営が開始され、持統八年(六九四)十二月、遷都の運びとなった。ここではしばらく遷都に至るまでの経過や造都の進行状況などを見た上で、藤原京をめぐる基本的な問題を取り上げ論じておきたいと思う。

持統による藤原京の造営は、即位四年(六九〇)の十月と十二月、二度にわたる宮地の視察を経たあと、まず京域の造成から着手された。天武の崩御といった事態が介在したこともあるが、先に述べた天武の宮地視察から六年目のことで、遷都事業の継続というより「再開」とみた方が真相に近いと思われる。すなわち翌五年の十月二十七日、使者を派遣して「新益京」の地鎮祭を行なわせ、十二月八日には右大臣以下に宅地を班給している。年が明けて六年正月、天皇自身が「新益京の路」を巡察し、続いて同五月、今度は「藤原宮地」の地鎮祭を行ない、伊勢・大倭・住吉・紀伊の四大神へ奉幣と奉告、同七年二月には造京司に京中発掘の屍の収容を命じている。この間、三度(六年六月三十日・七年八月一日・八年正月二十一日)にわたる天皇の行幸を経て、即位八年十二月六日、遷都された。それは一世紀にわたる飛鳥諸宮の歴史の「終焉」でもあった。

さて、こうして生まれた藤原京であるが、『日本書紀』にはこの藤原京が「新益京」(持統五年十月二十七日・同六年正月十二日条)と記され、当時その名で呼ばれていたことが注目される。この「新益京」の意味するところについては従来からいくつかの解釈が出されている。

管見によれば、そのもっとも早い例が鎌倉末期卜部兼方の編さんになる『新益京私記』シムヤクノミヤコに、「新益京私記曰、新益京」(卷廿二、秘訓七)「兼方案」之、藤原宮地也、(新益之義可三考求二)(卷十五、述義十一)とみえるものである。

しかしここでは「シムヤクノミヤコ」という読みについてのみ記され、その具体的な意味あいについてはふれるところがない。当時すでに不明であったからであろう、「新益之義可_ニ考求_一」として考察を保留している。

ところで平安時代、国司が検田して本来の田畑以外に勘出した田地を「勘益田」と称して収公したように、「新益」とは本来あったものに新たに加え（わ）る、という意味である。先に掲げた公卿の、平城天皇への遷都の奏上に対して下された詔の中にも、平城が桓武の造った平安京について、「棟宇相望、規模合_レ度、欲_レ使_ニ後世子孫、無_レ所_ニ加_レ益_一」（『日本後紀』大同元年七月十三日条）、といった言葉が見える。平安京は完成された都であって後世にも増修築の必要がない、との意であろうが、ここにいる「加益」も藤原京の「新益」に共通することばであろう。そして「新益」の語がこのような意味をもつとすれば、新益京とは以前の宮よりはひろがりをもつ都の意、ということになる。しかしそのひろがりとは従来の理解のように、「飛鳥京の西北郊外に拡張・設定した新式都城⁽²⁾」といったものではなく、「飛鳥京時代には存在しなかった、左右京城に対する表現⁽³⁾」であろう。そしてこれが近時の意見といつてよい。

「新益京」という表現は、藤原京が、それまでの飛鳥諸宮に比し画期的な都として受けとめられたことを思わせるが、わたくしはこの言葉には二つの意味が存していたように思う。一つには右に述べた、京城のなかった飛鳥京に比べて、広大な京城部分が設定されたことに対するものである。しかしそれとともに、二つには、すでに天武時代に選定され、ほぼ設定されていた藤原京城を、持統朝の造営にあたってさらに拡大_二加益_一した、ということもあったのではないか。

天武十三年（六八四）、天皇が京師を巡行して「宮室の地」を定めてから、持統が高市皇子に藤原宮地の視察を命じた持統四年（六九〇）までの間、じつに六年の空白期間がある。この間、『日本書紀』には都造りに関する記事を全く載せない。このブランクは、持統が、天武プランをそのまま踏襲して造営工事を再開したとみるには

長いように思う。また平城京の場合と比べてみても、視察から造営の諸行事を経て遷都に至るまでの期間が、藤原京では四年（平城京は二年）の長きに及んだというのも、いささか解せない。これは、はじめての京域をもつ試みであったからとも見られるが、やはり天武プランを修正しながらの造営に費やされた長さではなかったろうか。その間には京域の拡幅や移動、あるいはより広大な土地の収公などといった手直しが行なわれることもあったのであろう。地鎮祭に至って京域が具体的に限定され、おぼろげであった持統の「新益京」の意図するところが現実のものとなった、それが「鎮_ニ祭_ニ新_ニ益_ニ京_ニ」（持統五年十月二十七日）と表現されたゆえんではなかったろうか。ともあれ「新益京」という言葉には、持統の着手した藤原京に抱く当時の人々の新鮮なイメージ——期待や驚きといったものが集約されているように思われる。

(2) 「始めて藤原宮地を定む」の解釈

藤原京をめぐる議論の中で、従来から最大の謎とされてきたのが『続日本紀』文武天皇慶雲元年（七〇四）十一月二十日条に見える、「始定_ニ藤原宮地_ニ、宅入_ニ宮中_ニ百姓一千五百五烟賜_レ布有_レ差」という記事であろう。持統の遷都以来すでに十年も経っていないが、「始めて」藤原宮地を定めたとはどういうことか、誰しも抱く疑問に違いないし、従来の研究者の意見もいくつかに分かれるところである。

まず喜田貞吉氏はこの記事について、持統と文武の宮殿を別個のものとみなし、文武の代になって「やがて其の狹隘を感じるに至って」宮域の拡張と共に新たに宮域の位置が奠定されるに及んだ、とする。いってみれば宮域拡張に伴う宮域移転説である。これに対して足立康氏は文中の「宮」地を「京」域とみ、「大宝以来の拡張工事がこの頃一段落を告げ、茲に始めてその範圍も定まった⁽⁴⁾」という拡張説を述べ、さらに大井重二郎氏は足立説をうけて、「大宝初年を以って藤原京は大規模に修正された」として、持統と文武の藤原京を区別し、「始定藤

原宮地」は新たな藤原京都、市計画がほぼ成った時期に当り、この記事は藤原京の経営が企画の一貫性を欠いた証左である、と解釈された⁽⁵⁾。

諸氏の見解は、それが宮域か京城かの違いはあっても、藤原宮(京)の境域あるいは境界線に関するものと見ている点では共通し、この時点で宮域なり京城が定められたとするわけである。それが藤原宮移転説・拡張説という形で議論がなされる根拠となっている。それはこの時期で拡張工事が「終わった」とする足立氏にしても、終わったのが「拡張工事」という限りでは同じ発想であるといわねばならない。

しかしわたくしは、先の記事には別個の解釈が可能であると思う。

まずこの場合、「始めて」という言葉の用法に注目したい。たとえば時代は降るが、『続日本紀』天平十五年(七四三)十二月二十四日条に「始、運平城器仗、收置恭仁宮」という記事がみえる。聖武天皇が、藤原広嗣の乱を契機に恭仁京へ遷都中のことで、その恭仁京へ平城宮の器仗を運び収めたというものである。しかし関係記事を見れば知られるように、器仗の運搬は天平十三年閏三月九日にも行なわれており、この時「始めて」移動を「開始」したわけではない、むしろこの時点でそれがことごとく「終了」したことを意味する。そういえば平城京の工事が一段落し、天皇以下が平城へ遷都した折にも「始、遷都于平城」(『続日本紀』和銅三年三月十日条)と記されている。つまり「始めて」の言葉には、そのあとに記される事態の終結した意味がこめられており、藤原京における「始めて」も、それと同じ用法のように思われる。そのことを念頭におきつつあらためてこの記事を検討すると、つぎに手がかりとなるのが後半の、「宅入宮中二百姓一千五百五烟賜布有差」と記す百姓の数である。一烟の平均が五人としても、ざっと七千五百余人で、場合によっては一万人を超えるかも知れないこの数字は、宮中(宮域)に存在した百姓の数というには多すぎるから、ここにいる宮中は京中のこととみるべきである。ちなみに平城京造営の場合でも宮中より立ち退かせた菅原地民は「九十余家」(『続日本紀』和銅元年十一月七日条)

にすぎなかった。したがって藤原京の場合、先の「始定藤原宮地」にいう「宮地」もこの「宮中」と同じく宮城部のことではなく、京中のこととみてまず間違いない。

そのことと関連して、「宅入_ニ宮中_ニ」⁽⁶⁾ということの理解にも問題がある。従来は、平城京・長岡京の宮地からの立ち退きの史料と同様、これも「民家の立ち退き」⁽⁷⁾あるいは「民間宅地の接收」と理解されてきた。しかし宮中（域）と京中（域）とでは別個の理解が必要なのではあるまいか。なぜなら後者——京中とみる場合、むしろ百姓の居住は望ましいことであつたと思われるからである。

次に、与えられる布が百姓の間で各々「有_レ差」と記されている点について。この事實は、百姓といつても一般庶民だけでなく下級官人をも含む、広い意味での百姓を意味し、その百姓の身分に応じて布が支給されたものと解すべきである。

以上にもまして大事なことは、定められたのは「宮（京）地」のことであつて、「宮（京）域」というわけではない点である。藤原京地には、その京域内に現在でもいくつかの小丘が残っている。おそらくそれらは藤原京時代でも存在していたものであろう。藤原京は条坊制に基づき道路が碁盤目状に造られ、その碁盤の目すべてを埋めるように宅地が造成されたかの如く思いがちである。主要部分はそうであつたかも知れない。しかし京域内には各所に以前からの丘陵や樹木、河川や沼地なども残っていたに違いない。一挙に京域全域がととのえられたわけではないはずである。そして、このような考えを前提にしてはじめてわたくしは、いわゆる「宅地班給」のもつ具体的意味も理解されてくるように思う。

すなわち造都にともなう宅地班給は、すでに天武の難波造都の際にもみられたが（天武十二年十二月二十七日）、本格的には藤原京の時をもってはじめとし、『日本書紀』によると持統五年（六九二）十二月、「新益京」を鎮祭してから一カ月半後に班給されている。それは右大臣に四町、直広式以上には二町、大参以下は一町、勤位以下

無位に至るまでにはその戸口数に従って上戸一町、中戸半町、下戸四分一町というものであった。平城京や平安京の場合、具体的な数はわからないが、天平六年（七九四）九月に班給された難波京では、三位以上には一町（四十丈四方）、四、五位者には半町、六位以下には四分の一町であったところから、ほぼこの額が踏襲されたと思われる。こういった宅地班給が、官人出身法とともに天武によって実現化されつつあった京師集住策の一つであったことは、すでに指摘されている通りである。⁽⁸⁾ 宅地班給は京域の出現と対応し、造遷都には不可欠の措置であった。

ところが宅地班給は多くの場合、上層貴族や天皇に関係の深い后妃・采女などから先に与えられている。しかしそれが先に述べたように、下級官人ないし一般庶民へも適用されたとなると、班給された宅地はその時点で十分な形に整備されていたとは考えられない。当然のことながら、造宮省・造京司による京中全域の整備がなされ、宅地の造成が完了した上で人々を誘致するということは事実上ありえないからである。諸人への「宅地班給」は、宅地の整備を被給者にゆだね、それを通して京中の整備が行なわれることを期待した上での措置であったとみるべきものである。要言すれば宅地班給には、官人の京中集住という政治的意図とともに、より直接的・具体的には京中の整備がもくろまれており、その意味では、まさしく造都事業の一環をなす措置にほかならなかったのである。

なおこの宅地班給に関連して一定の禄物が宅地造成か住宅建築費として支給されている点も留意される。長岡京時代のことになるが、延暦三年（七八四）造長岡宮使を任命したその六月に「新京の宅を造るため」に、右大臣以下参議以上、および内親王らに諸国正税六十八万束が与えられているし、平安京の場合は、造営が着手された翌延暦十三年（七九四）七月、山背・河内・摂津・播磨などの国稻一万一千束が「新京に家を造らんが為」に百済王明信などに支給されている。藤原京については具体的な記録はないが、基本的にはかわりはなかったろう。

つまり大まかな条坊・道路の整備がなされた段階で、新京の構成要員である貴族に宅地を割り当て個人的な経営にゆだねる、その助成金であったと思われる。

このように考えれば、宅地班給の一カ月余後、持統自らが巡幸して「観_ニ新益京路_ニ」（持統六年正月十二日）たという「路」視察の意もおのずから明らかになる。女帝は自分の目で道路整備の現状を確かめておきたかったのである。もっとも藤原京で、千五百五烟の百姓それぞれに与えられた布というのは上層貴族の宅地造材料に匹敵するものではない。土地の造成や家屋建築をねぎらう意味での布であったと思う。上層と下層者との扱いの歴然たる差異はすでにここにもあった。

以上、「始めて藤原宮地を定む」を理解する上での要点をいくつか指摘して来たが、これによりその意味するところはほぼ明瞭になったと思う。すなわちこれは、この時点で、宮域あるいは京域が定められたというのではなく、文字通り宮地、それも宮（京）中の造成が終わったとの意にほかならない。天平十二年（七四〇）、恭仁京造営の際、天皇・公卿の遷御、あるいは市の移転のちに百姓への宅地班給がなされている（天平十三年九月十二日）ように、こういった百姓誘致は、工事の最終段階における措置とみてよい。藤原京の場合も、すでに確定されていた京城内での充実整備がはかられ、持統女帝以来の主たる関連工事が一応この段階で終了したとみるべきであろう。新益京造営の一応の終結である。

「始定_ニ藤原宮地_ニ」とは宮域（京域）が移転あるいは拡張するといった理解とはおよそ無関係な事実であった。そして天武によって計画された藤原京は持統によって着手され、京中の整備は持統・文武の二代にわたって漸次進められていったことも知られた。

その点に関連して留意されるのは、『続日本紀』文武元年（六九七）九月三日条に見る「京_ハ人_ハ大神大綱造百足家生_ニ嘉稻_ニ」とか、同三年正月二十六日条に「京_ハ職_ハ言_ハ、林坊_ハ新羅女牟久売一産_ニ男_ニ二女_ニ」とある記事である。文

武天皇時代、「林坊」という固有の坊里がすでに存している一方で、左右京の区別がなされておらず、未整備な状態がうかがえるからである。ところが大宝以後になると、「正五位下美努王為左京大夫」(大宝二年正月十七日条)と見えるのを始め、左右京の区別が現われ、和銅元年(七〇八)の「左右京職(史生)各六員」(八月二十一日条)といった記事に及ぶ。これは藤原京の造成発展過程をそのままに示しているものとみてよい。

以上、新益京の「京城」について考察してきたが、次に論ずべきは「宮域」の問題であろう。それをわたくしは、従来ほとんど取り上げられることのなかった大宝二年の史料を検討することで、明らかにしてみたい。

(3) 文武天皇の「新宮」

文武天皇が即位して五年目、『続日本紀』大宝二年(七〇二)三月十二日条に次のような記事がある。

鎮_二大安殿_一大祓、天皇御_二新宮_一正殿_二斎戒、惣頒_二幣帛於畿内及七道諸社_一、

文字通り大安殿を鎮祭したあと大祓が行なわれ、文武自身は新宮正殿で斎戒するとともに、畿内及び七道諸社に幣帛を頒布したというものである。解釈上特別問題となる点はないが、文武が斎戒したという「新宮(正殿)」はどういう建物であったのか、気になる存在であろう。わたくしはこれこそが、前項で取り上げた「始定_二藤原宮地_一」の記事に連動するものであり、歴代遷宮論の中であらためて考え直す必要があるように思う。

まず、ここにいう大安殿について考えてみたい。具体的にはどの殿舎を指すのであろうか。

大安殿の初見は天武の飛鳥浄御原宮であり(天武十四年九月十八日条)、以後藤原・平城・難波・恭仁・紫香樂の各諸宮殿に所見して、天平勝宝六年(七五四)の平城宮の記事を最後に、長岡・平安宮ではみられない。八木氏は、この大安殿は大極殿とは別の建物で、朝堂院の正殿ともいふべきものが大極殿であるのに対して、大安殿は内裏の正殿であったとする。養老五年(七二二)十二月、元明太上天皇が「平城宮中安殿」で没していることや、

安殿と名のつく建物がその大きさや位置によって大安殿・小安殿・外安殿・東安殿・西安殿など名称の区別があることなどから、いずれも天皇の宮居（内裏）に関係する殿舎とみられ、大安殿はそれらの中心的殿舎であったと考えて間違いない。したがって文武がそこで大祓をした大安殿とは、そのあとに記す「新宮（正殿）」の一面と判断されるが、留意されるのは、この記事が鎮祭行事のものであることである。この時「鎮_三大安殿_二大祓_一」された大安殿も当然新しい建物であったとみるべきで、前年（大宝元年）正月四日に文武が祥瑞を受けたという大安殿とは別個の建物と思われる。むろん前年のそれは持統朝のもので、場合によってはこの時期二つの大安殿が存在したことも考えられる。あるいはこの鎮祭はこれからの新造に当たっての地鎮祭とみることもできようが、全体の文脈から判断するに、ほぼ落成した折りの儀式（ないしはその新造された殿舎への遷御の儀式）と考えられる。そしてこれは文武の即位から五年目のことであり、即位にかかわる重要な儀礼である大嘗祭のための大祓は、すでに即位の翌年（文武二年十一月七日）に行なわれているから、この大祓が新殿舎（大安殿）の鎮祭に関係するものであったことも確かである。『続日本紀』をはじめとする当時の記録からも、この前後に大祓を行なうほどの特別な政治的・社会的事件も見当たらない。これが留意されることの第一である。

第二は、この儀式とともに畿内及び全国の諸社に奉幣がなされているという事実である。なぜならこういった奉幣・奉告は国家の大事、ことに遷都にあたって必ず行なわれるものであったからである。遷宮（遷都）に際して伊勢神宮以下の名神、あるいは先祖の廟に奉告した例としては、近くは藤原遷都に先立ち、持統六年（六九二）五月、伊勢・大倭・住吉・紀伊の四大神に使者を派遣して奉告している。この大宝二年の奉幣も新宮造営にかかわる神事と考えて間違いない。とするならばこれは、文武のために新しく造営された内裏であり、それへの遷御（もしくは新造）に当たって、文武自らが斎戒したことを示している。

(4) なぜ「新宮」か

ここで「新宮」という表現について付言しておきたい。天武の浄御原宮の場合でいえば、『日本書紀』天武七年(六七八)四月十三日条に「新宮の西庁」、同十年三月二十五日条にも「新宮の井の上」と所見する。天武元年(六七二)に飛鳥浄御原宮に遷御して以来、じつに六〇九年も経った時点で、なおも「新宮」と呼んでいるわけで、いささか奇異に感じられるのであるが、天武十四年(六八五)九月、「旧宮の安殿の庭に宴す」という旧宮が舒明天皇の飛鳥岡本宮に比定されており、この時の「新宮」は浄御原宮以外には考えられない。おそらくこうした呼称は、それを営んだ天皇にとってかけがえのない宮であるという点で、時間の経過とは無関係に「新宮」であったのだろう。先帝の旧宮が付近に残っているとすれば、なおさらである。したがって逆にいえば、即位後の天皇について言われる新宮——いまの場合文武が斎戒したという新宮——とは、その新帝(文武)の新しい宮室との意であって、前帝(すなわち持統)の宮とは別個の建物であると考えうる根拠にもなるであろう。

ところで藤原京は、大宝初年に大規模な工事が行なわれたとは従来から指摘されるところで、前年の大宝元年(七〇一)七月、造宮官が職に准すべき官司に昇格され、さらに同十二月に造大殿垣司が任じられたのも、それに関連する措置であったとみられる。しかしわたくしは、前述の理由からも、それがいわれるように、大化新制の理想の実現や当初(持統朝)における造営の不手際を修正したものの⁽¹⁰⁾、といった消極的な理由からする工事ではなく、これこそが文武のための新内裏の造営にはかならないと思う。文武の即位によってあらためて新造された宮殿であり、先の大宝二年の記事は、それが完成した(もしくは新造に当たっての地鎮祭の)折のものであったとみる。文武の新宮の位置や規模といったものは、もとより明らかではないが、宮域内に持統朝のものとは別個に造られたとすれば、まさしくこれは宮内遷都(宮)にほかならないではないか。

もっともこうした理解に対して疑問がないわけではない。新宮なら文武の即位前後に造られて然るべきなのに、

どうして五年も経過したところに造営されたのか、というわけである。しかしわたくしには、文武の場合、逆にこの五年のズレが、持統朝の政治の在り方を示唆しているように思われる。

持統女帝にとって孫の軽皇子、つまり文武を即位させることは、藤原京造営とともに天武の遺志でもあったはずである。しかしこの段階では、女帝の政治路線はなお安定してはいなかったのではないか。天武没後、大津皇子の抹殺、頼みとする草壁皇子の死、といった事態を切り抜けた女帝にとって、将来を托すべき存在は軽皇子以外にはなかったが、即位するには年少に過ぎ、皇権の継授は女帝にとって最大の悩みであったはずである。それがこの女帝をして、存世中における退位^{II}譲位を行なわしめた最大の理由であった。持統にはじまるこの譲位が、のちの慣例となり、皇権の安定化に独得の機能を発揮することについては、ここで述べるには及ぶまい。そして近時の理解では、持統の譲位―文武への皇位継授は、この前後急速に台頭してきた藤原不比等との妥協の産物ではなかったか、とするが、^(II)わたくしも基本的にはこの理解を支持したい。そしておそらく持統の譲位したのち、大宝元年（七〇二）における造宮官の昇格、翌年の造大殿垣司の任命といった一連の措置は、即位した文武の新宮造営のためのものであり、持統と妥協した不比等によって推進されたといつてよいであろう。新宮の造営が即位後五年といささか時間をとったのは、政治的現実（^{II}即位）の方が歴代遷宮という慣行に先行した結果にほかならない。

文武即位から新宮造営までの五年間のズレについてわたくしは、右のような政治的意味を認めたいと思う。そして遅ればせながら、ここでも歴代遷宮の慣行が実施されたことを知るのである。持統太上天皇が没したのはそれから十カ月のことであった。

こうして歴代遷宮は、藤原京では宮内遷宮という形で遂行された。そこにみる「新宮」とは文武の起居する宮室だけでなく、大安殿をはじめその他内裏の主要殿舎とともに新しく造営されたことが推測される。換言すれば、

天皇の代替りとともに他の主要殿舎も建て替えられたわけで、平城宮における大極殿以下の殿舎の再三の建て替えも、単に建物の耐用年数といった理由だけでなく、別個の理解が必要とされて来よう。

藤原京に関するもう一つの謎は、文武時代、「始めて藤原宮（京）地を定」めてから二年余りしか経っていないのに、早くも遷都のことが議せられている事実であるが、これについては「衆議」の問題とともに、平城京の造営との関連で、つぎに論ずることにしたい。

二 平城京造営について

(1) 不比等と衆議

『続日本紀』慶雲四年（七〇七）五月九日条によれば、「詔諸王臣五位已上、議遷都事」とあって、この日遷都のことが議題になっている。この遷都の提唱が不比等の強く推進するところであったことは、第一に、文武の後見するために譲位した持統太上天皇もすでにこの世になかったこと、第二に、不比等は娘宮子を入れたことで文武の外舅であったが、その宮子にはすでに首皇子（聖武）が誕生しており、いずれは聖武の外祖父ともなるべき立場にあったこと、などを勘案すれば明らかである。先に記した慶雲元年（七〇四）の「始定藤原宮地」の記事を従来の理解に従うなら、この時点で新宮が造られた（人によっては造営が開始されたとみる）ばかりなのに、わずか二年余りのうち早くも他所への遷都が衆議されたこととなり、不自然の感をまぬがれたいが、しかし前章で述べたような考えで理解するならば、文武の新宮はすでに大宝二年（七〇二）前後には出来上っていたのであるから、慶雲四年（七〇七）で藤原京を棄てる議論がなされたのは、早いにはちがいないが、通説に従う場合ほどの不自然さはなくなる。

しかし文武はそれから五カ月後の六月十五日、二十五歳の若さで亡くなってしまふ。代わって即位したのが故

草壁皇子の妃（文武の母）であった阿閉皇女、すなわち元明天皇である。文武の死で一時頓座していた平城遷都の計画が復活されたのは、その元明即位から半年後の和銅元年（七〇八）のことで、二月十五日、遷都を表明する詔が出された。その内容は次の通りである。

詔曰、朕祇奉_ニ上玄_一、君_ニ臨宇内_一、以_ニ菲薄之徳_一、処_ニ紫宮之尊_一、常以為、作_レ之者勞、居_レ之者逸、遷都之事、必未_レ遑也、而王公大臣咸言、往古已降、至_ニ千近代_一、揆_レ日曆_一星、起_ニ宮室之基_一、卜_レ世相_一土、建_ニ帝皇之邑_一、定鼎之基永固、無窮之業斯在、衆議難_レ忍、詞情深切、然則京師者百官之府、四海所_レ歸、唯朕一人、独逸予、苟利_ニ於物_一、其可_レ遠乎、昔殷王五遷、受_ニ中興之号_一、周后三定、致_ニ太平之称_一、安_ニ以遷_一其久安宅、方今平城之地、四禽叶_レ図、三山作_レ鎮、龜筮並從、宜_レ建_ニ都邑_一、宜_ニ其營構_一資、須_下隨_ニ事条_一奏、亦待_ニ秋收_一後、令_レ造_ニ路橋_一、子來之義勿_レ致_ニ勞擾_一、制度之宜、合_レ後不_レ加、

（『続日本紀』）

——薄徳の身でもって天皇の位についたことを思うと遷都の事などとても考える余裕はないが、しかし王公大臣はみな今までの慣例をもち出してしきりに遷都を勧めるので、無視することも出来ない。京師というのは百官の府であり、万民の集まるところであるから国家に利益のあることならばたとえ平城の地が遠くても遷都にふみきらねばなるまい。

といった意味の詔である。この詔のねらいがすでに指摘されているように「衆議」の強調にあったことはいうまでもない。衆議の動きがこのように注目されるのは、遷都には必らず反対がつきものだったからで、飛鳥板蓋宮の遷都に先立つネズミの大移動（白雉五年正月一日）といったことも、一種の人心誘導、輿論操作であったとみて間違いない。その点、藤原遷都に先立って行なわれた宮地の視察にも、同様の意図がこめられていたように思う。

すなわち『日本書紀』によると、持統四年十月二十九日と同十二月十九日の二度にわたって宮地の視察が行なわれている。最初は太政大臣高市皇子が派遣され、二度目は持統自らが赴いたが、いずれの場合も「公卿百寮皆

従」ったという。持続にしてみれば、群卿を同行させることで、コンセンサスを作り出そうとしているわけで、遷都に向けての必要な手続きであったといつてよい。高市皇子視察後に再び公卿百寮を従えての天皇の視察は、おそらく、すでに遷都への根廻しが出来たあとの、一種の儀礼的行為であったことを思わせる。

それはともかく、文武晩年の論議といい、また元明即位後の衆議形成といい、ともに平城遷都を実現せんとする不比等の画策するところで、そこに彼の政治的手腕を見出すことは容易であるが、しかしだからといって、遷都へのお膳立が全くの個人的意志によって強引に推進出来るものでもないであろう。衆議形成がかりに特定個人の恣意的手段によるものであったとしても、その結果営まれる新京は古代国家の中枢である。その遷都が、衆目によって妥当であると認められるような事実なり前提がなければ不可能なことではなからうか。わたくしはその前提となるものこそ、ほかならぬ歴代遷宮の慣行であり思想であったと思う。換言すれば不比等による平城遷宮の進言は、藤原京でも継授されていた歴代遷宮の慣行に従う形で進められたものであり、それが成功の原因であったと考えたい。不比等の政治的手腕は、そのことを考慮に入れた上で評価されることが必要であろう。

(2) 棄都の思想

しかし、それにしてもこうした短期間での棄都は、今日感覚からすればずい分と奇異な感じであるが、当時は格別異和感をもたれたわけではないらしい。そのあたりの感覚を仮りに「棄都の思想」というなら、その棄都の思想を理解してはじめて遷都論もより具体的になって来よう。

ところで、棄都といえは十年の運命でしかなかった長岡京のことがすぐに想起される。しかも近時の発掘調査の結果、決して未完の都ではなかったとされる長岡京だけに、棄都の思想もこれに集約されていると思うので、時代は降るが、ここで取り上げ考察してみたい。

長岡京の放棄が決意されたのは延暦十一年（七九二）のことで、それを促したのは、和氣清麻呂の進言であつたと思われる。『日本後紀』延暦十八年二月二十一日条に収める清麻呂の薨伝（『和氣清麻呂伝』も同）によれば、その間の事情を次のように記している。

長岡新都、経三十載^レ未^レ成^レ功、費不^レ可^レ勝計、清麻呂潜奏、令^下上託^ニ遊獵^ニ相^中葛野地^ニ、更遷^ニ上都^ニ、

この時点で長岡京をなお「新都」と呼んでいることは、前章で考察した問題とも関連して興味深い。それはともかくこれによれば、十年間やってみたが造都工事はまだ終わらない、投入した費用は莫大である、だから長岡京はこのあたりで棄てたらどうか、というのが清麻呂の意見で、桓武の思惑と一致するところがあつたのである。この建策がひきがねとなり宇多村への造都が計画された、というものである。ちなみに遷都への動きは翌延暦十二年の年明けとともに現われており、正月十五日に、天皇は遷都のため大納言藤原小黒麻呂・左大弁紀古佐美らを遣わして、山背国葛野郡宇多村の地を調査させ、六日後には早くも「宮（長岡宮）を壊さんとするにより」東院に遷御、翌二月二日には、参議菟志濃王らを遣わして遷都の事を賀茂大神に奉告している。

周知の通り工事のしょっぱなに造宮長官の藤原種継が暗殺されたが、そののちも工事は続行され、むしろ桓武の長岡京にかける執念はたかまっていたともみられる状況の中でのこの清麻呂の進言は、今日的な感覚からすれば、矛盾した論理のようにも思えるが、それに応じて（平安）遷都を決意する桓武の意識を含め、棄都を進言した清麻呂の真意をどのように理解すればよいのであろうか。

このことを考える上で問題になるのが、当時における宮殿建築の在り方で、第一はその耐用年数についてである。歴代遷宮の時代では、宮殿とはいっても掘立柱に茅葺きあるいは檜皮葺きの建物であつたから、伊勢神宮の式年遷宮の儀式を引き合いに出すまでもなく、当時、建物の限度は二十年前後といった観念はあつたと思う。むしろこうした観念は、歴代遷宮が宮内遷宮へと変形され制約を受けるようになるなかで、却って意識されるよう

になったようである。

わたくしは、それが長岡京の場合の清麻呂の進言にも潜在していたのではないかと思う。「経三十載未_レ成功、費不_レ可_二勝計_一」と強調される十年とは、とりもなおさずその二十年の半分の年限である。十年経ってもまだ完成していないが（もう十年たてば現在造営しつつあるこの都も棄てられておかしくはない）、それならすでに半分を経過したいまのうちに棄ててもいいのでは、ということにもなるわけである。そう考えることによって、清麻呂の進言の意図が造都の効率を強調する点にあったことも了解されて来るし、じつはそれこそが歴代遷宮時代以来形成されてきた歴史的な観念にほかならなかったのである。⁽¹²⁾

第二は、礎石立柱形式の時代になると、建築用の新材が乾燥するまでに二、三年を必要とするということもあって、新京を造営するとはいっても、実際には故材を流用する場合が多かった事実である。天平十二年（七四〇）の、いわゆる藤原広嗣の乱による恭仁京の造営に当り、平城大極殿や歩廊が流用されているし（『続日本紀』同年十二月二十六日条）、長岡京の場合も同様で、故材の多量の流用は最近の発掘結果によっても確かめられている。これが棄都とはいっても今日考えるほどには深刻さが感じられない理由の一つであったように思う。

先に述べたように、不比等がその政治的才腕でもって藤原棄都＝平城遷都を実現しえたのは、その根底にこうした思想的背景のあったことを見落とすわけにはいかない。

さて、平城遷都の詔が出された翌三月十三日、大伴宿禰手拍が造宮卿に任命された。次官以下の具体的な人事構成については不明であるが、おそらく造営関係者は手拍の任官と相前後して人選されたと思われる。そして九月末には造平城京司が任命されており、実際の造営事業は遷都の詔に表明された通り、秋収を待って開始されたようだ。この間、元明自らが菅原・平城の地を視察、十月に入って伊勢神宮への奉告、十一月の菅原民家九十余戸の移転、十二月の地鎮祭などの諸手続を経て、和銅三年三月十日、平城遷都の運びとなった。遷都の際、左大

臣石上麻呂が藤原京の留守官を命じられ、右大臣不比等が元明天皇につき従って新都へ移っているのも、平城遷都の推進者が不比等であったことを物語っているよう。

それはともかく、もとよりこれで平城新京が完成したわけではない。工事は以後も続行され、延暦元年（七八二）、桓武天皇によって造宮省が廃止されるまでの七十余年間、七代天皇の皇都として修造・改築工事が繰り返されたのであった。

ところで、宮都遺跡の中で現在もっとも発掘調査の進んでいるのがこの平城京で、宮址から発見された遺構や大量の出土遺物は平城京時代の歴史、ひいては古代国家解明に大きな資料を提供していることは知られるところである。にもかかわらず実態はなお明らかでなく、加えて豊富な資料が逆に宮都史の中での平城京の問題を複雑化しているように思う。問題の複雑化といえば、七代の天皇のうち四代までが女帝であったということもその一因であろう。皇統の中で女帝は七・八世紀中ごろまでに集中している（以後は江戸時代に二人即位するのみ）といえるが、とくに元明以前の推古・皇極（斉明）・持統という女帝は、みな先帝の皇后であったのに対して、元明は文武の母（草壁皇子の妃）であり、元正は文武の姉、孝謙（称徳）は聖武皇女で未婚であった。ひとしく中継ぎ的な意味をもつ女帝であっても、皇后で即位した場合とそうでないこの奈良時代とでは、宮殿の使い方においてほかとは違いがあるかも知れないという問題があるからである。この点についてはあらためてふれたいが、こうした事情を勘案すれば、平城京時代における「遷都」は、まずは男帝である聖武天皇の場合を中心に考えることが正当であろう。

(3) 「旧によって改作す」

首皇子こと、のちの聖武が即位したのは神龜元年（七二四）二月四日のことで、時に二十四歳であった。聖武

の即位が藤原氏一族の待望するところであり、一族によって強力に進められたことは、瑞龜を出現させることで養老八年（七二四）を神龜と改元し、その祝賀ムードの中で即位するといった演出がなされたことから明らかである。そして当面の問題に限っても、造宮卿武智麻呂の登場が留意される。造宮卿の任命もまた聖武の即位に関連する措置と思われるからである。

武智麻呂は不比等の長男で、造宮卿に任じられたのは、聖武が即位する二年半前の養老五年（七二二）九月のことである。この年の正月、從三位中納言に任じられていたから、当然のことながら造宮卿は兼任であった。武智麻呂以前の平城京造宮卿（長官）の中で、文献上就任年月の確かめられるのは、和銅元年（七〇八）三月に任命された大伴手拍と靈龜元年（七一五）五月の多治比県守だけであるが、この時の武智麻呂の任命が留意されるのは、以前の他の二人の場合造宮卿が専任官であったのに対して、武智麻呂は中納言との兼官であったこと、またそのこととも関連するのであるが、任命当時、大伴手拍が正五位上（和銅六年九月に没した時は「造宮卿從四位下大伴手拍」と所出するから、在任中に加階された）、多治比県守は從四位下であったのに比べて、武智麻呂は從三位という高位であったこと、しかも前二者が恒例の除目の際に他の任官者とともに任命された造宮卿であったのに対して、武智麻呂が任命された養老五年はすでに六月に除目が行なわれていて、九月における武智麻呂一人の任命は臨時のものであったと思われること、などの点である。しかもこの武智麻呂はその後のある時期に、造宮卿を県犬養筑紫にゆだね、自らは知造宮事になっていることが知られる。いってみれば、これは造宮長官が二人いたことになる。この二人の造宮長官―武智麻呂と筑紫の關係についてはあとで述べることにするが、これらからも造宮卿武智麻呂の登場が聖武の即位にかかわりをもつものであったことは、多言を要しない。元明太上天皇はこの年五月病気で倒れ、武智麻呂の父不比等も前年の八月にすでに亡くなっていたという事態の中で、この任命は急速に推し進められた措置であったと思う。

ところで造宮卿としての武智麻呂の事績を記しているのが、『家伝下（武智麿伝）』の次のような記事である。

……（養老）五年正月叙_ニ從三位、遷_ニ中納言、其九月兼_ニ造宮卿、時年卅二、公將_ニ工匠等、案_ニ行宮内、仍_レ旧改作、由_レ是宮室嚴麗、人知_ニ帝尊、神龜元年二月叙_ニ正三位、知造宮事如_レ故、……

武智麻呂に関するさして変わりばえのしない略伝で、なにげなく見れば見すごすていの史料であるが、じつはこのなかにも宮内遷宮を解明する重大な鍵が含まれている。それが、「公將_ニ工匠等、案_ニ行宮内、仍_レ旧改作」の部分で、文字通り公（武智麻呂）が工匠達を率いて平城宮内を巡察し、「旧によって改作」した、という意味である。この場合の宮内とは大内裏をさすのであろう。武智麻呂が改作に適当な場所をみつけるために視察をしたものと思うが、まず第一に指摘できるのは、即位を前にして改作の準備がなされていること、第二に、その場所が平城宮内であったことである。これは聖武の即位に当たり宮内遷宮を行なおうとしている事実を示している。そしてさらに看過できないのは、その宮内遷宮が「仍_レ旧改作」されたものであり、その結果造られた宮室の嚴麗なのをみて人々が帝の偉大さを知った、という記述である。「仍_レ旧」⁽¹³⁾って改作した、とはどういうことなのか。宮室の殿舎が古くなったのでこれを改作したという意味なのであろうか。そうではなく、わたくしはこの「旧」は旧例、すなわち故実の意と考える。すでに見てきたように歴代遷宮は、藤原京でも行なわれていた慣例であり、聖武の即位に当たっても、そうした故実_ニ旧例に従って宮室の改作が、武智麻呂を長官として行なわれたのであった。歴代遷宮の慣行は、藤原京以後、平城京でも宮内遷宮という形で遵守されていたことを証明してくれるのが、じつはこの記事なのであった。

さて、平城京造宮卿として故実に従って宮室を改作した武智麻呂であるが、彼についていま一つ述べておかねばならないことは、先に掲げた『家伝』の中に「知造宮事如_レ故」と記されているように、神龜元年以前の段階で、「知造宮事」に就任している点である。ちなみに『公卿補任』によると造宮卿を兼ねたことの記載はなく、

神亀三年と四年時に「兼知造宮司事」と附記されており、武智麻呂の知造宮事の兼官は神亀四年までであったことが知られる。「知」とは長官として事をつかさどるの意で、『続日本紀』に所出する同時代の「知太政官事」

「知山背国事」「知難波宮事」などの職掌から類推するに、知造宮事と造宮卿とは別の職掌であったと思われる。

また先に述べたように、『続日本紀』神亀元年（七二四）四月十八日条に「造宮卿從四位下 県犬養宿禰筑紫卒」とあり、この時まで筑紫が造宮卿の任にあったことは明らかな事実で、神亀元年以前のある時期に、武智麻呂は造宮卿から知造宮事に移ったものであろう。造宮卿として任命された武智麻呂は、ある程度工事のメドがついたか、あるいは聖武の即位を契機に知造宮事として工事を総監督する立場にたち、実質的な造営は筑紫にゆだねられたものと思われる。県犬養といえは不比等の妻三千代の一族であり、そうした二人によって造宮が推進されたといえるであろう。「知造宮事」武智麻呂と「造宮卿」筑紫という二人の「長官」の存在は、以上のように理解すべきである。このことは又聖武の即位に際して、造宮事業（宮内遷宮）が藤原氏の手によっていかに慎重かつ強力に行なわれたかを物語っている。そして即位に先立ち武智麻呂自らがその長官として造営に当たったのは、不比等の計画した路線に沿うものであったことは言うまでもない。

(4) 故実と造宮省

造宮卿武智麻呂の任命が聖武天皇の即位行事に関連するものであったことを見てきたが、そうした観点から関連記事を検討すると、他の天皇の場合でも即位と造宮機関とが密接なかかわりのあったことがわかる。たとえば和銅七年（七二四）十月、造宮省の史生が六人増員され、それまでのほぼ二倍（十四人）となって、平城京造営の一つの画期とみられる事実も、じつは元明にかわり元正天皇が即位する丁度一年前のことであった。そういえば順序は逆になったが、造宮職から造宮省に昇格されたのは和銅元年（七〇八）のことで、この規模の拡大も来たる

べき平城遷都への布石であったことはまちがいない。しかも元明女帝の即位した慶雲四年（七〇七）の七月から半年後に行なわれた措置であったというのも造営が新天皇の即位と一連のものであったことを物語っている。また孝謙の即位する九カ月前の天平二十年（七四八）十月には、藤原某が造宮輔に任命されているし、称徳重祚の折にも小野石根が造宮大輔に任じられている。

このような事實は、先に述べた聖武即位における造宮卿武智麻呂の任命と同様のパターンと考えてよく、それが女帝についても見られることは、女帝の場合も基本的には男帝とかわりなく歴代遷宮の故実にのっとった宮内遷宮が行なわれていたことを推測させる。ちなみに称徳女帝は西宮寢殿で没したことが知られるが（『続日本紀』宝龜元年八月四日条）、この西宮は文献の上では称徳期にのみ使用されたと考えられる建物である。平城宮内ではこのような、天皇ごとの建物とみられるものがいくつか知られているが、それはわたくしが述べてきた歴代遷宮に関わるものにちがいない。

つぎに、平城京造営に際して登場する催造司も、聖武即位と密接な関係があったと考えられる。この催造司が始めて設置されたのは聖武即位の翌月、すなわち神龜元年三月二十三日のことであり、その呼称からも造宮工事の監察督励にあたるものであったろうことは明らかであるが、史料が少ないこともあって十分には理解されていない。一般には『続日本紀』和銅四年（七二一）九月四日条にみえる「今宮垣未_レ成、防守不_レ備」といった言葉と関連づけて、平城京の未完了部分の造営を督促するため、遷都から十四年を経ているにもかかわらず、この時点で設置されたと理解されている。しかしわたくしはこの催造司設置も、やはり聖武の即位にかかわる措置であったと思う。しかも即位前ではなく即位後、それも直後におかれたのは、即位前にすべての工事が終わっていなかったということもあったのだろうが、聖武の新都（宮）にかかわる諸施設の造営を促がすためであったと考えられよう。『続日本紀』には、このうち天平二年（七三〇）九月二十七日、正四位下葛城王と従四位下小野朝臣牛

養の二人を「催造司監」に任じる記事があり（二人とも兼官）、また同四年二月二十二日には中納言從三位兼催造宮長官知河内和泉等国事阿倍朝臣広庭が薨じた記事がみえる。さらに天平六年（七三四）五月一日の造仏所作物帳によると、（皇后）大夫從四位下兼催造監勲五等小野朝臣牛養の名が記されているので、天平二年から同六年までの四年間、催造司監として牛養が就任し、また催造宮の長官として阿倍広庭のいたことが知られる。彼らの任命は当時着手されていた難波宮の造営とも無関係ではなく、いずれもその督察にあたったことはいうまでもない。以上の考察によって、藤原京にみられた宮内遷宮は、次の平城京でも行なわれていたことが明らかになったと思うが、そうであるならば、こうした歴代遷宮の慣行は平安時代に入ってからも見られたのではなからうか。あるいはどのように変容したであろうか。それを次に考察してみたい。

三 「動かざる遷宮」のこと

(1) 宴の松原

平安京はいうまでもなく桓武によって造営された都である。桓武については即位の翌延暦元年（七八二）四月、「宮室居るに堪う」として、自らの手で造宮省を廃止したこと、しかしその二年後に、早くも長岡遷都が計画され造宮機関も再編成されたことから、この長岡遷都については喜田貞吉氏以来議論のあるところであるが、造宮省の廃止は、故実としての平城宮内遷宮の廃止、換言すれば自身の宮殿の造営の停止を表明したものであったといつてよいであろう。その後長岡京、さらには平安京へと遷都を実現した桓武については当面問題はなく、ここでは省略にゆだねるが、ただ歴代遷宮と関連して一言しておかねばならないのが、平安宮にはじめてみられた「宴の松原」なる存在についてである。

宴の松原とは、『拾芥抄』（（宜秋門）匡遠本）に「（南の誤りカ）宜陽殿北、掃部寮西、（縦令）近衛南、朱雀西敷」とあるように、平安

宮の中央部、内裏の西にある広場のことで、それは武徳殿にいたるまでのかなり広い空間を占めていた（現在、上京区出水通入ル付近）。『三代実録』（仁和三年八月十七日条）に記された話であるが、縁（宴）の松原の樹の下で一人の女が容色端麗な男と相語らううちに手足を折られ首をなくしたといい、それを聞いた役人が急ぎかけつけたが、屍体は忽然と消えうせていた、これはきつと鬼物が男に変形してこの殺人を犯したものであらうということになった、とある。『今昔物語』（二七の八）にも同類の話があり、また『大鏡』（太政大臣道長）には、若き日の道長像を描く中で、道長の言い出した胆試しで、右衛門陣から豊樂院へ行かされるハメになった中関白道隆が、途中、宴の松原あたりでどこからともなく聞こえるえたいの知れぬ声におののき、一目散に逃げ帰ったエピソードが記されている。当時すでに宴の松原が、鬼も出没するとうわさされるほど樹木の繁った森になっていたことが知られるが、『今昔物語』（二三の十九）には、比叡山の実因僧都なる強力の持ち主が、衣を盗もうとした男をこらしめるために宴の松原まで自分を背負わせて行き、そこで月見をしたという話を記している。先の『三代実録』では「縁の松原」と記していること、また『栄華物語』にも「縁」にちなむ歌として、「あはれにも今は限りと思ひしをまためぐりあふえんの松はら」を載せていることから、「宴」は「えん」と読み、「うたげ」とは言わなかったことも知られる。しかしその文字からいって饗宴の場とされたであろうことが推測されるのであるが、その事実を示す史料が見当たらない。この呼称はむしろ二次的なものではなかったろうか。

というのは、宮内遷宮の故実との関連でこの空間を考えると、宮殿を建て替えるべき場所が大内裏内に用意されていて当然だからで、内裏の西にある宴の松原こそその場所にふさわしい。

もとよりわれわれは、桓武造営の大内裏の構造を知ることとはできない。しかも大同年間に行なわれている官衙の統廃合を考慮に入れると、今日知られる大内裏図の記載は、それ以後の姿を示したものでないといわねばならないが、この空間に限っていえば、当初からのものであったと考える。

しかしこの場所が右の理由で使用されたこともなかったであろう。なぜなら平安期に入ってから宮内遷宮は別個の形式で処理されたからである。

(2) 平城天皇への進言

さて桓武天皇は延暦二十五年（八〇六）三月十五日「正寝」に七十歳の生涯を閉じたが、そのあとをうけて即位したのが平城天皇である。即位の四カ月後、公卿らが意見を奏上し、忌が明けると新宮に遷御するのが国家の恒例の故実であるとして新宮の造営を進めたことについては本稿の最初に述べたが、以下の論に関わるので、あらためて原文を掲げ、その歴史的背景を分析してみたい。

詔曰、比公卿奏、日月云除、聖忌將^(A)周、国家恒例、就吉之後、遷御新宮、請預營構者、此上都先帝所建、水陸所湊、道里惟均、故不憚^(A)顛^(A)勞、期以永逸、棟宇相望、規模合度、欲使後世子孫无所加益、朕忝承^(A)聖基、嗣^(A)守神器、更事興作、恐乖成規、夫漢代露台、尚愛十家之產、大厦層構、亦非一本之枝、朕為^(A)民父母、不^(A)欲^(A)煩^(A)勞、思^(A)拋^(A)旧宮、礼亦宜之、卿等合^(A)知^(A)朕此意焉、於是百官奉^(A)表^(A)拜賀曰、亮陰之後、更建^(A)新宮、古往今来、以為^(A)故実、臣等准^(A)拋^(A)旧例、預請^(A)処裁、伏奉^(A)今月十三日勅^(A)、偶、朕為^(A)民父母、不^(A)欲^(A)煩^(A)勞、思^(A)拋^(A)旧宮、礼亦宜之、臣等忝聞^(A)綸旨、載喜載悲、誠以孝子充^(A)成父志、遂昌^(A)堂構^(A)者也、凡厥百僚、幸々甚々、……

（『日本後紀』大同元年七月十三日条）

——この平安京は先帝の建てるところで、水陸の便もよく、殿舎も立派にととのっているのです、子孫としてこれ以上手を加える必要はない。この上興作を事とすれば成規にそむくことになるだろう。自分は民に煩勞をかけたたくないので旧宮にしようと思うが、それで礼を失するものではなからう。こういう自分の気持ちを知ってほしい、

というのが平城天皇の意見で、これを聞いた公卿らは感歎したというのである。

『日本後紀』に載せるこの記事は、公卿の奏上と、それとは別の日に提出された百官の拝賀表とに對して下された二種の詔が、同日の記事に纏められたものである。そしてこれまで述べて来たところからも、この進言にいう国家の恒例¹¹故実なるものが、飛鳥時代にまで遡るといふような遠い過去の非現実的なものでないことは明らかである。

ところで、藤原京以前では、先帝の葬送を済ませたあと即位することと、新帝が即位したのち先帝の葬送を行なうことは、死穢意識の点で同じではなく、じじつ時期的な差異もあった。⁽¹⁴⁾ そういった観点から右の記事をみると、ここには新帝の即位を強調する「就^レ吉之後、遷^ニ御新宮^ニ」(A)、他方前帝の死穢を意識する「亮陰之後、更建^ニ新宮^ニ」(B)という遷宮の主要な理由二つがあげられており、宮都の歴史がこの文中に集約されているかのようである。ちなみにここで「亮陰之後」とあるのは、二カ月前の五月六日に桓武の七七の御齋会が「寢殿」で行なわれたことを指している。

さてこの記事についても喜田貞吉氏の見解があり、氏はこれを遷宮の進言と解釈している。文中にみられる「遷^ニ御新宮^ニ」、あるいは「掘^ニ旧宮^ニ」といった表現や、藤原京以来の慣行となっていた宮内遷宮の実態からすれば、遷都とみるよりは遷宮の提言と考えるべきかも知れないが、平城自身が旧宮に留まることの理由として、「此上都先帝所^レ建、水陸所^レ湊、道里惟均……」といった地理的な利便さをあげ、殿舎の規模や結構にふれている以上、明らかに遷都のことを指しているといわねばならない。その意味で右の文言には遷都と遷宮という二つの思惑が混在しているとみるのがむしろ素直な理解のように思われる。ただしわずか半年前に民苦の根源であるとして桓武によって造宮職が解散され、また平城自身、諸道觀察使を派遣して地方の民情視察に力を入れはじめたばかりである。実際問題として、遷都は望んだとしても不可能であったし、またそれを承知した上での儀礼的

な進言であったことは明らかである。しかし遷都しないことを暗黙に了解した上で、なおそのことを申し出ているのは、遷宮（都）の慣習がなお生きており、それを無視出来なかったことを示している。歴代遷宮が現実機能している故実であった以上、全く無意味な儀礼であったとみるのは正しくない。それゆえにまた、旧宮にいることにすると表明した平城の決意に公卿たちは賛歎したのであった。

さて、父桓武の意志を継ぎ、故実よりも民に負担をかけないことを優先した平城であったが、のちにこの天皇が譲位したあと、平城旧宮へ遷（還）都を呼びかけたその根底に、遷都しなかったというこの時の思いが潜在しているように思われて仕方がない。さらに言うならわたくしは、平城上皇のそういう意識を巧みに利用したのが仲成・薬子による事件（薬子の変）で、歴代遷宮の故実がそこにも強く影響していたと思う。その辺りのことを含めて、薬子の変については稿を改めて論じたい（本書第Ⅱ部所収）。

(3) 清涼殿の解体

ところで平城天皇は、実を重んじるあまり歴代遷宮というそれまでの故実を全く捨ててしまったのであろうか。そうではないらしい。というのは、『平安遺文』三〇号によって次のような太政官牒が東大寺三綱に送られているのが知られるからである。

太政官牒東大寺三綱

応_三暫進_三上木工陸人_一

牒、為_レ修_二理_一 御在所_一、件工要須、寺察_三此状_一、早速進上、作事有_レ期、勿_レ致_三闕怠_一、今以_レ状牒、牒至准_レ状、故牒、

大同二年五月廿二日

左大史正六位上賀茂県主「立長」牒

表12 奈良時代歴代天皇崩御場所ほか

(太…太上天皇, 廃…廃帝)

天皇名	年齢	崩御年月日	崩御場所	在位年数
元明(太)	61	養老5 (721) 12. 7	中安殿	8年2か月
元正(太)	69	天平20 (748) 4. 21	寝殿	8年5か月
聖武(太)	76	天平勝宝8 (756) 5. 2	寝殿	25年5か月
孝謙			〈重祚→称徳〉	9年1か月
淳仁(廃)	33	天平神護1 (765) 10. 23	淡路国廃所	6年2か月
称徳	53	神護景雲4 (770) 8. 4	西宮寝殿	5年11か月
光仁(太)	73	天応1 (781) 12. 23	楊梅宮カ	10年6か月

北陸道観察使左大弁従四位上兼行春宮

大夫左衛士督秋篠朝臣「安人」

これは「御在所」を修理するために木工六人の調達を東大寺に請求したものである。この御在所の修理というのが、一年前「正寝」に没した桓武の死と関係があることは十分考えられる。

ところで平城京以来、在位中の天皇が内裏で亡くなったのは、神護景雲四年(七七〇)八月、西宮寝殿(平城京)で没した称徳(孝謙)天皇だけであるが、平城京では、死によるケガレの意識は宮内遷宮という形で解消されたから、問題にはならなかったろう。ちなみに西宮はまえに触れたように称徳期のみを使用した建物で、次の光仁は別の建物を寝殿にしたと思われる。ところが遷都のことはもとより、平安京は「加益」も必要ないといった平城天皇にとって、旧宮で死穢を祓うには、その建物を建てかえるか、もしくは他の建物を寝殿用に改造するか、そのいずれかであったろう。ここにいう「御在所」はのちの在り方からすれば桓武の没した「正寝」とは別の建物とみた方がいように思うが、しかし新しく造られた建物というよりは桓武時代の既存の殿舎を御在所として使用したものと見るべきであろう。そこを寝殿にふさわしい建物として改造修理するための木工の調達を東大寺に求めたのがこの史料である。さて、この要請に基づいていつ東大寺から木工が派遣され、修造が開始されたのかは明らかでないが、『日本後紀』(大同四年三月二十四日条)に載せられた「縁修宮

表13 平安時代歴代天皇崩御場所ほか

(上…上皇, 法…法皇)

天皇名	年齢	崩御年月日	崩御場所	在位年数
桓武	70	延暦25 (806) 3. 17	正寝	24年11か月
平城(上)	51	天長2 (824) 7. 7	平城宮	3年1か月
嵯峨(上)	57	承和9 (842) 7. 15	嵯峨院	14年
淳和(上)	55	承和7 (840) 5. 8	淳和院	9年10か月
仁明	41	嘉祥3 (850) 3. 21	清涼殿	17年1か月
文徳	32	天安2 (858) 8. 27	冷然院新成殿	8年5か月
清和(上)	31	元慶4 (880) 12. 4	円覚寺	18年3か月
陽成(法)	82	天暦3 (949) 9. 29	冷然院	7年3か月
光孝	58	仁和3 (887) 8. 26	仁寿殿	3年6か月
宇多(法)	65	承平1 (931) 7. 19	仁和寺御室	9年2か月
醍醐(上)	46	延長8 (930) 9. 29	右近衛府	33年2か月
朱雀(法)	30	天暦6 (952) 8. 15	仁和寺カ	15年7か月
村上	42	康保4 (967) 5. 25	清涼殿	21年1か月
冷泉(上)	62	寛弘8 (1011) 10. 24	冷泉院南院	2年3か月
円融(法)	33	正暦2 (991) 2. 12	円融院カ	15年
花山(法)	41	寛弘5 (1008) 2. 8	花山院	1年10か月
一条(法)	32	寛弘8 (1011) 6. 22	一条院中殿	25年
三条(法)	42	寛仁1 (1017) 5. 9	三条殿	4年7か月
後一条	29	長元9 (1036) 4. 17	清涼殿	20年3か月
後朱雀(上)	37	寛徳2 (1045) 1. 18	東三条院	8年9か月
後冷泉	44	治暦4 (1068) 4. 19	高陽院中殿	23年3か月
後三条(法)	40	延久5 (1073) 5. 7	但馬守源高房 大炊御門亭	4年8か月
白河(法)	77	大治4 (1129) 7. 7	三条烏丸西殿	13年11か月
堀河	29	嘉承2 (1107) 7. 19	堀川院	20年8か月
鳥羽(法)	54	保元1 (1156) 7. 2	鳥羽安楽寿院	15年6か月
崇徳(法)	46	長寛2 (1164) 8. 26	讃岐国配所	18年11か月
近衛	17	久寿2 (1155) 7. 23	近衛殿	13年7か月
後白河(法)	66	建久3 (1192) 3. 13	六条殿	3年1か月
二条(上)	23	永万1 (1165) 7. 28	押小路洞院第	6年10か月
六条(上)	13	安元2 (1176) 7. 17	藤原邦綱東山第	2年8か月
高倉(上)	21	養和1 (1181) 1. 14	六波羅池殿	12年
安徳	8	文治1 (1185) 3. 24	長門壇ノ浦	5年1か月
後鳥羽(法)	60	延応1 (1239) 2. 22	隠岐国	14年4か月

殿、欲^ニ暫御^ニ於弁官庁、而役夫一人自^ニ弁官南門墜死、仍停焉」という記事は、いささか期間があいている感はあるが、この工事に関するものではなからうか。これは役夫が死ぬという突発事故で弁官庁へ移ることがとりやめになったというものであるが、工事そのものが中止されたということではないであろう。平城即位後に在所の改造もしくは修理の行なわれたことはたしかである。それにしても「正寝」における桓武の死によって、歴代遷宮は新たな時期を迎え、ここに平安朝的な先例^ニ故実が始まったとみてよいであろう。

ちなみに桓武以後、平安時代、在位中に崩御した天皇十人の中、清涼殿で没したのは仁明・村上・後一条の三天皇であるが（表13）、桓武の場合も「正寝」はのちの清涼殿とみてよいのではなからうか。以下順を追って平安京における歴代遷宮の実態を考察してみたい。

まず嘉祥三年（八五〇）三月に亡くなった仁明天皇の場合、次の文徳は同年五月九日清涼殿を莊嚴し百僧を屈請して仁明の七七日の御齋会を修している。そして翌年この清涼殿を移建して嘉祥寺とするのであるが、『文徳実録』（仁寿元年二月十三日条）はこれについて、「是日、移^ニ清涼殿、為^ニ嘉祥寺堂、此殿者 先皇之譙寢也、今上不^レ忍^レ御^レ之、故捨為^ニ仏堂」と記している。先皇、すなわち仁明の「譙寢」であった清涼殿に「不^レ忍^レ御」というのは、死穢という以上に子供としての文徳のいつわらざる気持ちであったと思う。

それが村上天皇の場合は、もっとも極端化された例として注目される。村上天皇が清涼殿で没したのは康保四年（九六七）五月のこと、次の冷泉天皇は、「嘉祥三年の例」（『日本紀略』同七月十四日条）、すなわち仁明が亡くなった折の先例に准じて、清涼殿で村上の七七日の御齋会を修した上、翌安和元年（九六八）十月八日、麗景殿より清涼殿に遷御している。注目したいのは、冷泉が遷御するにあたってこの清涼殿を修理している事実である。

村上
先帝於^ニ此殿^ニ昇霞、今敬^ニ燕寢遺跡、改^ニ土木^ニ也、改^ニ替板敷、先例壊改、随^ニ儉約之儀、（『本朝世紀』）

すなわちこれによって板敷の改替は儉約上の措置であったことが知られる（『日本紀略』同年十月五日条にも同じ趣旨の記事がある）。村上の在位中に二度清涼殿を建てかえたこと（最初は天暦二年でこれについては後述、二回目は天徳四年の内裏の焼亡による）がこの措置となつたのであろう。だから板敷にとどめたのが異例であつたわけで、文中にもあるように当時——平安時代の「先例」では「壊ち改める」のが常態であつたことが知られる。といつても崩御後、ただちに清涼殿を解体するというのではなく、そこを莊嚴し、七七の御齋会を行ない、一年ほどたつて壊されるというのが常であつたようだ。

仁明の清涼殿を「不_レ忍_レ御_レ之」といつた先の文徳天皇の場合といい、また村上のそれを「今敬_ニ燕寝遺跡_一、改_ニ土木_一也」といつたこの冷泉天皇の場合といい、その表現には先（父）帝の魂が宿る清涼殿を忌避するという以上に、先帝に対する敬虔の念がこめられていよう。しかしそれは死を忌む気持ちにかわるものではない。そして丁度これと逆の意識で、在位中の清涼殿を譲位後の居所として自らの手で移建したのが冷泉の二代前、朱雀天皇であつた。

表14からもわかるように、村上天皇は即位して二年目の天暦二年（九四八）二月、清涼殿を新たに造営しているが、これは醍醐寺に朱雀上皇御願による法華三昧堂を建立したと密接な関わりがある。『春記』天暦二年二月二日条によつて、これよりさき、清涼殿が壊され、その材木が醍醐寺に運ばれたことが知られるが、朱雀がこの三昧堂造営を発願したのは早く、天慶元年（九三八）の示現によるものであり、その翌春より造営が始められている（『醍醐寺新要録』）。その間の事情は省略にゆだねるが、清涼殿の移建が当初から予定されていたとは思えない。譲位・出家にとりなつて具体化されたものとみるべきである。こうして三昧堂は翌天暦三年三月に完成し、その名も清涼堂と命名されている。この朱雀天皇にみられる行為は、先帝の建物と自分の住した建物という違いはあれ、清涼殿の移建という点で先の文徳・冷泉と共通する。やはりケガレ意識のバリエーションとみてよ

表14 清涼殿関係年表

文 徳	嘉祥 3 (850) 3. 21 5. 9 仁寿 1 (851) 2. 13	仁明天皇, 清涼殿で没 清涼殿で仁明七七日の御斎会を修す 清涼殿を移して嘉祥寺堂とす
醍 醐	延長 8 (930) 6. 26	清涼殿に落雷
朱 雀	承平 1 (931) 11. 7	清涼殿を改造
村 上	天曆 2 (948) 2. 2 天徳 4 (960) 9. 23	清涼殿造営(遺材を醍醐寺法華三昧堂に移す, 同年4.9 新造清涼殿に遷御) 内裏焼亡(翌応和 1 年11.20 新造内裏遷御)
冷 泉	康保 4 (967) 5. 25 7. 14 安和 1 (968) 10. 5	村上天皇, 清涼殿で没 清涼殿で村上の七七日の御斎会を修す この日以前に清涼殿の板敷を改める
円 融	貞元元 (976) 5. 11 天元 3 (980) 11. 22 5 (982) 11. 17	内裏焼亡(翌 2 年 7.29 新造内裏遷御) 内裏焼亡(翌 4 年10.27 新造内裏遷御) 内裏焼亡(二年後の永観 2 年8.27 新造内裏遷御)
花 山		
一 条	長保 1 (999) 6. 14 3 (1001) 11. 18 寛弘 2 (1005) 11. 15	内裏焼亡(翌 2 年10.11 新造内裏遷御) 内裏焼亡(二年後の長保 5 年10.8新造内裏遷御) 内裏焼亡(六年後の寛弘 8 年8.11新造内裏遷御)
三 条	長和 3 (1014) 2. 9 4 (1015) 11. 17	内裏焼亡(翌 4 年9.20 新造内裏遷御) 内裏焼亡(三年後の寛仁 2 年4.28 新造内裏遷御)
後一条	長元 9 (1036) 4. 17	後一条天皇, 清涼殿で没
後朱雀	6. 20 11. 10 長曆 2 (1038) 10. 11 11. 18 3 (1039) 6. 27 長久 3 (1042) 12. 8	清涼殿に御帳台を建つ 後朱雀天皇, 清涼殿にて御襖 改築によって清涼殿を壊つ 清涼殿造営始 内裏焼亡(二年後の長久 2 年12.19新造内裏遷御) 内裏焼亡(四年後の永承 1 年10.8新造内裏遷御)

(内裏の焼亡により天皇が他所へ移っている場合は, おそらく清涼殿も焼けたと推測される)

いであろう。ちなみに朱雀上皇が解体した清涼殿というのは、自身の受禪の三カ月前、清涼殿に落雷するという事件があったため（延長八年六月二十六日）、即位の翌年、承平元年（九三一）十一月七日に改造されていた。平安時代を通じて清涼殿が宮外に移された事例としては、嘉祥寺と醍醐寺だけであったようで、長保三年（一〇〇一）十一月に焼亡した内裏の再建に当って、殿舎の数を減すべきか、あるいは寸法を減すべきかが公卿の間で議論された時、「古殿在_ニ嘉祥寺醍醐寺、依_ニ彼殿等_一可_レ被_レ造敷」（『百鍊抄』同月二十五日）との意見がもち出されているのは、いうまでもなく文徳・朱雀の故事を指している。

さて天皇の崩御を理由に清涼殿が解体された最後が後一条天皇の場合である。天皇は長元九年（一〇三六）四月十七日に亡くなったが、『春記』によれば、二年後の長暦二年十月十一日に解体され、同十一月十八日より造営を開始している。完成したのは長久二年（一〇四一）十二月十九日のことであった。

このように天皇の崩御によって、それまで使用されていた清涼殿を解体し新しく建て替えるというのが平安時代の故実になっていたことが知られよう。藤原京・平城京における_ニ宮内遷都_一に対して、清涼殿の新造はたしかに_ニ動かざる遷都_一⁽¹⁵⁾であったわけで、まさにそれは歴代遷宮の残映ともいえるべきものであった。

なおこうした死穢による旧殿舎の建て替えは、早く国衙にもみられたことに注目しておきたい。すなわち弘仁五年（八一四）六月二十三日、国司が意にまかせて館を新造することを禁じた太政官符の中に、「_ニ検_ニ天平十年五月二十八日格_一偶、国司任_レ意改_ニ造館舎_一、儼有_ニ一人病死_一、諱惡不_レ肯_ニ居住_一、自今以後、不_レ得_ニ除_ニ載_ニ国図_一進上_ニ之外、輒擅移造、但随_レ壊修理耳」（『類聚三代格』）という天平十年（七三八）の格が引用されている。一人の病死者があっても死穢を忌んで簡単に庁舎を建てかえる国司を戒め、以後は破損箇所を修理にとどめるよう警告したものであるが、ここには死穢による建物新造の風習が奈良時代に存在していたこと、それが平安時代に入ると死穢の意識よりも現実面での費用が問題にされて来たことを物語る。_ニ動かざる遷都_一の地方版といえることができ

よう。

四 遷宮の終焉

(1) 造替から「鎮祭」へ

天皇が清涼殿で崩御した場合、歴代遷宮の故実は清涼殿の解体という形で処理されたことを見てきた。ところが持統女帝にはじまる譲位の慣習が平安時代に一般化し、これが藤原氏による摂関政治の隆盛とも相俟って、在位中の崩御、換言すれば天皇が清涼殿で没することの方がまれとなった。おのずから平安時代における歴代遷宮の問題は、別個の視角が必要となって来よう。その観点から注目されるのが、時期は溯るが、天長十年（八三三）二月二十八日、淳和院で淳和天皇から禅譲された仁明天皇の場合である。

仁明は同年三月六日大極殿で即位し、東宮より移御した松本院で一カ月余りの仮住いののち四月二十二日内裏に遷御した。遷御の前日、十禅師を内裏に請じて転経させているが、それは「為_レ可_二遷御_一故、先鎮_レ之焉」（『統日本後紀』四月二十一日条）める、というものであった。清涼殿へ遷御するに当たって鎮祭し読経させているのである。ちなみに仁明は即位に先立つ三月五日、檀原・長岡の二山陵に即位すべきことを奉告しているが、『続日本後紀』によると、その奉告の詔の中にも「是以大御座_{オホミマ}処_{ミストコロ}乎_ハ掃_{ハラヒ}潔_{キヨメ}侍_{ムスヒ}而_ニ」即位する由が記されている。これは次の文徳即位の場合にも見られることばである（『文徳実録』嘉祥三年四月十六日条）。詔中の修飾文言にこだわるつもりはないが、在所を掃い清める、鎮祭する、とは以前の即位の詔にはみられなかったことばであり、内裏遷御の前に「大御座処」を掃い清めること（祓）が一種の儀式として認識されつつあったことは認めてよからう。

この仁明が清涼殿で没し、その用材で文徳が嘉祥寺を建立したことについてはすでに述べた。したがって文徳については当面問題はないが、仁明没後、文徳・清和・陽成・光孝の各天皇は清涼殿を使用せずに、仁寿殿――

仁寿殿は第二清涼殿ともいうべき内裏の建物である——を在所として用いたようである。ちなみに光孝は仁和三
年（八八七）仁寿殿で没している。

それはともかく文徳の禅譲をうけて即位した清和の場合も、以後九年間を東宮で過ごすという異例の事態があ
ったが、貞観七年（八六五）十一月、内裏に遷御することとなり、それに先立ち（八月十七日～二十日）、太政官曹
司庁で同種の鎮祭が行なわれている。ただしこの場合は、「天皇欲ニ遷御ニ故、秋季御読経於レ之修レ之、兼以鎮也、」
（『三代実録』同年八月十七日条）とあるように、（秋）季御読経をもって鎮祭を兼ねさせている。

このような遷御に先立って行なわれた鎮祭の様子をもっとも具体的に示すのが、次の陽成天皇の時であろう。
元慶元年（八七七）二月二十六日、まず仁寿殿で三日間の御修法が行なわれ、同月二十九日、東宮より遷御した
が、その行粧は、

是日申時、天皇遷_レ自_ニ東宮、御_ニ仁寿殿、童女四人、一人乗_ニ燎火、一人持_ニ盥手器、二人牽_ニ黄牛二頭、在_ニ
御輿前、用_下陰陽家鎮_ニ新居_ニ之法也、公卿宿_ニ侍内裏、三日不_レ出、

（『三代実録』）

というものであった。陰陽家の新居鎮祭法で新宮が潔斎されたこと、遷御後は公卿が三日間内裏に宿侍したこと
などが知られる。また、二人の童女が各々燎火と盥手器をもち、さらに二人が黄牛二頭をひいて先導したという
のも興味ぶかい。

この陽成より禅譲されて元慶八年（八八四）二月二十三日大極殿で即位したのが光孝天皇であるが、光孝も即
位後、東宮より仁寿殿に移御するに際して、同月二十四日、二十僧を仁寿殿に請じて五日間修法させている。同
じく二十八日条の『三代実録』によると、その折の様子は次のようであった。

帝未_ニ遷御_ニ之前、遣_下右大弁橘朝臣広相、諸陵助正六位上林朝臣忠範、率_ニ所司_ニ行_ニ掃除_ニ之事、裁_ニ樹種_ニ竹、
布_ニ沙控_ニ水、效_中承和天子之旧風、忠範性有_ニ風流、故使_ニ之矣、夜、親王公卿侍_ニ宿殿上、

ここにいう「掃除之事」とは「宮を清めること」であるが、それは仁明即位の詔にみられた「大御座処乎掃潔侍而」ということにほかならない。しかも文中に「承和天子（仁明）の旧風に效^{なま}う」とあるように、こうした先例が仁明天皇の時にはじまるとされている点には、十分注意しておく必要がある。それとともにここでは死穢の意識、すなわち不浄の觀念が、讓位の場合には直接的でなかったことから、清めるといふ形に解消されていたことも知られよう。旧殿舎を清める（＝鎮祭する）ことで清涼殿の新造にみたてたわけで、これもまた歴代遷宮の一つの形式であつたに違いない。そして遷御ののち親王・公卿が殿上に宿侍したことも陽成の場合と同様であつた。

しかしそのこと以上にわたくしが興味ぶかく思うのは、同じく承和の先例に效つたという、遷御における風流事である。先の記事によれば、のち阿衡の紛議にかかわる橘広相とともに「性有^三風流」る諸陵助林忠範が使者につかわされ、庭におい繁る樹木を伐り、かわりに竹をうえ砂をまいて水を打つという手入れが施されている。風流を解する忠範が使者としてわざわざ選ばれたのであるが、ここに至つては内裏遷御が美的な風流事を楽しむ儀式となつてゐることを知るのである。そしてこれこそがまさに歴代遷宮の王朝的帰結であつたといえよう。

(2) 里内裏の出現

順序は逆になつたが、嵯峨・淳和の場合も、実態はわからないが、それぞれの天皇は遷御に先立ち同種の形で宮室を修造し、あるいは祓い清めた上で、移御したものとされる。内裏の修造について『類聚国史』には、嵯峨天皇時代のこととして「遷^三御於弁官曹司、以^レ修^三造禁中^二也」（弘仁七年二月二十八日）とあり、また淳和天皇時代には「鸞興遷^三御梨本院、為^レ修^三大内^二也」（天長九年四月二日）の記事を収めるが、嵯峨の場合は即位後七年目、淳和の場合も即位後九年目のことで、ただちに即位にかかわる在所の修造とみるのは時期的に問題がある。とく

に嵯峨の場合は、前年の弘仁六年（八一五）五月に、朝堂院の修理のために一九、八〇〇人の役夫が諸国から徴發されており、その一連の工事とみるべきであろう。

それはともかく、以上のことから、天皇が崩御した場合は清涼殿が解体新造され、讓位の場合は旧清涼殿を祓い清めるといふ形で、平安時代にも歴代遷宮の慣例が行なわれて来たことが知られたと思う。しかしこうした故実や手続きもやがて全く無意味なものとなる時期が来る。その最大の原因がたびたびにのぼる内裏の焼亡と、それに伴う里内裏の出現である。里内裏とは内裏が火事や地震などで罹災した際、一時的に京中に求められた仮御所のことで、貞元元年（九七六）五月に内裏が焼亡した時、円融天皇が遷った太政大臣藤原兼通の堀河第を最初とするが、天徳四年（九六〇）以後における度々の火災は里内裏を常態にした。そして里内裏の一般化は、やがて内裏の廃絶化をもたらし、内裏は消滅することになる。それは同時に歴代遷宮に終止符を打つことでもあった。

里内裏、つまり清涼殿の宮外への移建は、これ以前における、讓位後の居所としての「後院」の出現とも無関係ではない。この後院・里内裏については別稿にゆだねたい。

- (1) 歴代遷宮については『神皇正統記』（元明天皇）に、「古には代ごとに都を改め、すなわちそのみかどの御名によび奉りき」とあり、管見によれば、これが初見である。
- (2) 喜田貞吉『帝都』。以下、とくにことわらない限り喜田氏の見解はこの書による。
- (3) 村井康彦『日本の宮都』。
- (4) 足立康『奈良県史蹟名勝天然記念物』十一ノ七。
- (5) 大井重二郎『平城京と条坊制度の研究』。
- (6) 喜田貞吉、註（2）前掲書。
- (7) 八木充『古代日本の都』。以下、とくにことわらない限り八木氏の見解はこの書による。

- (8) 村井康彦『古京年代記』。
- (9) たとえば日本古典文学大系所収『日本書紀』など。
- (10) 大井重二郎、註(5)前掲書。
- (11) 土橋寛「藤原宮と藤原不比等」(『国語と国文学』四九卷)。
- (12) 三章『山背』遷都と和氣清麻呂」参照。
- (13) 旧例に従うという意味で「仍旧」を「旧に仍って」と読むことについて、たとえば寛平三年(八九一)八月三日、修理職の官位を定めた太政官符に「件職官位宜_レ仍_二旧貫_一」という事例があり(『類聚三代格』)、また『三代実録』元慶七年八月十二日条(太政大臣藤原基経の摂政を辞する上表)に、「上思_二先帝顧託之旨_一、下待_二匪躬聽断之期_一、依_レ旧、董撰」とあるのも、同様の用例といってよいであろう。したがって「仍_レ旧」「仍_二旧貫_一」は「依_レ旧」と同様、けっして特異な用語ではない。
- (14) 村井康彦、註(3)前掲書。
- (15) 村井康彦『王朝貴族』。

三章 「山背」遷都と和氣清麻呂

清麻呂の薨伝——はしがきにかえて

民部卿兼造宮大夫美作備前国造和氣清麻呂が没したのは延暦十八年（七九九）二月二十一日のことである。時に清麻呂六十七歳、桓武天皇から正三位を追贈されている。

この清麻呂については、よく知られるように『日本後紀』当日条に長大な薨伝が収められており、時人の評価がうかがわれるが、そこで語られている経歴や事績の中でもっとも注目されるのが、長岡京の棄都を天皇に進言したという、次のような記述であろう。

……長岡新都、経三十載未^レ成^レ功、費不^レ可^ニ勝^一計、清麻呂潜奏、令^下上託^ニ遊獵^一相^中葛野地^中、更遷^ニ上都^一……長岡造都は十年間やってきたがまだ完成しない、投入した費用は莫大である。だから長岡京はこのあたりで棄てたらどうか、と潜かに奏上したところ、桓武の思惑と一致するところがあつたのであろう、この建策が引き金となり、宇多村への遷都が計画された、というものである。『和氣清麻呂伝』にも同文を載せており、他の徴証からも、清麻呂が長岡棄都⇨平安遷都の舞台廻しの役を果たしたことは事実とみてまず間違いないであろう。今日の感覚からすれば、莫大な費用をかけても完成しないから棄てる、という理屈はすぐには理解しがたいところで

あるが、清麻呂のこの進言は、閉塞状況を打開する上できわめて有効な助言となったのである。

ところがこの清麻呂は、これ以前、摂津守時代の延暦三年（七八四）五月、蝦蟇の大群が四天王寺に向って走り去ったという恠異を報告したことで知られている。『続日本紀』によれば、それは次のようなものであった。

摂津職言、今月七日卯時、蝦蟇二万許、長可^{ハカリニ}ニ四分、其色黒斑、從^ニ難波市南道^ニ南汗池列可^ニ三町^ニ、隨^レ道南行、入^ニ四天王寺内^ニ、至^ニ於午時^ニ、皆悉散去、

黒斑の蝦蟇二万匹ばかりが難波の市の南道から三町に及んで列をなし、南行して四天王寺に入り、そこで散り去ったというもので、この報告をした摂津職の長官（大夫）が和氣清麻呂であったというわけである。この蝦蟇の大移動は、かつて中大兄皇子の関わった三度の遷都⁽¹⁾に必らずネズミの大群が移動したという故事からいっても、まさしく「遷都の予兆」にほかならなかった。長岡村へ視察のための使者が派遣され、長岡遷都事業に着手したのはそれから三日後の五月十六日のことであった。こうなると、遷都の予兆というより、この奏上と使者の派遣とは示し合わせた上での一連のものであったというべきかも知れない。

このようにみえてくると清麻呂は、先の進言（長岡京棄都^ニ平安京遷都）とあわせ、桓武天皇による二度の遷都事業——長岡・平安遷都の双方に、その都度深くかかわっていたということになろう。

周知のように長岡遷都については、これまで藤原種継の役割がもっぱら取り上げられてきたといつて過言ではない。長岡遷（造）都が種継によって推進されたことはたしかであるが、わたくしにはその間に見え隠れする清麻呂の存在が気になって仕方がない。結論を先にいえば、清麻呂の役割はすでに長岡遷都の時からみとめられ、しかもそれは想像以上に大きなものであったように思う。ことに造都事業の中心となる造宮機関との関連において顕著であり、けっして「陰の立役者⁽²⁾」といったものではなかった。

そこで本稿では、従来論じられることの少なかった長岡・平安両遷（造）都における清麻呂の役割を明らかに

住吉社への橋渡しがそれではなかったろうか。その報告から十日後（五月二十四日）、やはり摂津職の史生正八位下武生連佐比乎が瑞祥である白鷺の一羽を献上しているが、これもいわば遷都への根廻しであり、その橋渡しの役を果したのが長官である清麻呂であったことは明らかである。その意味で、この日の清麻呂の昇叙は長岡遷（造）都にかかわってのものとみてよいであろう。清麻呂はその前月（十一月）、皇后藤原乙牟漏と中宮高野新笠を長岡新京に迎える前後次第司に任じられているが、⁽⁵⁾これもそうした清麻呂の立場をよく示している。ちなみに皇后らは、その母阿倍古奈美が没したために、桓武の長岡遷幸後も平城京に留まっていたのである。

このようにみてみると、長岡遷都における摂津職もしくは清麻呂の果たした役割があらためて注目されるが、これは摂津職が難波宮や難波津の果してきた機能と密接な関わりがあったためと思われる。

古来、難波津を擁する難波宮は、大和宮都の外港・陪都として重視されてきたが、長年にわたる淀川・大和川の堆積作用により、港湾としての機能がしだいに低下していた。たとえば天平宝字六年（七六二）四月、安芸国で建造した遣唐使船を難波に廻送しようとしたが、難波の河口が浅瀬のため座礁したという。この事件は、難波津の機能の衰えを如実に示している。聖武天皇以後、難波への行幸が激減するものも、そうしたことと無関係ではなからう。そして難波京の衰微を決定的にしたのが、長岡造都に際してその建物が移建されたことである。長岡京という淀川水系の都の誕生は、難波津を擁する難波京の消滅に他ならない。というより難波宮の解体＝難波津の終焉を見こして、長岡遷都が計画されたとみるべきである。遷都直後の延暦四年（七八五）正月、摂津国の神下・梓江・鰭生野を掘開して、淀川を西の三国川（現神崎川）に通す工事が行なわれたのも、そのことを示している。この流路の掘削は遷都に伴う淀川開発の一環であり、江口（淀川と神崎川の分岐点）・河尻（神崎川河口）の開鑿によって、その上流にある淀・山崎あたりが、新たな川津の機能をもつようになる。これを推進したのもまた、摂津職の長官清麻呂であったとみてよい。

ところでこの難波宮の廃止について、これを復都（倍都）制の廃止とする見方がある。⁽⁶⁾すなわち緊縮財政の方針に従い、それまで営まれてきた二つの都——平城京と難波京を長岡京一つにまとめようとしたものとみる考え方である。その論拠は、長岡遷都が、桓武天皇による緊縮政策の一環として造宮省を廃止した直後に行なわれたものであることや、長岡宮の朝堂院などの規模がそれまでのどの宮よりも小さく、朝堂の数も十二堂でなく八堂しかないことが何よりの論拠である、とするものであるが、にわかに賛意を表しがたい。第一、平城京造宮省の廃止を緊縮財政の一環とみる見方に疑問があるし、難波宮についても、これを中国的意味での副都とみなすことは出来ない。難波宮はあくまでも大和宮都の外港という以上の位置づけをすることは出来ない⁽⁷⁾と考える。ましてや十年後の平安造都について、「一度は緊縮財政にもとづく小規模な宮都として長岡京を造営したが、やはりそれでは不都合を生じたのであろうし、おそらく長岡京造営の中心人物であった藤原種継が暗殺されたこともあって、もう一度、従来の正統的な都を造る必要が出てきたからではなかったか」とする見方がなされるが、それでは緊縮財政を唱えながらより多くの浪費を重ねたことになる。次章で述べるように、長岡造都の推進母体となる造長岡宮使は四等官の規模や官人の位階など実質的な組織の上で、どの造都時にも劣るものではなかった。朝堂院の規模のことも、平安宮では再び大きくなることはたしかであるが、いちがいに財政問題のためとばかりはいい切れない。旧宮からの建物の移建——この場合は難波京（朝堂が八堂と考えられている）から移建されたことによるもので、それはどの遷都でもみられた木造建築を主とする場合の慣例であった。長岡遷都が日程にのぼった時、大和宮都の外港として機能してきた難波宮・難波津の扱いが、当然問題になったはずである。そこで造長岡宮使として新京の造営事業を担当、推進する種継に対して、難波京の解体作業を担当したのが摂津大夫清麻呂であった、というのがわたくしの意見である。すなわち長岡遷都とは、「長岡京の造営」＋「難波京の解体」という二つの事業の総体として理解すべきものであり、それぞれの事業の担当者が種継であり清麻呂であったとみる

のである。その点で清麻呂の果たした役割は、むしろ種継のそれに匹敵するものではないとしても、造都事業の重要部分を担っていたと考える。その意味で長岡造都は、両者の協力によつてはじめて可能であったといつてよいであろう。清麻呂が、長岡京が放棄されるまでの十一年間、一貫して摂津大夫の地位にあったことを考えると、⁽⁸⁾清麻呂の摂津大夫在職はもとより、遡つてそれへの任命そのものも、遷都事業の一環であつたと考えてよいのではなからうか。⁽⁹⁾

ちなみに延暦十二年(七九三)三月に下された太政官符(『類聚三代格』)に、「難波大宮既停、宜改_ニ職名_一為_ニ国_一」とあつて、難波宮は長岡京時代にその生命を終えたこと、また摂津職も長岡京遷都の實現にともない摂津国と改称され、諸国並みの国司とされたことが知られる。清麻呂は、この摂津職の格下げを見届けて、遷都以來担つてきた重任から解放されたのであつた。

二 十年という歲月

さて長岡京都については、前にも述べたように、和氣清麻呂の奏上により、桓武が遷都を決意したことになっている。奏上の時期は明らかでないが、桓武天皇が平安遷都への意志を表明したのは遅くとも延暦十一年(七九二)末のことであつたから、それに近い時期のこととみられる。翌年正月早々には、使者が葛野へ派遣されて地相調査を行ない、六日後には早くも長岡宮の一部宮殿を壊すため、自らは東院へ移つて⁽¹⁰⁾いる(『日本紀略』)。

長岡京は、周知の通りそのしよっぱなに造宮長官藤原種継が射殺されるというショックな事件が起こつたが、工事はその後も継続され、むしろ桓武の熱意は昂まつたとさえ考えられる。しかも発掘調査によれば、建物の主要部分はかなりの程度造られていたとされるだけに、その長岡京を放棄した理由については、早良親王の怨霊、二度にわたる洪水、都市的機能の未熟さなど、さまざまな意見が出されていることは周知の通りである。し

かしここでは、それについてはふれない。

わたくしが留意したいのは、この時点で棄都が取り上げられた現実的な理由として、「十年」という期間に対する古代人の観念とでもいふべきものについてである。十年もかけて完成しないから他所へ移ろうという論理は、今日のわれわれからすれば異和感を覚えるが、これを裏返えせば、工事をすでに十年も続けたのだから放棄してもよい、ということになる。どうやらわたくしたちは、この「十年」という年数にこめられた意味を考え直してみる必要がある。

わが国では古来、建物の耐用年数を二十年とみなしてきた。二十年ごとに行なわれる伊勢神宮の式年遷宮がその典型であるが、宮殿の場合でもかわりはなかったはずである。これは遷宮を繰り返す中で形成された観念であり、ことに技術の伝承に必要な年数であったと考えられている。とすれば十年という期間は、建物の生命の半ばが失われたことを意味する。「放棄」が認められる最低限の年数ということである。そう考えることによって、⁽¹¹⁾「十年」を過ぎたから他所へ移ろう、移ってもよい、という理屈の出てくる根拠が理解できるのではない。いかならば棄都の思想⁽¹¹⁾、棄都の条件である。清麻呂の論理は、突飛どころか、むしろ伝統的な観念をふまえたものであったといふべきである。

これが棄都を勧めた清麻呂の思惑の論拠であり、それを受け容れた桓武は、この時期相前後して起こった怨霊問題や洪水を奇貨として、放棄を決断、長岡京の「十年」にケリをつけたのであった。そういえばこれに続く平安造都にしても、延暦二十四年（八〇五）、すなわち十一年目に造宮職が廢止され、工事は事実上十年で終止符が打たれている。桓武に「徳政相論」を行なわしめ、平安造都の中止を決断させたものも、結局は「十年」という歳月であったといえそうである。

こうして清麻呂は、長岡遷都ばかりでなく平安遷都にも関わり、いわば舞台廻しの役を果したわけである。

なお長岡棄都⇨平安遷都に際して、清麻呂が「潜かに」奏上したというのは、種継がはじめて「議を建て⁽¹²⁾」て平城棄都⇨長岡遷都を実現したのといかにも対照的であるが、これは時に四位であった清麻呂と、三位・参議であった種継との立場の違いによるものと思われる。いずれにせよ清麻呂の立場は、桓武との個人的な信頼関係を基軸に、長岡京時代に培われたものであったといえよう。

三 平安造宮使の顔ぶれ

さて長岡京の場合、藤原種継以下十数名が造長岡宮使として任命されたが、平安造都にあたってもあとに掲出するような人物が造宮使に任命され、造都事業に当たった。造宮使という場合は、ともに令外官ではあっても平城京の造宮省に比し、推進機関としての格は低かったとみられるが、臨時的機関として設置することで、むしろ組織の充実が図られたと思われる。官人も、平城京まではほとんどが造宮官を本官としていたのに対して、長岡京（平安京でも同じ）では全員が兼官であったことや、長岡・平安京では造宮使がすべての職務を含む総合的な組織であったことなどに特徴が見出せる。このあたりのことについては、別稿（四章）で述べることにする。

さて、『続日本紀』に記される造長岡宮使は、次のような顔ぶれであった。

以中納言従三位藤原朝臣種継、左大弁従三位佐伯宿禰今毛人、参議近衛中将正四位上紀朝臣船守、散位従四位下石川朝臣垣守、右中弁従五位上海上真人三狩、兵部大輔従五位上大中臣朝臣諸魚、造東大寺次官従五位下文室真人忍坂麻呂、散位従五位下日下部宿禰雄道、従五位下丈部大麻呂、外従五位下丹比宿禰真淨等、為造長岡宮使一六位官八人、於是經略都城、造作宮殿、

まず目につくのは、その顔ぶれが各氏族から一人ずつ撰ばれていることで、これは長岡遷都についてのコンセンサスを形成し、いわば挙党体制で推進しようとしたことのあらわれであろう。このことの意味はけっして小さ

くない。われわれはふつう長岡遷都を種継の個人的な力量によって推進されたかの如く思いがちであるが、実際には、諸氏族の協力体制がとられていたのである。

その二は、四等官の規模や官人の位階では、むしろ平城宮の造宮省よりもまさっていること⁽¹³⁾で、これは実効性のある組織が求められたことの反映であろう。

平安京の場合も当初は造宮使と称されており、長岡京と同様の方式がとられたことがわかる。もっともその顔ぶれが知られるのは『掌中歴』(十二世紀、三善為康撰)という後代の記録であるが、それには次のように記載されている。

今案、⁽¹⁴⁾延暦十三年十一月廿一日、造京式京中小路并築垣、堀溝条坊、使従四位下民部大輔兼東宮学士右衛門督伊予守菅原朝臣真道、^(野力)正五位行右少弁兼春宮亮藤原朝臣葛野麻呂、^(下脱力)判官従五位下行式部大丞兼大学助和氣朝臣広世、正六位上行治部少丞藤原朝臣真成、正六位上行中衛将監橘朝臣真甥、主典正六位上行民部少録飛驒国造青海、従六位上右京少属郡忌寸国守、従六位下摂津首住吉朝臣浜主、従六位下行相模大目下道朝臣継成等、奉詔檢録貢奏、

これは延暦十三年(七九四)十一月、菅野真道・藤原葛野麻呂らが造京式を檢録奏上したことを記したものであるが、便宜上、このなかから造平安宮使のメンバーを取り出して列記してみよう。

使

従四位下民部大輔兼東宮学士右衛門督伊予守 菅野 真道

正五位下右少弁兼春宮亮 藤原 葛野麻呂

判官

従五位下式部大丞兼大学助

和氣 広世

正六位上治部少丞

藤原真成

正六位上中衛將監

橘真甥

主典

正六位上民部少録

飛驒国造青海

從六位上右京少属

郡国守

從六位下撰津首^(介九)

住吉浜主

從六位下相模大目

下道継成

これを先の造長岡宮使（種継ら十名と六位官人八名）と比較すれば、規模や官人の位階では下回り、また長岡京の種継に匹敵する人物が見当たらないが、仔細に検討すると、そこには明確な編成原理が貫かれていたことがうかがわれる。

すなわちこの顔ぶれで注目されることの第一は、平安造都時の進言者である清麻呂自身は加わっていないものの、長官（造宮使）菅野真道以下、清麻呂色が強いことである。清麻呂と真道の関係についてはのちにふれるが、真道は清麻呂の民部卿時代の部下であり、とくに民部省における清麻呂⁽¹⁶⁾と真道のコンビは、延暦十八年（七九九）の清麻呂の死まで続く。しかも『公卿補任』の記事⁽¹⁶⁾を信ずるなら、撰津大夫時代、真道はその亮（次官）であったというから、両者のコンビはさらに長いものとなる。⁽¹⁷⁾造宮長官真道の背後に清麻呂が存在していたと考えてよいと思う。同様に造宮主典となった飛驒国造青海や住吉浜主が民部省や撰津国の関係者であることも、清麻呂の立場（撰津大夫兼民部卿）を考えるとその人脈につらなる者たちであったといえるであろう。

第二に、清麻呂カラーという点では造宮判官に任じられた清麻呂の長子広世もその一人であるが、それに関連して注目されるのが藤原小黑麻呂の子葛野麻呂の参画である。小黑麻呂は長岡造都の時（延暦三年五月）と同様、

十二年正月、平安遷都に先立ち宇多村の地相調査に派遣され、清麻呂とともに遷都・造都にかかわりの深か人物であるが、十三年四月、桓武天皇は小黒麻呂のために、宮内卿石上家成以下三人（従者十三人）を東大倉院に派遣し、甘草・大黃・人参・阿梨勒・檳榔子など五種の薬草を求めているから（『平安遺文』十一号）、すでに体調が悪かったとみられる（同年七月に没）。そこで、子の葛野麻呂が任命されたものであろう。この麻呂は小黒麻呂と秦忌寸嶋麻呂の女の間に生まれた子で、その名はもとより平安新京の地、山背国葛野郡にふするが、母方の居所にちなむ命名であつたろう。ともあれ広世の参画と対をなす点ではなはだ興味深い。

第三は、藤原氏は、葛野麻呂（正五位下・右少弁兼東宮亮）と真成（正六位上・治部少丞）の二人で、長岡京が種継三位・中納言）一人であつたのに比し、人数はふえたものの位階では比較にならない。ちなみに最後の平城京宮卿となつた藤原鷹取は、任命当時従四位上・越前守であつた。その点、五位の葛野麻呂が造宮長官に任じられているのは、これまでの造宮省の官人構成に比しても異例の拔擢といつてよいが、これは小黒麻呂の子としてけでなく、藤原氏の代表としての意味がこめられていたのかも知れない。

なお葛野麻呂は当時安殿親王の東宮亮を兼任していたが、当時真道も延暦四年、早良にかわつて安殿が立太子して以来東宮学士を兼任していた。また知られるようにこの真道は百済系の氏族で、延暦九年に津連から改姓されてゐる点、葛野麻呂と共通するところが多く、この二人が造宮長官に任じられたことは、平安造都を考える上にはなはだ興味深い。葛野麻呂は四十歳、真道は五十四歳であつた。延暦十二年九月には真道・葛野麻呂が派遣され、新京での宅地班給に當っている（『日本紀略』）。

ともあれ真道の背後に清麻呂が存在し、造平安宮使の人撰に深く関わっていたことはまず間違いないであろう。むろん、桓武天皇の意をうけることであつた。そのような清麻呂であれば、自身が造宮使になっていないのが不思議といえは不思議であるが、桓武の助言者に徹していたのであろう。平城棄都Ⅱ長岡遷都を推めた立場

として、長岡棄都⇨平安造都のメンバーになるのを遠慮したといったことも考えられないではない。

桓武の清麻呂に対する信任は、前に述べたように長岡京時代、すなわち清麻呂の摂津大夫時代に培われたものであった。その間、「奉_二中宮教_一、撰_二和氏譜_一奏_レ之、帝甚善_レ之」(『日本後紀』延暦十八年二月二十一日条)とあるように、清麻呂は、桓武の母、中宮高野新笠の「教」⇨教命・教令をうけ、『和氏譜』すなわち和朝臣の系譜を撰して家系を明らかにし、天皇を喜ばせるということもあった。この『和氏譜』を清麻呂の和氣氏の家譜と理解するむきもあるが、平野邦雄氏がいうように和氏、すなわち桓武の外祖父の家のこととみるべきであろう。そして(18)わたくしは延暦九年十二月、新笠の母土師真妹に大枝朝臣を賜姓するきっかけとなったのが、この『和氏譜』の撰進であったと考える。(19)それにより、新笠の母方、毛受腹土師氏に改賜姓のないことを訴えるところに意図があり、それを清麻呂に命じたのも桓武に近い立場にあったためと考えられるが、新笠は完成を待たずに亡くなったものと思われる。真妹に大枝朝臣と賜姓されたのは新笠の一周忌であり、大枝朝臣の名はその新笠の葬られた大枝陵にちなむ(五章「高野新笠と大枝賜姓」参照)。

桓武と清麻呂のこのような関係を考えると、長岡棄都を「潜かに」奏上した清麻呂の腹心的立場も十分納得されよう。その結果実現された平安京は、桓武にとって二度目の都であっただけでなく、種継に比すべき存在がいなかったことから、長岡造都の時よりもはるかに主体的・積極的に関わっている。それだけに桓武の清麻呂に対する期待は大きく、清麻呂色の強い造宮使の編成となったのも当然の結果であったと考える。

四 清麻呂と真道

工事開始から一年有余ののち、延暦十三年十月二十二日に至り、桓武は新京に移御している。それは陰陽道でいう「革命」の時に当る辛酉の日であった。遷都に先立ち七月には、長岡京から東西市も移転され、平安新京の

都市的条件の整備にも着手している。なお小黒麻呂は、この遷都の儀をみることなく、七月一日、六十二歳で没している。

こうして始められた平安京の造営は、遷都後もむろん継続され、翌延暦十四年五月、「造宮使主典已下將領已上一百卅九人、各随_二其功_一叙_レ位」(『日本紀略』)として、造宮使の官人たちに位階が授けられている。これ以前、物を賜うことはあったが、造宮関係者全員に対する授位はこれが遷都以来はじめてのことで、工事にひと区切りついたことを思わせる。この年の正月には出来ていなかった大極殿も翌十五年正月一日には「皇帝御_二大極殿_一、受_二朝賀_一」(『類聚国史』)とあり、桓武ははじめてその高御座に御して朝賀をうけているから、この延暦十四年中に完成したもののごとくである。先の造宮関係者一三九人に対する授位は、おそらくこの大極殿を中心とする造作がほぼ完成したことによるものとみられる。完成した大極殿で朝賀をうけた十五年三月、「巡_二覽朝堂及諸院_一」(『類聚国史』)とみえるのを最後に、桓武の朝堂院・諸院、すなわち大内裏内巡幸の記事がみえなくなる(表15参照)。わたくしはこの頃までに大極殿だけでなく、大内裏の主要殿舎もほぼ出来上ったと推測する。大極殿の西の豊樂院は、遅れて十八年正月現在まだ完成してはいなかったが、これは宴会の場であったから、工事があと回しにされたものであろう。

こうして造都以来三年を経た延暦十五年(七九六)、宮城の主要部分が完成したところで、事業は新たな段階に入ったとみられる。そう考えるのは、この時期、造宮使が造宮職に改められていることが知られるからである。まず造宮使に関していえば、造宮使は前掲の延暦十四年五月、一三九人が叙位された記事を最後に所見せず、これに代わるように造宮職が翌十五年七月、「造宮職官位准_二中宮職_一、但大属特為_二七位官_一」(『日本後紀』)と初見することから、造宮使から造宮職への改組はこの間(十四年五月～十五年七月)のこととみられる。

そこで注目されるのが、この改組の時期に和氣清麻呂が造宮大夫に任じられたことである。もっとも清麻呂の

造宮大夫については、その薨伝(『日本後紀』)に「民部卿兼造宮大夫美作備前国造和氣清麻呂」と記されて在任が知られるだけで、具体的な就任時期は明らかでないが、『公卿補任』によって延暦十五年六月庚申(六日)、菅野真道が造宮亮に任じられたことが確認されるから、清麻呂が造宮大夫に任命された時期も、真道就任とほぼ同時期とみてよいであろう。そしてわたくしは、清麻呂・真道が就任したこの六月前後に造宮使が造宮職に改編されたとみる。これは翌七月九日に外従五位上物部多芸連建麻呂が造宮大工、外従五位下秦忌寸都岐麻呂が造宮少工に任命され、同七月二十四日、造宮職の官位を中宮職に準ずることとし、ついで十月十一日には造宮職算師を従八位官に定めていることなど、六月以降、造宮職関係の記事が集中することとも無関係ではない。これは明らかに、

表15 桓武の京中巡幸

延暦12 (793)	3.	1	葛野に幸し、新京を巡覧す
	4.	3	葛野に幸す
	7.	25	新京を巡覧
	8.	26	京中を巡覧
11.	2		新京を巡覧
	4.	28	新京を巡覧
	10.	22	平安遷都
13 (794)	7.	12	京中を巡幸
	8.	19	朝堂院に幸し、匠作を覧る
14 (795)	9.	4	東院に幸す
	12.	11	京中を巡幸(『紀略』1日)
12.	18		京中を巡幸
	3.	25	朝堂、諸院を巡覧(『紀略』24日)
15 (796)	4.	10	京中を巡幸
	8.	21	京中を巡幸
8.	25		大蔵省に行幸
	12.	14	京中を巡幸
16 (797)	1.	20	京中を巡幸
	2.	1	京中を巡幸
2.	10		京中を巡幸
	5.	7	京中を巡幸
17 (798)	1.	9	京中を巡幸
	2.	9	京中を巡幸(『紀略』8日)
2.	26		京中を巡幸(『紀略』25日)
	3.	1	京中を巡幸
3.	5		京中を巡幸
	5.	8	京中を巡幸
5.	14		京中を巡幸
	8.	10	京中を巡幸
18 (799)	6.	23	京中を巡幸
	8.	7	京中を巡幸
11.	11		京中を巡幸
	12.	24	京中を巡幸
19 (800)	3.	18	京中を巡幸
	4.	10	京中を巡幸
4.	23		京中を巡幸
	4.	11	京中を巡幸
22 (803)	4.	11	京中を巡幸
23 (804)	2.	20	京中を巡幸
	8.	19	京中を巡幸

『続日本紀』『日本後紀』および『類聚国史』『日本紀略』による。

この時期、造宮機関の組織的な拡充・整備が行なわれ、事業の新たな推進がはかられたことを示している。

平安京の造宮機関である造宮使が、この時期に造宮職に改められ、組織的な拡充がなされた理由として、わたくしは以下のことが考えられると思う。

一つは、この時期、造都工事の重点が宮内から京中に移ったことである。桓武の巡幸が、これまでの宮中にかわって京中巡幸がふえるのが（表15）、そのことのもっとも端的なあらわれであるが、造宮職への改組は、そうした造都工事の拡大にともなう措置であったと考える。役夫の徴発が、翌延暦十六・十七年にかけて拡大されたのも（四章「造宮官と造宮役夫」参照）、それに対応する措置とみてよい。

二つは、清麻呂・真道の処遇に関わる問題である。工事が新たな段階に入ったのを機に、これまで陰に協力してきた清麻呂を長官に任命し、より強力な体制をつくり出そうとしたものと考ええる。長年にわたる清麻呂の功績に対して、これに報いるといった気持ちもこめられていたかも知れない。清麻呂は二年後に没している。

ところが清麻呂の長官任命の結果、いささか不自然な状況が生じている。すなわちそれまでの造宮使の時代は長官であった菅野真道が、造宮職の亮（次官）として清麻呂の下に位置づけられ、形の上では格下げされたことである。時に清麻呂は六十四歳、真道は五十六歳であったが、常識からすれば左降人事であり、奇異といわねばならない。しかし両者の親密な関係を思うと、おそらくそれは表面的な見方であろう。

両者の関係についてはすでに述べたので再言はしないが、延暦十一年六月、民部大輔から民部卿に昇任した清麻呂のあとをうけて民部大輔に任じられて以後、両人は一貫して上司と部下の関係にあったといつてよい。しかも当時の清麻呂の年齢——二年後に骸骨を請うている（許されなかったが）——からすれば、真道が事実上、事業の推進者であった点では造宮使時代と変わるものではなかったはずである。

しかしいままでの長官の上に、新たな長官を置くとなれば、①真道についてはこれまでと同等の地位を保持す

るものであること、②清麻呂については、部下の真道より上位のポストとなること、の少なくとも二点を満足することが体面上からも望ましい。その解決方法としてとられたのが、わたくしは、造宮使を造宮職に格上げすることであったと思う。格上げされたぶん清麻呂は上位に位置づけられる一方、真道はほぼ同じ地位を踏襲できたわけである。したがって造宮使が造宮職と改称されたとしても、規模はともかく組織の構造（臨時・兼官方式）という点では基本的には変わりなかったといつてよいであろう。

ところで平安京造宮使（職）で注目されることは、清麻呂も真道も現役の民部省の官僚であったという点で、これは平安京造宮職の性格を考える上できわめて重要である。

これ以前の造宮官は、軍事関係者もしくはその経験者が長官や関係者として任命された。これは長岡京についても当てはまるが（四章参照）、平安京の場合は、清麻呂（民部卿）や真道（民部大輔）のような国家財政を担う民部官僚が中心人物となっていた。これはその機能が、造宮事業における軍事的な面よりも経済問題へ移行したことを示している。どの宮都でも政治的な緊張を伴う点では変わりなかったが、過去の経験から、より組織化された造宮職の機関としては、大工事に伴う経済問題が第一義とされたからであろう。その点平安京は、従来のどの造都よりも整備された体制で推進され、実質的に機能したといえよう。

ちなみに清麻呂は典型的な民部官僚で、延暦五年、民部大輔に任じられて以来、二十年に及ぶ在任中には「民部省例」二十巻も撰進している。長岡京の膨大な失費を指摘したのも、経済官僚ならではの発言であった。また、もと津連といった菅野真道は延暦九年七月に上奏して、先祖が百済の貴須王の後裔で日本に帰化し、文筆に功績のあったことを述べて菅野朝臣の姓を許され、のち続日本紀の撰修に携わっている。学問にもすぐれており、東宮学士の地位は安殿親王の即位まで変わらなかった。そうした真道の実直な性格、勤勉ぶりが清麻呂に好まれたのであろう。桓武の信任も厚く、十六年正月には長岡京地一町を賜わっている。

しかしその清麻呂＝真道のコンビも延暦十八年二月、清麻呂が没したことで終わった。造宮大夫清麻呂の後任として四月、ただちに藤原内麻呂が就任している。いっぽう造宮亮真道については十七年十月左衛士督に任じられた折「兼官如レ元」(『公卿補任』)とみえるのを最後とし、次に造宮亮が所見するのは延暦二十三年十一月、在任中の石川河主の名である。河主は木工頭を本官とするもので、いつ造宮亮の兼任を命じられたのか、明らかではないが、右の所見年月日以前であることはいうまでもない。確証はないが、真道は清麻呂に殉じ、その時点で造宮職を退いたものと考ええる。両者の関係からすれば、真道が清麻呂の死により事業から身をひいたとしても不思議ではない。

清麻呂の死とともに平安京造宮事業は一つの時代を終えることになる。

長岡造都は、種継が式家の立場から遷都を推進したこともあって、自らが造宮使となっている。しかしそうした種継に対する反発はよほど強かったのであろう、造都工事が始まった矢先に射殺されてしまった。のち種継の子仲成・薬子兄妹が平城上皇をあやつり、平城遷都を呼びかけたのも、父種継の命がけの事業であった長岡京が否定されたことに対する反撥であった。そうした長岡遷都の経験をふまえた平安造都において桓武天皇は、長岡京に比してはるかに積極的かつ主体的であった。そこに腹心として清麻呂が抜擢された理由があり、清麻呂＝真道コンビによる造都事業が実施出来たのである。

長岡遷都に果した種継の役割は十分認めるとしても、長岡・平安両遷都を通し、一貫して造都事業に携わったという点で、清麻呂の役割は無視出来ない。「山背」遷都・造都における清麻呂の存在をあらためて認識し、評価する必要がある。

- (1) 『日本書紀』によれば、大化改新後の難波遷都に先立ち鼠が新京難波の方へ向ったといい（大化元年十二月九日条）、その後中大兄皇子による飛鳥遷都の場合は鼠が大和に向けて（白雉五年正月一日条）、さらに近江遷都の前年の冬には京都（飛鳥）の鼠が近江に向けて走ったといい（天智五年冬条）、いずれも古老によって遷都の予兆と判断されている。
- (2) たとえば平野邦雄氏などが清麻呂の存在を長岡遷都における「陰の立役者」とみている（『和氣清麻呂』）。なお、以下断らない限り平野氏の見解はこの書による。
- (3) 山背遷都については村井康彦『日本の宮都』参照。
- (4) 造長岡宮使には延暦三年六月十日に藤原種継以下十人と六位官人八人が任命されている。また同年十二月二日・同八年八月一日・同八年十一月九日の記事などによっても構成員の顔ぶれが知られるが、そこに清麻呂が含まれていた形跡はない（以上『続日本紀』）。
- (5) 『続日本紀』延暦三年（七八四）十一月十七日条。この日清麻呂（摂津大夫從四位下）は出雲守從四位下石川朝臣豊人とともに藤原乙年漏・高野新笠を平城京から迎えている。
- (6) 岸俊男「日本都城制総論」（『日本の古代9 都城の生態』所収）。
- (7) 長岡宮大極殿は後期難波宮大極殿を移建したことが知られているが、最近の発掘調査により朝堂院の規模や構造についても類似性が明らかにされ、両者の関連性が指摘されている（小林謙一「都城の構成」『季刊考古学22』所収）。これに従うならば長岡宮朝堂を平城宮のそれと比較することは意味のないものになろう。
- (8) 史料上で清麻呂の摂津大夫が確認されるのは『続日本紀』延暦七年（七八八）六月七日条に「美作備前二国国造中宮大夫從四位上兼摂津大夫民部大輔」と所見するのを最後とする。そしてこののち、摂津国の長官は『日本後紀』延暦十八年（七九九）二月二十日条に摂津守百濟英孫の在任が確かめられるのが初見であり、こうしたことから清麻呂は長岡棄都Ⅱ摂津職から摂津国への格下げ（延暦十二年）とともに、その任を解かれたものとわたくしはみる。
- (9) 清麻呂が摂津大夫に任じられたのは、長岡遷都の前年、延暦二年（七八三）三月十二日のことであった。同元年の四月十一日、平城京造宮省が廃止され、長岡遷都の布石が打たれたが（村井康彦『日本の宮都』）、それはその直前に藤原種継が参議に任じられていることから知られる。したがって清麻呂の摂津大夫任命も、その時期といい、遷都に向けての人事の一環と考えてよい。
- (10) 一九九一年七月、向日市の長岡京跡で発掘された大規模建物群跡が、この時の「東院」と推定されている。

(11) 二章「歴代遷宮論——藤原京以後における——」参照のこと。

(12) 『続日本紀』に記す種継の薨伝（延暦四年九月二十四日条）に、桓武天皇の信任を得た種継が、「初首建_レ議、遷_ニ都長岡_ニとある。

(13) 四章「造宮官と造宮役夫」参照。

(14) この記載については『掌中歴』（『続群書類従』第32輯上所収）の傍注に、「イ本无_レ之、以_ニ口遊注_ニ今可_ニ加入_ニ也」とあるが、現存の『口遊』（『続群書類従』第37輯上所収）には記されていない。しかしここにみえる人名の位階や官職などに多少の誤りがあるものの、今泉隆雄氏も「八世紀造宮官司考」（『文化財論叢』）で指摘されているように、史料的な信憑性を疑う必要はないと考える。

(15) 『公卿補任』によれば延暦十三年十月二十八日、藤原葛野麻呂は正五位下に叙されている。

(16) ただし『続日本紀』では、延暦三年四月壬寅（二日）、従五位下紀朝臣真人が摂津苑（介）に任じられたとする。

(17) ちなみに平野邦雄氏によれば、和気氏と菅野氏との関係は早くからあり、備前・美作の在地で培われたものという。

(18) たとえば和田英松『本朝書籍目録考証』など。

(19) 五章「高野新笠と大枝賜姓」参照。

四章 造宮官と造宮役夫

はじめに

『万葉集』（巻一）に藤原宮役民の歌——藤原京造宮の折に使役された役民の歌が収められている。

藤原宮役民の作れる歌

やすみしし わが大王 高照らす 日の皇子 荒細の 藤原が上に 食す国を 見し給はむと 大宮は 高
知らさむと 神ながら 念ほすなへに 天地も 寄りてあれこそ 石走る 近江の国の 衣手の 田上山の
真木さく 檜の 嬌手を もののふの 八十氏河に 玉藻なす 浮べ流れせれ そを取ると さわく御民も 家
忘れ 身もたな知らに 鴨じもの 水に浮きゐて わが作る 日の御門に 知らぬ国 寄り巨勢道ゆ わが
国は 常世にならむ 凶負へる 神しき亀も 新代と 泉の河に 持ち越せる 真木の嬌手を 百足らず
筏に作り 浜すらむ 勤はく見れば 神ながらにあらし

役民の作れる歌とあるが、実際には柿本人麿の作かともいわれる長歌で、近江の田上山から伐り出した材木を、宇治川・木津川を利用して運ぶのに苦吟する役民たちの姿が描かれている。これによれば、田上山の材木は木津川の泉木津で陸揚げされ、そこから南の藤原京へ運ばれたようである。

古来数多くの宮都が造営され、そのつどこれに必要な役民―造宮役夫が徴発・動員された。その初見は、舒明天皇の百済大宮が造営された時、西国の民がこれに当てられたという『日本書紀』の記事であるが、その実態については、一般に、こうした歌をもつてする、いわば心情的な理解にとどまることが多く（そのこと自体が無意味だということではない）、宮都の所在がほぼ明確となる飛鳥時代以後に限っても、造宮事業全体の中で役夫を位置づけ論じたものはほとんどないのではないか。近時における宮都研究の進展の中でようやくそのあたりへの関心が昂まってきてはいるが、しかしまだ十分な研究成果はあがっていない。

ところでこうした役夫の徴発を含めて、造宮・造都事業には、それに専当する機関が設けられた。その呼称は造宮使・造宮職・造宮省とさまざまであるが、その実態についても十分明らかにされているとはいえない。⁽¹⁾そこで本稿では、造宮機関や造宮役夫に関する基本的な問題点を整理することに主眼をおき、その検討を通して、遷都―造都のありようを考えてみたいと思う。

一 造宮機関―将作監・造宮官（使・職・省）

藤原京以前、造宮工事の中核として活躍した官司は「将作監」であり、その長官の「将作大匠」であった。初見は、舒明天皇が百済大寺と百済大宮を造営するにあたって書直県を「大匠」に任じたとするもので（『日本書紀』、孝徳天皇の難波長柄豊碕宮の造営では荒田井比羅夫が将作大匠に任命されている（『日本書紀』）。両者ともに阿知使主の子孫である東漢人の一族で、建築技師であるとともに現場監督の役目も兼ねていて、工事はもっぱらこうした渡来帰化氏族の有する技術に依存していた。ちなみに最近、平城宮発掘現場で発見された木簡の中に、建築資材の送り状や工事日誌にまじって「荒田井大夫」と記された一枚があり、荒田井比羅夫の後裔が平城宮の造営にも関与したことが推測されている。将作監は技官のみで構成されていたと思われるが、造宮官―造宮

省の前身に位置する、小規模な造宮工事の段階における組織として留意されよう。

さて持統天皇による藤原京の造営は、はじめて都城制に基づく建設がなされた点で画期的な事業であった。あらためて述べるまでもないが、藤原京以前では天皇の代替わりごとに宮移りが行なわれたように、「みやこ」といっても天皇の居所たる宮殿と、それに付属するわずかな施設がある程度で、その周辺に一定の京域をもつことはなかった。それは大津宮でも飛鳥浄御原宮でも同様である。ところがこの藤原京に至って京域が設けられ、以後そのプランをもとにした造都が八世紀末の平安京までつづくことになる。この都城の平面構成については、

「初期平安京の構造」(一章)で論じるので、ここではふれない。藤原京の造営を推進した造宮官が大宝元年(七〇一)造宮職に昇格され、ついで平城京の場合、和銅元年(七〇八)造宮省とされたのも、拡大する造都工事の重みを示すものであろう。⁽²⁾ しかもこの造宮省は桓武天皇の延暦元年(七八二)四月に廃止されるまで常置の官司であり、長官以下、定められた数の官人がそれに所属し、職務に当たったわけである。そこでこれを、あとの在り方との対比上、「常置本官方式」とでも呼ぶことにする。施設の保守修理は四六時中あったにちがいない。

ところが平城京の場合、

(1)常置の官としての造官省がありながら、神亀元年(七二四)三月に「始置_ニ催造司_一」(この時の人名は不詳)として催造司が置かれている(『続日本紀』)こと、

(2)本官任命方式でありながら、養老五年(七二二)九月に中納言藤原武智麻呂が「造宮卿」に兼任されている(その後「知造宮事」に転じたとみられる。『家伝』)こと、

をどのように理解すべきであろうか。

この点については、それぞれ任命・設置された時期が重要な意味をもっている。すなわち(2)武智麻呂の造宮卿兼任は、首皇子こと聖武天皇の即位する二年半前であり、(1)催造司の設置は即位直後(一カ月後)のことであっ

たように、即位（予定を含めて）にともなう新宮づくり——いわゆる「旧によって改作」が行なわれたことを示している。⁽³⁾ とくに武智麻呂の造宮卿兼任は先例に背くものであるが、それだけこの事業に積極的（強引）に関わったことのあかしであろう。ただし武智麻呂はその後のある時期、造宮卿を従四位下泉犬養宿禰筑紫に譲り、自らは知造宮事に転じたものの如くである。これは造宮卿を本来のあり方に戻す一方、知造宮事という立場で工事を惣監したことを物語るものである。しかしいずれにせよ、その結果、本来の造宮省（その長官が造宮卿）のほかに、「知造宮事」「催造司」といった臨時の官司（職）が併存することになった。これは常置の官としての（したがってあらゆる事態に対応出来るはずの）造宮省の他に、必要に応じて臨時の官（兼官）が任命されるという二重方式であり、見方によっては冗官のきらいなしとしない。

わたくしはこのような奈良朝におけるあり方（常置本官方式十臨時官）に対する反省として生まれたのが、長岡京（や平安京）の造都に際して設けられた「造宮使」の組織ではないかと思う。それは常置の本官体制ではなく臨時の兼官体制——必要に応じて人材を任命し、事業が終われば解散、おのおのは本官に戻る——であった。

しかしそのことを述べる前に、平城京の造宮省の廃止についてふれておく必要がある。周知のように設置以来八十余年間常設されていた造宮省は、延暦元年（七八二）四月の詔で廃止されることになる。「今者宮室堪居」というのがその理由で、勅旨省などともに停廃された。ところが二年後、はやくも長岡遷都が断行される。そんなことから右の廃止事情については古来議論のあるところで、とくに喜田貞吉氏が「これすでに解すべからざる現象」とされたことは有名である。こんにちでも一般にそういう見方がなされているといつてよいであろう。

たしかに右の文言を、平城宮（京）に留ることの表明とみれば、中一年を置いての遷都は不可解といふべきかも知れないが、しかしそれは皮相な見方ではなからうか。わたくしは詔のなかに「今者」という条件が付されていることに注目したい。そうすればこれは、「今いるぶんにはこれで差支えない」というほどの意であることが

おのずから明らかとなろう。したがって造宮省の廃止は、これ以上その宮殿に経費をかけることをしない、との意思表示であり、さらにいうなら近い将来における平城宮の棄都を暗に表明したものとみるべきである。二年後にその宮室をすて、長岡遷都にのり出したのは、予定の行動であつたろう。長岡への遷都に当り、甲子革命や朔旦冬至といった、特別の意味をもつ年次・日次が撰ばれたところにも、当事者が遷都を天下草創の事業として位置づけていたことを明白に物語っている。この間の経緯は決して不可解ではないと考える——それが多少短時日の間に行なわれたきらいはあつたとしても。

それはさて長岡遷都に當つては、先にもふれたように造宮使が任命され、造宮事業に當つた。藤原種継以下十数名である。次の平安京でも同じように当初は造宮使が任命された。

この造宮使は、先にもふれたように、常置機関であつた平城京の造宮省と違い、臨時的機関として設置されたが、その変更の意味するところは、柔軟な組織による適切、有効な対応を図つたものであつた。平城京造宮省が常設の官であるというのは、定員や職掌などが固定されていたことにほかならないが、兼官による造宮使体制においては、事態に即応し実効ある活動が可能であつた。ただし長岡京の場合は、造都開始直後に、その中心人物が殺されるということもあつて、どの程度機能したかはわからない。しかし同じ体制が平安京でもとられたところに、臨時兼官体制の有効性が示されている。

これが、平城京造宮省と長岡・平安京造宮使の基本的な違いの第一点である。違いの第二は、平城京造宮省との間だけでなく、同じ造宮使でも長岡京と平安京との間にも違いがみられたことである。平安京造宮使に特徴的な経済官僚の起用がそれである。

すなわち地相調査に関わつた藤原小黒麻呂、あるいは初代造宮長官に任命された菅野真道や、のちに造宮大夫となつた和気清麻呂は、ともに民部卿を本官とする人物であつた。とくに長岡京の放棄を進言し、平安遷都にも

深くかわった清麻呂は、二十年近くもその職にあり、その間には「民部省例」を撰述するなど典型的な民部官僚、いまでいう大蔵官僚であった。この清麻呂については別稿⁽⁴⁾に譲る。井上薫氏⁽⁵⁾は、これ以前の造宮には軍事関係者もしくはその経験者が長官として任命されていたと指摘されているが、そのことを考慮に入れると、平安京の場合、現任の経済官僚であったことが留意されるのである。この事実、造宮事業における機能が軍事的な面よりも経済問題へ移行したことを示している。

遷（造）都はいつの時代でも政治的緊張の伴う大事業であった。遷都に先立ち輿論操作が行なわれたこととか、必ずといってよいほど武器が新都に移されたことなどが想起されよう。その点、工事の責任者に軍事関係者が抜擢されたのは十分に意味のあることであった。のちに平城上皇によって平城遷都が企てられた際、嵯峨天皇側の差し向けた造宮使の一人に坂上田村麻呂が含まれていたように、平安時代でも政治的緊張の中で遷都―造都が行なわれたことに変わりはない。しかし造宮機関本来の機能としては、大工事に伴う経済問題が第一義であり、それが造宮長官の主要な任務とされたのである。たとえば役夫の食料・功賃には中央に集められる庸が充てられるいっぽう、すでに天平ごろには諸国の正税を造宮雇民料として進上させた事実が知られている。その意味からも調庸物や田租を取り扱う民部官僚が、膨大な物資の管理・運用にあたる造宮長官としてもっとも適任であったといえよう。

なお平安京の場合、ある時期から造宮職へと組織が改変されていることが留意される。延暦十五年（七九六）のことであるが、これは諸般の事情から推察するに、宮域の主要部分が出来上った時期に当っており、工事が宮域から京城へ拡大されたのにもなる措置と考えられるが、より直接的には和氣清麻呂を造宮大夫（長官）に任命するに当って、官司の格式を高めたもので、組織・体制に抜本的な変化があったのではないと思う。このことについても先の別稿に譲るが、これまで表舞台に出ることのなかった清麻呂の登場は、造宮次官菅野真道とのコ

ンビとその役割を浮かび上がらせてくれる点でも注目される必要がある。

ともあれ、平安京の造宮職は延暦二十四年（八〇五）十二月の、いわゆる徳政相論——参議藤原緒嗣と菅野真道による「造都と軍事」をめぐる議論——の結果、廃止され、木工寮に吸収された。官僚はそれぞれ本官に戻った。ただし木工寮は人員が増加され、事実上組織の強化となっている。以後工事（保守修理）は木工寮（のちには修理職も）に継承され、造宮職が再置されることはなかった。

さて、造宮職の職制は大別して事務系と技術系とに分けられていた。事務系は他の律令官司同様四等官制がとられ、さらにその下には将領（たんに領とか民領とも）などの下級官吏がいた。いっぽう技術系は大工を長として、以下、少工・長上工・番上工といった階層に分かれていた。延暦十五年（七九六）七月、従五位上物部多芸連建麻呂を造宮大工、外従五位下秦忌寸都岐麻呂を造宮少工となしているのがそれで、大工・少工は事務系における長官（カミ）と次官（スケ）の關係に相当し、建築關係はかれらの指揮により統轄・差配された。このうち造宮大工多芸連建麻呂についていえば、延暦二十二年四月、遣唐使船が難波沖で難破した折、かれが派遣されて修理に当たったこともある。この大工・少工の下に配属され、現場において造宮役夫たちを指導して工事に当たったのが長上工と番上工であった。各職種（たとえば木工・土工・瓦工など）ごとに置かれた技能熟練者で、それぞれの技術指導の責任を負うが、長上工と番上工の違いは勤務状況によるもので、常時出勤する者を長上工（師ともいう）と呼ぶのに対して、番を分けて交替勤務する者を番上工と称した。

ちなみに先の大工多芸連建麻呂は延暦八年（七八九）十一月、長岡京の造宮大工として正六位上から外従五位下に昇叙されている。また少工の秦忌寸都岐麻呂も、のちに木工寮少工・造西寺次官に任じられており、かれらは終始技術系官人のコースを歩んだようである。なお造宮職（省）の規模は明らかでないが、延暦十四年（七九五）五月「造宮使主典以下将領已上一百三十九人」がおのおのの功に従い叙位されたという記事が目安になる。

二 造宮役夫

(1) 番上雇役制

イ 番上雇民 造都事業は、このような造宮機関によって企画・推進されたわけであるが、その前提に造宮役夫の動員＝労働力の編成があったことはいうまでもない。

造宮役夫についての初見は、舒明十一年（六三九）、天皇が百済川のほとりに大寺と大宮とを造営するにあたって西国の民には宮を、東国の民には寺を造らせたとするものである（『日本書紀』）。役夫の徴発は、早い時期は将作監が、時代が降っては造宮職（省）によって行なわれた。このうち百済大寺は皇極天皇代に飛鳥板蓋宮の造営と併行して再建されることになり、造寺には「近江と越の丁」が、造宮には「東は遠江を限り、西は安芸を限り」役夫が従事せられ、造宮役夫の動員範囲は舒明期よりも拡大されている。

造宮における最大の課題は労働力の確保にあるが、こうした造宮役は大宝令において義務づけられ、基本的な労働力は、造宮役夫として諸国から徴発される公民百姓であった。かれらは「雇夫（雇民）」とも呼ばれたように、その動員は雇役、すなわち雑徭のように無償ではなく、食料とともに功稻（功賃）が支給されたが、しかし末端では強制的な割当てによる徴発であったとみられるから、その点では課役と変わりなかったろう。

ちなみに『養老賦役令』で規定されている造宮役民（夫）の徴発について、「古記」（大宝令の注釈書。成立は天平十年前後か）の解釈に従って整理すると、

- (1) 役民（雇夫）は毎年諸国から上番させること、
- (2) 上番方法は均分する（たとえば三千人を雇役すれば三分し、一番に千人を上番させる）こと、
- (3) 差発国の順序は近国の役夫から徴発し、ついで中国・遠国へと範囲を及ぼすこと、

表16 造宮関係年表

年 月 日	差発理由	京・畿内	近 国	中 国	遠国	人 数
延暦10(791) 9.17	平城宮諸門 を長岡宮に 移作		丹波・但馬・播磨 ①美作・備前・②阿 波	越前・③伊 予		不 明
④ 12(793) 6.23	平安宮諸門 の造作		尾張・美濃・若狭 丹波・但馬・播磨 備前・②阿波	越前・越中 備中・備後 ③伊予		不 明
16(797) 3.17	造宮			遠江・駿河 信濃・出雲		20,040人
18(799) 12.8	造宮		伊賀・伊勢・尾張 近江・美濃・若狭 丹波・但馬・播磨 備前・紀伊			不 明
⑤弘仁6(815) 1.21	朝堂院修理		尾張・参河・美濃 但馬・①美作・備前	越前		19,800人

注 国名のわかるものに限って掲出した。①の美作は『延喜式』で始めて近国と見える。②の阿波は『延喜式』では中国、③の伊予は遠国とされる。

④は『拾芥抄』（中巻宮城部）の記載による。

⑤は造宮職廃止後であるが、参考のため掲出した。なお延暦19年10月4日、葛野川修堤のために山城などの諸国より1万人が動員されているが、直接造宮に関わるものでないので除外した。

の三点に要約できる。むしろそのための準備として諸国公民を造宮役夫としてスムーズに供給するための配慮がなされ、各国司にたいしては、計帳の作成に当り各家の貧富・人数・資産などを基準に戸口を九等のランクに分ち、あらかじめ差発次第の原簿を作っておくこと、とくに有技術者については別帳を造り民部省に送ること、なども義務づけられていた。

そこでわたくしは、造宮雇役によるこの徴発を「番上雇役制」と称しているが、もとよりこれがそのまま実施されたというわけではない。

藤原・平城両京造営における動員人数はすでに正史に欠け、恭仁京造営時の天平十三年(七四二)九月、大養徳・河内・摂津・山背の四カ国から役夫五千五百人を徴発したというのが、人数

が記録にあらわれた最初である。比較的その状況がわかる平安造都の場合でも、史料は多くないが、その実態を知る手掛りとして長岡造都時を含めて役夫の徴発状況をまとめたのが、前頁に掲げた表16である。数字は「一番」の動員数を示すものであろう。この時期は正史に欠けるところがあるから、実際にはもっと頻繁に徴発されたと思われるが、それでも平安造都の場合、延暦十六年（七九七）以降に多少の特徴が見出せよう。すなわちこの年三月には遠江・駿河・信濃・出雲などの国より雇夫二万四十人が、同十八年十二月には伊賀・伊勢・尾張など十一ヶ国より役夫（人数不明）が上番させられているが、前者がいずれも中国であるのに対して、後者はすべて近国からの差発である。このことは役夫動員が、それ以前に比べて、より実際的となったことを推測させる。徴発規模の増加傾向とともに、延暦十五年になされた、造宮使の造宮職への改組と対応する事実とみてよいであろう。⁽⁶⁾

なお長岡京の場合、造都开始後まもなくの延暦三年（七八四）七月、三十一万四千人という膨大な役夫を和雇（雇役）しているが、これは以後必要とされる単功の数（延べ人数）であって、一度にこれだけの役夫が動員されたというのではない。ちなみに京内の道路の側溝を造る工事だけでも、一人一日の掘る土量を四尺立方と計算して、延べ三十五万人になるといわれる。ともあれ農閑期といった季節や地域などを考慮しながらかれらを振り分け、順次徴発したのである。

こうした番上雇役制では代役が認められ、代人の身分は家人でも可とされていた。要はあらかじめ見積った人数の確保にあり、そのため、逃亡者でも捜捕後の就役に雇直が支給されるという現象も起こったのである。しかしこうした実役主義の適用は、結果として動員範囲を限定することになった。

すなわち表16から明らかなように、「古記」によれば一般役民について、長岡・平安造都を通じて遠国はなく（但し『延喜式』によれば伊予国は遠国とされる）、すべて中国・近国に限られている。⁽⁷⁾ 地理的条件によるものである

が、そのために役夫所出国（就役国）については租税の減免を図るなどして負担のアンバランスをなくすよう配慮している。⁽⁸⁾ 全国からの動員を建前としながらも遠国を対象外とせざるを得なかったのは、番上雇役制の限界といえよう。

対象外という点では、長岡・平安造都では京・畿内からの差発もみられない。ただし恭仁京造営時のみ天平十三年（七四一）に畿内四カ国（五カ国になるのは七五七年、河内から和泉国が分立して以後のこと）から役夫五千五百人が徴発されており、京・畿内の除外は平安期に入ってからのことと考えられる。このことは第一に、大同三年（八〇八）二月、觀察使藤原緒嗣が、畿内諸国の百姓が困窮しているのは繁多な「臨時の差科」にあると奏言していること（『類聚三代格』）と無関係ではないであろう。たとえば桓武天皇の母高野新笠や同皇后藤原乙牟漏が没した折、左右京・五畿内・近江・丹波国の役夫が山陵造りに徴発されている（人数不明、桓武天皇陵の時には五千五百人）が、こうした臨時課役は大小となく、しばしばあったとみられる。延暦十六年（七九七）六月、諸国の租を免じた折、「虚役之国、不_レ在此限」とことわりながら、畿内については「□接_ニ都下_一、非_レ無_ニ差発_一」として半免措置が講じられている（『類聚国史』）のが、そのことを示している。また同十九年、葛野川の修堤のために畿内や近江・丹波国から一万人が差発されているのも、造都役というより、右にいう臨時差発とみるべきであろう。京・畿内の公民は都に近いことから随時動員され、労働力の臨時的な供給源とされたのであった。本来の造宮役（番上雇役制）から京畿内が除かれたのもそのためで、こうしたあり方は、平安京の都市的發展に応じて比重を増していったと思われる。

□ 客作見役 このように平安期における雇役Ⅱ役夫の動員は近・中国を対象とする番上雇役制と、京畿内からの臨時徴発という二本立てで行なわれる二重構造をとっていた。このうち造宮雇役Ⅱ番上雇役制は延暦二十四年（八〇五）十二月、その推進機関であった造宮職の廃止によって転機を迎えることになる。造都事業が打ち切ら

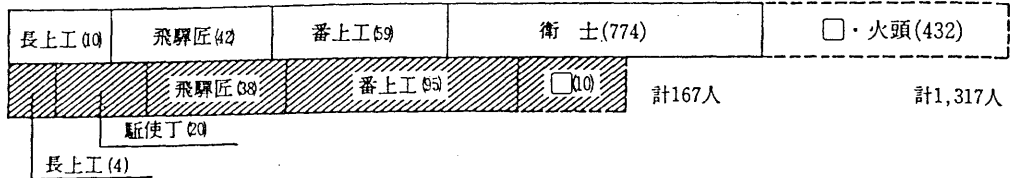
れたからで、おのずから役夫差発の規模も縮小された。もっとも木工寮を中心に内裏や官衙の保守修繕工事はそれまでと同様続けられたから、技術者の飛驒匠とともに、つねになにがしかの労働力は必要であったが、その供給源が、諸国からの番上雇役にかわり、京畿内に求められたことは容易に想像されるところである。大同四年（八〇九）十二月、平城上皇のための居所として平城宮を造作した際、「令_レ畿内諸国、雇_レ工及夫二千五百人、以_レ造_二平城宮_一也」（『日本紀略』）とみえるのもそれで、かれらは請負（契約）工夫であったとみてよい。ちなみに唐代長安の場合、「築_二京師羅郭_一、和_二雇京城戸_一、丁一万三千人、築_二興慶宮牆_一、起_二樓觀_一」（『玄宗本紀』天宝十二載冬十月）とみえ、早くから造営工事における労働力が都市民に依存していたことが知られる。膨大な人口を擁した中国の都城と同一視することは出来ないが、わが国でも同様の傾向がみられたことに注意したい。

客作児役と称する課役がそれである。客作児とは聞きなれない言葉であるが、和語では「つくのひびと」といい、「償（つぐの）う人」の転化したもので、雇役労働者のことを意味し、専属工に対する請負工について用いられている。語源は中国にあり、わが国では当初ハイカラ語として使用されたようだ。それが九世紀に入って雇役が一般化し、従来の無償労働も雇役でまかなわれるという傾向の中で、新たに客作児役なる上道雇役が公民百姓に賦課されていた。いわば番上雇役制の再生版である。

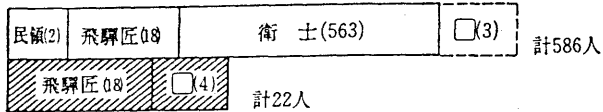
この客作児役が留意されるのは、実役を原則とした従来の雇役制に代納法を取り入れたところにあり、その結果、地域的な片寄りがなくなったことである。功稲（功賃）分を代納させることにより事実上対象外であった遠国にも雇役を義務づけることができるようになった。これは実質、雇役制の拡大といってよい。ただしその反面、実役はますます京畿内に重点がうつり、地域の狭小化・限定化が進むことになるが、代役と実役の組み合わせにより雇役を全国的に拡大したことの意味は大きいといわねばならない。そしてこれ以後、この客作児役を中心に

四章 造宮官と造宮役夫

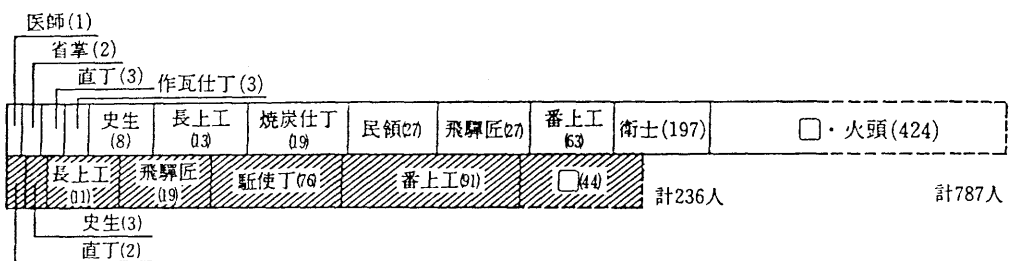
甲賀宮 (4月)



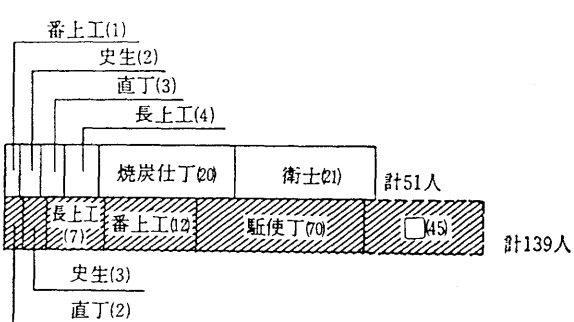
甲賀宮 (10月)



奈良宮 (10月)



恭仁宮 (4月)



() は人数
 □ は造宮省組織
 ▨ は木工寮組織

表17 天平17年甲賀・奈良・恭仁宮の造宮に徴発された労働力 (福山敏男『日本建築史の研究』を参考に作成)

さまざまな律令負担が国司によって便乗付加され、いわゆる臨時雑役へと発展していく。造宮職廃止後の十世紀における造宮役もその主要な一つであった。内裏は天徳四年（九六〇）の焼亡を皮切りに以後たびたび罹災し、そのつど再建されたが、その工事のための課役が造内裏役（料）・臨時雑役の名で賦課されたのである。

ハ 豪族の協力 さて、話を番上雇役制に戻すと、こうした諸国番上雇民が工事の下部労働力（単純作業）の中核となったが、それを補助する役を果した労働力についても述べておこう。奈良時代の造宮役には多数の仕丁や衛士も駆使された（表17参照）。なお保良宮の場合、造営時に近江国の兵士が徴発されているのが留意される。というのは時代は遡るが、斉明四年（六五八）有間皇子の謀反が発覚した折、皇子の家を取り囲んだのが物部朴井連鮪に率いられた造宮丁であったことが想起されるからである。壬申の乱の発端が天智陵を造営するための役夫動員がきっかけとなったことも、合わせ考えられよう。役夫が武器を取ればそのまま兵士に転じたわけで、保良宮の場合はその逆であったということになる。

優婆塞・優婆夷の参加も見逃がせない。天平十二年（七四〇）恭仁京造営の一環として賀世山の東河に橋をかける工事に使役されたもので、畿内および諸国の優婆塞ら七百五十人に報酬として得度が許されている。これには行基の関与が想定される。同十七年木工寮から提出された書類の中に「出家番上工」とあるのも同様の意味で留意される。

ところでこうした優婆塞らの動員が恭仁京にはじまり、恭仁京造営において典型的に認められるのは、聖武による大仏鑄造事業が、いわば天下に呼びかけて知識結を求めたことによるものと思われる。これについては「聖武天皇の『彷徨五年』^{（9）}」で論じた通りであるが、他の造都時にはみられないものであったと考える。それに対して、平安造都の折のみに知られる特徴として、貴族官人から進められた役夫がある。延暦十二年（七九三）三月、宮城造営のために五位および諸司主典以上に命じたものであるが、むろん課役に従ったのはかれらの家人や雑色

たちであった。こうした例はのち大同三年（八〇八）、防水のため葛野川を修堤した時（六月・七月）にもみられるが、いずれも時期が造都の開始や停止の直後であったことを考えると、臨時的・便宜的な措置とみられ、あくまでも補助的な労働力にすぎない。

補助的労働力といえ、地方豪族からの役夫貢進も留意される。先にみた恭仁京造営における行基の関与——行基に率いられた優婆塞らの参加は、大仏鑄造にむけて聖武の提唱した知識結の行為にほかならなかった。また天平十四年（七四二）八月、秦忌寸嶋麻呂が恭仁の宮城の垣を造った功で正八位下より一挙に従四位下に叙せられ、あわせて太秦公の姓を与えられているのも、一種の知識結で、地方豪族の財力や労力の貢進は、こののち長岡・平安造都でもみられるようになる。しかしこうした造都における個人的・私的協力はどの時代にもみられるといったものではなく、先述したように恭仁京ではじめて採用された方式であった。

なお豪族のうち秦氏の協力は恭仁京や長岡京に比し、平安造都の場合、冷却したとみられる。造都事業における豪族の役割は、あくまでも部分的・補助的なものであって、過大評価は慎まねばならない。

(2) 諸国匠丁

一般役夫と同様、諸国に存する技術者もまた匠丁として動員され、一番・二番あるいは上番・下番というように番をなして上道し、造営に従った。天平二年（七三〇）の尾張国正税帳の雑用支出に「二番匠丁粮料」の項目が記載されているのをはじめ、出雲国からは「下番匠丁并粮代」が、また但馬国では匠丁十二人の食料として「番匠丁粮米」が貢上されている。

なかでも天平五年の出雲国計会帳⁽¹⁰⁾によると毎月のように課役民が中央へ進上され、仕丁・衛士の死去・逃亡を含めて、代替人の送付が迅速に行なわれた事実を知る。出雲国に限らず、とくに匠丁については国司があらかじ

めチェックし、こうした事態に対処していたのであった（前述）。現存する国衙の戸籍・計帳に、年齢・特徴に加えて「正丁・工」などと付筆されているのがそれで、たとえば神龜三年（七二六）の山城国愛宕郡雲下里計帳^{（11）}には、戸主少初位上出雲臣深嶋について「年肆拾伍歳、正丁、造宮省工、右手於灸」と記されている。こうした原簿に基づいて作成された、いわゆる匠丁帳が民部省へ送られたが、それが天平五年の出雲国では二巻二紙にも及んでいたという。このとき進上された公文七巻四紙に含まれていたものであるが、その折の運調脚帳は一巻であった。多数の匠丁が役夫にまじって故郷と都との間を往來したことであろう。

こうした諸国上道匠丁の特殊形態ともいえるのが、飛驒国より貢進された「飛驒工」で、一年の役限であるところから「年貢匠丁」などとも称されていた。『養老賦役令』によると里ごとに八人の匠丁と二人の廝丁（炊事夫）の計十人が差点されることになっている。飛驒国が十三郷であったところから、百三十人（匠丁百四人、その廝丁二十六人）が一年の貢進人数であったと推定されているが、造宮職の廃止されたのち、すなわち九世紀初頭に定員百人となり、その後さらに六十人に減少されたようだ。

ところで貞観十八年（八七六）に大極殿が焼亡し、その木作始めとして翌年八省院で饗宴が催された際、これに預った技術者の顔ぶれに、番上工六十人、飛驒工六十人のほか、「雇工八十人」とあり、雇工が最大数を占めているのが留意される。彼らは諸国上番匠丁ではなく都市近辺の雇傭労働工とみられるが、右に述べた飛驒国からの年貢数の減員も都市における雇工の出現と無関係ではなかった。しかしこの貞観十八年から六年間、朝堂院や神泉苑の造営にあたった飛驒工の動員数はもとの百名にもどされており、彼らの保有する技術の特殊性あるいはその指導的役割が留意されるとともに、律令体制が飛驒工制の中にもっとも長く、かつ根強く残存したことが注目される。

『今昔物語』（巻二四）に、飛驒工の建てた豊楽院は微妙なるべしと記されているが、山国の飛驒ではおのずか

ら木工技術が発達し、伝統技術が芸術としても保存されていたのである。中世に入って「番匠」と称された人びとは、諸国匠丁やこうした飛驒工たちであった。

(3) 工 部

造営におけるこのような技術者に関して一言しておかねばならないのが、木工寮に付属する工部についてである。

『養老職員令』によると工部とは木工寮での直接の技術部門を担当するグループの総称で、二十人（『延喜式』では五十人）が規定されている。これは他の官司における伴部に相当する組織と考えられるが、伴部が大化前代の部民に系譜をひく一種の職業集団であったのになんとして、工部は大いに性格を異にするものであった。というのは工部の出自・供給源については「雑色白丁に限らず、工を知る者を取りて充つ」（『令義解』）と説明され、「貴賤を限らず、工を知る人を充て考を得よ」（『古記』）、「雑戸にあらざるを知るべき也」（『跡』）などと解釈されているように、品部・雑戸にとらわれず、広く一般公民の有技術者から人材を登用したからである。個人の才技を重視し位階昇進の道を開放したという点で、また旧来の技術世襲の伝統にとらわれずその供給基盤を全国に拡大したという点でも、律令独自の新組織であったといえよう。

八世紀になると木工官人の大部分は、木工とは関係のなかった氏族の出身者で占められるが、そのなかになお、雄略天皇代に才技を誇った猪名部御田の後裔や将作大匠として飛鳥時代の造宮工事を推進した渡来人系の氏族名がみえる。数名にすぎないが、それでもかつての木工部民がいぜんとして工匠集団の中で役割をもちつづけている点が留意されるのである。猪名部については藤原仲麻呂の資人や地方官にもその名が確かめられ、工部の一員として伝統技術を保有し身分が固定されていく一方では、世襲身分から解放され一般官人の中に同化していく傾

向も見逃せない。

また一般氏族では、むしろ技術者であるがゆえに譜代化していく家も多かった。石川氏はその典型で、斉衡元年（八五四）木工寮中で頓死した木工頭石川長津は、やはりかつて木工頭を務め造宮亮をも兼任したことのある河主の子であった。性工巧を能くして工官を歴任した人物で、先父の貯蔵する文書数千巻を一舎に秘蔵して他人に借したことがなかったというが（『文徳実録』）、その相伝文書の中にはおそらく宮城の指図なども含まれていたことであろう。

(4) 待 遇

造宮工事についての具体的状況は十分わからない。しかし飛驒工を含めて工匠役夫の労働条件は大差なかったと思われるので、『養老賦役令』（雇役丁条以下）を中心に、知られる労働状況を記しておこう。

イ 功食料 毎年諸国から送られてくる庸で充当されるのが原則。食料は人別に黒米二升・塩二勺を支給されるのが通例であり、貞観十二年（八七〇）には米塩のほか、醃・魚・和布などが加給され、待遇がやや改善された。ただし番上雇民以外の補助労働者については、仕事の軽重、所属官司の別などによって支給方法に若干のちがいはあったようだ。また功賃は、奈良時代では匠丁と一般役夫とはほとんど大差なく、その差は平安時代に入ると顕著になったと思われる。なお飛驒工については四月と十月に時服が与えられ、また確証はないが功賃も支給されたと思われる。いっぽう帰郷に際して匠丁には米一升・塩一勺が路粮として与えられた。一般役夫へも支給されるようになったのは平安期のことである。その時期は上役の日に公粮が、また還国の日に功食が与えられたようである。

ロ 労働条件 上番するにあたって、匠丁は工作道具を自備し、十人を単位に炊事夫一人が与えられた（飛驒工は

四人に一人の割合)。造作は原則として昼に行なわれ、六・七月に限っては正午から午後二時ごろまでの休息が許された。もっとも病氣や雨などで仕事のできない日は半食である。また一番の勤務日数は要月では三十日以内、閑月の場合でも五十日以内とされ、希望者には引きつづいて就役が認められた(飛驒工は一年交替)。なお匠丁は調庸が免除されていて、平安期になると彼らにならって飛驒工・一般役夫についても課役が免除されるようになる。しかし逃亡は絶えず、捜捕後は雇直を与えられ再び就役させられた。

ハ その他 道中往来に関すること、死亡した場合、などの規定が詳細に記されている。

郷国を離れて上番した彼らは、都ではおそらく出身国別に集住させられ、そこから作業場に通ったことであろう。それが労苦に満ちたものであったことは、延暦二十四年(八〇五)十二月の徳政相論で、「方今天下の苦しむ所は軍事と造作となり。この兩事を停むれば百姓安んぜん」との藤原緒嗣の意見を受け入れ、桓武天皇が二十年にわたる造都工事に終止符を打ったことにもうかがえよう。

(1) 造宮機関については井上薫「造宮省と造京司」(『日本古代の政治と宗教』所収)、岩本次郎「平城京の造宮経過について——特に官司機構を中心として——」(『大和文化研究』8-1)、亀田隆之「造宮省」(『日本古代制度史論』所収)、今泉隆雄「八世紀造宮官司考」(『文化財論叢』所収)などがある。

(2) この造宮省の一部局として同じく和銅元年(七〇八)九月に造平城京司が任命されているのも京城を擁する都城時代になったことを示している。

(3) この問題に関しては二章「歴代遷宮——藤原京以後における——」を参照。

(4) 三章「『山背』遷都と和氣清麻呂」。

(5) 井上薫、註(1)前掲論文。

(6) 『山背』遷都と和氣清麻呂(三章)参照。

(7) 役夫徴発について、原則として遠国も後番に割り当てられていたが、これは一般役民には適用されなかったようだ。もっとも天平十年(七三六)に進上された筑後国正税帳(『寧楽遺文』上)には匠丁の名がみえているから、技術者に関し

ては適用実施されていたと考えられる。

- (8) 延暦十六年(七九七)に「虚役之国不_レ在此限」(『類聚国史』)とされたのも役夫個人に対する課役免除の形がしだいに整備され、こうした所出国に対する控除措置が講じられるようになった結果と思われる。ちなみに造宮職廃止後の免除例は「諸国の半租を免ず」というのがほとんどで、それは役夫所出国、虚役国とは関係のない、半ば形骸化したものであった。

- (9) 本書第一部二章。

- (10) 『寧楽遺文』上。

- (11) 『寧楽遺文』上。

五章 高野新笠と大枝賜姓

はじめに

光仁天皇の夫人高野新笠は、光仁の即位以前、白壁王の時代にその妃となり、桓武天皇・早良親王らをもうけた女性であるが、平安初期政治史の上でとくにその存在が重視されるのは、長岡遷都とのかかわりにおいてである。

周知の通り長岡遷（造）都は、桓武天皇によって延暦三年（七八四）に行なわれている。「甲子革命」の年に当たっていただけでなく、日次もまた、当初予定の十一月一日が十九年に一度というめでたい「朔旦冬至」に当っており（実際の遷都は十一月十一日であった）、遷都にこめられた当事者の思いがうかがわれる。遷都がまさしく天下草創の事業にはかならなかったからである。しかも平城京から長岡京へのこの遷都は、長らく続いた大和宮都の歴史に終わりを告げた、いわば「山背」遷都であった点でも、その歴史的な意義はきわめて大きなものがあった。

この長岡遷都をめぐるのは、延暦元年四月に詔を下して「今者宮室堪_レ居」うといい、造宮省を廃止しながら、早くも二年後に長岡へ遷都したのはなぜか、といったことをはじめ、造都事業と秦氏との関係、わずか十年で棄都された理由など、未解決というか十分明らかになっていない問題が少なくない。しかしわたくしがここで取

り上げたいのは、遷都の前提として、桓武と長岡にほど近い大枝の地とのかかわりを重視する説についてである。⁽¹⁾
すなわち桓武天皇の母高野新笠の実家は大枝にあり、天皇自身、そこで生まれ育ったことが長岡遷都の背景にあったというものである。

この説の根拠は、延暦九年（七九〇）十二月、高野新笠の没後、桓武が新笠の母、したがって桓武天皇にとっては外祖母・土師真妹に対して大枝朝臣の氏姓が与えられたという事実にある。そして一般に賜姓は居住地名によることから、大枝と賜姓されたのは、真妹とその一族の土師氏が大枝の地に住んでいたからであると理解し、その上で、

①新笠の陵墓が大枝に営まれたのも、そこが生まれ故郷だったからである、

②当時は夫婦別居であり、生まれた子供は母親の下で育てられるのが慣例であったから、桓武も母の実家大枝で育ったに違いない、

とみるわけである。この推論が正しければ、桓武天皇は大枝に近い長岡の地に関する予備知識をもっていたであろうから、それが長岡遷都の誘因になったことは十分考えられるところである。しかし右の事実からわかるように、桓武が年少時代、大枝の地で生まれ育ったというのはあくまでも推測にすぎず、その論拠となっている大枝賜姓の理解いかんでは、この説は瓦解する可能性がある。

事実、少数ながら、こうした考え方を否定する意見も以前からあった。⁽²⁾それは新笠の母土師真妹の墓が大和国平群郡にあった（『延喜式』）ことから、真妹は大和国の在住者であったとみるべきであり、したがってその真妹に大枝が賜姓されたのは別の理由、すなわち新笠の陵墓名（大枝山陵）——陵墓の所在地名にちなむものだ、とする理解である。この意見に従えば、真妹一族の土師氏はもとより、新笠や桓武天皇も大枝とのかかわりは直接的にはなかったことになる。

はたしてどちらの説が正しいのか、そのことは、土師真妹の大枝改（賜）姓をあらためて検討することにより、おのずから明らかとなるであろう。そしてこのことの検討は、奈良末期から平安初期にかけて盛行した改賜姓の理解に一つのデーターを提供することにもなる。

一 土師氏の大枝賜姓

桓武天皇の母、高野新笠は和乙継を父、土師真妹を母として生まれている。父方の和氏は『新撰姓氏録』に、「和朝臣、百済国の都慕王の十八世孫、武寧王自り出づ」と記すように、百済系の渡来氏族であり、武烈天皇の時に「帰化」したという（『日本書紀』）。和（倭）氏を名のるようになった時期は不明であるが、一族が大和国城下郡大和郷に住んでいたことによるものであろう。⁽³⁾

一方、母方の土師氏は『新撰姓氏録』に、「土師宿禰、天穗日命の十二世孫可美乾飯根命の後なり。光仁天皇の天応元年中に、土師を改めて菅原の氏を賜ふ。勅有りて改めて大枝朝臣の姓を賜ひき」とあり、神別氏族に分類されている。土師氏は喪葬儀礼や山陵造りなどに従事した氏族である。なお、右の引用文中「光仁天皇の天応元年中」とあるのは、正確に言えば桓武天皇即位直後の天応元年六月のことである。

こうした出自の新笠が白壁王（のちの光仁天皇）と結婚した経緯や時期については不詳であるが、右にいう土師氏（の一部）の改姓が、光仁天皇の夫人となり桓武天皇の母となった新笠の縁によるものであったことはいうまでもない。

さて、土師真妹の大枝への賜姓に関して桓武天皇は、詔を二度下している。

一度目は延暦九年（七九〇）十二月一日で、『続日本紀』には次のように記されている。

詔曰、春秋之義、祖以子貴、此則礼経之垂典、帝王之恒範、朕君臨寓内二十有年於茲、追尊之道、猶有闕

如^レ、興言念^レ之、深以懼焉、宜^下朕外祖父高野朝臣、外祖母土師宿禰、並追^レ贈正一位、其改^ニ土師氏^一為^中大枝朝臣^一、夫先秩^ニ九族^一、事彰^ニ常典^一、自^レ近及^レ遠、義存^ニ襲籍^一、亦宜^ニ菅原真仲、土師菅麻呂等同為^ニ大枝朝臣^一矣、

すなわち天皇は、いずれもすでに没していた外祖父高野朝臣こと(4)和乙繼と外祖母土師真妹に正一位を追贈し、ことに真妹には「大枝朝臣」の姓を与えたというものである。この時には、あわせて菅原真仲と土師菅麻呂にも同じく「大枝朝臣」を賜姓している。もっともこのうち菅原姓(真仲)については九年前、天応元年(七八一)六月に土師からの改姓が認められていた。それが重ねて大枝を賜姓されているわけで、兩名の真妹ないし新笠との深い関係が推測される。これについてはあらためて後述しよう。

二度目も同年同月の三十日である。

勅^ニ外従五位下菅原宿禰道長、秋篠宿禰安人等^一、並賜^ニ姓朝臣^一、又正六位上土師宿禰諸士等賜^ニ姓大枝朝臣^一、其土師氏摠有^ニ四腹^一、中宮母家者是毛受腹也、故毛受腹者賜^ニ大枝朝臣^一、自余三腹者、或從^ニ秋篠朝臣^一、或屬^ニ

菅原朝臣^一矣、

(『統日本紀』)

日付からいって先の勅命と一連の措置とによってよいが、この時は菅原宿禰道長と秋篠宿禰安人らに対して「朝臣」の姓を与え、土師宿禰諸士らには「大枝朝臣」という氏姓を与えた上で、

①土師氏は四腹——四つの支族に分かれ、高野新笠の生まれた土師氏は毛受系統であること、

②この毛受系の土師氏が大枝朝臣を称し、他の三腹は適宜、秋篠朝臣と菅原朝臣をとなえよ、

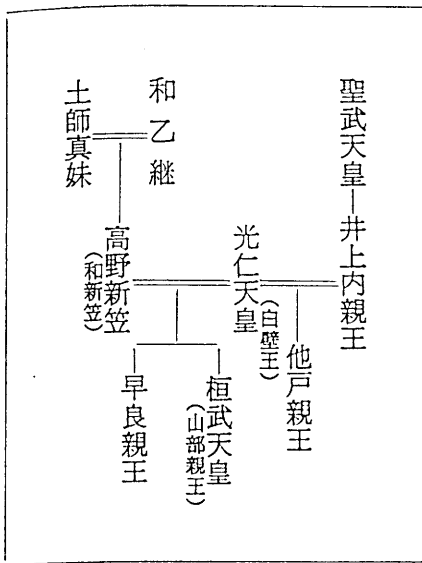


図12 桓武天皇略系図

と述べたものである。ここで問題になっている毛受腹とは、和泉の百舌鳥地方（大阪府堺市）を本拠とする土師氏グループと考えられているが、⁽⁵⁾桓武が大枝賜姓を一カ月に二度も行なったのはよほどの理由があつてのことであらう。

そこであらためて二つの詔を検討してみるに、ここでの一連の措置から桓武の真意が、中宮母家——毛受系統の格上げにあつたことは明らかであらう。それというのも、大枝の改賜姓はここに至るまで、土師氏の中ではもっとも遅かつたからである。もっとも姓の格式という点では、あと述べるように毛受腹に先んじて賜姓された菅原・秋篠が、ともに土師氏時代の宿禰姓のままであつたのに比し、大枝の方が宿禰よりも上位の朝臣姓を与えられており、時期は遅かつたものの、大枝賜姓は、格式の高いものであつたことがわかる。天皇との深いかかわりがその理由であつたことはいうまでもない。ちなみに外祖父和氏も旧姓は史であつたが、延暦二年四月に和史国守ら三十五人が朝臣の姓を賜わつていた（『続日本紀』）。外祖母土師真妹の大枝朝臣は外祖父家の姓に似合うものとして与えられたのであらう。

それはともかく土師氏が始めて改賜姓を許されたのは、先に引用した『新撰姓氏録』にもあつたように、桓武天皇即位直後の天応元年（七八二）六月二十五日のことである。『続日本紀』によれば遠江介従五位下土師宿禰古人・散位外従五位下土師宿禰道長ら十五人が奏上し、吉凶両儀に預つていた「祖業」が、近頃は凶儀に限られてきたことを述べ、それは本意でないとして、「望請、因_二居地名_一改_二土師_一以為_二菅原姓_一」と申請、その結果菅原姓が与えられている。⁽⁶⁾菅原の地は、いまも菅原寺（喜光寺）のある平城京右京三条二坊のあたりと考えられる。ついで翌延暦元年五月二十一日には少内記正八位上土師宿禰安人が、先の古人の例を取り上げ、「前年因_二居地名_一改_二姓菅原_一、当時安人任在_二遠国_一、不_レ及_レ預_レ列、望請、土師之字改為_二秋篠_一」と申請して、安人ら兄弟男女六人が秋篠に改姓されている。この改姓も、安人らの居住地の名（秋篠寺のある平城京右京北の地）にちなむ

ものであったことはいうまでもないであろう。

このような土師氏一族の菅原・秋篠への改姓の背後には、社会関係の変化にともなう「祖業」（氏族の職掌）の変質があり、それを口実に、いわば氏族の体質改善をはかろうとする意図がこめられていたことに留意する必要があるが、それとともに注目されるのは、申請の時期が桓武の即位直後であったという点で、これは土師氏一族の女性（高野新笠）を母とする天皇の即位にあやかろうとしたものであることを示している。ところが、そうであればなおさらはやくに賜姓されてよいはずなのに、毛受腹土師氏には、不思議なことに延暦九年まで改姓の動きもなければ、その恩典に浴した形跡もない。おそらくそれは、同じ一族でも菅原系や秋篠系に比して毛受腹系統が弱小であったからに違いない。

その毛受腹土師氏に対する格上げがはじめてなされたのが、先にみた延暦九年の二度の措置であった。しかし他の土師氏―菅原や秋篠が、自ら申請して改姓を願ったのに対して、毛受腹土師氏の場合、一族からの申請があったとは思えない。第一、真妹はすでに没しており、二度目の詔による賜姓も、申請した気配はない。大枝賜姓はすべて桓武の配慮によるものとみてよく、その点、他の場合と異なり、いわば上からの改（賜）姓であったのが留意されるところである。

二 和氏譜の撰上

毛受腹土師の改姓に関連してわたくしは、『和氏譜』が和氣清麻呂によって撰上されたことに注目したい。『日本後紀』延暦十八年（七九九）二月二十一日条の和氣清麻呂薨伝に、「奉_ニ中宮教_一、撰_ニ和氏譜_一奏_レ之、帝甚善_レ之」と所見する。

すなわちこの記事によれば、『和氏譜』の撰述は、清麻呂が中宮こと高野新笠の「教」（教命・教令）に従っ

たものであり、その奏上を受けた天皇は大いに善しとして嘉納したことが知られる。この『和氏譜』については、これを「和氣」氏の系譜とする意見もあるが、⁽⁷⁾「中宮の教令」による撰上というのであるから和氣氏とは考えがたく、中宮新笠の父方、文字通り「和」氏の系譜とみるべきであろう。またそれを受けた「帝」についても、高野新笠との関係からか、夫の光仁天皇とみる理⁽⁸⁾解があるが、疑問がある。『和氏譜』をみて喜ぶのは、これを外祖父とする桓武天皇と考えるのが自然であろう。

ところで新笠は何のために『和氏譜』の撰上を、それも他氏族の清麻呂に命じたのであろうか。わたくしは、そこに大枝賜姓を理解する鍵がこめられているとみたい。

先に述べたように新笠の父Ⅱ桓武の外祖父は百済系の渡来氏族であり、はやく和朝臣を賜姓されていた。ところが外祖母土師氏の方は、これまで再三指摘したように、いくどとなく機会がありながら、その動きは全くなかった。延暦九年（七九〇）、新笠の母、土師真妹に追贈という形をとって行なったのが最初である。それほどまでに新笠系、とくに母方土師一族の家格が低かったのであろう。そのように考えると、新笠の命による『和氏譜』——外祖父家の系譜の撰上は、それを見るもの（天皇）に、これまで外祖母（家）に対する扱いが不十分であることを喚起させるためではなかったか、という理解が出来るのではなからうか。

果せるかな桓武は、前掲の延暦九年十二月一日、最初の詔の冒頭で、

春秋之義、祖以_レ子貴、此則礼経之垂典、帝王之恒範、朕君_ニ臨寓内二十_ニ年於茲_ニ、追尊_ニ之道、猶有_ニ闕如_ニ、興言念_レ之、深以懼焉

と述べ、先祖追尊に礼を欠いたことを深く反省し、外祖父和（高野）乙繼・外祖母土師真妹に正一位を追贈し、ことに真妹には大枝朝臣を賜姓したのであった。外祖母の扱いに比重が置かれていたことが、これからも知られよう。

そしてこの詔にみる文言は、『和氏譜』撰上にこめられた新笠の思いに素直に応えたものであったと考える。その意味で『和氏譜』の撰上は、さっそくその効果をあらわしたといえるであろう——新笠の意図した通りに。

もっとも、この家譜がいつ完成したのかについてはわからない。出来上った家譜の奏上が、そのことを直接命じた中宮新笠に対してでなく、「帝」＝桓武であったのは、その時点で中宮新笠がすでに亡くなっていたことを暗示する。そう思うのは、真妹一族に大枝朝臣が賜姓された背景に、この中宮新笠、つまり桓武の母の死が深くかわっているように思われるからである。というより新笠の死が、家譜撰上の効力をより増大させたのである。すなわち桓武は延暦八年十二月二十九日に没した新笠に対して、翌日、皇太后を追贈し、大枝山陵に葬っているが、一族に大枝朝臣が与えられたのはそれから丁度一年後、延暦九年十二月のことであった。この事実、桓武天皇による大枝賜姓が亡母の一周忌を意識してなされた措置であったことを物語っている。その前月（十一月）、桓武天皇は翌年の賀正の礼の停止を命じ、また新嘗祭も神祇官で行なわせているが、こうした配慮も、新笠の一周忌と無関係ではないであろう。また延暦九年正月、清麻呂は藤原小黒麻呂らとともに新笠の周忌御斎会司に任じられているが、これも清麻呂が新笠の中宮大夫（延暦七年二月任）であったことによるものであろう。清麻呂が和氏家譜の撰述に関与したのも、こうした関係によるものであったとみられるが、さらに憶測をたくましくすれば、この『和氏譜』の撰述そのものが、清麻呂の進言によるものではなかったろうか。

このようにみてくると、真妹（の属した土師氏）が大枝に住んでいたことを直接示す材料は皆無といってよい。となると、大枝朝臣への改賜姓は、別の理由によるものとみななければならない。その際考えられるのは、墓地の所在地にかかわるものとするものである。すなわち『延喜諸陵寮式』に次のような記載がみえる。

牧野墓

太皇太后之先和氏、在大和国広瀬郡、兆城東西三町、南北五町、守戸一畑、

大野墓

太皇太后之先大枝氏、在大和国平群郡、兆城東西六町、南北四町、守戸一畑、

これによれば真妹の墓（大野墓）だけでなく、和乙継の墓（牧野墓）も同じく大和国にあった。真妹・新笠母子の生活圏は大和にあったとみるべきである（しかも真妹は長岡遷都以前に没している）。つぎに、改賜姓は一般的にいつて居地名にちなんで行なわれるが、当事者（土師真妹）がすでに没しており、しかも本人の申請によらず上からの賜姓という特殊な場合、居地に限定することはなかったろうことである。現にこの時、菅原真仲にも大枝朝臣が与えられているが、この真仲は先に土師氏から菅原に改姓されたばかりの菅原古人の弟であり（『菅原氏系図』）、大枝を居地としていたとは考えがたい。また延暦十五年（七九六）七月、右京に貫付された大和国・大枝朝臣長人・河内国・大枝朝臣氏麻呂らの大枝への改姓（『日本後紀』）も新笠の縁によるものであり、かれらが大枝の住人であったからではないであろう。

このようにみてくると、故真妹の大枝への改姓は自身の居地（であったから）ではなく、娘新笠の眠る大枝山陵の名（つまりは山陵のある地名）にちなむものであったことは、まず間違いないところである。陵墓の所在地を死後の居所とみれば、居所にちなむという改賜姓の原則に乖離するものでなかったといういい方も出来よう。いずれにしても毛受腹が、土師氏の中の傍流でしかなかったことから、新笠にちなむ大枝を与えることで、真妹系統——毛受腹が格上げされたというのが大枝賜姓の真相であったと思う。桓武はそれを新笠顕彰の一環として行ったのである。

三 高野天皇と高野新笠

陵墓の所在地に関連して留意されるのが高野新笠という名である。新笠が和氏という本姓をもちながら高野朝臣を賜姓された事情は明らかでない。ただその時期について、新笠の薨伝（延暦八年十二月二十九日条）に「宝龜年中改姓為高野朝臣」と記すだけである。『続日本紀』にはそれに対応する記載はない。

しかし宝亀といえ、称徳女帝が没し（神護景雲四年八月四日）、光仁天皇即位の日（十月一日）に神護景雲を改めた年号である。また『続日本紀』同年八月十七日条に「葬_三高野天皇於大和国添下郡佐貴郷高野山陵」とみえるように、称徳女帝の葬られたのが高野山陵であった。そこから孝謙（称徳）女帝は高野天皇とも称されたことは、知られる通りである。⁽⁹⁾史料の上で称徳（高野天皇）と（高野）新笠の関係を確かめることは出来ないが、元来、天皇や皇太子にかかわる名前は忌避され、改名・改字されるのが原則であったのに、新笠の場合は、むしろ逆に称徳にちなむ名に改姓されている。これは両者の間によほど強い関係があったからとしか考えがたいが、そのことを思わせる材料が一、二存する。

すなわち『続日本紀』によれば、称徳女帝崩御五日後の八月九日、「授_三正五位下豊野真人出雲従四位下、従五位上豊野真人奄智正五位下、従五位下豊野真人五十戸従五位上、以_三其父故式部卿従二位鈴鹿王旧宅_二為_三山陵_一故也」とあり、鈴鹿王（長屋王の弟）の子、豊野真人出雲ら三人が叙位されている。これは父である故鈴鹿王の旧宅地が没収されたことによるが、その没収地——鈴鹿王の旧宅地に営まれた山陵というのが高野天皇陵であった。つぎに宝亀五年（七七四）「西大寺大和京北三条班田図」には、宝亀三年、添下郡郡司大領外正六位下和連家主が京北四条を校田したことがみえる。これによれば、新笠が高野朝臣を賜姓された頃、高野山陵のある添下郡の大領（郡司）であったのが和連家主、すなわち新笠の父方の一族であった。⁽¹⁰⁾

管見によれば事例はこの二つだけであるが、こうした事実からわたくしは、山部親王こと桓武の立太子とのかかりで新笠の高野賜姓があったのではないかと考えてみたい。

光仁天皇の皇太子他戸親王については、その立太子に先立ち、母親である井上内親王の立后が行なわれている。⁽¹¹⁾前稿で述べたように、これは他戸の立太子を確実に実現するためにとられた措置であった。基王を亡くしたあと光明子が立后したのも同じ理由によるが、井上内親王の場合、光明子と違って皇親であったから、立后には何の

支障もなかったし、また現に他戸親王が存在していただけに、より現実的な手段であったといえる。もっとも他戸の場合、このことが却って命取りになってしまふのだが。

ところが他戸廃太子のあと、擁立をもくろまれた山部親王の場合、光仁天皇の第一皇子であるという以外、立太子を有利にする条件は何ひとつなかった。とりわけ母新笠の家格の低さは、立太子さえ否定されかねない不利な条件であったに違いない。現に光仁の第三皇子、尾張女王所生の稗田親王は他戸よりも年長で、血統からいえば山部よりは有利であったとみられる。そこで、称徳女帝が一族のかかわる高野山陵に葬られたこともあって、新笠に高野朝臣を賜姓し、孝謙（称徳）に連なる立場を取らせたのではなかったか。宝亀年間の賜姓は、光仁天皇が夫人である新笠に賜姓したということであり、天皇から妻へというきわめて希有な賜姓の例といえよう。それだけに作威的なものを感じさせるが、それも要は、新笠の改賜姓が山部親王（桓武天皇）の立太子を正当化するための措置、すなわち桓武が母新笠を介して聖武皇統に連なるための擬制的措置であったからだと思う。かつて仲麻呂時代、大炊王（淳仁天皇）が聖武の皇太子とされ、その権威づけがはかられたことが想起されよう。桓武天皇自身、即位当初、聖武系皇統の意識を自覚していたが、その背景に、おそらくこうした高野賜姓という政治的事情があったように思われる。むろん以上はあくまでも推測にすぎないが、その可能性は十分あると考える。

四 大枝山陵

改賜姓に関連することとして、新笠が大枝に葬られた背景についてもふれておきたい。

新笠の陵墓については『延喜諸陵寮式』に、「兆域東一町一段、西九段、南二町、北三町、守戸五烟」と記す。こんにち沓掛町伊勢講山の山頂にあるのがそれであるという。もっともここに比定されたのは明治十三年（一八八〇）のことで、江戸時代には老ノ坂にある酒吞童子首塚が⁽¹³⁾大枝陵と称されていたようである。

この大枝陵は、当時の都、長岡京の北部——嚴密に言えば北西部に位置するが、北といえは延暦七年（七八八）五月に没した桓武天皇夫人藤原旅子も長岡京のすぐ北に葬られている。いま兒子神社の近くにある宇波多陵（円墳）がそれで、同じく『延喜諸陵寮式』によれば、「兆域東西四町、南一町、北三町、守戸五烟」とある。もともと江戸時代の『山城名跡巡行志』には「芋波多陵、所不詳、式云贈皇太后藤原氏在山城国乙訓郡、小畑河側六十歩計路傍南在大塚、是其陵歟、此辺惣シテ塚多シ、依テ難決」とあるから、いつしかその場所もわからなくなっていたのであろう。現在地に比定されたのは、これも明治十三年のことである。

こうしてみると、新笠が大枝に葬られたのはそれまでの慣例に従ったまでのことで、この地に格別の因縁があったからではない。奈良時代、聖武天皇や光明皇后の陵墓、先の孝謙天皇の高野山陵などが営まれたのも平城京の北である。しかも長岡京の北、大枝の近辺にある塚原という村落は、その名の通り古墳時代以来墓所という性格をもっていた。平安京の場合でも北や西北に天皇や皇族の陵墓が営まれている。このようにみてくると新笠を生地に葬ったとみる通説に積極的な理由があるとも思えない。

なお右の二陵をはじめ大枝付近には桓武天皇ゆかりの人物の陵墓が多い。たとえば延暦九年（七九〇）三月に没した桓武皇后藤原乙年漏もその一人で、高島陵と呼ばれたが、これも長岡京の北に営まれた陵墓（円墳）である。『延喜諸陵寮式』に、「兆域東三町、西五町、南三町、北六町、守戸五烟」とあり、古くは五塚原といわれ、新笠の大枝陵と間違われたこともあるという。

また西の石作には桓武天皇と乙年漏の間に生まれた高志内親王の石作陵があり、同じく『延喜諸陵寮式』には、「兆域東西三町、南三町、北六町、守戸五烟」と記す。

石作の南、勝持寺の背後には標高六四一メートルの地に西嶺上陵と呼ばれた淳和天皇陵もある。天皇は桓武と、先の旅子の間の子である。『続日本後紀』によれば、承和七年（八四〇）五月八日に没した天皇の骨が、同十三

日夕、大原野の西山嶺上にばらまかれたが、それは火葬後の骨灰であったという。いま物集女（向日市）に淳和天皇火葬塚と称するところが残っている。天皇は遺言により山陵を築くことを禁じており、『延喜諸陵式』に淳和陵を所載していないのは、そのためであろう。現在地に比定されたのは幕末で、おそらく骨灰がばらまかれた場所とみなして陵墓としたものと思われる。

ちなみに大枝の山陵のうち、新笠と乙年漏の陵墓は清和天皇の天安二年（八五八）十二月、十陵四墓に撰定されている。皇室の十陵と藤原氏の四墓に対して、年終に朝廷から奉幣したもので、皇室の崇敬も厚かったが、新笠が藤原氏出身でなかったからであろう、大枝山陵は貞観十四年（八七二）十二月に除外されている。

五 陵戸と土師郷

新笠・桓武母子が大枝出身であった可能性は、以上の考察からも、まず皆無であるといつてよいが、それならば大枝周辺に土師（氏）は全く居住していなかったのであろうか。

というのは、時期は降るが永久元年（一一一三）十二月、玄蕃寮から山城国衙に送られた牒（『平安遺文』一八〇一号）により、近辺に土師氏のいたことが認められるからである。その内容は陵戸田について、神社・仏寺・権門勢家などの妨げなくすべて地利を玄蕃寮に弁進させてほしいと訴えたものであるが、列举された陵戸田の中には、「大外記田」「仁和寺」「重友名」など、官田・寺田や名田のほか、「出作」と注記された田地もあり、当初「陵戸」のために認められた「陵（戸）田」（免税などの恩典が与えられていた）だけでなく、陵戸自身の所有地や請作地を含めて「陵戸田」として把握されていたことが知られる。つまり陵戸の立場を利用し、本来の陵（戸）田に与えられた特典を、それ以外の田地にも拡大しているわけである。陵戸田に関するこうした訴えが玄蕃寮から提出された背景に、陵戸が権門と結託する動きのあったことを思わせるが、当時、玄蕃寮による陵戸田支配が

動揺していた事実の一端を示すものであろう。

それはともかく、ここには乙訓郡の陵戸田も記されている。

大枝 宇波太 石作 高畠四箇所陵戸田 乙訓郡

梶谷里（坪付及び面積は省略）

同西里（〃 〃）

母底里（〃 〃）

土師郷下村里七坪八段 八坪五段二百卅 十一坪二段 十四坪四段 十五坪二段 十六坪四段 十七坪六

段 十八坪六段 十九坪四段 廿坪四段 廿一坪四段 廿六坪四段 廿七坪六段

我妻里（坪付及び面積は省略）

（以下略）

大枝（新笠陵）・宇波太（旅子陵）・石作（高志内親王陵）・高畠（乙牟漏陵）は先にみた陵墓で、それぞれの陵戸田として（淳和陵がないのは前に述べた）、梶谷以下十六里、面積にして約三十四町が列挙されている。むろん欠けた部分もあるので、それ以上の地所と面積があったとみられるが、いずれも乙訓郡内に設定されていたわけである。このなかで留意されるのが、「土師郷下村里」とみえる表記で、他の十五里については郷名表記がないのに、この下村里だけに「土師郷」の記載がある。他の陵墓についての記載から判断するに、この場合、土師郷に属するのは下村里だけで、次の我妻里以下は属さないとみてよい。その下村里にだけ郷名（土師郷）が記されたのは、逆に土師郷が下村里（だけではないであろう）を母胎に新しく立てられた郷であったからではなからうか。

そう考えるのは、この土師郷の名が『和名類聚抄』には記載されていないからである。『和名類聚抄』の成立は承平年間（九三一―三七）と考えられているから、それ以降に新立された郷ということになろう。十世紀以降、

国衙領の中に郷や保が新たに立てられた事例は少なくない。この土師郷も下村里を中核に発展した集落が郷として成立したものと考えられる。

次に問題となるのは土師郷の場所である。土師郷下村里(三十六坪)の中、陵戸田は十三カ坪に散在しており(約六町を占めている)、一帯に条里制地割が実施されていたことを示している。これは、地理的条件に照らして、大枝地区のこととは考えがたく、もう少し平坦部に想定すべきものと考ええる。なお高野新笠の大枝出身説のなかには、この文書にみる土師郷を大江郷の同地異名とする理解があるが、いささか強引であろう。大江郷は十世紀に作成された『和名類聚抄』に所見し、この文書の五十年後の長寛二年(一一六四)の売券にも、「乙訓郡大江郷巨勢本里」と所出する(『平安遺文』三三七五号)。大江郷はあくまで大江郷であるとみるべきであろう。

それにしても、看過出来ないのは「土師郷」という郷名である。すでにみたように、凶儀に預ることを忌避して土師の名を棄てるのが趨勢であったなかで、新立の郷名に土師を冠するのは時代に逆行する措置とさえ考えられるが、土師郷と呼ばれた理由としては、土師器の製作に当る人々の集団がいたこと以外には考えがたいのではないか。『延喜式』に坏作の土師や玉手土師などがみえるように、当時、土師の需要がなくなったとは思えないから、それに関わる職能集団があり、その一部が陵戸に当てられたということではなかったろうか。それがしだいに生活圏を拡大し、集落を形成するに至ったものと考えられる。

ちなみに石作郷(大原野あたり)には石作連に率いられた石(祝)作が集住していた。この石祝作は石棺造りを職掌とする集団で、野見宿禰を遠祖としており、その点土師氏と同じ祖先伝承を持つもので、両者の関係が密接であったことが知られる。また物集女(現向日市)には土師氏のうち毛受腹が和泉の百舌鳥から移ってきたとの伝承があり、乙訓郡に古くから土師(氏)が分布していたことは十分考えられるところである。それが、右にみた土師郷新立の土壌になったのではなからうか。

ただしもう一度確認しておくと、乙訓郡におけるこのような土師氏の存在と、真妹の大枝改姓とは、直接は関係がない。

(1) たとえば村尾次郎『桓武天皇』では、「新笠の母の土師真妹は山城乙訓郡大枝村に住む土師氏の出である。彼女の墓所が大枝に設けられたのは、生まれ故郷の山に永眠する意味だったに違いない。山部王も山背に生まれ育ったのではないだろうか」とし、また『京都の歴史』（第一巻）では、「遷都地として山背国が候補に上り、継縄・小黒麻呂・種継などのブレンたちと山背との関係の深さと同時に、桓武の母新笠が大枝氏であるところから山背国乙訓の地が最終的に固まったものである」と記されている。

(2) 林陸朗『長岡京の謎』、小林清『長岡京の新研究』など。

(3) 大和郷については、現在の奈良県天理市長柄・萱生辺り（段熙麟『日本史に生きた渡来人たち』）とも、佐保庄町大和一带（佐伯有清『新撰姓氏録の研究』）とも推定されている。

(4) 高野朝臣については、高野新笠の薨伝（『統日本紀』延暦八年十二月二十九日条）に「宝亀年中改姓為高野朝臣」とあること、また乙継（弟嗣）の孫家麻呂も和朝臣の氏姓を称している（『日本後紀』延暦二十三年四月辛未条）ことなどから、新笠だけに賜わったものと考えられ、延暦九年十二月一日の詔の中で乙継が高野朝臣を冠しているのは追書と思われる。

(5) 土師氏については小出義治「大和、河内、和泉の土師氏」（『国史学』五四）、直木孝次郎「土師氏の研究」（『人文研究』十一一九）、米澤康「土師氏に関する一考察」（『芸林』九一三）および「土師氏の改姓（上）（下）」（『芸林』十二一五・六）などの論文に詳しい。

(6) 参考のために原文を摘記しておくと、「遠江介從五位下土師宿禰古人、散位外從五位下土師宿禰道長等一十五人言、（中略）式觀祖業、吉凶相半、若其諱辰掌凶、祭日預吉、如此供奉、允台通途、今則不然、專預凶儀、尋念祖業、意不在此、望請、因居地名改土師以為菅原姓、勅依請許之」（『統日本紀』天応元年六月二十五日条）とある。

(7) 和田英松『本朝書籍目録考証』など。

(8) 平野邦雄『和氣清麻呂』など。

- (9) 高野天皇の称号問題については柳宏吉「高野天皇の称号」(『日本歴史』三三三) および鈴木靖民「高野天皇の称号について」(『国学院雑誌』七七―八) などの論考がある。
- (10) 朝臣と連という姓の違いはあるが、むろん同族であることはいうまでもない。
- (11) 本書第一部五章「桓武天皇の皇統意識」。
- (12) 註(11)前掲論文。
- (13) 老ノ坂にある酒吞童子首塚については、瀧浪「国境の里」(村井康彦編『京都・大枝の歴史と文化』所収) 参照。
- (14) 中山修一「条里の考察」(『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査―発掘と歴史的景観・土地利用の変遷に関する調査報告』所収) など。

六章 東朱雀大路と朱雀河

はじめに

平安京は、十世紀末の成立になる『池亭記』（慶滋保胤）の記述で知られるように、右京の衰微と左京の稠密化が早くから進行していた。それにともない平安後期になると、平安京の中央大路であった朱雀通りが市域の西辺となる一方、市街地は鴨川河畔をこえて鴨東の白河方面や北方の郊外へと広がっていった。鴨東地域を含めて京都が、京・白河と呼ばれるようになったのもそれであるが、従来「東河」と称されていた鴨川（原）も朱雀河（原）の名で呼ばれるようになる。この呼称に、街の中央を流れる川というイメージが重ねられていることは言うまでもない。同様の意味から、道路についても新しい朱雀路の出現が予測されるのであるが、果せるかな、相前後した時期に登場する。東朱雀大路がそれである。

この東朱雀大路については、これまで注目されることがなく、最近における鈴木進一氏の研究がほとんど唯一のものといつてよい。それは、関係史料から、東朱雀大路の形成時期や名称の由来を検討されたものであるが、氏の論は、足利健亮氏の提唱される平安京のアーバンフリンジ論、すなわち京域の周辺に設定されたという予備空間が、東京極通りと鴨川の間にも存在したとする仮説を前提としている。しかしわたくしは、その前提自体に

問題があると考えており、⁽³⁾氏が理解される呼称の生じた時期や名称の由来についてもあらためて検討する必要があるように思う。

そこで本稿では、従来取り上げられることのなかった朱雀河（原）にも論を及ぼしながら、新たな視点から東朱雀大路について考察し、平安京の都市的構造の一端を明らかにしたい。

一 西の朱雀

南北朝の動乱を描いた『太平記』（巻八、四月三日合戦事付妻鹿孫三郎勇力事）の中で、元弘三年（一一三三）小早川と島津安芸前司とが赤松円心に合戦を挑むくだりに、次のような描写がある。

「西ノ七条へ寄セツル敵ニ逢テ、花ヤカナル一軍セン」ト云テ、西八条ヲ上リニ、西朱雀ヘゾ出タリケル。

同種の記述は「三月十二日合戦事」（同巻）にもみられ、上洛した赤松勢に対して、六波羅から二万余騎の軍勢が「今在家・作道・西ノ朱雀・西八条辺」へ差し向けられた、とある。この場合の西ノ朱雀が、作道、すなわち羅城門より南の鳥羽方面へ通ずる道との位置関係からいって、本来の朱雀（路）であることはまず間違いないであろう。同様の意味で、先の「西ノ七条」「西八条」も西京（右京）の七条や八条のことではなく、むしろ東京（左京）の七条・八条のこととみなされる。しかも同じ用例は、すでに『平家物語』の中にも見られるのである。

たとえば重盛の懇請により死罪を免れ備前国へ配流となった藤原成親が、出京の日、内裏に別れを告げる描写に「西ノ朱雀を南へゆけば、大内山も今はよそにぞ見給ひける」（巻二）とある。

朱雀大路といえ、羅城門から大内裏の朱雀門へ南北に走る京中のメイン・ストリートであったはずなのに、それが「西の朱雀」と記されている。市街地の左京への偏在化の結果であることはいうまでもないが、そのこと

に関連して二、三の事実についてふれておこう。

元来、平安京の朱雀大路は古代国家の都城にふさわしく、幅二十八丈（約八十五メートル）の大道路であった。むろん唐長安のそれ（一五〇メートル）には及ぶべくもなかったが、それでも両側には街路樹として柳が植えられ、その景観の美しさが催馬楽にも詠まれている。⁽⁵⁾しかし前述したように、右京の衰微にともなうて朱雀大路も早くから荒廃したもののごとくである。⁽⁶⁾

すでに貞観四年（八六二）の官符にも、⁽⁷⁾「昼為馬牛之関閑、夜為盜賊之淵府」⁽⁷⁾ ったといい、取り締りのため朱雀大路坊門ごとに兵士十二人が配置されたことが知られる。しかし、二十八丈という広さはかえって格好の放牧の場となったものとみえ、牛馬の放ち飼いは容易に禁止できなかったようである。『延喜式』（左京職）にも、
「凡朱雀大路放飼馬牛、繫充職中雜事、随其主来、即加決罰放免」と規定されている。

いっぽう朱雀大路の南端、平安京の表玄関として威容を誇った羅城門も、天元三年（九八〇）七月の暴風雨で顛倒して以来、⁽⁸⁾再建されることはなかった。治安三年（一〇二三）法成寺の造営にあたつて道長が、神泉苑・坊門などと共に羅城門の石を堂礎として運ばせたことは有名で、⁽⁹⁾当時、礎石だけになっていたことが知られるのであるが、この羅城門の頽壊が、朱雀大路の荒廃と表裏のものであったことは言うまでもない。こうして朱雀大路のもつ本来的な意味や機能はしだいに失われ、平安後期には、市街地の西境と意識されるに至つたのであった。⁽¹⁰⁾
「西の朱雀」の呼称が生まれる背景は、おおよそ以上の如くである。

さて、「西の朱雀」ということで連想されるのが、左京の西南辺に位置した平清盛の西八条邸である。平家一門の六波羅屋形に対して、仁安元年（一一六六）、清盛が別宅として構えたもので、八条坊門小路南・八条大路北・大宮大路西・坊城小路東の六町を占めたという。⁽¹¹⁾朱雀大路の一町東にあたる。「西八条（邸）」の呼称は、あと引用する『玉葉』の記事が初見と思われるが、『平家物語』（巻六）にも治承五年閏二月に焼亡した折、「玉⁽¹²⁾

をみがき金銀をちりばめて作られたりし西八条殿、其夜にはかに焼けぬ」と記されている。左京にありながら西八条邸（殿）と通称されたのは、東洞院西にあった八条院（鳥羽皇女の御所）に対するものかとも考えられるが、やはりその辺りが市街地の西辺であったことによると見るべきである。『太平記』にみえる「西の七条」「西の八条」も同様の概念から冠せられた呼称であったことは言うまでもない。

なおこの西八条邸については、『玉葉』によれば寿永二年（一一八三）七月二十五日、平家が都落ちするに際して自らの手で火をつけ、「六波羅・西八条等舎屋不_レ残_二一所併化_二灰尽_一」したという。

二 東朱雀大路の登場

「西の朱雀」があれば、当然のこととして「東の朱雀（大路）」の存在が予測されるのであるが、それが記録の上に登場する。しかも史料的には、むしろ「東の朱雀」（東朱雀大路）の方が早い。

東朱雀（大路）の初見は、中御門宗忠の日記、『中右記』嘉保二年（一〇九五）三月十九日条である。

暁有_二焼亡_一、東朱雀大路中御門小屋也、馳_二参太后御所越前守清実宅_一京極大炊、御門也、両殿下令_レ渡給、人々濟々参集、北風大吹、余炎已及_二法興院_一、可_二消火_一由被_レ仰_二檢非違使_一、破_二小屋_一、法興院已免_二余炎_一了。

「東朱雀大路・中御門」の小屋から失火し、おりからの北風に、当時太后（藤原寛子）御所とされていた源清実宅や東の法興院への延焼が心配されたが、法興院は付近の小屋を壊して危うく難をのがれたというものである。同じく『中右記』によると、翌四月二十一日の亥の刻にも「東朱雀春日辺小屋」が焼亡し、同十二月十四日にも「午時許、從_二東朱雀大路_一西、從_二中御門_一北小屋等」から失火したことが知られ、後者の場合はとくに南風が強_レく、類焼防止のため法成寺の大門南辺の小屋がまっさきに壊されている。

ただし『今昔物語』（巻12—9）には、年代的にはこれより以前、すでに「東の朱雀」の存在した事実を物語

る話が収められている。すなわち万寿元年（一〇二四）四月、祇陀林寺で舍利会⁽¹³⁾を行ふにあたり、叡山の仏舍利が法興院から祇陀林寺に運ばれたが、その折、二百余人の請僧が二列に並び、行粧も華やかに「朱雀を登り」、ために「大路の左右」には、小一条院敦明親王や道長をはじめ見物の棧敷で立錫の余地もなかったと記されている。法興院（二条北・京極東）と祇陀林寺（中御門南・京極東）の位置関係から、舍利が運ばれた「朱雀」「大路」は、「東の朱雀」つまり「東朱雀大路」であったと考えてよい。万寿元年といえは、道長が没する三年前のことである。『今昔物語』の成立時期も考慮に入れる必要があるが、道長の時代には「東の朱雀」の概念がすでに一般化していたと見てよいのではなからうか。しかもここでは東朱雀を北行することが「朱雀を登る」といわれており、京都における方向指示の言葉として知られる「上ル」（「下ル」）の初見史料としても留意されよう。

問題は、東の朱雀―東朱雀大路がどこにあったかである。

このことを考察する上で参考になるのが、やはり『中右記』の記事である。たとえば永久二年（一一二四）二月十四日夜、越中守俊親が女を迎えに二条辺りまで来たところ、「二条朱雀」で盗賊に遭い女を奪われるという事件があった。これについて宗忠は、事件の起こった「二条朱雀」の場所を、三月六日条では「二条京極辺」とも記している。わずか三週間前のことであり、また日記に市井のことを詳しく記している宗忠のことであるから、事実の混同はないと考えてよい。両様の呼称が用いられたのは、前者の朱雀（路）が東京極大路の通称となっていたからにほかならない。また同年四月十三日、法勝寺所司の下女が「京極二条」で引（追）剝に襲われた事件の場合は、翌日の日記に「二条朱雀辺」と記しており、ここでも（東）朱雀路＝東京極路であったことが確かめられる。こうした表現は同じ語のくり返しを避けたまでのことで、だから同二十日条のように、「朱雀京極之辺引剝」と、連ねて書くこともあった。これは、京極（大路）が朱雀と称されていたことを明示していよう。

朱雀大路に関連しては、源俊明の「朱雀家」⁽¹⁴⁾のことが想起される。この朱雀家は、他の記録に所見する「京極

亭」⁽¹⁵⁾「京極堂」⁽¹⁶⁾とみてよいので、やはり東京極Ⅱ（東）朱雀辺であったことを物語っている。なお、「堂」とも称されるのは、邸内に持仏堂が営まれていたからであろうが、これが父宇治大納言隆国の「堂」を伝領したものなら、「朱雀神路小路」^(勘解由小路)⁽¹⁷⁾にあったことになる。

東朱雀大路については、南北朝期（原形は鎌倉中期）の成立になる『拾芥抄』に、「又京極東有朱雀、已上東京、京極川号中川」と記されるのが留意される。これは、東京極大路の東、鴨川の西に朱雀（大路）があったというふうに読める。事実宝暦三年（一七五三）、森幸安作の地図（『中昔京師地図』）には、おそらくこの『拾芥抄』の記事についての右のような理解に基づいたものであるう、東朱雀大路が京極大路の東に描かれ、法興院と法成寺とを結ぶ南北の街路のこととしている。先にあげた鈴木氏の研究も、こうした理解を継承するものであった。⁽¹⁹⁾

しかし平安京の外に、朱雀の名で呼ぶにふさわしい大路がありうるだろうか、疑問である。『栄華物語』（巻十七）などには、法成寺の「東大路」の整備は記されているが、朱雀と呼ばれるほどの大路についての記載がない。そしてあとに引用する史料からいっても、この東大路は朱雀大路ではありえない。また『二中歴』には、「京極并堤二路為京外」とあって、堤路のあったことをうかがわせるが、これは鴨川の堤につくられた道のことであろう。しかしそれが（東）朱雀大路と呼ばれた形跡はない。

なお断定は出来ないが、『玉葉』承安二年（一一七二）正月十四日条も参考になろう。それによるとこの日法成寺に参詣した兼実は、法勝寺からの経路について、「依_レ不_レ過_二無量寿院前_一、自_二富小路_一廻_二土御門_一、入_レ自_二西面北四足_一、恒例事也」と記している。無量寿院とは法成寺内の西寄りに位置する阿弥陀堂のこと、堂の前を避けるために京極路の西の富小路を北上し、土御門へ廻ったというのである。法成寺へ通じる東朱雀路が京極路の東にあったのなら、京中へまで入る必要はないように思える。

もつとも『拾芥抄』の記述について先のような理解をする限り、鈴木氏が、兼家の法興院や道長の法成寺の造営に伴なって両寺院を結ぶ間に通路が形成され、十一世紀後半に至ってその路に東朱雀大路の名が付されたと解釈されるのも無理はない。しかしすでに見てきたように、同時代史料である宗忠の記述に従う限り、東京極大路は東朱雀大路であることは明らかである。なぜ誤解が生じたのか。それは、『拾芥抄』の記載する朱雀を東朱雀「大路」のことと解釈して疑わなかったところにあると考えるが、これについては、四節であらためて取り上げたい。

三 「朱雀」の条件

「東の朱雀」とは、元来の朱雀大路に対する位置から生じた呼称で、東京極大路のことであった。しかしこのことは、一条から九条にいたる京極路全域が東の朱雀と称されたことと同じではない。ある限られた範囲で適用された呼称であつたらしく思われる。

そのことを考えさせるのが、『中右記』寛治七年（一〇九三）五月九日条である。それによるとこの日、女房・殿上人らが賀茂社（上・下）詣でをした際、「其路自洞院大路^二經三条京極・大炊御門朱雀、自法成寺東大路^一至三下御社^一」ったという。当時内裏は師実の堀河殿であつたから、（西カ）洞院大路を南行し、三条から東へ折れ、京極大路を北上したわけであるが、それを「三条京極・大炊御門朱雀」と表記しているところに、京極大路のある部分が朱雀と呼ばれていたことを暗示している。東朱雀に関して前掲の『中右記』の記述が「東朱雀大路中御門小屋」⁽²⁰⁾「東朱雀春日辺小屋」⁽²¹⁾であつたことが想起されよう。ちなみにその他の記録においても「朱雀辺近衛南」⁽²²⁾「僧都住房朱雀」⁽²³⁾「大炊御門朱雀故美福門院御乳母伯耆尼公宅」⁽²⁴⁾など、東朱雀の呼称がいずれも二条以北に限られていたことが指摘できる。これは二条大路が本来の朱雀大路について幅員の大きい道路であるように、宮城の

南大路としての特殊性を有していたことと無関係ではなく、それより以北にこの称が用いられたものであろう。なお先に言及したように、右の記事から、朱雀路と法成寺東大路とが別であることも知られる。

東京極、ことに二条大路より北方といえ、⁽²⁵⁾ 摂関政治の基礎がつけられた九世紀半ば、その西側には藤原良房の染殿があった。娘文徳皇后明子がのち御所とし染殿の后と呼ばれたことは知られる通りで、その関係から文徳や外孫清和天皇を迎えて観桜の宴がしばしば催された。また道長の土御門殿は、土御門大路をはさんでその南にあり、寛弘五年（一〇〇八）、一条中宮彰子はここで榮華の「初花」、後一条天皇を出産している。いっぽう京極の東側（京外）には、太后こと藤原穩子から伝領した土地に兼家の法興院（邸宅二条院を出家後寺に改めた）、北には道長がその権勢を投入して営んだ法成寺や彰子の東北院などが林立していた。王朝の盛期、東京極路の東西に営まれたこうした華麗な都市的景観が、平安京の東の境界路であったこの大路を新しい市街地の中心、中央路につくり上げていたのであろう。京城が東に移動し、京・白河の呼称が生まれるという平安京の都市的変貌をベースに、一帯を舞台に王朝政治が展開されたという、いわば文化的条件が加わり、東京極路の、ことに二条以北に新しく朱雀―「東の朱雀」の概念と呼称を生み出したのである。それは道長の活躍する十一世紀はじめのことであった。

なお、平安京の「朱雀」に対する以上のような理解に関連して興味深く思われるのは、平城京においても同類の呼称がみられる事実である。昭和四十九年、奈良国立文化財研究所によって作成された「遺存地割・地名による平城京復元図」によると、朱雀大路に面した左京四一条一坊及び八条一坊のところに「西京路」「西京」、また左京二条二坊の、藤原仲麻呂の田村第辺りが「朱雀田」と記されている。平安京での用例と同じく、これらがいわゆる西京（右京）や本来の朱雀（路）でないことは言うまでもない。

地名化した時期が明らかでないが、平城京も市街がしだいに東へ移っていったことと無関係ではなからう。わ

たくしは、平城京でのそれを平安京の（西）朱雀の先蹤として留意したい。

四 朱雀河

室町小歌を集録した『閑吟集』および『宗安小歌集』に、次のような歌が収められている。

逢はで帰れば

朱雀の川原の千鳥、鳴き立つ

有明の月影

つれなや、つれなやなう

つれなと逢はで帰すや

（『閑吟集』二二二）

朱雀が川の千鳥が

夜深に鳴いて目を覚ます

（『宗安小歌集』一九七）

ともに、朱雀川に鳴く千鳥を詠んだ恋歌であるが、興味深いのは、東朱雀大路に雁行して、こうした朱雀河・朱雀河原の呼称が史料上に表われることである。もっとも朱雀川（河）といえ、当然元来の朱雀大路に沿った川のことと考えられよう。今日ではほとんどが埋没したり暗渠化されて見ることは出来ないが、平安時代には南北の道路に沿って少なからざる小河川が流れていたと思われる。天長五年（八二八）の官符⁽²⁶⁾によると、京中惣じて五百八十余町、これに橋梁が三百七十余ヶ所もあり、多すぎて損傷のないところはなかったといい、多数の橋

梁の存在が京中河川の少なくなかったことを示唆している。朱雀大路に沿って川―朱雀河があっても不思議はないであろう。事実、裏松固禪『大内裏図考証』（巻一の下）には、その朱雀河について「作道、朱雀河、壬生繩手詳見図」と記している。固禪の引用する東寺所伝「拝師三反半田図」には、作道の東十九坪の内に「朱雀河（此川路ハ十九坪内也）」との書き込みがあり、作道にそって朱雀河の流れていたことが知られる。『東寺執行日記』⁽²⁷⁾に、正平十八年（一三六三）九月、東寺に動座していた石清水神興の帰座にあたり、臨時に大湯屋の門扉を架橋にして渡御したと記される朱雀河が、おそらくそれであろう。

しかし先の二首の歌に登場するのは、この朱雀河ではない。結論を先にいえば、従来、平安京の東を流れるところから東河とよばれていた鴨川のことである。

朱雀河については、やはり『中右記』嘉承二年（一一〇七）十月十四日条に、「亥時許、大炊御門東朱雀河原小屋及二条焼亡、人家数百宇為ニ燬尽」とあるのが初見である。これによれば東朱雀大路（東京極大路）付近の鴨河原が「朱雀の河原」とよばれていたこと、辺りは人家が密集していたことが知られよう。これはすでに述べたように、院政期、鴨東の地が急速に発展した結果、「東河」であった鴨川がまちの中央を流れる川、つまり朱雀河になったことを示している。それにこの呼称は、すでに通称となっていた（東）朱雀路に触発されて、容易に生まれたに違いない。そして関連史料の出かたも、（東）朱雀大路から朱雀河へと比重が移っているように思われる。

その中でとくに留意されるのが、『山槐記』長寛二年（一一六四）六月二十七日条である。この日の記事は、初期平安京の構造を考える上で画期的な材料であり、問題の一部については別稿で考えたが、朱雀河についての記事もまた重要である。それは忠親が賑給の範囲を説明する中で、「京極東有ニ朱雀堤⁽²⁸⁾」と書いている点である。京極の東にあるという「朱雀堤」が、いわゆる朱雀河原―鴨河原の堤であることは言うまでもないが、ここに来

て先に引用した『拾芥抄』の記載が想起されよう。すなわち『拾芥抄』がいう京極の東にある「朱雀」とは道路のことではなく、じつは河（原）―朱雀河（原、堤）のことと見られるのである。朱雀堤も朱雀という名の堤というより、朱雀河の堤の意であり、この堤に道があったとしても（先掲『二中歴』の記事）、それが朱雀路というのではない。そして当時「朱雀」といえば東朱雀路より朱雀河＝鴨川の代名詞になっていたものと思われる。編者の洞院公賢が『山槐記』のこの箇所を表記にならって『拾芥抄』を記載したか否かはともかく、江戸時代以来こちらの朱雀河の存在を理解していなかったところに、混乱の原因があったといえるのではなからうか。時期的にみても『拾芥抄』の「朱雀」は朱雀河と理解する方が自然であるし、矛盾も氷解するように思う。

ちなみに寛正六年（一四六五）十二月、幕府は、洛中に節季要脚料を地口銭として賦課するにあたり、徴収担当者の分担範囲を定めている。⁽²⁹⁾すなわち左京十六大路を「大宮与猪熊間」からはじめて「京極与朱雀間」までの十三区域、および「一条以北」に分けているのであるが、この場合の「朱雀」も「朱雀河原」（もしくは「朱雀堤」のことと考えてよいであろう。しかもこれによって、当時「洛中」が、大宮通から京極を越え朱雀河＝鴨川以西と概念されていたことが知られて興味深い。それが決定的となるのは、秀吉により鴨川西畔にお土居が築かれたときであった。

ともあれ、東朱雀大路と朱雀河（原）の呼称の出現は、平安京から京都へ、古代都市から中世都市へと推移した歴史の指標といってよいであろう。

- (1) 鈴木進一「東朱雀大路小考」（国学院大学『史学研究集録』6号）
- (2) 足利健亮「都城の計画について」（『日本古代文化の探究・都城』所収）
- (3) 足利健亮氏の提唱される平安京のアーバンフリンジ論について、村井康彦氏は「初期平安京の相貌」（『史窓』三八号）の中でこれに疑義を抱かれているが、わたくしも基本的には村井氏の意見に賛成である。

(4) 京都市伏見区深草今在家町。鳥羽の東。

(5) 朱雀大路の柳は、『続日本後紀』承和三年七月二十一日条にみえるのが初見である。

(6) 催馬楽に伝えられている朱雀大路の柳を詠じた歌は、次の二首である。

大路に沿ひてのぼれる青柳が花や青柳が花や 撓ひを見れば今さかりなりや今さかりなりや

浅緑濃い縹染めかけたりとも見るまでに 玉光る下光る新京朱雀のしだり柳または田居となる 前栽秋萩撫子蜀葵し

だり柳

(7) 『類聚三代格』貞観四年三月八日太政官符。

(8) 『日本紀略』天元三年七月九日条。

(9) 『小右記』治安三年六月八日条。

(10) 朱雀大路の荒廃化は中世になるとさらに進んだようで、辺り一帯が朱雀野と呼ばれている。いっぽう宮城域も官衙の荒

廃や里内裏の出現に伴って内野と称され、無人の野原となったようだ。そうした傾向の中で(本来の)朱雀路の西側(右京)あるいは旧大内裏内に入る路を「末」と表記するようになったのは興味深い。

(11) 『拾芥抄』東京図

(12) 『日本紀略』治承五年閏二月六日条。ちなみに西八条邸が焼失したのは清盛が没した二日後のことである。

(13) 『日本紀略』万寿元年四月二十一日条、『榮華物語』卷二十二など。

(14) 『中右記』承徳元年八月十七日条。

(15) 『中右記』天永三年十二月七日条。

(16) 『長秋記』永久元年二月十一日条。

(17) 『水左記』承暦四年十月二十九日条。

(18) 釈白慧(坂内直頼)撰述の『山州名跡志』(正徳元年)卷十七などにも東朱雀大路が京極東にあったと記されている。
註(1)前掲論文。

(20) 『中右記』嘉保二年三月十九日条。

(21) 『中右記』嘉保二年四月二十一日条。

(22) 『帥記』寛治二年十一月二十八日条。

- (23) 『永昌記』嘉承元年十月十六日条。
- (24) 『山槐記』仁安二年三月二十四日・同年四月二日条。また同年正月二十二日条にも「二条朱雀」の記載がある。
- (25) 正親町北・京極西二町(『拾芥抄』)。
- (26) 『類聚三代格』天長五年十二月十六日太政官符。
- (27) 『東寺執行日記』承平十八年八月七日・九月一日条。
- (28) 本書第Ⅲ部一章「初期平安京の構造」。
- (29) 『斎藤親元日記』

結

論

結 論

本稿は『日本古代宮廷社会の研究』と題し、主として奈良時代から平安時代にかけての政治史および社会史の研究分野における基本的かつ重要な問題を取上げて考察したもので、本文は内容に従い三部に分けて構成した。すなわち、

第一は、日本の王権の特質を探る上で不可欠な、八〜九世紀における天皇や上皇をめぐる諸問題を考察した。このうち天皇については女帝論を核に皇位継承を論じ、上皇については上皇御所Ⅱ後院の出現過程に焦点をあてた。

第二は、天皇権との関わりにおいて貴族政治の構造、ことに貴族合議制について論じ、また合議制の場としての議所・陣（仗）座など政治のもつ空間性について考察した。前記上皇御所Ⅱ後院論もこの観点から取上げた。

第三は、政治史研究を中心とした第一、第二部とは視点をかえ、政治の舞台となった宮都をめぐる諸問題を論じた。遷都や造都などについて、既往の研究の批判的摂取を試み、とくに初期平安京の構造については、あらたな事実の発掘に努力した。

以下は、それぞれの部門において論じ来たったことの要旨である。

「Ⅰ」 皇位継承論

古代における皇位継承について論ずる場合、避けて通れないのが女帝の存在である。女帝は六世期末の推古天皇以来、八代六人が登場しているが、いずれも時々の複雑な皇位継承に深く関わっており、

とくに持続女帝のあと、奈良朝に集中することの政治的意味は大きい。なかでも孝謙（称徳）女帝については、これを最後に女帝の時代が終焉したことや皇統が天武（草壁）系から天智系に移行すること、などからも、この時期が皇位継承上の転換期であることを推測させるが、従来の研究史のなかでは、殆ど空白に近いといつても過言ではない。

この孝謙（称徳）の役割を理解する上での重要な鍵が、元明天皇の即位の詔に初見する、いわゆる「不改常典」である。天武天皇の嫡子、草壁皇子に始まる嫡系相承の実現を意図したもので、奈良時代の皇位継承の在り方を決定づけることとなった。すなわちこの不改常典Ⅱ草壁嫡系相承の論理は、皇位継承の有資格者を草壁系の嫡系男子に限定したことで、皇位継承上の混乱を回避する上ではきわめて有効であったが、いったんその現実的条件を欠いた時は、異常なまでの混乱を招く要因に転化した。そしてその混乱と矛盾を一身に体现することになったのが孝謙女帝であったというのがわたくしの理解である。

すなわち孝謙は、女帝となる上では不必要な手続きであったにもかかわらず、女帝の中では唯一立太子のうへ即位しているが、これは当初から、聖武天皇より男帝と同質の、しかも草壁の正統なる継承者として期待されたことを意味し、自身も以後そのことを強く意識して行動するようになる。しかし現実には、橘奈良麻呂が公然と述べたように、立太子しても、即位したあとでも、孝謙を皇統の継承者とはみていない。そしてそれが一般の受けとめ方であった。これは、嫡系の男子を正統とする社会通念（これが不改常典の論理であった）からすれば、女帝孝謙はあくまでも「中継ぎ」的役割しか負わされていなかったからである。しかし孝謙は、草壁の正統な後継者であるという認識と、それに基づく使命感を強くもち、わたくしの見るところ、それは死の直前まで脳裏から離れることはなかつ

た。孝謙の悲劇は、そうした認識と社会通念との乖離の中に生じたといつてよい。

したがって孝謙（称徳）には、宇佐八幡宮の託宣による一瞬の「狂気」を除けば、道鏡を皇位につける意図はなく、重祚後の称徳の構想は、自身と法王道鏡とによる共治体制の実現にあった。しかも看過出来ないのは、そうした称徳Ⅱ道鏡の方針を藤原永手や白壁王（のちの光仁天皇）たちが承認し支持していたという事実である。その点従来の研究は結論を出すのに性急で、こうした事実についての認識を欠如していたといつても過言ではない。従来、ほとんどの論者が偽作としてきた称徳の「遺宣」、すなわち白壁王を立太子させ、後継者とすることを定めた措置も、疑う余地はないと考える。

孝謙Ⅱ称徳女帝に対する従来の認識が抜本的に改められる必要があるのと同様、わたくしは光明子立后の問題についても、これまでの理解に疑問をもつ。すなわち光明子立后は、通説にいう将来の即位（Ⅱ女帝）に備えるためでなく、立太子にあたり、その実母が皇后であることが絶対的に有利であったという伝統をふまえた措置であつて、光明子に皇子の生まれることを期待して行われたものであること、しかし結果として何ら有効に機能しなかつたこと、などを論じた。

なお皇位継承に関して留意されるのは、称徳のあと即位した光仁天皇はもとより、次の桓武天皇も当初は草壁系（広義には天武系）に連なるとの意識をもっていたことである。しかし血脈をうけない桓武に対しては、即位後ただちにこれを否定する動きが現われ、桓武は否応なしに天智系皇統たることを自覚するようになる。その自覚のあらわれが、桓武による新しい皇統の拠点づくりとしての長岡京遷都Ⅱ造都に他ならない。ここにおいて皇位継承は不改常典から事実上自由となる。平安朝の始まりである。

女帝についても、不改常典によりその役目が中継ぎに限定されたうえ、次期皇位継承者としての皇

太子の制が平安初期に至って整備され、天皇の即位とほぼ同時に皇太子が立てられるようになるに及んで、その存在意義は消失せざるを得ない。これが奈良時代で女帝が終焉する根本的な理由である。

さて、女帝の存在以上に日本の君主制を特徴づけているのが譲位の慣習であり、太上天皇（上皇）の存在である。文武元年（六九七）、持統女帝が孫の珂瑠皇子（文武天皇）に位を譲り、太上天皇と称したのに始まり、その後奈良、平安時代を通じて常態となった。上皇は法制上は天皇の次位に置かれたが、天皇を後見する目的で出現したように、実際には天皇を超える実権を有し、政治に介入するのがむしろ普通であった。持統はもとより聖武上皇、孝謙上皇みなしかりである。したがってこの譲位の累積は、やがて上皇と天皇との政治的な紛争を誘発する原因となった。平安初期、平城上皇と嵯峨天皇との間に生じた「二所朝廷」が、いわゆる薬子の変をひき起した理由である。そしてこの事件は、譲位した上皇のための御所（＝後院）の登場を促した。嵯峨天皇による朱雀院・冷然（泉）院の造作がそれで、のちには「累代の後院」と称されるようになる。

このように考えれば、後院についても当然奈良時代に遡って考察される必要がある。事実聖武上皇の場合、在所としての後院や院御所、組織としての院庁や院司、及び財産としての後院領など、いずれも平安時代に比すれば未熟であるが、その萌芽的な状況をみる事が出来たが、「初期院政」を考える上で、のちの後院のもつ諸要素がいずれもこの聖武上皇時代に胚胎していることの意味は重要であろう。

ちなみに弘仁元年（八一〇）に起った薬子の変は、一般に些細な事件として片付けられることが多いが、賛成出来ない。この事件は、譲位が慣例化するなかで早晚起こることが予想された上皇権力と

天皇権力の対立であり、したがって後院はそうした上皇権力を制肘するために設けられたもので、これが内裏内でなく、また京外でもなく京中に設けられた理由がそこにある。

上皇問題は後院が設置されることで一つの決着をつけたといえる。またそれにともない朝覲行幸や尊号の献上が制度化され、観念上の父子儀礼が成立することにより、讓位Ⅱ上皇の制度は整備されたとみなされる。

なお如上の上皇Ⅱ後院に関しては、「場の政治学」の立場から論じたので、本文では第二部に収めた。

「Ⅱ」 貴族合議制論

政治上、奈良時代と平安時代を区分する重要なメルクマールは、公卿政治の形式の整備如何にある。いわゆる公卿政治とは国政の重要事項が公卿、すなわち左右大臣、大納言、中納言および参議などの議政官によって審議決定されるという合議制による政治のことである。むしろ奈良時代にも合議メンバー（議政官）として左右大臣や大納言がいたが、定員は六名とわずかであり、しかも多くの場合欠員があつて、合議の体裁をなしていたとはいいがたい。重要政務は「面議」と呼ばれる天皇の御前會議によつて決定され、政治の主体はなお天皇の側にあつた。それが平安期になると、国政が基本的には公卿の審議Ⅱ合議によつて決定され、結果だけを蔵人頭を通して天皇に報告し、裁下を求める形となつた。

こうした貴族政治Ⅱ公卿による合議システムが形成される過程で大きな役割を果たしたのが参議である。したがつて従来でも参議を論じた研究は少なくないが、それらに共通するのは、参議が当初から議政官、すなわち合議制のメンバーであつたとする認識で、これが貴族論ひいては貴族合議制を誤

った方向に導いた原因である。

参議とは文字通り審議に参加するとの意であるが、実際には「朝政に参議する」、すなわち天皇の諮問に応じ各自の立場から意見を述べることに、もしくはその立場（人物）をいう。したがって当初は特殊な経歴や才能の持ち主たちが大臣や納言とは別個の立場で、天皇から必要に応じて任命される私的・非制度的な存在であつたといつてよい。

こうした点に特質を有したのが初期参議であるが、その後任用の基準・資格などが定められ、とくに除目の一環として毎年任命されるに及んで常置の官となり、やがて議政官として中納言の下に位置づけられることになる。平安初期のことで、「大臣以下参議以上」という呼称がこの頃から史料上に散見するのは、まさしく参議を含めた議政官＝公卿の誕生、それによる貴族合議制の成立を示すものである。

こうして奈良時代における未熟な貴族合議制は平安初期、参議（八名）を議政官の末端に取り込んだ時、制度的に確立したといえる。その結果、合議制の外にあつて機能してきた「詔勅」や「意見封進」の制などが衰微していったことはいうまでもない。

このように参議は長い時間をかけて議政官になつた。そこでわたくしは初期参議を「朝政参議」、議政官化した参議を「廟堂参議」と呼んで区別しているが、合議制はこの「朝政参議」が「廟堂参議」へ変質することによつて拡充整備され、成立したといえる。ところが従来の参議制論あるいは合議制論は、こうした参議をアプリオリに議政官とみなし、时期的な変質をとらえるという視点が全く欠落していたように思う。

さて、参議研究の中で必ず取上げられるのが藤原武智麻呂・房前兄弟であるが、わたくしはその扱

いについても修正の必要があるように思う。すなわち房前が兄武智麻呂よりも早く「朝政参議」に任じられ、さらに内臣となったことから、従来は武智麻呂よりも房前の方に政治的才能があり、房前が不比等の実質的な後継者であったと理解されてきた。たしかに房前の任命は天皇側の政治的意図によるものではあるが、不比等の地位と役割を受けつぐ実力者が武智麻呂であったことは間違いない。そのことを両者の事績をたんねんに辿ることでも明らかにしえたと思う。

平安初期、公卿の合議システムが形成され、天皇が出御しない場合でも公卿会議が内裏でもたれ、国政が運営されるようになった。わたくしはこれを「面議」Ⅱ御前会議に対して「非面議」と称しているが、むろんそうした場合でも、重要政務は大臣らが紫宸殿や天皇在所に召集され、審議するのが建前とされた。しかしやむをえず天皇が面議出来ないとき、非面議の場として設けられたのが内裏の中、宜陽殿の南廂にあつた議所であるが、九世紀末ごろから、この議所にかわつて陣（仗）座が用いられるようになり、そこでの公卿たちの評議が陣定（議）・仗定（議）と称された。

陣（仗）とは、もともとは内裏の警固にあたる左右近衛府の官人たちの詰所であつたが、紫宸殿に近いことから緊急時における公卿たちの控え所として用いられ、やがて政務の場にも利用されるようになったもの。ちなみに同様の機能は、議所のある宜陽殿の西廂についてもみられたが、宜陽殿の方が公卿本座と呼ばれてハレ向きの場所とされ、近衛陣のそれよりも格式の高いものとされた。

宜陽殿西廂や陣（仗）頭での会議は、むろんあくまでも臨時的・一時的なものであつたが、それが光孝天皇時代あたりから利用の頻度が高くなり、とくに陣（仗）での政務審議が定着していく傾向をみせる。宜陽殿の西廂や議所の機能と役割が陣（仗）頭に吸収されていった結果であるが、それは光

孝天皇による紫宸殿の使用が高まったことと無関係ではなからう。

光孝朝以後陣（仗）頭が公卿審議の場として定着し、常態化したことの意味は小さくはない。ここに来て王朝貴族政治の要件がはじめて備わったとみられるからである。ただし留意されるのは、そうした場合でも除目・叙位だけは例外であった。原則としてそれは清涼殿や天皇在所での御前会議とされた。これは人事権の掌握が天皇権力の中樞をなすものであったからで、やむをえず天皇が面議できない場合でも、議所で行なわれるのが原則であった。のちに「除目の議所」と称され、議所がもつぱら非面議の際、除目・叙位を行なう場所に限られるようになった理由である。

しかしその除目・叙位の審議もやがて議所から摂政の直廬や仗座に持ちこまれ、名実ともに仗議（陣議）が確立する。それは十世紀半ば、摂関制の展開期のことであった。

ちなみに摂政が直廬で除目・叙位を行なったのは藤原忠平が最初であるが、摂政が人事権をその直廬で行使するのは、天皇権の代行者としての摂政の権限確立の表徴に他ならず、これが先例となり故実として伝えられていくようになる。内裏に設けられた摂政直廬のもつ政治的な意味が留意されよう。

「Ⅲ」 宮都論

延暦三年（七八四）、長らく続いた大和宮都の否定の上に実現された長岡遷都は、桓武天皇にとって山背に天下を草創する事業であったが、この長岡遷都については、これまで藤原種継の役割がもつぱら取り上げられてきた。長岡遷（造）都が造宮長官である種継によって推進されたことは確かであるが、長岡遷都の舞台廻しはもとよりその棄都、さらには平安京の遷（造）都に深くかわつたと思われる和気清麻呂の役割に留意し検討した。

長岡京は淀川水系に立地する都であった。その長岡の地への遷都が計画された時、大和川の河口に

位置し、大和宮都の外港として機能してきた難波京・難波津の扱いが大きな課題となつたはずである。その点長岡遷（造）都は従来の遷都と異なり、「長岡新京の造営」（種継）と「難波京の解体」（清麻呂）という二つの事業の総体として理解すべきものであるというのがわたくしの理解である。じじつ清麻呂は、新京の造営を推進する藤原種継に対して、この時難波京の解体処理にあたり、淀川一帯の開発を進めている。清麻呂が遷都の前年、七八三年三月に摂津大夫に任命されたのもそのためであつたとみられる。

延暦十三年（七九四）に行われた平安造都は長岡遷都の経験をふまえたものであり、しかも種継に比すべき人物がいなかつたこともあつて、桓武自身が長岡京に比してはるかに主体的かつ積極的に関わっている。そこに腹心として清麻呂が抜擢された理由があり、これに應えて清麻呂自身も、部下菅野真道とのコンビで造都事業を推進したのである。

遷都はまた造都であつたから、造都の実態を明らかにする必要がある。

造営機関としては、藤原京・平城京では造宮官（省）が工事の中枢として常置され、長官以下、定められた数の官人がそれに所属し、職務に当つたのが特徴である。これに加えて知造宮事や催造司といった臨時の官（兼官）も必要に応じて適宜設置、任命され、工事の督察にあたつた。このような体制を、わたくしは「常置本官方式」と呼ぶことにしているが、これに対して長岡京・平安京では造宮省を廃止して造宮使とし、「臨時兼官方式」に切り換えたところに最大の特徴がある。

これは奈良朝あるいはそれ以前の造都事業の経験のなかで得た知恵ともいふべきもので、臨時の兼官体制―必要に応じて人材を任命し、事業が終れば解散、おのおのは本官に戻るといふ体制をとることで、工事の効率化を図つたものといえる。平城京のそれに比して一見弱体の如くであるが、実

際にはこの方がかえって柔軟性をもち、事態に即応出来たのである。なお平安京では、その後、工事が宮中から京中へ及ぼされたのに伴い、造宮使の組織が造宮職に改変されたが、造宮機関としての体制に本質的な変化があったわけではない。

造宮役夫については、雇役という形で諸国から公民百姓が動員された。その方法は毎年諸国から一番上役、すなわち均等分して都に動員すること、具体的には都に近い国から徴発を始め、ついで中国、遠国へ及ぼすように定められていた。これを「一番上雇役制」と呼んでいるが、平安造都の場合でも基本的には同様であった。ただし実際には範囲が限られており、長岡、平安造都を通じて遠国からの動員はなかった。また京・畿内の百姓も対象から除外されていた。これは長岡京、平安京の都市的發展にともない、いわゆる臨時差科が増加したためであるが、こうした都市労働力に依存する方式への傾斜は、これ以後ますます進んだとみられ、造都以外の分野で重要な役割を果たすようになっていく。

近衛家や九条家に伝えられた平安京大内裏図では、宮城十四門のうち上東門・上西門の二門だけが簡略に描かれている。これは構造上、他の門と格段の違いがあったからであるが、この二門は扱いの上でも区別されており、赤や黄に塗った土牛を祀り魍魎魍魎を払う土牛祭や読経などの宮廷行事は、もっぱら十二門に限られていた。じつはこのような上東門・上西門こそ、平安京の造都プランが変更されたことを示す何よりの証であり、桓武天皇の造営した平安京大内裏は、ある時期、大きく手直しされていたのである。

すなわち平安京は、

(一) 大内裏の北辺を東西に走る一条大路(北辺大路)は当初からのものではなく、もとは土御門

大路が一条大路の名で呼ばれていた。

(二) その後、一条大路を北に二丁(約二〇〇メートル)延長して大内裏域を拡張した結果、京城の北極北辺大路が新たに一条大路と称されるようになった。

したがって平安京は、七世期末に造営された藤原京と同じく、大内裏の北側に余地をもつ構造となり、先の大内裏図とは異なった姿となる。これは従来誰一人として想像しなかったことで、「大内裏図」に記される北關型の平安京はじつは変更後の姿であって、当初は藤原京プランを踏襲して造営されたことになる。そこでわたくしは当初の型を「第一次平安京」、変更後の型を「第二次平安京」と呼んでいるが、じつはこのような平面構成の変更は、九世紀後半、深刻化する財政の建て直しのために設定された、いわゆる元慶官田の制によるものであった。

すなわちその收穫稻が官司の財源に当てられたため、これを収蔵保管する倉庫群の整備とその管理強化が必要とされた。そのためにいままで域外であった大蔵省の倉庫群を囲いこむ形で大内裏が拡張され、その際旧一条大路(土御門大路)面に新たに造られたのが上東・上西門であった。土御門の名は土門であったことに由来するが、簡素な造りにされたのは倉庫への物質の搬入路にあたっていたからで、実用を優先した門であったわけである。

こうして桓武の造った平安京は九世紀半ばに手直しされた。その結果、藤原京や平城京では十二であった宮城門が十四門となった。こうしたプランの手直しは他にもあったと思われるが、とくに後宮については、女御(更衣)や尚侍が后妃となり、その数もふえてくるにつれ、後宮の建物も拡充整備されていたと思われる。

ちなみに大内裏域内に入るとして疑問視されていた一条一坊への貫付も、「第一次平安京」の構

造を考えれば矛盾なく理解出来よう。

しかしこうした平安京も、知られるように右京の衰微と左京の稠密化が早くから進行し、それにもない平安後期になると、平安京の中央大路であつた朱雀通りが市域の西辺となる一方、市街地は鴨東の白河方面や北方の郊外へと広がっていった。鴨東地域を含めて京都が京・白河と呼ばれるようになったのに加えて、従来「東河」と称されていた鴨川（原）が朱雀河（原）の名で呼ばれ、東京極路のうちとくに二条以北が「東朱雀大路」の名で呼ばれるようになるが、こうした呼称の出現は、平安京から京都へ、古代都市から中世都市への推移を示すものでもあつた。

以上、三部に分つて論じたことの要旨を述べたが、皇位継承論にせよ貴族合議制論にせよ、はたまた造都論・宮都論にせよ、従来の研究に欠けていた、それぞれ奈良から平安期にかけて継続して考察することの必要性を痛感するとともに、その間の連続と非連続とを跡づけることが、そのまま奈良時代から平安時代への移行期の諸問題を明らかにするもつとも有効な手だてとなるように思う。

各章の要旨

I 皇位と皇統

一章 光明子の立后とその破綻

光明子立后については、将来の即位（Ⅱ女帝）に備えたものという形で理解されてきたが、皇族でない光明子の即位は考えられないところであり、事実立后後もその動きはなかった。光明子の立后は、皇后所生の皇子の場合、その立太子がきわめて有利であつたという過去の伝統に従い、光明子に皇子の生まれることを期待して強行されたものであることを論じた。しかし光明子に皇子は生まれず、立后の意図は実現されなかったばかりか、かえって政局の混乱を引きおこした。

二章 聖武天皇「彷徨五年」の軌跡——大仏造立をめぐる政治情勢——

天平十二年（七四〇）、九州で藤原広嗣の乱が勃発した時、聖武天皇は、その時ではないがという弁明の言葉を残し、多数の貴族官人を従え、壬申の乱の道をたどる東国行幸に出かける。以後、恭仁京造営、紫香楽での造仏、難波宮への遷都と、前後五カ年間に、平城京には戻らなかった。この「彷徨五年」の足跡をたどりつつ、聖武の意図した知識結による大仏造立計画が挫折する過程をあとづけた。民を妖惑するものとして禁圧されていた行基集団が認められるようになるのも、この時期のことであった。

三章 孝謙女帝の皇統意識

奈良時代の皇位は、いわゆる「不改常典」の論理に従い、天武天皇の皇統の嫡々相承が強調されたが、実際には「草壁」皇統の継承という形で問題にされた。なぜ天武皇統ではなく草壁皇統なのか、また皇統の継承に女帝がどのような役割を果たしたかを論じた。ことに女帝が奈良時代で終わる理由や意味は、最後の女帝孝謙Ⅱ称徳の検討を抜きにしては明らかにしえないが、従来この女帝については偏った先入主からほとんど論じられることがなかった。草壁皇統の継承を至上命令と考える孝謙は、「一瞬の狂気」を除いて道鏡を即位させる意図はなく、むしろ道鏡との共治体制を考えていたこと、しかも看過できないのは、それを藤原永手ら貴族が承認し、支持していたことである。あわせて聖武天皇・光明子あるいは大炊王・藤原仲麻呂らの皇統への関わりについても論じた。

四章 藤原永手と藤原百川―称徳女帝の「遺宣」をめぐる―

従来、称徳が白壁王こと光仁天皇に皇位を譲ることを定めた「遺宣」は、藤原永手らによる虚構とされてきたが、それは草壁皇統の正統な継承者である称徳が生前に定めたものであり、長らく称徳を支えてきた永手が、女帝の意に沿いながら実現したのが光仁即位であることを論じたもの。あわせて、藤原百川の役割は称徳朝以来のものであるが、主たる活躍は永手の没後であったことを明らかにし、通説に修正を求めた。

五章 桓武天皇の皇統意識

皇位が光仁から桓武に継承されたことにより、皇統は天武系から天智系へ移ったとするのが通説であるが、当初桓武は早良廃太子を聖武陵に奉告しているように、自らは聖武系皇統を受けついだものという意識をもっていた。しかるに氷上川継ら聖武系（＝天武系）皇親の動向に触発された桓武は、本来の皇統意識に目ざめ、光仁―施基皇子を経て天智に連なる、天智系皇統意識ともいうべきものをもつに至ったこと、などを明らかにした。

Ⅱ 場の政治学

一章 参議論の再検討―貴族合議制の成立過程―

大宝二年（七〇二）五月、「参議朝政」せしむという形ではじめて登場した参議については、これまで律令太政官制にもれた氏族の吸収という理解がなされてきた。これは太政官機構が有力氏族による合議制であつたとする見方に基づく一種の氏族均衡論といつてよく、近時これに対する疑問からいくつかの参議論も現われたが、参議を当初から議政官とみる点では従来の説の枠内にあるといわざるをえない。参議のもつた本来的な役割は朝政参議Ⅱ待問参議、すなわち天皇の下問に対して意見を具申する個人的なものであり、むしろ私的・非合議的な性格をもつ点において、大臣以下の議政官とは異質な存在であつた。本稿はそうした学説的反省から、初期の参議（朝政参議）が議政官（廟堂参議）化していく過程を多角的に検討し、貴族合議制の成立する道程を論じたものである。なお観察使や意見封進についても新たな考察を加えた。

二章 武智麻呂政権の成立——「内臣」房前論の再検討——

不比等の子である武智麻呂・房前の二兄弟について、従来は、武智麻呂は凡庸で形式的な嫡男、房前が有能で実質的な後継者とするが、果してそうか。本稿は通説に抱いた一、二の疑問から出発し、あらためて両者の経歴を検討することにより逆の評価を導き出したもの。房前の重視は、兄武智麻呂より早く参議となり、さらに内臣に任じられたことを根拠とするが、その参議や内臣の理解に問題があった。なお長屋王事件や従来ほとんど論じられなかった散位が多い奈良朝の官人社会の構造についても考察した。これが「参議論の再検討」へ連なつた。

三章 議所と陣座——仗議の成立過程——

「参議論の再検討」で論じた貴族合議制の実態を解明するためには、その審議が行なわれた場についての考察、いうならば貴族政治の空間論を不可欠とする。ここではそのような観点から平安期、主要政務の審議された内裏宜陽殿内の議所や公卿座、紫宸殿わきの陣座（仗座）などの役割を論じた。従来等閑視されていた摂政直廬の機能についても考察した。

四章 薬子の変と上皇別宮の出現——後院の系譜（その一）——

五章 奈良時代の上皇と「後院」——後院の系譜（その二）——

この二つの論考のうち、薬子の変で顕在化した上皇（権）と天皇（権）の対立に教訓を得た嵯峨天皇が、上皇御所としての後院（朱雀院・冷泉院）を創設したことの政治的意義を論じたのが前者であり、讓位の慣習のはじまった持統女帝以後奈良時代に遡って上皇御所の源流を探り、後院出現の過程

とその歴史的意味を明らかにしたのが後者である。ことに聖武上皇時代の薬師寺宮をはじめ、上皇の近臣や上皇領などには平安期の後院に共通する属性がすでにそなわっていたことを明らかにした。孝謙上皇の法華寺宮も同様の意味をもつ。

付論 薬子の変

四章で論じた薬子の変について、人間関係なども重視しながら考察したもの。この変を、平安初期に起こった些末な事件にすぎない、とみる従来の理解には、第Ⅰ部の孝謙女帝に対するのと同質の偏見が感取されるが、ここでは、そうした先入主を排してこの変のもつ政治的意味を述べ、この変こそが平安京体制ともいふべきものの出発点になったことを明らかにした。

Ⅲ 宮都の構造

一章 初期平安京の構造―第一次平安京と第二次平安京―

『枕草子』は、宮城門のうち上東（西）門が他の十二門と違い屋根のないことを指摘している。それと平安京だけが十四門であることは無関係ではないであろう。『山槐記』に載せる賑給記事に着想し、平安京の平面構成が当初は北部に余地のある「藤原京型」であったこと（第一次平安京）、九世紀後半に至り大内裏が北に拡張され「北闕型」に改められたこと（第二次平安京）を明らかにし、その背景を探ったもの。この事実が、わが国の宮都が藤原京型を基本としていたことを示している。なお長らく疑問とされて来た「一条一坊」の理解についても新しい考えを示した。

二章 歴代遷宮論―藤原京以後における―

藤原京以後、いわゆる歴代遷宮の慣習は終わつたとされるが、文武天皇の即位にともない藤原宮内に新宮が営まれているのをはじめ、以後の宮中でも歴代遷宮の故実は受けつがれていた。平安宮で死穢のあつた清涼殿が建て替えられ、あるいは陰陽師による鎮祭が行なわれたのもその名残りであり、歴代遷宮の末期的状況を示す。ここではその間における関連諸問題を考察したが、これが第Ⅱ部の後院論を着想する伏線となつた。また藤原京を「新益京」と呼んだことについての理解をはじめ、藤原京に関する諸問題についても考察した。

三章 「山背」遷都と和氣清麻呂

長岡遷（造）都についてはこれを推進した者として、従来はもっぱら藤原種継があげられているが、その足跡を詳細にたどればたどるほど、長岡遷都はもとより、その棄都、さらには平安遷（造）都にも深く関わつていたと思われるのが和氣清麻呂である。そこでここでは、清麻呂が桓武天皇の腹心として山背遷都―長岡・平安造都とどう関わつたかを、なканずく下僚であつた菅野真道らとの関係を通じて明らかにし、事業の後半に至りついに造宮長官となるまでの経緯を明らかにした。

四章 造宮官と造宮役夫

古代宮都の研究は発掘調査の進展によつて大いに進んだ分野の一つであるが、遷都や造都のもつ政治的・社会的な背景の考察は必ずしも十分とはいえない。そこで推進機関としての造宮官のあり方について、藤原・平城京の場合の常置本官方式が長岡・平安京では臨時兼官方式に切り換えられたこと

の意味や、造宮役夫の徴発方式が雇役（＝番上雇役制）であつたものが「客作児役」に変わつていつたことを述べた。

五章 高野新笠と大枝賜姓

桓武天皇による長岡遷都については、天皇が年少時、長岡に近い大枝の地において母親（高野新笠）のもとで育つたという因縁による、といった理解が通説となつてゐる。これは新笠の一周忌に当り、新笠の母（天皇の外祖母）の土師真妹に大枝朝臣が賜姓されたことからする推測にすぎず、正しい認識とはいえない。ここでは先の通説が成立しないことを論じ、あわせて新笠の負う高野氏と高野天皇こと孝謙（称徳）天皇との関係にも注目した。

六章 東朱雀大路と朱雀河

平安京は早い時期から右京が廃れ、市街地は左京中心からさらに鴨川東へとひろがりを示す。それにともない京中の中央を走る朱雀大路が西朱雀と呼ばれるようになっただけでなく、東京極大路のうち、とくに二条大路以北が東朱雀大路と称せられたこと、さらには東河であつた鴨川（原）も朱雀河（原）と呼ばれるようになり、それが中世京都の景観的な特徴となつたこと、などについて述べた。

主要参考文献

主要参考文献

著書

- 秋山国三・仲村 研 『京都「町」の研究』 法政大学出版局 一九七五年
- 阿部 猛 『律令国家解体過程の研究』 新生社 一九六六年
- 石尾芳久 『日本古代天皇制の研究』 一九六九年 法律文化社
- 井上光貞 『日本古代の国家と宗教』 岩波書店 一九七一年
- 井上光貞 『日本古代国家の研究』 岩波書店 一九六五年
- 上田正昭 『日本の女帝』 講談社 一九七三年
- 上田正昭 『藤原不比等』 朝日新聞社 一九七六年
- 上山春平 『天皇制の深層』 朝日新聞社 一九八五年
- 大井重二郎 『平城京と条坊制度の研究』 初音書房 一九六六年
- 大阪歴史学会編 『律令国家の基礎構造』 吉川弘文館 一九六〇年
- 大塚徳郎 『平安初期政治史研究』 吉川弘文館 一九六九年
- 金子武雄 『続日本紀宣命講』 高科書店 一九四一年（一九八九年復刊）
- 岸 俊男 『日本古代政治史研究』 塙書房 一九六六年
- 岸 俊男 『藤原仲麻呂』 吉川弘文館 一九六九年

- 喜田貞吉 『帝都』 日本學術普及会 一九一五年
- 北山茂夫 『女帝と道鏡』 中央公論社 一九六九年
- 北山茂夫 『日本古代政治史の研究』 岩波書店 一九五九年
- 古代学協会編 『桓武朝の諸問題』 (『古代学』十一・二・四 一九六九年)
- 小林清 『長岡京の新研究』 比叡書房 一九七五年
- 佐伯有清 『日本古代氏族の研究』 吉川弘文館 一九八五年
- 坂本太郎 『日本古代史の基礎的研究』 上・下 東大出版会 一九六四年
- 佐藤宗諄 『平安前期政治史序説』 東大出版会 一九七七年
- 滝川政次郎 『京制並に都城制の研究』 角川書店 一九六七年
- 竹内理三 『律令制と貴族政權』 I・II お茶の水書房 一九五八年
- 武光誠 『日本古代国家と律令制』 吉川弘文館 一九八四年
- 直木孝次郎 『奈良時代史の諸問題』 塙書房 一九六八年
- 直木孝次郎 『日本古代兵制史の研究』 吉川弘文館 一九六八年
- 直木孝次郎 『日本古代の氏族と天皇』 塙書房 一九六四年
- 奈良国立文化財研究所 『平城宮発掘調査報告』 II 一九六二年
- 野村忠夫 『律令官人制の研究』 吉川弘文館 一九六七年
- 橋本義彦 『平安貴族社会の研究』 吉川弘文館 一九七六年
- 林陸朗 『光明皇后』 吉川弘文館 一九六一年
- 林陸朗 『上代政治社会の研究』 吉川弘文館 一九六九年

林	陸朗	『長岡京の謎』	新人物往来社	一九七二年
平野	邦雄	『和氣清麻呂』	吉川弘文館	一九六四年
藤岡	通夫	『京都御所』	彰国社	一九五六年
藤木	邦彦	『平安王朝の政治と制度』	吉川弘文館	一九九一年
藤田	元春	『都市研究平安京変遷史』	スズカケ出版部	一九三〇年
宮田	俊彦	『吉備真備』	吉川弘文館	一九六一年
村井	康彦	『日本の宮都』	角川書店	一九七八年
村井	康彦	『王朝貴族』	小学館	一九七四年
村井	康彦	『古京年代記』	角川書店	一九七三年
村尾	次郎	『桓武天皇』	吉川弘文館	一九六三年
村田	治郎	『中国の都城』	綜芸舎	一九八二年
村山	修一	『日本都市生活の源流』	関書院	一九五三年
村山	修一	『平安京』	至文堂	一九五七年
目崎	徳衛	『平安文化史論』	桜楓社	一九六八年
八木	充	『古代日本の都』	講談社	一九七四年
横田	健一	『道鏡』	吉川弘文館	一九五九年

論文

赤羽 洋輔

「奈良朝後期政治史に於ける藤原式家について（上・中・下）」（『政治経済史学』三九〇四一 一九六六年）

足利 健亮

「恭仁京城の復原」（『社会科学論集』四・五合併号 一九七三年のち『日本古代地理研究』 大明堂 一九八五年所収）

足利 健亮

「都城の計画について」（『日本古代文化の探求・都城』 社会思想社 一九七六年）

阿部 武彦

「氷上川継の反乱」（『日本社会史研究』一 一九五七年）

井上 薫

「古代族長継承の問題について」（『北大史学』二 一九五四年）
「宮城十二門の門号と乙巳の変」（『日本古代の政治と宗教』 吉川弘文館 一九六一年）

井上 薫

「光明皇后と皇后宮職」（『ヒストリア』二〇 一九五七年）

井上 光貞

「造宮省と造京司」（『日本古代の政治と宗教』 吉川弘文館 一九六一年）
「古代の女帝」（『日本古代国家の研究』 岩波書店 一九六五年）

今泉 隆雄

「八世紀造宮官司考」（『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所 創立三〇周年記

今江広道

岩本次郎

植垣節也

太田静六

太田静六

大塚徳郎

大塚徳郎

大塚徳郎

近江昌司

門脇禎二

亀田隆之

川勝政太郎

川勝政太郎

岸俊男

岸俊男

岸俊男

念論文集刊行会 一九八三年)

「皇太子と位階制」(林陸朗先生還暦記念会編 『日本古代の政治と制度』続群書

類従完成会 一九八五年)

「平城京の造営経過について―特に官司機構を中心として―」(『大和文化研究』
八〇一 一九六三年)

「家伝と武智麻呂」(『歴史教育』一五〇四 一九六七年)

「冷泉院と里内裏」(『建築学会論文集』六一 一九三七年)

「朱雀院考」(前掲『建築学会論文集』七)

「平城朝の政治」(『平安初期政治史研究』吉川弘文館 一九六九年)

「元慶三年設置の官田について」(『東北大学教養部文科紀要』六)

「元慶官田の諸司田化についての二つの問題」(『日本歴史』一八〇 一九六三年)

「井上皇后事件と魘魅について」(『天理大学学報』三九 一九六二年)

「律令体制の変貌」(『岩波講座日本歴史』古代三 岩波書店 一九六七年)

「造宮省」(『日本古代制度史論』吉川弘文館 一九八〇年)

「平安宮十二門に関する問題」(『史迹と美術』十五〇六 一九四四年)

「平安京左右京と居住者」(『史迹と美術』二六〇一・三・六 一九五六年)

「元明太上天皇の崩御」(『日本古代政治史研究』塙書房 一九六六年)

「光明立後の史的意義」(前掲『日本古代政治史研究』)

「日本都城制総論」(『日本の古代九 都城の生態』中央公論社 一九八七年)

岸 俊男

「藤原仲麻呂の田村第」(前掲『日本古代政治史研究』)

北 浦 定政稿

「平城宮大裏跡坪割之図」奈良国立文化財研究所 一九七九年

北 村 稔

「壬申の乱地理新考(一)」「(三)」(『史迹と美術』五六の八、一〇(一九八七年))

北 山 茂夫

「七四〇年の藤原広嗣の反乱」(『日本古代政治史の研究』 岩波書店 一九五九

年)

北 山 茂夫

「藤原種継事件の前後」(前掲『日本古代政治史の研究』)

北 山 茂夫

「平城上皇の変についての一考察」(『続万葉の世紀』 東京大学出版会(一九七五年))

黒 板 伸 夫

「『参議』に関する一考察」(『平安時代の歴史と文学』 吉川弘文館 一九八一

年)

小 出 義 治

「大和、河内、和泉の土師氏」(『国史学』五四 一九六一年)

河 内 祥 輔

「奈良朝政治史における天皇制の論理」(佐伯有清編『日本古代政治史論考』 吉

川弘文館 一九八三年)

佐 伯 有 清

「粟田朝臣真人の経歴」(『日本古代氏族の研究』 吉川弘文館 一九八五年)

佐 伯 有 清

「宮城十二門号と古代天皇近侍氏族」(『新撰姓氏録の研究』 研究編 吉川弘文館

一九六九年)

笹 山 晴 生

「中衛府の研究」(『古代学』六、三 一九五七年)

佐 藤 宗 諄

「律令太政官制と天皇」(『大系日本国家史』一古代 東京大学出版会 一九七五

年)

鈴 木 進 一

「東朱雀大路小考」(国学院大学日本史学大学院会『史学研究集録』六 一九八〇

年)

鈴木靖民

「高野天皇の称号について」(『国学院雑誌』七七、八 一九七六年)

関見

「大化前後の大夫について」(『山梨大学文学部研究報告』一〇 一九五九年)

関口裕子

「律令国家における嫡庶子制について」(『日本史研究』一〇五 一九六九年)

蘭田香融

「国造豊足解をめぐる二、三の問題」(『関西大学文学論集』八、四 一九五九年)

蘭田香融

「出挙—天平より延喜まで—」(『律令国家の基礎構造』吉川弘文館 一九六〇年)

田井泰子

「日本古代遷都論—恭仁京をめぐる—」(『寧楽史苑』二七 一九七九年)

高島正人

「大宝二年の『参議朝政』について」(『立正史学』四九 一九八一年)

高島正人

「『中納言』『参議』の新置とその意義」(前掲『立正史学』四九)

高取正男

「称徳朝の仏教政治」(『史窓』三九 一九八二年)

竹内理三

「『参議』制の成立」(『律令制と貴族政権』I お茶の水書房 一九五八年)

竹内理三

「上代における知識に就て」(『史学雑誌』四二、九 一九三三年)

武光誠

「摂関期の太政官政治の特質—陣申文を中心に—」(『ヒストリア』一〇六 一九八五年)

田村円澄

「不常典考」(竹内理三博士遷暦記念会編『律令国家と貴族社会』吉川弘文館 一九六九年)

土田直鎮

「公卿補任の成立」(『国史学』六五 一九三五年)

土田直鎮

「上卿について」(『日本古代史論集』下 坂本太郎博士遷暦記念会編 一九六二

年)

土橋 寛

「藤原宮と藤原不比等」(『国語と国文学』四九〇—一九七二年)

角田 文衛

「首皇子の立太子について」(『律令国家の展開』 塙書房 一九六五年)

角田 文衛

「不比等の娘たち」(前掲『律令国家の展開』)

所 功

「律令時代における意見封進制度の実態—延喜天曆時代を中心として—」(古代学協会編『延喜天曆時代の研究』 吉川弘文館 一九六九年)

虎尾 達哉

「参議制の成立—大夫制と令制四位—」(『史林』六五〇—五 一九八二年)

直木 孝次郎

「厩戸皇子の立太子について」(『飛鳥奈良時代の研究』 塙書房 一九七五年)

直木 孝次郎

「天平十六年の難波遷都をめぐる—天正太上天皇と光明皇后」(前掲『飛鳥奈良時代の研究』

直木 孝次郎

「長屋王の変について」(『奈良時代史の諸問題』 塙書房 一九六八年)

直木 孝次郎

「土師氏の研究」(『人文研究』十一〇—九 一九六〇年)

中川 収

「光仁朝の成立と井上皇后事件」(『日本歴史』二二七 一九六七年)

中川 収

「光仁朝政治の構造と志向」(林陸朗先生還暦記念会編『日本古代の政治と制度』

続群書類従完成会 一九八五年)

中川 収

「藤原四子体制とその構成上の特質」(『日本歴史』三二〇 一九七五年)

長山 泰孝

「律令国家と王権」(『続日本紀研究』三七 一九八五年)

二宮 正彦

「内臣・内大臣考」(『続日本紀研究』九〇—一九六二年)

奈良国立文化財研究所「平城宮北辺地域発掘調査報告書」

一九八一年

野村 忠夫

「不比等政権」(『律令政治の諸様相』 塙書房 一九六八年)

野村忠夫

「長屋王首班体制から藤四子体制へ」(前掲『律令政治の諸様相』)

橋本義則

「『外記政』の成立―都城と儀式―」(『史林』六四〇六 一九八一年)

早川庄八

「古代天皇制と太政官政治」(『講座日本歴史』古代二 東京大学出版会 一九八四年)

早川庄八

「八世紀の任官関係文書と任官儀について」(『史学雑誌』九〇〇六 一九八一年)

林 幹弥

「上宮王家」(『日本歴史』四一一 一九八二年)

林 陸朗

「奈良朝後期宮廷の暗雲―県犬養家の姉妹を中心として―」(『上代政治社会の研究』 吉川弘文館 一九六九年)

林 陸朗

「藤原緒嗣と藤原冬嗣」(前掲『上代政治社会の研究』)

林屋辰三郎

「後院の創設―嵯峨上皇と檀林寺をめぐる―」(日本史研究会史料研究部編『中世日本の歴史像』 一九七八年)

福山敏男

「信貴山縁起に見える宮城の門」(『日本建築史研究』墨水書房 一九七二年)

福山敏男

「平城京及び平安京の一条一坊」(『建築史』三〇四 一九四一年)

古瀬奈津子

「宮の構造と政務運営法―内裏・朝堂院分離に関する一考察―」(『史学雑誌』九七〇三 一九八四年)

美川 圭

「公卿議定制から見る院政の成立」(『史林』六九〇四 一九八六年)

村井康彦

「王権の継受―不改常典をめぐる―」(『日本研究』一一 一九八九年)

村井康彦

「蜻蛉日記の歴史的背景」(『一冊の講座 日本の古典文学蜻蛉日記』有精堂出版 一九八一年)

村井康彦
村井康彦
村井康彦
村井康彦
目崎徳衛
森田悌
森田悌
八代国治
柳宏吉
山口英雄
山下克明
山本信吉
横田健一
横田健一
横田健一
吉村茂樹
米沢康
米沢康

「宮廷と寺院」(『日本芸能史』二 法政大学出版局 一九八二年)

「元慶官田の史的意義」(『古代国家解体過程の研究』 岩波書店 一九六五年)

「平安中期の官衙財政」(前掲『古代国家解体過程の研究』)

「初期平安京の相貌」(『史窓』三八 一九八一年)

「平城朝の政治史的考察」(『平安文化史論』 桜楓社 一九六八年)

「上奏と奏状」(『続日本紀研究』二四〇 一九八五年)

「律令奏請制度の展開」(『史学雑誌』九四〇 一九八五年)

「後院の考」(『国史叢説』一九二五年)

「高野天皇の称号」(『日本歴史』三三三 一九七五年)

「早良親王と東大寺」(『南都仏教』一二 一九六二年)

「平安時代初期における『東宮』とその所在地について」(『古代文化』三三〇十

二 一九八一年)

「内臣考」(『国学院雑誌』六二〇九 一九六一年)

「家伝・武智麻呂伝研究序説」(『白鳳天平の世界』 創元社 一九七三年)

「天平十二年藤原広嗣の乱の一考察」(前掲『白鳳天平の世界』)

「安積親王の死とその前後」(前掲『白鳳天平の世界』)

「平安時代の政治」(『岩波講座日本歴史』 岩波書店 一九三三年)

「土師氏に関する一考察」(『芸林』九〇三 一九五八年)

「土師氏の改姓(上)(下)」(『芸林』十二〇五・六 一九六一年)